

# 顔戸南遺跡

(第1分冊)

2000

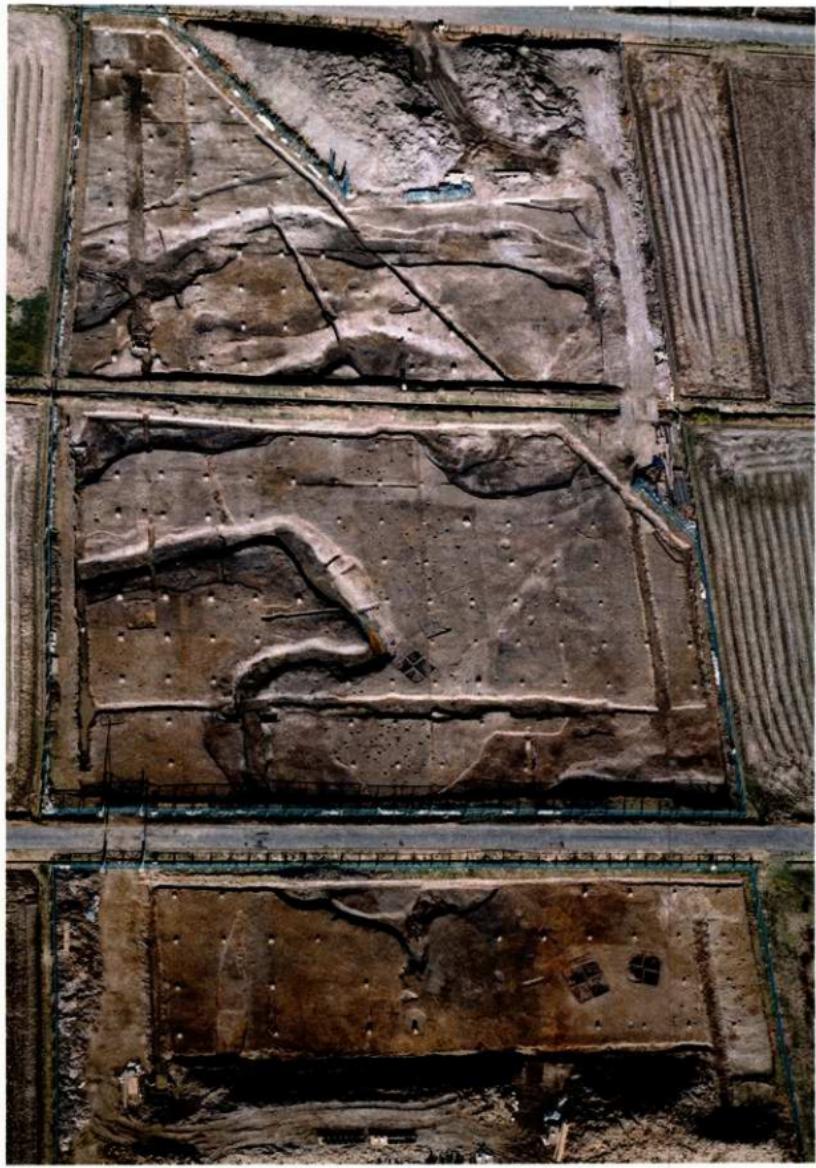
財団法人 岐阜県文化財保護センター

こう  
顔 戸 みなみ  
と 南 遺 跡

(第1分冊)

2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター



E～G区全景

卷頭圖版 2



SD10—SU13検出状況



泥除付横鎌出土状況



E区下層全景



SW 7 檢出狀況



出土木製品

## 序

清らかな可児川が街の中を西流する御嵩町は、緑豊かな自然環境と数多くの文化財が残る町として知られています。そして、今なお、旧中山道周辺とその宿場町として栄えた伏見宿や御嵩宿周辺には情緒ある町並みが残り、人々の暮らしにも風情と人情が感じられます。

このたび、建設省による東海環状自動車道(八百津～笠原)建設工事に伴い、可児郡御嵩町顔戸に所在する顔戸南遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では古墳時代のしがらみ状遺構や掘立柱建物群、古代～中世の道路状遺構などを検出し、県内でも稀有な遺構群として注目されております。さらに、可児市から御嵩町にかけては県内でも有数な前期古墳が幾つも所在する地域で、今回検出された集落との関連も興味深いものがあります。また、調査により出土した多量の木製品からは、当地域に住んでいた古墳時代の人々が周辺の木を加工し、生活の中で多用していたことが分かりました。そして、木製品の他に土師器、須恵器、中世陶磁器なども出土しており、これらの変遷を辿る過程を通して先人の築きあげた歴史と文化をほうふつとさせます。

なお、最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書作成にあたり、関係諸機関・各位の温かい御理解と御協力を頂き、感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々に多大なる御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター  
理事長 村木光男

## 例　　言

- 1、本書は可児郡御嵩町顔戸地内に所在する顔戸南遺跡(21521-07363)の発掘調査報告書である。
- 2、本調査は東海環状自動車道(八百津～笠原)建設事業に伴うもので、建設省中部地方建設局多治見工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3、発掘調査は平成9年度に実施し、宇野隆夫国際日本文化研究センター教授(当時：富山大学教授)の指導のもと片桐隆彦、小瀬忠司、小野木が担当した。
- 4、本書の執筆は以下のとおりである。また、編集は小野木が行った。

第5章第1・2節	・・・新山雅広
第5章第3節	・・・・植田弥生
第5章第4節	・・・・藤根久
第5章第5～7節	・・・鈴木茂
第5章第8節	・・・・汐見真・岡田文男
第5章第9節、第6章第8節	・・・千藤克彦
第5章第10節	・・・・西中川駿
その他	・・・・・小野木
- 5、水準測量と空中写真測量は(株)イビソクに委託して行った。
- 6、遺物の写真撮影はフォトスタジオ サトウに委託して行った。
- 7、自然科学分析は(株)パレオ・ラボ、(株)吉田生物研究所に委託して行った。
- 8、発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御助言、御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

青木元邦、赤澤徳明、赤塚次郎、井川祥子、石黒立人、五十川伸矢、糸川崇、上原真人、
魚津知克、白居直之、内堀信雄、扇崎由、岡田賢、金子智子、兼康保明、北村和宏、工楽普通、
栗谷本真、黒崎直、島崎久恵、城ヶ谷和広、鈴木元、角南聰一郎、高木宏和、高島英之、
高橋照彦、中井正幸、永井宏幸、長瀬治義、西村勝広、野口哲也、橋本正博、八賀晋、早野浩二、
原田幹、桶上昇、広瀬和雄、深澤芳樹、穂積裕昌、松村恵司、松室孝樹、三宅唯美、宮腰健司、
村上由美子、村木誠、森勇一、山田昌久、吉田正人、若尾要司、和氣清章、渡辺博人、渡辺誠
- 9、本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。
- 10、土層および土器類の色調は小山正忠・竹原秀雄 1996『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社による。
- 11、調査記録及び出土品は財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目 次 (第1分冊)

卷頭図版	
序	
例言	
目次	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の立地と環境	6
第1節 遺跡周辺の立地、環境	6
第2節 周辺の遺跡	7
第3章 検出された遺構	9
第1節 概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 古墳時代以前の遺構1(C区・E区上層・F区・G区)	13
第4節 古墳時代以前の遺構2(E区下層)	66
第5節 古代以降の遺構	98
第4章 出土遺物	113
第1節 土器・石器	113
第2節 木製品	208
第2分冊 目次	
第5章 自然科学分析	
第1節 花粉化石群集	
第2節 大型植物化石	
第3節 住居跡出土材の樹種同定	
第4節 銀津の蛍光X線分析	
第5節 プラント・オバール(1)	
第6節 プラント・オバール(2)	
第7節 SW9出土植物遺体の植物珪酸体	
第8節 木製品の樹種同定	
第9節 溝(SD12)出土の昆虫化石群集	
第10節 動物遺体	
第6章 まとめ	
第1節 しがらみ状遺構の改築過程と機能	
第2節 溝出土遺物の堆積状況と接合関係	
第3節 古墳時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡	
第4節 古墳時代の須恵器	
第5節 古墳時代の土師器	
第6節 古墳時代の木製品	
第7節 清除付横斂の実験	
第8節 木製品の樹種	
第9節 顕戸南遺跡と条里型地割	
第10節 墨書き土器と古代末～中世の土器	
第11節 まとめ	

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版 1 E～G区全景  
卷頭図版 2 SD10～SU13検出状況、泥除付横鍬出土状況  
卷頭図版 3 E区下層全景、SW7検出状況  
卷頭図版 4 出土木製品

## 挿図目次

図 1 須戸南遺跡位置図	1	図32 SU 1～4・6実測図	37
図 2 発掘調査区位置図	3	図33 SU 5 実測図	38
図 3 須戸南遺跡周辺図	6	図34 SD 4 実測図(1)	40
図 4 周辺遺跡位置図	8	図35 SD 4 実測図(2)	41
図 5 E区西側南北トレンド土層図	10	図36 SD 4 実測図(3)	42
図 6 作業風景	11	図37 SD 7 実測図(1)	44
図 7 E～G区遺構全体図 (古墳時代以前)	12	図38 SD 7 実測図(2)	45
図 8 E区下層、C区遺構全体図 (古墳時代以前)	13	図39 SD 7 実測図(3)	46
図 9 SH 1 実測図	14	図40 SD 4・7 遺物分布図	47
図10 SH 1 ピット実測図	15	図41 SD10 実測図(1)	49
図11 SH 2 実測図	16	図42 SD10 実測図(2)	50
図12 SH 3 実測図	16	図43 SD10 実測図(3)	51
図13 SH 4・5、SA4 実測図	17	図44 SD10・12 遺物分布図	53
図14 SH 5、SA4 実測図	18	図45 SD10 実測図(4)	55
図15 SH 4・5、SA4 ピット 実測図	18	図46 SD10 実測図(5)	57
図16 SH 6 実測図	19	図47 SD10 実測図(6)	58
図17 SH 7 実測図	20	図48 SD10 実測図(7)	59
図18 SH 8 実測図	20	図49 SD12 実測図	61
図19 SB 1 実測図	22	図50 SD13 実測図	64
図20 SB 2 実測図	22	図51 NR 2 実測図	65
図21 SB 3 実測図	23	図52 E区下層の溝全体図	66
図22 SB 4・SK11 実測図	24	図53 E区下層土層図(1)	67
図23 SB 5 実測図(1)	25	図54 E区下層土層図(2)	68
図24 SB 5 実測図(2)	26	図55 SD14・15 実測図	69
図25 SB 6 実測図	27	図56 SD15・18 実測図	71
図26 SB 7 実測図	29	図57 SW 3 実測図(1)	73
図27 SB 8 実測図	30	図58 SW 3 実測図(2)	74
図28 SB 9 実測図	32	図59 SW 3 補修工程	75
図29 SB 9・SK 1、SC 1 実測図	33	図60 網代 1～4 実測図	77
図30 SK 7・10・12～14、P 39・40 実測図	34	図61 SW 4・5 実測図	78
図31 SC 1～4 実測図	35	図62 SW 6 全体図	80
		図63 SW 6 実測図(1)	81
		図64 SW 6 実測図(2)	82
		図65 SW 6 実測図(3)	83
		図66 SW 6 補修工程	84
		図67 網代 5・6 実測図	85

図68	SW 7 全体図	86	図113	土器・石器実測図(26)	155
図69	SW 7 東側実測図	87	図114	土器・石器実測図(27)	156
図70	SW 7 東側の補修工程	88	図115	土器・石器実測図(28)	157
図71	SW 7 西側実測図	91	図116	土器・石器実測図(29)	158
図72	SW 7 西側の改築工程	92	図117	土器・石器実測図(30)	159
図73	SW 8 実測図	93	図118	土器・石器実測図(31)	160
図74	SW 9 実測図	94	図119	土器・石器実測図(32)	161
図75	SW 9 改築工程	95	図120	土器・石器実測図(33)	162
図76	ST 1～19実測図	96	図121	土器・石器実測図(34)	163
図77	E～G区遺構概略図(古代以降)	97	図122	土器・石器実測図(35)	164
図78	C区遺構概略図(古代以降)	98	図123	土器・石器実測図(36)	165
図79	SH 9 実測図	99	図124	土器・石器実測図(37)	166
図80	SH10実測図	100	図125	土器・石器実測図(38)	167
図81	SA 5～7 実測図	101	図126	土器・石器実測図(39)	168
図82	SD19実測図(1)	103	図127	土器・石器実測図(40)	169
図83	SD19実測図(2)	104	図128	土器・石器実測図(41)	170
図84	SD20実測図	106	図129	土器・石器実測図(42)	171
図85	SD21実測図	107	図130	土器・石器実測図(43)	172
図86	SN 2 土層図	109	図131	主要木製品分布図	210
図87	高杯接合分類図	115	図132	木製品実測図(1)	226
図88	土器・石器実測図(1)	130	図133	木製品実測図(2)	227
図89	土器・石器実測図(2)	131	図134	木製品実測図(3)	228
図90	土器・石器実測図(3)	132	図135	木製品実測図(4)	229
図91	土器・石器実測図(4)	133	図136	木製品実測図(5)	230
図92	土器・石器実測図(5)	134	図137	木製品実測図(6)	231
図93	土器・石器実測図(6)	135	図138	木製品実測図(7)	232
図94	土器・石器実測図(7)	136	図139	木製品実測図(8)	233
図95	土器・石器実測図(8)	137	図140	木製品実測図(9)	234
図96	土器・石器実測図(9)	138	図141	木製品実測図(10)	235
図97	土器・石器実測図(10)	139	図142	木製品実測図(11)	236
図98	土器・石器実測図(11)	140	図143	木製品実測図(12)	237
図99	土器・石器実測図(12)	141	図144	木製品実測図(13)	238
図100	土器・石器実測図(13)	142	図145	木製品実測図(14)	239
図101	土器・石器実測図(14)	143	図146	木製品実測図(15)	240
図102	土器・石器実測図(15)	144	図147	木製品実測図(16)	241
図103	土器・石器実測図(16)	145	図148	木製品実測図(17)	242
図104	土器・石器実測図(17)	146	図149	木製品実測図(18)	243
図105	土器・石器実測図(18)	147	図150	木製品実測図(19)	244
図106	土器・石器実測図(19)	148	図151	木製品実測図(20)	245
図107	土器・石器実測図(20)	149	図152	木製品実測図(21)	246
図108	土器・石器実測図(21)	150	図153	木製品実測図(22)	247
図109	土器・石器実測図(22)	151	図154	木製品実測図(23)	248
図110	土器・石器実測図(23)	152	図155	木製品実測図(24)	249
図111	土器・石器実測図(24)	153	図156	木製品実測図(25)	250
図112	土器・石器実測図(25)	154	図157	木製品実測図(26)	251

図158	木製品実測図(27)	252	図163	木製品実測図(32)	257
図159	木製品実測図(28)	253	図164	木製品実測図(33)	258
図160	木製品実測図(29)	254	図165	木製品実測図(34)	259
図161	木製品実測図(30)	255	図166	木製品実測図(35)	260
図162	木製品実測図(31)	256			

## 表目次

表1	SD10層位対応表	52	表30	土器・石器観察表(20)	192
表2	掘立柱建物一覧表	110	表31	土器・石器観察表(21)	193
表3	土坑一覧表	110	表32	土器・石器観察表(22)	194
表4	竪穴住居跡一覧表	111	表33	土器・石器観察表(23)	195
表5	土器集積・焼土一覧表	111	表34	土器・石器観察表(24)	196
表6	溝一覧表	112	表35	土器・石器観察表(25)	197
表7	遺物出土ピット一覧表	112	表36	土器・石器観察表(26)	198
表8	遺構出土遺物一覧表(1)	127	表37	土器・石器観察表(27)	199
表9	遺構出土遺物一覧表(2)	128	表38	土器・石器観察表(28)	200
表10	遺構出土遺物一覧表(3)	129	表39	土器・石器観察表(29)	201
表11	土器・石器観察表(1)	173	表40	土器・石器観察表(30)	202
表12	土器・石器観察表(2)	174	表41	土器・石器観察表(31)	203
表13	土器・石器観察表(3)	175	表42	土器・石器観察表(32)	204
表14	土器・石器観察表(4)	176	表43	土器・石器観察表(33)	205
表15	土器・石器観察表(5)	177	表44	土器・石器観察表(34)	206
表16	土器・石器観察表(6)	178	表45	土器・石器観察表(35)	207
表17	土器・石器観察表(7)	179	表46	遺構別木製品集計表	209
表18	土器・石器観察表(8)	180	表47	用途別樹種一覧表	224
表19	土器・石器観察表(9)	181	表48	樹種別用途一覧表	225
表20	土器・石器観察表(10)	182	表49	木製品観察表(1)	261
表21	土器・石器観察表(11)	183	表50	木製品観察表(2)	262
表22	土器・石器観察表(12)	184	表51	木製品観察表(3)	263
表23	土器・石器観察表(13)	185	表52	木製品観察表(4)	264
表24	土器・石器観察表(14)	186	表53	木製品観察表(5)	265
表25	土器・石器観察表(15)	187	表54	木製品観察表(6)	266
表26	土器・石器観察表(16)	188	表55	木製品観察表(7)	267
表27	土器・石器観察表(17)	189	表56	木製品観察表(8)	268
表28	土器・石器観察表(18)	190	表57	木製品観察表(9)	269
表29	土器・石器観察表(19)	191	表58	木製品観察表(10)	270

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

本遺跡は岐阜県可児郡御嵩町下川原、立上、鶴之前に所在し、東海環状自動車道建設予定地内に位置する。東海地方は産業の高度化、高付加価値化、先端技術、新産業の創出を支える研究開発機能の強化を図り、その先導的な拠点となるのが東濃・名古屋東部丘陵・鈴鹿山麓の研究学園都市となっている。東海環状自動車道はこれらの開発拠点を有機的に連結し、相互の連携・交流の活性化を支援するとともに、名古屋圏が産業・技術・経済・文化などの中枢圏域として秩序ある発展を図る基盤として大きな役割を果たすものである。具体的には、名古屋市の周辺30~40km圏に位置する愛知・岐阜・三重3県の豊田、瀬戸、岐阜、大垣、四日市などの諸都市を環状に連絡し、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道や第二東名・名神高速道路などの高速自動車国道と一体となって、広域的なネットワークを形成する高規格幹線道路で、本遺跡の南側には可児御嵩I.C.が設立される予定である。

この東海環状自動車道建設事業に先立ち、建設省中部地方建設局多治見工事事務所から岐阜県教育委員会文化課に工事計画などが示された。そして、自動車道建設区域が周知の遺跡として『改訂版岐阜県遺跡地図』(岐阜県教育委員会1990)に登録されている本遺跡の範囲内を通過することから、財團法人岐阜県文化財保護センターが岐阜県教育委員会から試掘確認調査の委託を受け、平成8年5月~平成9年1月まで実施した。

試掘確認調査は調査対象区域のうち2,500m<sup>2</sup>を掘削し、古墳時代の溝や土坑などを確認した。また、明確に水田の畦畔を捉えられなかったが、本遺跡周辺には昭和40年代まで条里型地割が広範囲にわたり残存していたことからプランツ・オパール分析も実施した結果、古墳時代~中世の包含層であるⅡ層において多数の稻のプランツ・オパールを検出した。この調査結果をもとに岐阜県教育委員会と財團法人岐阜県文化財保護センターが協議の上、5,000m<sup>2</sup>を本調査の対象範囲とし、今回の調査が実施されることとなった。



図1 鹿戸南遺跡位置図

## 第2節 発掘調査の経過と方法

調査対象範囲の周辺には水田が広がっており、試掘確認調査の対象区域は水路や道路で大きく7箇所に分かれていた。そのため試掘確認調査時に北から順にA～G区と呼称していたので、本調査でもその名称を用いた。

本調査の範囲はC・E～G区の4地区であり、調査区内は国土座標を基準に5m×5mのグリッドを設定した。そして、E～G区は西から東にA～P、北から南に1～29、C区は西から東にC～M、北から南に50～57と呼称した。また、調査区画の呼称は北西角の杭番号を用いた。

調査は試掘確認調査の土層確認を行った後にE区から始めた。E区は古墳時代から中世までの遺物包含層であるⅡ層を人力掘削し、Ⅲ層直上で遺構を確認する予定であったが、Ⅱ層中より灰白色砂(SD19)が帶状に検出されたために、一旦灰白色砂の上端レベルでⅡ層を精査した。その結果、他の遺構は確認できず、灰白色砂にサブトレーニチを入れるとわずかに遺構面から盛り上がる上部遺構であることが判明したので、そのままⅢ層直上までⅡ層を掘削した。E区では溝(SD4)や道路状遺構(SD19)などが検出され、それらの掘削と平行してF区Ⅱ層の人力掘削を7月中旬から開始した。F区北東端ではSD7がE区に向かって屈曲しており、E区のSD4との関係を明らかにするために7月下旬にE区東側を拡張した。そして、その結果SD4とSD7が合流していることが判明し、合流地点でSW1が検出された。F区では深さ1m以上の溝が3条検出され、いずれも土器や木製品が多数出土したために、その掘削は極めて困難で時間を要した。溝の出土遺物がまとまって検出された場合はその出土状況を図化し、他はすべて座標と標高を測定し取り上げた。また、当時の遺跡周辺の環境を追求するために溝の埋土の花粉分析を実施した。なお、10月上旬に試掘確認調査で捉えられなかったE区下層の状況を把握するためにE区中程に2本のトレーニチを設定した。その結果、下層にはしがらみ状遺構が設置してある旧流路が存在することが判明し、調査計画の見直しを余儀なくされた。そのため残りの調査期間との兼ね合いから、G区のⅡ層は道路状遺構(SD19)付近以外をすべて重機掘削し、遺構検出のみを人力で行った。

以後、E～G区の空中写真測量と現地説明会を12月中旬に実施し、1月よりE区下層とC区の調査を行った。E区下層では約1m堆積している流路の埋土を重機で掘削し、しがらみ状遺構の直上から人力掘削を行った。しがらみ状遺構は約36mにわたって検出されたため、平面図は空中写真測量により1/20で図化し、断面図を可能な限り描くように努力した。また、しがらみ状遺構の構築材である多数の杭や横木などの加工痕が認められる木製品はすべて取り上げ、可能な限り樹種同定を実施した。なお、しがらみ状遺構に伴い網代が6枚検出され、最も遺存状態が良かった網代1・2を切り取り保存処理作業を行った。E区下層では流路の他に水田も検出され、水田耕作土であるⅣ層から地山としたⅤ層までのプラント・オパール分析を実施した。C区は中世を中心とするピットが多数検出されたために段掘りを行い、2月上旬の空中写真測量後にすべて断ち割って土層を確認した。こうして、現地調査は3月12日の調査納め式をもって終了した。

整理調査は、平成10～11年度にかけて本センターの三田洞整理所において1次整理作業から報告書作成作業までを実施した。そして、溝内埋土の昆虫遺体や種子同定、木製品の樹種同定などの分析を委託して行った。

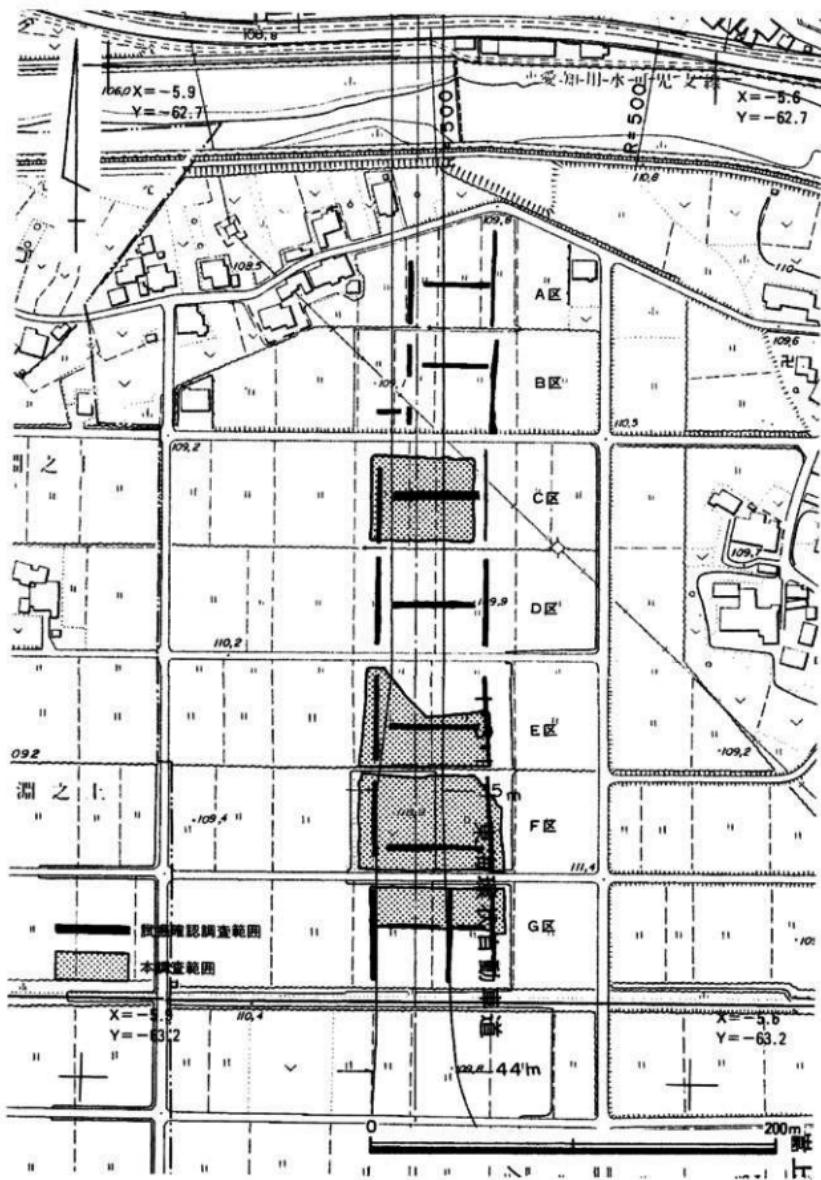


図2 発掘調査区位置図 (S=1/2,500)

#### 4 第1章 発掘調査の経過

なお、発掘調査の体制は以下のとおりである。

##### ＜財団法人岐阜県文化財保護センター調査部＞

調査部長 白井進(平成8年度)、山元敏治(平成9～11年度)

調査部次長 小木曾文和(平成8年度)、高橋幸仁(平成9～11年度)

担当調査課長 市原輝明(平成8～9年度)、飯沼暢康(平成10～11年度)

担当調査員 片桐隆彦(平成8～9年度)、小瀬忠司(平成9年12月～平成10年3月)、  
小野木学(平成9～11年度)

整理補助調査員 田中旨穂

現地作業従事者 安藤喜久治、飯田美代子、生駒朝子、生駒治、生駒寛、市原豊、伊藤秋巳、  
太田瑞子、奥村芳一、尾関勇三、尾関義弘、加藤恵子、亀井隆四、川合津加恵、  
川合伸子、駒嶋薫、齐藤富雄、佐伯久美子、佐々木すみ子、佐藤千寿子、佐藤文男、  
新藤実雄、高橋恭三、竹村春男、田中皇次、田端豊、中島茂、中嶋成美、中嶋吉文、  
仲林敏行、野中照夫、平井信義、福田快彦、藤田薰、渡辺美年子、

整理作業従事者 今津理、小木曾美智、加藤泰子、加納加代子、河崎文子、澤田昌子、高島桂子、  
高橋紀美、谷口美奈子、中島律子、野々村みさと、丹羽和代、蜂矢由美、  
日比野登美子、樋口弘子、蔽下賀代子、山口百合子、

##### ＜調査日誌抄＞

4月21日 調査始め式実施。

4月23日 平成8年度の試掘調査の土層を再確認する。

4月25日 E区平面掘削開始。

5月16日 E区北端でSD19を検出。溝状遺構と判断する。

6月5日 E区南端のSD19検出面において波板状凹凸面を検出。SD19が道路状遺構の可能性が  
高くなる。

6月17日 SU2において線刻土器を確認する。

6月18日 E区SD4・7掘削開始。

6月27日 SD7-SU22検出。

7月4日 SD4西端でSW2を検出。

7月10日 富山大学宇野隆夫教授による現地調査の指導。

7月14日 F区平面掘削開始。SD7内で又鉢と平鉢が重なって出土する。

7月24日 SD4が東側にどのように延びるか確認するためにE区東側を重機で拡張する。

7月30日 E区拡張区において、SD4とSD7が合流していることを確認する。

8月20日 ローリングタワーからSW2の検出状況を撮影する。

9月11日 SD10-SU9検出。ほぼ完形の中型の壺2個体と高杯1個体を確認する。

9月18日 茨城県教育財團白田氏他4名現場見学。

9月24日 三重大学八賀晋教授による現地調査の指導。

10月2日 高所作業車から擬畦畔の検出状況を撮影する。G区平面掘削開始。SD20が検出され、

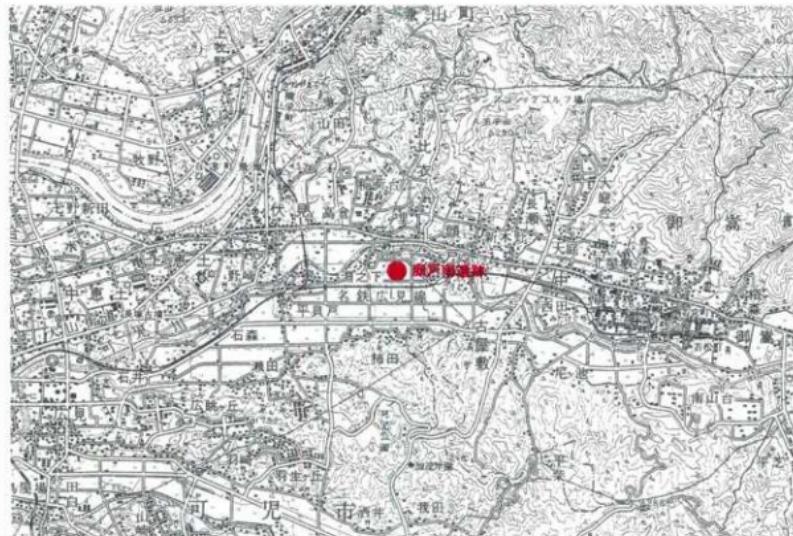
- SD19と同じ埋土であることを確認する。
- 10月6日 E区下層の旧流路を確認するために幅80cmのトレンチを掘削する。その結果、SD4直下に古い段階のしがらみ状遺構があることを確認する。
- 10月7日 F区SD7・10掘削開始。
- 10月21日 SD10内から琴柱出土。
- 10月22日 SD10内から箱物出土。
- 10月29日 SD12掘削開始。
- 10月31日 富山大学宇野隆夫教授による現地調査の指導。
- 11月6日 重機でG区のⅡ層掘削開始(11月7日終了)。
- 11月12日 重機でC区の表土掘削開始(11月18日終了)。
- 11月19日 SD4とSD7の合流点でSW1検出。
- 11月20日 SD12で泥除付横礎出土。
- 11月25日 G区東端において多数のピットを検出する。
- 12月1日 SB5床面直上において敷物検出。
- 12月10日 SD13最下層で杭列検出。
- 12月11日 C区掘削開始。
- 12月16日 E～G区空中写真測量実施。
- 12月17日 高所作業車からE～G区の完掘状況を撮影する。
- 12月20日 現地説明会実施。合計246名の見学者来訪。
- 12月22日 F区の掘立柱建物の柱穴を断ち割り、柱の抜き取り痕を確認する。
- 1月7日 E区下層で水田畔検出開始。
- 1月13日 SD14～16の重機掘削を開始する(1月23日終了)。
- 1月14日 C区で掘立柱建物を確認する。
- 1月27日 E区でしがらみ状遺構を検出し始める。
- 1月30日 網代5検出。
- 2月3日 F・G区埋め戻し開始。
- 2月4日 C区空中写真測量実施。
- 2月12日 網代1・2検出。富山大学宇野隆夫教授による現地調査の指導。
- 2月18日 C区ピットの断ち割り作業開始。
- 2月19日 E区下層空中写真測量実施。
- 2月25日 名古屋大学渡辺誠教授による現地調査の指導。
- 3月3日 SD14より石包丁出土。G区埋め戻し開始。
- 3月4日 網代3・4検出。
- 3月9日 E区埋め戻し開始。
- 3月10日 網代1・2の切り取り作業実施。
- 3月12日 調査納め式実施。作業終了。
- 3月29日 調査範囲内の埋め戻し終了。フェンス復旧終了。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡周辺の立地、環境

本遺跡は可児川によって形成された沖積平野上に位置する。可児川は屈曲して流れおり、現在でも旧河道の痕跡と自然堤防が至る所で確認できる。可児川によって形成された沖積平野は面積が広く、その勾配は緩い。これは可児川の河口付近に木曾川泥流が堆積して河口部がふさがれたため、一時期湛水湖が形成され、その後、上流からの土砂が湖に堆積して埋積谷が形成されたと考えられている。そして、沖積平野の北側には御嵩山地、南側には浅間丘陵地が東西方に向延びている。御嵩山地は主に砂岩とチャートから成る古成層の山地で、大部分が $20^{\circ}$ 以上の斜面で構成され、山地の高度は260～380mである。また浅間丘陵地は土岐砂疊層によって形成され、丘陵全体が緩斜面で、その高度は260～350mである。

今回の調査では、可児川によって形成された自然堤防上の弥生～古墳時代以降の集落の営みや面積の広い沖積平野上の古墳時代以降の水田造営など、当時の人々が自然地形を利用し、日々の生活を営んできたことが明らかとなった。



国土地理院発行 1:50,000地形図(美濃加茂)より

図3 腹戸南遺跡周辺図 (S=1/50,000)

## 第2節 周辺の遺跡

本遺跡周辺には、図4に示したように沖積平野上で確認されている遺跡が極めて少なく、大半は山地、丘陵地付近に位置する(なお図4は「改訂版岐阜県遺跡地図」(岐阜県教育委員会1990)をもとに作成した)。

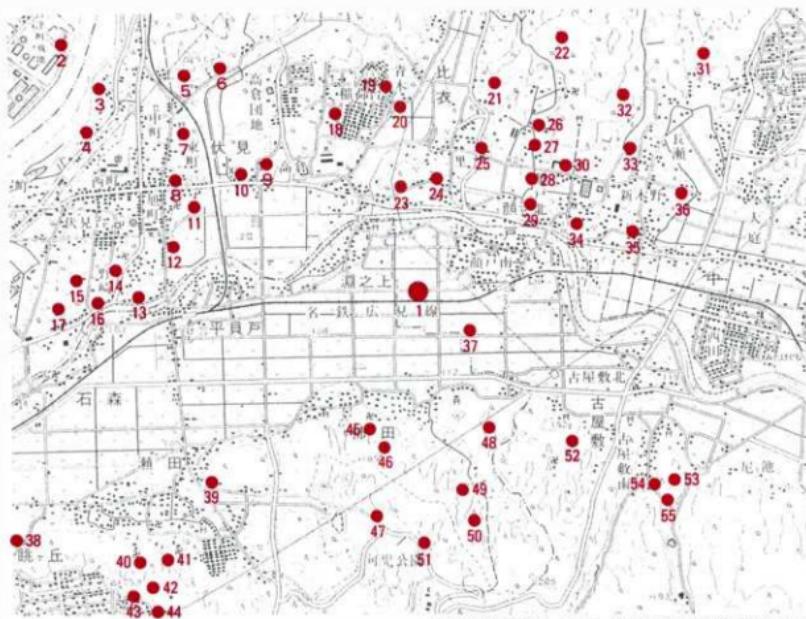
まず、弥生時代以前の遺跡は極めて少なく、伏見東坂南遺跡(11)、顔戸山ノ神遺跡(37)のみが知られているが、その詳細は不明である。しかし、古墳時代の遺跡として本遺跡の北に位置する御嵩山地、南側に位置する浅間丘陵地において前期～後期古墳が多数存在している。まず、本遺跡から南西へ約1.4kmの地点に位置する神崎山古墳(神崎山遺跡)(39)は弥生時代後期の墳墓とされており、直径10m以上の盛土が構築されていた可能性が指摘されている。また、本遺跡から西へ約1.4kmの伏見台地の縁辺部には高倉山古墳(10)と東寺山1・2号墳(13)が存在している。これらの古墳はいずれも前方後方墳であり、東寺山1号墳は粘土櫛の主体部から仿製鏡片や銅鏡などが出土している。一方、後期古墳は前期古墳に比べて多数確認されている。そのうち、本遺跡から北に約0.5kmの地点にある稲荷山古墳群(23)の2号墳は発掘調査がなされており、横穴式石室内外から金環2点、銀環4点、鉄釘、鐵鍼、須恵器の長頸壺、腹、高杯などが出土した。また、本遺跡から北北東に約0.8kmの地点にある坂本天神山古墳(25)は2段構築の円墳で、直径約24m、高さは南側で6mを測る。その他、本遺跡から西に約1.8kmの地点にある大塚古墳群(17)のなかの1号墳も発掘調査がなされており、埋葬主体が割石積みの竪穴式石室で剖竹型木棺が据えられていたことが確認されている。

次に古代の様相を概述したい。まず本遺跡周辺は条里型地割が残存していた地域として有名であることが挙げられよう。可児市から御嵩町にかけては真北を軸とする条里型地割が近年まで残っており、復元されたこの地域の条里坪数は総計249町歩以上に達するといわれている。さらに、本遺跡から南に約0.5kmの地点の字名は「六之坪」であり、六之坪が里の東北隅の坪付けを示しているとされている。また、本遺跡周辺は東山道推定ラインに近い。東山道は各務原市から可児市、瑞浪市へと通っていたとされており、近年では可児市から御嵩町を通る道筋は本遺跡南側の山麓付近とされている。なお、御嵩町顔戸の地は「郡家」の推定地でもある。他に古代の主な遺跡として願興寺廃寺、伏見廃寺(8)などがある。願興寺廃寺からは多量の瓦片が採取されており、そのうち軒平瓦は5形式に分類可能で最も古い形式で白鳳時代初期に遡る可能性が指摘されている。また、伏見廃寺は所在地が定かではないが、伏見台地東端に近い台地上より多くの白鳳時代の瓦破片が採取されており、古代寺院が存在していたとされている。なお、願興寺廃寺は本遺跡から東へ約2.6km、伏見廃寺は北西へ約1.3kmの地点に位置する。

次に中世の様相として代表される遺跡に顔戸城(29)がある。顔戸城は東西約150m、南北約167mの平城で、東・西・北側に空堀が巡っている。空堀は上面で幅約12m、底面で幅約3.5mを測り、空堀の内側には土塁が全面に築かれている。なお、顔戸城の築造年代は定かではない。

### 参考文献

- 御嵩町 1992『御嵩町史 通史編 上』
- 可児町 1980『可児町史 通史編』
- 岐阜県 1971『岐阜県史 通史編 古代』
- 長瀬治義 1990『可児地域の前期古墳』『美濃の前期古墳』美濃古墳文化研究会



国土地理院発行 1:25,000地形図(美濃加茂)より

1 顕戸南遺跡	20 青木横穴墓(古墳)	38 松下古墳(古墳)
2 小貝戸1号古墳(古墳)	21 打越古墳群(古墳)	39 神崎山古墳(古墳)
3 新村湊(近世)	22 陣ヶ峰古墳群(古墳)	40 しゃもじ塚古墳(古墳)
4 生沢古墳(古墳)	23 稲荷山古墳群(古墳)	41 果本古墳(古墳)
5 新発知古墳群(古墳)	24 比衣金ヶ崎古窯群跡(平安)	42 黏り塚古墳(古墳)
6 山田横穴7号古墳(古墳)	25 坂本天神山古墳(古墳)	43 七ツ塚古墳群(古墳)
7 伏見白山神社古墳(古墳)	26 濱訪神社古墳(古墳)	44 大洞白山塚古墳(古墳)
8 伏見白帝(白鳳)	27 坂本古墳群(古墳)	45 柿田古墳(古墳)
9 山本藤九郎屋敷跡(近世)	28 花塚古墳(古墳)	46 前山古墳群(古墳)
10 高倉山古墳(古墳)	29 鶴戸城跡(中世)	47 北ヶ洞2号古墳(古墳)
11 伏見東坂南遺跡(縄文・古墳)	30 惠觀寺廬跡(中世)	48 杉ヶ洞古墳群(古墳)
12 伏見寺東古窯跡(奈良・平安)	31 長瀬山古墳(古墳)	49 桐之木古墳群(古墳)
13 東寺山古墳群(古墳)	32 惠觀寺山古墳群(古墳)	50 馬乗洞古窯跡(古墳)
14 女郎塚(近世)	33 神宮古墳(古墳)	51 北ヶ洞1号古墳(古墳)
15 伏見狐塚古墳(古墳)	34 顕戸藤塚古墳(古墳)	52 植之木経塚(近世)
16 堂根古墳(古墳)	35 新木野古墳(古墳)	53 東洞古墳群(古墳)
17 大塚古墳群(古墳)	36 新木野墓地古墳群(古墳)	54 大王寺古墳(古墳)
18 念事ヶ平古墳群(古墳)	37 顕戸山ノ神遺跡(弥生・古墳)	55 池西古墳(古墳)
19 青木古墳群(古墳)		

図4 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000)

## 第3章 検出された遺構

### 第1節 概要

今回の調査で検出された遺構は古墳時代・古代・中世の3時期にわたり、古墳時代は水田と集落跡、古代～中世は条里型地割に伴う道路状遺構と畦畔状遺構、溝、集落跡などが検出された。そして、各時代の遺構が同一面で確認でき、その埋土は古代・中世のものと古墳時代のものとでは明らかに色調が異なったため、時代の認識は比較的容易であった。また、基本的に遺構確認面は1面であったが、E区のみ溝の氾濫によって古墳時代の水田が砂層で覆われており、砂層上面より後世の遺構が掘り込まれていたために2面の調査となった。

検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡9軒、掘立柱建物8棟、溝18条、自然流路2条、土坑10基、ピット282基、水田19面、溝に伴うしがらみ状遺構9基、古代・中世の掘立柱建物2棟、溝6条、土坑12基、ピット543基、道路状遺構2条、畦畔状遺構、擬畦畔などがある。このうち、自然流路を人為的に改変している場合は溝として扱い、ピットと土坑の区別はおよそ直径50cm以下をピット、50cm以上を土坑とした。なお、遺構の略号は下記のとおりであり、遺構番号は調査時に使用したものを報告時に変更しているので、表4～6の遺構一覧表では「旧遺構名」として調査時の遺構番号を掲載した。また、土器の注記や木製品の処理などに使用した遺構番号は調査時のものに従っている。

#### ・遺構の略号

竪穴住居跡	SB	自然堤防	NT	しがらみ状遺構	SW
掘立柱建物	ST	土坑	SK	水田	ST
柵列	SA	ピット	P	畦畔・擬畦畔	SN
溝・道路状遺構	SD	土器集積	SU	杭列	SV
自然流路	NR	焼土	SC		

### 第2節 基本層序

本遺跡は可児川によって形成された自然堤防の後背湿地にあたるため層序は比較的安定していたが、古墳時代には網状河道が発達していたためか、微高地(C・F・G区)と低地(E区)とでは層序が大きく異なっていた。また古代以降の層序は、古代から現代に至るまでの水田耕作によってかなり搅拌されており、遺構の検出は極めて困難であった。

今回はE区西側の南北トレンチ東壁の土層断面図(図5)の一部を掲載し、以下I層より順に概述する。

#### I a層

褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。層高20～30cm。現代の水田耕作土であり、調査区内全域で確認された。

#### I b層

灰白色(N7/1)砂質シルト。層高10~20cm。現代の水田の敷土であり、鉄分とマンガン斑がみられた。調査区内では部分的に確認できなかった箇所もある。

#### II a層

褐灰色(10YR6/1)シルト。層高10~20cm。古墳時代~中世の遺物包含層であり、稻のプラントオパールが多数検出された。調査区全域で確認された。

#### II b層

褐灰色(10YR5/1)シルト。層高0~5cm。古墳時代~中世の遺物包含層であり、稻のプラントオパールが多数検出された。II a層とII b層との境は漸移的であり、II b層は調査区内で部分的にしか確認できなかった。

#### III層

灰白色(N7/1)砂。層高5~15cm。SD14~16の氾濫により古墳時代の水田面を覆った洪水砂であり、直径2mm以下の小礫を幾つか含んでいる。E区北側とSD10~14~16内で確認された。

#### IV層

黒褐色(10YR3/1)シルト。層高5~10cm。古墳時代の水田耕作土であり、稻のプラントオパールが多数検出された層である。E区北側のみで確認された。

#### V層

褐灰色(10YR5/1)シルト。層高5~10cm。古墳時代の水田の敷土に相当し、鉄分とマンガン斑がみられる。稻のプラントオパールが幾つか検出されたが、層厚が小さいためにIV層からの混入の可能性もある。E区北側のみで確認された。

#### VI層

黒色(10YR2/1)シルト。層高5~20cm。粘性が極めて強い無遺物層であり、稻のプラントオパ

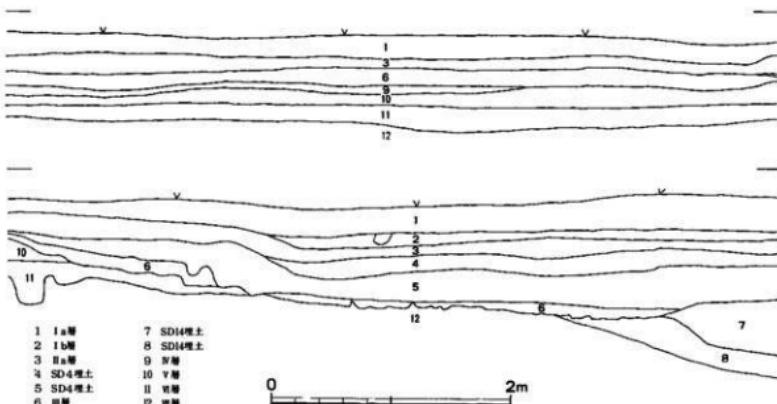


図5 E区西側南北トレンチ土層図 (L=110,000m)

ルはほとんど検出されなかった。E区北側のみで確認された。

#### VII層

灰白色(10YR7/1)シルト。層高20cm以上。地山と認識した層で、稻のプラントオバールは皆無であった。調査区内全域で確認された。

なお、E区の層序はⅠ層からⅦ層まで連続してみられたが、C・F・G区はⅠ層→Ⅱ層→Ⅶ層の順に堆積しており、Ⅲ～Ⅵ層はみられなかった。遺構確認面はC・F・G区がⅦ層直上、E区はⅢ層直上で古墳時代～中世の遺構が、またⅢ層中で古墳時代の水田の畦畔上端部が確認された。



図6 作業風景

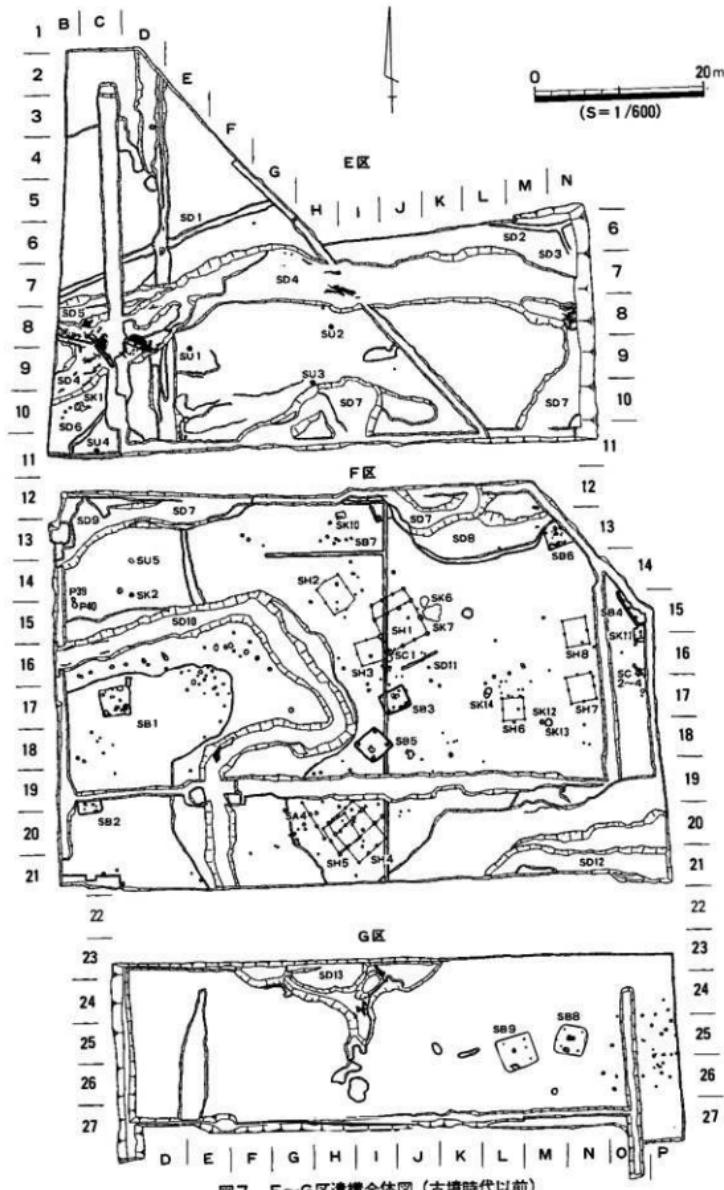


図7 E～G区遺構全体図（古墳時代以前）

### 第3節 古墳時代以前の遺構1(C区・E区上層・F区・G区)

第2節で述べたようにE区のみ遺構確認面が2面であったので、本節でC区・E区上層・F区・G区の様相を、第4節でE区下層の様相を述べたい。

#### 1、掘立柱建物

(SH1~8)

古墳時代の掘立柱建物は合計8棟検出され、以下順に説明したい。なお、表2の掘立柱建物の時期については第6章第3節を参照していただきたい。(図9・10)

SH1(図9・10) I15~J16グリッドにかけて位置する桁行3間×梁行2間の東西掘立柱建物であり、規模は桁行4.95m、梁行4.30m、床面積21.29m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は10基あり、いずれも柱据り方の平面形は円形で、側柱の柱穴は直径30~50cm前後、深さ30cm~45cm、棟持柱の柱穴は直径60~70cm、深さ45~55cmを測る。棟持柱の柱穴であるP33とP140は梁行の柱筋からわずかに外側にずれていることから、この建物は近接棟持柱建物になる可能性もある。身舎の北西面には1間×3間の付属施設(縁か)が存在し、長軸4.35m、短軸1.73mを測る。付属施設の柱穴は身舎のものと比べて直径がやや小さく、その柱筋は身舎の桁行に平行するが、梁行の柱筋からは若干内側に

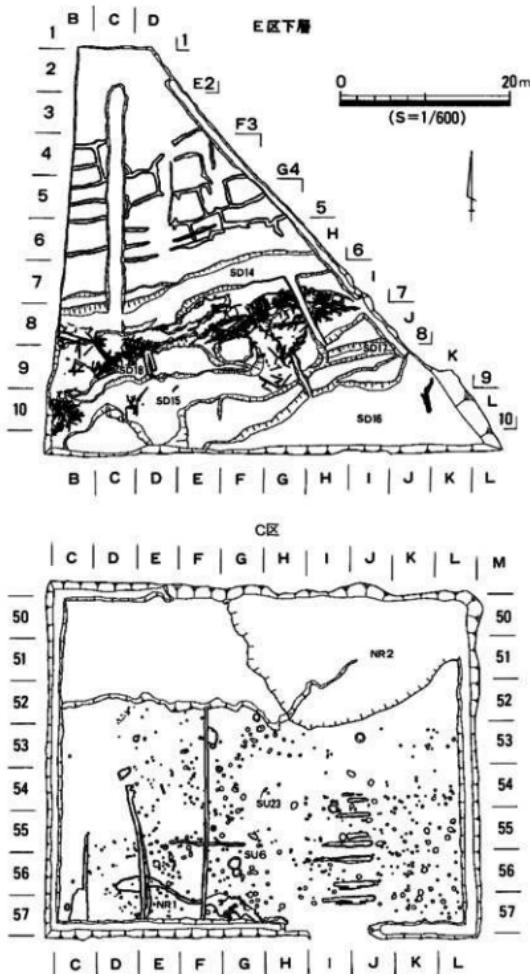


図8 E区下層・C区遺構全体図(古墳時代以前)

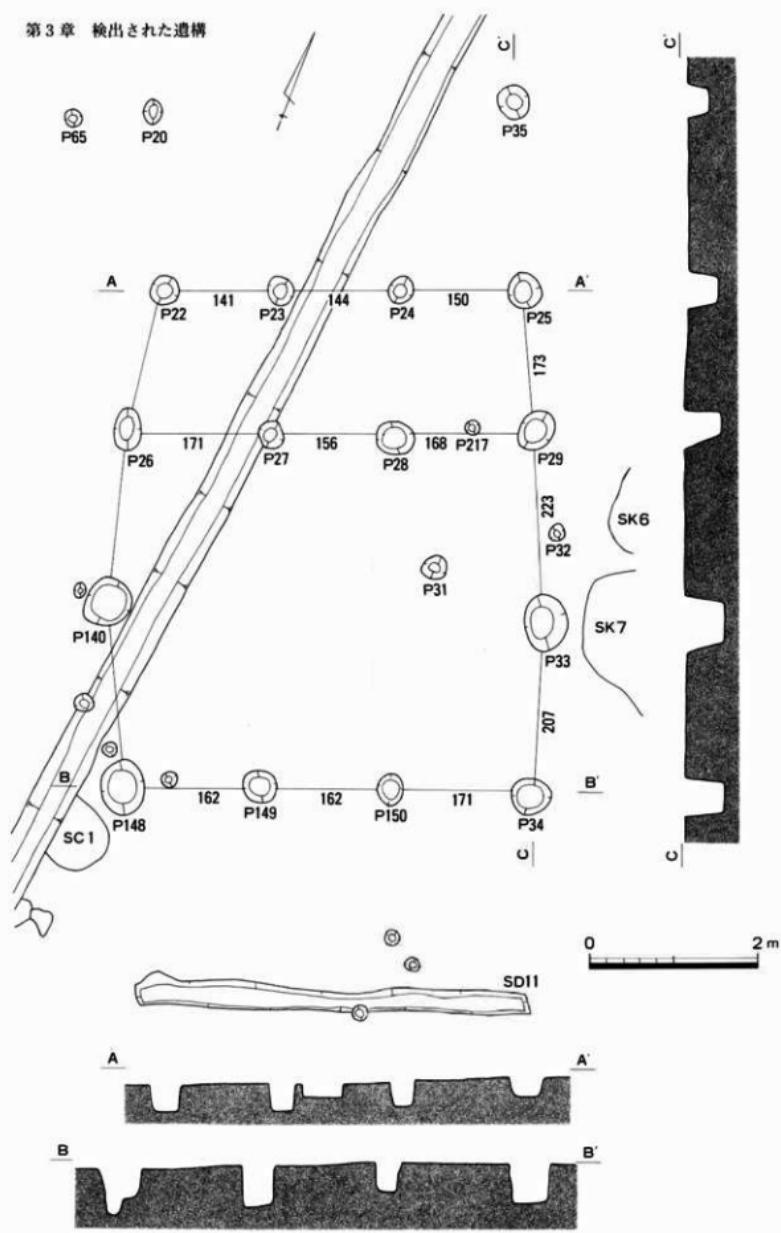


図9 SH 1 実測図 (L=109,700m)

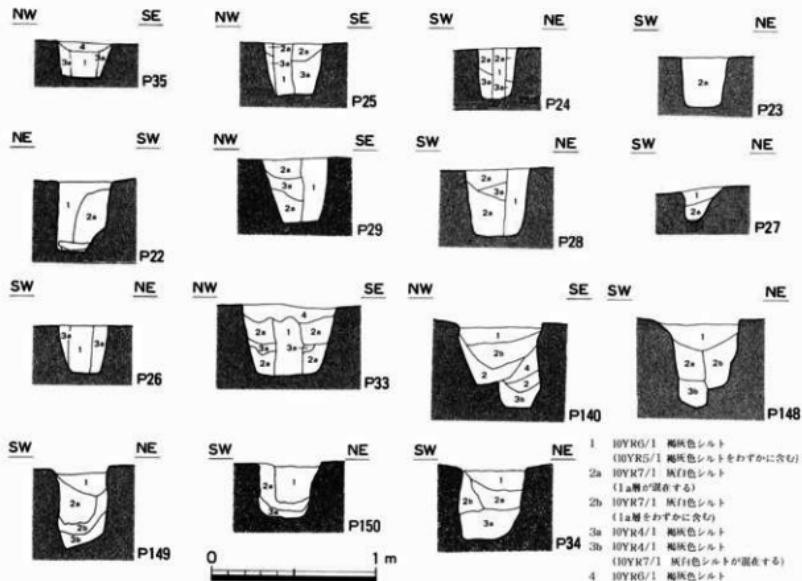


図10 SH1 ピット実測図 (L=109,700m)

入り込んでいる。また、付属施設の北側には東西の柱筋の延長線上にP20とP35が位置している。検出当初はP20・22~25・35で掘立柱建物が1棟建つと想定していたが、P20とP35の間にピットが確認できなかったことと、P22~25がP26~P29の柱筋に平行することなどからいずれもSH1の付属施設と考えた。しかし、P20とP35がSH1の付属施設としてもその用途は不明である。なお、建物を構成する柱穴のうち柱痕跡が認められたものはP22・24~26・29・33・35・148・150であり、そのうちP22の底面には長さ19cm、幅11cm、厚さ3cmの扁平な円盤が据えられており、円盤の下には長さ13cmと9cmの2つの端材が詰められていた。

一方、身舎の南東側には柱筋から約2.5m離れてSD11が存在する。SD11は長さ4.80m、幅0.3m前後、深さ5cm前後であり、その方位は身舎の梁行に平行し、埋土は褐灰色シルトの単層であった。また、出土遺物は皆無であり、その用途は掘立柱建物に伴う排水溝と思われる。なお、SH1の東面には上器溜まりであるSK6とSK7が、北側の隅にはSC1がそれぞれ位置している。

**SH2 (図11)** H14~115グリッドにかけて位置する桁行2間×梁行2間の南北掘立柱建物であり、規模は桁行3.60m、梁行3.12m、床面積11.23m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は7基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径20~25cm、深さ15cm~25cmを測る。ピットの埋土はいずれも褐灰色シルトの単層であり、柱痕跡が確認できたものはなかった。東隅のピットが確認できなかつたため定かではないが、棟持柱の柱穴となるであろうP53とP57は梁行の柱筋からわず

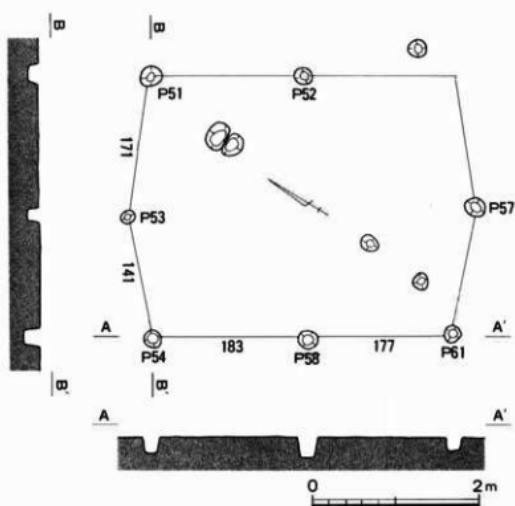


図11 SH 2実測図 (L=109,700m)

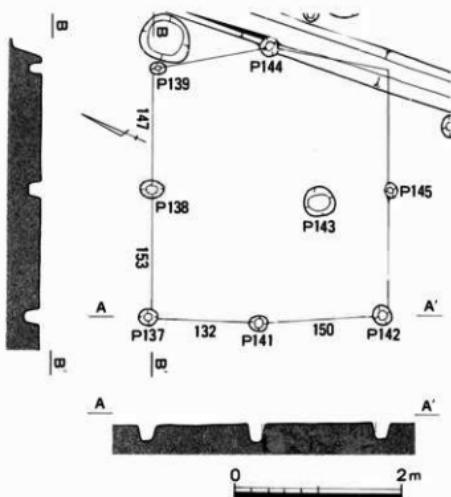


図12 SH 3実測図 (L=109,700m)

かに外側にずれていることから、この建物は近接棟持柱建物になる可能性もある。

**SH 3(図12)** I 16グリッドに位置する桁行2間×梁行2間の東西掘立柱建物であり、規模は桁行3.00m、梁行2.82m、床面積8.46m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は7基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径15~30cm、深さ15cm~25cmを測る。ピットの埋土はいずれも褐灰色シルトの単層であり、柱痕跡が確認できたものはなかった。東隅のピットは近代の暗渠によって破壊されているため確認できなかったが、棟持柱の柱穴となるであろうP141とP144は梁行の柱筋からわずかに外側にずれていることから、この建物もSH 2と同様に近接棟持柱建物になる可能性もある。

**SH 4・SA 4(図13~15)** SH 4はH 20~I 21グリッドにかけて位置する桁行3間×梁行2間の独立棟持柱建物であり、規模は桁行4.45m、梁行4.45m、床面積19.80m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は12基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形~梢円形で、直径30~55cm、深さ35cm~45cmを測る。梁行の中央に位置するP119とP134から約1.20m外側には独立棟持柱の柱穴であるP118とP174があり、P

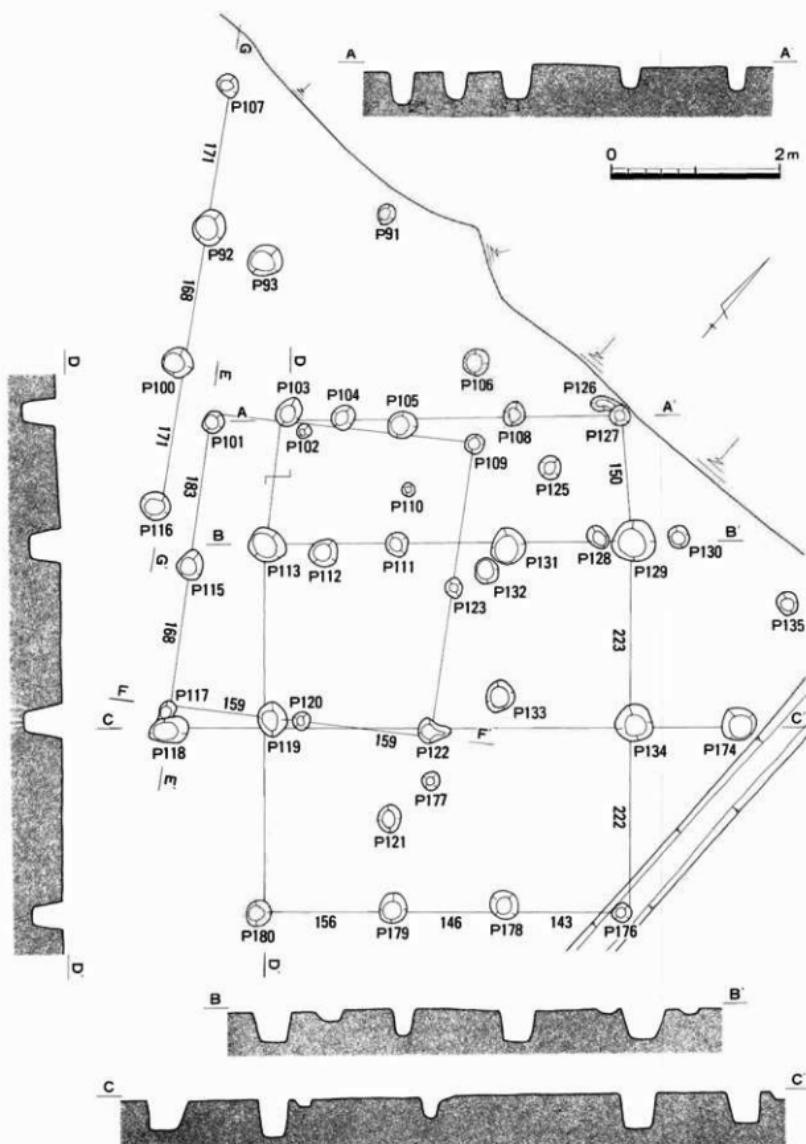
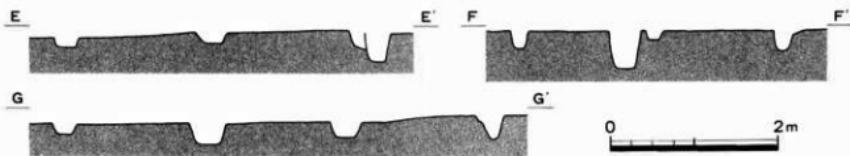
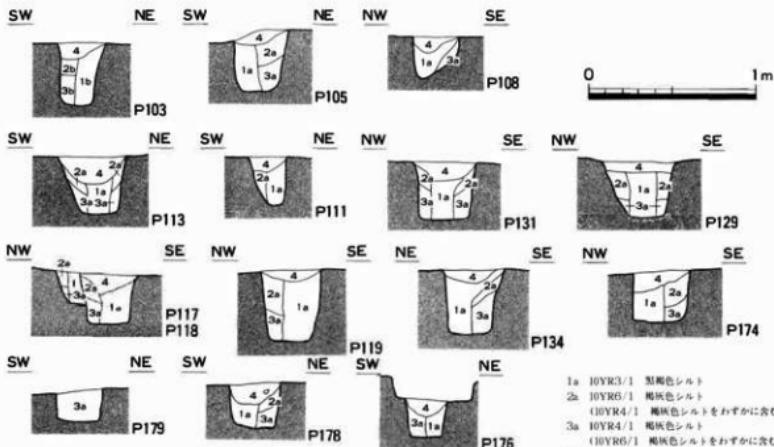


図13 SH4・5、SA4実測図 (L=109.600m)

図14 SH5、SA4実測図 ( $L=109,600m$ )

SH4



1a 10YR3/1 黒褐色シルト  
2a 10YR6/1 暗灰色シルト  
(10YK4/1 暗灰色シルトをわずかに含む)  
3a 10YR4/1 暗灰色シルト  
(10YR6/1 暗灰色シルトをわずかに含む)  
4 10YR6/1 暗灰色シルト  
1b~3b 1a~3aに10YK7/2(1)に含む 黄褐色  
色シルトがプロック状に混在する。

図15 SH4・5、SAピット実測図 ( $L=109,600m$ )

118はSH 5の柱穴であるP117を切っている。身舎の北西面には1間×3間の付属施設(縁か)が存在し、長軸4.05m、短軸1.50mを測る。付属施設の柱穴は身舎のものと比べて直径がやや小さく、その柱筋は身舎の桁行に平行するが、梁行の柱筋からは若干内側に入り込んでいる。建物を構成する柱穴のうちP108とP179以外はいずれも明確な柱痕跡が確認でき、その大半は上部に褐色シルトが堆積していた。なおSH 4の検出当初は、この建物が独立棟持柱建物であると認識できなかったため、P118とP174を桁行の柱筋に沿って半截しなかった。そのため、柱痕跡が直立していたか、身舎側に傾いていたかは不明であるが、完掘後のピットの掘り方は両ピットともに身舎側が傾斜し、他方がほぼ直立している状態であった。

SA 4は4基ないしは4基以上の柱穴から構成され、検出されたもので長さ5.10mを測る。柱穴はいずれも柱掘り方の平面形が円形で、直径30~40cm、深さ10cm~35cmを測り、P107以外の柱穴で柱痕跡を確認した。SA 4の主軸の向きはSH 5と同じであるが、SH 5との距離が近すぎることと、SA 4を構成するピットの埋土上面にSH 4と同じ褐色シルトが堆積していることなどから、SA 4はSH 4と同時期に存在していたと考えられる。

なお、SH 4・SH 5・SA 4が位置する場所はSD10・12・13が方形に張り出した箇所の中央から若干南寄りにあたり、溝の張り出し部のラインとSH 4・SH 5の建物の平面形のラインがほぼ平行している。さらにSH 4は桁行と梁行の柱の本数が違うにもかかわらず両者の一辺の長さは同じであることや、集落全体の中でSH 4とSH 5が最も奥に位置することなどから、SH 4・SH 5はやや特異な性格を有していたと想定される。

#### SH 5(図13~15) H 20~I 20グリッドにかけて位置する桁行2間×梁行2間の南北掘立柱建

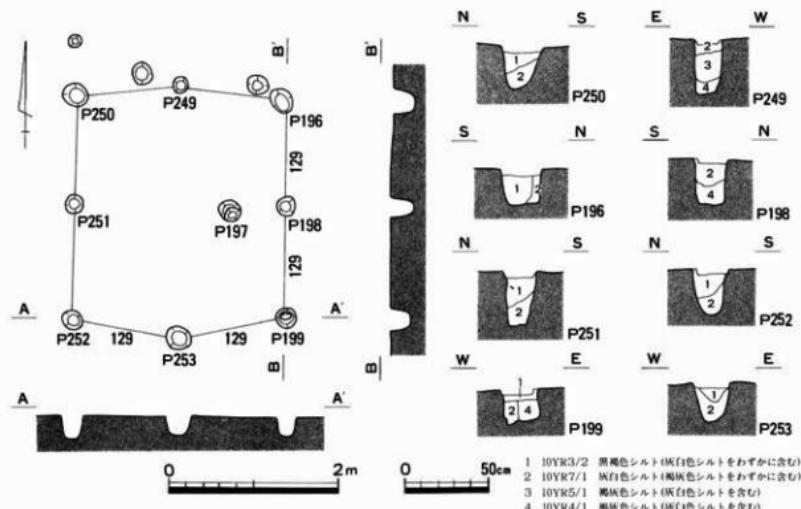


図16 SH 6実測図 (L=109.900m)

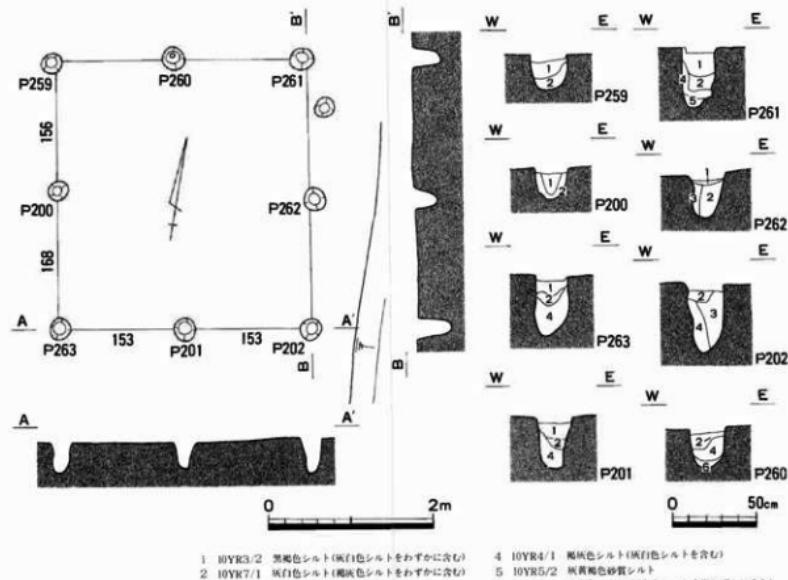


図17 SH7実測図 (L=110,000m)

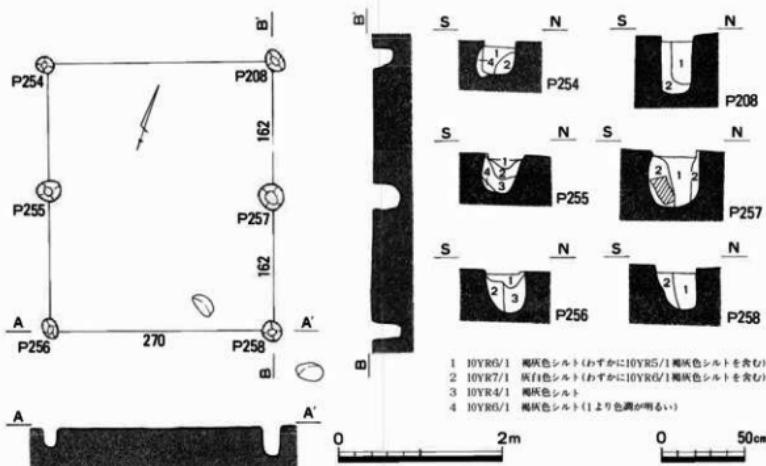


図18 SH8実測図 (L=109,900m)

物であり、規模は桁行3.51m、梁行3.18m、床面積11.16m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は8基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径25~35cm、深さ20~35cmを測る。また、P104、P109、P123において径10cm前後の柱痕跡が確認され、P117はSH5の柱穴であるP118に切られている。なお、SH4、SH5、SA4のいずれにも属さないビットが幾つかあるが、そのうちP112はSH5のほぼ中央に位置することから、SH5は総柱建物である可能性も考えられる。

**SH6(図16)** L17~M18グリッドにかけて位置する桁行2間×梁行2間の南北に長い近接棟持柱建物であり、規模は桁行2.58m、梁行2.49m、床面積6.42m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は8基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径20~30cm、深さ20cm~35cmを測る。また、いずれも明確な柱痕跡が確認できなかった。

**SH7(図17)** N17グリッドに位置する桁行2間×梁行2間の南北掘立柱建物であり、規模は桁行3.24m、梁行3.06m、床面積9.91m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は8基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径30cm前後、深さ20cm~45cmを測る。P200、P202、P262において直径10~15cmの柱痕跡が確認され、P261の底面においてのみ砂質シルトが検出された。

**SH8(図18)** N15~N16グリッドにかけて位置する桁行2間×梁行1間の南北掘立柱建物であり、規模は桁行3.24m、梁行2.70m、床面積8.75m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は6基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径20cm~30cm、深さ25cm~40cmを測る。P208、P256、P257、P258において径10~15cmの柱痕跡が確認され、P257の掘り方埋め戻し土内から長さ18cm、幅7.5cmの角礫が検出された。

## 2、竪穴住居跡(SB1~9)

**SB1(図19)** C17グリッドで検出された平面形が方形を呈する竪穴住居跡であり、平成8年度の試掘確認調査において住居跡の東側半分は調査を終了していた。基本層序Ⅱa層掘削時において少數の山茶碗とともに多数の土師器片が出土し始め、遺構検出面であるⅦ層直上において方形プランが確認できた。住居跡は検出面から床面まで深さ8cm前後と浅く、遺存状態は良好とはいえない。また埋土は上下2層に分かれ、上層からは土師器片がまとまって出土している(図版5)。

床面ではビット9基(P1~9)と土坑2基(SK1・2)、炉1基(SC1)が検出された。ビットのうちP1は深さ19cm、P2は深さ10cm、P3は深さ20cmを測り、他のビットはいずれも深さ5cm以内と浅い。またP3は検出の段階で礫の上端がみており、ビットの底面付近には角礫3つが据えられていた。SK2は検出面で炭化物が方形に散在して検出された土坑であり、その掘り方は浅い皿状を呈する。そして、炭化物は材として遺存しているものではなくいずれも1cm以下の小ブロックであり、埋土内に焼土は確認できなかった。SC1は検出面で褐灰色シルト中に灰黄褐色砂質土(10YR6/2)と焼土であるにぶい赤褐色シルト(2.5YR5/3)粒がわずかに確認できた。そして、その掘り方は深さ3cm程度の浅い皿状を呈し、底面の土の硬化や変色は確認できなかったが、焼土が混在することと、SC1の位置から地床炉と判断した。なお、床面において貼床と周溝は確認できず、P1~P3は主柱穴になると思われる。

**SB2(図20)** B19グリッドで検出された、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。北側は攪乱により破壊されており、攪乱の北側には住居跡のプランは検出されなかったことから、本来は長方

形のプランを呈していたと想定される。基本層序Ⅱa層掘削時において土師器の小片が出土し始め、住居跡検出面において中央付近にまとまって出土した。検出面では住居跡埋土である黒褐色シルト中に褐灰色シルト(Ⅱa層)が数ヶ所に混在していた。

検出面から床面までは6~8cmと極めて浅く、東側の壁は直立気味に立ち上がるが西側はなだらかであり、さらに床面において主柱穴が認められなかったことなどから、竪穴住居跡というよりは竪穴

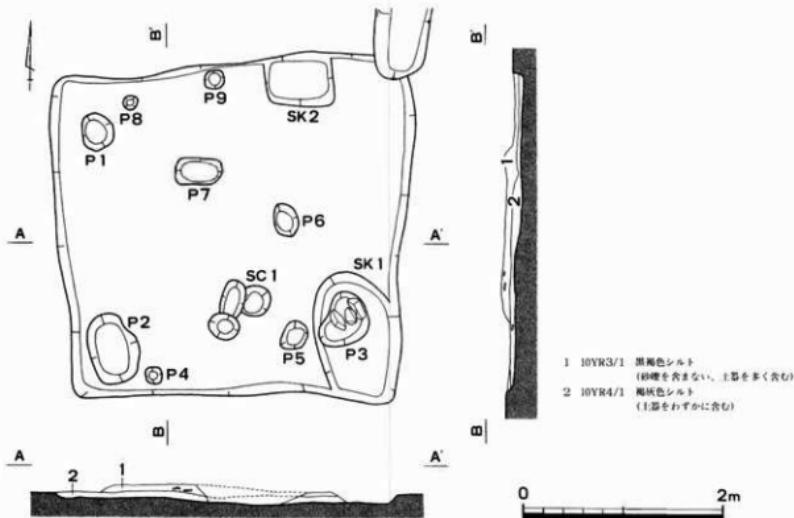


図19 SB 1 実測図 (L=109,600m)

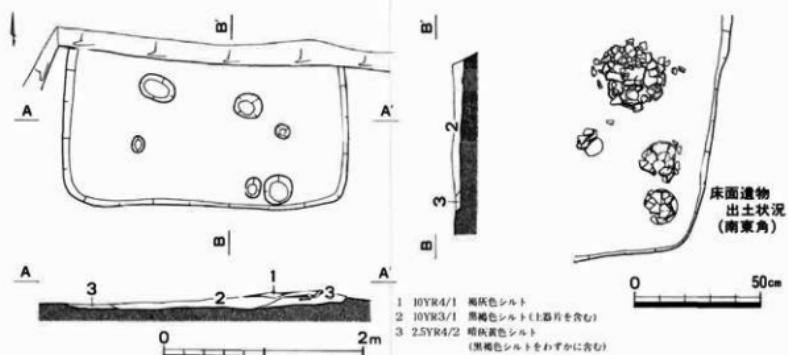


図20 SB 2 実測図 (L=109,600m)

状遺構と認識した方がよいのかもしれない。床面においてピットが6基検出されたが、その掘り方はいずれも3~5cmと浅い。P1~P3は長さ1cm程度の炭化物と直径3mm程度の焼土ブロックが検出面から底面まで散在し、P1から土師器片が数点出土した。また、床面南東角では甕(9)、鉢(11・12)、小型壺(13)の4点が出土した。小型壺は口縁部を北西に向かって横位であった。鉢は11が口縁部を上に向け脚部が欠落しており、12は口縁部が床面に接地し逆位で、甕は口縁部を北に向かって横位で出土した。

**SB3(図21)** I 17~J 17グリッドで検出された東西に長い長方形プランを呈する竪穴住居跡である。西側を近代の暗渠によって破壊されているが、残存状態は比較的良好であった。壁の立ち上がりは、東西壁はほぼ垂直、南北壁は斜めに掘り込まれており、埋土は褐色~灰白色シルトが主体

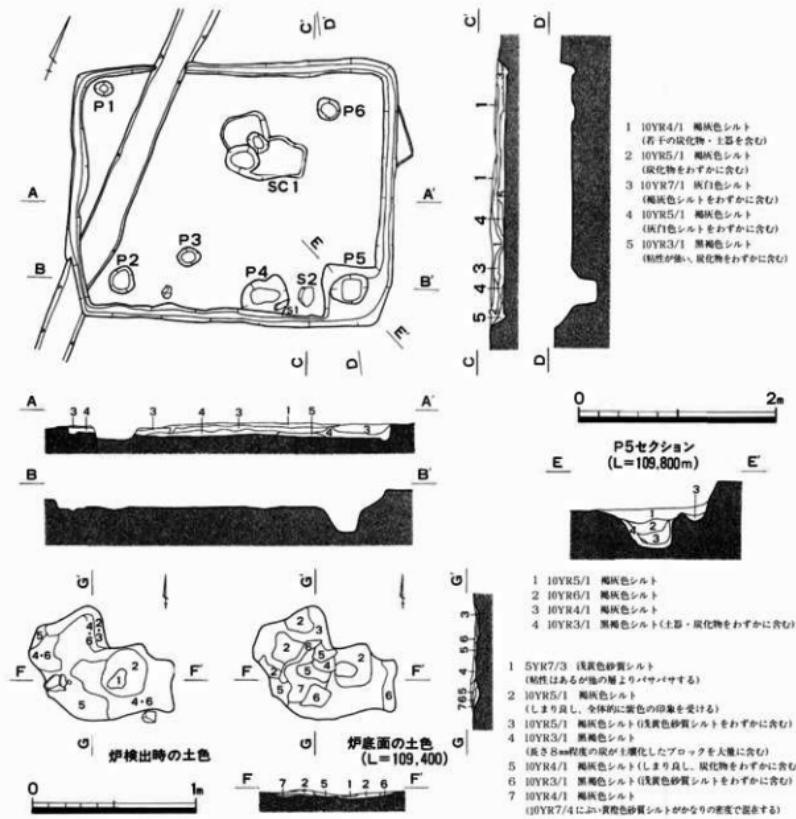


図21 SB3実測図 (L=109.800m)

で、床面付近は炭化物をわずかに含む黒褐色シルトが堆積していた。床面ではピット6基(P1~6)と地床炉(SC1)を検出した。主柱穴となる位置にあるのはP1・2・5・6であるが、P1・2・6はいずれも深さ3cm程度である。P5は深さ25cmを測り、埋土は4層に分かれる。そして、3層と4層の境より土器片と炭化物が少量出土した。地床炉は中央から北東寄りに検出され、火處が2ヶ所確認できた。まず、検出面において4つの埋土に分かれ、1層は他の層と違い浅黄色を呈しバサバサしており、1層を囲む2層が紫色に変色していたため、1層を火處とし2層の色調は熱による変色と理解した。そして、2~3cm掘り下げるに炉底面が検出された。炉底面では7つの埋土に分層し、7層は1層に類似する土がかなりの密度で混在し、7層の北には2層と2層に類似する3層が確認できたので、7層付近を中心に古い段階の火處があったと推定される。なお、底面の熱による固化はみられない。炉内の遺物は、検出面西端において内面を上にして4片の土器が出土したのみである。また、床面直上には角蹠が2つ(S1、S2)検出され、S1はP4検出面に、S2はP4とP5の間に位置する。S1の西側にはS1に接して上器(15)がいずれも内面を上にしてまとめて出土し、S2は研磨痕がある扁平な面を上にして出土した。なお、周溝は幅15cm程度で全周している。なお、出土遺物は埋土中には極端に少なく、床面直上において数個体検出された程度である。

**SB4・SK11(図22)** O15~P16グリッドで検出された。SB4は平面形が方形で形状を呈し、今回の調査で検出された竪穴住居跡のうち長軸が最も長い。検出面において炭化物はみられず、中央付近にP187が検出された。壁の遺存状態は極めて良好でほぼ垂直に立ち上がり、床面周縁には幅約30cm、深さ約7cmの周溝が巡る。床面直上において炭化材が3ヶ所で検出され、北西側のものは長さ63cmを測る。また、床面より10cm程度上から床面までの覆土にも炭化物が散在して検出されたことから焼失家屋と判断した。床面ではピットが3基検出され、埋土はいずれも褐灰色シルトであった。そして、P1・P2は深さ3cmと浅いが、P3は15cmと深く下層に炭化物がわずかに検出された。遺物は検出面と埋土中から出土したものが大半で、床面直上に位置するものは2点のみであった。

SK11とした範囲は検出面において炭化物が集中および散在していた箇所を示す。しかし深さは

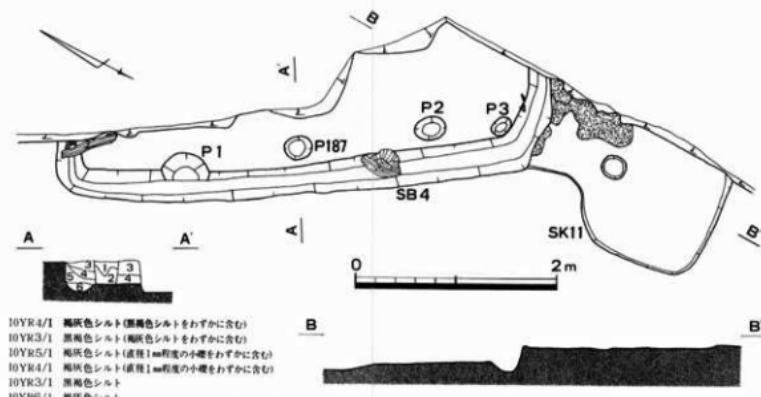


図22 SB4、SK11実測図 (L=109,900m)

3cm程度で、この地点で木材が燃えたか、炭を捨てた場所であると想定される。また、SB4に接しているが両者の切り合いは確認できず、SB4が焼失家屋である可能性が高いことや、SK11の北端で焼上が検出されたことなどから、SK11はSB4が焼失した際に住居の上部構造が南側に倒れ、それらが堆積した痕跡の可能性がある。

**SB5(図23・24)** I18グリッドで検出された、平面形が菱形気味を呈するやや歪んだ竪穴住居跡である。東側は近代の暗渠によって破壊されているが、今回の調査では最も残存のよい焼失家屋である。検出時において、幅5cm程の帯状の炭化物が住居跡の検出ラインに沿って全周に確認でき、さらに中央から東約1/4四半を除いて直径約2mの範囲内にも灰色シルトに混じり炭化物が多量にみられた。そして、少量の土器が出土し、炭化材の先端が確認できたため焼失家屋と判断した。

また、検出面より3~5cm掘り下げたところで炭化物に混じって小上器片が幾つか出土したために固化した(図23左)。土器は中央から南東側でまとまって出土し、北西側では検出面で若干出土したもののが掘削途中ではほとんど出土していない。そして、土器を取り除き精査を行うと中央付近において広い範囲で焼土が検出された。焼土の厚さは均一ではなく、検出面と底面は凹凸が認められた。なお、焼土底面に関しては住居床面の地床柱の焼土と識別が困難な箇所もあった。また、焼土のまわりには細かい焼上粒と炭化物を含む厚さ2~5cmの灰色シルトが広がっており、灰色シルト中からは遺物がほとんど出土しなかった。

灰色シルトを掘り下げると住居跡の南角付近を除いた全面に炭化物が検出された(図23右)。炭化物は草本類が一方に向かって検出されたもの(A)と、向きが不定でブロック状に検出されたもの(B)の2つがある。さらにAは繊維の方向が竪穴住居のプランに平行するもの(A1)としないもの(A2)に分かれる。A1は床面の中央付近から北東側にかけて北東から南西の向きで、また南西壁に沿って北西から南東の向きで、それぞれ繊維の並びが確認できた。なお、A1のうち繊維の向きが確認で

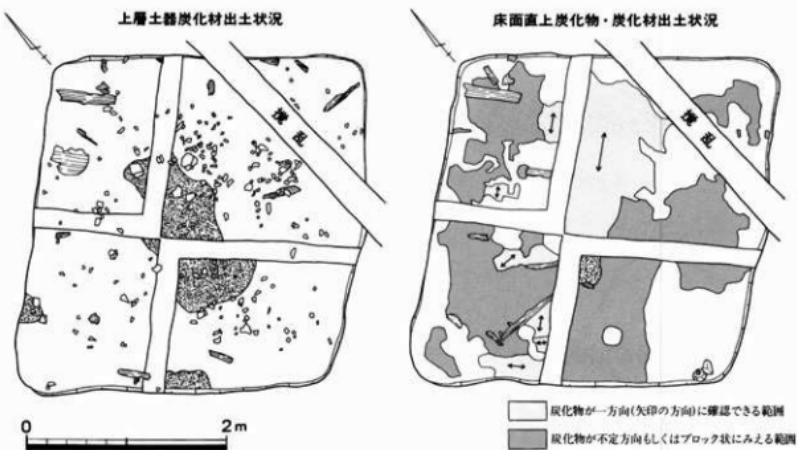
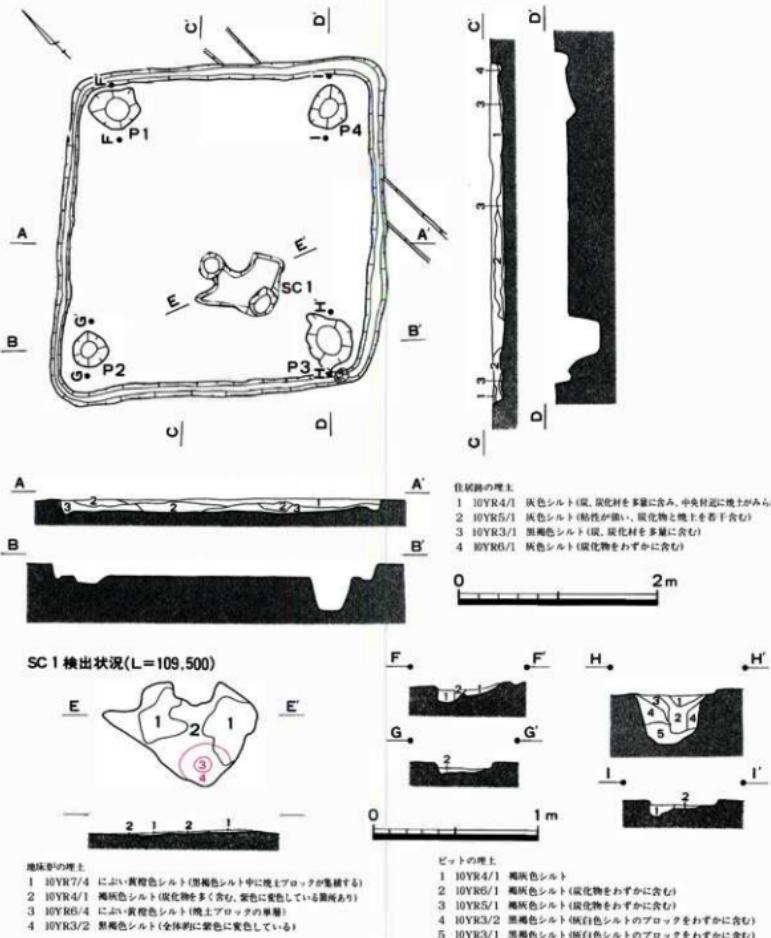


図23 SB5実測図(1)

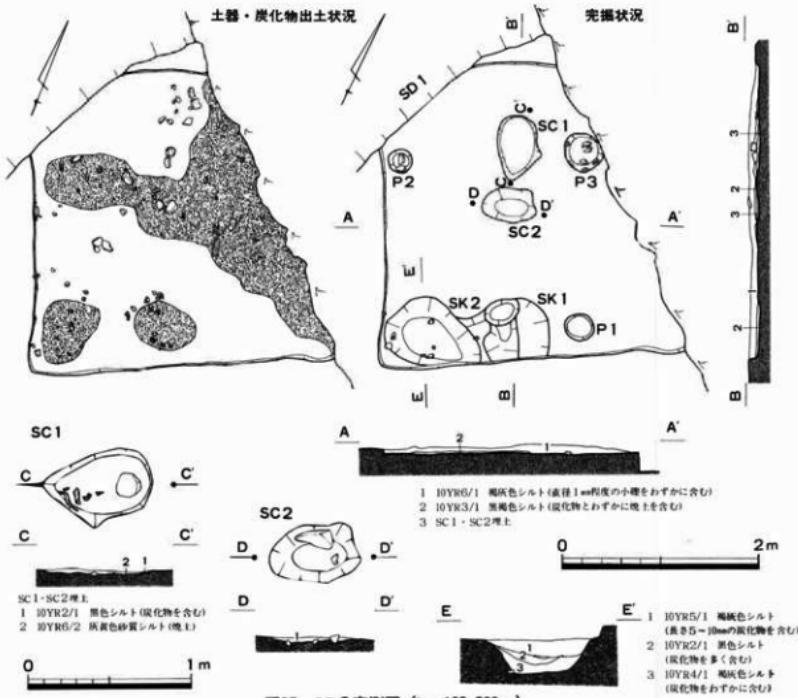
きた箇所では炭化材は厚さ2~6mmを有し、直下は床面であった。A2は床面中央西寄りでわずかに確認できたのみであり、5~8mmの厚みを有し、直下は床面であった。Bは床面全域に広まり、一部Aを覆っている。その厚さは2~4mmで、大半は直下が床面であった。また、南西壁中央から約50cm北東側にBの炭化物が円形にみられない箇所があったため柱の痕跡かと思われたが、炭化物を取り上げ精査すると掘り方はみられなかった。なお、この段階での焼土は中央付近に若干みられた程度であ

図24 SB5実測図(2) ( $L=109,700\text{m}$ )

る。

炭化材は埋土上層から床面直上にかけて住居の壁に沿って検出されたが、方向に規則性はみられなかった。しかし、北西から北東壁付近で検出された炭化材のレベルはいずれも壁際の方が中央寄りに比べて高かった。炭化材のうち北隅で検出された長さ59cmの材は最も残存がよく、断面楕円形を呈し長軸10cm、短軸5.2cmを測る。南東側が床面に接しており、断ち割りの結果、材の表面2~5mm程度が炭化しており、その内側にはぶい黄褐色シルト粒と鉄分をわずかに含む褐灰色シルトであった。

床面直上には遺物はほとんどなく、南隅の周溝埋土上面において高杯の杯部(26)が内面を下にして出土したのみである。床面ではピット5基(P1~5)と地床柱(SC1)を検出した。主柱穴となる位置にあるピットはP1~4であるが、P1・2・4はいずれも深さ10cm以下である。P3は深さ30cmを測り、埋土は1・2層が柱の抜き取り後の埋土、3~5層が掘り方理め戻し土と理解した。SC1は中央から南寄りに検出された。検出面、すなわち床面と同レベルでは焼土ブロックが東西に2ヶ所みられ、そのまわりに紫色に変色したような印象をもつ褐灰色シルトが広がっていた。これらの焼土ブロックが住居の埋土上層の焼土と同一なのか、地床柱の焼土なのかは判断できなかった。これら



の土を掘削すると火處と想定される3層と、そのまわりに紫色に変色した黒褐色シルトが検出された。3層のプランは長さ10cm強の楕円形を呈し、7mm程度堆積していた。なお、住居の周溝は幅10cm前後で全周しており、東隅付近は検出が容易であった。

**SB 6(図25)** M13～N13グリッドで検出された、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。住居の北西角がSD 1に切られ、また検出面から床面までの高さは7cm前後と低いため遺存状態は良好とはいえない。検出面において土器の小破片と小礫が幾つかみられ、全体に約3cm掘削したところで埋土中に拳大から直径3cm程度の礫が多数検出され、礫に混じってS字甌の脚台(34)が出土した。また、この段階で炭化物が全体的にぼんやりと認められた。

床面直上には炭化物が東側を中心に広がっており、中には炭化材として残存しているものもみられたが、遺存状態は悪く、床面から数cm浮いているものもあった。床面ではピット3基、土坑2基、地床炉2基が検出された。ピットはいずれも深さ3～5cmと浅く、P 2底面には長さ10cmと11cmの角礫が2つ並んで検出された。土坑は南壁の西側で検出された。いずれも検出面において炭化物が一定量みられ、SK 2の方がSK 1よりも深い。SK 2は3層に分かれ、2層とした黒色シルト中に炭化物を多く含み、一部材として残存しているものもみられた。また、SK 2内から出土した土器は小破片であるが、いずれも1層と3層、ないしは2層と3層の境から出土している。地床炉はいずれも楕円形を呈し、検出面において灰黄色を呈する焼土が確認された。SC 1は中央から南寄りに東西方向に木目の筋がみえる炭化材が検出され、焼土は検出面から底面にかけて末広がりに堆積していた。SC 2は中央から東寄りに円礫が1つ据えられていた。なお、SC 1は深さ約2cm、SC 2は深さ約3cmであり、いずれも極めて浅い。

**SB 7(図26)** I 13～J 13グリッドで検出された、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。この住居跡は中央が近代の暗渠と中世のSD21に、東側が古墳時代のSD 7に切られており、また上部の大半が削平されているため、遺存状態は良好とはいえない。

検出面において南側のラインは比較的明瞭に確認できたが西側は不明瞭であった。また、数個の人頭大の円礫がみられ、床面直上に位置するものも存在したが、住居跡周辺にも同じように存在したことから、これらは近代の開墾により礫が下層にめり込んだもので、本住居跡には伴わないと判断した。

検出面から床面までは5cm以下であり、検出面においてすでに床面がみえる箇所もあった。床面には小礫と土器片が散在し、検出できた遺構は地床炉<sup>1</sup>基、土坑1基、周溝らしき溝1条のみである。SK 1は南角で検出され、最下層には炭化物を多く含む黒褐色シルトが堆積していた。また、地床炉であるSC 1は多量の炭化物を含み、中央付近に長さ17cmの扁平な円礫が東西方向に据えられていた。円礫は底面よりわずかに浮いており、その周囲には焼土が堆積していた。また、円礫の東側には浅い凹みが確認できた。西壁の南側では壁に沿って幅25cm前後の溝が検出されたが、南壁では確認できず、周溝か否かの判断はできなかった。

**SB 8(図27)** M25～N25グリッドで検出された、平面形が隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。住居跡の検出ラインに沿って、長さ1～2cm程度の炭化物のブロックが帶状に確認された。南面は炭化物の密度が低く帯がやや不鮮明であったが、北・東・西面は比較的明瞭であった。検出時において中央付近には炭化物が全くみられず、褐灰色シルト中に土器が数点確認できたのみである。

検出面から約3cm掘削した時点で全面に散逸して炭化物がみられたが、検出時と同様に中央付近の

密度が低く、外縁に向かうにつれ炭化物の量は多くなっていた。この段階でも土器は非常に少なく、炭化物に混じって数点確認できたのみである。さらに中央部分を中心に数cm掘削すると全面に炭化物が検出された。

炭化材は南東側の遺存状態が良好で中央から放射状に広がるように検出され、北側は分布が希薄であった。また、炭化物直上では灰白色(10YR7/1)を呈する砂質土がまばらに確認でき、中央より北東側の長さ約1.5mの範囲内において最も顕著にみられた。今回の調査で砂質土が確認できたのはこの地点のみであり、また炭化物の直上で検出されていることから、これらを住居の焼失の際に堆積した灰と考えた。なお、砂質土は上位に堆積しているシルトをブロック状に取り除くと自然に検出できた。また、図27上は床面直上に堆積している炭化物と炭化材の広がりを示しており、図示したように炭化物が部分的にみられない箇所が幾つか確認できた。そのうち、南東側の隙間は完掘状況の図面と重ねるとP3直上に位置することから、住居焼失の際に柱の根本が炭化せずに残り後世に土壤化した可能性も考えられる。

炭化物を取り除き床面精査を行うと、住居中央より北側に長さ7~10cmの梢円形ないしは円形を呈するプランが幾つか検出された。検出面においてプランの輪郭に沿って炭化物がリング状にみえ、その内側は炭化物がなく褐灰色シルトの単一層であった。なお、深さは1~3cmと浅く皿状を呈し、底面には炭化物が潜り込んでいる。さらに東壁寄りを中心に幾つかの小ピットが検出された。直径7~10cmの円形を呈し、10~15cm間隔で不規則ながらの列状に並んでおり、その掘り方は浅く、検

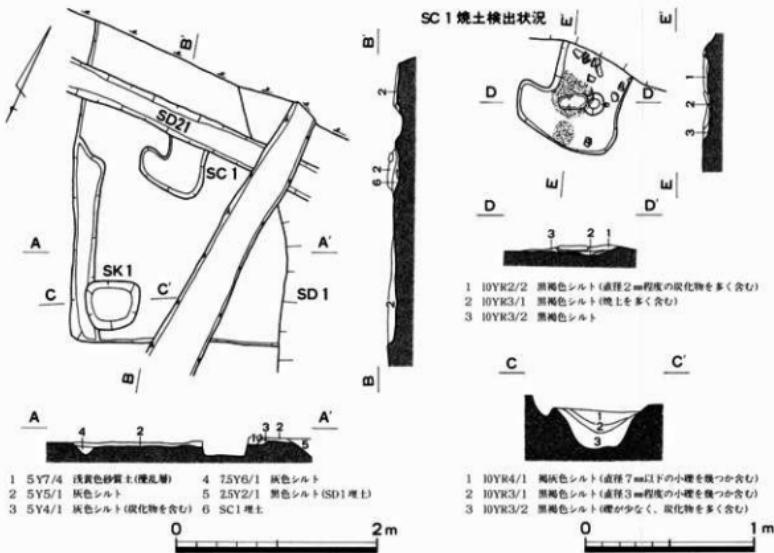


図26 SB7実測図 (L=109,700m)

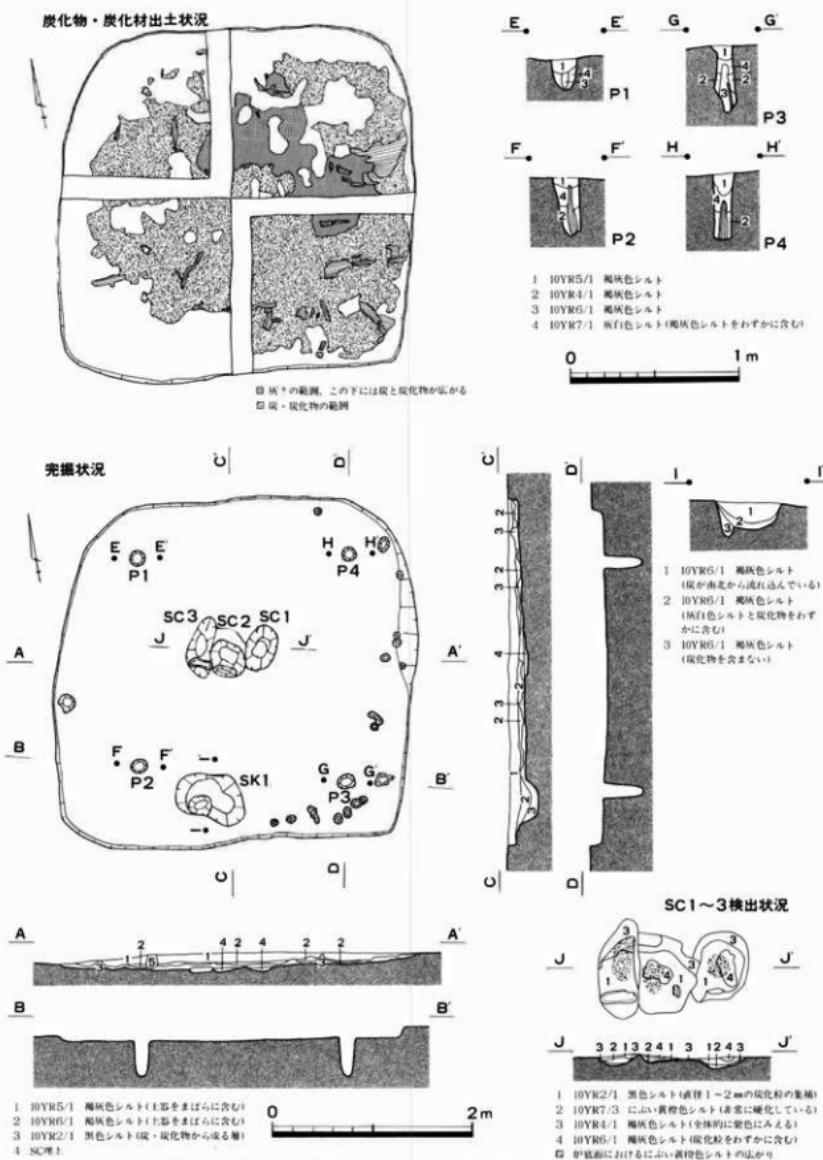


図27 SB8 実測図 (SB:L=109,800m, SK+SC+P:L=109,600m)

出面では炭化物が不規則に入り込んでいた。

床面においてピットは5基検出され、P1～P4が主柱穴となる。主柱穴はいずれも直径16cm前後で、深さはP1が11cm、P2～P4が35～40cmを測る。P1は柱の痕跡のみが確認でき、P2～P4は柱根がわずかに残存していたものの大半は土壌化していた。ピット間の距離はP1とP4、P1とP2、P2とP3の間が2.06mでほぼ均一であるが、P3とP4の間のみが2.25mとやや広い。なお、P5は深さ5cmと浅かった。

地床炉は3基(SC1～SC3)検出された。いずれも切り合ひ関係が確認でき、SC1からSC3へ、つまり住居中央東寄りから西寄りへ作り変えていったことがわかる。いずれも楕円形を呈し、皿状に浅く掘り込まれている。検出面ではいずれも顯著な焼土は確認できなかったが、底面ではにぶい黄色を呈する焼上がり3基とも中央付近で検出された。また、他の住居跡と同様に被熱によって紫色に変色した帯状のシルトが検出プランに沿って確認できた。SC1は長さ60cmを測り、南側に長さ22cmの円礫を東西方向に据えている。焼土は円礫の北側に楕円形に広がっていた。SC2は底面南側において礫の抜き取り痕が確認でき、その北側に焼土が広がっていた。なお、SC1の検出面では楕円形のプランを呈する褐灰色シルトが検出され、褐灰色シルトのみを掘り下げるに人間の足跡のような掘り方が確認できた(図版16)。これが足跡であるならば住居焼失後に人間が入り込んだことになり、住居中央北側の床面で検出された、炭化物がリング状にみえる楕円形を呈する深い凹みも足跡の可能性が高くなる。

その他の遺構として住居南側で検出されたSK1がある。楕円形を呈し、長さ73cm、幅47cm、深さ16cmを測る。断面では北側から炭化物が多量に入り込んだ様子が確認でき、土坑南側の深い掘り方内には炭化物が確認されなかった。

なお、床面直上の遺物は極端に少なく、周溝は確認されなかった。

**SB9(図28・29)** L25～M25グリッドで検出された、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。住居跡周辺の遺構検出面は東側より西側の方が低かったためか、住居跡は西側に比べ東側の方が検出が容易であった。検出面において炭化物はほとんど確認できなかったが、この住居跡もSB8と同様に焼失家屋である。

検出面から8cm前後掘削した時点で床面がみえはじめ、床面ほぼ全域にわたって炭化物が検出された。炭化物までの埋土は褐灰色シルトが主体であり、炭化物はほとんど混じらなかった。出土遺物は検出面で須恵器1点と数点の土師器がみられたが、これらの遺物はすべて混入と判断した。また、炭化物直上ではすべて土師器であり、いずれも細片ではあるがSB8より破片数は多く、一部炭化物内に入り込んでいた。炭化物は住居周縁を除きほぼ全域で確認され、住居東側では数箇所楕円形に炭化物がみられない箇所がある。そのうちの一つはP4直上に位置している。なお炭化材の遺存状況は悪く、住居中央北東側で1点確認できたのみである。

床面においてピットは5基検出され、P1～P4が主柱穴となる。主柱穴はいずれも直径13cm前後で、深さはP2が27cm、P1・3・4が45cm前後を測る。いずれのピットでも柱の抜き取り痕は確認できず、P1とP4の上層において小土器片が出土した。また、検出面ではP1以外はすべてプラン周縁が炭化のため黒くリング状を呈していた。ピット間の距離はP1とP4、P2とP3、P3とP4の間が2.50m前後と近似値を示すが、P1とP2の間のみが2.75mとやや広い。なお、P5

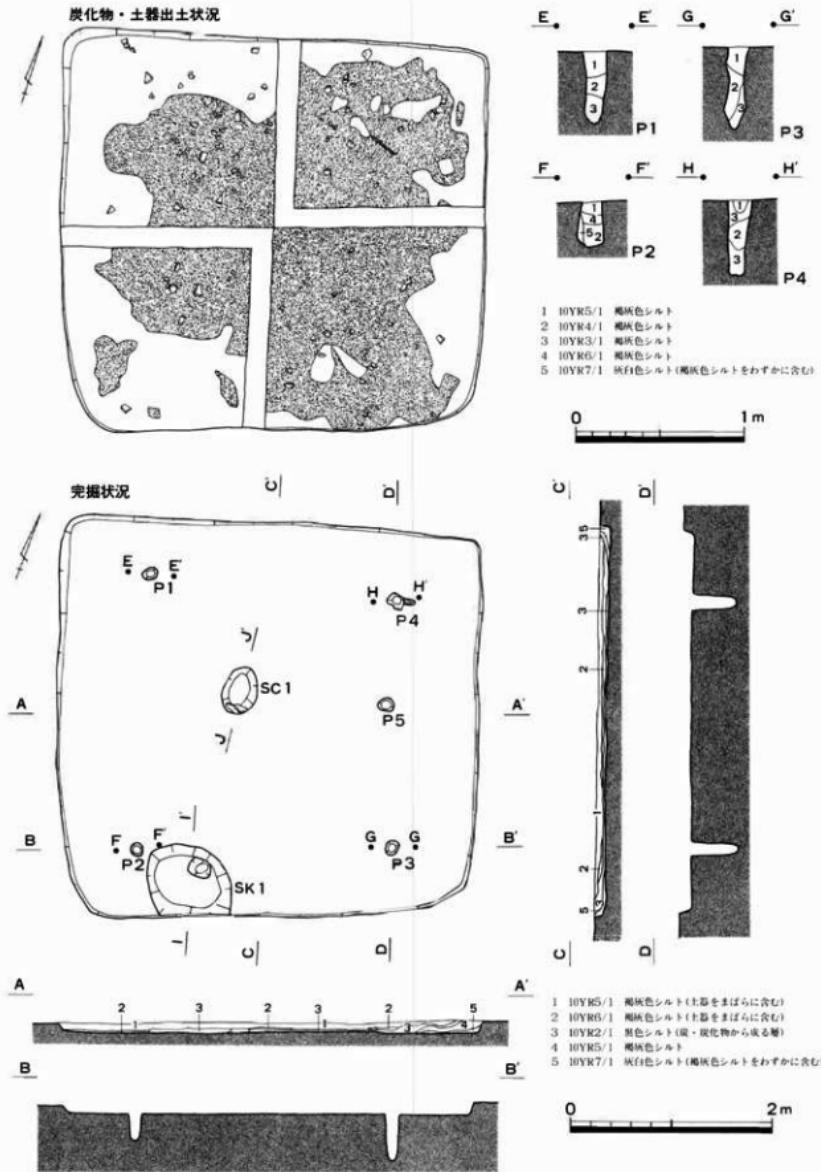


図28 SB9実測図 (SB:L=109,800m, P:L=109,600m)

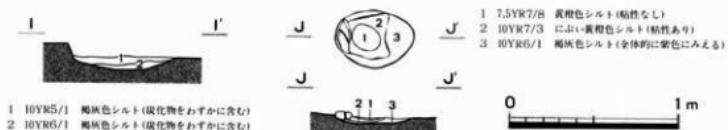


図29 SB9-SK1・SC1実測図 (L=109.600m)

は深さ4cmと浅かった。

地床炉は基(SK1)検出された。南北方向に細長い楕円形を呈し、長さ48cm、幅34cmを測る。そして、南側に長さ21cm、幅9cmの角礫を東西方向に据えており、角礫は扁平で上面が摩滅しており平滑であった。埋土は検出面において角礫の北側に火處と思われる粘性のない黄橙色シルトが広がり、その外側ににぶい黄橙色シルトと褐灰色シルトが同心円状に確認できた。掘り込みは3cm程度で極めて浅い。なお、住居南壁際で長さ92cmを測る楕円形のSK1を検出した。掘り込みは比較的浅く、埋土中に炭化物をわずかに確認したが土器は出土しなかったため、その性格は不明である。また、周溝は確認されなかった。

### 3. 土坑・ピット・焼土

SK1(図7) B10グリッドで検出された。II層掘削時において、遺構面より約10cm程上位で土師器の高杯の脚部が検出され、その周囲に炭化物と土器の小片がみられた。そして、掘削を進めるごとにI層直上にて不定形を呈するプランが確認できた。その法量は東西1.7m、南北1.0mを測る。埋土は砂質シルトが主体であり、炭化物は検出面においておよそ東西80cm、南北50cmの範囲内で確認され、埋土中層および底面にはみられなかった。掘り込みは浅く、東側で約5cm、西側で約10cmを測る。大半の遺物は炭化物直上において出土したが、1片のみ底面直上で出土した。なお、遺物量は極めて少ない。

SK6(図7) SK7の北西に位置する。検出時に炭化物が散在し、不定形のプランを確認したので土坑とした。しかし、掘り込みはほとんどなく、埋土は10YR3/1黒褐色シルトの単層で、出土遺物は土師器の小破片を数点確認したにすぎない。

SK7(図30) SK6の南東に位置する。検出時に土器と炭化物が散在し、不定形のプランを確認したので土坑とした。SK6と同様に掘り込みはほとんどなく、埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は一定量出土し、炭化物は検出面で多くみられ底面では比較的少なかった。なお、SK6、SK7はSH1の東側に近接している。

SK10(図30) H13グリッドで検出された長方形を呈する土坑である。掘り込みは浅く、埋土中には円礫や角礫が幾つか含まれていた。また、土坑底面の北西側には長さ30cm程度の炭化物が2ヶ所でみられ、その南側で浅い凹みが数ヶ所確認された。

SK12・13(図30) M18グリッドで検出された東西方向に並ぶ遺構である。SK12は深さ約10cmを測る土坑であり、その立ち上がりは緩やかである。検出時において中央付近に長さ9cmの砂岩が出土し、底面付近には炭化物が散在していた。SK13は包含層であるII層を掘削中に検出された上部遺構

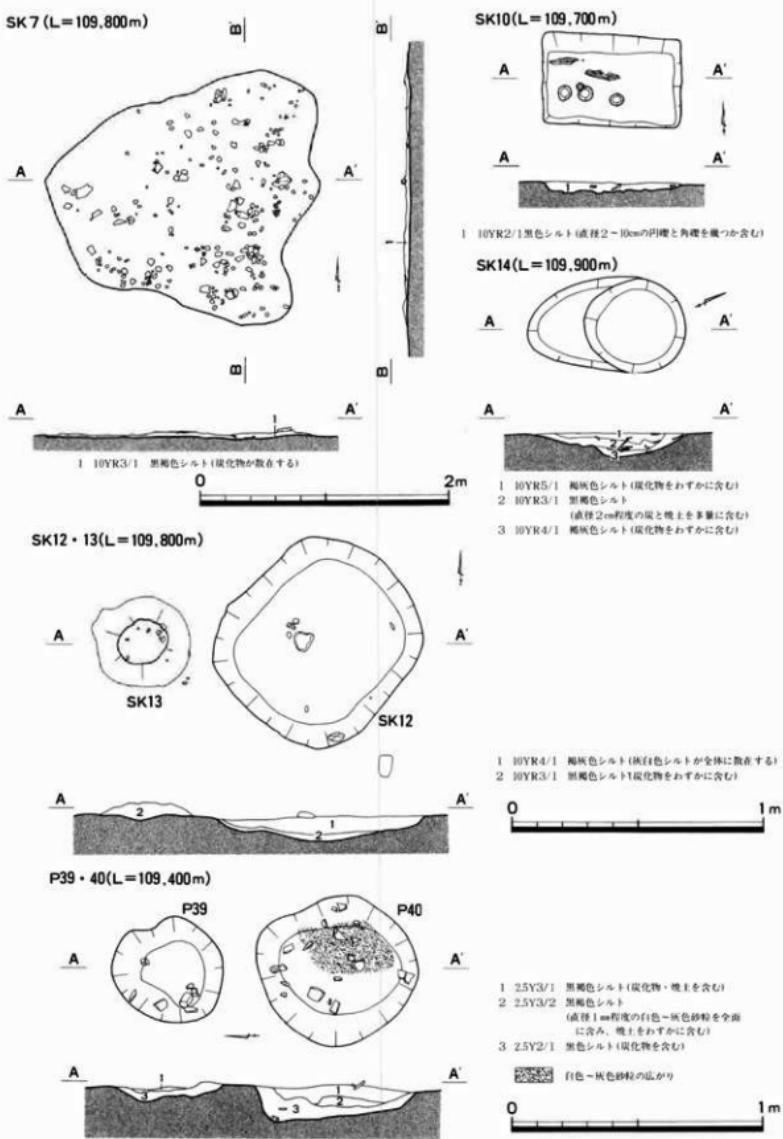


図30 SK7, 10, 12~14 P39, 40実測図

である。埋土は黒褐色シルトの単層で、直径1cm以下の小礫をわずかに含んでおり、その上端は遺構検出面から約7cm高い。なお、SK12からは遺物が出上せず、SK13からは土師器の小破片が3点出土した。

**SK14(図30)** L17グリッドで検出された楕円形を呈する土坑である。検出時において、土坑の北側を除く土坑検出ラインに沿って黒褐色シルトが帯状にみられ、約3cm程掘削した時点でS字甕などの土師器が出土した。埋土は大きく3層に分かれ、いずれの層でも炭化物と土器が確認され、中層では若干の焼土が検出された。さらに直径3~5cmの円礫もすべての層でみられ、土坑底面において表面に被熱痕がある礫が確認されたが、土坑の底面および壁面に硬化の痕跡はみられなかった。

**P 39・40(図30)** B14グリッドで検出された、南北方向に並ぶ円形を呈する土坑である。いずれも検出面において黒褐色シルトとまとまった炭化物がみられた。P40は埋土が3層に分かれ、上層と下層の底面には炭化物が面的に広がっていた。また、炭化物は大きいものが約3cm四方であるが大半は5~10mm程度で、その中には焼けた植物遺体が形を崩さず残存している状況もみられた。上層と下層の間にあら中層には白色~灰色を呈する砂粒が土坑の東側を中心に楕円形状に広がっており、砂粒の中から穿孔のある土製品(67)や表面が炭化した土塊が出土した。また、焼上もわずかではあるが砂粒とともに確認された。これらのことからP40を利用して何かを燃やした可能性が指摘できるが、土坑の底面および壁面に硬化の痕跡はみられなかった。なお、P40の上層で出土した須恵器の杯身片(250)はSD1出土の杯身と接合し、下層からは須恵器の高杯の脚が散逸して出土した。P39はP40より浅く、埋土はP40とほぼ同じであったが砂粒はみられなかった。

**SC1(図31)** J16グリッドで検出され、SH1とSH3の南側に位置する。中央を現代の暗渠によって破壊されているが、現存していた焼土は長さ15cm程度で楕円形状に広がっていた。焼土は厚さ1cm程度と極めて薄く、焼土の周囲と下部には紫色に変色した褐灰色シルトがみられ、今回の調査で確認された住居跡の<sup>3</sup>の火處とほとんど同じ様相であった。また、焼土から北に約1m離れた場所

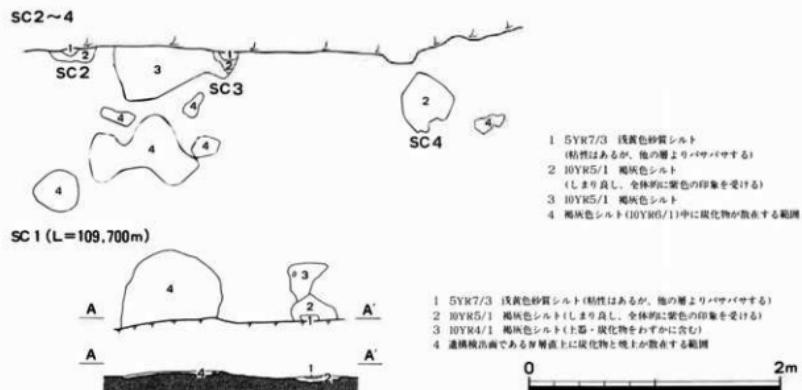


図31 SC1～4実測図

のⅦ層直上には、長さ80cm程の範囲内に多数の炭化物とわずかな焼土が散在していた。

**SC 2～4 (図31)** いずれもP16～P17グリッドで検出された。SC 2は焼土と紫色に変色した褐灰色シルトのみが単独で存在し、SC 3は焼土と紫色に変色した褐灰色シルト、その北側に変色がみられない褐灰色シルトが広がっていた。SC 4は明らかな焼土がみられず、紫色に変色した褐灰色シルトのみがみられた。焼土はいずれも厚さ1cm程度と極めて薄い。なお、SC 2～4の周囲には炭化物を含む褐灰色シルトが点在していたが、掘り込みはほとんどみられなかった。

#### 4. 土器集積(SU 1～6)

**SU 1 (図32)** E 9グリッドでSD14の埋土にめり込むように検出された壺である。壺は口縁部を下にして逆位で出土し、体部破片は大半が内面を上にして、北から南に向かって滑り落ちたような状態で出土した。壺の検出面と壺を覆っていた暗褐色砂質シルト中には炭化物などはみられず、また壺の掘り方も確認できなかったことから、SD14が埋没する最終段階で壺も同時に埋ったものと思われる。

**SU 2 (図32)** I 9グリッドで検出された。SD14の埋土直上において土器片が散逸して検出され、その中に線刻土器があることが認められたためSU 2とした。土器片は約1.5mの範囲内に40片前後検出され、土器の表面の向きや破片の並びなどに規律性がなく、廃棄後かなり遺物が動いていると考えられる。なお、土器周辺には炭化物等は検出されなかった。

**SU 3 (図32)** G 10グリッドで検出された。Ⅱ層掘削時において少量の炭化物が検出され、その下から小型壺1個体が出土した。小型壺は口縁部が欠損していたものの、ほぼ正位で検出された。そして、土器の掘り方は確認されずSD14の埋土中にめり込むような状態であり、土器内部の埋土は灰色シルト(基本層序のⅡ a層)の単層であった。なお、SU 3が位置する地点はSD 7内で検出された植物遺体集積(SU22)の直上にあたる。

**SU 4 (図32)** B 11グリッドで検出された。SD15の埋土直上において台付甕の台部が検出され、その南東側の落ち込みの埋土である灰色シルト中より体部破片のほぼ半分が出土した。台部は若干南東側に傾いているもののほぼ正位に据えられていた。体部破片は緩やかな落ち込みの肩部に位置し、大半は内面を上にしてまとめて出土したが、数点のみ台部より南東側に約1m離れた地点から出土した。これらのことからほぼ正位に据えられていた台付甕が南東方向に倒れたのちに、体部破片の半分と口縁部破片は調査区外まで流れ、他の破片は落ち込み内に埋没したと考えられる。なお、SU 4から炭化物などは検出されず、灰色シルトからは須恵器の杯身の口縁部破片が1点出土した。

**SU 6 (図32)** G 55グリッドで検出された。直径28cm、深さ13cmの掘り方内に正位で繩文土器が据えられていた。掘り方の埋土は黒褐色シルトの単層であり、土器底部は掘り込みの底面より約3cm上に位置する。また、土器は底部付近のみ残存していたが大半が小破片に割れており、上半部は欠落していた。なお、掘り方内部と土器周辺から炭化物や焼土は検出されていない。

**SU23(図8)** H 54グリッドで検出された。直径27cm、深さ10cmの掘り方内にSU 6と同様に正位で繩文土器が据えられていた。掘り方の埋土は上下2層に分かれ、上層は灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルト、下層は灰褐色(10YR4/2)砂質シルトであり、土器底部は掘り込みの底面より約6cm上に位置する。また、土器は底部付近が半分程残存していたのみであり他は欠落していた。なお、掘り方内部と土器周

邊から炭化物や焼土は検出されていない。

SU 5(図33) C14グリッドで検出された。97年度の初頭において96年度の試掘トレンチの土層確認を行っていた際に、残りのよい高杯の脚部破片がトレンチの壁に検出された。そして、壁の崩壊により遺物が散逸してしまう可能性が考えられたため、土器を中心に約1.5m四方に拡張区を設定し、掘削した結果検出された遺構である。

遺構検出面であるⅦ層より約10cm程上位のⅡa層中より土師器が出土し、それとともに炭化物もわずかながら検出された。その段階でⅡa層の精査を行ったが上位からの掘り込みは確認できなかった。そして、掘削深度を下げていくにつれ土師器、および炭化物の集積が盛り上がった状態で検出された。

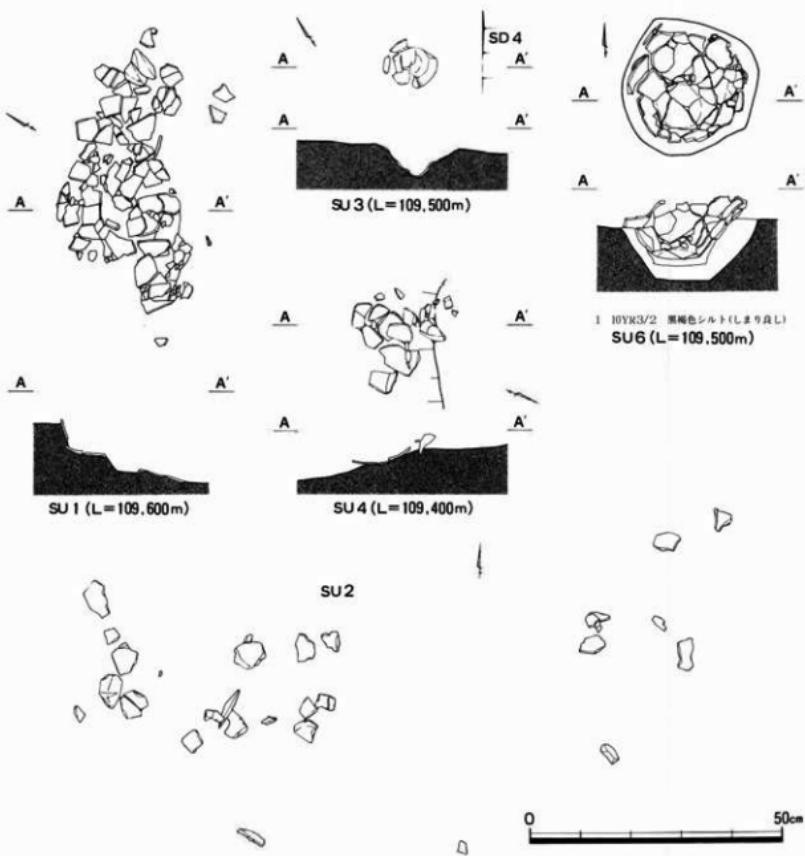


図32 SU 1~4・6 実測図

炭や炭化物はⅧ層直上において東西60cm以上、南北約65cmの範囲内に広がる。そして、土器は大半が炭や炭化物の範囲内から出土した。炭や炭化物は長さ4~5cmの比較的大きな塊もみられたが、大半は小さなブロックや草類が炭化したものであり、材として残存しているものはなかった。土器は検出面において小破片がまとまって検出され、内面を上にしている破片や外面を上にしている破片などがみられたが、底面直上では比較的大きな破片が多く、大半は内面を上にして出土した。壺(77)は体部破片が内面を上にして検出されたが、底部のみ外面を上にして出土した。また、底面直上には高杯の杯部(79)が内面を上にして出土したが、脚部破片はみられなかった。接合できる個体は、破片同士の接合面が比較的近い位置にあることから、完形品が倒れて潰れたような状態で埋没したと考えられる。なお、本遺構は掘り込みが確認されず、土器の覆土は黒色シルトの単層であった。そして、最下層には焼土が約30cmの範囲内に散逸して検出されたが、Ⅷ層直上における土の硬化は確認できなかった。

なお、SU5より東側のⅧ層直上には暗灰色シルトが厚さ2cm程度に薄く堆積しており、その中に炭化物の集積が帶状ないしはブロック状に混在していた。いずれも掘り込みではなく、土器は小破片がわずかに出土した程度であった。そして、SU5の南約3mの箇所にSK2が存在し、その埋土は他の炭化物の堆積と同様であったが、約10cmの掘り込みがあり、底面に表面のみ焦げている木片が出土した。

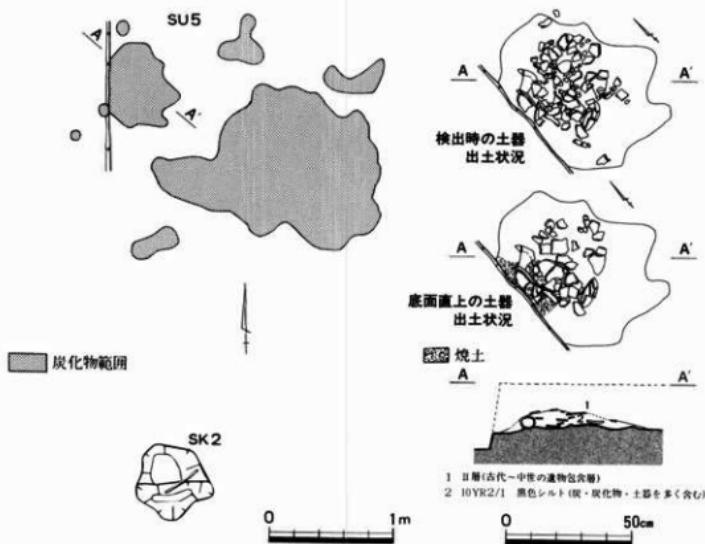


図33 SU5実測図 (L=109,600m)

## 5、溝

**SD 1(図7)** B 7～G 5 グリッドで検出された長さ27.45m、幅約1m、深さ約0.1mの直線的な溝である。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は上下2層に分かれ、上層は褐灰色シルト、下層は褐灰色砂質シルトが堆積していた。遺物は古墳時代の土器の小破片が散在して出土し、遺物集中や炭化物の集積などはみられなかった。

**SD 2・3(図7)** E区北東隅で検出された溝であり、SD 2は直線距離で長さ9.85m、幅0.6～0.9m、深さ約0.1m、SD 3は長さ3.1m、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。溝の断面形態は皿状を呈し、埋土は砂礫を含まない褐灰色シルトの単層であり、土器は1点も出土しなかった。

**SD 4(図34～36)** E区東壁から西壁にかけて検出された幅6.0～12.0m、深さ約0.6mの溝である。溝は底面の標高や遺跡周辺の地形から判断して東から西に向かって水が流れており、埋土はシルトが主体であることからその流れは非常に緩慢であったと想定される。また、調査当初はH 6グリッドからK 10グリッドを結ぶラインから西側のみを調査対象範囲と認識していたが、溝がさらに東側に延びていることが判明したために東側に調査区を拡幅した。

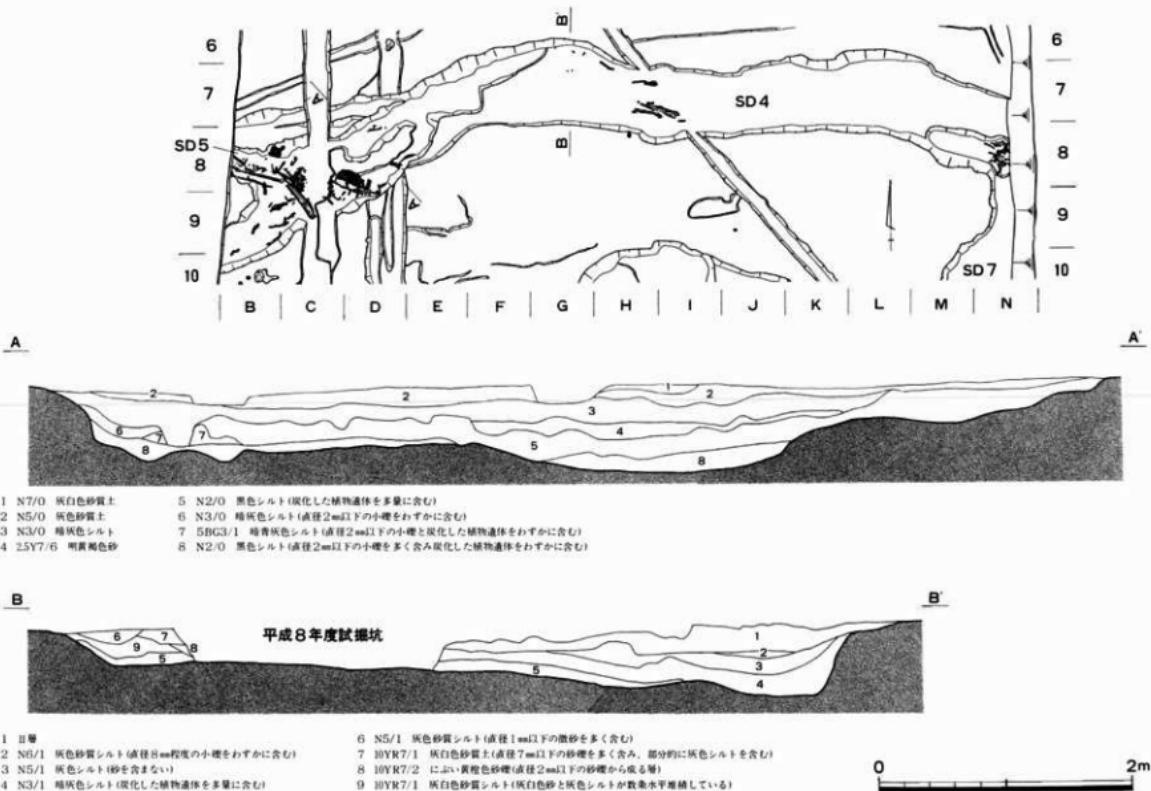
溝の検出面の様相は、B～F列付近とI列以東では溝の検出ラインに沿って黒色シルトが幅10cm程度で帯状に連続して認められ、黒色シルトに挟まれるようにII層が堆積していた。しかし、F～I列付近では黒色シルトがみられず、II層のみの堆積であった。またI～J列付近では、検出ラインに沿う黒色シルト中に直径3～10cm程度の円礫が幾つか認められた。

溝の埋土は基本的にシルトが主体であり、底面にはSD14の埋土である砂礫層が堆積している。埋土中にはどの地点においてもシルトと小礫を含む砂礫層が水平に堆積しており、底面直上に堆積している黒～暗灰色を呈するシルト中には炭化した植物遺体が帶状に数箇確認できた。また溝の断面形態は、I列以東では皿状を呈し、溝の立ち上がりも比較的緩やかであった。しかし、H列以西では一方の立ち上がりは緩やかであるが反対側は急激に落ち込み、明らかに溝の肩を人為的に改変している様相が看取できた。

溝はN列でSD 7と分岐し、それからほぼ真西に向かって約45m延び、F列付近で南西方向に向きを変え、B列付近でSD 5と分岐している。SD 7との分岐点では6本の杭と板材、および拳大の礫が幾つか検出された(図35)。杭は板材の北側に3本、南側に3本それぞれ列状に検出され、その方向は北東から南西を向いている。板材の南側の3本のうち、南西側の杭2本はほぼ直立に遺存していたが北東側の杭は南西側に傾いていた。また、板材の北側の3本の杭は遺存状態が悪く、検出した段階ですぐに抜けてしまいそうであった。さらに板材も本来設置された場所ではないと思われる。拳大の礫は南側の杭列の南に位置し、溝の立ち上がり部に貼り付くように検出されたが、礫の配置はランダムであり溝の底面にも幾つか検出されたことから、これらの礫が人為的なものか否かの判断はできなかった。なお、2列の杭列が調査区外まで延びていると仮定するならば、杭列はSD 4を斜めに横断することになり、その役割はSD 7への導水施設であった可能性が指摘でき、とりあえずSW 1としておく。

また、H～I列付近では長さ1～3mの巨木が底面で検出され、その下流側で杭が5本検出された。杭は溝の北側の立ち上がりに沿って3本、その南側に2本検出され、いずれも底面の礫層に30cm程度に打ち込まれていた。杭が検出された地点は溝が緩やかに北側に湾曲する場所であり、杭は護岸

図34 SD4実測図(1)(L=109.700m)



のために設置されたと想定される。

しかし、水流により崩壊したためか、杭以外の構造物は全く確認できなかった。

SD 4 の底面の標高は東端で約 109.300m、H列付近で約 109.100m、C列付近で 108.700m を測り、最も標高の低い B～D列でしがらみ状遺構が検出された(図36)。しがらみ状遺構は SD 4 の底面に堆積している黒色シルトを除去した段階で検出され、横木 1・2 以外の横木はすべて砂礫に覆われていたことと、東側で SD 4 が掘り込まれている砂層、つまり SD 14 埋土まで入り込むことから、これらは SD 14 に伴うしがらみ状遺構の構築材と認識した。横木 1・2 とそれらに伴う杭から構成される SW 2 は、SD 4 において検出された材のなかで最もレベルが高く、溝底面の砂礫層

直上から 20cm 程度に位置しており、さらに SD 14 の SW 7 の上に作られている。SW 2 は SD 4 の水流に対して約 140° の角度で設置されており、SD 4 から SD 5 へ導水する施設であったことがわかる。そして、SD 5 の埋土は SD 4 と同じ黒色シルトであることから、両者が同時期に存在していたことは明らかであり、さらに SW 2 が黒色シルトに一部埋没していたことから SW 2 は SD 4 が存在している時に機能していたと判断した。なお、SD 4 の底面は標高約 108.700m、SD 5 の底面は標高約 109.000m を測り、その比高差は約 0.2m である。また、横木 1・2 に伴う杭はいずれも直立に打ち込まれており、約 30 本を数える。そして、その大半は横木の南側、つまり下流側に約 20cm 間隔で残存しており、上流側には 3 本程度が確認されたにすぎない。また、杭列のなかには 3ヶ所で 2 本の杭が接するように打ち込まれていることから、ある段階で補修している可能性もある。なお、SW 2 は横木とその背面の杭とで構成されていることから護岸施設である可能性が高く、検出された杭列の長さは 9.50m である。

また、横木 1 の上流側に横木 1 に接してアシやヨシなどの草本類が横木に垂直に敷き詰められたよう検出された(草敷き 2)。これはしがらみ状遺構への水の透過を防止するために設置されたものと想定され、その状態は帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。なお、草敷き 1 は溝の北肩に貼り付くように検出され、付近に杭や横木は確認できなかったことから簡易な護岸施設であったか、あるいは別の場所に設置されていたものが、流されて岸に貼り付いたものと理解した。

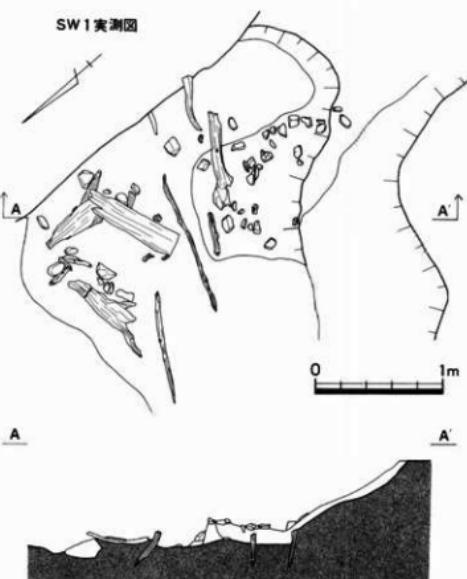


図35 SD 4 実測図(2) (L=110.400m)

出土遺物は溝の検出面から底面までみられたが、平面的にはⅠ列以東においてほとんど出土遺物がなく、全体の出土量は他の溝ほど顕著でなかった(図40)。

須恵器の出土量は極めて少なく出土位置も散在しているが、完形で出土したものや割れても完形に近い形に復元できる個体が多いのが特徴である。そのうち、B 8 グリッドで幾つか離れて出土し

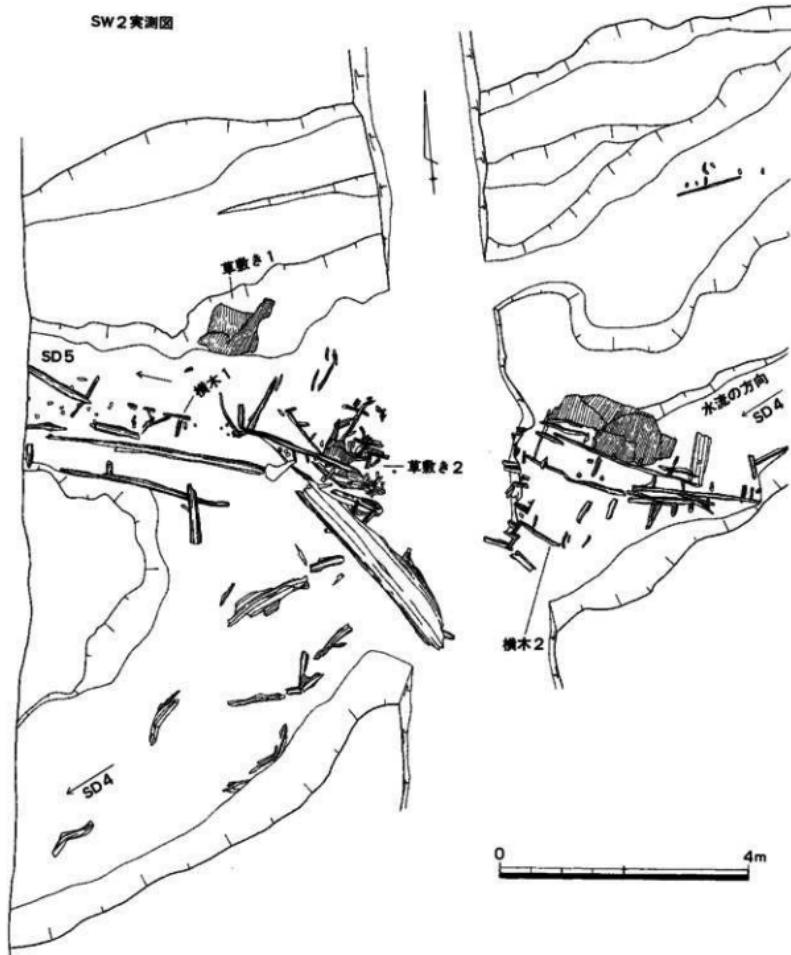


図36 SD 4 実測図(3)

た破片はすべて同一個体に接合できた。また、今回の調査で唯一出土した古墳時代の須恵器の甕の破片はG 7 グリッドから出土している。

土師器はF 6～H 7 グリッドとSW 2周辺にかけてまとめて出土している。しかし、いずれも細片であり図面上で完形に復元できる個体は3個体しかない。また、土師器のく字甕(93)と有孔鉢(94)、鉢(101)の3点と須恵器の高杯蓋(86)1点はSW 2の下流側のB 9～B10グリッドの砂礫層直上において残りのよい状態で出土した(図版23)。それらの出土状況は、く字甕が溝の肩から約2m北の地点で正位で、有孔鉢が溝の左岸の立ち上がり部で底部を上に向けて斜位で、鉢が溝の左岸の立ち上がり部で正位で、高杯蓋が溝の左岸の立ち上がり部で約半分に割れて逆位でそれぞれ出土した。このように、細片の多い出土遺物のうち、比較的残りのよい遺物が1地点でまとめて出土していることには何か意味があるのかもしれない。

木製品は他の溝と比べると出土数が極めて少ないとすることが特徴であり、D 7 グリッドにおいて大足の縦糸が出土した(図版22)こと以外は特に注意すべき点はないように思われる。

**SD 6(図7)** B11～C10グリッドにかけて検出された浅い皿状を呈する溝であり、出土遺物は1点も確認できなかった。図7をみるとSD 9の延長ライン上にSD 6が位置しているようにみえるが、SD 9とは埋土が違うことや底面レベルも約0.6mの比高差があることから、SD 9との関連性は極めて薄いと思われる。

**SD 7(図37～39)** E区東壁からF区西壁にかけて検出された溝である。溝は底面の標高や遺跡周辺の地形から判断して東から西に向かって流れしており、その始まりはSD 4に接している。また、大きく蛇行していることやその埋土がシルト主体であることなどから、水の流れは非常に緩慢であったと想定される。

溝の検出面では、大部分の範囲において溝の検出ラインに沿って黒褐色(黒色)シルトが帶状に連続して認められ、黒褐色シルトに挟まれるように褐灰色シルトが堆積していた。黒褐色シルトは溝の中位ないしは下位レベルまで連続して皿状に堆積しており、検出面において帯状にみえたのはその上端にあたるためである。

溝はテラス部と水流部から成る。テラス部はI 10グリッド付近とH10～H11グリッド付近、C12グリッド付近、J 12～K12グリッド付近の4箇所にみられた。I 10グリッド付近は比較的緩やかな傾斜であり、底面には直径10～15cm程度の無数の円形から椭円形を呈するプランが確認できた。これは、草本類がこの付近に多数自生していた痕跡と思われる。また、H10～H11グリッドとJ 12～K12グリッドのテラス部は方形に突出しており、上面は比較的平坦であった。なお、J 13グリッド以東では浅い溝状の落ち込み(SD 8)がみられたが、この地点も水流によって形成されたテラス部と認識した方がよいのかもしれない。

水流部はJ 13グリッド、H 10グリッドの2箇所でほぼ直角に屈折しながら西に延びており、B12～C12グリッドで北西方向に浅い溝(SD 9)が分岐し調査区外へ延びている。また、水流部の深さと断面形態は、J 12グリッド、E 12グリッド付近では深さが検出面から約0.4mで断面形態が浅い皿状を呈しているが、I 10グリッド付近では溝の北側の立ち上がりが強く、またF区西端付近でも南側の立ち上がりが強くなり、深さはいずれも検出面から約0.9mと深くなる。なお、溝の底面の標高はN 10グリッド付近で109.060m、J 12グリッド付近で109.150m、I 10グリッド付近で108.530

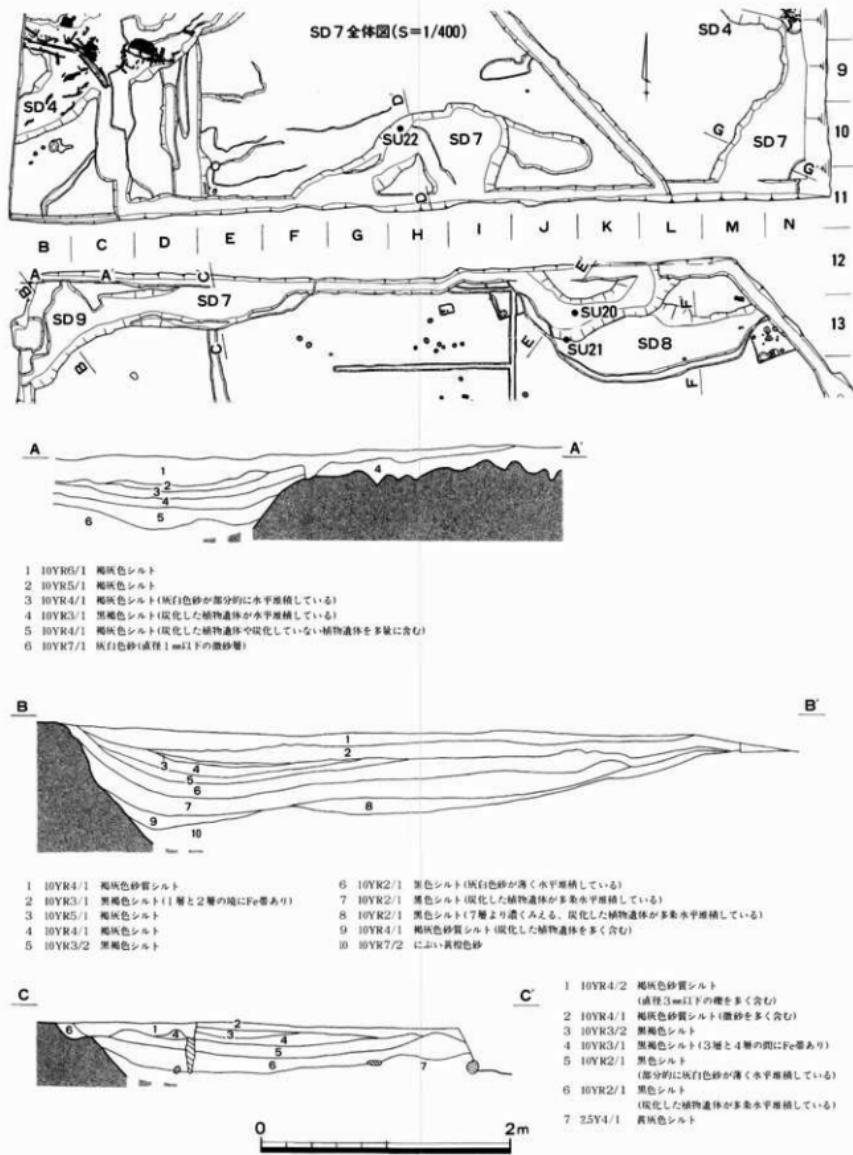


図37 SD7実測図(1) (L=109,300m)

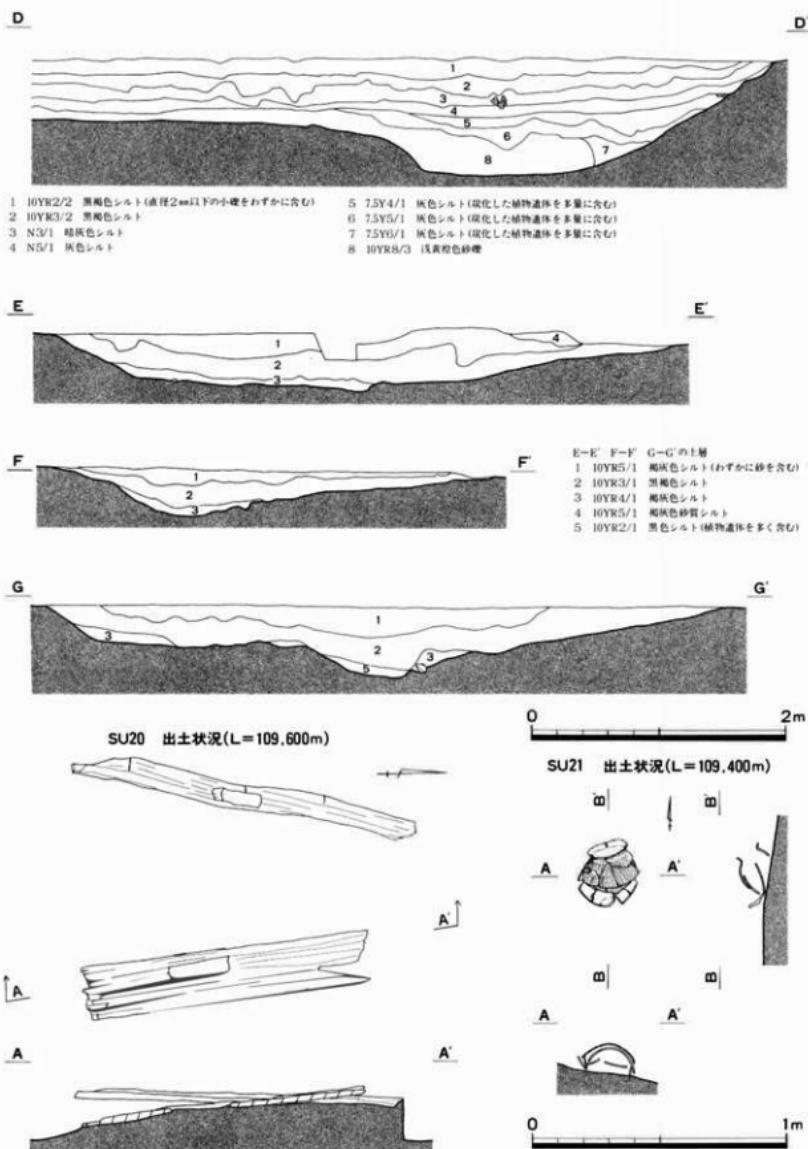


図38 SD 7実測図(2) (セクション図 L=109,700m)

m、E12グリッドで付近108.740m、F区西端付近で108.400mであり、全体的には西側より東側の方が高いといえよう。

溝の埋土は褐色～黒色シルトが上層から下層まで畳状もしくは水平に堆積しており、底面附近にはどの地点でも炭化した植物遺体が確認できた。また、B13～D12グリッドの溝の上位レベル(B-B'ラインの3層)には厚さ1～2mmの炭化した植物が面的に広がっており(図版26)、止水状態下で付近に生えていた草本類が倒れて堆積したものと想定される。溝の底面は、調査区東壁からJ12グリッド付近までは砂層、I11グリッド付近から調査区西壁までは砂礫層であり、B-B' と C-C' ラインの南側に今回の調査で地山とした灰白色シルト(VII層)が確認できた。溝底面の砂層や砂礫層は旧流路であるSD16を覆う埋土であると想定され、SD7はSD16が埋まる最終段階に存在した自然流路を一部人為的に掘削・改変して、溝としたものと考えられる。

遺物は検出面から底面までの各層で出土しており、平面的にはH列以西に多く、I列以東では散逸的に出土する程度であった。また、遺物の取り上げはSD7のすべての地点で対応できる層の把握ができなかったために、遺物の座標と標高のみを記録し、層位は識別しなかった。そして、その分布を須恵器、土師器、木製品に分けてドット化し、図40に示した。

須恵器はC12～D13グリッドにかけて比較的まとまって出土しており、その他の場所からは4点

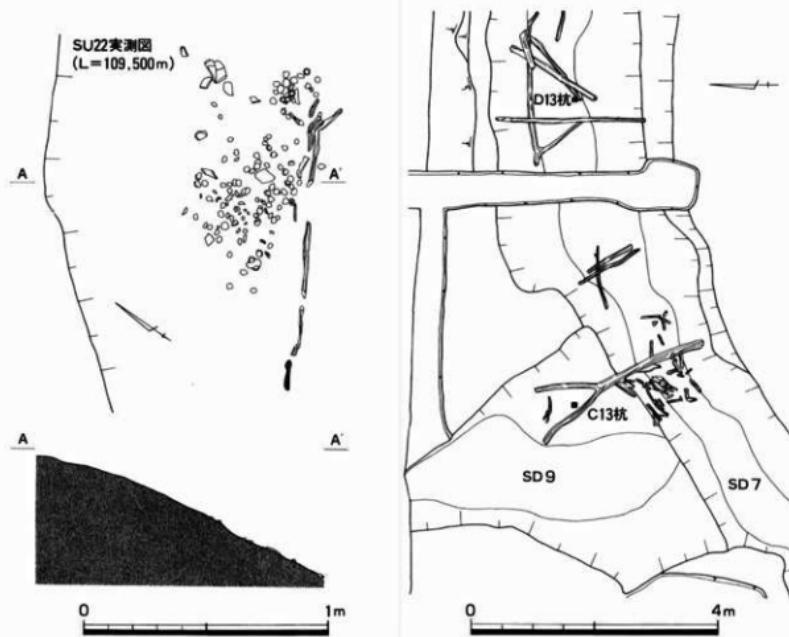


図39 SD 7実測図(3)

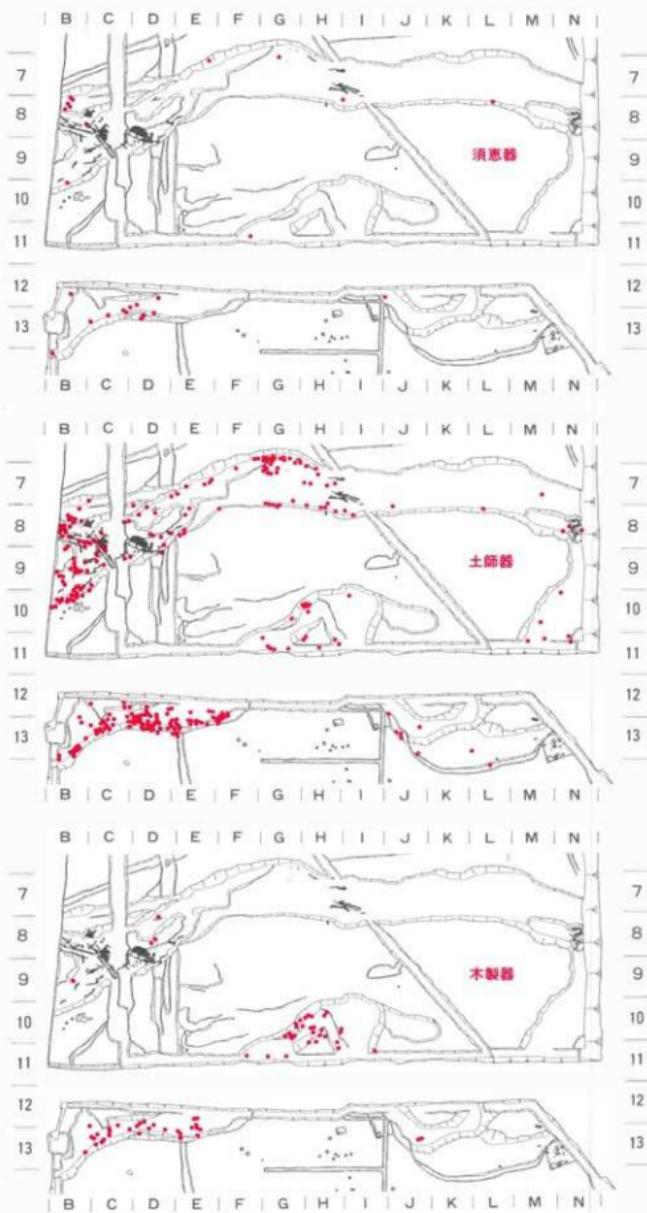


図40 SD 4・7遺物分布図 (S=1/600)

出土したにすぎない。しかし、完形に近い形に復元できる個体が多く、なかには完形のまま出土した個体もあり、廃棄行為を考える上では興味深い資料と思われる。

土師器は須恵器よりは出土量が多いが、須恵器と違い大半が小破片であり、F12グリッド以西を中心にして出土している。また、SD7出土の土師器のうち完形に復元できる個体は、C12グリッドの手捏ね土器(132)、C13グリッドの高杯(125)、J13グリッドのく字甕(112)の3点であり、手捏ね土器と高杯の周囲には別個体の土師器の小破片が存在しており、高杯は溝の肩から崩落したような状態で出土している(図版26)。一方、く字甕は単独で、しかも倒れて潰れたような状態(図版38右下にSU21として図示してある)で出土しており、両者の出土状況に違いがある。

木製品はH10グリッド以西において散在して出土している。そのうち、H10グリッドでナスピ型膝柄広鉢(1)とナスピ型膝柄二又鉢(3)が重なって出土したこと(図版27)やF13グリッドで長さ350cmの建築部材(60)が溝の北側の下端ラインに沿って出土したこと(図版27)、J13グリッドにおいて2枚の建築部材が並んで出土したこと(図版38にSU20として図示してある)などが注目されよう。また、E13杭から西に1.3mの地点とD13杭から西に0.3mの地点、C13杭の地点の3箇所から溝に直交して自然木が3本出土した(図版25)。この3本の自然木は溝の底面に近いレベルで出土しており、その長さは東から順に147cm、243cm、308cmを測る。そして、308cmのものは二又で、その位置はSD7からSD9が派生する分岐点の手前となる(図39)。また、二又の自然木の下流側には短い自然木が幾つか堆積していたが、自然木の上流側と下流側の埋土はいずれも黒色シルトであった。この自然木がSD9への引水などを考慮して据えられたのか否かは判断できないが、少なくとも自然木を固定するような杭などは確認できなかったため、人為的な作用が働いていたとしても極めて簡易的なものであったと考えられる。

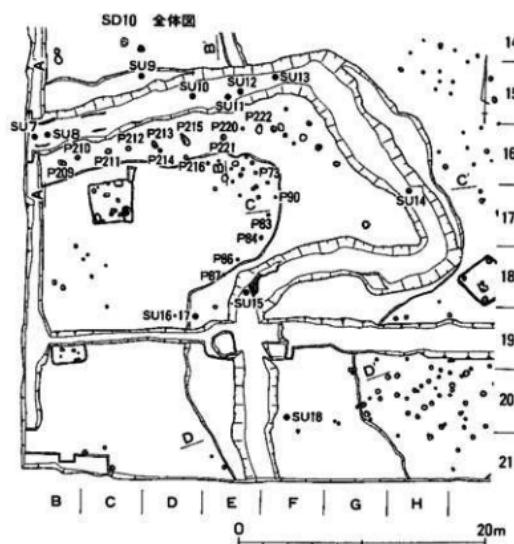
なお、SD7からはH10グリッドとF13グリッドで種子がまとまって出土しており、そのうちH10グリッドの出土状況をSU22として図39左に図示した。SU22は水流部が直角気味に屈折する箇所の北側の肩部で検出された。クルミの種子などが完存、ないしは半分に割れたものが長さ約1m、比高差25cmの範囲内に多数検出され、種子とともに土師器の小破片も幾つか出土した。また、溝のラインに平行するように長さ117cmの細い自然木が検出され、種子の大半はこの自然木の上位レベルに位置していた。なお、SU22の南側には先述した2本の鉢が重なって出土しており(図版27)、SU22の北側には小型壺(実測番号73、出土状況はSU3として図32に示してある)が正位で出土している。

**SD10(図41~48)** F区西壁から南壁にかけて検出された幅7.4~12.5m、深さ約1.2mの溝である。溝は底面の標高や遺跡周辺の地形から判断して南から西に向かって流れおり、大きく蛇行していることや溝の埋土がシルト主体であることなどから、その流れは非常に緩慢であったと想定される。また、今回の調査で検出された溝の配置から、SD10はSD12、SD13と一緒に溝である可能性が高いといえる。

溝の検出面では、溝の検出ラインに沿って黒褐色シルトが帯状に連続して認められ、黒褐色シルトに挟まれるようにⅠ層ないしはⅡb層が堆積していた。黒褐色シルトは溝の中位レベルまで連続して皿状に堆積しており、検出面において帯状にみえたのはその上端にあたるためである。

溝は検出面から深さ5~20cm程度のテラス部と幅3~4m、深さ約1.2mの水流部から成る。テ

ラス部は第15～16列において幅が狭く、F17～G17グリッドやF20～G21グリッドにかけては比較的広い。逆に、E15～E16グリッド、H18グリッドなどではテラス部がみられず、水流部が遺構検出面まで迫り出している。また、第15列を中心テラス部にはピットが幾つか並んで検出された。ピットのうちP209～214、P216、P221は深さがいずれも20cm以上あり、なかにはP212のように深さ50cmを測るピットもあり、柱痕跡が残るものもある。逆にP220やP222以東のテラス部のピットはいずれも深さ15cm以下と浅く、溝の西側ラインに沿って並んで検出されたP73、90などのピットも深さ10cm以下と極めて浅い。一方、水流部は大きく3回屈折しており、その断面形態は皿状、もしくは逆台形を呈する。そして、F15グリッド以西は約24mにわたり直線的に伸びている。溝はテラス部の存在や皿状の断面形態を呈することなどから自然流路と認識した方がよいのかもしれない。しかし自然流路であるならば、直線的な水流の箇所の肩は比較的緩やかになるはずであるが、水流が直線的であるB-B' と D-D' の底面付近の断面形態は逆台



SU10 出土状況

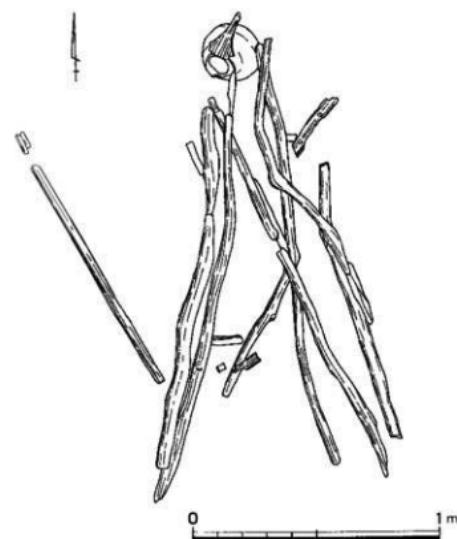
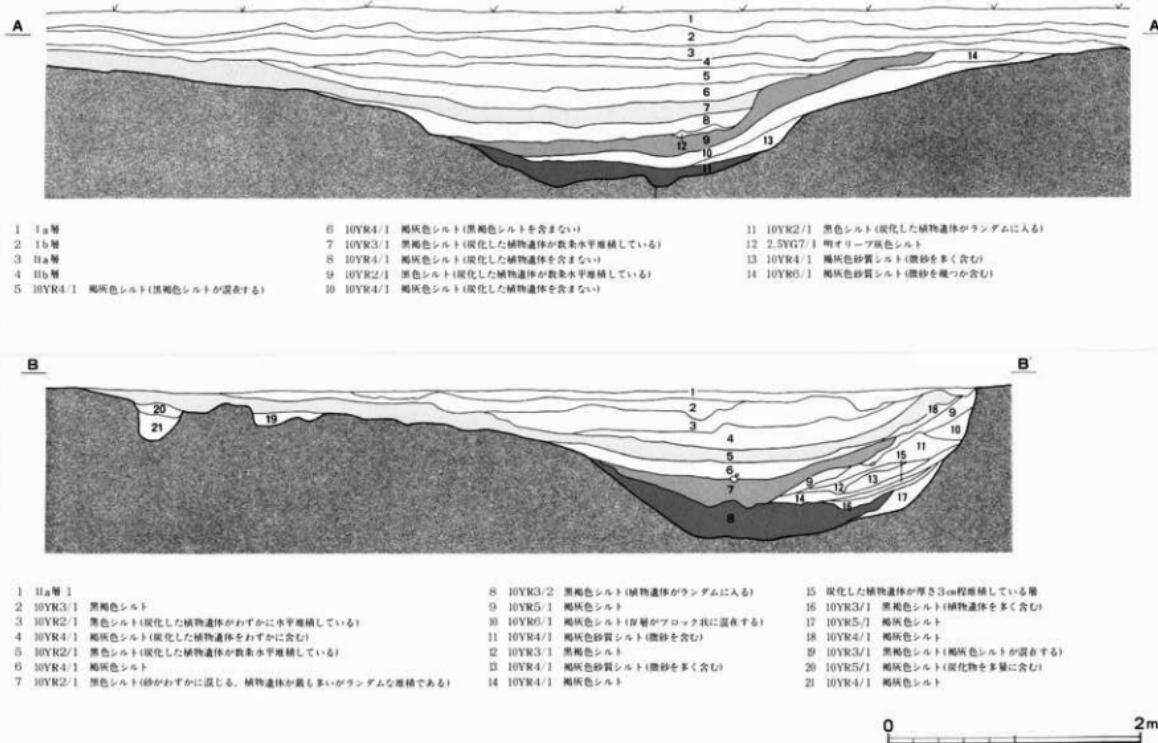
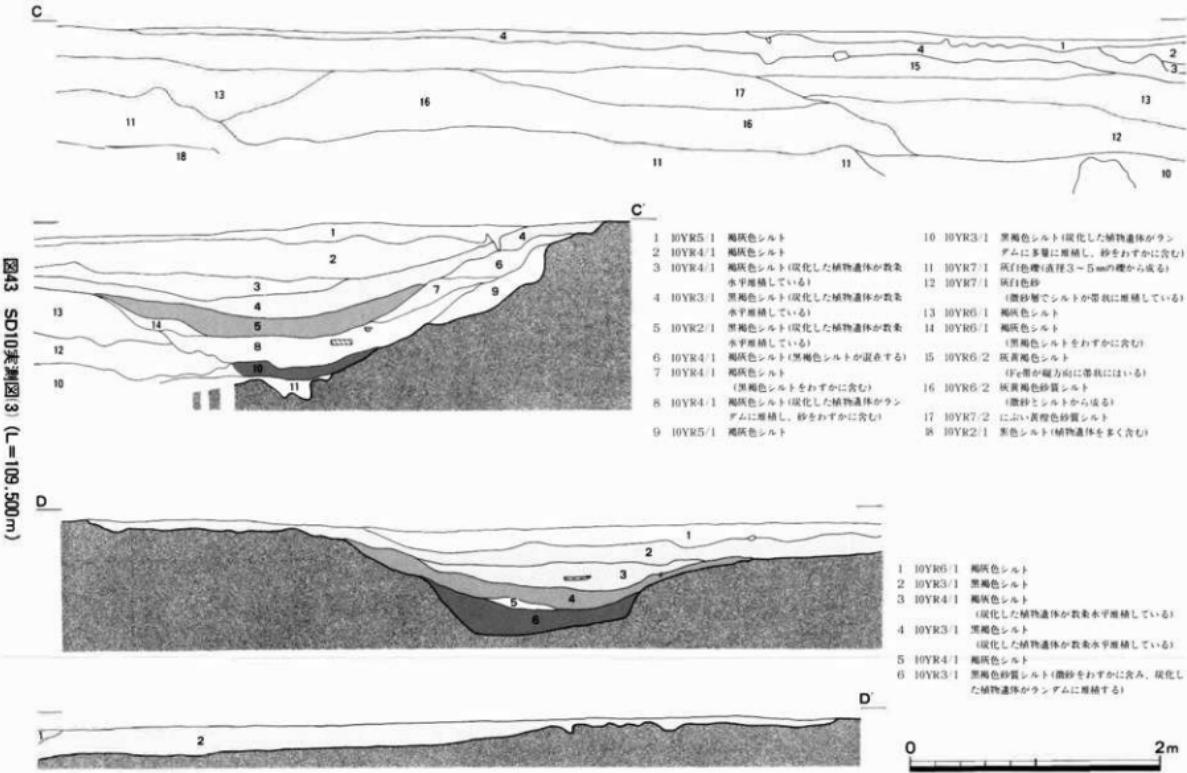


図41 SD10実測図(1)

図42 SD10実測図(2) (L=109,500m)





形に近いため、自然流路の肩部などを人为的に掘削・改変して、溝として機能させていた可能性が高いといえる。

溝の埋土はシルトが主体で、部分的に砂や砂質シルトが入り、底面には砂礫が堆積している。そして、断面図は図41に示したように4ヶ所で作成した。なお、A-A' ~D-D' の4ヶ所で対応する層は大きく3層あり、標高の高い順に第1対応層、第2対応層、第3対応層とし、それぞれの層名とその底面の標高を表1に示した。

第1対応層は検出面から掘削していく段階で、最初に炭化した植物遺体が数条水平堆積していた層を示す。埋土は黒色~黒褐色を呈し、いずれの地点でも溝のテラス部を覆っている土である。また、その底面の標高は108.750m~108.800mと極めて近似していることや炭化した植物遺体が数条水平堆積していたことから、水流はほとんどなく、沼地のような状態であったことが推測できる。また、第1対応層からは土師器や木製品が多量に出土したが、第1対応層より上面には古代~中世の遺物がわずかに含まれていたことから、古墳時代の人々は第1対応層が堆積した前後に本遺跡周辺から離れていったと想定される。

第2対応層は第1対応層より下位において最初にみられた炭化した植物遺体が数条水平ないしはランダムに堆積していた層を示す。B-B' ライン付近以西では第1対応層と第2対応層の間に植物遺体を含まない間層が存在したために、平面掘削の段階である程度層毎の識別が可能であったが、B-B' ライン付近以東では間層がみられなかったことから、第1対応層と第2対応層の平面での識別は困難であった。第2対応層も黒色~黒褐色を呈し、底面の標高も比較的近似しているが、D-D' ラインの標高が最も高く、遺物が最も多く出土したB-B' ライン付近が最も低い。また、埋土中には炭化した植物遺体が部分的にランダムに堆積して砂がわずかに入り込んでいることから、第2対応層が堆積する時期も沼地のような状態であったと思われるが、第1対応層が堆積する時期よりは多少の水の流れがあったと想定される。なお、第2対応層からは第1対応層と同様に土師器と木製品が多量に出土したが、第15・16列を中心に古墳時代の須恵器も幾つか出土している。

第3対応層は底面付近に堆積している黒色~黒褐色を呈するシルトであり、埋土中には植物遺体がランダムに堆積し、第2対応層よりも砂の含量が多いことが特徴である。そのため、第2対応層と比べると水流が停滞する時期が短かったか、緩やかではあるものの絶えず水が流れていた可能性が指摘できる。また、もう一つの特徴として、第3対応層からは須恵器が1点も出土せず、土師器と木製品のみの出土であったことが挙げられる。ところで、第2対応層と第3対応層の間にはD-D' ラインを除いて褐色を呈するシルトや砂質シルトが認められ、特にB-B' ラインにみられるように北ないしは北東からの流れ込みが顕著である。これは、SD14~18を覆う高さ約1.0mの砂がSD16からあふれ出してSD10の一部を埋めた結果であると想定され、SD14~18の出土遺物の中

表1 SD10層位対応表

断面ライン	第1対応層(底面の標高)	第2対応層(底面の標高)	第3対応層(底面の標高)
A-A'	7層 (108.800m)	9層 (108.540m)	11層 (108.380m)
B-B'	5層 (108.780m)	7層 (108.460m)	8層 (108.180m)
C-C'	4層 (108.750m)	5層 (108.580m)	10層 (108.260m)
D-D'	2・3層 (108.800m)	4層 (108.670m)	6層 (108.490m)

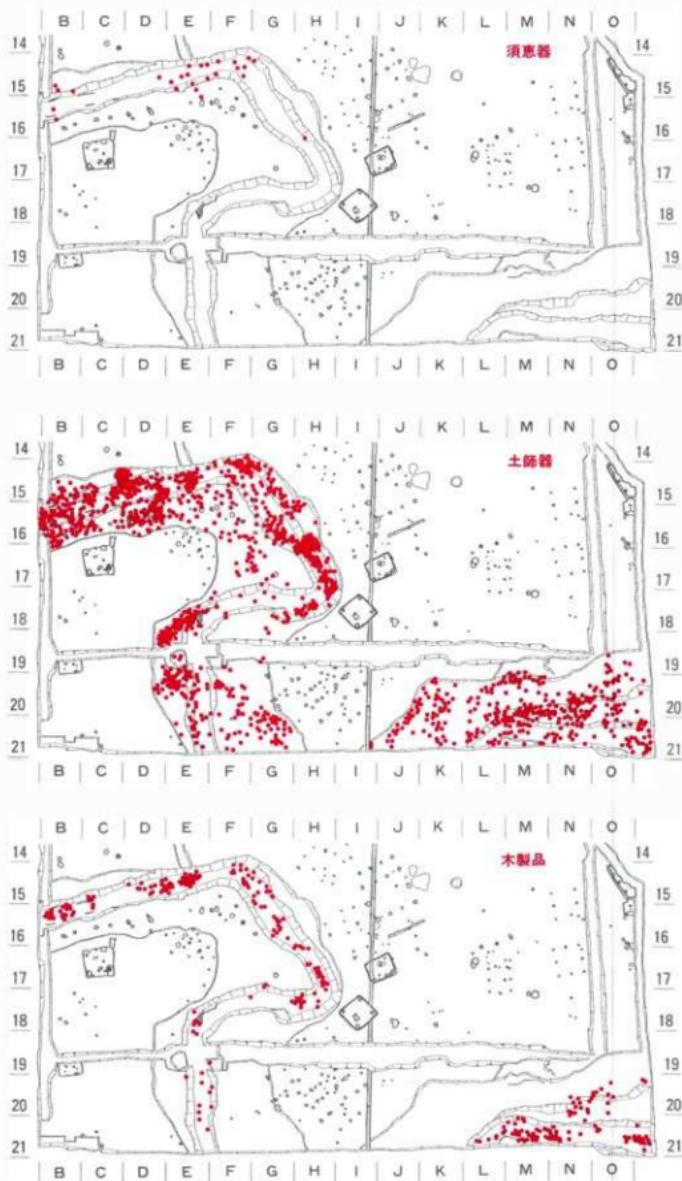


図44 SD10・12遺物分布図 (S=1/600)

に須恵器が含まれない事実から考えても時期的に矛盾はないといえよう。なお、第3対応層直下ではどの地点でも砂礫層がみられ、C-C'ラインにみられるようにSD10形成以前にはかなりの広範囲にわたり旧流路が広がっていたと想定されるが、旧流路の埋土から出土遺物は確認できなかった。

次に出土遺物について述べたい。遺物は溝の検出面から底面までの大半の層で出土しており、平面掘削において層位毎に遺物を取り上げるのは困難であった。そのため、第2対応層の底面を境として上層と下層のみに分けて取り上げた。そして、その分布を須恵器、土師器、木製品に分けてドット化し、図44に示した(なお図44では土師器と木製品は上層と下層を区別していない)。

須恵器はB15～B16グリッド、D16～F15グリッドの2地点で集中して出土しており、他にはH17グリッドで1点出土したのみである。須恵器は完形で出土したものや割れても完形に近い形に復元できる個体が多く、SD2の水流がほとんどない状態であったならば、その廃棄の位置をそのまま反映している可能性が指摘できる。

土師器は須恵器と違い溝全体から出土しており、特にB列～F15グリッド、H17～H18グリッド、E18～D19グリッドの3ヶ所に集中して分布している。水流部の出土状況をみると、B列～E列は水流が直線的であるにもかかわらず全体から出土しており、F15グリッド以南では水流部の屈折部付近に偏る傾向が看取できる。テラス部はB-D列、G16～H16グリッド、E18～D20グリッドの3ヶ所に集中して分布しており、他は極めて希薄である。しかし、G21グリッドに幾つか土師器が分布しているのに対し、G20グリッドからはほとんど出土していない。これは、出土遺物が廃棄後に動いていないと仮定するならば、H21グリッドでSA4が途切れているためそこから土師器を廃棄した可能性も指摘できよう。

木製品は大半が水流部から出土しており、テラス部からの出土は極めて少ない。そして、B16～C16グリッド、D16～E15グリッド、H17～H18グリッドに集中して分布し、G18より上流側の分布が希薄になることは、土師器の分布と類似している。

次に地点毎の遺物出土状況について述べたい。先述したように、SD10からは全面から遺物が出土したが、そのうち12ヶ所(SU7～18)について出土状況の図面を作成した。

**SU7**(図45)はB16グリッドにおいて水流部の上層で検出され、琴柱(50)が出土したために図化した。この付近には植物の根による穴が幾つかあいた流木が数本出土し、琴柱以外には土師器く字甕(294)と須恵器杯蓋A(243)が出土したのみであり、顯著な炭化物の集積などはみられなかった。しかし、SU7付近のみ明オリーブ灰色(2.5YG7/1)シルトが一面に広がっており、それはセクション図A-A'の12層に対応し、SD10内の他の場所では確認できなかった。なお、琴柱は南北方向に横位で、く字甕は口縁部を西に、内面を上に向けて横位で、杯蓋Aは内面を上に向けて逆位で出土した。

**SU8**(図45)はB16グリッドにおいて水流部の上層で検出された箱物である。SU7の東約1.5mに位置し、箱物の接地面の標高はSU7の琴柱とほぼ同じである。箱物は天板と底板はなく側板のみであり、土圧によるためか南北方向に傾いて出土した。また、箱物付近には同一レベルで出土遺物はみられず、箱物内部に堆積していた黒色シルト中にも遺物は確認できなかった。

**SU9**(図45)はC15～D15グリッドにおいてテラス部で検出された、東西約1.5m、南北約1.0mの範囲内に広がる土器群である。溝の検出面から2～3cm掘削した時点で北側に広がる細かい土器片が幾つか検出され、さらに南側に小型壺2個体(306・307)と高杯1個体(315)が出土した。小型壺

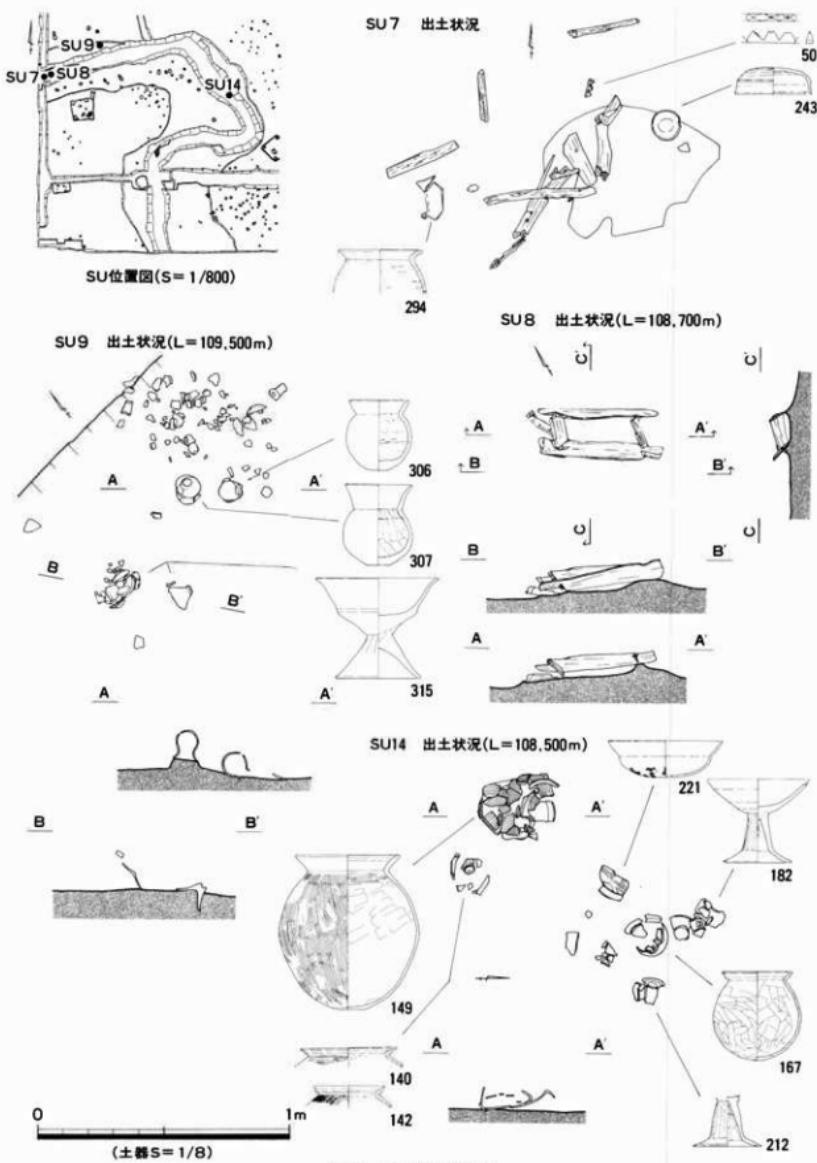


図45 SD10実測図(4)

のうち307はほぼ逆位で出土し、306は口縁部を斜め下に向けて斜位で出土したが、本来は2つとも逆位に据えられていたと想定される。高杯は杯部が逆位気味に出土し、杯部から南東に約30cm離れた場所で脚部が横位で出土した。この高杯は杯部と脚部が大きく開く形態であり、このタイプは今回の調査では1例のみの出土であった。なお、SU9付近に炭化物や焼土は確認できなかった。

**SU10(図41)**はD15～E16グリッドにおいて水流部の第2対応層の底面で検出された。1.0m以上の丸木芯持ち材が水流に対して直交気味に7本以上重なって検出され、その北端に土師器く字甕(268)が口縁部を南西に向けて斜位で出土した。く字甕の内部にはシルトが約半分つまっており、内部の上方は空洞であった。また、出土時の段階では底部付近を欠落していたが、D15グリッドの底部破片と接合し、ほぼ完形に復元できた。なお、く字甕の口縁部に接してナスピ型膝柄鉢(5)がほぼ水平に出土し、く字甕や丸木芯持ち材付近には炭化物はみられなかった。

**SU11(図46)**はE15～E16グリッドにおいて水流部の下層で検出された、東西約2.7m、南北約1.8mの範囲内に広がる土器群である。土器群の西側には直径約1m、長さ約1.8mの大木が、土器群の東側には直径約30cm、長さ約80cmの木が、それぞれ南北方向を向いてほぼ水平に出土した。西側の大木の北側では、く字甕(278)が底部を上に向けて逆位で出土し、北東側では高杯(190)の杯部が内面を上にしてほぼ正位で出土した。東側の木の東では、く字甕(151)が潰れた状態で出土している。また中型の壺(179)は横位でほぼ完形で出土しており、小型壺(224・227)は割れた状態で2個体出土している。他に西側の大木の東側で完形の豎杵(33)が南北方向を向いてほぼ水平に出土している。これらはいずれも黒褐色シルト(第3対応層)の最下層、つまり砂礫層直上から出土しており、出土遺物の周囲にはわずかに炭化物がみられたが、それほど顕著ではなかった。

**SU12(図46)**はE15グリッドにおいて水流部の上層で検出されたSU13と一緒に土器群であり、東西約1.8m、南北約1.0mの範囲内に広がる。水流の方向に平行するように数本の流木があり、その脇に須恵器、土師器、木製品が出土した。須恵器のうち、杯身(251)は完形であり内面を上にして出土し、杯身(248)は流木の下で半分に割れた状態で出土した。また、ナスピ型膝柄鉢がほぼ水平な状態で2個体(2・6)出土している。なお、SU12、SU13とともに第2対応層の底面に位置し、SU12付近にはわずかに炭化物がみられたが、それほど顕著ではなかった。

**SU13(図47)**はE15～F15グリッドにおいて水流部の上層で検出されたSU12と一緒に土器群であり、東西約4.0m、南北約1.5mの範囲内に広がる。出土遺物は第2対応層の底面の両端付近に広く分布しており、底面中央付近には流木の存在が目立った。流木は水流に対して平行なものや垂直なものなど様々であるが、SU11のように流木付近に遺物が集中するという様相はみられなかった。出土遺物のうち、須恵器杯蓋1固体(241)、土師器く字甕2固体(159・283)、有孔鉢1固体(344)は溝の南側からまとめて出土しており、159は体部に焼成前穿孔を有し、その口縁部付近に草食動物(鹿)の歯も出土している(第5章第10節参照)。また、溝の北側の斜面では須恵器の出土が比較的目立ち、そのうち天井部外面に「X」のヘラ記号のある杯蓋(246)は約1.5m離れた場所の破片同士が接合している。

**SU14(図45)**はG17～H17グリッドにおいて水流部の下層で検出された東西約1.0m、南北約1.2mの範囲内に広がる土器群である。水流部のほぼ中央付近の砂礫層直上において、く字甕2個体(149・167)、高杯2個体(182・212)、鉢1個体(221)、S字甕の口縁部片2個体(140・142)などがま

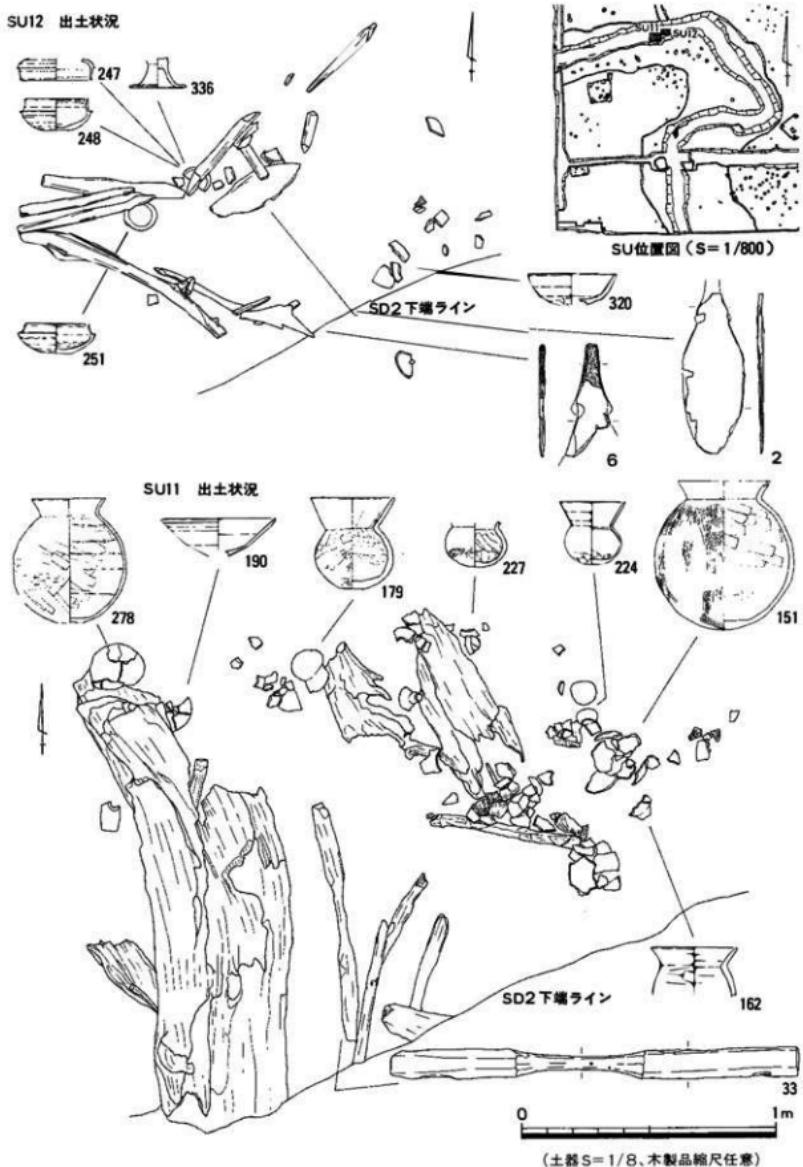


図46 SD10実測図(5)

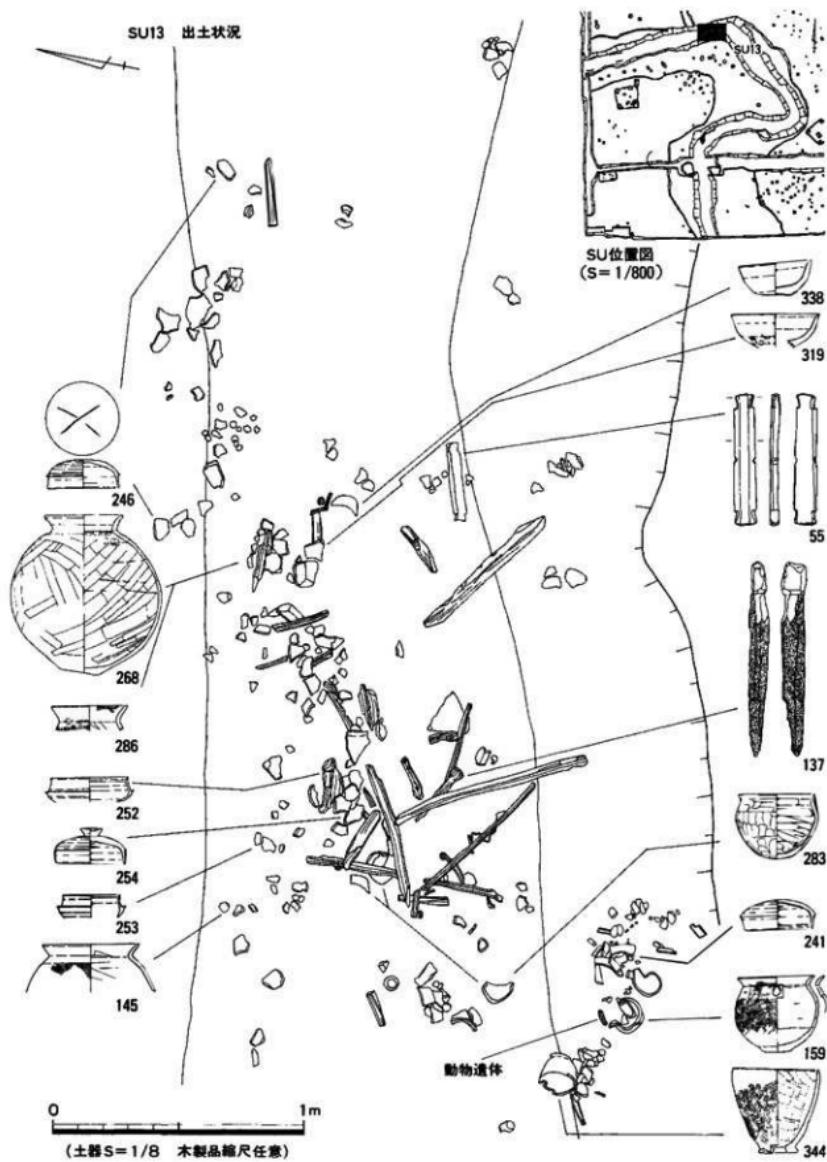


図47 SD10実測図(6)

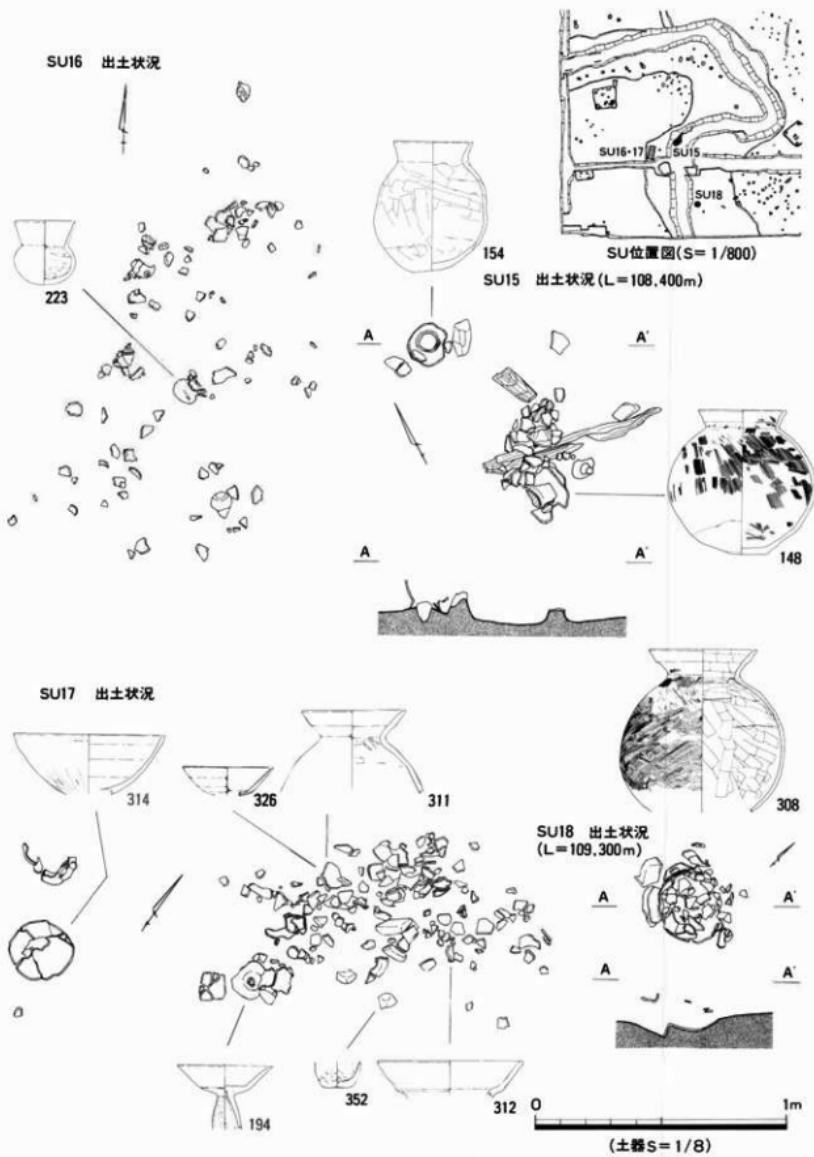


図48 SD10実測図(7)

とまって出土した。149は斜位で、また182と221は逆位で出土し、149の上半部は土圧で潰れたような状態であった。

**SU15(図48)**はE 18グリッドにおいて水流部の下層で検出された東西約0.8m、南北約1.0mの範囲内に広がる土器群であり、水流部が屈折する場所に位置している。SU15からは甕2個体(148・154)と高杯の脚部が出土しており、甕のうち148は細かく割れた破片がまとまった状態で出土した。また、154は体部から口縁部にかけての破片が逆位で出土し、口縁部の中に長さ9cmの卵形を呈するチャートの母岩が入っていた。なお、出土土器はいずれも黒色シルト(第3対応層)から出土しており、付近に顯著な炭化物の集積などはみられなかった。

**SU16(図48)**はD 18～D 19グリッドにおいてSD10の検出面で出土した東西約1.2m、南北約2.0mの範囲内に広がる土器群である。検出面でみられた黒色シルトの帶状の広がり内に土器が散逸して認められ、その中に小型壺2個体が約40cmの間隔をおいて出土し、他に高杯の破片などがみられた。また、SU16付近には顯著な炭化物の集積などはみられなかった。なお、小型壺2個体が並んで出土する事例はSD10内においてSU9、SU11、SU16の3例の他にG 15グリッドのテラス部にもあり(図版37)、何らかの意味があるのかもしれない。

**SU17(図48)**はD 18～D 19グリッドにおいてSU16のほぼ直下から出土した土器群であり、位置的にはSD10のテラス部が屈折する場所にある。土器群は南西側と北東側の2ヶ所に分かれ、南西側では縦方向のハケメが明瞭に残る高杯の杯部(314)がほぼ正位で据えられており、その北側から甕の口縁部破片が出土している。一方、北東側では甕、壺、高杯、小型鉢など様々な器種の破片がまとめて出土しており、土器に混じって円礫も幾つかみられた。なお、SU17の土器が検出された面は北西から南西に向かって傾斜し、その傾斜角は約16度を測り、他のテラス部より急である。

**SU18(図48)**はF 21グリッドにおいてテラス部で検出された、口縁部が完存している二重口縁壺(308)である。口縁部を南西に向けて横位で出土し、底部付近は細かく割れていた。なお、壺の付近に顯著な炭化物の集積などはみられなかった。

その他、SD10内でSUの名称を付した以外の目立った遺物として、B 16グリッドの溝底面の砂礫層直上から出土した完形の豎杵(実測番号32、図版30)、E 18グリッドのテラス部から出土した建築部材(実測番号66、図版37)、F 15グリッドの溝底面の砂礫層直上から出土した膝柄三叉鍬(実測番号11、図版33)、H 18グリッドの溝底面南側の砂礫層直上から出土した完形の有孔鉢(実測番号220、図版37)などが挙げられる。

**SD12(図49)** F区南壁から東壁にかけて検出された幅8.0～12.0m、深さ約0.9mの溝である。先述したようにSD12はSD10、SD13と一連の溝である可能性が高く、その水流は東から西へ向かって流れ、非常に緩慢であったと想定される。

溝の検出面の様相は、M～O列付近では溝の検出ラインに沿って黒褐色シルトが帶状に連続して認められたために溝の検出は比較的容易であったが、I～L列付近では黒褐色シルトがみられずⅡa層が漸移的に濃くなっていく状態であり、溝の検出ラインの線引きが困難であった。

溝は検出面から深さ約20cmのテラス部と幅3m以上、深さ約0.9mの水流部から成る。テラス部はF区南壁から北東方向に延び、K 20グリッド付近で屈折して東に向きを変える。そして、屈折する箇所においてSU19が検出された。また、L 20グリッド以東ではテラス部が2段に分かれている。

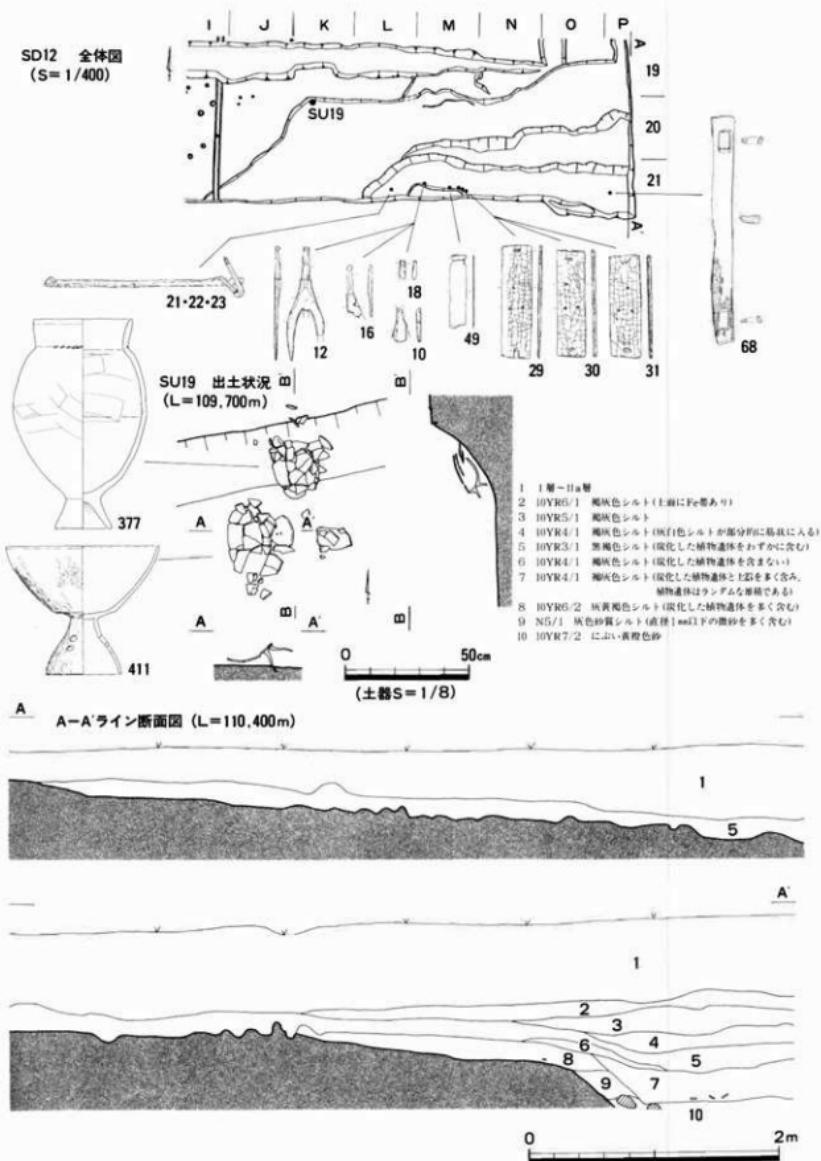


図49 SD12実測図

水流部は南側の立ち上がりが調査区外に位置し、北側の立ち上がりと底面が検出された。そして、その向きはF区東壁からほぼ真西に延び、L21グリッド付近で南北方向に屈曲してSD13につながると想定される。水流部の立ち上がりはどの地点でも直線的であり、その断面形態は逆台形に近い。そのため、SD12もSD10と同様に人為的に掘削・改変されている可能性が高い。

溝の埋土はシルトが主体であり、底面には砂礫層が堆積していた。テラス部を覆う黒褐色シルト(5層)は溝の中位レベルまで連続して皿状に堆積しており、5層直下の7層は土器と木製品を多量に含み、炭化した植物遺体がランダムに堆積していた。そして、7層堆積以前の形成層である8・9層からも土器がわずかに出土した。ところで、SD10における第1対応層はSD12の5層に相当すると想定されるが、第2対応層と第3対応層に相当する層の識別がSD12ではできなかった。これはSD10の第2対応層の識別の目安とした炭化した植物遺体の水平堆積がSD12ではほとんどみられなかつことが大きな理由である。なお、砂礫層直上の標高はSD12が108.780m、SD10のD-D'ラインが108.490mであり、両者の比高差は約30cmを測る。

次に出土遺物について述べたい。遺物は溝の検出面から底面までの大半の層で出土しており、SD10同様、平面掘削において層位毎に遺物を取り上げるのは困難であった。そのため、5・6層より上位レベルの遺物を上層として、下位レベルの遺物を下層として取り上げた。そして、その分布を須恵器、土師器、木製品に分けてドット化し、図44に示した(なお図44では土師器と木製品は上層と下層を区別していない)。

須恵器はN21グリッドにおいて1点のみ出土したにすぎず、その個体も器面が極めて摩滅しているため混入と判断した。

土師器は須恵器と違い溝全体から出土しており、特にM20グリッドを中心とするテラス部上段、M20～M21グリッドを中心とするテラス部下段、O21～P21グリッドを中心とする水流部に集中して分布していた。しかし、SD10と比べると水流部からの土器の出土量は少ないといえる。M20グリッドを中心とするテラス部上段では、東西約4.1m、南北約1.5mの範囲内で土器が出土した。土器は約3cm四方の小破片が多く、大きい破片でも体部の半分や口縁部が3/4程度残存していたにすぎない。また、土器に混在して長さ15～30cm程度の円礫も幾つかみられ、炭化物は全体的に広がっていたが、一箇所に集中してみられるることはなかった。一方、M20～M21グリッドを中心とするテラス部下段(図版42)でもテラス部上段と同様に土器の小破片が主体で、土器に混在して円礫や角礫が幾つかみられたが、炭化した植物遺体はかなり厚く堆積していた。そのうち、柳ヶ坪型壺(403)は口縁部が完存しており、口縁端部を下にして逆位で出土した。また、テラス部の他の土器としてP21グリッドにおいて高杯(413)が出土している(図版41)。高杯は杯部外面に突帯を有する形態で、脚部が若干北に傾いているもののほぼ正位で出土し、杯部は脚付近において土圧で潰れたような状態で検出された。

木製品はSD10と同様に水流部からの出土が大半であるが、N20グリッドのテラス部で幾つか出土したことがSD10との違いである。水流部ではL21～M21グリッドにかけてわずかな高まりが検出され、その高まりの北裾部に木製品が集中して出土した(図49上)。まず泥除付きの鉢(21～23)は5層中程より出土し、その上面から大足の縦枠(38)と棒状木製品(146)が出土していた。泥除付きの鉢は鉢と泥除、柄がセットで検出され(図版2、図版40)、鉢の刃部先端を上にして出土した。

泥除は刃部先端が欠落しており、鍔は柄から抜けかけていて泥除に対してわずかに東に傾いていた。出土時の鍔と泥除と柄の組み合わせ状況は図136のaのような状態であり、柄に対して鍔は約81°、泥除は約109°に傾いていた。また、鍔4個体(10・12・16・18)は砂礫層直上でまとまって出土し、12は刃部を北西に向けていたが、他は西に向けて並んで検出された(図版39)。また、田下駄(29~31)もこの地点からの出土であり(図版40)、約30cmの間隔をおいて29と31が水平に出土し、その下から30が出土している。そして、田下駄とほぼ同じレベルで付札状木製品(49)が出土した。

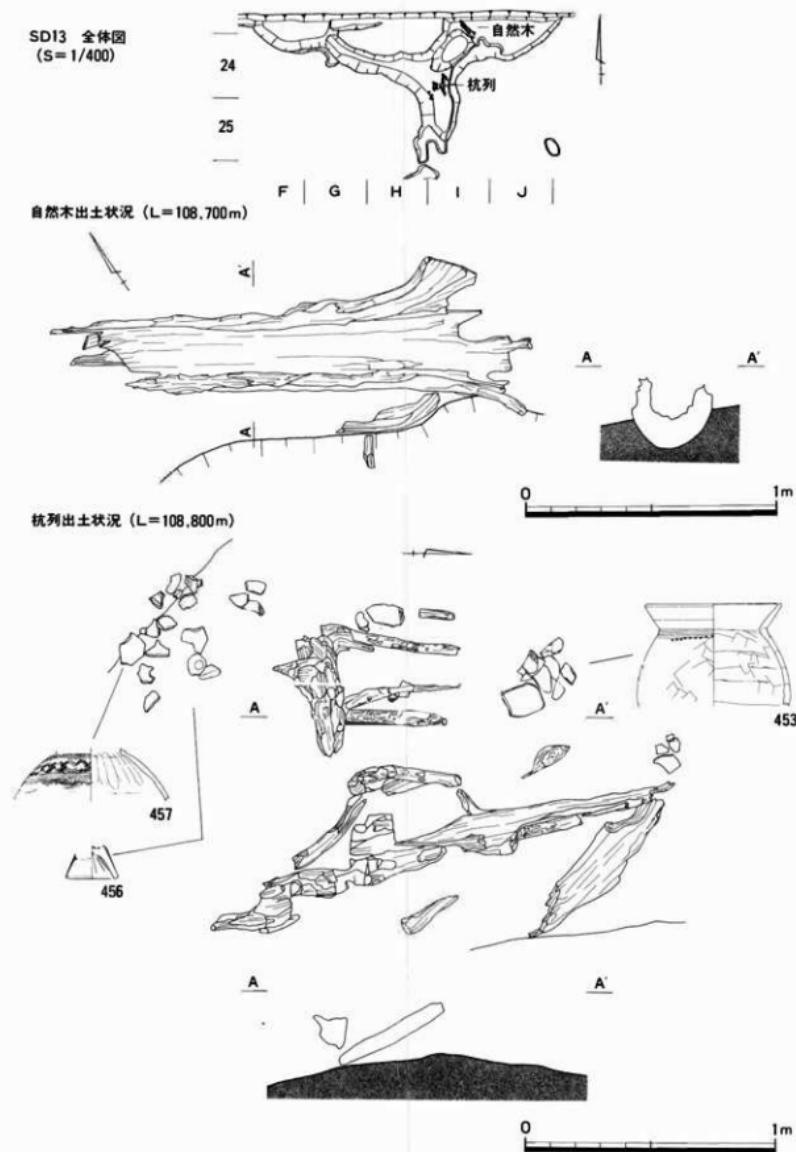
なお、個々の遺物出土状況としてSU19を図化した(図49)。SU19はテラス部が屈折する箇所にあたり、高杯(411)とく字甕(377)が倒れて潰れたような状態で出土した。高杯は西に、く字甕は北に倒れており、本来はこの場所に2つ並んで据えられていたと想定される。なお、付近に焼土や炭化物の集積などはみられなかった。

**SD13(図50)** G区北壁に沿って検出された溝である。先述したようにSD13はSD10、SD12と一緒に溝である可能性が高く、その水流は東から西へ向かって流れ、非常に緩慢であったと想定される。

溝の検出面の様相は、F・G列付近では溝の検出ラインに沿って黒褐色シルトが帯状に連続して認められたために溝の検出は比較的容易であったが、H~J列付近では黒褐色シルトがみられずⅡa層が漸移的に濃くなしていく状態であり、溝の検出ラインの線引きが困難であった。

溝は検出面から深さ約0.4mの中州部と、深さ約0.9mのSD12から連続していると想定される本流部、水流部に流れ込む支流部から成る。SD13内の本流部の位置は、SD10とSD12の水流部の向きとSD13内の溝の配置からF23~G24グリッドの長さ約6.2mの区間だけが相当すると考えられる。そして、その埋土は上層が褐色シルト、下層が炭化した植物遺体を含む黒褐色シルトであり、その断面形態は逆台形状で、底面の標高は約108.500mである。また、灰色シルトで形成される中州部は、G~I列にかけて長さ約8.5mの区間で検出され、中州部を覆っていた褐色シルトからは遺物が出土しなかった。また、中州部の底面の標高は約109.000mである。なお、支流部の底面の標高は北東側(J23グリッド付近)で約108.600m、自然木の南側で約108.100m、杭列が検出された付近で約108.500m、杭列から西に延びる溝で約108.600mである。

支流部では、I23グリッド付近において長さ約190cm、幅約30cmの自然木が水流に直交して検出され、自然木の下流側が大きく抉れて黒褐色シルトが堆積していた。自然木は芯の部分が腐って断面形態が馬蹄形状を呈しており、検出当初は木樋が何かに転用されたものと判断したが、明確な加工痕が全く確認できなかったことから自然木と認定した。一方、溝はI24グリッド付近で南と西北西へ分岐する。そして、南側の溝では6本の杭が東西方向に並んで検出され、付近には土器が散在していた。杭はいずれも杭頭が北に約62°傾いており、溝の底面である砂礫層直上で打ち込んである。また、杭の間隔は10~20cmで、杭に伴う横木や草本類などは確認できなかった。杭付近では東から西へ水が流れていると想定され、杭が水流作用により傾斜したとするならばその傾きが逆となり矛盾が生じる。そのため、杭は後世の土圧などにより北に傾いたか、あるいは杭列が作られる段階ですでに北に傾けて打ち込まれていたと考えられる。また、南側の溝は杭列から4m程南で収束してしまうことや、杭列が南側の溝の入り口を塞いでいることなどから、杭列は分水・取水施設などとは違い、南側の溝の水を清浄化するために落ち葉などの流されてきたゴミを留めるための簡易な施設であった



可能性も考えられよう。なお、杭列付近から出土した土器は、体部外面に横線文と列点文が施されているく字甕(453)や加筋壺(457・458)などであり、時期的にはSD2の第3対応層出土の土器よりやや古いと思われる。なお、杭列は炭化した植物遺体を含む黒褐色シルトより下位レベルの褐灰色シルト中から検出され、褐灰色シルトより下位レベルに黒褐色シルトが確認できなかった。一方、西側に延びる溝は幅約1.5mを測り、G24グリッド付近で本流部と接続している。その埋土は褐灰色シルトの單層で、埋土中からは杭列付近の土器とほぼ同時期の土師器の小片が幾つか出土した。

## 6、自然流路

**NR1(図8)** D56～G57グリッドで検出された自然流路であり、平面形は不定形を呈し、長さは直線距離で約18mを測る。溝の立ち上がりは極めて緩やかであり、底面は水流によるためか凹凸が数ヶ所でみられた。埋土は灰黄褐色砂礫が主体で部分的に灰色シルトが混在しており、遺物は繩文上器と土師器の小破片がわずかに出土したにすぎない。

**NR2(図8・51)** G50～L51グリッドで検出された自然流路であり、その立ち上がり部はL52グリッド付近で直角に近い角度で屈折している。検出面では溝の検出ラインに沿って黒褐色シルトが

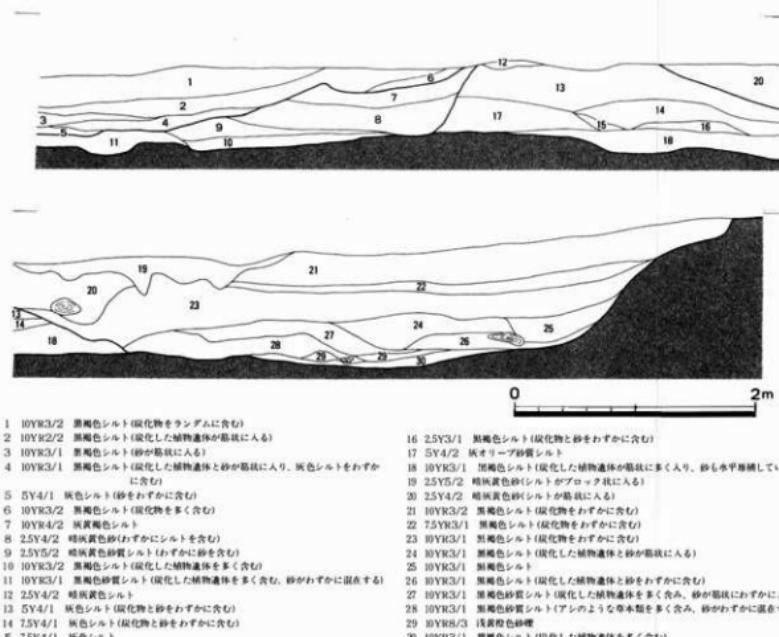


図51 NR2実測図 (L=108,800m)

帯状に連続して認められ、その内側にⅡa層が堆積していた。埋土はシルトと砂礫から成り、数回にわたり水流が変化した痕跡が断面図から読みとれる。まず、最も古い堆積層は図51の12~18層で、その後7~11層の堆積がある。これらはいずれも上層に有機物の包含量が少ない層で、下層に炭化した植物遺体が筋状に多くみられる層がそれぞれ堆積しているという共通点がある。その後の堆積層として1~6層と19~30層の流路があり、いずれも検出面から底面まで炭化した植物遺体を含む黒褐色シルトが主に堆積していることから、両者はほぼ同時期に存在していた可能性もある。なお、NR2からは調査区外縁の排水溝を掘削している時点では遺物は全く出土せず、中央部にトレンチを入れても縄文土器片がわずかに出土したのみであった。

#### 第4節 古墳時代以前の遺構2(E区下層)

##### 1、溝(SD14~18)

E区下層の溝は5条検出され(図52)、SD14・16は東から西に流れる自然流路であり、SD17・18は自然流路間に設けられた人為的な溝である。そして、SD15は自然流路か人為的な溝かの判断ができなかった。SD14~18の埋土のうち灰白色砂(基本層序のⅢ層)は流路外まであふれ出ており、流路の北側ではE区下層で検出された水田の畦畔を覆い、南側ではSD10まで流れ込んでいる可能性が高い。また、SD14~18の最終段階の埋土はSD4とSD7の埋土であり、SD16の南側の立ち上がりがSD1の南端にほぼ対応することになる。これらの溝の堆積状況を図53・54に示した。図53では23~25・27層がSD7の埋土、10~22・26がSD14の埋土、29・47~49がNT1とNT3の埋土、3・30~46層がSD16の埋土であり、SD17の埋土は3層と31層などが対応すると思われるが、溝の南側の肩が崩れているためか定かではない。図54では上段左端がSD7と

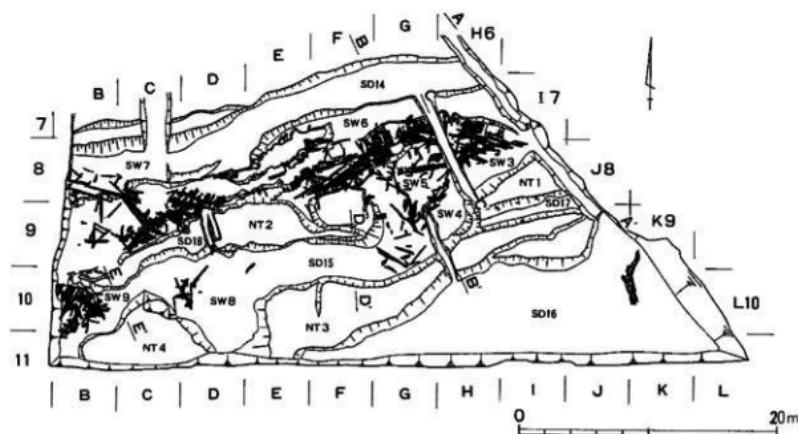
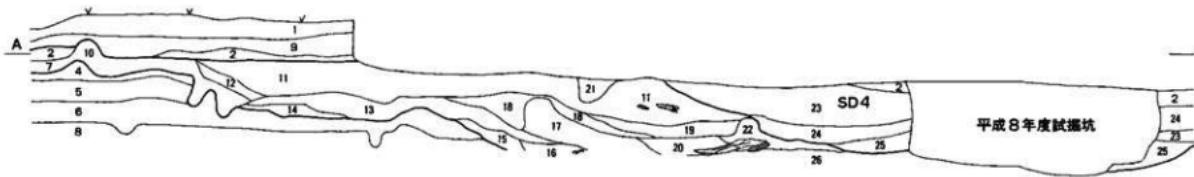


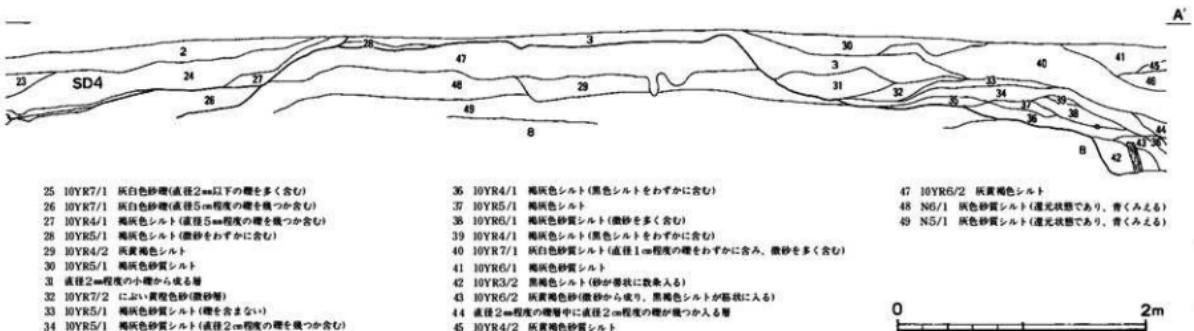
図52 E区下層の溝 全体図

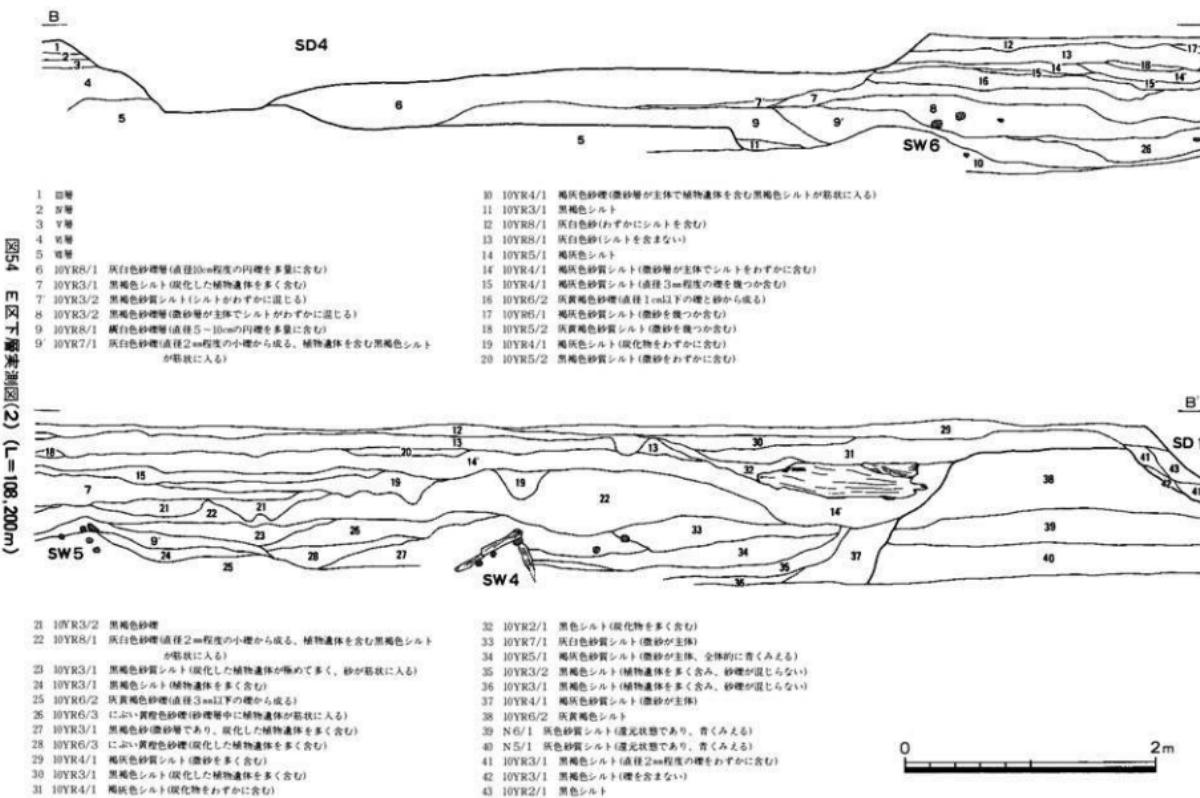


- 図53 E区下層実測図(1) (L=108,000m)
- 1 Ia層
  - 2 IIa層
  - 3 III層
  - 4 IV層
  - 5 V層
  - 6 VI層
  - 7 IOYR8/1 灰白色砂礫(直徑8mm以下の礫を多く含む)
  - 8 寄層
  - 9 I b層
  - 10 IOYR4/1 黑灰色砂質シルト(微砂を多く含む)
  - 11 IOYR6/2 黑灰色砂(微砂)
  - 12 IOYR6/2 黑灰色砂礫(直徑2cm程度の礫を多く含む)

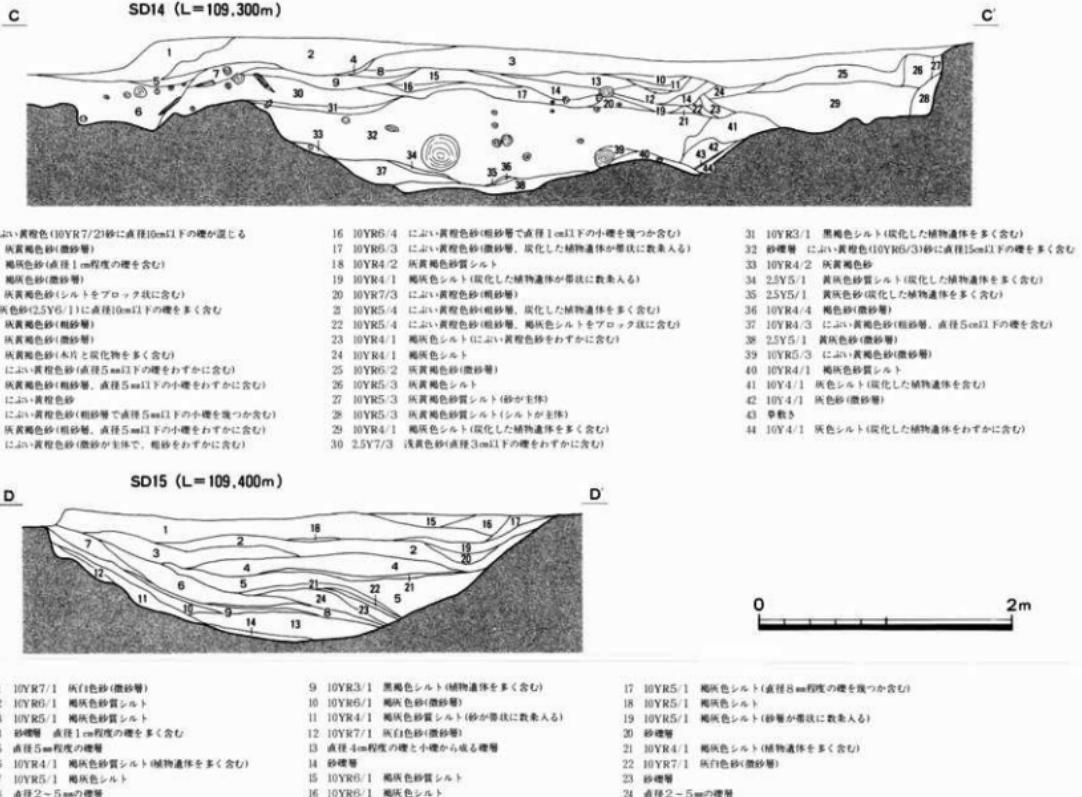
- 13 IOYR7/2 に赤い黒褐色砂(微砂)
- 14 IOYR7/2 に赤い黒褐色砂(直徑5mm以下の礫を幾つか含む)
- 15 IOYR5/1 黑褐色砂(微砂を帯状に含む)
- 16 IOYR5/1 黑褐色砂(直徑2cm以下)の帶を多く含む)
- 17 IOYR7/1 灰白色砂礫(直徑3cm程度の礫と小礫から成る)
- 18 IOYR6/1 黑褐色砂(微砂)
- 19 IOYR2/1 黑色シルト(灰白色砂を帯状に含む)
- 20 IOYR8/1 灰白色砂
- 21 IOYR6/2 黑褐色砂(直徑2mm程度の礫を多く含み、シルトをわずかに含む)
- 22 IOYR2/1 黑色砂質シルト(小礫をわずかに含む)
- 23 IOYR3/1 黑褐色シルト(炭化した植物遺体を帯状に散在含む)
- 24 IOYR4/1 黑褐色シルト(炭化した植物遺体を多く含む)

図53 E区下層実測図(1) (L=108,000m)





SD14・15実測図



SD14の北側の肩になり、下段右端がSD 1の北側の肩となる。また、6~37層がSD14とSD15の埋土であり、両者の切り合い関係は断面では確認できず、38~40層がNT 3を構成する土で、41~43層がSD16の埋土となる。なお、SW 4とSW 5の埋没時の前後関係は判断できないが、SW 6はSW 4・5が埋没してから構築されていることがわかる。

**SD14(図52・55)** E区下層東壁から西壁まで検出された自然流路であり、G 9~H 9グリッド付近でSD15が分岐し、B10グリッドで再び合流している。水はF区の溝と同様に東から西へ流れていたと思われ、流路内にはSW 3・5~7が設置されており、SW 4はSD14とSD15の境付近に位置する。溝の断面形態は浅い皿状を呈し、水田面から溝底面までの比高差は約1.0mを測る。溝の埋土は図55に示したように、砂、砂質シルト、砂礫が主体であり、それらの間に植物遺体を含む黒色シルト層が帯状に堆積していた。しかし、しがらみ状遺構の上流側と下流側では埋土の様相が全く違う地点もあり一樣ではない。なお図55のうち、5・6層はSW 6を覆う埋土、7・9層がSW 3を覆う埋土、32層がSW 5を覆う埋土、42層がSW 4を覆う埋土であり、しがらみ状遺構埋没後に水流による洗掘作用が起こらなかったとしたら、これらの堆積状況からSW 4が最も古く、SW 5、SW 3、SW 6の順番でしがらみ状遺構が設置されたことになる。また、大半の土層が水平に近い状態で堆積しているのに対し、NT 1に接する26~28層はほぼ垂直に層の境が確認できたことからNT 1に沿って護岸施設が存在した可能性も考えられる。なお、SW 4~6とNT 2に囲まれる地点からSD15のG 9グリッドにかけては多くの自然木が溜まっていた。

**SD15(図52・55)** G 9~H 9グリッド付近でSD14から分岐し、B10グリッドで再び合流している溝であり、水は東から西へ流れていると想定される。流路内にはSW 8とSW 9が設置され、SW 8の上流側が南に大きく張り出しており、SW 9により水流の方向が南北方向に変わる。溝の断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約1.0mを測る。溝の肩部上方は垂直気味に立ち上がる箇所が部分的にみられることから、溝がある程度埋まった時点で護岸施設が存在していた可能性も考えられる。溝の埋土は砂と砂質シルト、およびシルトを中心でいずれも皿状に堆積している。

**SD16(図52)** E区南東側で検出された溝であり、溝の南側の肩はSD 7の南側の肩にほぼ対応すると思われる。溝の断面形態は皿状を呈し、その底面レベルはほぼSD15と同じである。SD16内には流木がわずかに確認できたが、しがらみ状遺構などの構築物は認められなかった。しかし、図53に示したように調査区の東端において溝の南肩の底面に杭が確認できたことから、護岸施設が存在していた可能性もある。なお、出土遺物はSD14・15に比べると極めて少ない。

**SD17(図52)** NT 1とNT 3の間の自然堤防上に設けられた人工的な溝であり、長さ8.0m以上、幅約2.0m、深さ約0.4mを測る。溝の断面形態は皿状を呈し、底面の標高はおよそ109.000mでSD15の底面よりも0.6~0.7m程高い。また、底面の立ち上がり付近の南側には直径10~15cm程度の小ビットが1.6~1.8m間隔で4つ検出された。その掘り方はNT 1側に向かって斜めに掘り込まれており(図版45)、深さはいずれも10cm前後であった。そして、同様な小ビットが溝の底面の立ち上がり付近の北側にも1つ検出されている。なお、SD17とSD15が合流する地点は、SD17から水が流れ込んだためか大きく抉れていた。

**SD18(図52・56)** NT 2上に設けられた人工的な溝であり、長さ3.0m、幅約0.5m、深さ約0.4mを測る。SD18はSD14とSD15を結ぶ溝であり、溝の底面の傾斜は北側が高く、南側はSD18

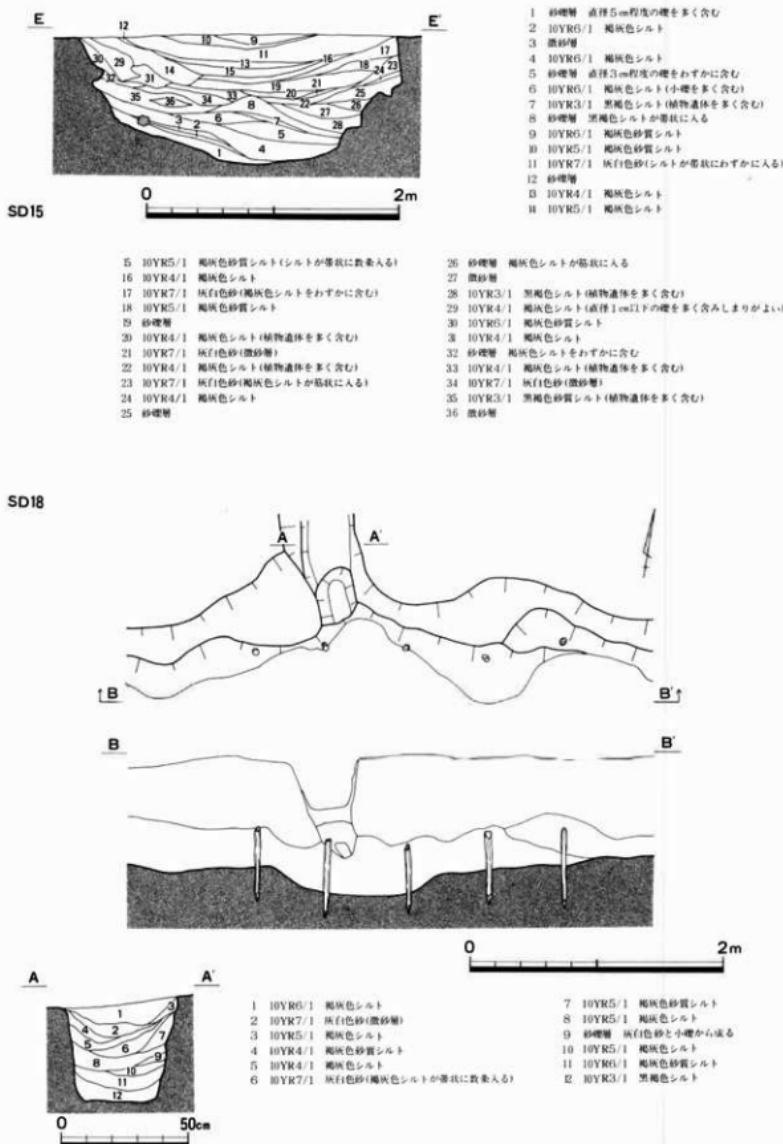


図56 SD15・18実測図 (L=109,100m)

からSD15に水が流れ込んだためか階段状に抉れており、SD15の底面も浅く皿状に凹んでいた。そのためSD18はSW 7の水利調整のために設けられた排水溝と想定できる。そして、SD18とSD15が合流する地点には杭が約0.6m間隔で5本検出された。杭はいずれも地山である灰白色シルト中まで垂直に打ち込まれており、杭の長さは残存部分でいずれも約60cmを測る。なお、SD18の埋土はシルトと砂が皿状に堆積し、底面付近には炭化した植物遺体を含む黒褐色シルトがみられた。

## 2、自然堤防(NT 1～4)(図52)

堤防は4本検出され、堤防内の埋土にはいずれも盛り土などの人为的な堆積がみられなかったことから、すべて自然堤防と判断した。自然堤防の上面の標高はNT 1が約109.500m、NT 2が約109.000m、NT 3が約109.300m、NT 4が108.900mであり、全体的にみると調査区の東側が高く、西側が低い状況である。また、E区下層の水田面の南端の標高は約109.300mであり、水田面より高い自然堤防はNT 1のみとなる。NT 1とNT 3は中央にSD17が通っているために、またNT 3とNT 4もD11グリッドでSD15が張り出しているために名称をわけているが、いずれも本来は一つの堤防であった可能性が高い。またSW 4をNT 1の護岸施設とするならば、NT 1はG 9グリッド付近まで延びていた可能性が高くなる。

## 3、しがらみ状遺構(SW 3～9)

しがらみ状遺構はSD14・15内で合計7箇所で確認された。しがらみ状遺構は数回にわたり改築、改修を行っていると思われる所以、横木のまとまりを1つの単位として「SW 3」「SW 4」と番号を付した。また、各しがらみ状遺構において改築が行われている場合は1段階、2段階とし、各段階毎で改築が行われている場合は「1～1段階、1～2段階」と枝番を付した。

**SW 3(図57～60)** G 7～I 7グリッドにかけて検出されたしがらみ状遺構である。全体的には長さ8.6m、幅3.7mの間に多数の縱杭、縦木、横木によってしがらみ状遺構が構築されており(図57)、最低1回の改築と1回の改修が想定される(図59)。なお、図59の1段階に網代3・4が、2～2段階に網代1・2が伴う。そして、しがらみ状遺構の埋土の堆積状況を図58に示した。

図58のB-B'ラインのうち、杭1は1段階に伴い網代4が前面に貼り付いており、杭2は2～2段階に伴うものである。また埋土のうち、3～8層の砂礫層は約45cmの層厚を測り、杭1の前後と杭2の前面まで堆積していた。また網代4は3～8層中では確認できず、9層以下の埋土内で確認された。そのため、3～8層はSW 3の1段階の構築材を破壊し、その内部を通り抜けた洪水堆積物の可能性が高いといえる。逆に9～11層は1段階のしがらみ状遺構に伴う堆積物であるといえ、砂礫層とシルト層が交互に堆積していた。また、1・2層と13・14層も砂層ないしは砾層とシルト層の互層堆積であるが、これらがしがらみ状遺構構築以前のものか以後のものかは判断できなかった。一方、杭2の背面に堆積している18～24層は大半が灰色シルトであることから、SW 3によって水流が遮断され、SW 3の背面は静水に近い状態であったことが想定される。

また、図58のC-C'ラインは2～2段階の前面に設置された縦杭の前後の堆積状況を示している。杭の前面の下部には砂層が、上部にはシルト～砂質シルトが堆積しており、背面には砂礫層とシルトないしは砂質シルトが交互に堆積している。背面の堆積土は2～2段階のしがらみ状遺構内部の

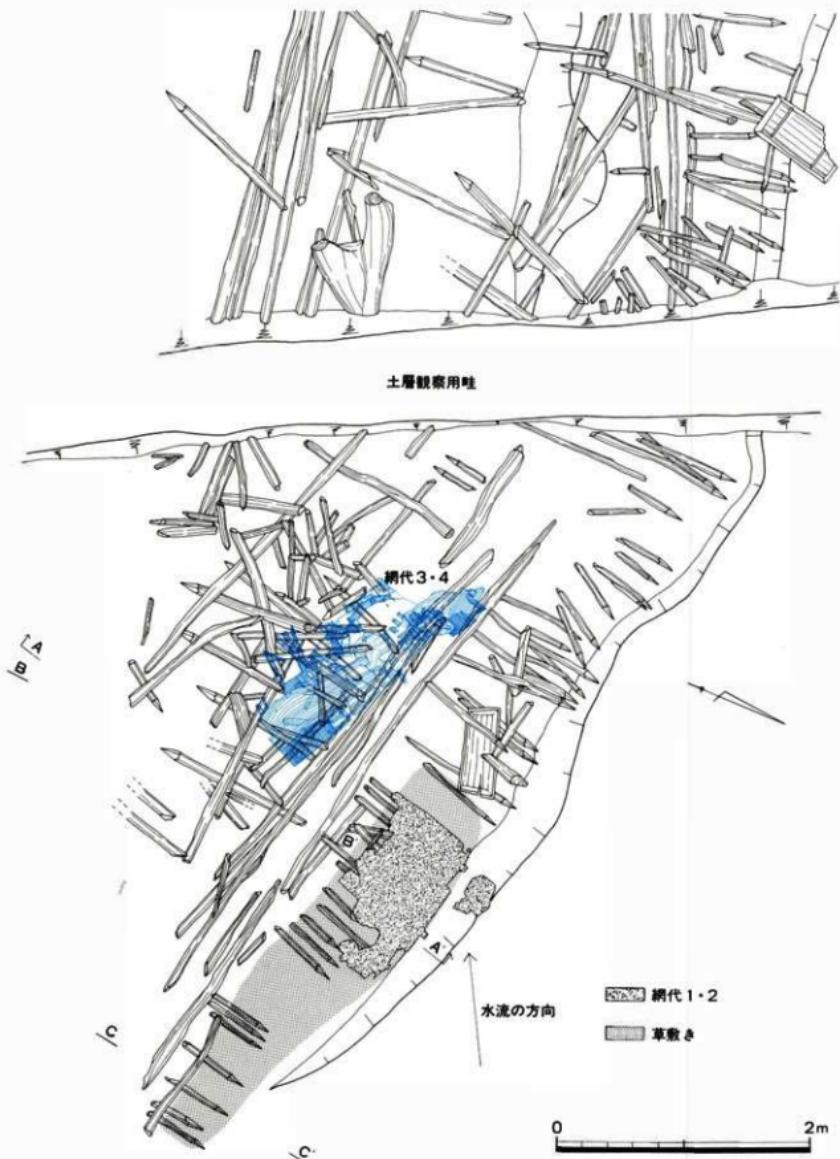


図57 SW3実測図(1)

土となり、そのうち15層と18層はシルトがブロック状に堆積しているようにみえ、人為的に土盛りをした可能性も捨てきれないが、発掘調査中ではすべて自然堆積と判断した。また、縦杭と草敷きの間に堆積している褐灰色砂質シルト(10層)も人為的な盛り土の可能性があるが、発掘調査中では人為堆積か自然堆積かの判断がつかなかった。

なお、図55のうち32層中の横木は1段階、30層中の横木は2—1段階に対応し、30層と32層の間の31層が比較的静水時に堆積することが多い植物遺体を多く含む黒褐色シルトであることから、1段階のしがらみ状遺構が廃絶した後に一定期間をおいて2段階のしがらみ状遺構が構築されたと推定される。

次に各段階毎の材の構築方法を考えたい。1段階ではしがらみ状遺構の前面に網代が2枚確認され、図60に示したように2枚の網代には約13cmの間層があるため、網代4に伴うしがらみ状遺構を1—1段階、網代3に伴うしがらみ状遺構を1—2段階として報告したい。

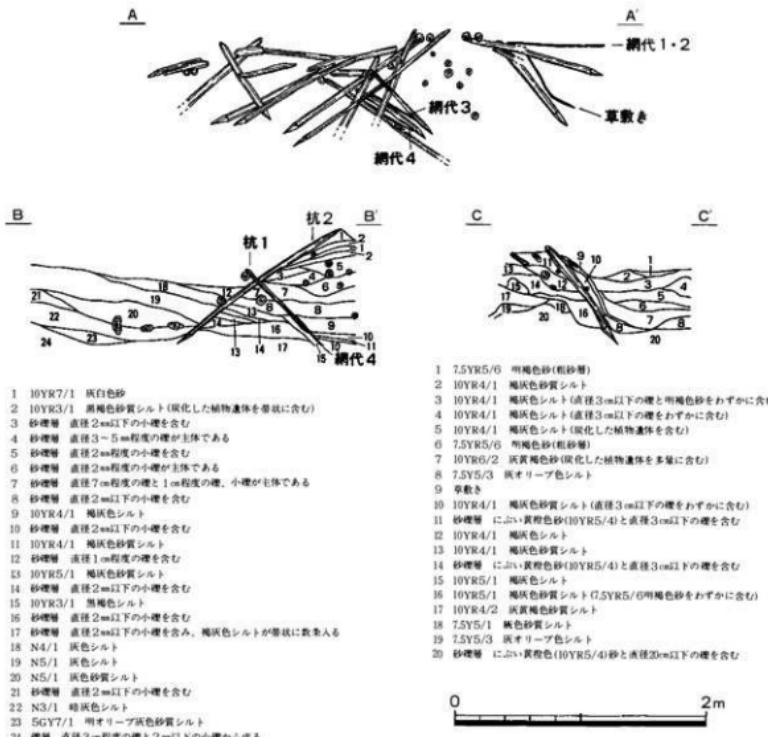


図58 SW3 実測図(2) (L=108,800m)

1-1段階では最低2本の横木とその前面と背面に縦木が数本確認された。横木は直径約5cmを測り、水流の方向に対して約140°の角度で据えられていた。また、縦木は直径3~5cmを測り、前面よりも背面の縦木の方が太かった。そして、前面の縦木は30~45°、背面の縦木は約25°で検出され、横木を中心には組まれている。なお、検出されたしがらみ状遺構基底部の幅は約1.7m、その高さは約0.7mであった。そして、その前面には草敷きと網代が検出された(図60下)。草敷きと網代の重なり具合は、縦木に接して不定方向に敷かれた草本類の上に、縦木に平行するように南北方向に草本類が敷かれ、さらにその上に2本超え、2本潜り、1本送りの綾編みの網代4が重なっている。網代4は長辺約1.0m、短辺約0.7mの範囲内で確認され(図版50)、5~6本の竹の表面を1単位として編んである。また、1単位の幅は平均約4.7cmで、1単位内には竹の節にあたる凸部が端から端まで直線的に並んでいることから、直径1.5cm程度の竹を潰してからそのまま広げて編んだ可能性が指摘できる。なお、編んである材の樹種同定を行ったが、樹種は特定できなかった。しかし、節があることと、1単位の1本1本が短冊状を呈すること、直径を復元すると1.5cm程度になることなどから、草本類でなく竹の方が妥当であると考えた。

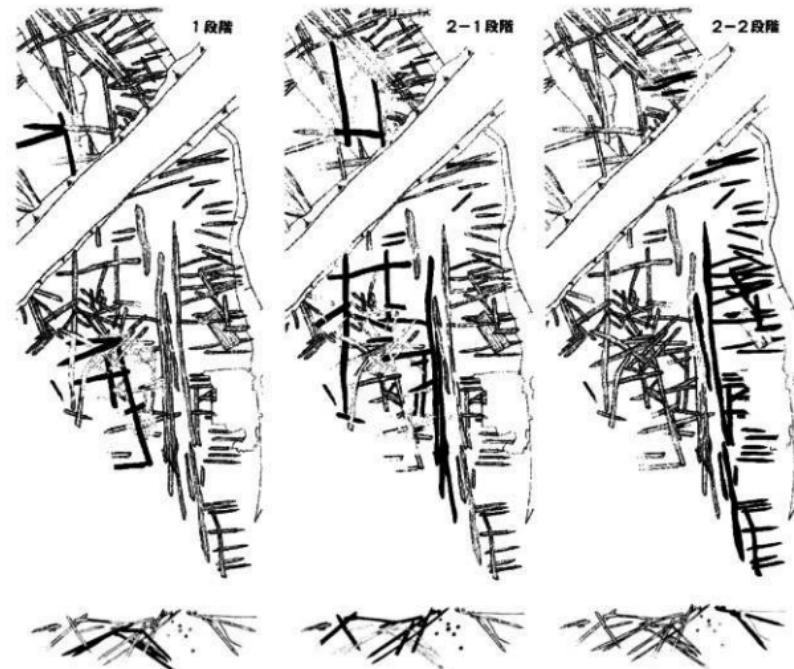


図59 SW3 捕修工程 (S=1/80)

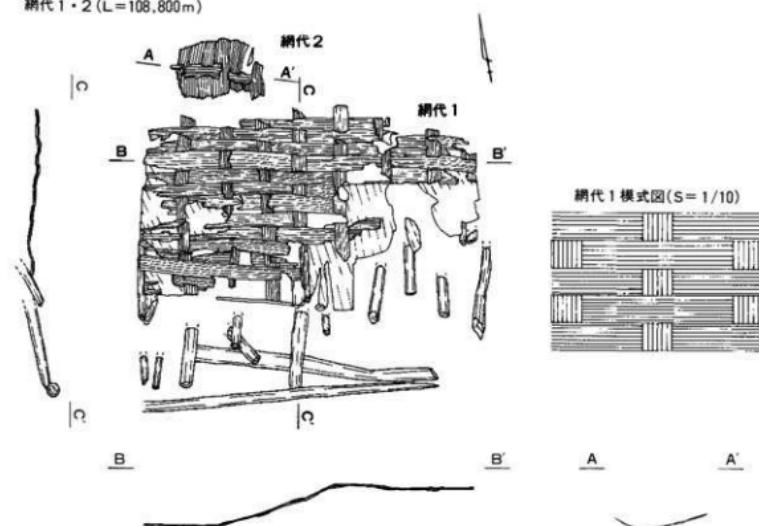
1－2段階に伴う構築材は、網代3に伴う縦木と土層観察の際にみられた横木1本のみを確認した。縦木はいずれも網代4の前面に据えられ、直径約3cmを測り、その角度は約30°で検出された。縦木の前面には、縦木に平行するように南北方向に草本類が敷かれ、その上に東西方向に草本類が敷かれている。草本類は隙間なく密に敷かれており、その状態は帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。そして、その上面の西側で網代3が検出され、東側で南北方向に草本類が敷かれていた。網代3は断片的で遺存状態が悪かったが、1本超え、1本潜りで平縦りと同様の編み方であった。

2－1段階は数本の横木と縦木、縦杭から成る。横木は水流に対して約135°の角度で数本が平行に据えられており、横木間の幅は最大で1.6mを測る。南端と北端の横木の間にはほぼ水平に据えられた数本の縦木と横木が検出され、斜めに打ち込まれた縦木と縦杭が横木を中心に検出された。南端の横木には背面に1本の縦杭と前面に2本の縦杭が検出され、合掌型に組んでいた。そして、背面の縦杭は前面のものより太く、直径8cmで約40°の角度で打ち込まれてあった。一方、北端の横木の背面では、約35°で打ち込まれた縦木と約65°で打ち込まれた縦杭が数本検出された。材の直径は3～5cmとやや細く、縦木のうち長いもので残存長1.4mであった。また、北端の横木より下位レベルで数本の横木が確認された。そのうち4～5本の横木は直線的に並んでいることから、本来は縦木の上に据えられ、縦杭で固定されていたものと想定され、北端の横木を中心に合掌型に組まれていたものと思われる。

2－1段階は南北両端の横木にそれぞれ合掌型に縦木と縦杭が組まれていたと想定され、それは同時期に存在していなかったのかもしれないが、それを積極的に証明する根拠もないと思われる。今回、これらを同時期と捉えた理由は、横木間にみられる水平に据えられた縦木と、横木間が約1.6mであることが、SW7とほぼ同じ様相を示していることにあり、南北両端で縦杭が合掌型に組まれているのはしがらみ状遺構をより強固にするためと判断したからである。そして、これらが同時期のしがらみ状遺構の構築部材であるならば、その基底部は約2.4m、南北両端の外側にあったと想定される縦杭の角度から想定される復元高は約1.3mとなる。なお、1段階と2－1段階の横木の比高差は約25cmで、2－1段階のしがらみ状遺構は1段階のしがらみ状遺構の高まりを利用して再構築されているといえよう。また、2－1段階の横木は西端でSW6の横木の下に位置している。

2－2段階のしがらみ状遺構は2－1段階のしがらみ状遺構の前面にある横木が砂礫で完全に埋没してから、その前面に構築されており、横木と縦杭、多数の縦木から成る。横木は2－1段階の横木とほぼ平行で、しかもほぼ同じ高さで据えられており、横木の前面には長さ約8mの間に最低48本の縦木ないしは縦杭が打ち込まれていた。縦杭・縦木は5～30cm間隔で密に打ち込まれており、縦杭は約40°で、縦木は約15°で打ち込まれていた。また縦木の間には盤が挟まれており、しがらみ状遺構の補強のために転用したと思われる。なお、縦木・縦杭の前面には草敷きと網代1・2が確認された。草敷きはしがらみ状遺構の東端から中程までの長さ約3.6m、幅約0.8mの範囲内で確認され、東側では縦杭に貼り付くように斜位で検出されたのに対し、中程ではほぼ水平であった。草敷きは隙間なく密に並べられ、その方向は縦木に平行するように南北方向に敷かれていた。また、その状態は帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。そして、しがらみ状遺構の中程において草敷きの上に網代1・2が検出された(図60上)。網代1は長辺約1.30m、短辺約0.75mの範

網代1・2 (L=108,800m)



網代1模式図(S=1/10)



網代3・4 (L=108,300m)

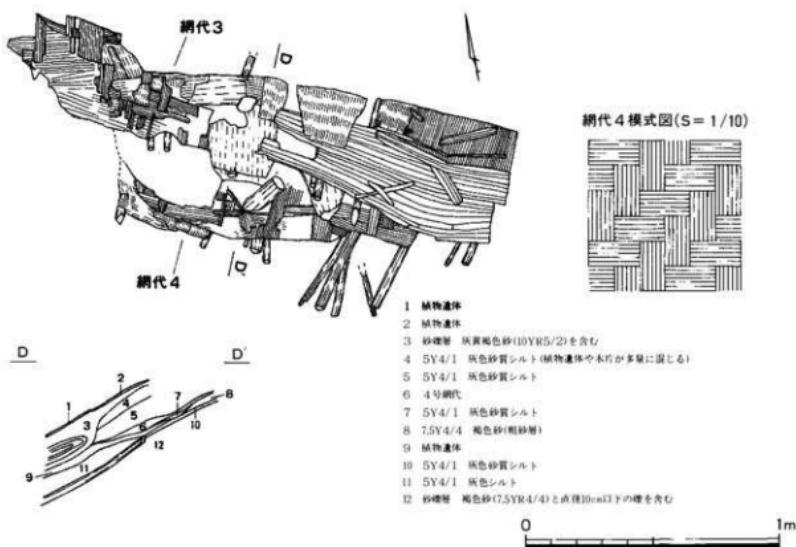


図60 網代1～4実測図

囲内で確認され、南西部分が若干傾斜している以外はほぼ水平に検出された。その編み方は1本超え、1本潜りで平織りと同様であり、東西方向が隙間なく密に編まれるのに対し、南北方向は約12cmの間隔をおいて編まれている。そして、東西方向は5~6本の竹の表面を1単位として編んでおり、1単位の幅は平均約5.5cmを測る。また、南北方向は6~7本の竹の表面を1単位として編んでおり、1単位の幅は平均約6.0cmを測る。東西方向、南北方向ともに網代3と同様に1単位内に竹の節にあたる凸部が端から端まで直線的に並んでいることから、直径1.8cm前後の竹を潰してからそのまま広げて編んだ可能性が指摘できる。また、網代2は網代1の北西端で長さ34cm、幅22cmの範囲内で断片的に検出されたにすぎないが、これも平織りと同様の編み方であった。しかし、遺存状態が悪かったために1単位の幅など詳細は不明であり、網代1と網代2の上下関係も定かでない。なお、網代1・2は掘削を行わず、周囲の杭を含めてすべて取り上げ、保存処理を行った。

**SW4(図61)** G 9~H 8グリッドにかけて検出された護岸施設であり、長さ3.6m、幅約1.2mを測る。護岸施設は最低4本の横木と15本の縦木から成る。横木のうち最も長いものは先端が有頭状に加工しており、長さ2.38mを測る。そして、横木の前面に縦木が約35°の角度で數本据えられ、

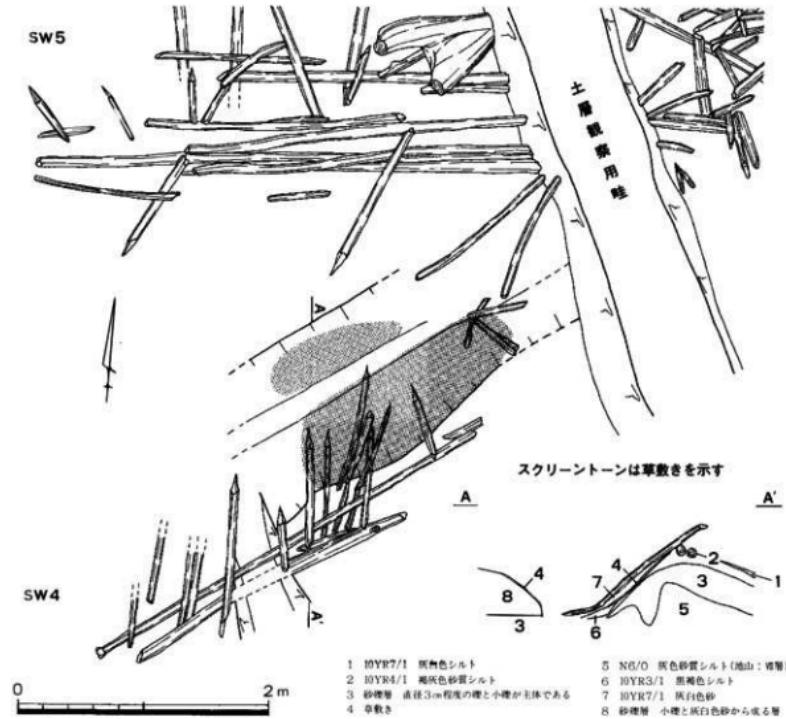


図61 SW4・5実測図 (L=108,700m)

それらの縦木の上に草敷きが確認された。草敷きは2枚重ねられており、下のものは水平方向に並べられ、上のものはそれに直交するように敷かれていた。また、2枚とも隙間がほとんどなく、その状態は帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。そして、草敷きの上に1本の縦木が検出された。この護岸施設は、地山が40cm程隆起している箇所に堆積した砂礫層の上から構築されており、さらに図55の地山の立ち上がりから考えても、護岸施設が存在していた時期にNT1がこの付近まで延びていた可能性が指摘できる。なお護岸施設の前面に、南側に傾斜するように2枚重なった草敷きが確認されたが、草敷きの下が砂礫層であったことから、水流によって護岸施設に伴う草敷きが浮いたものと判断した。また、図55の堆積状況からこの護岸施設はSW5が構築される以前に作られたと想定される。

**SW5(図61)** G8～H8グリッドにかけて検出されたしがらみ状遺構であり、構築材の大半は砂礫層に覆われていた(図55)。しがらみ状遺構は長さ約5.6m、幅約1.2mを測り、最低8本の横木と数本の縦杭から成る。横木は水流に対して155°前後の角度で据えられており、長さ2.5m以上のものが近接して検出された。そして、横木の前面には最低3本の縦杭、背面には最低2本の縦杭が横木を頂点として合掌型に組んでおり、前面のものは約30°、背面のものは約65°で打ち込まれている。SW5の構築材のうち、最も高い位置にある横木の標高はSW3－1段階の横木より低く、全体のしがらみ状遺構の配置から考えてもSW5はSW3の構築以前に存在していた可能性が高いと想定される。

**SW6(図62～67)** G7～I7グリッドにかけて検出されたしがらみ状遺構である。全体的には長さ16.4m、幅4.8mの間に多数の縦杭、縦木、横木によってしがらみ状遺構が構築されており(図62)、最低3回の改築が想定される(図66)。なお、図66の3段階に網代5・6が伴い、しがらみ状遺構の埋土の堆積状況を図64・65に示した。

図64のA-A'ラインはSW6－2段階のしがらみ状遺構内部と背面の堆積状況を示している。縦杭の先端付近にほぼ垂直に補助杭が打ち込まれており、補助杭の前面では砂礫とシルトが互層堆積しており、背面では灰色シルトのみが確認された。これにより、SW6－2段階は自然堆積物の上に構築されており、その背面はSW6によって水流が遮断されたために、静水に近い状態であったことが想定される。

図65のB-B'ラインはSW6－2段階のしがらみ状遺構内部の堆積状況を示している。しがらみ状遺構内部の中央付近より前面では砂礫層(8～12層)が約40cmも堆積しているが、その背面は灰色シルト(18・19層)のみであり、両者の境はほぼ垂直に線が引けた(図版53)。また、この砂礫と灰色シルトの境の下部には灰白色シルトがブロック状に入り込む23層がみられた。なお、8層および18層の上位レベルではシルトと砂礫層が互層堆積しており、その上にSW6－2段階が構築されていた。

砂礫層(8～12層)と灰色シルト(18・19層)の関係はA-A'ラインでみられたしがらみ状遺構内部と背面の堆積状況と類似している。また、今回の調査で検出された自然堆積層中にはシルトがブロック状に入ることはほとんどないが、23層中には確認され、さらに23層はほぼ垂直に貼り付くように検出されていることから明らかに人為堆積物といえる。これらのことから、砂礫層と灰色シルトの境には人工施設(護岸施設か?)が存在していたと思われ、その時期はSW6－2段階よりも前の1段階である可能性が高いといえよう。しかし、B-B'ライン付近にあるSW6－1段階の縦杭先端の標高は

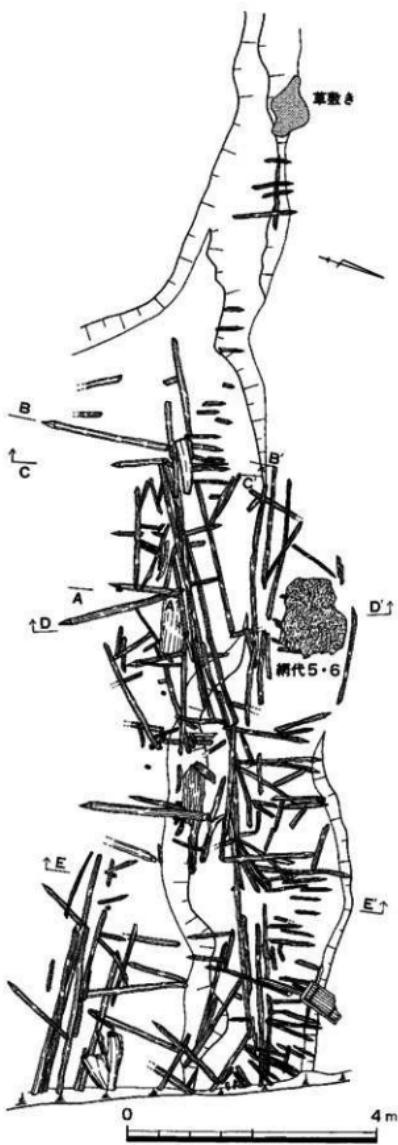


図62 SW6 全体図

図65のC-C'ラインで示したように108.300~108.400mであり、B-B'ラインの23層の上端の標高が約108.100mであることから両者に開きがある。一方、図65のE-E'ではSW6-1段階の縦杭の先端が108.200m前後とやや低くレベルまで打ち込まれているが、それでも疑問は残る。そのため、明確な時期比定は困難であるが、SW6ではしがらみ状遺構の改築が3段階しか想定できなかったので、とりあえず1段階に伴うものと認識しておきたい。

次に各段階毎の材の構築方法を考えたい。1段階では縦杭のみが10本検出されたにすぎず、中央付近では1本も確認できなかった。西側では40~60cm間隔で約60°の角度で検出されたのに対し、東側では間隔が不規則で、ほぼ垂直に打ち込まれていた。なお、当初はこれらの縦杭が2段階か3段階に伴う補助杭と認識していたが、杭が直線的に並び、その方向が2・3段階と合致せず、SW5の横木の延長ライン上に位置することから、2・3段階とは違う時期の人工施設であると判断した。そして、しがらみ状遺構の構築部材に転用された扉とその上位レベルに位置する2段階の横木との間に砂礫が15~20cm堆積していることとB-B'ラインの土の堆積状況からみても2段階以前に人工施設が存在していた可能性が指摘できるため、これらをSW5と同時期、つまり2・3段階より前に存在した人工施設と判断した。

2段階では10本程の横木と20本程の縦杭・縦木から成る。横木は数本まとめて水平に検出され、その西端はNT2の上面付近まで延びており、横木間の最大幅は0.9mを測る。横木の前面の縦杭は西側で8本検出された。杭の長さは約50cm、その角度は約15°、その間隔は20~40cmで比較的密に検出され

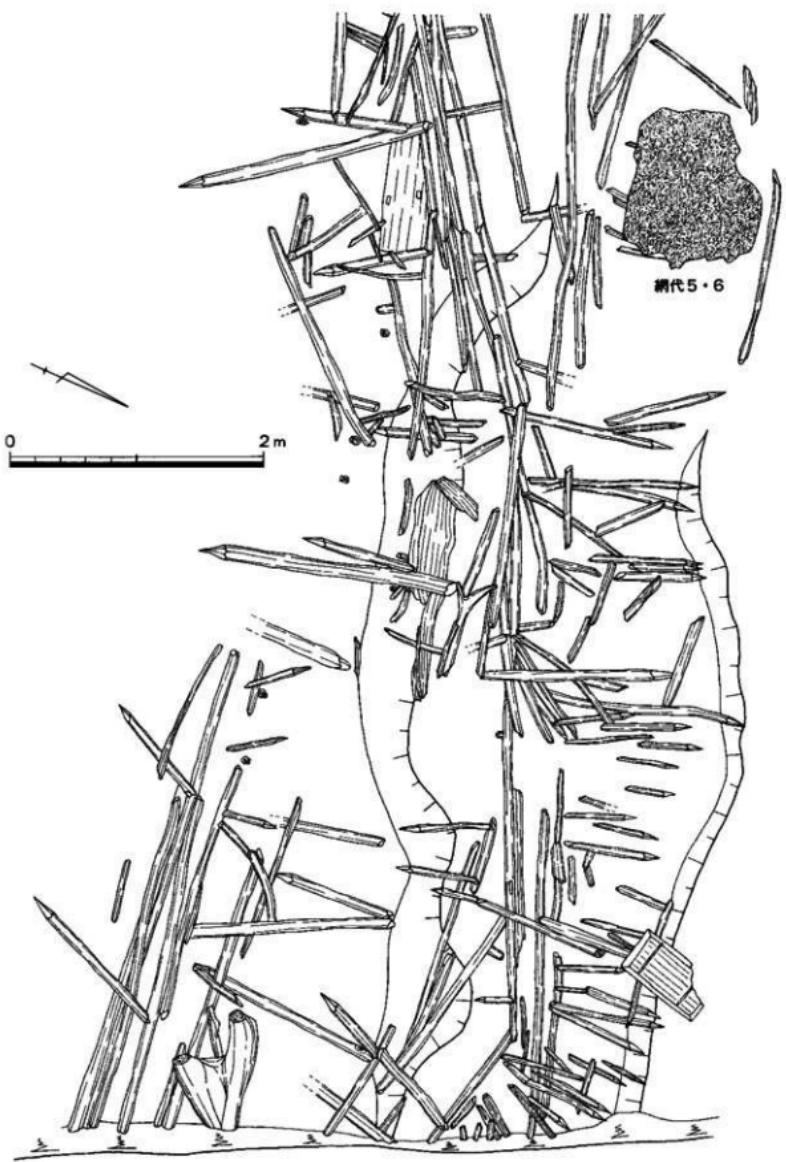
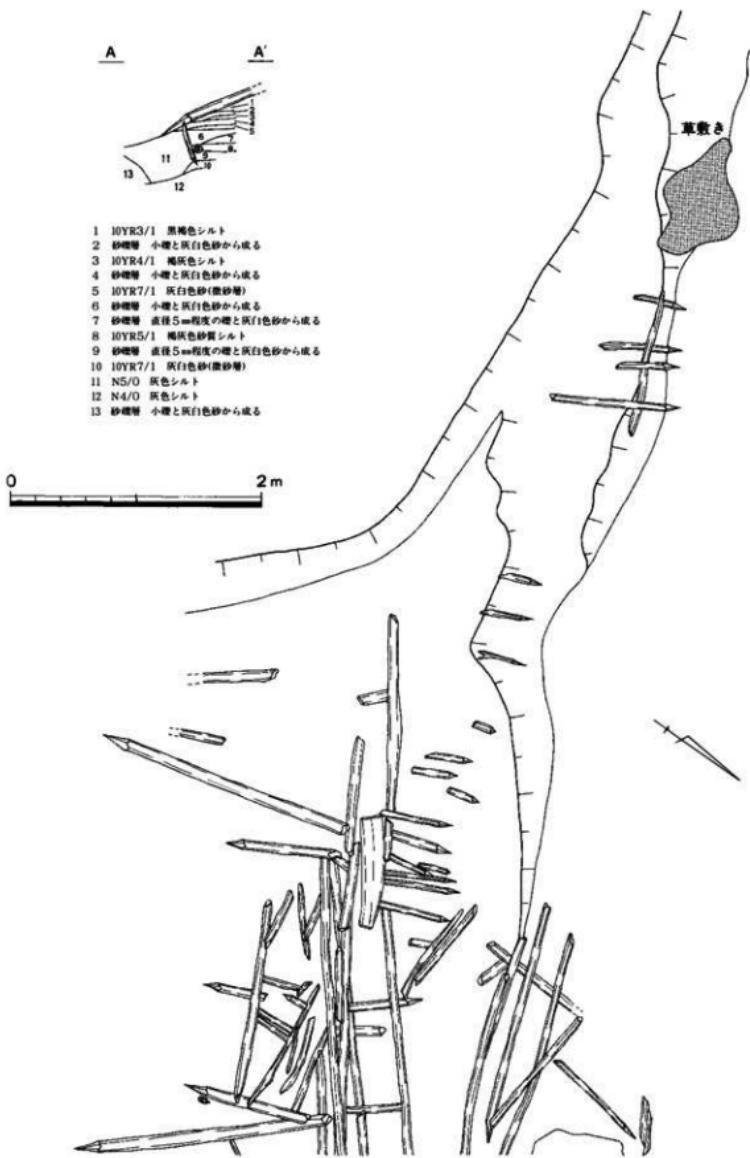


図63 SW6実測図(1)

図64 SW6実測図(2) ( $L=109,000m$ )

た。横木の背面の縦杭は11本検出され、その内訳は長さ約2.0m、角度約20°のもの3本、長さ約1.0m、角度約40°のもの8本である。前者は2~4m間隔で、後者は約2m間隔で打ち込まれており、両者が接する場合は前者が後者の下に位置している。そして、後者の先端付近には太さ3cm程度の細い補助杭が垂直に打ち込まれていた(図64A~A')。なお、背面のこれらの縦杭はSW3、SW7でも確認されている。

3段階は10本以上の横木と多数の縦杭から成る。横木は東端でSW3の2~1段階の横木の上に

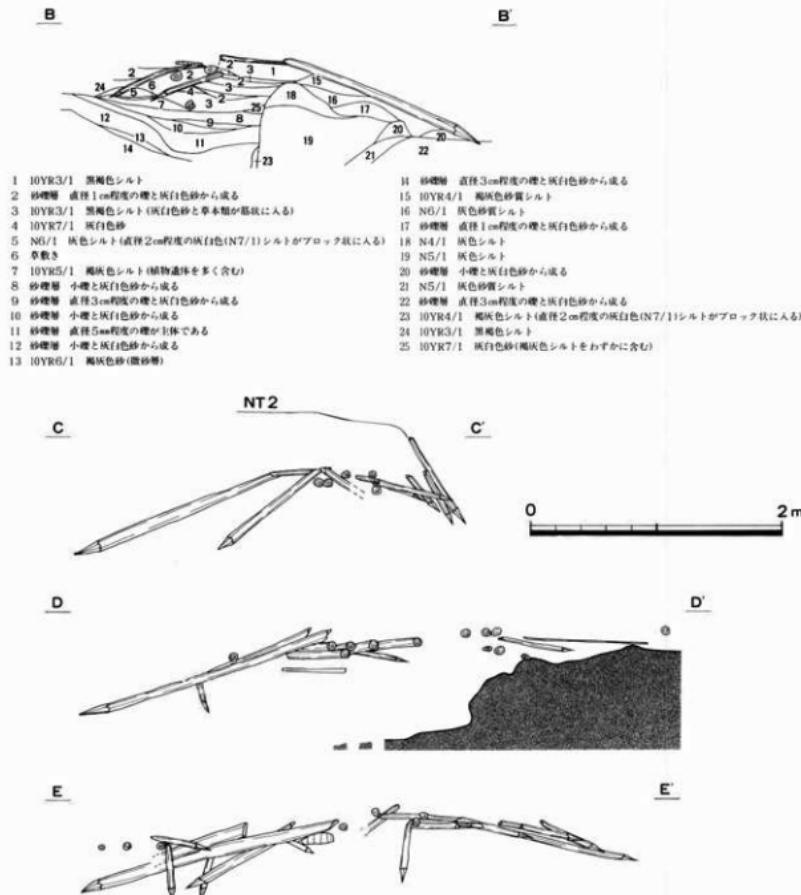


図65 SW6実測図(3) (L=109,000m)

位置し、西端ではNT 2の斜面まで延びている。前面の縦杭は長さ40~100cm、幅約5cmを測り、その角度は約10°で大半は水流により倒されていた。そして、SW 3と同様に比較的密に打ち込まれており、しがらみ状遺構の東側に多く検出された。これは水流が北北東から南南西へと向かうために、水衝部にあたる東側に縦杭を多く配置したためと思われる。また、西端ではNT 2の傾斜面に縦杭が打ち込まれており、その横に南北方向に草敷きが確認された。なお、明確に3段階に伴うしがらみ状遺構の背面に位置する縦杭は確認できなかった。これはSW 3と同じ状況であり、SW 3は2~1段階と2~2段階に分けたが、SW 6の場合は横木の方向が2段階と3段階では明らかに違うために「改築」と認識した。

なお、縦杭の前面には3枚の草敷きと網代5・6が確認された(図67)。草敷きは網代付近しか確認できなかっただため周囲まで広がっていたか否かは定かでなく、その状態は帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。最下層の草敷きは地山直上で検出され、水流と平行して東西方

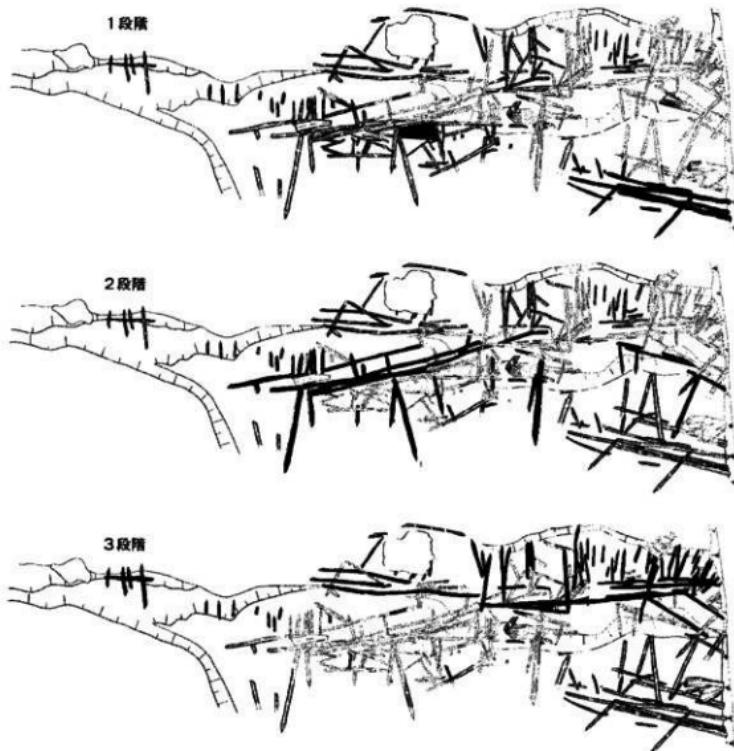


図66 SW 6補修工程 (S=1/120)

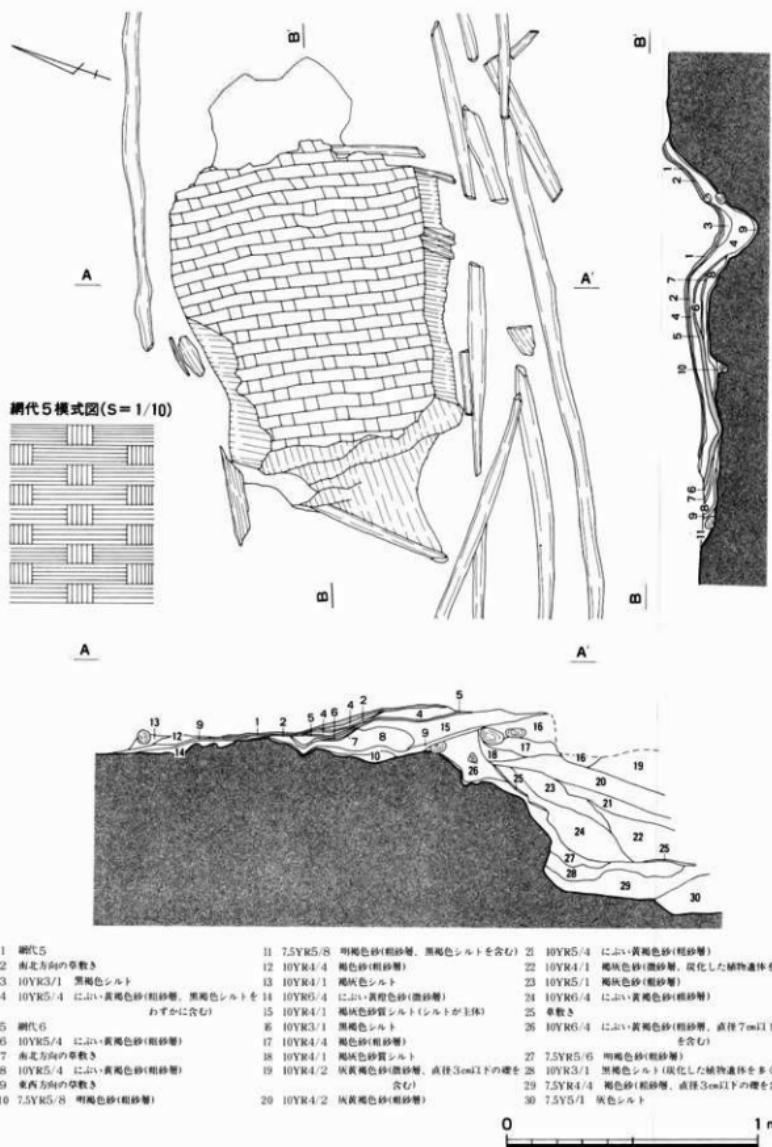


図67 網代5・6実測図 (L=108,900m)

向に敷かれていた。そして、その上の砂とシルト中に縦杭が据えられており、その上に南北方向の草敷き、その上に網代6が敷かれていた。網代6は断片的に検出されたにすぎないが、網代5と同様の材質で、その編み方は1本超え、1本潜りで平織りと同じであった。そして、網代6の上に再び南北方向の草敷き、その上に網代5が検出された。網代5は比較的の残りが良好で、東西128cm、南北1.03mの範囲内で確認され、中央から東寄りの地点が大きく回んでいた。この凹みは地山まで続いていることから偶発的なものと思われ、凹み内の埋土の状態も特記すべき事柄はなかった。網代5の編み方は1本超え、1本潜りで平織りと同様であり、南北方向が隙間なく密に編まれるのに対し、東西方向は約7cmの間隔をおいて編まれている。そして、南北方向は5~6本の竹の表面を1単位として編んでおり、1単位の幅は平均約4.0cmを測る。また、東西方向は7~8本の竹の表面を1単位として編んでおり、1単位の幅は平均約5.0cmを測る。東西方向、南北方向ともに網代3と同様に1単位内に竹の節にあたる凸部が端から端まで直線的に並んでいることから、直径1.4cm前後の竹を潰してからそのまま広げて編んだ可能性が指摘できる。なお、網代5・6が位置する地点は水衝部からは外れ、比較的の流れが緩やかであったはずである。そのため、この地点に網代を敷く理由が判然とせず、とりあえず別の地点に敷いてあった網代が移動し、何らかの理由でこの地点で止まつたものと理解しておきたい。

なお、図67のA-A'ラインにおいて網代5・6の南側の堆積状況を図示した。そのうち、16~30層までは網代が存在する前にすでに堆積しているはずであり、網代が存在した時点ではすでにSD14の大半が埋没していたことになる。逆にSW6-3段階は2段階で堆積した砂礫の高まりを利用して構築されたとも解釈できる。また25層は草敷きであり、1段階か2段階の時期に対応する護岸施設であった可能性が高い。この草敷きは比較的ランダムに草本類が重ねてあるだけの状態で、他にみられたように方向が一律ではなかった。

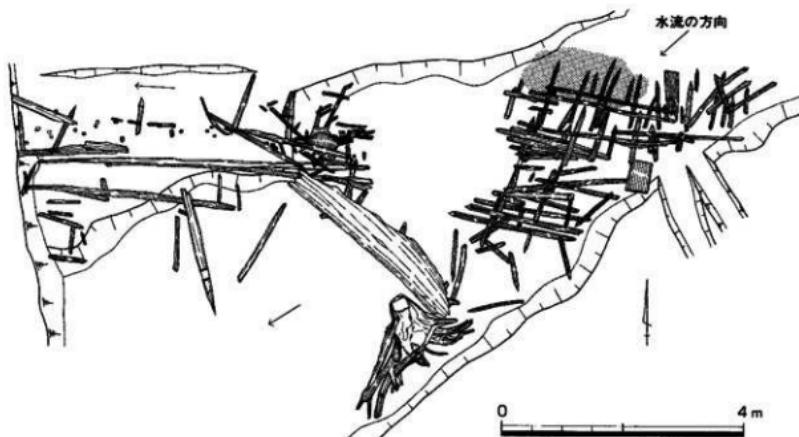
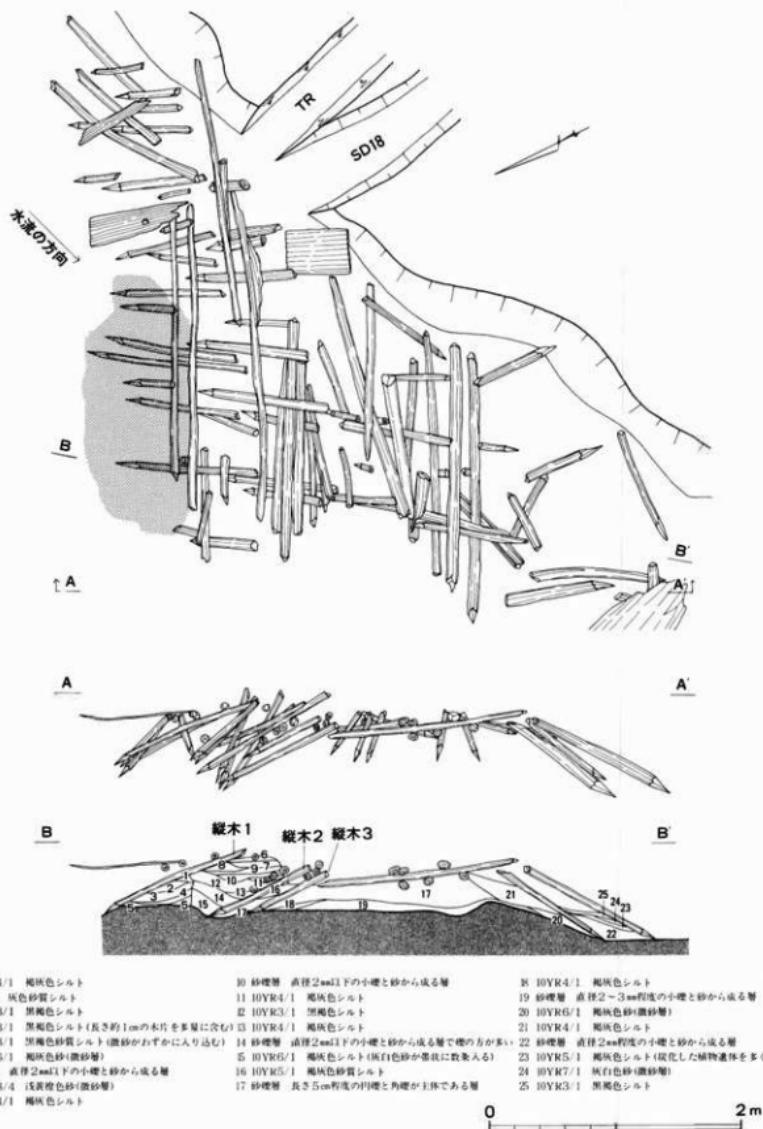


図68 SW7全体図



- |                                   |                                |                                  |
|-----------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR4/1 黄褐色シルト                  | 10 砂埋管 高さ2mm以下の方小管と砂から成る管      | 19 砂埋管 直径2~3mm程度の小管と砂から成る管       |
| 2 10G/1 灰色砂質シルト                   | 11 10YR4/1 黄褐色シルト              | 20 10YR6/1 黄褐色砂(微砂質)             |
| 3 10YR3/1 黑褐色シルト                  | 12 10YR3/1 黑褐色シルト              | 21 10YR4/1 黄褐色シルト                |
| 4 10YR3/1 黑褐色シルト(長さ約1cmの木片を多量に含む) | 13 10YR4/1 黄褐色シルト              | 22 砂埋管 沿岸2cm以下の小管と砂から成る管         |
| 5 10YR3/1 黑褐色砂質シルト(微砂がわずかに入り込む)   | 14 砂埋管 高さ2mm以下の方小管と砂から成る管の方が多い | 23 10YR5/1 黄褐色シルト(炭化した植物遺体を多く含む) |
| 6 10YR6/1 黄褐色砂(微砂質)               | 15 10YR6/1 黄褐色シルト(白色砂が僅かに数える)  | 24 10YR7/1 白色砂(微砂質)              |
| 7 砂埋管、或様2mm以下の方小管と砂から成る管          | 16 10YR5/1 黄褐色砂質シルト            | 25 10YR3/1 黑褐色シルト                |
| 8 10YR5/4 白黄色砂(微砂質)               | 17 砂埋管 長さ5cm程度の円筒と角型が主体である管    |                                  |
| 9 10YR4/1 暗灰色シルト                  |                                |                                  |

図69 SW 7東側実測図 (L=109,000m)

**SW 7 (図68~72)** B 8 ~ D 9 グリッドにかけて検出されたしがらみ状遺構であり、斜材の遺存状態が良好な東側と巨木と直立杭から成る西側に分かれる。全体的にみるとSW 7はSD14の水流方向に対して約140°の角度をもって溝を横断し、その西端は調査区外まで延びている。そして、SD14の右岸に杭列が最も近づくために、SW 7をもって下流の水田域へ導水していたと想定される。

東側のしがらみ状遺構(図69・70)は頻繁に補修されたためか縦木や横木が複雑に重なり合っており、その内部の土層を図69下に示した。このうち1~5層はいずれもシルトで砂礫を含まず、6~15層までの境はほぼ垂直であった。この垂直のラインは縦木1の補助杭である縦杭の位置にほぼ相当することから、1~5層は縦木1が伴うしがらみ状遺構が構築されてから堆積したと推定できる。また、6~15層は砂とシルトが交互に堆積しており、縦木2とそれに伴う横木より南側には堆積していない。そのため、6~15層は縦木2が伴うしがらみ状遺構が構築されてから堆積していた可能性が高い。また、16層は縦木2と縦木3の間にのみ堆積している。これらのことから、縦木1~3は縦木3→2→1の順番に構築され、それぞれが設置される間にはある程度の時間幅があったと想定できる。また、図69下の縦木1と縦木2の間には杭などの構築材がみえていないが、平面図と見通し図をみるとわかるように実際には多数の杭や横木が存在しており、杭には基礎杭と想定される太い縦

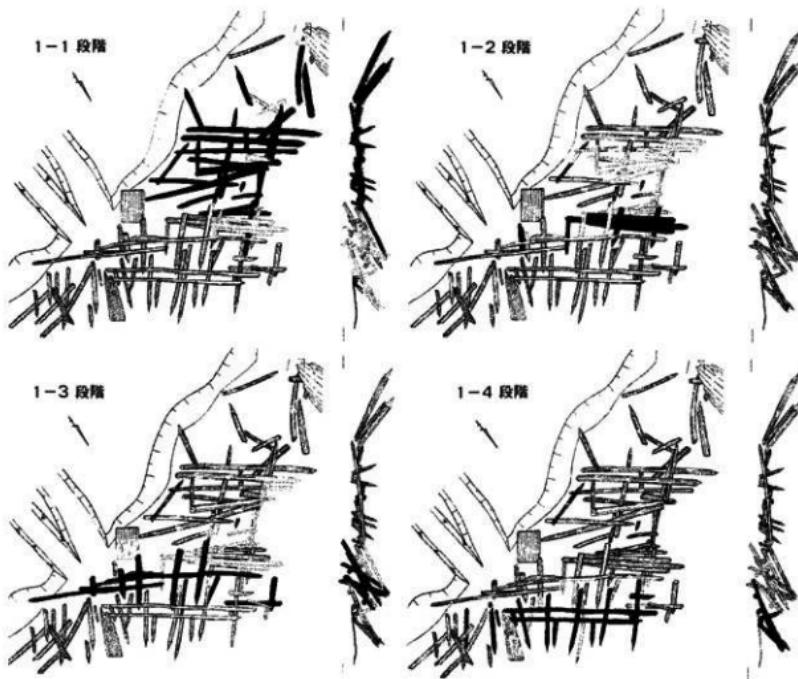


図70 SW 7 東側の補修工程 ( $S=1/80$ )

杭が數本含まれる事実から、縦木1を伴うしがらみ状遺構が機能しなくなり、縦木2を伴うしがらみ状遺構が機能するまでの間にさらに1回補修していた可能性が指摘できる。このようにしがらみ状遺構内の埋土と杭の遺存状態から最低4回の補修が想定され、古い段階から1-1段階、1-2段階、1-3段階、1-4段階とする。

各段階の検出過程は次のとおりである。まず、E区上層で検出されたSD4の埋土である黒褐色シルトを掘削している途中で1-3・4段階の杭の上端や草敷き、SW2の横木が検出され、さらにSD14の埋土である砂礫層を掘削すると1-1段階のしがらみ状遺構を構成する縦木や横木が出土し、1-2~4段階の全容が明らかとなった。さらに1-1段階のしがらみ状遺構を掘削していくと二股木(図版57下)が出土し、しがらみ状遺構の基底部は今回の調査で地山としている灰白色シルト(V層)であった。

次に各段階毎の材の構築方法を考えたい。1-1段階のしがらみ状遺構は17・19層の前面と背面の縦木と17層中に打ち込まれる縦杭、17層中ないしは17層上面の縦木と横木から成る。しがらみ状遺構を構成する17・19層のうち、17層は長さ5cm程度の礫が主体である砂礫層で、19層は直径2~3mm程度の小礫を含む砂礫層であり、両者が同時期に堆積したとすると当然重い礫を含む17層が下に堆積するはずである。しかし、実際は17層が上に、19層が下に堆積していることから、17層と19層は堆積時期が違うのか、あるいは17層が人為的な堆積である可能性が指摘できる。ここで問題となるのがしがらみ状遺構の基底部から出土した二股木である。二股木は股部を北に向けて17層と19層の境付近で検出され、その先端付近には円形孔が穿たれ横木が差し込んでいた。横木は検出と同時に崩れてしまつたが、円形孔が穿たれた二股木と円形孔に差し込まれた横木の存在から、これらは明らかにしがらみ状遺構の基底部に設けられた構築材であるといえ、そのため、これらの上に堆積していた17層も人為的に盛られた可能性が高いといえる。なお、17層中には円礫に加えて角礫が幾つか確認されているが、SD14内の他の地点で角礫が存在したか否かは調査中に確認していないので、17層中に角礫の存在していること自体が人為的な盛り土であるということには直接つながらない。また、17層が盛り土であるならば、流水によるしがらみ状遺構の洗掘行為を緩和させるために礫を盛った可能性も指摘できよう。

1-1段階のしがらみ状遺構前面の縦木は2~3本検出され、その太さは約5cm、角度は縦木3の場合27°で、その先端は灰白色シルトまでわずかに打ち込まれていた。縦木の上には横木が3~4本検出され、横木を留める補助杭は確認できなかった。17層中と17層上面には二股木を含めて縦木と横木の組み合わせが最低3ヶ所で確認され、縦木と横木の間に縦杭が数本確認できた。縦杭はいずれも残存長が40cm程度と短く、材の直径も5cm程度で灰白色シルトまでは打ち込まれていなかった。しがらみ状遺構背面の縦木は4本確認でき、残存長約0.7~1.2m、直径約10cmで他の材よりも太いことが特徴であり、その検出時の角度は約30°を測る。また、図69下をみるとわかるように、これらの縦木の周辺には20~25層が堆積しており、17層が存在していない。これはしがらみ状遺構構築後に流水の洗掘行為によってその南端が抉られたためと想定され、それによりしがらみ状遺構の構築材も流失し縦木4・5が単独で残ったものと思われる。

1-2段階の材として、1-1段階のしがらみ状遺構前面に縦木4本と縦木の上に横木4本が検出され、横木を留める補助杭は確認できなかった。縦木は60~80cm間隔で約27°の傾斜で検出され、

縦木の残存長は約90cm、直径約5cmであった。

1-3段階の材として、基礎杭である縦杭5本と縦木の前面に横木2本、さらに横木の前面に縦木3本が検出された。縦杭は直径8-10cmとやや太く、30-60cm間隔で打ち込まれている。そして、縦杭のうち最も東側にある杭は直立気味に打ち込まれており、最も西側にある杭は32°まで傾いてしまっている。また、縦木は直径約4cmで横木の上に乗っており、その間隔は40cmと100cmで、その角度は約50°を測る。このように、1-3段階のしがらみ状遺構では基礎杭の傾きが中央付近と端とで大きく異なっており、中央付近にかかる水圧がかなり大きかったことが想像される。また縦木としたものは角度が約50°と傾斜が急であることから、1-3段階の補助杭か、あるいは1-4段階の基礎杭と認識した方がよいのかもしれない。なお、1-3段階においてSD18の前面までしがらみ状遺構の部材が延びている。

1-4段階の材として、縦木(基礎杭?)7本と縦木の前面に横木3本、さらに縦杭(補助杭)が横木の間に3本と前面に2本、合計5本が検出された。縦木は直径約5cm、残存長100-150cmを測り、40-50cm間隔で打ち込まれている。そして、その角度は約25°であるが、大半は上半部が鴻曲しているため、1-3段階の基礎杭と同様に水圧によって傾斜している可能性が高い。横木は直径約4cmの縦杭によって固定されており、横木の間に位置する縦杭は直立気味、横木の前面に位置する縦杭はわずかに傾斜している。また、横木に接して草本類が横木に垂直に敷き詰められたように検出された。草本類は長さ2.1m、幅0.9mの範囲内に広がっており、その状態は帶状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。そしてほぼ水平に検出されたことから、しがらみ状遺構の廃絶後に浮いた状態で埋没したと思われる。

なお、1-3段階のしがらみ状遺構の背面に長さ約60cm、幅約40cmの板材が出土した。SW7の構築材はすべて丸木芯持ち材で板材は全く使用されておらず、板材の出土位置がSD18の北端のすぐ西側にあたることから、あるいはSD18の排水調節のために使用されたものかもしれない。

西側のしがらみ状遺構(図71・72)は東側のしがらみ状遺構ほど構築材が入り組んでおらず、材の重なり具合から大きく3回(古い順番に1段階、2段階、3段階とする)の改築が想定できる(図72)。

1段階は横木と縦杭、縦木から構成されるが遺存状態が悪い。横木は東西方向に2列検出され、その間は東端で0.7m、西端で0.6mを測る。北側の横木は長さ5.56mを測り、その横木に関係する材として約15°の角度で据えられた縦木が2本検出されている。南側の横木には横木の上に長さ2.24cm、直径16cmの太い縦木が約16°の角度で据えられており、その先端は砂礫層中に位置し灰白色シルトまでは達していないかった。その他の材として4本斜材が検出されたが、それらが横木を固定するための材か否かの判断はし難い。

2段階は水流の方向に対して約110°に据えられた巨木と、巨木に平行する杭と横木である。巨木は長さ3.46m、最大幅0.64mを測り、断面形態は芯部が欠落しているためU字状を呈する。そして、上流側の4本の杭と、下流側の1本の杭で固定されており、北西端は1段階の横木の上にのっていた。また、巨木の南東端と溝の肩部とは約0.6mの隙間があり、その部分には樹木の株が据えられていた。さらに巨木の前面のラインに沿って、巨木から北西方向に長さ1.9mの1本の横木が延びており、横木の上流側の約0.5m離れた箇所に、横木にほぼ平行して4本の直立杭で固定された別の横木が存在した。なお、巨木の南東端から横木の先端までは5.36mを測る。

3段階のしがらみ状遺構は1・2段階のしがらみ状遺構の上部に作られており、その向きは1段階のものとほぼ平行である。なお、詳細についてはSD4で触れたので省略する。

以上、SW7は東側と西側で大きく3回の改築が想定され、東側の1-1-1-4段階が西側の1段階とほぼ同時期で、西側の2段階に対応するものは東側では明確に捉えられず、西側の3段階に対応するものは東側では数本の横木のみと考えた。西側の1段階が東側の1段階のいずれに対応するか断定はできないが、横木の方向と横木の上に据えられている背面の太い縦木の存在から、それらの材

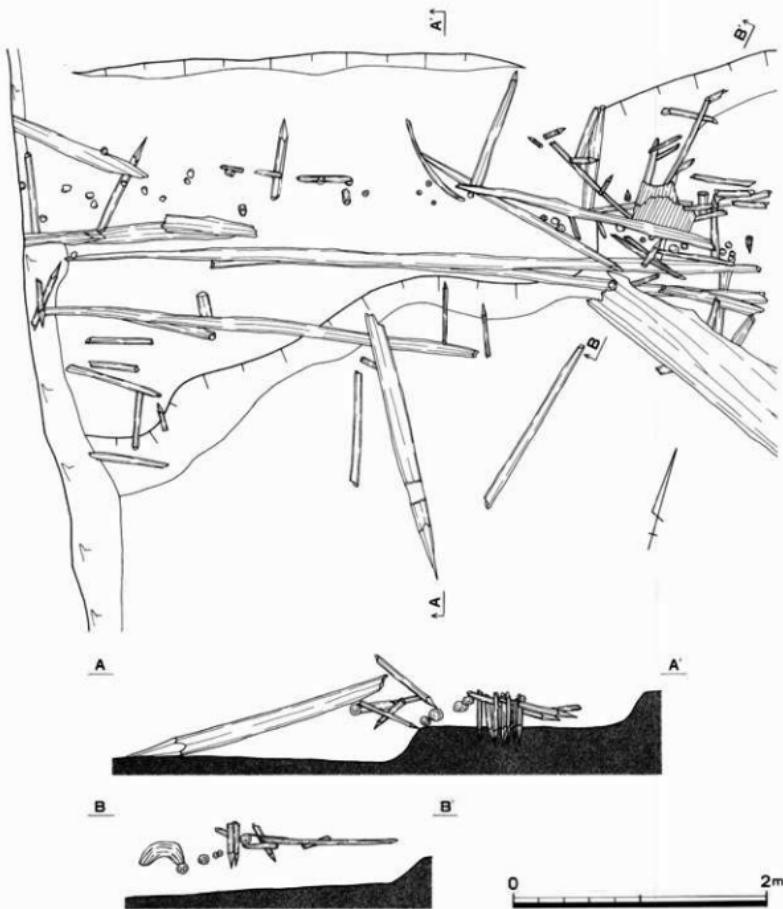


図71 SW7西側実測図 (L=109.100m)

はいずれも東側の1—1段階のしがらみ状遺構を構成する材に対応する可能性が高い。この推定が正しいのであれば、1—1段階のしがらみ状遺構は基底部で幅3.7m前後、復元高0.8m、長さ9.6m以上のものの大規模な構造物となる。そして、東側は水流の中央付近にあたり水圧が強いために数回の補修が行われたと想定され、西側は主たる用途が導水であったために縦木・縦杭が少ないか、あるいは水流によりしがらみ状遺構が崩壊してしまったために構築材がみられないかのいずれかであろう。2段階では1段階に比べて簡易なつくりとなり、巨木とそれに付随する杭、横木のみで構成される。また、しがらみ状遺構の角度も水流の方向に対して1段階が約140°であったものが、2段階では約110°に変化している。SW 7の東と西の間の様相が不明瞭なので全容は定かではないが、巨木と横木のみで水を堰き止めるのは不可能であろうから、あるいは検出された構築材は2段階の基底部に相当するだけなのかもしれない。3段階はSD14の埋没後、SD 7が機能していた段階で設置された護岸施設である可能性が高く、その方向は1段階とほぼ同じで、SW 7の1段階の上に構築されている。

なおSW 7とSD18の関係は、東側の補修工程の推定が正しいのであれば、1—2段階においてSD18の前面に杭列が打ち込まれ、1—3段階では完全に塞いでいることになる。1—2段階においてSD18が機能していたとすると、水がしがらみ状遺構の東側から背面に流れ込むことになり、その構造自体が弱くなってしまう。そのため、SD18は1—1段階では排水の機能を有していたが、少なくとも1—3段階には排水溝として使用されていた可能性は低いといえよう。

**SW 8(図73)** C10~D10グリッドにおいてSD15の掘削途中で検出された杭と横木から成る構築物であり、水流によって破壊されたためか遺存状態は極めて悪く、その構造を把握できなかった。しかし、杭2本が直立に近い状態で検出され、横木も存在することからとりあえずしがらみ状遺構とした。SW 8付近は下層に砂礫、上層に砂質シルトが主に堆積しており、SW 8からNT 4までの約2mの間には20cm程の厚さで炭化していない植物遺体を含む黒褐色シルトが堆積していた。

SW 8は設置された位置から考えて、他のしがらみ状遺構とは異なる用途があったと思われる。そ

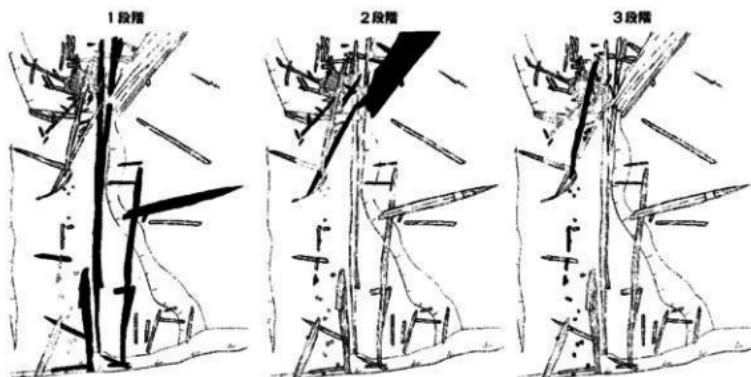


図72 SW 7西側の改修工程 (S=1/80)

れは、SW 9に至る水の流速を低下させるために簡易的に設けられたか、あるいはSW 8の南東側においてSD15が大きく南側に膨らみをもつことから、水温を高めるための「温め施設」であった可能性も考えられよう。

**SW 9(図74・75)** B10～B11グリッドにおいてSD15の掘削途中で検出されたしがらみ状遺構であり、西側が調査区外に位置するためその全容は不明である。また、今回検出されたしがらみ状遺構の中では最も標高が低い。その検出状況はまず北側で長い板材が数本並んで検出され、板材に直交する材やそれらの間から盤が出土した。そして、板材の下には草敷きが検出され、草敷きの下から細い材が数本並んで検出された。板材と草敷きの間には砂質シルトや砂礫が10～15cm程堆積していたことから、草敷きが埋没してから再び板材を含む構築物が築かれたと認識し、草敷き以前と草敷き埋没後の状況の平面図を作成した(図75)。

草敷き以前の構築物は2本の横木と横木に直交する縦木、草敷き、その他の材から成る。平行する2本の横木は北東から南西の向きに据えられ、水流の方向に対して約130°開いており、横木間は約70cm離れている。東側の横木の上には長方形を呈する板材1枚と最低15本の細い縦木の先端が据えられていた。縦木は最も残りのよい材で長さ143cm、短いもので長さ20cm程度で、太さはいずれも直径3cm程度である。そして、その傾斜はすべて西端より東端の方が高く、その比高差は約20cmである。また、5～10cm間隔で丁寧に並べられており、材の先端が加工されているものはほとんどなかった。なお、縦木は西側の横木の下に位置するもの3本、上に位置するものが4本あった。また、縦木の上には草本類が敷き詰められたように検出された。草敷きはまず縦木の上から溝の肩の中位レベルまで縦木に平行して敷かれ、その上に直交するようにもう一枚重ねられている。そして、帯状を成す以外に束ねて編んである箇所は確認できなかった。草敷きはある程度掘削してからその存在に気

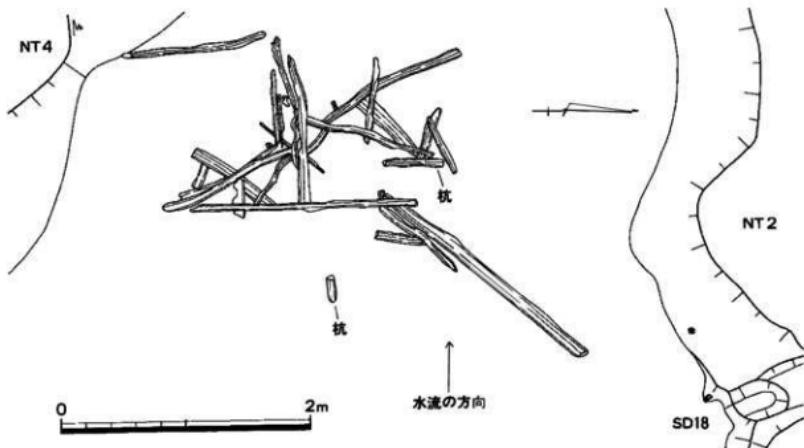


図73 SW 8実測図

付いたため、その広がりは定かではないが、残存状態(図版59)から判断して縦木の上面全体に敷かれていたのかもしれない。なお、その他の材として水流に平行するように何本かの細い材が確認されたが、人為的な加工痕はみられず、また構築材として使用されていたか否かは判断できなかった。

草敷き以前の構築物は確実な縱杭が確認できなかったことや、横木の背面に細い縦木が数本並んでいることなどからその用途が推定できなかった。遺構掘削時において①堰が土圧で潰れたもの、②ヤナ、の2つの用途を想定していたが、①の場合は堰を構築する縱杭が残るはずであり、仮に縱杭が流されたのであれば縦木が並んで遺存するはずがないので①の可能性は低いといえる。②の場合は仮に

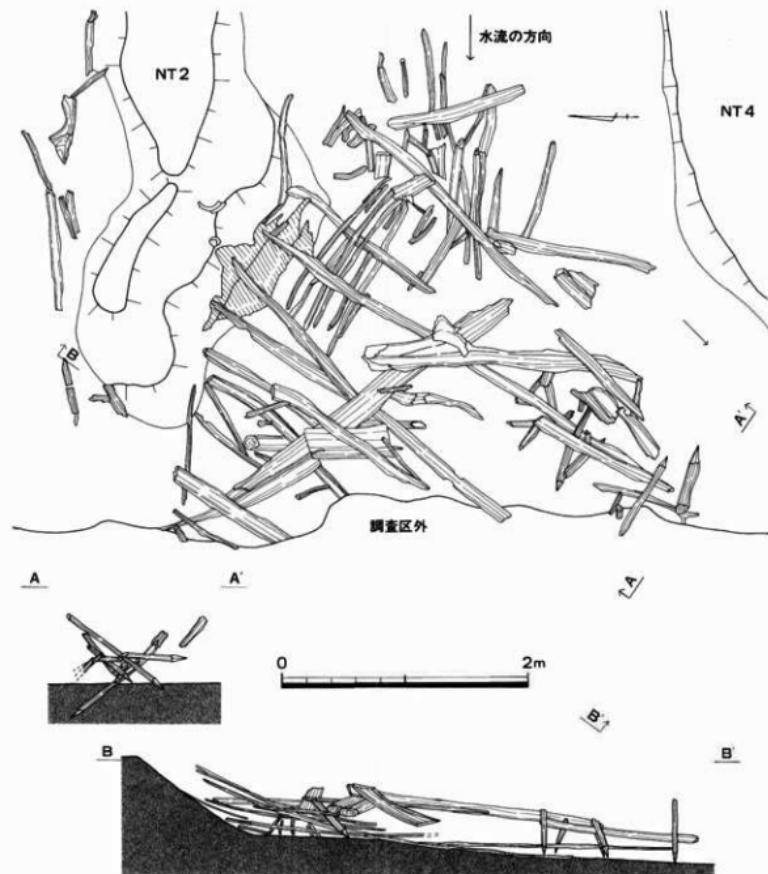


図74 SW9実測図 ( $L=108,800m$ )

ヤナであるならば、縦木の傾斜から水流は北西から南東に向かうことになるので矛盾が生じ、また2枚に重ねた草敷きが水を通過させるか疑問が残るので②も可能性は低いといえる。このような理由により草敷き以前の構築物の性格は不明といえ、今後の類例の増加をまって検討したい。

草敷き埋没後の構築物は数本の横木と縦木、縦杭から成る。縦木は南東から北西方向にほぼ水平に2本据えられており、長いものは長さ290cm、幅20cm程度の板材である。縦木の下には最低6本の横木が溝の肩部から底面にかけて北東から南西方向に据えられており、その間隔は50~70cmを測る。これらの横木は溝の底面付近はほぼ水平であるが、全体的には北東側が南西側よりも高く、最大で56cmの比高差がある。また、大半が板材でそのうち1本は建築部材(62)の転用であり、一番東側に位置する横木の南端には縦杭が数本打ち込まれていた。縦杭は大半が直径8cm程度の丸木芯持ち材であり、横木の下に北西方向から打ち込まれた杭が2本、横木を固定するために南東方向から打ち込まれた補助杭2本、横木の上に打ち込まれたか置かれた縦木1本が検出された。これらは明らかに横木を意識して打ち込まれており、その構造は合掌型堰の組み合わせとなる。また、調査区壁面においても縦杭が2本確認できたことから、SW7と同様に補修をしている可能性もある。また南東から北西方向にほぼ水平に据えられた縦木の上に置かれた横木は4本確認でき、いずれも丸木芯持ち材で、そのうち3本は直径10~15cmと太く、他1本は3cm程度と細かった。

草敷き埋没後の構築物はほぼ水平に据えられた縦木と横木を交互に重ね、その前面に縦杭を打ち込む構造であり、西~西南西に向かって流れている水を南西方向に導いていたと推定される。しかし、大半が調査区外に位置することから、その規模は不明である。

#### 4、水田(図76)

基本層序Ⅳ層を耕作土とする古墳時代の小区画水田であり、中央付近はSD19により畦畔が破壊されている。水田掘削状況は、Ⅲ層掘削中に褐色~黒褐色を呈する畦畔の上端が検出され、小畦畔の広がりを確認した後にⅢ層をすべて除去した。なお、検出された水田は不定形を呈するので、その数は定かではないが、検出できた面数は最低19面存在する。小畦畔は比較的容易に検出でき、大部分

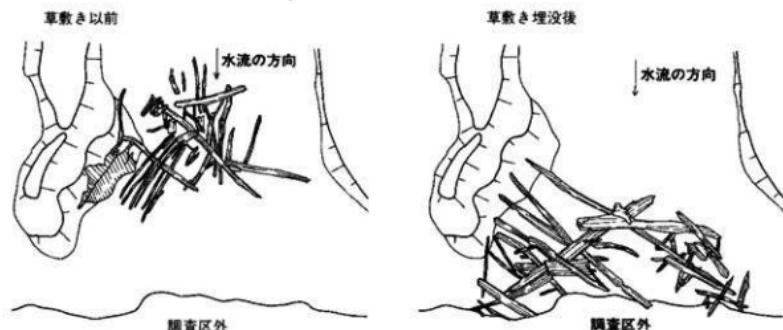


図75 SW9改築工程 (S=1/80)

のものがSD14の北側の肩とほぼ平行するように長く延びている。水田の形状は不規則ながらも西側が長方形、東側が正方形に近く、水田面の標高はST12中央で109.420m、ST19中央で109.390m、ST1中央で109.200m、ST5中央で109.260mを測り、西側が東側より低かった。

水田の給排水は田越しか否かは定かではないが、ST9と13、ST10と15、ST17と18の境の小畦畔同士は連結しておらず、これらが水口として機能していたのかもしれない。また、ST14と15の境にある小畦畔では、畦畔の東端の一部が長さ70cm、幅20cm程台形状に抉れて検出されており、これも水口の可能性が考えられる。なお、今回の調査で検出された水田に給水する導水路は確認できなかつたことから、それはさらに上流側に存在していたと思われる。また、水田面には足跡や耕作痕は確認できず、畦畔には杭や矢板などの補強も確認できなかつた。なお、出土遺物はST19で1点、ST15で1点、合計2点の土師器片が耕作土中で確認されたにすぎなかつた。

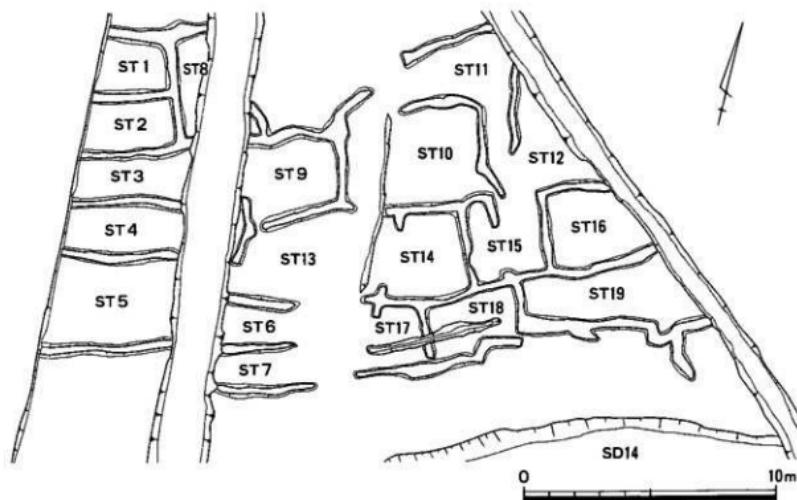


図76 ST1～19実測図

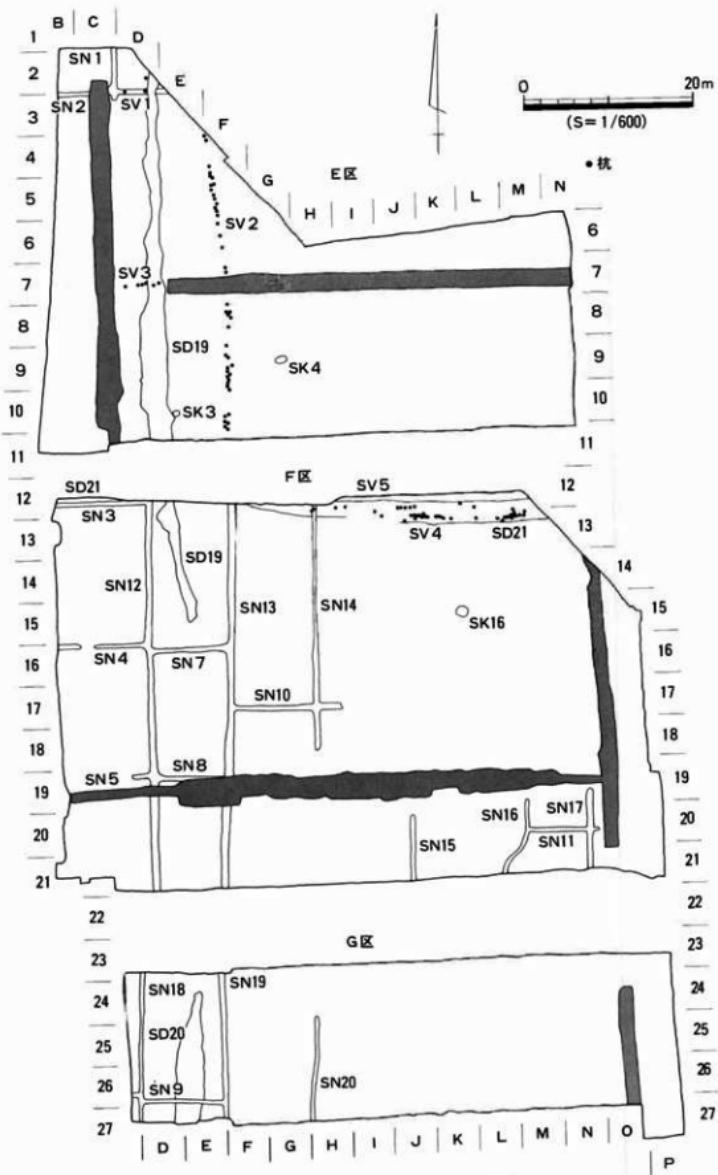


図77 E~G区 遺構概略図(古代以降)

## 第5節 古代以降の遺構

古代以降の遺構として掘立柱建物、柵列、溝、土坑、道路状遺構、畦畔状遺構、擬畦畔、多数のピットなどがあり、それらのうち主な遺構の配置を図77・78に示した。なお、C区ではピットや土坑が比較的多く検出されており、掘立柱建物2棟と柵列5基を想定したが、認識できなかった建物も存在していた可能性が高いと思われる。以下、掘立柱建物から順に説明したい。

### 1. 掘立柱建物(SH9・10)

**SH9(図79)** F53～G54グリッドにかけて位置する桁行3間×梁行2間の南北掘立柱建物

であり、規模は桁行7.16m、梁行5.06m、床面積36.23m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は10基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形で、直径20～35cm、深さ20cm～40cmを測る。いずれのピットも検出時の埋土が褐色シルトであり、P512とP582において径10cm前後の柱痕跡が確認された。また、P523はP524とP582のほぼ中間に位置しP526とP512の柱筋上に位置しているため、掘立柱建物を構成する柱の一つとして認識してよいのかもしれない。なお、SK21とSK22の埋土はいずれも褐色シルトの単層で、深さ5～10cmと極めて浅い土坑であり、掘立柱建物との関連は不明である。

**SH10(図80)** J55～K56グリッドにかけて位置する桁行3間×梁行2間の南北掘立柱建物であり、規模は桁行6.36m、梁行3.44m、床面積21.88m<sup>2</sup>を測る。この建物を構成する柱穴群は10基あり、いずれも柱掘り方の平面形は円形～楕円形で、直径20～40cm、深さ15cm～35cmを測る。いずれのピットも検出時の埋土が褐色シルトで、柱掘り方内にはP325・P330・P360において柱根が残存していたが、腐食が激しく遺存状態は良好とはいえない。また、P349では径12cm前後の柱痕跡が確認された。なお、いずれの柱根もピットの底面より数cm浮いており、P360の柱根の周囲には灰黄褐色砂質シルトが認められた。ところで、P326とP352はP328とP353の柱筋上に位置しており、P326とP325、P352とP360とを結ぶラインは建物の短辺に平行することから、P326とP352は掘立柱建物を構成する柱の一つとして認識してよいのかもしれない。なお、SK23はP330とP360の間の柱筋上に位置する楕円形を呈する土坑であり、深さは7cmと極めて浅く、埋土は褐色シルトの単層であった。しかし、掘立柱建物との関連は不明である。

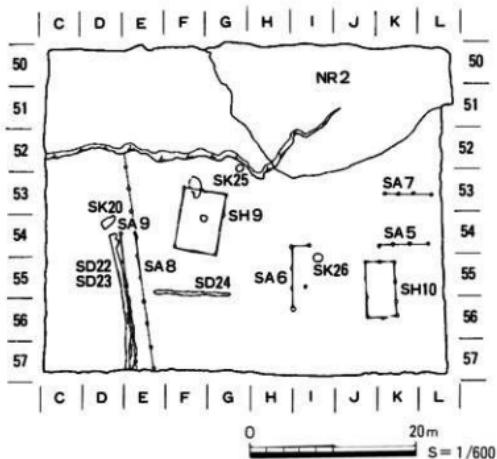


図78 C区遺構概略図(古代以降)

## 2、柱列・柵列(SA5～9)

**SA 5**(図81) K54～L54グリッドにかけて位置し、P380からP368までは6.56mを測るが実際はそれ以上長かったと想定される。この柵列の軸線上に位置するピットはP372も含めて9基あり、いずれも掘り方は円形で、直径20～30cm、深さ15～20cmを測る。ピット間の距離は約1m前後と狭く、P376からP372までは掘り方が深いものと浅いものが交互に並んでいる。なお、SA 5の西の延長ライン上にSA 6のP684とP400が位置する。

**SA 6**(図81) I54～I56グリッドにかけて位置し、P400を境に直角に折れている柱列である。柱列の軸線上に位置するピットは5基あり、柱掘り方は円形～楕円形で、直径約30cm、深さ25～45cmを測る。ピット間の距離は2.0～2.5mと比較的広く、全体の距離はP400からP607までは7.40m、P400からP684までは2.12mを測る。P464、P490、P607には柱根ないしは礎板が検出され、柱列の軸線に直交してP490から1.56m東に位置するP472でも柱根と礎板が検出されたため、P472もSA 6に関連するピットと思われる。P464は丸木芯持ち材と削材が2本並んで出土

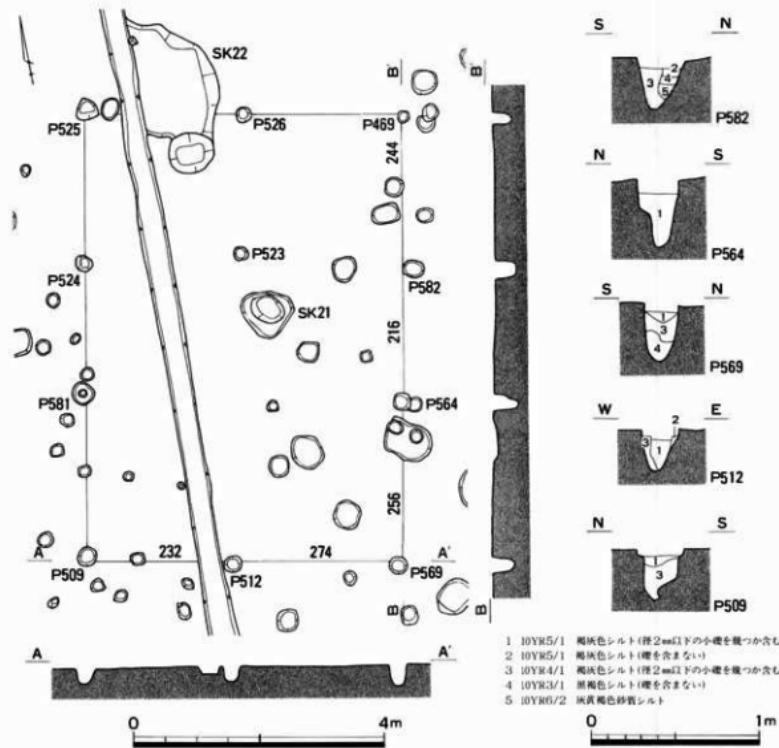


図79 SH9実測図 (L=109,500m)

し、その下から根石と思われる円礫が検出され、P490の柱根とP607の礎板ないし支え板は斜位で検出された。P472はピット検出時より柱根がみえており、その掘り方内には西側に円礫2個が支え石として上下に据えられ、柱根の下には「ハ」の字状に削材が置かれていた。また、P379の掘り方からは焼成不良の山茶碗の底部破片(155)とその上方に山茶碗の口縁部破片(156)が出土している。なお、P607の南東に位置するP462でも柱根が確認されたが、SA6との関連は不明である。

**SA7(図81)** K53～L53グリッドにかけて位置し、P394からP384までは5.60mを測る。この柵列の軸線上に位置するピットは4基あり、いずれも掘り方は円形で、直径20～30cm、深さ15～20cmを測り、ピット間の距離は約1.5～2.5mと比較的広い。SA5とSA6はSH10を囲っているが、SA7はSA5とほぼ平行しており、SA5との距離は6.0mを測る。

**SA8(図78)** E52～E57グリッドにかけて位置し、北端が後世の掘削によって破壊されており、南端は調査区外に延びている。そのため、今回の調査では長さ24.2mを検出したが、実際はそれ以上長かったと思われる。この柵列の軸線上に位置するピットは10基あり、いずれも掘り方は円形で、直径20～30cm、深さ30～50cmを測り、ピット間の距離は約2.6mで比較的均一である。

**SA9(図78)** E54～E57グリッドにかけて位置し、南端は調査区外に延びている。今回の調査では長さ15.4mを検出したが実際はそれ以上長かったと思われる。この柵列の軸線上に位置する

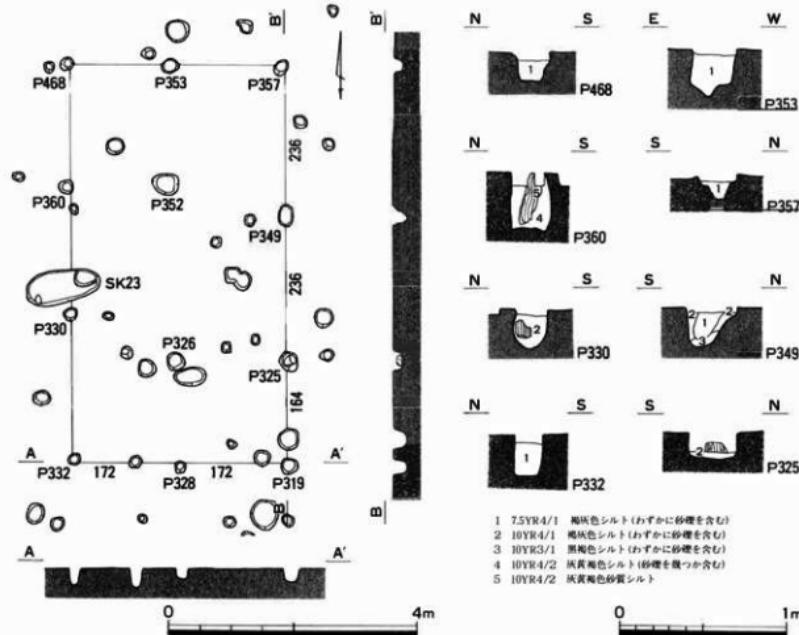


図80 SH10実測図 (L=109.600m)

ピットは6基あり、いずれも掘り方は円形で、直径20~30cm、深さ30~40cmを測り、ピット間の距離は3.0~3.6mでSA 8より広い。なお、SA 9はSD21とSD25を切っており、SA 8にはほぼ平行している。

### 3、道路状遺構(SD19・20)

道路状遺構として検出した遺構はE区～F区のSD19とG区のSD20がある。これらはいずれもD～F列の間で検出され、主軸は真北でほぼ直線的に延びている。以下、各遺構毎に記す。

**SD19(図82・83)** E区とF区のD～F列で検出された道路状遺構である。E区は北端から南端まで46.8m、F区は北端からF15グリッドまで14.7mの間で検出され、E区とF区の間に存在し、さらにD区まで延びるとすると、全長68.5m以上になる。

SD19は検出当初、道路状遺構と認識できていなかった。まず、D5グリッド以北において基本層序であるⅡ層掘削時に灰白色砂が帶状になって検出されたため、その付近を灰白色砂が検出された

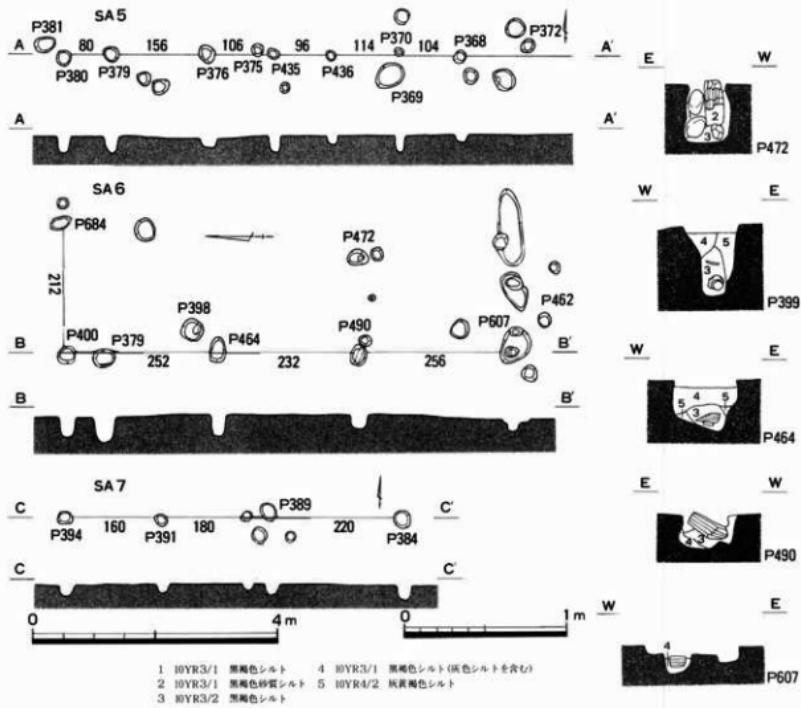


図81 SA 5～7実測図 (L=109,600m)

レベルで精査を行った。この段階で、灰白色砂が小礫などを含まず非常に木目細かいこと、およびD 5グリッド以北においてSD19以外の地点では同様な砂が検出されていないことなどを把握していた。そして、そのままD 8グリッドまで灰白色砂を検出し、ほぼ一直線に伸びていることを認識した。この時点では溝状遺構の可能性が高まったが、灰白色砂は遺構確認面と認識していた面より若干盛り上がった状態で検出されることや灰白色砂に礫が混在していないことなどが疑問であったため、サブトレントチを3本設定し土層観察を行った。その結果、いずれも灰白色砂の下に小礫を幾つか含む明褐色砂質土が検出され、さらに皿状の掘り方が確認されたため溝状遺構と判断し遺構を掘削した。

その後、E区南壁より北に向かって灰白色砂を検出し始めたところ。灰白色砂直上において楕円形を呈する土坑がほぼ等間隔で4基検出され、道路状遺構に伴う波板状凹凸面ではないかという見解をもった。そして、D11～D 8グリッドまでの灰白色砂上面において幾つかの楕円形を呈する土坑が連続して検出されたため、道路状遺構であると認識した。楕円形を呈する土坑は晴天が続くと遺構面が乾燥し検出するのが極めて困難であったが、D 8グリッド以北において楕円形を呈する土坑の有無を確認しなかったことは明らかに調査担当者の認識不足であった。

道路幅は最も広い箇所で3.8m、最も狭い箇所で75cmを測る。道路幅が広い箇所であるD 5グリッド以北は古墳時代の落ち込み範囲に相当し、道路構築時はシルト質であったと考えられる。また、D 6グリッド以南は道路幅が広がるが、道路幅が広がる地点は古墳時代の溝であるSD 1を切る箇所であり、D 8グリッド以南において道路幅が3m前後に広がる箇所は古墳時代の溝であるSD 4が位置する箇所である。道路幅が狭い箇所であるD 5～D 6グリッドは古墳時代中期において砂礫層が堆積していた箇所であり、古代においても同様であったと想定される。また、D13～15グリッドも古墳時代において溝が存在していない地点に相当する。これらのことから、道路構築にあたりその基盤となる土層のしまりが悪い箇所を中心に道路幅を広く設定した可能性も考えられる。

D 5グリッド以北では溝状に掘り込まれた灰白色砂のラインが明瞭に検出されたが、その西側にも部分的に灰白色砂が薄く残っていた。図83のA-A'のセクション図でわかるように、SD19の東側は褐灰色シルト(11層)を掘り込んでSD19が構築されているが、西側は褐灰色シルト(11層)の直上に砂礫を含む褐灰色シルトと褐灰色砂質シルト(8・9層)が蒲鉾状に堆積していたことから、溝を掘削した際の排土を利用して盛土を行った可能性も考えられる。

D 5グリッド以南は盛土状の高まりは確認できず、皿状に掘り込まれた下部遺構のみ確認した。その深さは10cm～20cm程度で、埋土の堆積状況はいずれも最下層が褐灰色砂質シルト(図83の14層、以下同様)、その上に明褐色砂質土(7層)、その上に灰白色砂(6層)が敷かれている。また、D 8グリッド以南しか確認できていないが、楕円形の土坑は灰白色砂直上から掘り込まれており褐灰色砂質土(15層)が堆積している。これらの土層のD 8グリッド以南の検出時における堆積状況を図82中央に示した。まず灰白色砂である6層が検出面の中央に延び、その周辺に7層が広がっている。そして、楕円形の土坑はD11グリッド付近では検出時の段階で長軸1.5m～2.0m、短軸40cm前後であったが、その掘り方は両端が深く、中間が浅い状態であった。D10グリッド付近では楕円形の土坑が東西2列に並んで検出されたが、これらはD11グリッドと同様に両端の深い部分のみが残存した結果かもしれない。また、楕円形の土坑はD 8グリッド以北は様相がわからないが、D 8グリッド以南においてその列が検出できなかった部分が2箇所あった。なお、楕円形の土坑はD 8～10グリッド

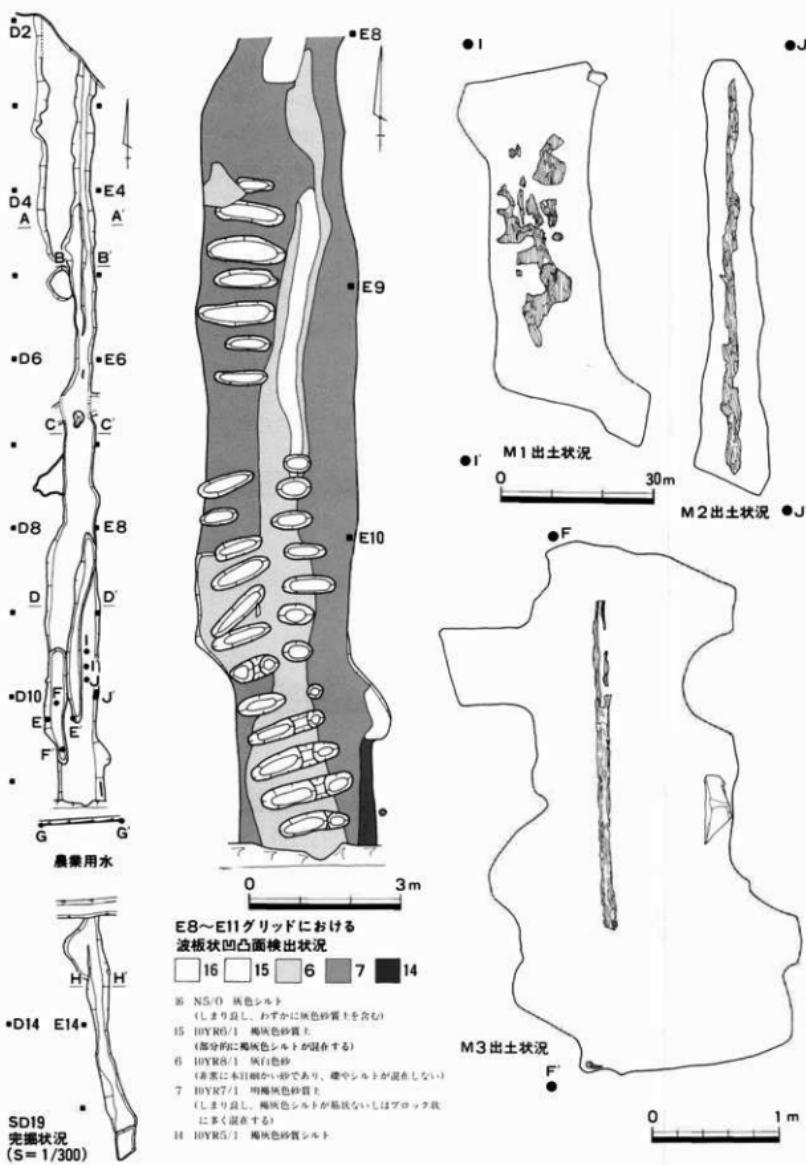


図82 SD19実測図(1)

D付近は真北を向いているが、D10～11グリッド付近は若干東に向きを変えしており、土坑の深さは浅い箇所で5cm前後、深い箇所で15cm前後であった。

完掘後の状況は、D 8グリッド以北において6層が検出された箇所を中心に溝状に落ち込みが確認された。また、道路状遺構の埋土をすべて掘削し地山面を検出しても、7層や14層が部分的に残る箇所が幾つかみられたことから、あるいはこれらが道路状遺構構築時における填圧痕となる可能性もある。なお、6層と7層は乾燥すると非常に硬くなるが、15層は6・7層に比べ掘削が容易であった。

F区は検出時において楕円形の土坑は確認できなかったが、E区における楕円形の土坑と同じ埋土である不定形の土坑がランダムに数ヶ所で確認された。また、掘り方は全体的に浅く埋土は6層と7層のみであったが、道路状遺構が途切れる箇所は他の部分よりも15～20cm深く掘り込まれていた。

なお、道路状遺構検出時に木片が4つ(M 1～M 4)、埋土掘削時に1つ(M 5)検出された。このう

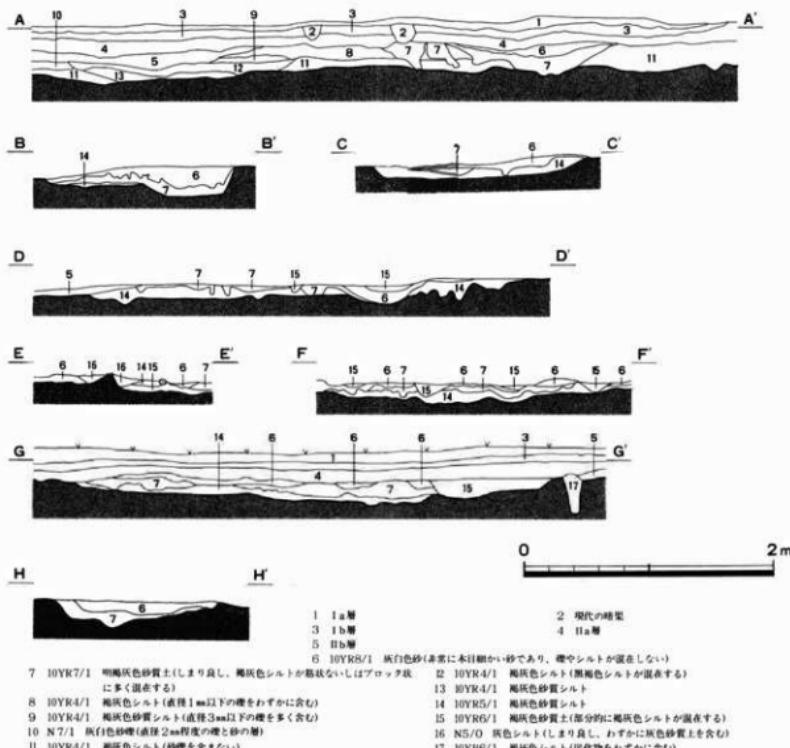


図83 SD19実測図(2) (L=109,600m)

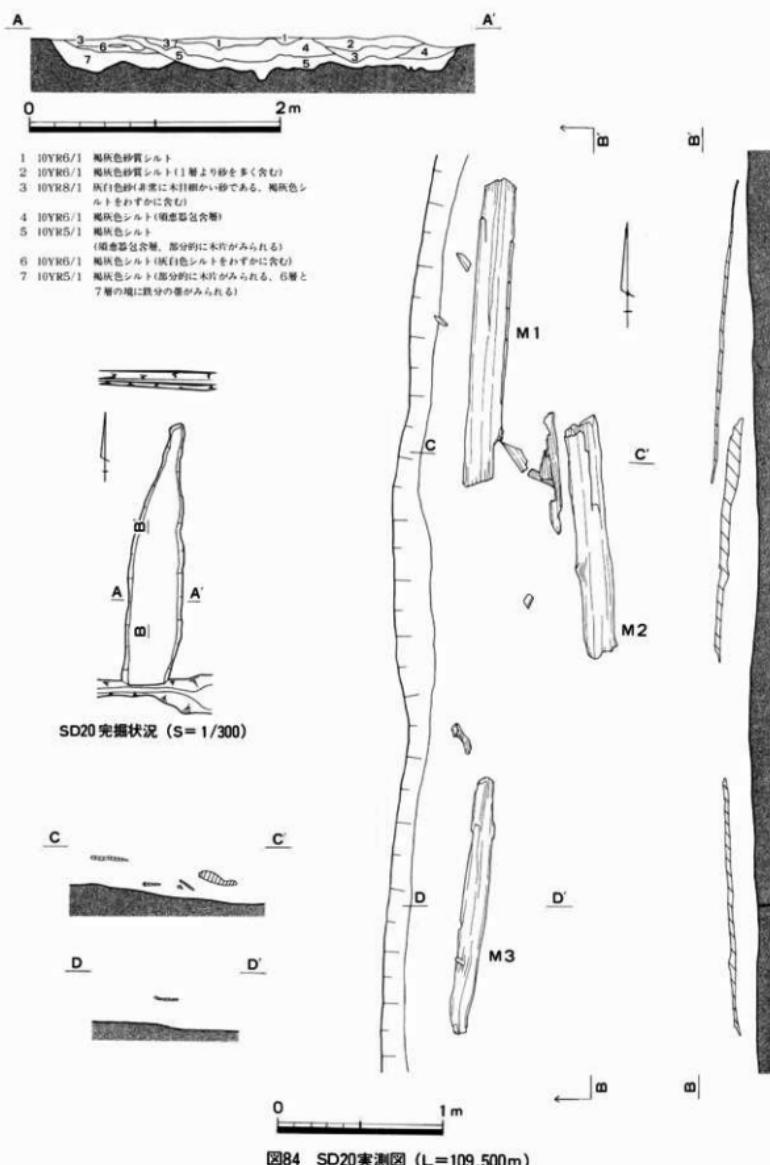
ちM 1は板状、M 2～M 5は棒状であり、M 1・M 2・M 3を図示した(図82右)。M 1、M 3、M 5はいずれも道路に平行するように真北を向いており、M 2、M 4はわずかに西に傾いている。それぞれの法量はM 1が長さ42cm、幅15cm、M 2が長さ76cm、幅6cm、M 3が長さ262cm、幅6cm、M 4が長さ25cm、幅3cm、M 5が長さ82cm、幅3cmを測る。木片の周囲にはいずれも灰色シルト(16層)が広がっており、図82右の木片を囲む線は灰色シルトの広がりを示している。このうち、M 1は厚さ3mm以下であり、表皮のみ残存している状況であった。また、M 3を取り除くとM 3の下に楕円形の土坑のプランが確認できた。そして、M 3の東側には長さ28cm、幅10cmの角礫が存在し、平らな面を西側(M 3側)に向けて据えられていた。SD19内においてこのような大きな礫が検出されたのはこの箇所のみである。

**SD20(図84)** G区のD～F列で、E25グリッドからG区南端まで15.8mの間で検出された道路状遺構である。遺構検出面において大型の板材(M 1)が出土し、検出ラインの東側はわずかに検出面より盛り上がっていた。また検出面の埋土はSD19と同様に褐色灰色砂質シルトが混在する灰白色砂が主体で、楕円形の土坑などはみられなかった。検出面ではSD20内における土層の切り合い関係は判断できなかったが、土層観察用の畦において2～3回の補修ないしは改築の痕跡が確認できた。そして、その埋土は基本的にSD19と同様であるが、SD20では5層と7層の褐色灰色シルト中に長さ3～5cm、幅5～10mmの木片が数ヶ所密集して検出された。また、埋土中からは長さ130～180cm、幅15～25cmの板材3枚(M 1～M 3)とそれらの間から端材が幾つか出土し、8世紀代の須恵器が4層と5層を中心にはわずかに出土した。大型の板材は3枚とも道路状遺構の長軸に沿って出土し、いずれも遺構の底面より浮いている。また、M 1とM 2が南側が高く、M 3は北側が高いというように必ずしも水平ではなかった。なお、3枚の板材のうち2枚を図示した(147・148)がいずれも明瞭な加工痕がみられず、M 3は節が加工されずに残存していた。

#### 4、溝状遺構・流路

**SD21(図85)** F区の第12～13列にかけて検出された遺構である。B12～C12グリッドにかけては南側の立ち上がりのみが検出され、C12グリッドで調査区外へ延びている。そして、F12グリッドから再び出現し、I12～M12グリッドにかけては直線的に延びている。

検出面では灰色～褐色を呈する砂が一面に広がり、その中に検出ラインに平行して灰色シルトが筋状に数条みられた。また、H12～M12グリッドにかけては杭の頭部がすでに何本か確認できていた。溝底面はH12グリッド以東において南北両端がほぼ平行して皿状に掘り込まれており、両者の間の畦畔状の高まりには鉄分の帶が確認できた。北側の掘り込みは幅約0.7m、深さ約20cm、南側の掘り込みは幅約1.4m、深さ約10cmを測る。また、J12グリッド以東では南側の掘り込み内に杭列(SV 4)が約13.8mにわたって出土し、H12～L12グリッドでは畦畔状の高まりの上に杭列(SV 5)が約12.3mにわたって検出された。大半の杭は溝の埋土である褐色灰色砂に埋もれていることから、杭と溝状遺構は同時期に存在していたと想定される。また、K12グリッド以西では溝底面に直径20cm前後の円礫が幾つか検出され、I12グリッドでは9個の礫が直線的に1.9mの間並んでいた。大半の礫はH12グリッド以東にみられた畦畔状の高まりの延長ライン上に位置し、礫のなかには被熱しているものもみられた。また、北側の掘り込みの2層と3層の境から山茶碗が幾つか出土した。



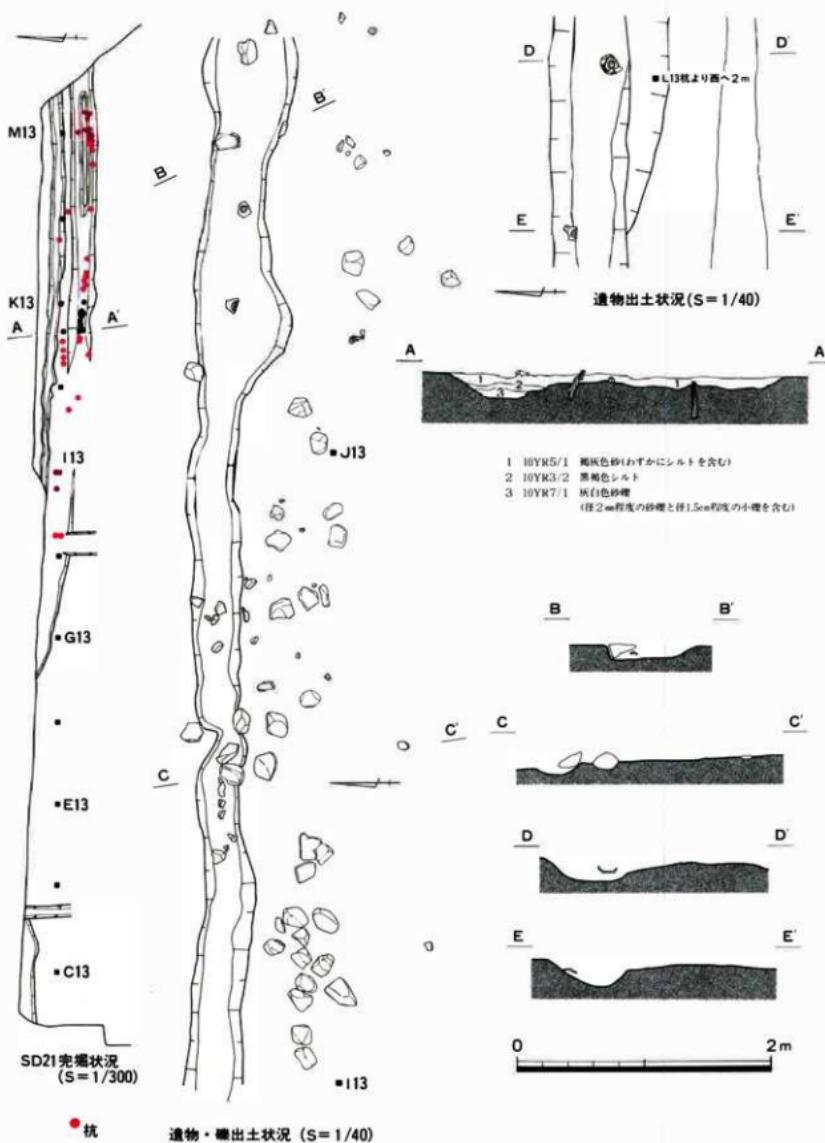


図85 SD21実測図 (L=109,800m)

山茶碗はいずれも散在して出土し、その向きは正位のものや逆位のものなど様々であり、山茶碗の周囲に炭化物などはみられなかった。

なお、SD21は検出時ににおいてSD19と同様に灰色～灰褐色を呈する砂が直線的にみられたために道路状遺構の可能性を考えたが、検出面で波板状凹凸面がみられなかつこと、埋土中に礫が多く含まれていること、SD19と出土遺物の時期が違うことなどから、道路状遺構と断定できず本報告では溝状遺構とした。

**SD22・SD23(図78)** D54～E57グリッドにかけて検出され、南端は調査区外へ延びている。SD22・23ともにSA9に切られており、SD23はSD22に切られる。SD22は幅50～70cm、SD23は幅約50cmを測り、深さはいずれも10cm以下である。埋土はいずれも黒褐色(7.5YR3/1)シルトの単層であり、SD23内にはわずかに黒色シルトが混在していた。出土遺物が1点しかないため溝の埋没時期の判断はできないが、C～G区でみられた道路状遺構の延長線上に位置し、南北方向に直線的に延びていることなどから、あるいは道路状遺構と関連があるのかもしれない。

**SD24(図78)** E55～G55グリッドにかけて検出された、東西方向に直線的に延びている溝状遺構である。長さ9.2mの間で検出され、幅約40cm、深さ約15cmを測る。埋土は上下2層に分かれいずれも皿状に堆積しており、上層は黒褐色(10YR3/1)シルト、下層は灰黄褐色(10YR4/2)シルトである。

**NR2(図78)** C区北東側で検出された自然流路である。出土遺物は縄文土器のみであるが、検出面において中世の遺構が全く存在しなかつたことから、中世においても完全に埋没せずに落ち込みとして存在していたと想定される。

## 5、土坑(図77・78)

古代以降の遺構の中で土坑といえるものは少なく、その平面形で土坑と認定しても掘り方は極めて浅いものが大半であった。そのうち、図77・78にSK3・4・16・20・25・26の位置を示した。その理由として、E～G区のなかで古代以降の土坑と認識したものはSK3・4・16のみであったこと、SK20はSD22・SD23が途切れる先端部に位置していること、SK25はSH9に近接し深さが31cmを測ること、SK26はSA5とSA6に囲まれた敷地内にあり深さが40cmを測ることなどが挙げられる。なお、山茶碗など土坑の埋没時期を示すと思われる遺物が出土した土坑はSK16のみであり、土坑の平面形態や法量などは表3に掲載した。

## 6、畦畔状遺構(図77・86)

今回の調査では、調査中に擬似畦畔とは別に畦畔として残存していると認識した遺構(SN1・2)がある。それらはE区北端において直交して検出されたが、SN2は道路状遺構であるSD19に切られているか否かの判断ができず、時期的にはSD19と同時期か、SD19以前に作られたものと理解した。SN1・2はいずれも平面検出において、灰色シルト中に灰白色シルトが直線状に延びていることが容易に確認でき、畦畔の上面の幅は約20cm、下端は幅約40cm、田面との比高差は約10cmを測る。田面の土の堆積(図86)は水田耕作土を覆う4層、耕作土である5層、床土である6層から成る。そして、5層の上方には帯状の鉄斑がみられ、畦畔部分には帯状の鉄斑がみられなかつた。ま

た、5層と6層の境は不安定な堆積であった。

ところで、畦畔状の高まりが平面と断面で確認できたことと、土層の堆積ラインを引く時に鉄斑を考えないで土質の違いに留意した上で畦畔状の高まりを認識したことで、調査中はSN1とSN2を畦畔と断定していたのであるが、帶状の鉄斑が耕作土上方にみられる事実から、あるいは後世の畦畔によって作られた擬似畦畔の可能性も捨てきれないと考え、今回は畦畔状遺構として報告した。なお、この畦畔状遺構や耕作土である5層から出土した遺物は皆無であるため、その時期を言及するのは困難であるが、層位的には古代～中世の時間幅を想定できよう。

#### 7. 擬似畦畔(図77)

E～G区にかけて、遺構検出面がⅦ層直上であった箇所を中心に擬似畦畔(SN3～SN20)が検出された。擬似畦畔の周囲には鉄斑が無数に広がり、擬似畦畔とした箇所には鉄斑の密度が小さくなるか全くみられない状況で検出できた。擬似畦畔は南北方向に直線的に延びるもの(SN12～15、17～20)と東西方向に段違いに延びるもの(SN3～11)がある。南北方向の擬似畦畔間の距離はF区北端においてSN12とSN13間が9.9m、SN13とSN14間が9.9m、G区南端においてSN18とSN19間が10.1m、SN19とSN20間が10.3mを測り、東西方向の擬似畦畔間の距離はSN3とSN4間が17.0m、SN7とSN8間が15.3mを測る。

なお、擬似畦畔が検出できた面の上層にあたる2a層(わずかに2b層が残る)ではプラントオバールが多数検出されており、稲作が行われた可能性が高いと判断されている(第5章第6節参照)が、今回の調査では2a層上面や2a層中において畦畔は確認できなかった。これは上層水田などの攪拌により下層の畦畔や水田耕作土が破壊されたためと思われる。そして、そのために今回の調査で検出された擬似畦畔がどの層位で営田されたものかは判断できないが、明治21年作成の字絵図に示されている畦畔の位置とほぼ対応すること(第6章第10節参照)から、明治前後の水田畦畔がⅦ層直上に転写された可能性がある。

#### 8. 杖列(図77)

**SV1** D2グリッドにおいて検出された杖列である。Ⅱa層掘削中において検出し、SN2上に打ち込まれている2本の杖と他1本が出土した。

**SV2** F3～F11グリッドにおいて検出された杖列である。全体的にわずかに湾曲しているが南北方向にはほぼ直線的に延びており、その延長ライン上に擬似畦畔であるSN13が位置する。SV2もSV1と同様にⅡa層掘削中において検出している。

**SV3** D7グリッドにおいて検出された杖列である。全体の様相はわからないが、東西方向に直線的に延びているようである。SV3も他の杖列と同様にⅡa層掘削中において検出している。

**SV4・SV5** SD15の文章中で触れたので省略する。

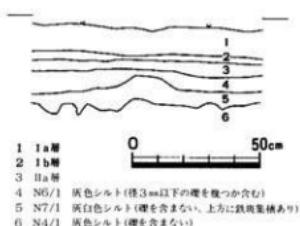


図86 SN2セクション図 (L=109,800m)

表2 掘立柱建物一覧表

遺構名	柱間	長軸×短軸 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	主軸	時期	その他の付属施設	挿図	図版
SH1	3間×2間	4.95×4.30	21.29	N-26°-W	Ⅲa期	北西側に1間×3間の付属施設あり、近接棟持柱建物	9	2
SH2	2間×2間	3.60×3.12	11.23	N-36°-W	Ⅱ期	近接棟持柱建物	11	2
SH3	2間×2間	3.00×2.82	8.46	N-17°-W	Ⅱ期	近接棟持柱建物	12	2
SH4	3間×2間	4.45×4.45	19.80	N-40°-W	Ⅲa期	北西側に1間×3間の付属施設あり、独立棟持柱建物	13	3
SH5	2間×2間	3.51×3.18	11.16	N-36°-W	Ⅱ期		13	3
SH6	2間×2間	2.58×2.49	6.42	N-3°-W	Ⅱ期	近接棟持柱建物	16	4
SH7	2間×2間	3.24×3.06	9.91	N-12°-W	Ⅱ期		17	4
SH8	2間×1間	3.24×2.70	8.75	N-10°-W	Ⅲa期		18	4
SH9	3間×2間	7.16×5.06	36.23	N-9°-E	Vb期以降		79	-
SH10	3間×2間	6.36×3.44	21.88	N-1°-W	Va期		80	-

表3 土坑一覧表

遺構名	グリッド	形態	埋土	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	時期	挿図	図版
SK1	B10	不定形	黒褐色砂質シルト	1.70×1.00×0.10	土師器	Ⅲb期	7	18
SK2	C14	不定形	黒褐色砂質シルト	0.60×0.60×0.15	土師器	Ⅲ期	33	-
SK3	E10	円形	褐灰色シルト	0.66×0.66×0.19	なし	Ⅳ期以降	77	-
SK4	G9	楕円形	褐灰色シルト	0.72×0.51×0.67	なし	Ⅳ期以降	77	-
SK5	欠番							
SK6	J15	不定形	黒褐色シルト	1.26×0.97×0.03	土師器	Ⅱ-Ⅲ期	-	18
SK7	J15	不定形	黒褐色シルト	2.20×2.04×0.05	土師器	Ⅲa期	30	18
SK8	欠番							
SK9	欠番							
SK10	H13	長方形	黒色シルト	1.12×0.72×0.07	土師器	Ⅱ-Ⅲ期	30	18
SK11	O16	方形	褐灰色シルト	1.90×1.24×0.03	なし	Ⅱ期	22	-
SK12	M18	円形	黒褐色シルト	0.84×0.84×0.10	土師器	Ⅱ-Ⅲ期	30	18
SK13	M18	円形	黒褐色シルト	0.38×0.36×0.06	なし	Ⅱ-Ⅲ期	30	18
SK14	L17	楕円形	黒褐色シルト	1.28×0.78×0.20	土師器	Ⅱ期	30	18
SK15	J18	円形	黒褐色シルト	1.08×0.57×0.09	なし	Ⅱ-Ⅲ期	-	-
SK16	K15	楕円形	褐灰色シルト	1.29×1.30×0.17	山茶碗	Vb期	77	-
SK17	J25	楕円形	褐灰色シルト	1.51×0.91×0.08	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK18	K25	楕円形	褐灰色シルト	2.70×0.52×0.28	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK19	欠番							
SK20	D54	不定形	褐灰色シルト	1.70×0.92×0.34	なし	Ⅳ期以降	78	-
SK21	F53	円形	褐灰色シルト	0.83×0.36×0.18	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK22	F53	不定形	褐灰色シルト	2.08×1.30×0.05	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK23	J54	円形	褐灰色シルト	0.26×0.17×0.07	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK24	G55	不定形	褐灰色シルト	1.55×0.62×0.21	なし	Ⅳ期以降	-	-
SK25	G52	円形	褐灰色シルト	0.98×0.36×0.13	なし	Ⅳ期以降	78	-
SK26	I54	円形	褐灰色シルト	1.01×0.53×0.40	土師器	Ⅳ期以降	78	-

表4 壁穴住居跡一覧表

遺構名	形態	長軸×短軸×深さ (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	主軸	周溝	地床炉	備考	挿図	図版	旧遺構名
SB 1	方形	3.53×3.35×0.08	11.8	N-3°-W	無	不明		19	5	SB 1
SB 2	方形	2.87×-×0.07		N-5°-W	無	不明		20	6	SB 2
SB 3	長方形	3.35×2.65×0.15	8.88	N-23°-W	有	(中央北寄)		21	7	SB 3
SB 4	方形	5.00×-×0.33		N-33°-W	有	不明	焼失家屋	22	7	SB 4
SB 5	菱形	3.38×3.32×0.13	11.2	N-39°-W	有	(中央南寄)	焼失家屋	23	10	SB 5
SB 6	方形	3.08×-×0.07		N-17°-W	無	不明	焼失家屋	25	12	SB 6
SB 7	方形	-×-×0.03		N-17°-W	有	(中央西寄)		26	13	SK 5
SB 8	隅丸方形	3.58×3.45×0.15	12.4	N-77°-W	無	(ほぼ中央)	焼失家屋	27	15	SB 8
SB 9	方形	4.15×3.93×0.10	16.3	N-17°-W	無	(中央西寄)	焼失家屋	28	17	SB 9

表5 土器集積・焼土一覧表

遺構名	グリッド	出土遺物	時期	挿図	図版	旧遺構名
SU 1	E 9	土師器壺 A 2	Ⅲ b 期	32	19	SU 8
SU 2	H 8	土師器壺 H	Ⅲ b 期	32	20	SU 10
SU 3	H 9	土師器小型壺	Ⅲ b 期	32	20	SU 7
SU 4	C 11	土師器壺底部 b	Ⅲ b 期	32	20	SU 9
SU 5	C 14	土師器高杯 C、甕 B1e	Ⅲ a ~ b 期	33	20	SU 4
SU 6	G 55	縄文土器深鉢	I 期	32	20	SU 15
SU 7	B 16(SD10内)	琴柱、須恵器杯蓋など	Ⅲ b 期	45	30	
SU 8	B 16(SD10内)	箱物	Ⅲ b 期	45	30	
SU 9	C 15(SD10内)	土師器小型壺、高杯 G など	Ⅲ a ~ b 期	45	32	SU 12
SU 10	D 15(SD10内)	垂木、土師器甕 B1c など	Ⅲ a ~ b 期	41	31	
SU 11	E 15(SD10内)	豎柱、土師器甕 C1 など	Ⅱ 期	46	30	
SU 12	E 15(SD10内)	須恵器蓋杯、鏡など	Ⅲ b 期	46	34	
SU 13	F 15(SD10内)	須恵器蓋杯、土師器鉢 D など	Ⅲ b 期	47	34	
SU 14	H 17(SD10内)	土師器甕 B1c、高杯 C など	Ⅱ 期	45	33	
SU 15	E 18(SD10内)	土師器甕 B1f など	Ⅱ 期	48	37	
SU 16	D 19(SD10内)	土師器小型壺など	Ⅱ 期	48	38	
SU 17	D 19(SD10内)	土師器壺 C、高杯 C など	Ⅱ 期	48	38	
SU 18	F 20(SD10内)	土師器壺 G	Ⅲ a 期	48	36	
SU 19	K 20(SD12内)	土師器甕 B1、高杯 A	Ⅱ 期	49	41	
SU 20	H 10(SD 7内)	建築部材	Ⅲ b 期	38	27	
SU 21	J 13(SD 7内)	土師器甕 B1c	Ⅲ b 期	38	26	
SU 22	J 13(SD 7内)	多量の種子など	Ⅲ b 期	39	26	
SU 23	H 54	縄文土器深鉢	I 期	-	20	SU 14
SC 1	J 16	なし	Ⅱ ~ Ⅲ b 期	31	19	SC 1
SC 2	P 16	なし	Ⅱ ~ Ⅲ b 期	31	-	SC 2
SC 3	P 16	なし	Ⅱ ~ Ⅲ b 期	31	-	SC 3
SC 4	P 17	なし	Ⅱ ~ Ⅲ b 期	31	19	SC 4

表6 溝一覧表

遺構名	グリッド	長さ×幅×深さ	備考	出土遺物	時期	掉 国	国版	旧遺構名
SD 1	B 7～G 5	(27.5)×1.0×0.2		土	Ⅲ b 期	7	—	SD12
SD 2	L 6～N 6	(93)×0.7×0.1		なし	Ⅲ b 期	7	—	SD27
SD 3	N 6～N 7	3.1×0.5×0.1		なし	Ⅲ b 期	7	—	SD28
SD 4	B 10～N 8	(66.0)×9.0×0.6	SW 1・2を伴う	土・須・木	Ⅲ b 期	34～36	21～24	SD 7
SD 5	B 7～C 8	(4.2)×3.0×0.3	SD 4より分岐	土・須・木	Ⅲ b 期	36	—	SD 7
SD 6	B 11～C 10	(6.6)×0.6×0.2		須	Ⅲ b 期	7	—	SD 3
SD 7	B 13～N 8	(81.0)×—×0.9	SD 4より分岐	土・須・木	Ⅲ b 期	37～39	25～27	SD 1
SD 8	J 13～M 13	(17.1)×5.1×0.3	SD 7より分岐	土・須・木	Ⅲ b 期	37	—	SD 1
SD 9	B 12～C 12	(3.1)×3.6×0.5	SD 7より分岐	土・須・木	Ⅲ b 期	39	—	SD 1
SD10	B 16～H 21	(72.0)×12.5×1.2		土・須・木	Ⅱ～Ⅲ b 期	41～48	28～38	SD 2・6
SD11	J 16～K 16	4.8×0.3×0.05	SH 1に伴う	なし	Ⅲ a 期	9	2	SD16
SD12	I 21～P 21	(34.9)×—×0.9		土・須・木	Ⅱ～Ⅲ a 期	49	39～42	SD17
SD13	F 23～K 23	(24.0)×—×0.9	杭列を伴う	土・須・木	Ⅱ～Ⅲ a 期	50	43	SD19
SD14	B 9～I 7	(36.0)×7.8×1.0	SW 3～7を伴う	土・木	Ⅱ～Ⅲ a 期	52	44	SD22
SD15	B 11～H 9	(30.0)×3.1×1.0	SW 8・9を伴う	土・木	Ⅱ～Ⅲ a 期	52	45	SD23
SD16	E 11～L 10	(28.8)×—×1.0		土・木	Ⅱ～Ⅲ a 期	52	45	SD24
SD17	H 9～J 8	(8.0)×2.0×0.4		土	Ⅱ～Ⅲ a 期	52	45	SD26
SD18	D 9	(3.0)×0.5×0.4	SD14・15をつなぐ	なし	Ⅱ～Ⅲ a 期	56	46	SD29
SD19	D 2～E 15	(68.5)×3.8×0.2	道路状遺構	土・須・木	Ⅳ 期	82・83	61～62	SD13
SD20	E 24～D 27	(15.8)×3.3×0.3	道路状遺構	土・須・木	Ⅳ 期	84	63	SD18
SD21	B 12～M 13	(42.3)×2.7×0.1		山	V a 期	85	63・64	SD15
SD22	D 54～E 57	(16.2)×0.7×0.1		灰	不明	78	—	SD21
SD23	E 55～E 57	(11.4)×0.5×0.1		なし	不明	78	—	SD25
SD24	E 55～G 55	9.2×0.4×0.2		須・山	V a 期	78	—	SD20
NR 1	D 56～G 57	(18.0)×1.5×0.2		繩・土	I～II 期	8	—	NR 1
NR 2	G 50～L 51	(27.0)×—×1.26		土	I～V 期	51	—	NR 2

土：土師器、須：須恵器、木：木製品、山：山茶碗、灰：灰陶器、繩：繩文土器

表7 遺物出土ピット一覧表

遺構名	グリッド	遺物名	遺物の時期	遺構名	グリッド	遺物名	遺物の時期
P 026(SHI1)	I 15	土師器底部 a	II 期	P 330(SH10)	J 55	小皿 A・土師器	V a 期
P 028(SHI1)	J 15	土師器蓋 A 3	II 期	P 357(SH10)	K 54	小皿 A	V a 期
P 029(SHI1)	J 15	土師器		P 366	L 53	山茶碗 A	V a 期
P 039	B 14	土師器	Ⅲ b 期	P 367	L 53	山茶碗 A	
P 040	B 14	土師器・須恵器	Ⅲ b 期	P 372(SA5)	L 53	山茶碗 A	V a 期
P 045	B 18	土師器		P 377	K 53	山茶碗 A	V a 期
P 046	B 18	土師器		P 379(SA5)	K 53	山茶碗 A・B・土師器	V a 期
P 049	C 21	土師器		P 396	I 54	土師器	
P 106	H 20	土師器		P 400(SA6)	I 53	小皿 A	V a 期
P 207	H 16	土師器		P 422	J 56	山茶碗 A	
P 215	D 16	土師器		P 423	J 56	山茶碗 A	V b 期
P 216	D 16	土師器		P 430	I 55	山茶碗 A	V a 期
P 276	O 25	土師器		P 468(SH10)	J 54	山茶碗 A	V a 期
P 277	G 20	土師器	Ⅲ a 期	P 563	E 53	土師器	
P 289	L 56	山茶碗 B・クロコ土師器	V a 期	P 692	I 54	山茶碗 A	V a 期
P 291	L 56	山茶碗 A	V a 期	P 697	F 56	土師器	
P 292	K 56	土師器	II 期	P 758	E 53	土師器	Ⅲ期
P 302	K 56	土師器		P 793	E 55	土師器	
P 314	L 55	山茶碗 A	V a 期	P 819	K 56	山茶碗 A	V a 期

## 第4章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器約48,000点、石器約100点、木器約1,400点を数える。時期的には縄文時代から近世まで多時期にわたり、そのうち古墳時代の土器と木製品が最も多く、縄文土器と弥生土器、近世陶磁器は極少量の出土であった。そして、本報告書に記載した土器・石器の数は782点、木器の数は193点である。これらのうち、遺構出土の遺物は器種不明品を含めて細片まで極力掲載するように心がけ、包含層出土の遺物は時期ないしは産地が特定しやすい破片と墨書き器を主に掲載した。また、遺構出土の土器の時期とその切り合い関係から、以下のように本遺跡の時期を7期に分け、土器の併行関係を明示するために赤塚氏の土器様式名(赤塚1990・1994)を記した。なお、II期の遺構のうち、明らかに久山期か元屋敷期～松河戸I式1段階に分けられる遺構は「II期前半・II期後半」と記載した。

I期-弥生後期以前

II期-弥生末～古墳前期(廻間II式～松河戸I式1段階併行期)

IIIa期-古墳前期(松河戸I式2段階～II式併行期)

IIIb期-古墳中期(字田式併行期)

IV期-古代

Va期-中世前期

Vb期-中世後期

以下、土器・石器、木製品の順に記す。

## 第1節 土器・石器

### 1. 分類

#### ①縄文土器

破片が少ないため器種のみ掲載した。

#### ②弥生土器～土師器

##### ●甕

##### 【口縁分類】

A : S字状口縁を有するもの(A～D類は既存の分類(赤塚1990)に従う)

A 1 : A類(462など)、A 2 : B類(463など)、A 3 : C類(464など)、A 4 : D類(467など)、

A 5 : 山陰系口縁(143など)

B : <字状ないしは直立気味な口縁を有するもの

B 1 : 端部を丸く納めるか尖る(1など)

B 2 : 端部面取り(296など)

B 3 : 口縁端部が肥厚するもの、いわゆる布留式甕(168など)

B 4 : B 1・B 2類のうち他地域の様相が強いもの(383など)

C : 有段(稜)口縁を有するもの(169など)

D : 受口状口縁を有するもの(46など)

【底部形態】

a : 台付きで台部の器壁が薄い(S字縫の脚)(363など)

b : 台付きで台部の器壁が厚い(555など)

c : 平底(単独で立つもの)(399など)

d : リング状(粘土紐の幅が狭い)(172など)

e : リング状(粘土紐の幅が太い)(4など)

f : 体部と底部の境に稜がみられない丸底(151など)

g : 体部と底部の境に稜がみられる丸底(283など)

●小型壺 底部形態により細分が可能であるが、本報告ではすべて一括する(237など)。

●壺

A : 口縁部が外反ないしは直立気味のもの

A 1 : 中型品(179など)、A 2 : 大型品(443など)

B : 広口壺(510など)

C : 有段口縁を有するもの(311など)

D : パレス壺(514など)

E : 柳ヶ坪型壺(403など)

F : 二重口縁壺

G : 他地域の様相が強いもの(176など)

H : その他

●高杯

A : 杯部が深く、内焼脚を有するもの、いわゆる有段高杯(411など)

B : 杯部がやや深く、外反脚を有するもの、いわゆる有段高杯(415など)

C : 杯部が浅く、直線的ないしは外反気味に立ち上がるもの。脚部は屈折ないしは屈曲する。

なお、C類は脚柱部外面に縦方向のヘラナデが施されるもの(191など)、脚柱部外面に縦方向の板ナデが施され、杯底部が傾斜し口径が大きいもの(187など)、脚柱部外面に縦方向の板ナデが施され、杯底部が傾斜し口径が小さいもの(183など)、脚柱部外面に縦方向の板ナデが施され、杯底部が水平に近いもの(317など)、などの4つに細分できるが、それらの漸移的形態をもつ個体が少なくないため、本報告ではC類はすべて一括して取り扱う。

D : 杯部外面に突帯を貼り付けるもの(413など)

E : C類のうち杯部が楕形のもの(98など)

F : 杯部形態が皿状で口径の小さいもの(528など)

G : その他

また、脚部のみの個体も多いので、脚部形態も分類した。

1 : 横線文と穿孔が施されているもの(529など)

2 : 穿孔のみが施されているもの(530など)

3 : 穿孔がなく、脚柱部と脚裾部の境が明瞭なもの(536など)

- 4：穿孔がなく、脚柱部と脚裾部の境が不明瞭なもの(321など)  
 5：穿孔がなく、脚裾部内面が強い指ナデにより湾曲しているもの(98など)  
 6：その他

なお、高杯の杯部と脚部の接合方法については、既存の分類(中浦1992)を参考として、以下のように分類した(図87)。

- A 1 a：杯部に脚部を接合し、脚部上端が閉じているもので、脚柱部内面が中空なもの。  
 A 1 b：杯部に脚部を接合し、脚部上端が閉じているもので、脚柱部内面が中実なもの。  
 A 2 a：杯部に脚部を接合し、脚部上端が開いているもので、杯底部外側が突出しないもの。  
 A 2 b：杯部に脚部を接合し、脚部上端が開いているもので、杯底部外側が突出するもの。  
 A 2 c：杯部に脚部を接合し、脚部上端が開いているもので、脚柱部内面中央に下から粘土を貼り付けるもの。  
 A 2 d：杯部に脚部を接合し、脚部上端が開いているもので、脚柱部内面が中実なもの。  
 B 1 a：脚部上端側面に杯部を作り足し、脚部上端が閉じているもの。  
 B 2 a：脚部上端側面に杯部を作り足し、脚部上端が開いているもの。

#### ●器台

- A：脚部がハの字状に広がるもの(408など)  
 B：他地域の様相が強いもの(409など)

#### ●鉢

- A：小型で、体部から口縁部にかけて緩やかに丸みを帯びるもの(337など)  
 B：小型で、口縁端部が屈折するもの(341など)  
 C：大型で、口縁部が屈折するもの(55)  
 D：有孔鉢(220など)  
 E：屈曲口縁鉢(541)

#### ●手捏ね土器(133など)

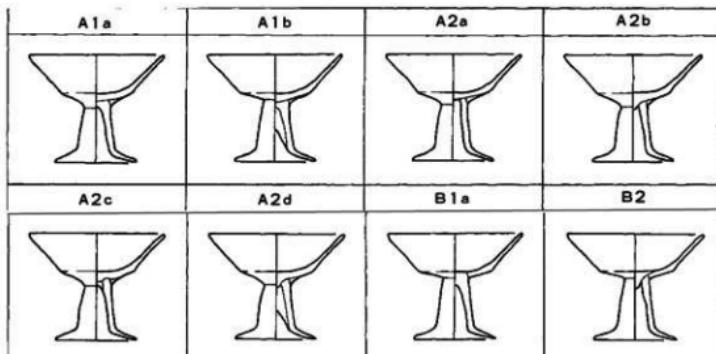


図87 高杯の接合方法

### ③須恵器

- ・古墳時代の須恵器···杯身A、杯蓋A、甕A、高杯、無蓋高杯、甕など
- ・古代の須恵器···杯身B(無高台)、杯身C(有高台)、杯蓋B(つまみあり)、  
杯蓋C(つまみなし)、甕B、平瓶など

須恵器のうち古墳時代のものは産地が特定できなかった個体があるので、蓋杯の胎土と口縁形態を分類した。なお、口縁形態は既存の分類などを参考(野上1980・斎藤1989)とした。

#### 【胎土分類】

断面色調 A:灰色~青灰色、B:灰白色、C:灰赤色(セピア色)

砂粒 1:ほとんどみられない、2:幾つか~多く含む

黒色のタール状の吹き出し a:(ほとんど)みられない、b:顯著にみられる

なお、今回の調査で確認できた組み合わせはA 1 a、A 2 a、B 1 aの3種類であり、その産地はおおよそA 1 a類は猿投、A 2 aは産地不明、B 1 a類は美濃須衛と想定される。

#### 【口縁形態】

A:丸い、B:鋭い、C:内傾する凹面、D:内傾する段、E:内傾する平面、F:1条の沈線

#### ④灰釉陶器

破片が少ないため器種のみ掲載した。

#### ⑤山茶碗・小碗・小皿・鉢

荒肌手の胎土を有するものをA、均質手の胎土を有するものをBとした。

#### ⑥その他の土器

古瀬戸、常滑、中国磁器(青磁、白磁、青白磁)、中世土師器、瓦質土器などがある。

#### ⑦石器

破片数が少ないため器種のみ掲載した。

なお、土器観察表(表11~45)の土器胎土中の鉱物は肉眼観察にて行い、その特徴は六条山遺跡(寺沢他1980、P39)を参考とした。また、石器の法量は長さ、幅、厚さを計測し、土器の口径、底径、器高の欄にそれぞれ記入した。

## 2、各遺構の遺物

### ●豎穴住居跡

**SB 1**(図88) 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち8点(1~8)を図示した。1~4は甕B 1であり、出土状況から1と2、3と4がそれぞれ同一個体である可能性が高い。6は器種不明とした。内面が浅黄橙色、外面が橙色を呈し、外面の半分が平坦である。そして、その平坦面に線刻が施されている。本住居跡の時期は7・8の高杯の杯部形態からⅢ a期と推定される。

**SB 2**(図88) 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち5点(9~13)を図示した。11は鉢Aであり、内面に縱方向のミガキが認められ、口縁部はわずかに外反している。12も鉢Aとしたが丸底の底部を有する。そして、器面の剥落が激しく、胎土中には5mm程度の礫を多く含む。13は小型壺であり、体部内面に斜め方向の指ナデ痕が顯著に残る。なお、本住居跡の時期は土器全体の様相から判断してⅢ a期と推定される。

**SB 3 (図88)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち3点(14~16)を図示した。14は甕底部bとしたが、器壁が薄く台部が小さいため断定はできない。なお、脚台と体部の境は脚台内面から粘土を貼り付けている。16は床面直上に据えられていた砥石であり、砥面が礫の長軸ラインに沿って凹んでいる。なお、本住居跡の時期は埋土中から屈折脚高杯の脚柱部片が出土していることからⅢa期と推定される。

**SB 4 (図89)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち2点(17・18)を図示した。いずれも甕A 3の口縁部破片であり遺存状態はよくない。なお、本住居跡の時期は甕A 3が出土していることからⅡ期後半と推定される。

**SB 5 (図89)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち11点(19~29)を図示した。19は胎土中に直径2mm以下の小礫を非常に多く含む甕B 1dである。底部と体部下方の接合方法は「相欠はぎ接合」と呼称されているもの(佐野1998)に類似する。22は器種不明であり、頸部が明瞭に屈折し、口縁部は外反気味に約2.5cm立ち上がる。26は高杯Cであり、2次的に被熱している。被熱部分にはあばた状の凹みが幾つか確認でき、灰白色の土(スリップ?)が残存している。27は高杯脚3であり、脚柱部と脚裾部の接合痕が明瞭に残る資料である。なお、本住居跡の時期は高杯の形態からⅢa期と推定される。

**SB 6 (図89・90)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち11点(30~38・44・45)を図示した。34は甕底部aであり、体部内面周縁に黒色有機物が付着している。36は鉢Cであり、口縁部と体部の境に一条の沈線状の凹みがみられ、その器壁は極めて薄い。37は高杯Bであり、脚柱部にかすかに穿孔の痕跡が残る。杯部は直線的に開き、その器壁は36と同様に極めて薄い。なお、本住居跡の時期は土器全体の様相からⅡ期後半と推定される。

**SB 7 (図89)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち2点(39・40)を図示した。39は口縁端部に面を有する甕B 2で、頸部長が比較的長い。なお、本住居跡の時期は土器全体の様相からⅡ期後半と推定される。

**SB 8 (図89)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち3点(41~43)を図示した。41は甕B 2であり、頸部がわずかに内彎している。本住居跡の時期は出土遺物のみでは断定できないが、内彎する頸部を有する甕の存在や、SB 9と埋土が類似し、しかもSB 9の出土遺物と接合する破片が存在することなどから、本住居跡もSB 9と同時期のⅡ期前半と推定される。

**SB 9 (図90)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち7点(46~52)を図示した。46は甕Dであり、体部外面から口縁部内面まで赤彩が施されている。頸部には穿孔が確認でき、おそらく3ヶ所に施されていた可能性が高い。50は高杯の杯部破片の可能性が高く、外面に線刻が施されている。52は高杯Gであり、杯部が丸みを帯び、口縁端部外面に2条以上の沈線が施されている。なお、本住居跡の時期はS字甕がみられないことや、受口甕と外面沈線を有する高杯が存在することなどから、Ⅱ期前半と推定される。

#### ●掘立柱建物・柵列

古墳時代の掘立柱建物と柵列のうち、ピット内から出土した遺物は極めて少ない。それらの内訳は、SH 1を構成するP26から出土した甕底部a、P28から出土した甕A 3、P29から出土した土師器甕の体部破片のみであり、他の掘立柱建物からは確認できなかった。SH 1の出土遺物はいずれも

Ⅱ期に属するが、その出土位置が柱抜き取り穴内か、掘り方埋め戻し土内かの確認ができなかったので、出土遺物のみからSH1の時期は決定できない。

中世においても、掘立柱建物と柵列を構成するピットからの出土遺物は少ない。それらの内訳は、SH10を構成するP330・357から出土した小皿A、P468から出土した山茶碗A、SA5を構成するP372・379から出土した山茶碗A・山茶碗B、SA6を構成するP400から出土した小皿Aのみであり、これらはいずれも藤澤編年(藤澤1994)の4~6型式に属し、SH10やSA5・6が位置する場所の包含層中からも同時期の遺物が集中しているので、これらの遺構の時期はⅤa期と推定される。

#### ●土坑・ピット・土器集積

**SK1(図90)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち2点(57・58)を図示した。本遺構の時期は高杯(57)の形態からⅢb期と推定される。

**SK7(図91)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち5点(59~64)を図示した。59は甕B1であり、口縁部が他の甕に比べて若干短い。62は脚柱部中程に粘土接合痕がほぼ水平に確認でき、その接合痕に沿って土器が割れている。なお、本遺構の時期は高杯の形態からⅢa期と推定される。

**SK14(図90)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち4点(53~56)を図示した。54は甕B3であり、その口縁部は肥厚し、体部内面は頸部との境付近まで斜め方向のケズリが施されている。55は鉢Cであり、口縁部と体部の境の内面には明瞭な稜を作り出しているが、外面は緩やかに屈曲している。口縁端部は強いナデによりわずかにはねあげ口縁状になる箇所もみられるが、全体的には尖っている。器面が摩滅しているため調整は定かではないが、口縁部内面付近にはわずかに横~斜め方向のミガキの痕跡が認められる。なお、本遺構の時期は土器全体の様相からⅢ期後半と推定される。

**P40(図91)** 3点(65~67)を図示した。65は須恵器高杯の脚部片であり、脚裾部外面に一条の突帯を有する。67は石器であり、表面は筋理に沿って剥落している。中央付近には直径11mmの穿孔が施され、表面の上下2ヶ所には直径約4mmの円形の凹みがみられる。なお、本遺構の時期は須恵器が出土していることからⅢb期と推定される。

**SU1(図91)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち1点(68)を図示した。68は壺A2であり、頸部中程でわずかに屈曲し、口縁端部はほぼ垂直方向に面を有している。なお、本遺構の時期は遺構検出面の位置からⅢb期と推定される。

**SU2(図91)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち3点(69~71)を図示した。これらはいずれも胎土や色調が類似し、出土状況などを想定すると同一個体である可能性が高いといえる。71は体部外面に線刻が施されているが、文様か記号かの判断ができない。なお、本遺構の時期は遺構検出面の位置からⅢb期と推定される。

**SU3(図91)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち1点(73)を図示した。73は小型壺であり、器壁が非常に薄く、頸部と体部の境には明瞭な稜が作り出されている。なお、本遺構の時期は遺構検出面の位置からⅢb期と推定される。

**SU4(図91)** 出土遺物の内訳は表8のとおりであり、そのうち1点(74)を図示した。74は甕底

部 b であり、脚台と体部の接合方法は図87の A 2 b に類似する。なお、本遺構の時期は遺構検出面の位置から III b 期と推定される。

**SU 5 (図92)** 出土遺物の内訳は表 8 のとおりであり、そのうち 6 点(77~82)を図示した。77は甕 B 1 e であり、内外面に明確なお焦げの痕跡は確認できない。79~81は高杯 C であり、79と80は内外面とも杯底部と上方の境が比較的明瞭に分かれるが、81は不明瞭であり、脚部の屈折度も81は80に比べて弱い。また、81は杯部外面上方と杯部内面に煤が付着しており、杯底部中央付近のみ円形に煤がみられない。また、脚にも煤がみられない点では、台付甕の煤の付着と類似しており、あるいは一時に煮沸具として使用された時期があったのかもしれない。なお、本遺構の時期は高杯の形態から III a 期と推定される。

**SU 6 (図91)** 出土遺物の内訳は表 8 のとおりであり、そのうち 1 点(75)を図示した。75は縄文土器の甕であり、底部の器壁は厚く、体部は直線的に立ち上がる。なお、本遺構の時期は I 期と推定される。

**SU23(図91)** 出土遺物の内訳は表 8 のとおりであり、そのうち 1 点(76)を図示した。なお、本遺構の時期は I 期と推定される。

#### ●溝

**SD 4 (図92・93)** 出土遺物の内訳は表 8 のとおりであり、そのうち 20 点(83~102)を図示した。86は須恵器の高杯蓋であり、天井部内面に一方向ナデがみられる。87は須恵器の甕であり、口縁端部が外側に折り返され、頭部外面に棒状工具による波状文が施されている。93は甕 B 1 であり、体部外面向下に煤が付着しているが、内面にはみられない。また、口縁部は短く立ち上がり、体部下方にはいわゆる相欠はぎ接合が顕著に残る。94は鉢 D であり、体部中程で稜をもち口縁部がわずかに外反している。体部外面には褐色の有機物が直径 2 cm 程度の範囲内に付着した痕跡が数ヶ所でみられ、内面下方には褐灰色を呈する付着物が確認できる。95は甕底部 d であり、体部外面向下に縦ハケがみられ、その上方に縦ハケを切るように斜めハケが施されている。98は高杯 E である。脚裾部内面は強い横ナデにより大きく湾曲し、脚柱部は太くて低い。杯部は上方と下方の境に稜がみられず丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は横ナデにより外反している。杯部と脚部の接合部は、脚柱部側より粘土を貼り付けた後に一方向に伸ばしており、その長さは約 3.5 cm を測る。99は高杯 G であり、浅くて器壁の厚い杯部を有する。101は鉢 A であり、平底で厚手の底部から体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反気味に仕上げられている。102は持ち底石であり、底面が 4 面確認できる。なお、本遺構の時期は III b 期と推定される。

**SD 7 (図93~95)** 出土遺物の内訳は表 8 のとおりであり、そのうち 33 点(103~135)を図示した。103は須恵器杯蓋 A であり、ほぼ完形で出土した。今回の調査で出土した杯蓋 A のなかでは比較的法量が大きく、受部も外側に開いているという点が特徴である。104は杯蓋 A であり、焼成不良のためかやや軟質であり、天井部外面に煤が付着している。106・107は杯身 A であり、106は法量が極めて大きいが、107は口径 9.3 cm で小型である。109は高杯蓋であり、焼成不良のためかやや軟質である。口縁端部は丸く、天井部は大きく張り出し、つまみ部上面の凹みは深い。110は無蓋高杯であり、杯部外面に波状文が施され、杯底部内面にはヘラ記号が確認できる。112は甕 B 1 c である。底部外面から上方に 3 cm, 9 cm, 16 cm の 3箇所で土器がほぼ水平に割れていることから、土器製作時

において口縁部を含めて合計4回の乾燥段階を経た可能性が指摘できる。底部は平底で、体部は卵形を呈し、口縁端部は肥厚している。また、体部内外面ともに煤が確認できない。逆に113は体部内外面ともに煤がみられ、内面上方にはバッチ状に褐色の広がりが確認できる。また、体部外面下方にはいわゆる相欠はぎ接合が残る。120と121は同一個体の可能性が高い。120は体部内外面とともに斜め方向の板ナデが施され、口縁部中程には口縁部を外反させる際に生じたと思われる稜が残る。121は底部外面を突出させ、体部に脚台を接合し、脚台上端が開いているものである。122は甕B1であり、口縁部内面に粘土を貼り付けているため、その器壁は厚い。125は高杯Eであり、脚部内面が大きく湾曲し、端部がわずかに突出する。杯部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は横ナデにより外反して端部は尖る。また、他の高杯Eと比較して杯底部内面の面積が広いことが特徴として挙げられる。131は体部外面にハケメが残る鉢Aであり、体部内外面に煤が付着している。133は手捏ね土器であり、断面は橙色を呈するが器表面は灰白色を呈し、あるいは化粧土が塗られているのかもしれない。134は台石であり、表裏面中央付近に敲打痕がみられる。なお、本遺構の時期はⅢb期と推定される。

**SD10下層(図96~102)** 出土遺物の内訳は表8~9のとおりであり、そのうち108点(136~144・146~158・160~239・278・311・312・314・326・352)を図示した。136は今回の調査で出土した甕A3のうち最も残りのよい土器である。体部内面下方と体部外面中程、口縁部外面に煤が付着しており、頸部内面に横ハケ、屈曲部外面に一条の沈線が施されている。137は甕底部aであり、脚台内面上方が黒色を呈している。これは煤か黒斑かの判断ができない。143は甕A5であり、口縁部と頸部の境に稜を有し、口縁部は長く外側に直線的に伸び、端部には一条の沈線状の凹みを有する。また、外面には全面に煤が付着しているが、内面にはみられない。144・146・147は甕B1であり、144は体部外面下方に帶状に煤が付着しているが、内面にはみられない。146は他の甕に比べて口縁部が長く、直線的に伸びていることが特徴である。147は体部内面に斜め方向のケズリ調整がなされている。148は甕B1dであり、球形に近い体部を呈する。体部内外面上方には非常に細かいハケメがみられ、体部内面下方と体部外面中程、口縁部外面に煤が付着している。149は甕B1cであり、底部を一方に向かって削ることで平底を作り出している。体部～口縁部外面にはハケメが施されているが、口縁部外面は横ナデによりなで消されている。なお、煤は外面と内面下方に付着しており、内面上方は黒色を呈するが煤か黒斑かの判断ができない。150は甕B1dであり、残された接合痕から判断して、112と同様に土器製作時において口縁部を含めて合計4回の乾燥段階を経た可能性が指摘できる。体部外面下方は土器作成時の失敗のためか大きく凹んでおり、その直下の粘土接合部には外面から一条の粘土紐を貼り付け修補した痕跡が確認できる。151は甕B1fであり、体部内外面下方と口縁部外面に煤が付着しているが、底部外面中央から直径約6cmの範囲内にのみ煤がみられない。また、底部内面は平坦面がつくられ、底部の器壁が厚い。152は甕B1fであり、体部内面の粘土接合痕が明瞭に残り、口縁部は大きく歪んでいる。155は甕B1dであり、丸底の底部に粘土紐をリング状に貼り付け平底とし、口縁部は長く直立気味に立ち上がる。煤は体部外面下方と底部内面にみられ、体部内面中程には帶状、ないしはバッチ状に確認できる。157は甕B1fであり、体部が球形を呈し、口縁部が比較的短い。煤は体部外面中程と底部内面、および体部内面にバッチ状に付着している。158は全体の形が歪んでおり、体部内面の粘土接合痕が明瞭に残る。167は甕Cfであり、体部は球形を呈し、口縁

部はS字状、ないしは受口状に屈曲している。煤は体部内面下方と外面にみられるが、底部外面中央付近には直径約6cmの範囲内の確認できない。168は壺B3であり、体部外面には壺A3と同様に斜めハケ後横ハケが施されている。169は壺Cであり、口縁部がS字状、ないしは受口状に屈曲し、端部は面取りされている。175・176は壺Gであり、頸部と口縁部の境に明瞭な稜を有し、端部は面取り気味に仕上げられている。また、胎土は他の土器に比べて白い印象を受ける。なお、176の体部外面には斜めハケが施されている。178は壺A2である。底部は平底で、体部は中程に最大径をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面には最大径より下位に煤が付着しており、内面はバッチ状に褐灰色化している。179は壺A1であり、丸底の底部に粘土紐を貼り付けて平底としている。口縁部は長く直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。182・183・185・187・191・193・196・198・199は高杯Cである。182は脚柱部外面に縱方向のヘラナデが施され、杯部内面は底部と体部の境が不明瞭である。183は杯部の立ち上がりの角度が他と比べて急で、器面の状態から2次的に被熱している可能性が指摘できる。185は杯部と脚裾部が短い小型の高杯である。187は杯底部と体部の境が内外面とも不明瞭な高杯であり、口縁部外面に粘土接合痕が残る。191は脚柱部外面に縱方向のヘラナデが顕著に残り、杯底部外面は不定方向のヘラケズリ痕が残る。193は脚柱部外面から杯部内面にかけてハケメがナデ消されず残っており、ハケの方向は杯底部外面が右上がり、杯部外面が左上がりで、その関係は羽状となる。196は口縁部周辺のみ煤が付着している。198・199は杯底部が扁平でその直径が大きい点で他の高杯と様相が異なり、198は口縁部周辺に煤が付着している。203は高杯脚1であり、脚柱部外面に横線文が施されている。SD10下層出土遺物のなかでは最も古い時期の資料であり、周辺からの流れ込みの可能性が高い。211は高杯脚4であり、重量感のある個体である。脚裾部と脚柱部の接合痕が明瞭に残り、外面と杯部内面に細かいハケメが残る。214は高杯脚3であり、脚柱部が中実で、脚端部内面に平坦面を有する。217は器台Bとした。口縁部に垂下稜を有し、縁帯部分に4条の沈線を施している。また、他の土器に比べて胎土が白い。218は器台Aであり、脚部内面に煤が付着している。220は鉢Dであり、ほぼ完存している。体部外面に斜めハケ、内面に横一斜めハケが施され、口縁部内面には一状の粘土紐を貼り付け、幅2.0cm前後の縁帯を作り出している。また、外面の一部には煤が付着している。221・222は鉢Cであり、221の外面にはハケメが残るが222にはみられない。また、221の体部と口縁部の境は凹んでいるが、222には1条の沈線が巡らされている。なお、222の底部には一条の粘土紐をリング状に貼り付け、平底を作り出している。223～239は小型壺であり、225・228・231・233・235・239は明らかに平底を意識して作成されており、他は平坦面がみられない。233は体部の丸みが少なく、口縁部は短く外反する。237はSD10下層の遺物のなかでは最も小さく、底部を絞り込むように製作された痕跡が残る(図版77参照)。278は壺B1dであり、体部は球形を呈し、体部外面中程に横方向のケズリ調整がなされる。312は壺Cであり、頸部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直線的に伸びる。また、器壁が厚く、口縁部内面には赤彩が施されている。314は高杯Gとしたが、高杯にしては胎土が粗い。また、口径が24.0cmと大きく、杯部外面下方には縱方向のヘラケズリ調整痕が残る。なお、本遺構の時期はⅡ～Ⅲa期までの遺物がみられるが、その主体はⅡ期と思われる。

**SD10上層(図103～110)** 出土遺物の内訳は表9のとおりであり、そのうち115点(145・159・240・277・279～310・313・315～325・327～351・353～358)を図示した。159は壺B1dであ

り、体部上方の1ヶ所に焼成前穿孔を有する。平底の底部から体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は短く外反する。また煤は器表面に全く確認できず、穿孔を土器の正面とすると、その裏面に直径約5cmの黒斑がみられる。243・246は杯蓋Aであり、243は琴柱とともに出土している。ほぼ完形の状態で出土し、天井部外面には一方向ナデが施されている。246は天井部外面に「X」のヘラ記号が施されている。251は完形で出土した杯身Aであり、底部は回転ヘラ削りにより平坦面が作り出され、内面には黒褐色の付着物がみられる。255は高杯蓋であり、つまみ部上面にヘラ記号が施されている。259は高杯であり、脚裾部外面に一条の突帶を有する。また、脚部内面と杯底部に自然釉が降灰しており、脚裾部内面には別個体の破片が溶着している。なお、自然釉の降灰具合や法量などから、253と同一個体の可能性が高い。263は甕Cであり、屈曲部外面に体部調整の際に付いたと思われる工具痕が刺突状に残る。265・268は甕B 1cであり、外面全面にハケメが施され、体部外面下方と底部内面に煤が付着している。268は平底であり、正位で据えると口縁部は大きく傾く。体部は球形を呈し、頸部径は他の甕と比べて狭い。269は胎土が灰白色を呈する甕B 1であり、体部内外面下方に煤が付着している。273は甕C fであり、口縁部がS字状ないしは受口状に屈曲し、端部に平坦面を有する。底部は丸底で、底部内面には中央から若干ずれた位置にパッチ状に煤が付着している。277は甕B 1で胎土が灰白色を呈し、口縁部はコの字状に屈折している。282は甕B 1としたが、丸底になる可能性が高い。体部外面には全面に煤が付着しているが、内面にはパッチ状の痕跡が薄く残るのみである。283は甕B 1gであり、底部に一方向のケズリ調整がなされ体部と底部の境が明瞭であるが、平底ではない。体部の最大径は中程上方に位置し、口縁部は短く外反する。また、体部内外面に煤が付着している。284は甕B 1cであり、体部最大径が下方に位置するやや異質な土器である。体部外面の縦ハケは最大径より下方に施されていないが、内面は口縁部を含めて全面に確認できる。285・292～294は甕B 1であり、285は頸部径が小さく、口縁部が直立気味に立ち上がる。292は口縁部が直立気味に立ち上がり中程で外反する。293は胎土がにぶい赤橙色を呈するが器面は灰白色である。体部内面には幅1～2mm程度で横長の深い線が数条みられるが、調整手法は定かではない。294は琴柱とともに出土した土器であり、胎土が灰白色を呈し、残存している部分には煤が全くみられない。302は甕底部dであり、294と同様に胎土が灰白色を呈し、残存している部分には煤が全くみられない。304～307は壺A 1である。304は口縁端部が強い横ナデにより内彎し、端部は尖り気味に仕上げられている。305は胎土中の砂礫が非常に少なく、他の土器と比べて精緻な印象を受ける。306と307は並んで出土した(図45参照)。306は体部中程に長さ3.8cm、幅2.7cmの大きさで穴が開いている。しかし、穴の周囲には粘土接合痕に沿って表面が剥離していることから、この穴が人為的なものか否かの判断がし難い。なお、体部外面中程には煤が付着しており、内面にはみられない。307は306に比べて口縁部が長く、体部最大径は中程より下方に位置する。また、底部は平底で内面に有機物の痕跡はみられない。308は壺Gであり、体部は球形を呈し、口縁部外面は肥厚し縁帯を作り出している。309は壺Cであり、胎土が灰白色を呈する。そして、口縁部は緩く屈曲し端部は面取り気味に仕上げられている。310は壺A 1であり、体部外面下方と口縁部外面に煤が付着しており、体部内面中程はパッチ状に褐灰色化している。315は高杯Gであり、脚部がハの字状に開く。杯部は外面中程に稜を有し、上方は直線的に伸び、端部は若干外反している。なお、器表面は摩滅が激しく、調整は不明である。317・322・328は高杯Cである。317は脚部接合がA 2c類で、高杯Cのなかでは数少ない接合方法である。杯

部内面には横方向の板ナデの痕跡が明瞭に残り、杯底部内面と杯部の境にはわずかな段が確認できる。322は口縁部内面の強い横ナデにより端部が上方につまみ上げられている。328はやや大型の高杯で、杯部下方で屈折し、上方は内反り気味に開いている。333は高杯脚3であり、脚裾部が明確に屈折し、最も扁平な一群のひとつである。また、胎土は淡赤褐色を呈するが器面は灰白色を呈し、白化粧が施されている可能性がある。329・337～340は鉢Aである。329と337、338は平底の底部から口縁部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反する形態であり、329は大型品、337と338は小型品である。339と340は底径が小さく、体部が逆ハの字状に開く形態である。341は鉢Bであり、体部外面に線刻が描かれているが、文様の種類は不明である。343は器種不明とした。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内傾面を有する。また、胎土が粗いことから製塙に関する土器かもしれない。344は鉢Dであり、底部外面に一条の粘土紐を貼り付け平底としており、完全に自立する。底部の穿孔は94・220が内面より外面の方が直径が狭いが、344は外面の方が広い。口縁部は歪みが大きく、体部外面に煤は付着していない。345～347は小型壺で、口縁部が長く伸びる一群である。345と347は底部周縁に横方向のケズリ調整が施されているが、346は底部に一条の粘土紐を貼り付け平底を作り出している。351は手捏ね土器であり、脚台を有し体部の最大幅が極めて狭い。356は持ち砥石であり、砥面は8面であったと思われる。358も砥石としたが、砥面には羽状の線刻が確認でき、剥離面にも部分的に擦痕が認められる。また、358は約20m程離れた場所のものが接合している。なお、本遺構の時期はⅢa～Ⅲb期と推定される。

**SD12下層(図111～116)** 出土遺物の内訳は表9のとおりであり、そのうち76点(359～434)を図示した。361・368は甕A 3であり、361は他のS字甕と違い体部外面下方斜めハケ、横ハケ、上方の斜めハケの順番でハケメが施されている。368は口縁部上段の外反がわずかしかなく、断面形態は受口状となっている。374は甕B 4 cである。平底の外面は一方向のケズリ調整が、また底部～体部内面中程にかけては斜め方向のケズリ調整がなされ、口縁端部は内面がわずかに肥厚している。377・381・382・397は甕B 1であり、377は体部外面上方に列点文が施されている。煤は体部外面上方～口縁部外面、体部内面下方、体部内面中程にバッチ状に付着している。381は頸部外面下方に棒状工具による継ナデ痕が残る。382は口縁部外面に粘土を付け加え、口縁部を厚くしている。383は体部内面上方まで横方向のケズリ調整がなされ、口縁部の形態も他の甕と若干違うので甕B 4とした。387は小型の甕B 1 gである。丸底であるが、底部と体部の境に稜を作り出しており、煤は体部外面下方に付着している。397は頸部外面の板ナデの痕跡が顕著に残っている。403は壺Eであり、胎土中に赤褐色粒を多く含む。404は壺Gであり、外面の調整は摩滅のため判断できないが、体部内面は斜め方向のケズリ調整がなされている。口縁部は直線的に外側に開き、端部は内側に肥厚し、上端は面取りしてある。405は壺Hであり、丸底で体部最大幅を中程より下位にもつ。また、体部外面の最大幅付近と内面下方に煤が付着している。409は山陰系の鼓形器台の形を模倣した小型の器台である(中川1997)。胎土は橙色であるが器表面は灰白色を呈することから、化粧土が施されている可能性が高い。器壁は非常に薄く、受部外面下方に一条の突帶が貼り付けられ、台部外面上方には明瞭な段を有する。410～412は高杯Aである。410は口縁部上端は面取りし、外面はわずかに凹んでおり、口縁端部細部彎曲調整技法と呼称されているもの(赤塚1990)に類似する。411は内脚脚を有し、口縁部も内側し、端部は丸く仕上げられている。また、口縁端部細部彎曲調整技法はみられず、杯底部内

面周縁の段も確認できない。412は口縁部内面を肥厚させ、5条の沈線を施している。また、杯底部内面周縁にはわずかな段がみられ、ミガキの方向は口縁部外面が横、杯部内外面は斜めである。413は高杯Dであり、脚部は柱部から裾部にかけて緩やかに開き、杯部は外面中程に1条の突帯を貼り付け、口縁部は外側に大きく開いている。416・417・419は高杯Cであり、416は脚部が明瞭に屈折し、杯底部の面積が比較的広い。417は杯底部と杯部の内面の境が判然とせず、緩やかなカーブを描く。419は杯部内外面ともに二次的に被熱している。420は高杯Dであり、脚部がハの字状に開き、杯部外面に突帯を有し、口縁部は歪みが顕著である。425は鉢Aであり、底部外面に粘土を貼り付け平底としているが、正位で据えると土器は大きく傾いてしまう。426はいわゆる小型精製器種であり、口縁部と体部の境が明瞭にくびれている。433は手捏ね土器であり、口縁端部まで指圧痕が残り口縁部は大きく歪んでいる。434は楕の羽口であり、図のスクリーントーンの範囲は被熱による変色範囲を示している。穿孔は直径1.4cm程度で、被熱部分は穿孔を中心にリング状に窪んでいる。また、被熱していない面は平坦であり、その面に対して穿孔は斜めに穿たれている。なお、本遺構の時期はⅡ期と推定される。

**SD12上層(図116・117)** 出土遺物の内訳は表9のとおりであり、そのうち16点(435~450)を図示した。435は甕B 1であり、内面に粘土接合痕が顕著に残り、口縁部内面を除き煤が付着している。445は高杯Cであり、口縁部内外面の一部に煤が付着している。447は高杯の小型品であり、手捏ね成形によるものである。なお、本遺構の時期はⅢa期と推定される。

**SD13(図117・118)** 出土遺物の内訳は表9のとおりであり、そのうち11点(451~461)を図示した。451・454は甕B 1である。脚台は低く、体部は長胴で、口縁部は直線的に伸びる。煤は体部外面下方と口縁部外面、体部内面下方に付着しており、脚台外面と底部内面中央にはみられない。454は頸部と体部の境が不明瞭で、口縁端部がわずかに外反する甕であり、外面には煤が付着するが、内面にはみられない。459は楕型高杯であり、口縁部外面に6条の沈線を有する。461は高杯Aであり、口縁部内面を肥厚させ、内傾面に沈線を3条施している。また、器面が摩滅しているためミガキの方向は不明である。なお、本遺構はSD10・12と連続する溝と考えられるため、その時期はSD10・12と同じⅡ~Ⅲa期と想定されるが、本遺構の出土遺物はⅡ期前半に比定されるもののみである。これは、SD13付近に存在するSB 8・9がⅡ期前半に属し、Ⅱ期後半以降の遺構がSD13より南側に存在しないため、居住域からより近い場所に土器を廃棄した結果、調査ではSD12からSD13にかけてⅡ期前半階層の土器が出土したと理解したい。

**SD14(図118~123)** 出土遺物の内訳は表9~10のとおりであり、そのうち81点(462~542)を図示した。462は数少ない甕A 1類のうちの一つである。463は口縁部第1段目の外反が長く、2段目と3段目の境には板状工具による明瞭な凹みがみられる。467は甕A 4であり、体部外面に横ハケが施されず、口縁端部に面を有する。469は他のS字甕と比べて器壁が厚い。475は甕B 1 fであり、体部外面下方には煤が付着しているが、内面には全くみられない。484は甕B 1であり、口縁部が長く、端部は外側に肥厚している。489は甕B 2であり、口縁端部は上方につまみ上げられ、刻みを有する。493は甕B 4であり、体部外面に叩き目が残り、口縁部は外折して端部を上方につまみ上げている。503~505は甕A 1である。503は口縁部が直立気味に立ち上がり、内面の体部と頸部の境には明瞭な稜を有する。また、体部外面下方と底部内面に煤が付着している。504は器壁が非常に厚く、体部下方

にはいわゆる相欠はぎ接合がみられる。505は口縁部中程に緩い段を有し、端部はわずかに外反している。511は壺Bであり、口縁部は外折し、端部は肥厚し沈線が4条施されている。516は壺Cであり、口頸部内外面に非常に細かい縦ミガキが施されている。また、口縁端部外面は横ナデによりわずかに外反し、上面には一条の沈線状の凹みを有する。517・519は壺Gである。517は口縁部が直線的に伸び、端部は面取りされる。また、頸部外面下方には煤が付着している。519は口縁部内外面と体部外面に非常に細かい横ミガキが施され、口縁部内面には放射状にヘラミガキが確認できる。また、器壁は薄く、胎土中の混和材が極めて少ない。520・521は手捏ね土器であり、520は台部がわずかに上げ底で、器面には指圧痕が明瞭に残る。521も台部と杯部に分かれ、杯部内外面に煤が付着し、台部外面には指圧痕が顕著に残る。522・524～526は高杯Cであり、522は杯部が椀型を呈し、脚部が明確に屈折せず緩やかに湾曲している。524は杯底部中央に縦方向の穿孔が施されていることから器台とすべきかもしれない。525は高杯Cのなかで唯一杯部にミガキが認められた資料であり、杯部外面上方に煤が付着している。526は杯底部内面周縁にわずかな段が認められる。528は皿状の杯部を有する高杯であり、脚部には3ヶ所に穿孔が施されている。538は高杯の脚であり、脚柱部が円柱状を呈する。このような脚部をもつ高杯は今回の調査では1例のみの出土であった。542は磨製石包丁であり、2ヶ所の紐部は表裏面からの穿孔で、刃部には無数の擦痕が確認できる。なお、本遺構の時期はⅡ期後半が中心で、Ⅲa期まで存続していたと推定される。

**SD15(図123)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち9点(543～551)を図示した。546は甕B4であり、口縁部外面中程に稜を有し、体部内面は頸部付近まで横方向のケズリ調整を行っている。547は甕C4であり、口縁端部は上方につまみ上げられ受口状を呈し、口縁部内面から体部外面にかけて煤が付着している。なお、本遺構の時期はSD14と同様にⅡ～Ⅲa期と推定される。

**SD16(図123)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち2点(552・553)を図示した。553は甕底部hであり、丸底の底部に一状の粘土紐を貼り付け平底を作り出している。また、体部外面下方には煤が付着しているが、内面には確認できない。なお、本遺構の時期はSD14と同様にⅡ～Ⅲa期と推定される。

**SD17(図123)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち2点(554・555)を図示した。554は壺Bであり、口縁部外面に縁帶を形成している。なお、器表面は摩滅が顕著で、その調整は不明である。なお、本遺構の時期は出土遺物が少ないと判断し難いが、SD14と同様にⅡ期が主体であると推定される。

**NR1(図123)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち1点(556)を図示した。556は繩文土器深鉢であり、外面に巻貝条痕を施し、その後縦方向のケズリを加えている。内面は斜め方向のケズリ後部分的にナデ調整を行っている。なお、本遺構の時期はⅠ～Ⅱ期と推定される。

**NR2(図123)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち1点(557)を図示した。557は繩文土器深鉢であり、体部が直立気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられている。また、器面の調整は不明である。なお、本遺構からは繩文土器しか出土していないが、遺構配置から想定して完全に埋没したのはⅤ期と想定される。

**SD19(図124)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち1点(558)を図示した。558は美濃須須産の杯身Bであり、底部外面に回転ヘラ削り調整がなされている。なお、本遺構の時期は、

道路の掘り方内から8世紀前半の須恵器と土師器が、道路検出面において12～13世紀の山茶碗が出土していることから、上限を8世紀前半(Ⅳ期)、下限を12～13世紀(Va期)と捉えることができる。

**SD20(図124)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち4点(559～562)を図示した。561は美濃須衛産の杯身Bであり、底部外面の墨書きは「□〔刀カ〕□」と釈読できる。562は美濃須衛産の平瓶である。底部外面は回転ヘラ削り調整がなされ、体部外面上方に平行叩きの痕跡が残る。また、頸部内面上方から体部外面上方にかけて自然釉が降灰している。なお、本遺構の時期はSD19と同様に、上限を8世紀前半(Ⅳ期)、下限を12～13世紀(Va期)と捉えることができる。

**SD21(図124)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち7点(563～569)を図示した。564は山茶碗B、566は山茶碗Aであり、564は底部外面に「中」、566は底部外面に釈読不明な文字が墨書きされている。567は山茶碗Bであり、底部内面が平滑で黒色有機物が器面にしみ込んでいる。なお、本遺構の時期はVa期(12世紀中葉～13世紀前葉)と推定される。

**SD22(図124)** 出土遺物の内訳は表10のとおりであり、そのうち1点(570)を図示した。なお、本遺構からは遺物が1点出土したのみであり、出土遺物から遺構の時期は判断できない。

### 3、包含層出土の遺物

本節で述べる包含層とは基本層序のⅠ～Ⅱ層のことである。発掘調査では層位毎に遺物を取り上げているが、Ⅰ層、Ⅱ層ともに近現代の水田耕作により搅拌されていることから、本節ではまとめて包含層出土資料として提示する。そして、その遺物は9割以上が山茶碗と小皿を中心とする中世陶磁器であり、繩文時代～古代と近世の遺物は極わずかであった。なお、図示したものは206点(578～783)を数えるが、ここでは主な遺物のみ紹介したい。

578は須恵器杯身Aであり、体部高と受部高の比率がほぼ1：1で、今回の調査で出土した須恵器のなかでは最も古い一群に属する。579は須恵器無蓋高杯であり、杯部外面に2条の突帯が貼り付けられ、その間に波状文が描かれている。587は灰釉陶器皿であり、底部内面に黒色有機物が付着しているが器表面は平滑ではない。602は小碗Aであり、底部内面に黒色有機物(漆か?)が付着している。726は胎土から判断して山茶碗Bとしたが、底部外面は静止ヘラケズリ調整がなされている。735は古瀬戸の碗類であり、底部外面が全面墨で塗りつぶされている。752は加工円盤であり、底部内面中央にスタンプ押印が施された青磁碗の体部を打ち欠いて作られている。758と766は青白磁であり、758が皿、766が合子の身である。758は全面に施釉されているが、766は口縁端部の釉が拭い取られている。764は高台端部に抉りのない白磁の皿で、高台内面に巴文が墨書きされている。775は天目茶碗を転用した加工円盤であり、表面に6つの凹みがみられる。

なお、出土遺物のうち、石器については鈴木隆雄、増子誠、須恵器については成瀬正勝、木製品については千藤克彦、墨書きの釈読については岡田吉孝、堀田一浩、小塙康真、近藤大典(いずれも本センター職員)の協力を得た。

表8 遺構出土遺物一覧表[A:口縁残存率(X/12)、B:口縁破片数(接合後)、C:破片数(接合前)、D:破片数(接合後)]

遺構名	器種	A	B	C	D
SB 1	土師器	甕B 1	18.2	8	
		高杯C	4.8	2	
		合計	23	10 350	271
SB 2	土師器	甕B 1	10	9	
		小型壺	12	1	
		鉢A	13.4	2	
		合計	35.4	12 229	130
SB 3	土師器	甕B 1	1	1	
		合計	1	1 197	144
SB 4	土師器	甕A 3	0.6	2	
		甕B 1	1	1	
		鉢A	1	1	
		合計	2.6	4 27	25
SB 5	土師器	甕B 1	9.4	7	
		甕C	0.3	1	
		壺A 2	2	1	
		高杯C	11.7	1	
		器種不明	0.3	1	
		合計	23.7	11 509	335
SB 6	土師器	甕A 3	4.9	4	
		甕B 1	0.3	1	
		高杯C	6.5	2	
		鉢C	1.1	1	
		合計	12.8	8 318	161
SB 7	土師器	甕B 2	0.3	1	
		合計	0.3	1 68	47
SB 8	土師器	甕B 1	6	1	
		甕B 2	3	3	
		甕C	0.3	1	
		器種不明	2	2	
		合計	11.3	7 56	31
SB 9	土師器	甕B 1	0.3	1	
		甕B 2	1	1	
		甕D	5.3	1	
		高杯C	3.4	3	
		高杯G	0.3	1	
		壺A	1.9	1	
		合計	12.2	8 284	198
SK01	土師器	合計		3 2	
SK06	土師器	合計		2 1	
SK07	土師器	甕B 1	12.2	4	
		合計	12.2	4 476	399
SK13	土師器	合計		1 1	
SK14	土師器	甕A 3	7.6	5	
		甕B 3	1.6	1	
		鉢C	10.2	2	
		合計	19.4	8 218	153
SK16	土師器			4 4	
SU01	土師器	山茶碗	合計	6 6	15 15
			合計	6 6	19 19
SU02	土師器	壺A 2	1.4	1	
		合計	1.4	1 291	211
SU03	土師器	甕B 1	1.1	1	
		壺A 1	2.3	1	
SU04	土師器	合計	3.4	2 45	24
		合計		41	27
SU05	土師器	甕B 1	7.5	3	
		高杯C	22.5	5	
SU06	縄文土器	合計	30 8	262	161
		合計		198	196
SU23	縄文土器	合計		187	169
		合計		50	22
SD01	土師器	甕B 1	6.9	6	
		合計	6.9	6 85	74
SD04	土師器	甕B 1	29	11	
		壺A 1	1	1	
		高杯E	2.5	1	
		高杯G	9.5	1	
		鉢A	2.4	1	
須恵器	須恵器	鉢D	7.5	1	
		合計	51.9	16 447	255
		杯身A	2	2	
		杯蓋A	10.3	4	
		高杯蓋A	12	1	
SD06	須恵器	甕	2	1	
		合計	26.3	14 379	251
		合計	78.2	30 826	506
SD07	土師器	杯身A	0.3	1	
		合計	0.3	1 1	1
SD07	土師器	甕B 1	60.5	29	
		甕C	1	1	
		壺D	7.6	6	
		高杯E	17	5	
		鉢A	12.4	2	
		手捏ね	10.5	1	
		合計	109	44 703	483
SD10	須恵器	杯身A	4.6	1	
		杯蓋A	23.6	5	
		高杯蓋A	12	1	
		甕	2.7	1	
		合計	42.9	8 33	15
		合計	151.9	52 736	498
SD10	土師器	甕A 2	1	1	
		甕A 3	36.2	14	
		甕A 5	3.4	1	
		甕B 1	137.7	52	
下層					

表9 遺構出土遺物一覧表【A:口縁残存率(X/12)、B:口縁破片数(接合後)、C:破片数(接合前)、D:破片数(接合後)】

遺構名	器種	A	B	C	D	遺構名	器種	A	B	C	D	
SD10 下層	土師器	甕B 2	1.3	1		SD12 下層	土師器	甕A 2	3.6	3		
		甕B 3	9.6	5				甕A 3	85.2	40		
		甕C	25.5	16				甕A 4	5.9	1		
		甕D	1	1				甕B 1	139	88		
		小型壺	22.8	4				甕B 2	10.6	2		
		壺A 1	33.6	15				甕B 3	8.8	4		
		壺A 2	0.3	1				甕B 4	5.8	2		
		壺C	1	1				甕C	5.6	4		
		壺F	1.1	1				小型壺	0.3	1		
		壺G	3.5	2				壺A 1	9.6	7		
		高杯C	96.7	39				壺C	0.3	1		
		高杯F	10.8	1				壺E	16.3	3		
		器台A	1.1	2				壺G	9.6	1		
		器台B	0.8	1				高杯A	17.4	3		
		鉢C	8.1	2				高杯C	66.5	28		
		鉢D	11.9	1				高杯D	9.7	2		
		手捏ね	2.5	1				高杯G	1	1		
		合計	409.9	162				器台A	2	1		
SD10 上層	土師器	甕A 4	7.5	5				器台B	6.8	1		
		甕B 1	280.8	124				鉢A	1.2	1		
		甕B 2	2.3	1				手捏ね	5.5	1		
		甕B 3	22.5	2				合計	410.7	195		
		甕C	18.2	3		SD12 上層	土師器	甕A 3	2	2		
		小型壺	29.2	4				甕A 4	1.3	1		
		壺A 1	62.7	34				甕B 1	40.2	17		
		壺A 2	0.7	1				小型壺	8.2	1		
		壺B	3.9	3				壺A 1	8	3		
		壺C	27.5	8				壺A 2	1.2	1		
		壺F	1	1				高杯C	34.9	8		
		壺G	9	1				合計	95.8	33		
		高杯C	114.5	57				SD12	土師器	506.5	228 5361 4372	
		高杯E	10.8	2				SD13	土師器	甕B 1	20.5	6
		高杯G	13.1	2						高杯A	0.5	1
		鉢A	34.9	9						高杯G	3.2	2
		鉢B	2.9	2						合計	24.2	8 162 83
		鉢D	9.9	2		SD14	土師器	甕A 1	2.9	2		
		手捏ね	14.5	2						甕A 2	3	2
		器種不明	1	1						甕A 3	29.8	15
		合計	666.9	264						甕A 4	14.7	5
	須恵器	杯身A	22	1						甕A 5	1.5	1
		杯蓋A	73.7	17						甕B 1	124.4	78
		高杯蓋A	27.9	3						甕B 2	10.8	8
		高杯	0.3	1						甕B 3	2.8	2
		合計	123.9	22						甕B 4	3.9	2
		SD10下層総計	790.8	286						甕C	10.8	3
SD10	土師器	合計	1053.3	421 8524 6306						甕D	3.9	2
SD10	須恵器	合計	123.9	22	66	30				小型壺	4.3	2
SD10		合計	1177.2	446 8590 6336						壺A 1	58.7	32

表10 造構出土遺物一覧表[A:口縁残存率(X/12)、B:口縁破片数(接合後)、C:破片数(接合前)、D:破片数(接合後)]

造構名	器種	A	B	C	D
SD14	土師器	壺A 2	4.4	2	
		壺B	14.8	11	
		壺C	6	2	
		壺D	3.8	3	
		壺F	1	1	
		壺G	5.5	2	
		高杯B	3.3	3	
		高杯C	42.1	11	
		高杯F	4.3	1	
		器台A	1	1	
		鉢A	4.2	2	
		鉢E	0.8	1	
		手捏ね	11.5	1	
		器種不明	2.1	2	
		合計	376.3	197	1586 1335
SD15	土師器	壺A 3	7	4	
		壺B 1	11	6	
		壺B 4	0.7	1	
		壺C	2.3	1	
		壺A 1	1	1	
		壺A 2	5.8	1	
		壺B	1.1	1	
		壺C	1	1	
		壺E	0.6	1	
		高杯G	1	1	
		器台A	1.5	1	
		合計	33	19	244 232
SD16	土師器	壺A 3	3.5	2	
		壺B	1.3	1	
		合計	4.8	3	34 12
SD17	土師器	壺B	3	1	
		合計	3	1	2 2
SD19	土師器	壺B 1	1.2	1	
		合計	1.2	1	29 22
	須恵器	杯蓋B	1	1	
		壺	2	2	
		合計	3	3	29 25
	SD19合計		4.2	4	58 47
SD20	土師器	合計			2 2
	須恵器	杯身B	2.3	3	
		杯蓋B	2	2	
		平瓶	0.3	1	
		合計	4.6	6	31 11
	SD20合計		4.6	6	33 13
SD21	山茶碗	合計	12.8	2	23 6
	小皿	合計	2.7	1	1 1
	SD21合計		15.5	3	24 7
SD22	灰釉陶器	合計			1 1

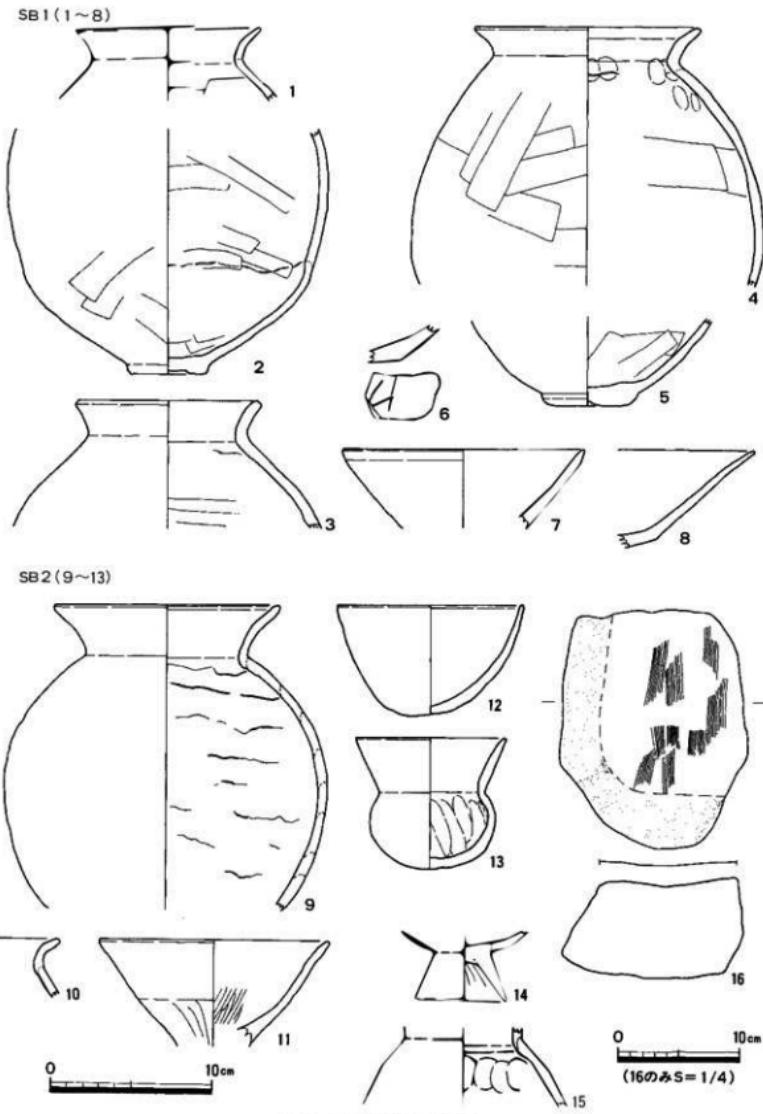
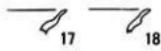
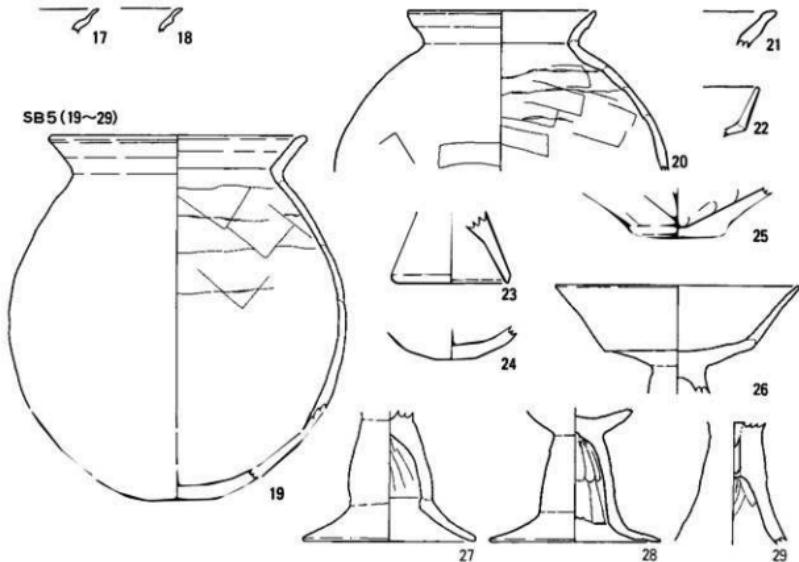


図88 土器・石器実測図(1)

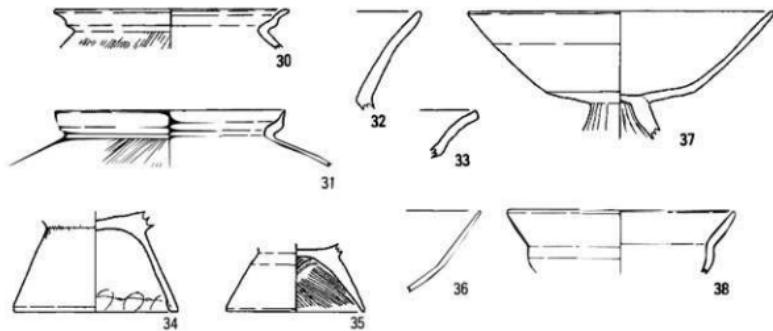
SB 4 (17・18)



SB 5 (19~29)



SB 6 (30~38)



SB 7 (39・40)



SB 8 (41~43)

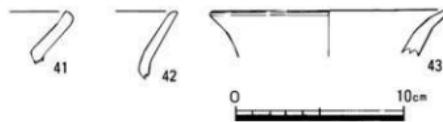
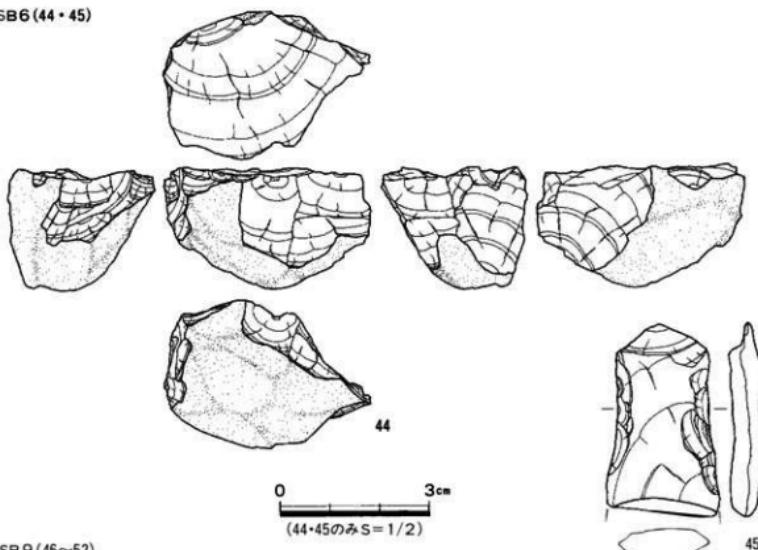
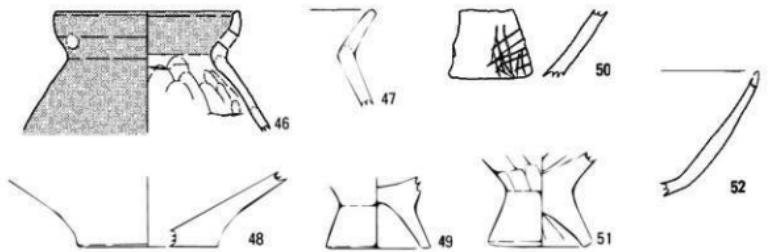


図89 土器・石器実測図(2)

SB6(44・45)



SB9(46~52)



SK14(53~56)

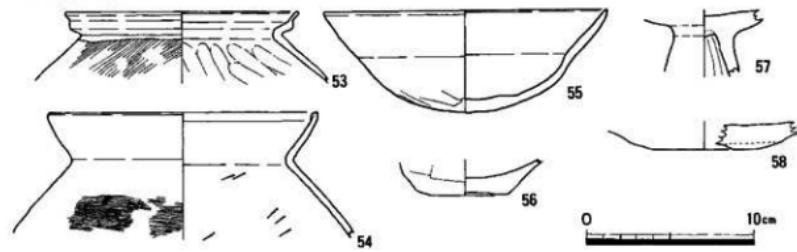
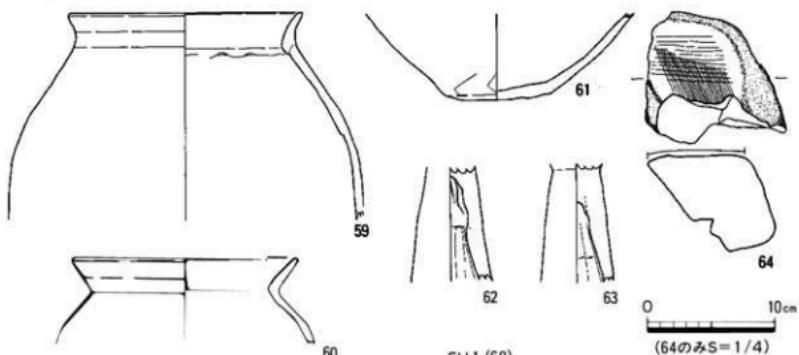
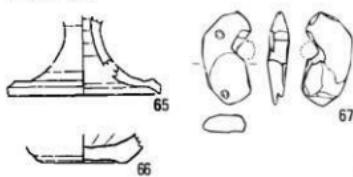


図90 土器・石器実測図(3)

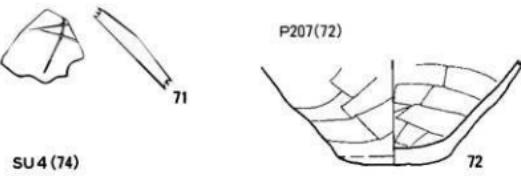
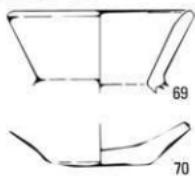
SK 7 (59~64)



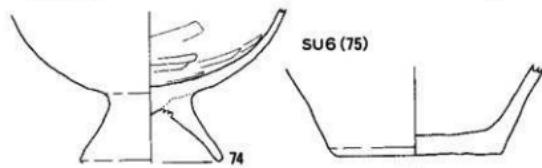
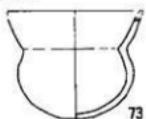
P40(65~67)



SU 2 (69~71)



SU 3 (73)



SU23(76)

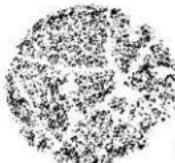
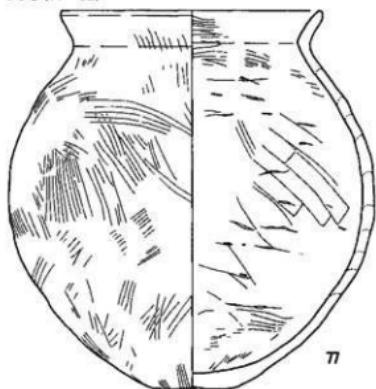
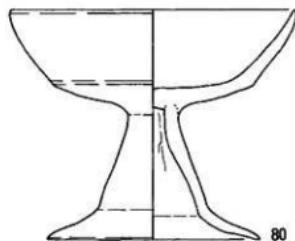


図91 土器・石器実測図(4)

SU5 (77~82)



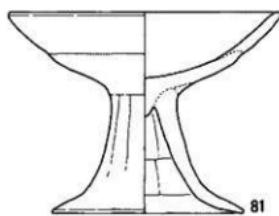
77



80



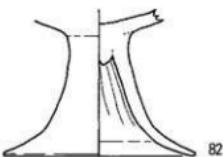
78



81

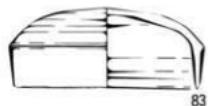


79



82

SD 4 (83~89)



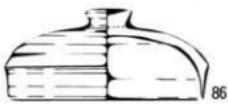
83



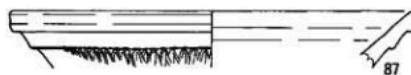
84



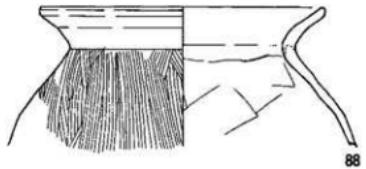
85



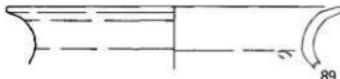
86



87



88

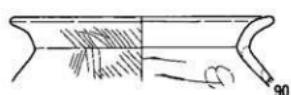


89

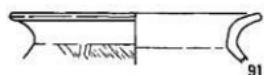


図92 土器・石器実測図(5)

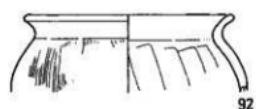
SD 4 (90~102)



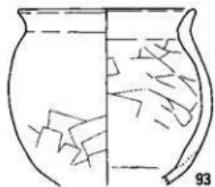
90



91



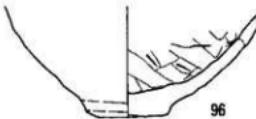
92



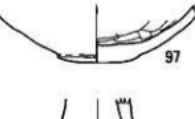
93



95



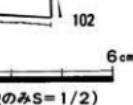
96



97



100

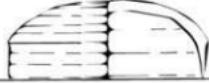


(102のみS=1/2)

SD 7 (103~108)



103



104



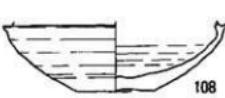
105



106



107



108



図93 土器・石器実測図(6)

SD 7 (109~121)

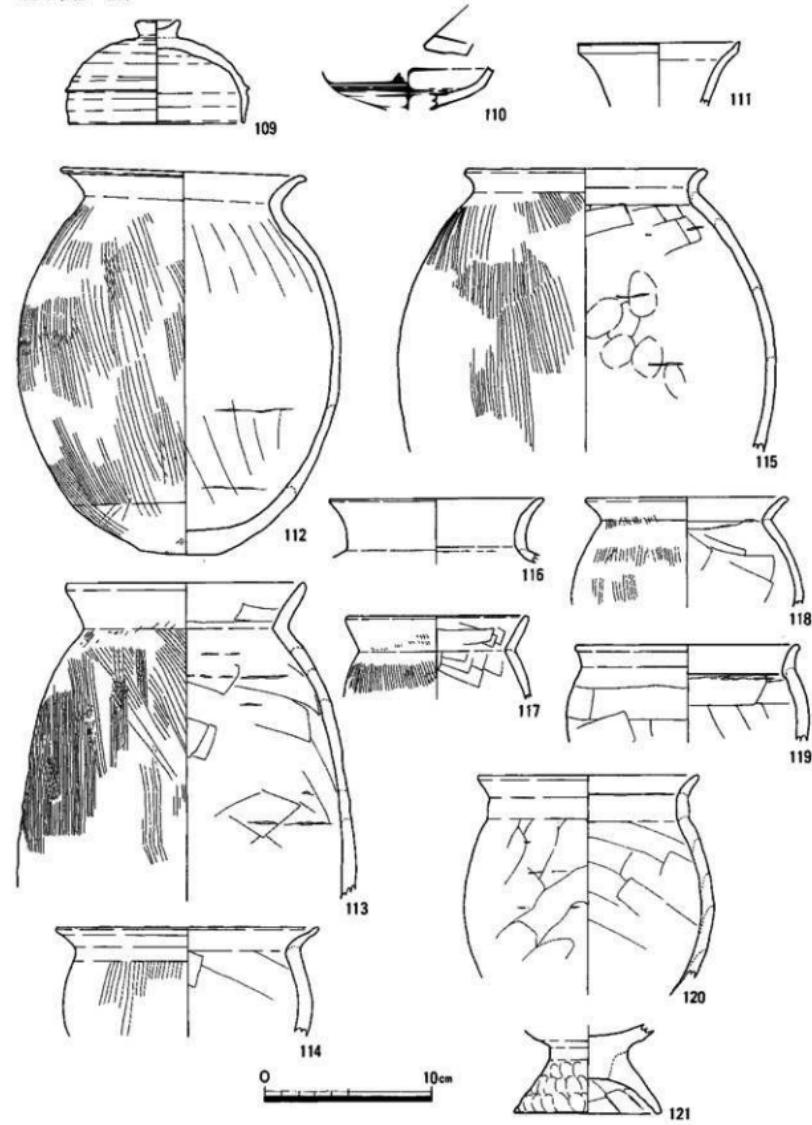


図94 土器・石器実測図(7)

SD 7 (122~135)

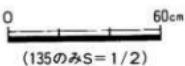
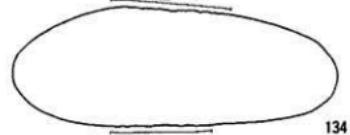
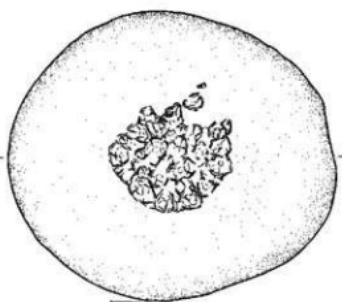
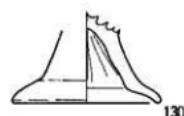
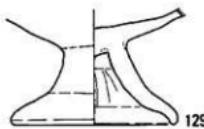
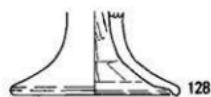
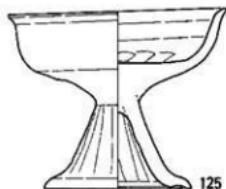
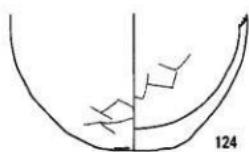
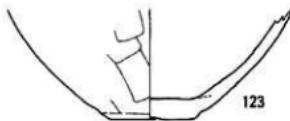
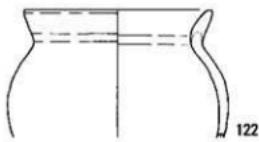


図95 土器・石器実測図(8)

SD10下層(136~144・146・147)(145のみSD10上層)

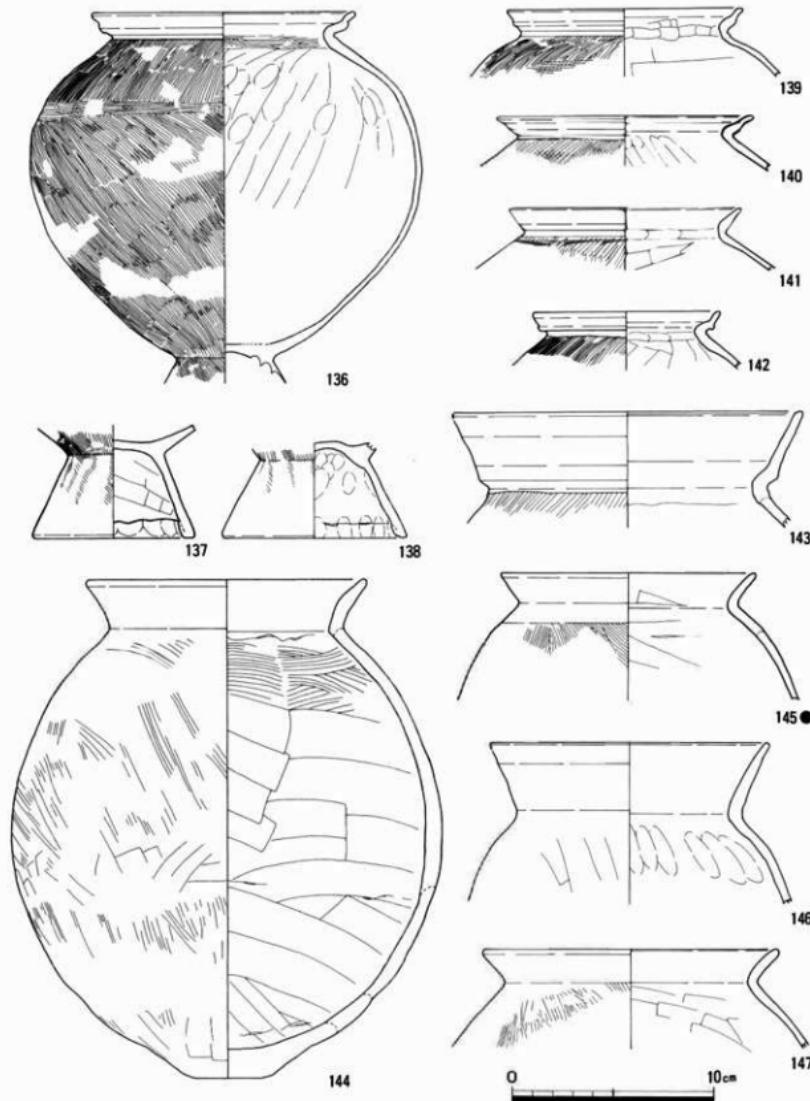


図96 土器・石器実測図(9)

SD10下層(148~153)

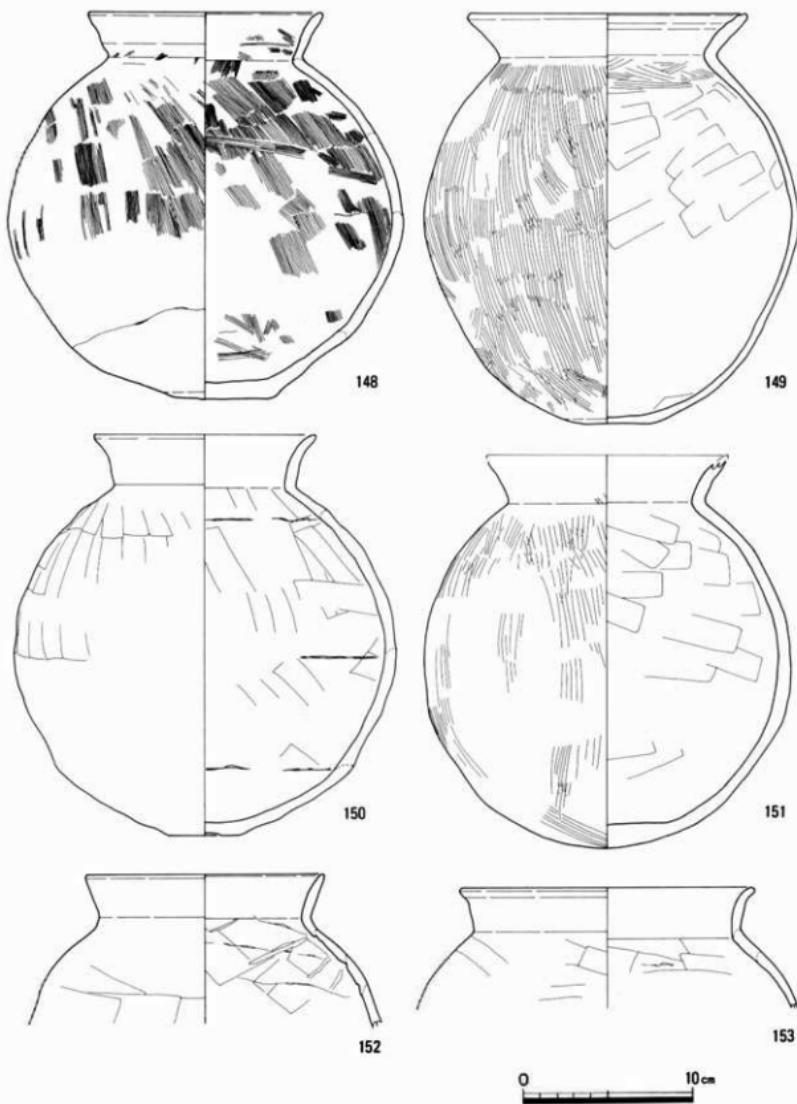


図97 土器・石器実測図(10)

SD10下層(154~158・160~164)(159のみSD10上層)

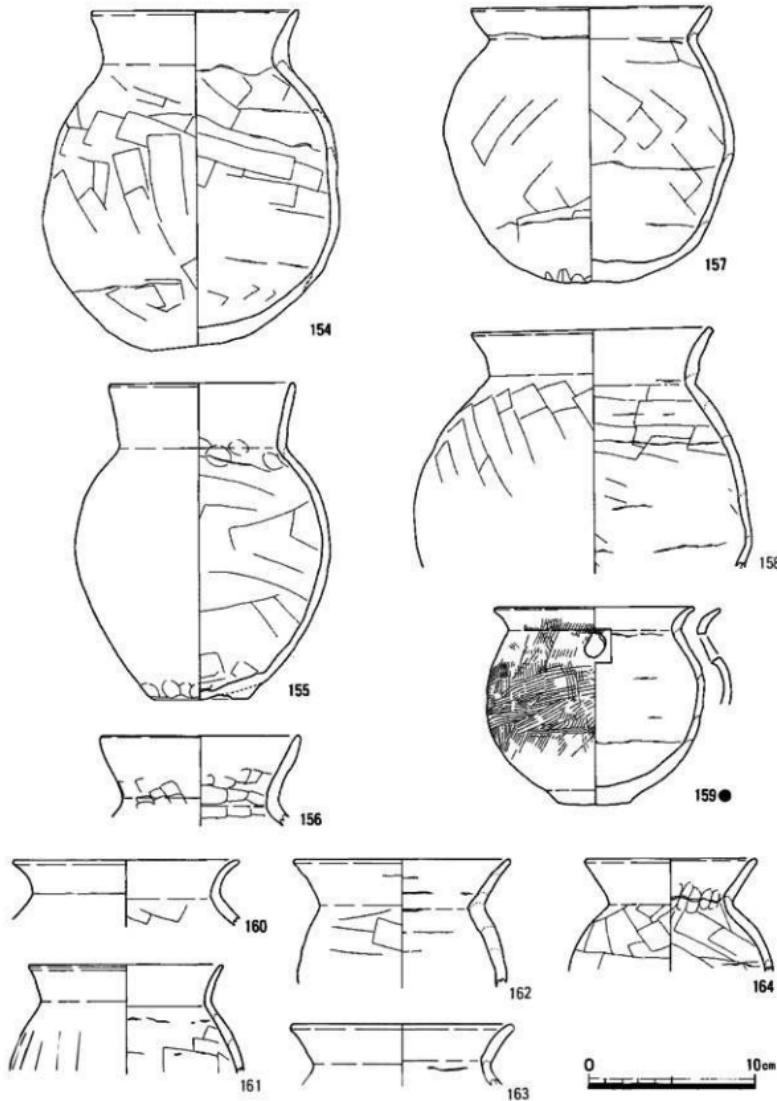


図98 土器・石器実測図(11)

SD10下層(165~179)

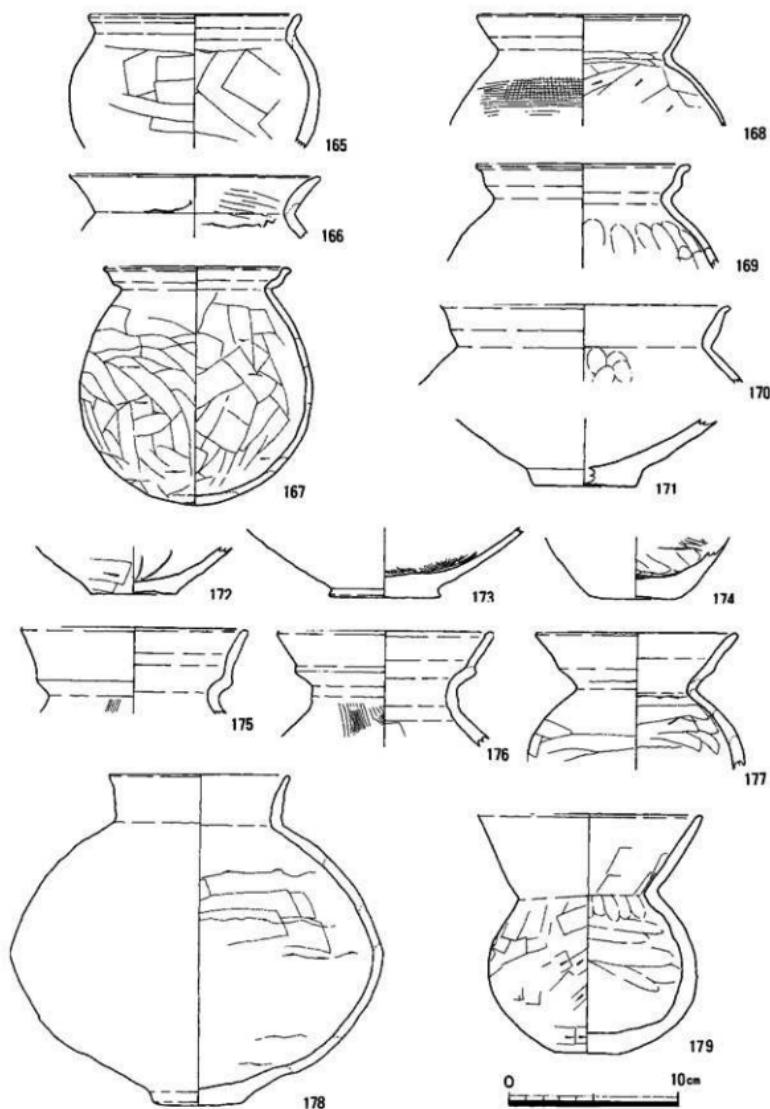


図99 土器・石器実測図(12)

SD10下層(180~195)

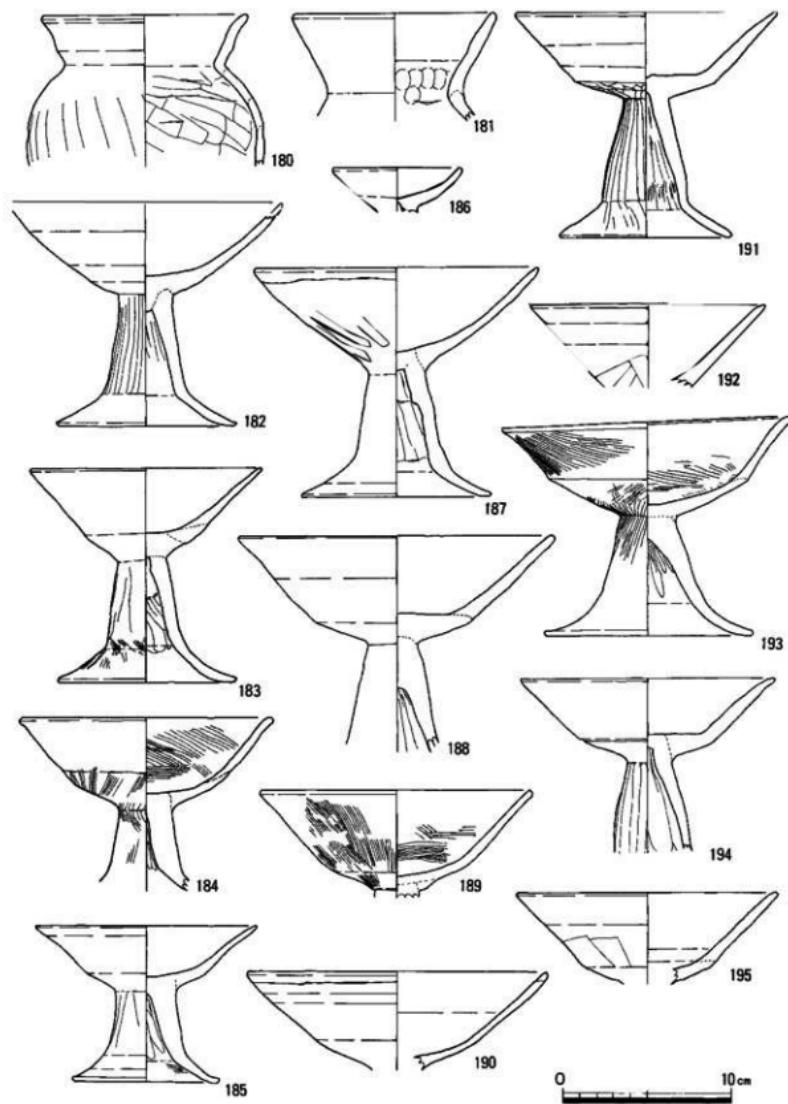


図100 土器・石器実測図(1)

SD10下層(196~216)

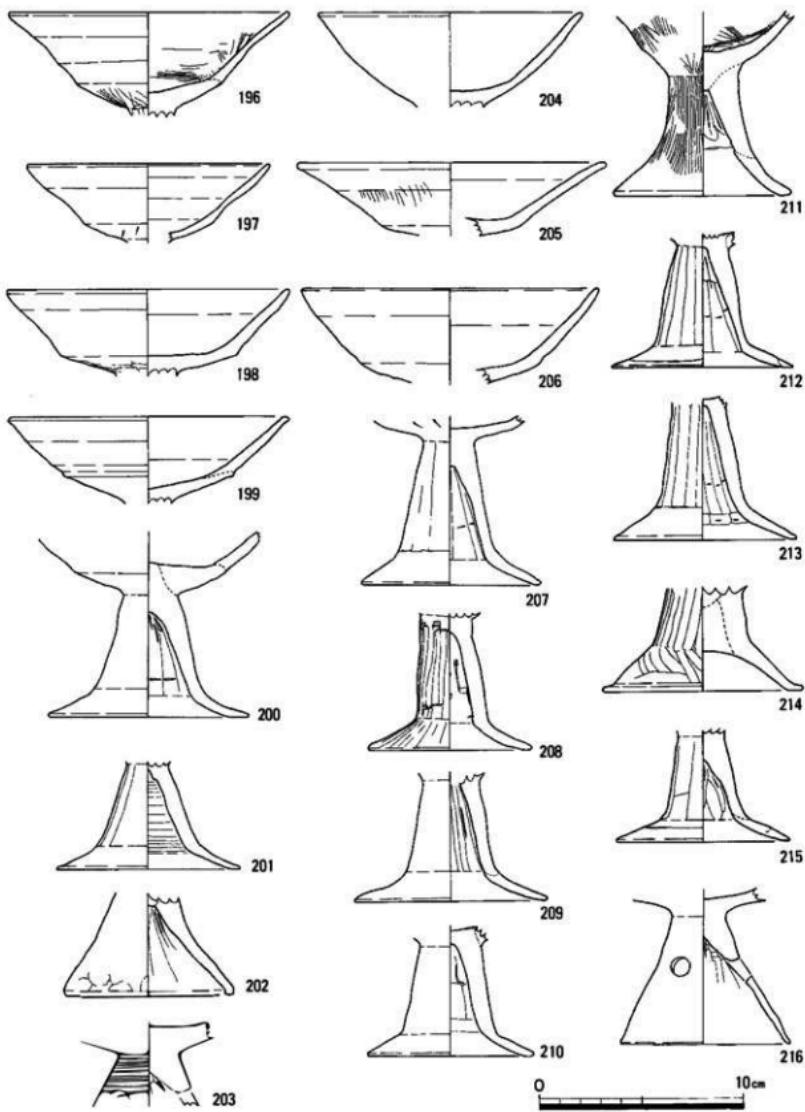


図101 土器・石器実測図(14)

SD10下層(217~239)

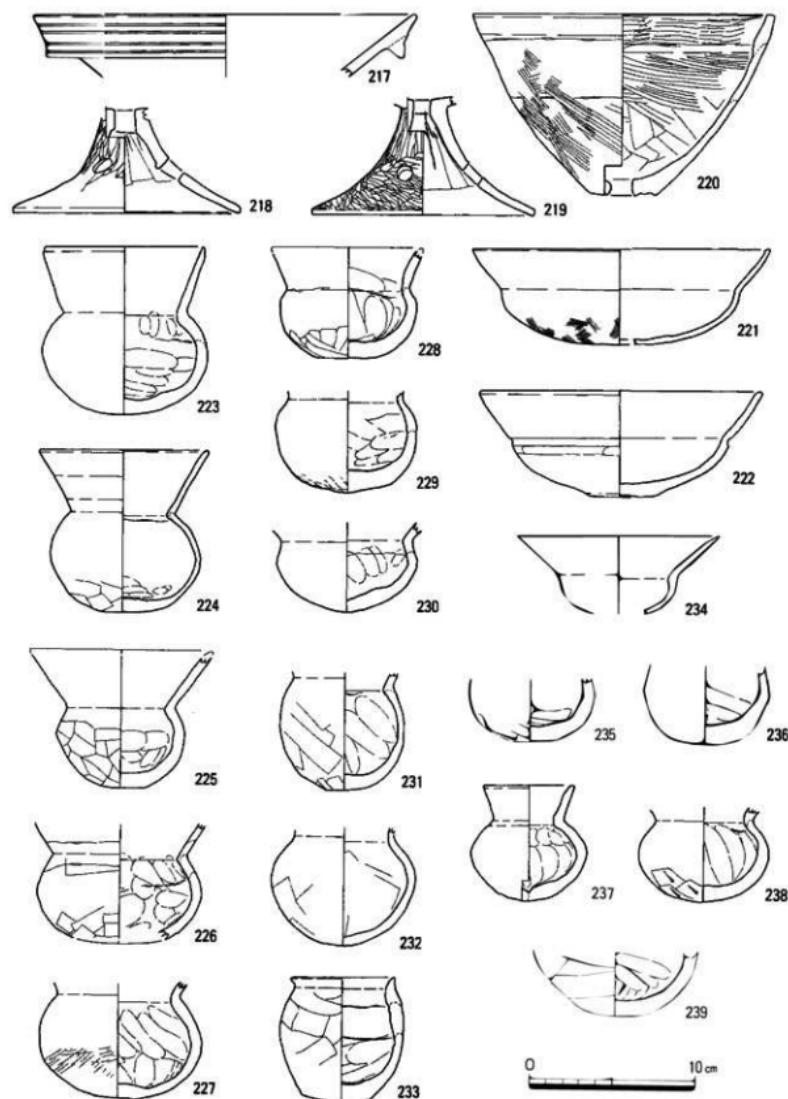


図102 土器・石器実測図(15)

SD10上層(240~264)

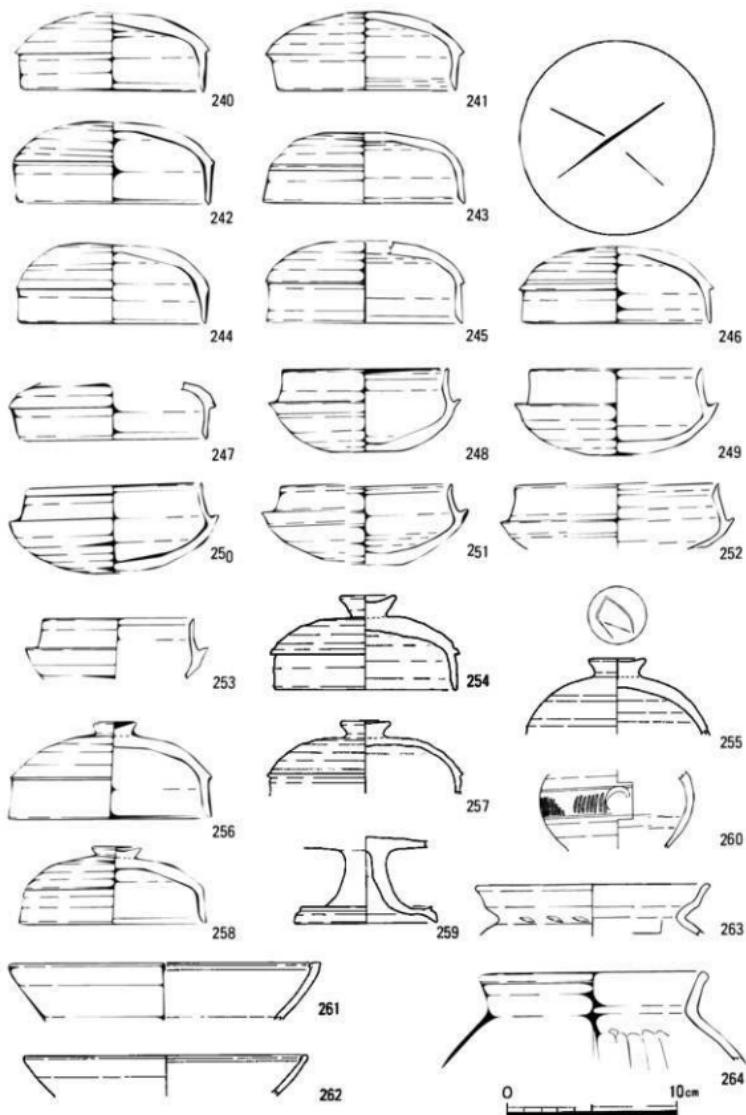


図103 土器・石器実測図(16)

SD10上層(265~270)

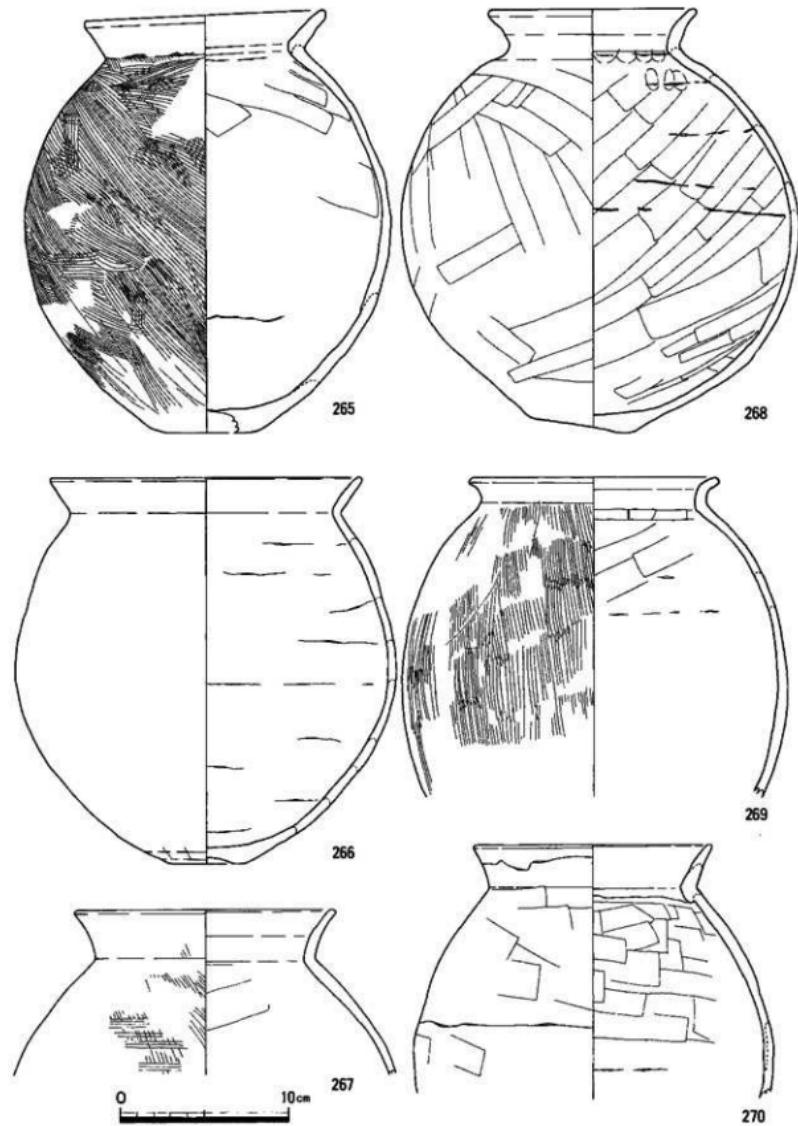


図104 土器・石器実測図(17)

SD10上層(271~277)

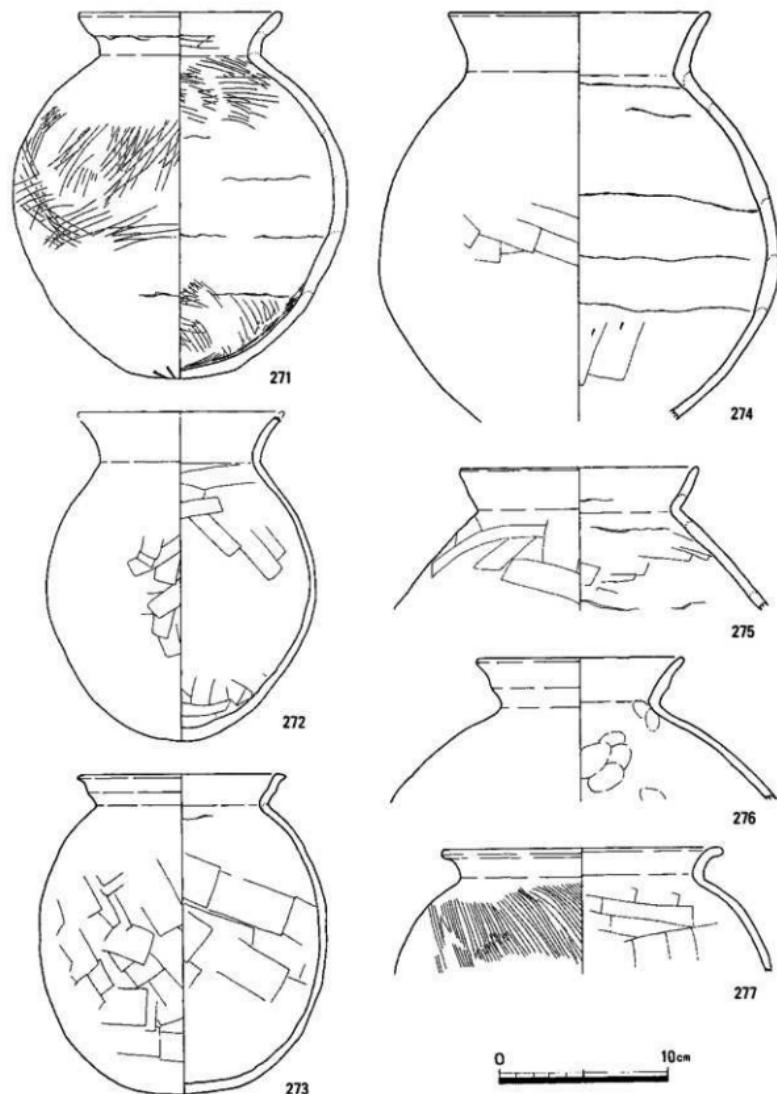


図105 土器・石器実測図(18)

SD10上層(279~290)(278のみSD10下層)

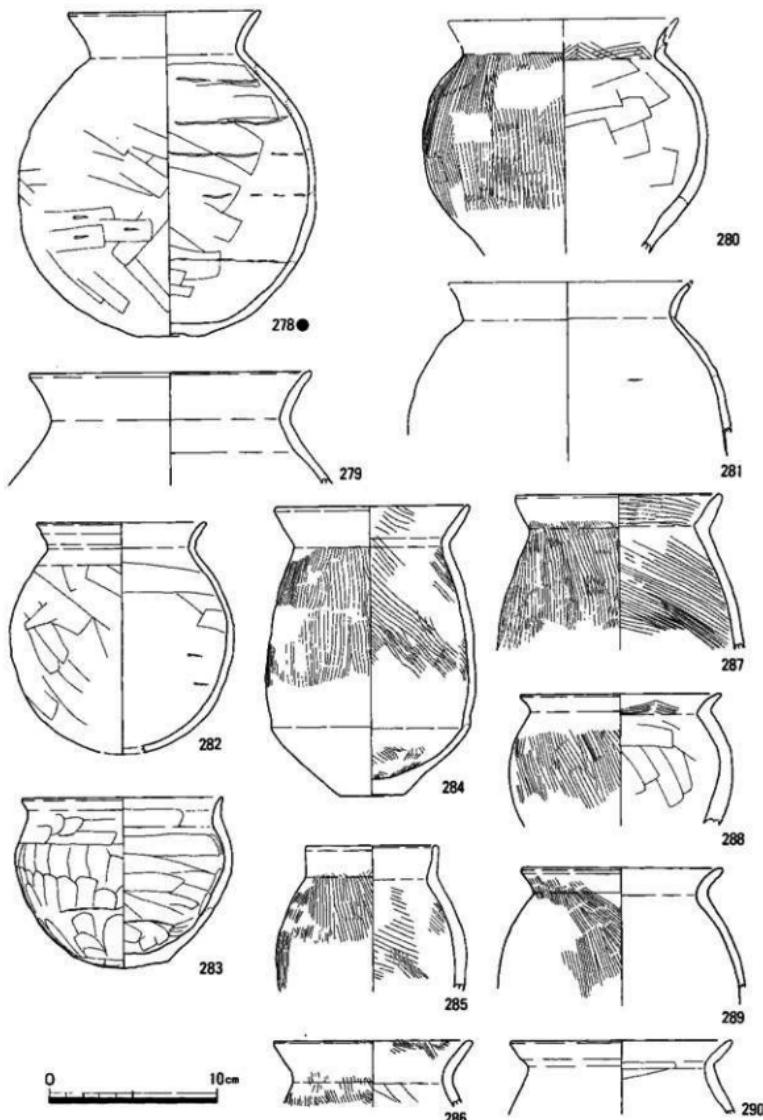


図106 土器・石器実測図(19)

SD10上層(291~307)

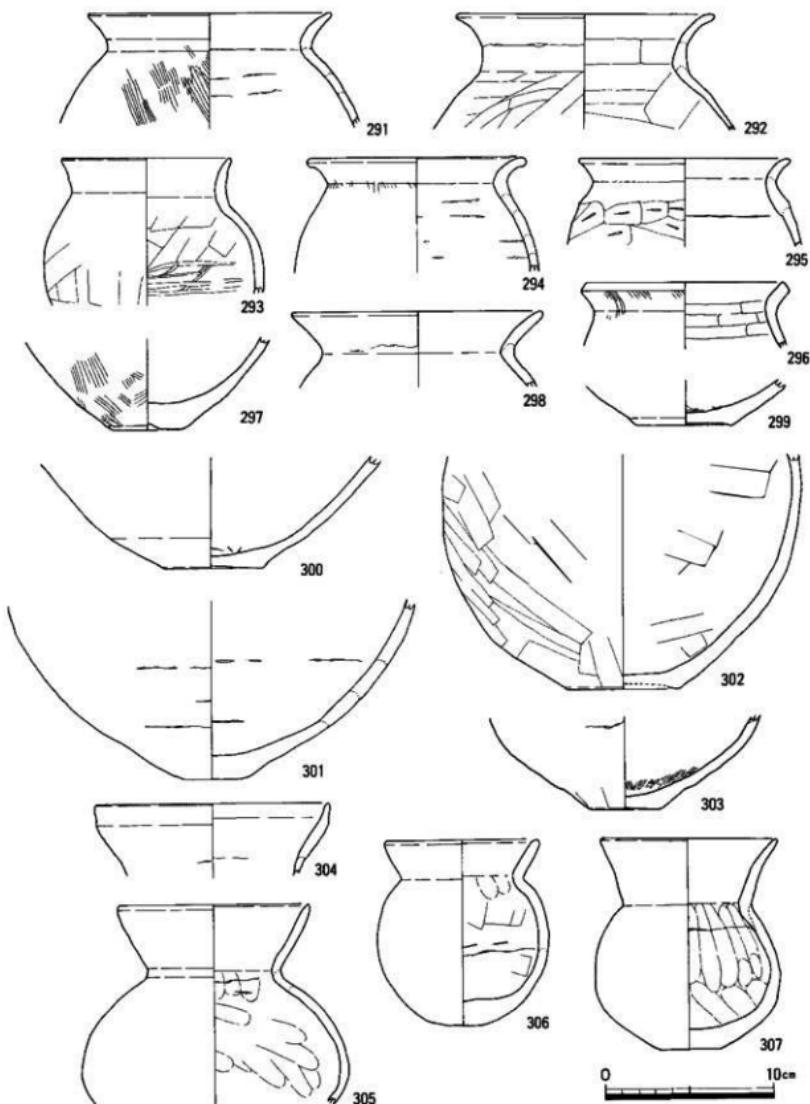


図107 土器・石器実測図(20)

SD10上層(308~310・313・315)(311・312・314はSD10下層)

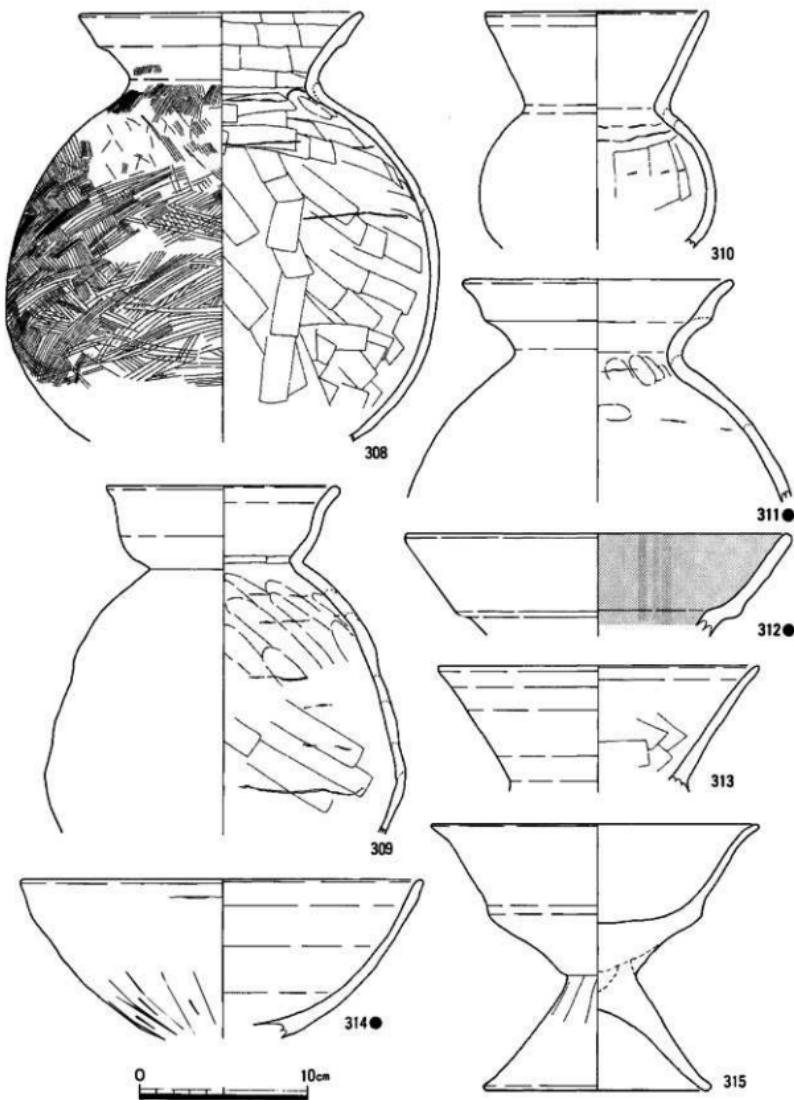


図108 土器・石器実測図(21)

SD10上層(316~325・327~336)(326のみSD10下層)

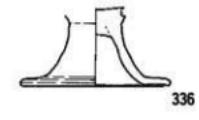
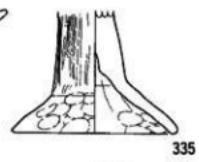
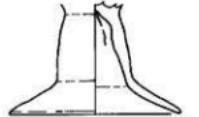
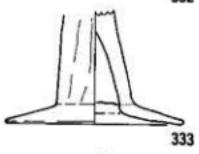
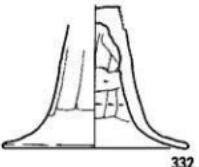
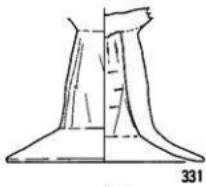
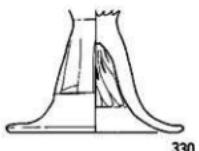
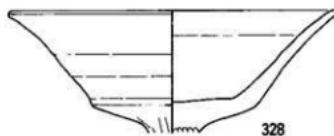
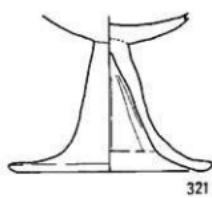
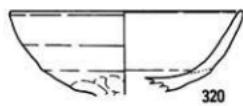
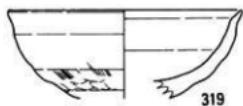
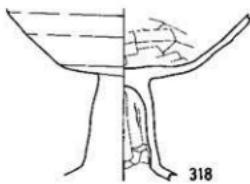
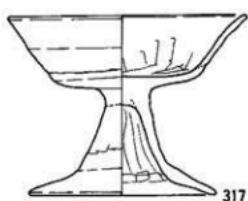
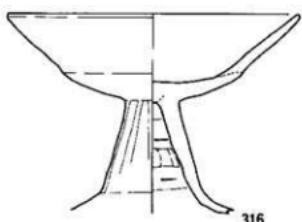


図109 土器・石器実測図(22)

SD10上層(337~351・353~358)(352のみSD10下層)

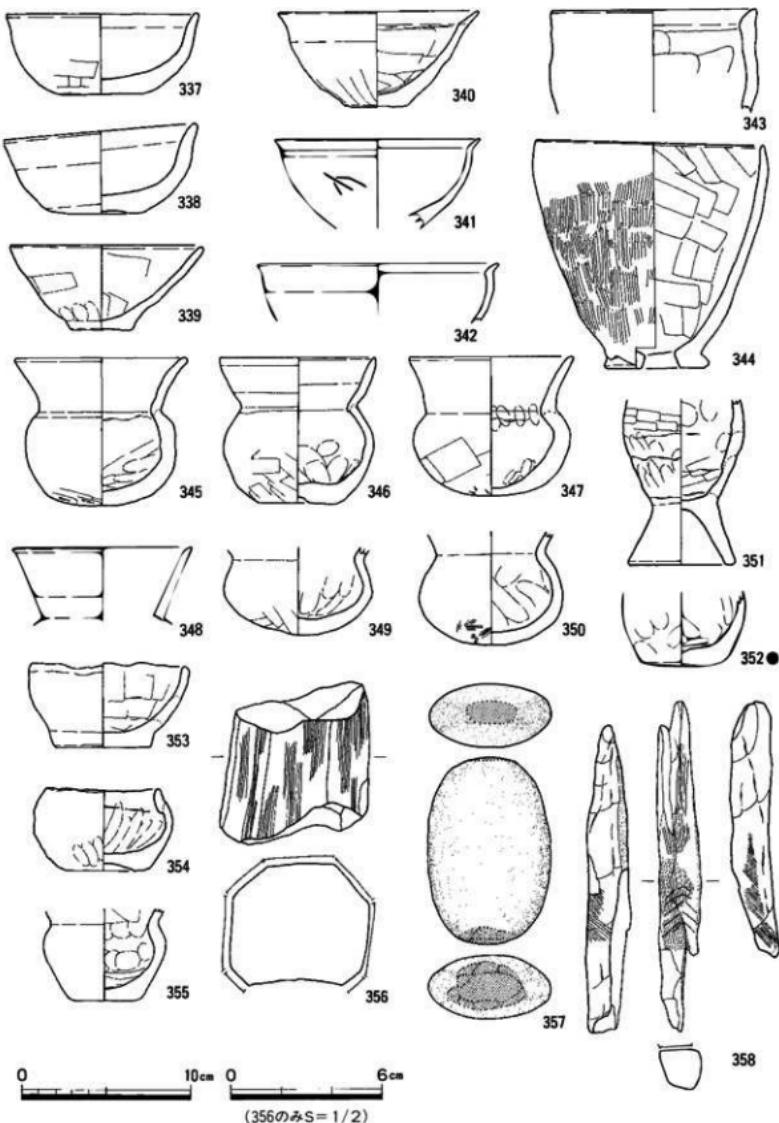


図110 土器・石器実測図(23)

SD12下層(359~373)

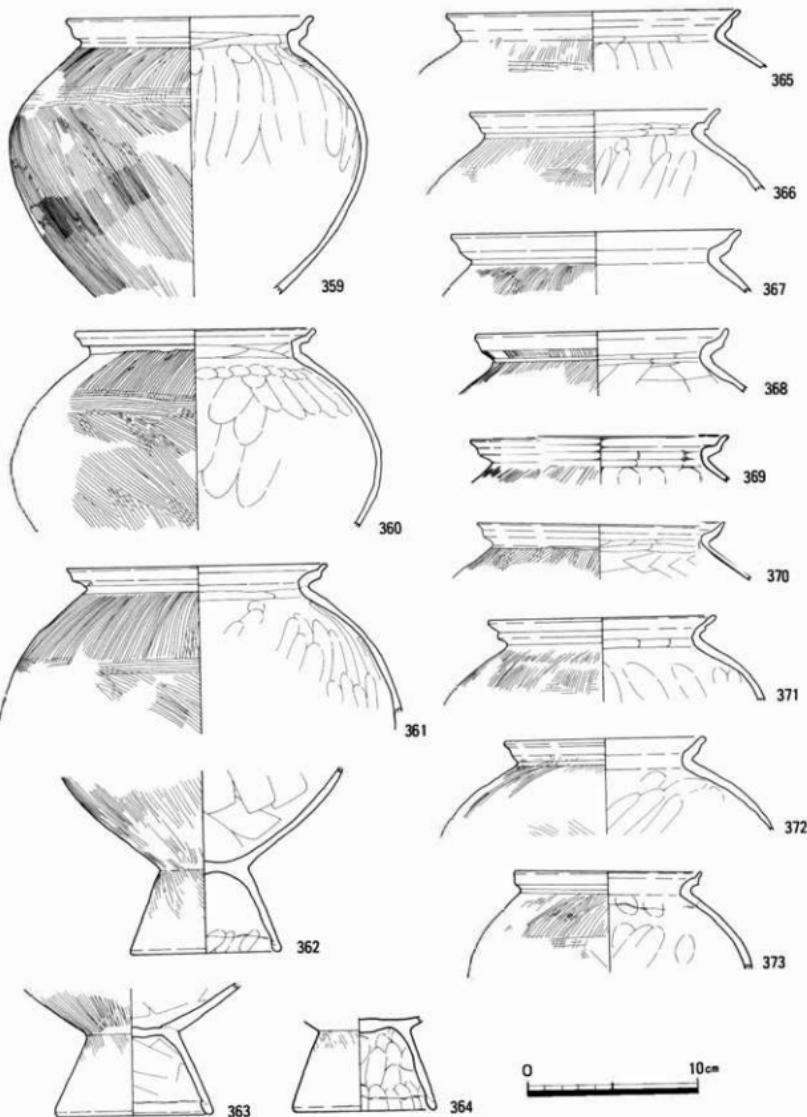


図111 土器・石器実測図24

SD12下層(374~379)

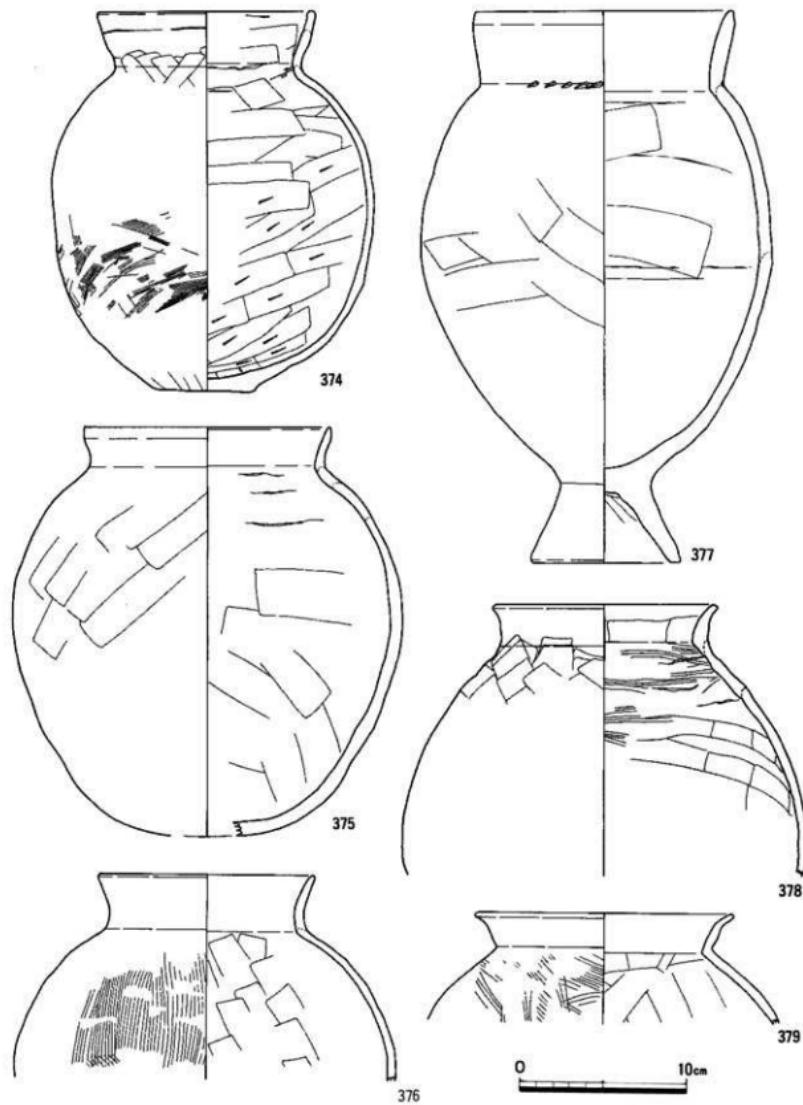


図112 土器・石器実測図25

SD12下層(380~395)

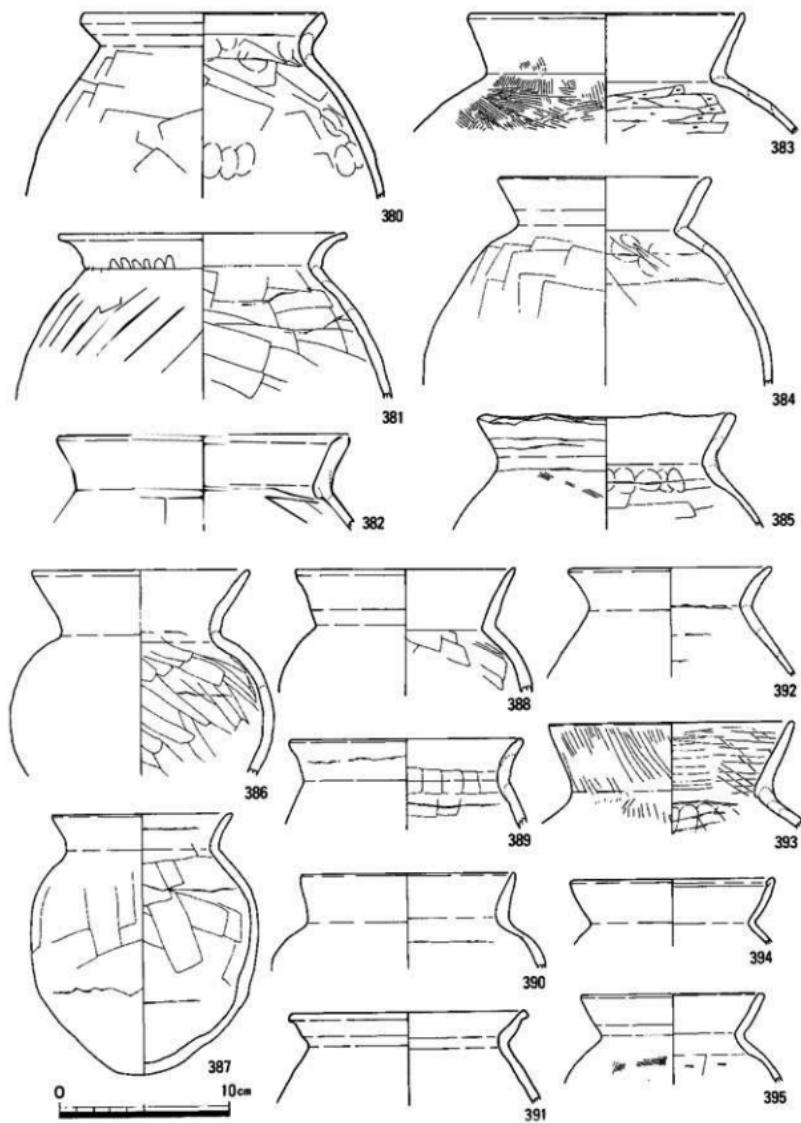


図113 土器・石器実測図(26)

SD12下層(396~410)

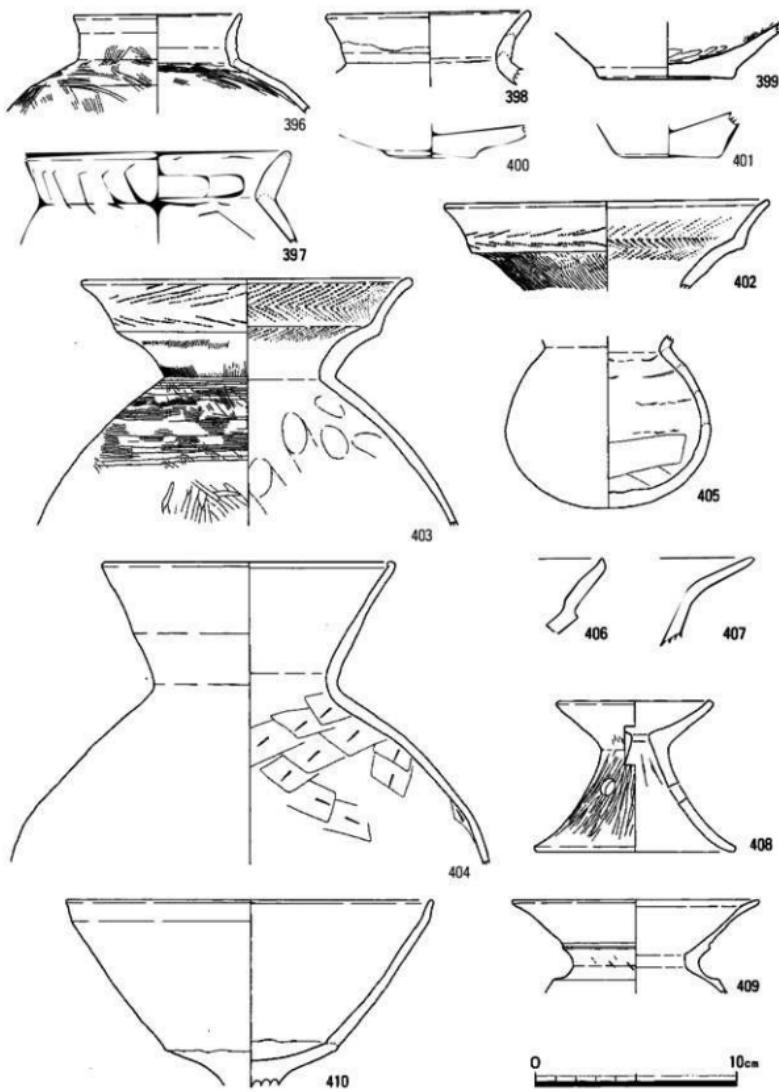


図114 土器・石器実測図(27)

SD12下層(411~419)

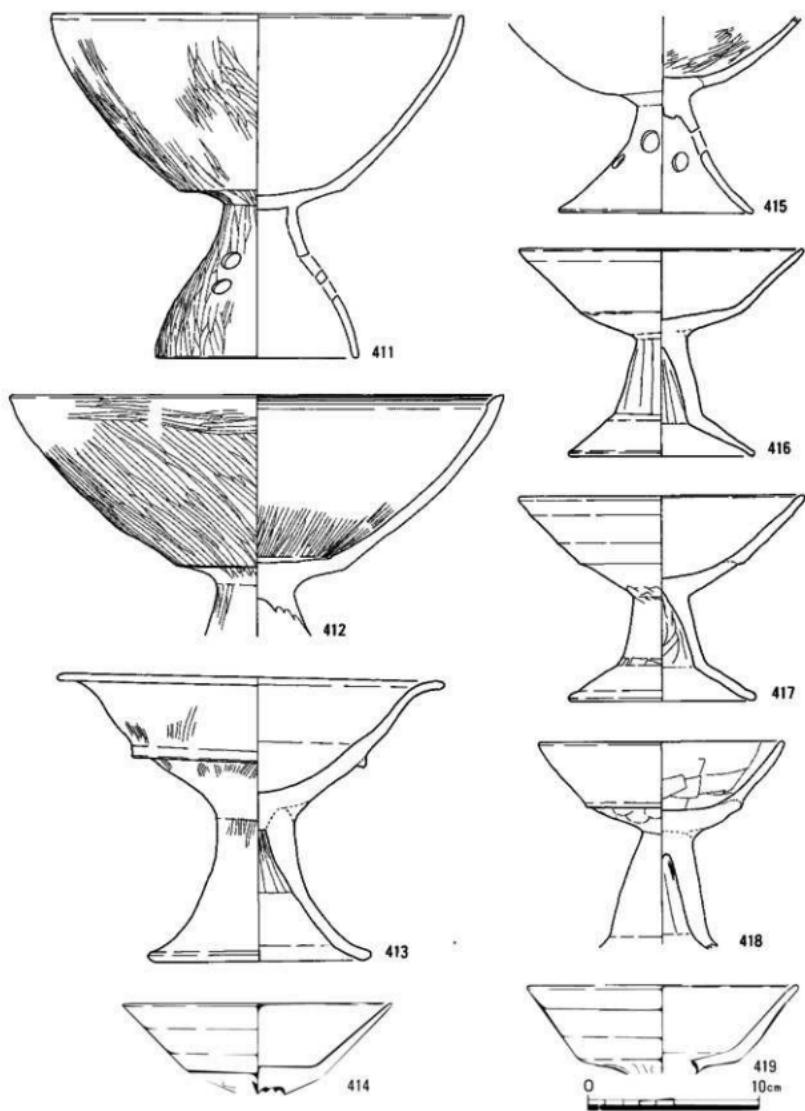
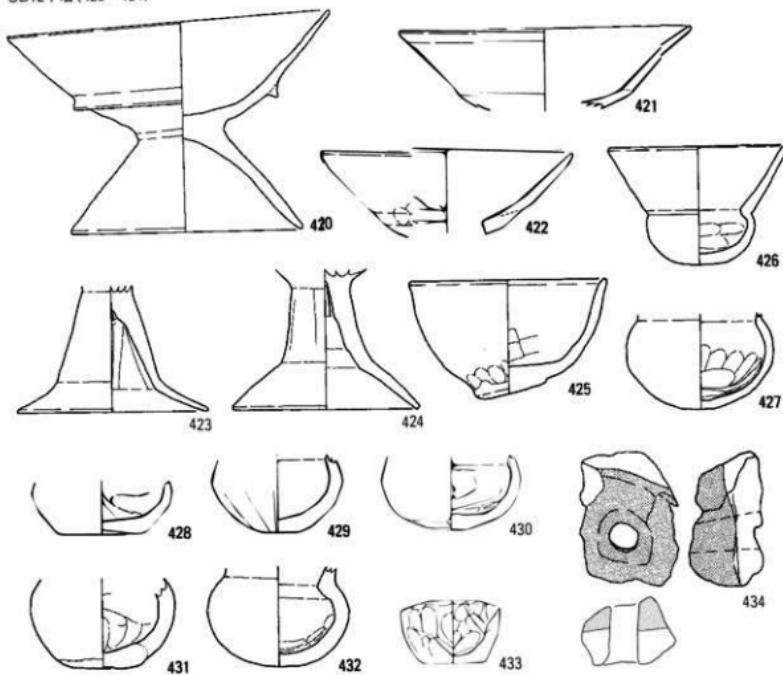


図115 土器・石器実測図(28)

SD12下層(420~434)



SD12上層(435~442)

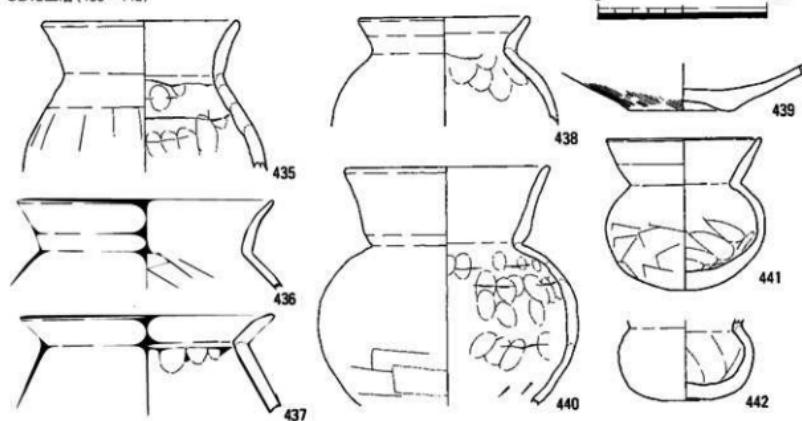
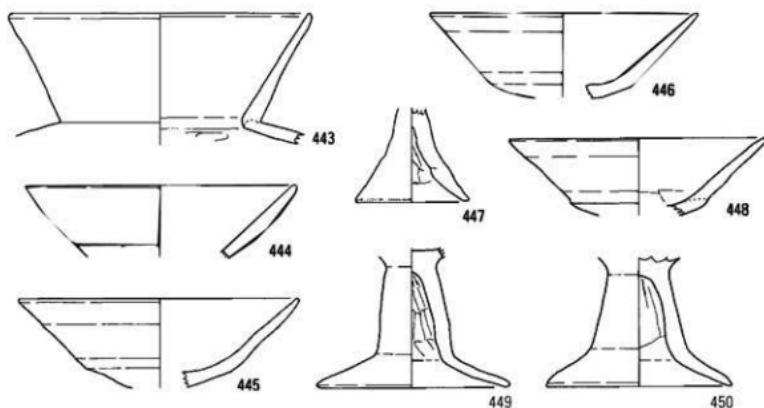


図116 土器・石器実測図29

SD12上層(443~450)



SD13(451~454)

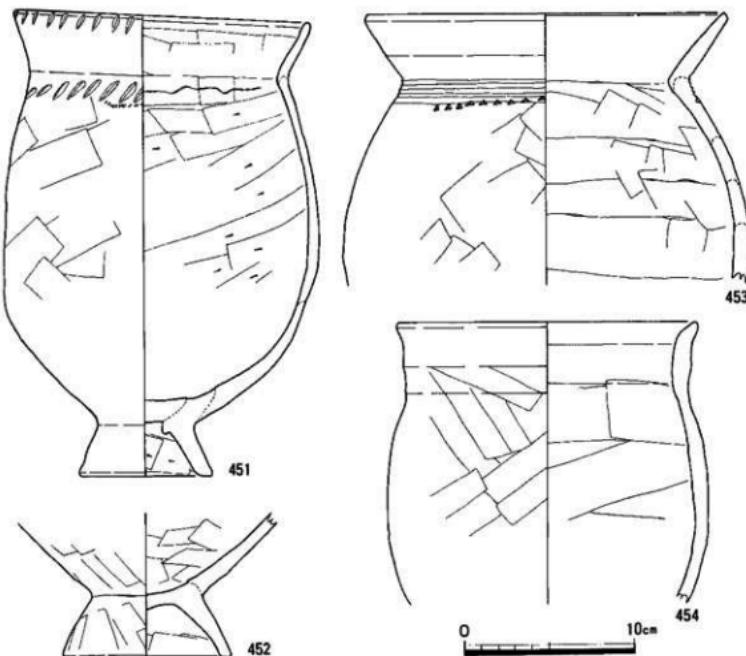
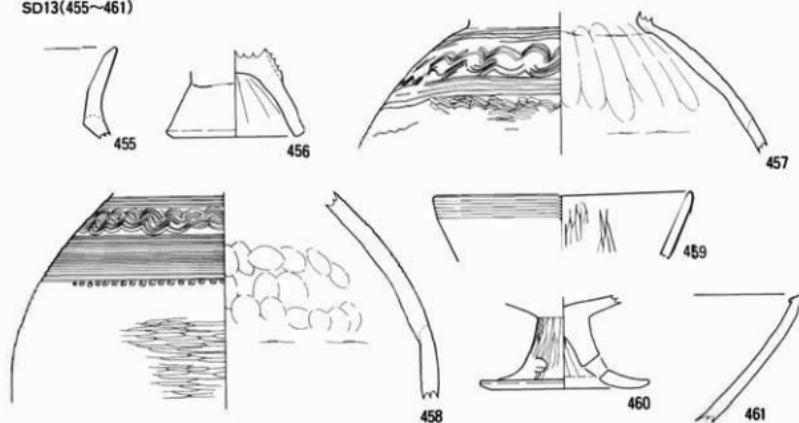


図117 土器・石器実測図30

SD13(455~461)



SD14(462~473)

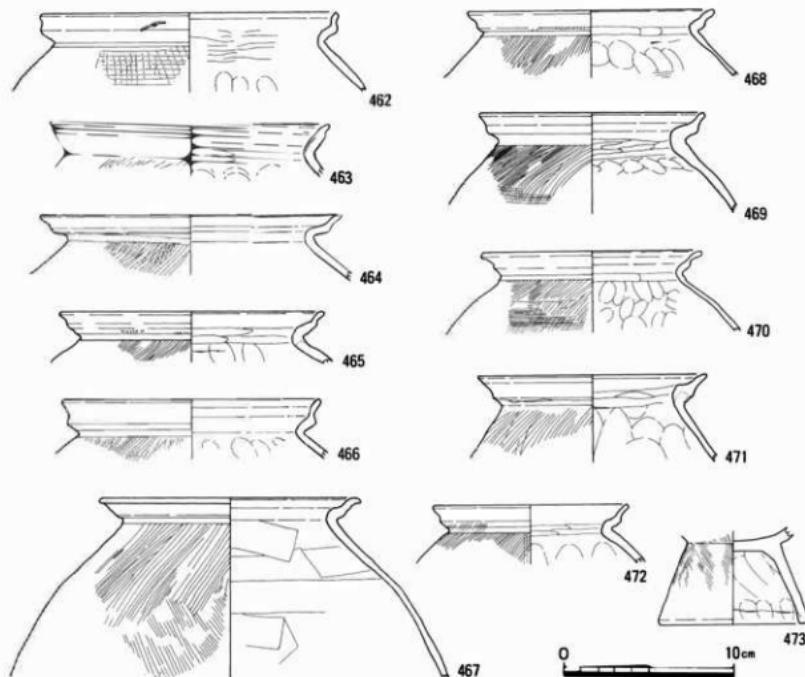


図118 土器・石器実測図(3)

SD14(474~483)

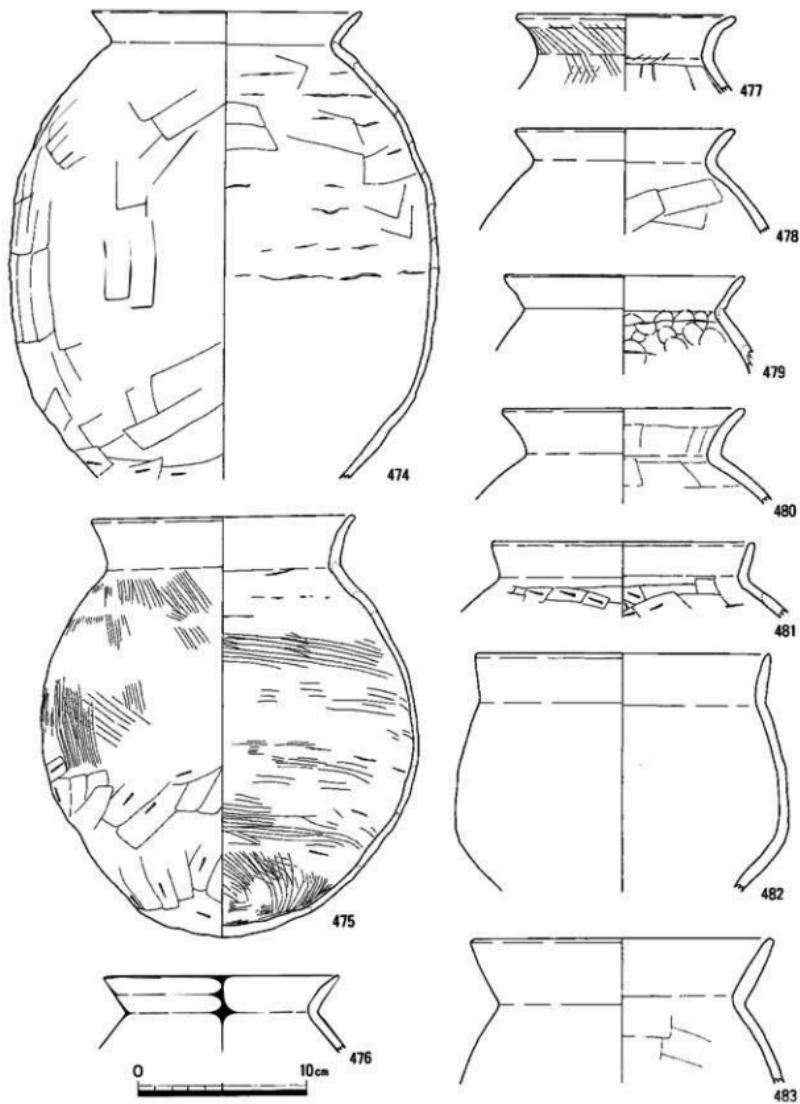


図119 土器・石器実測図(32)

SD14(484~499)

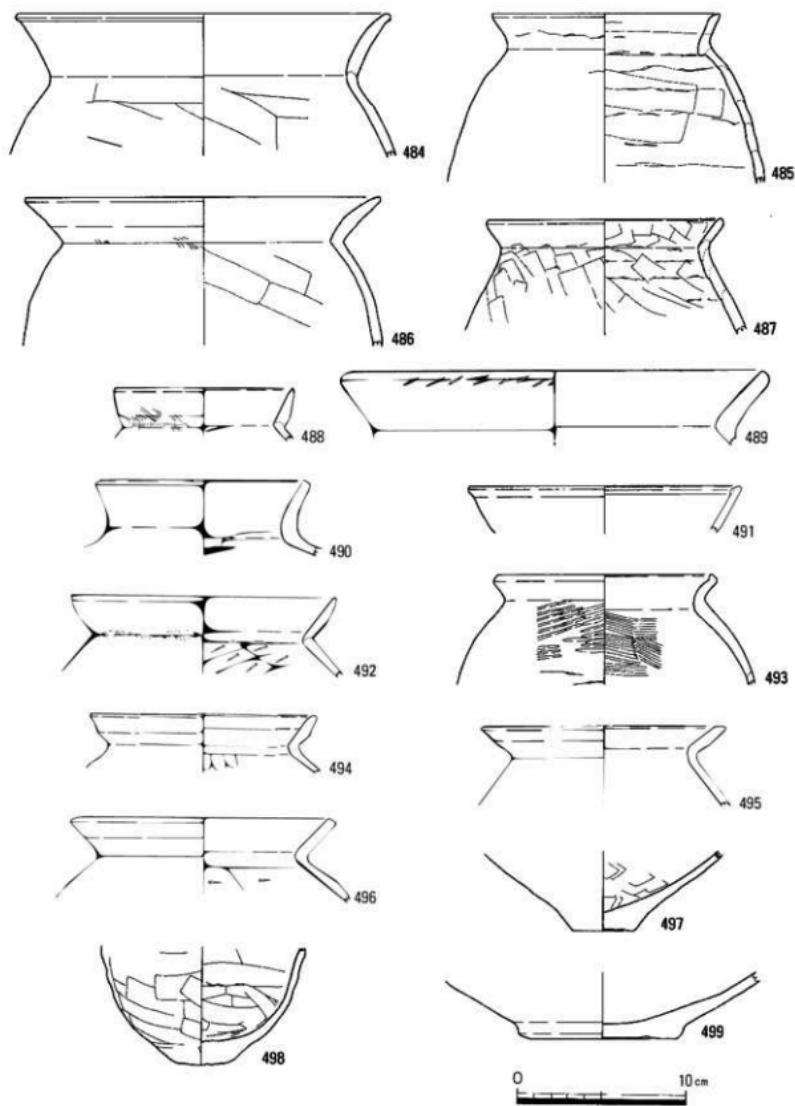


図120 土器・石器実測図33

SD14(500~521)

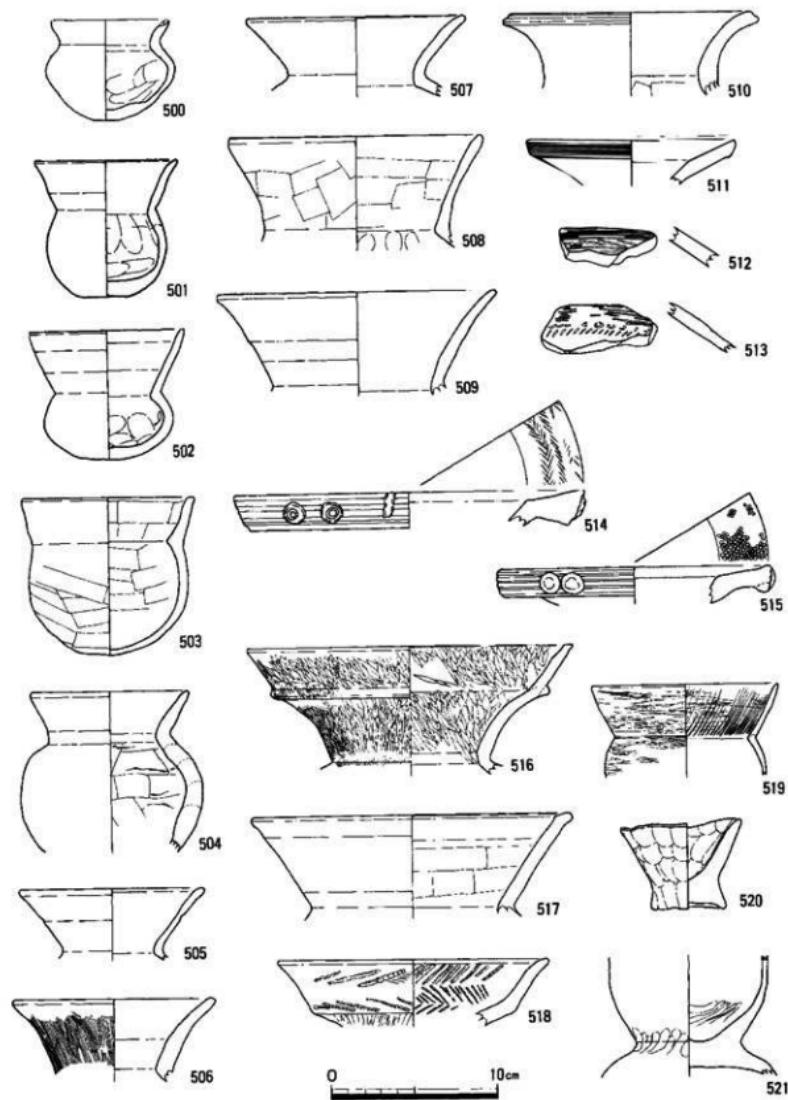


図121 土器・石器実測図34)

SD14(522~541)

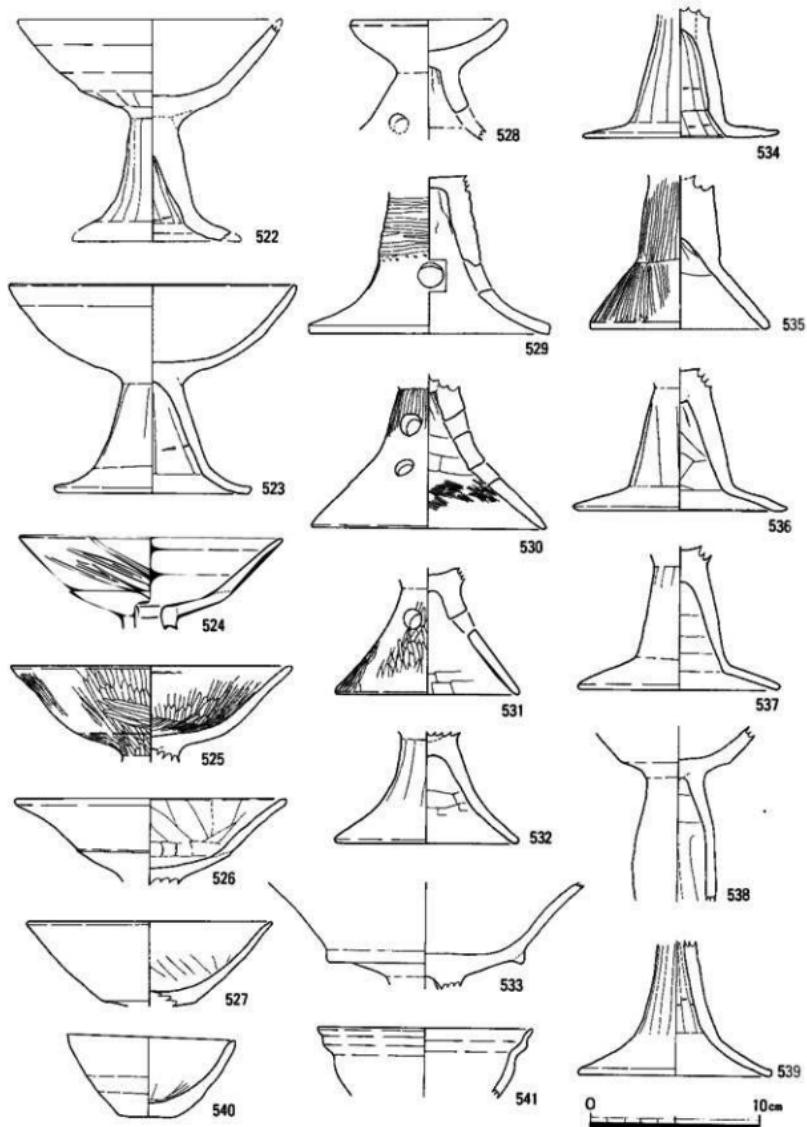


図122 土器・石器実測図35

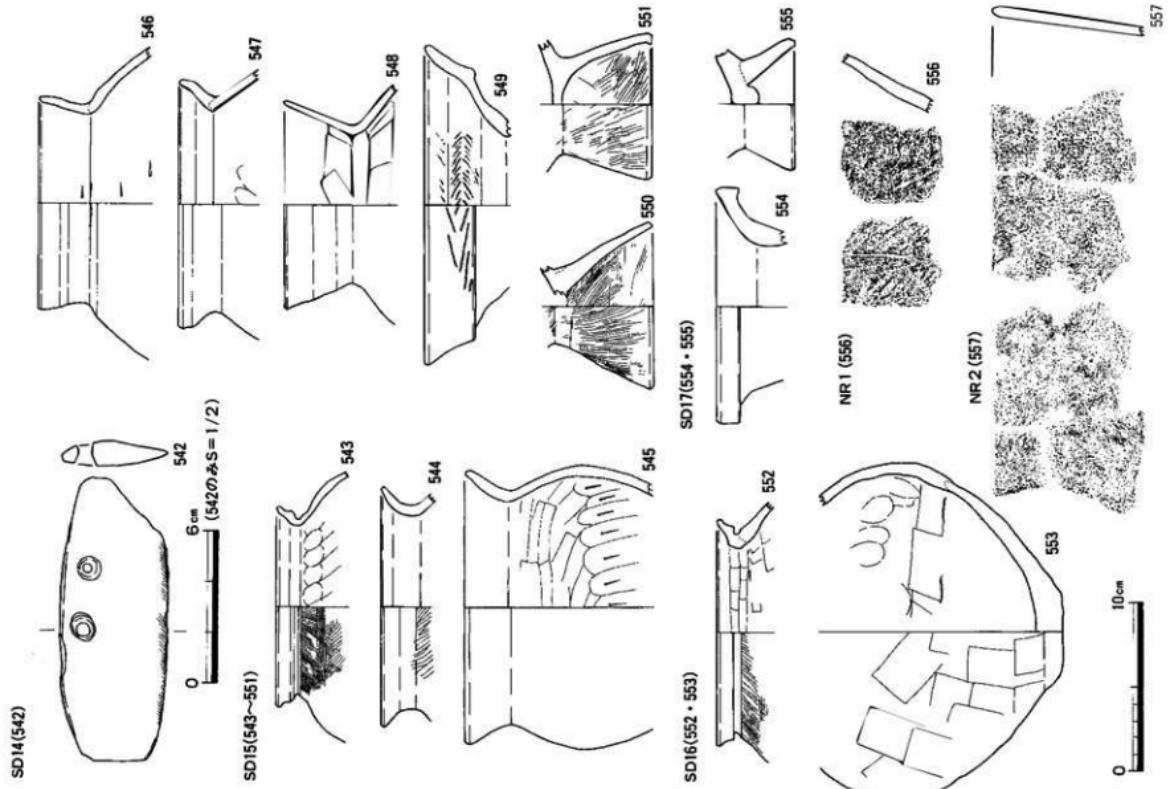
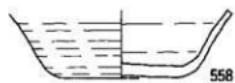
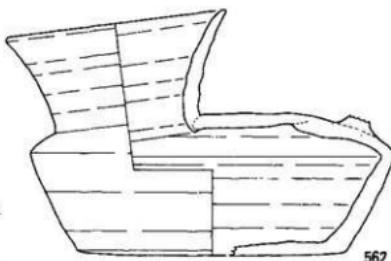
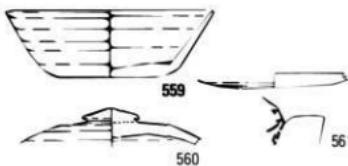


図123 土器・石器実測図

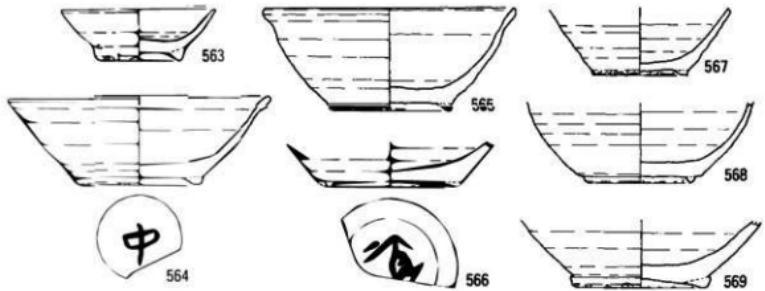
SD19(558)



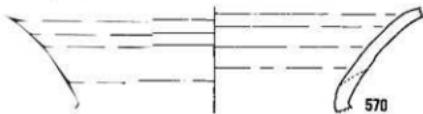
SD20(559~562)



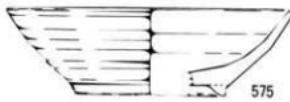
SD21(563~569)



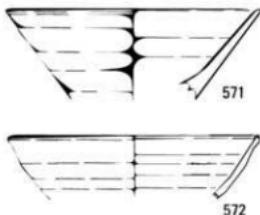
SD22(570)



P439(575)



P289(571・572)



P348(573)



P379(576・577)



P785(574)



図124 土器・石器実測図(37)

包含層(578~626)

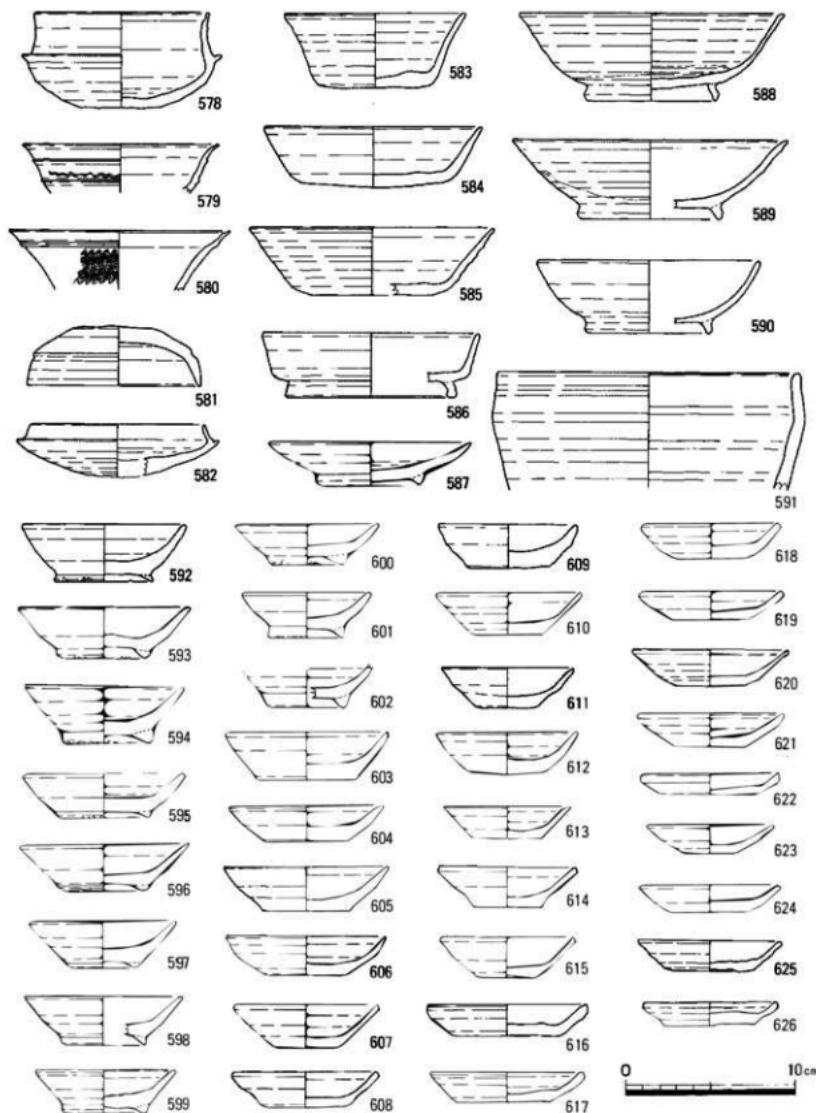


図125 土器・石器実測図(3)

包含層(627~672)

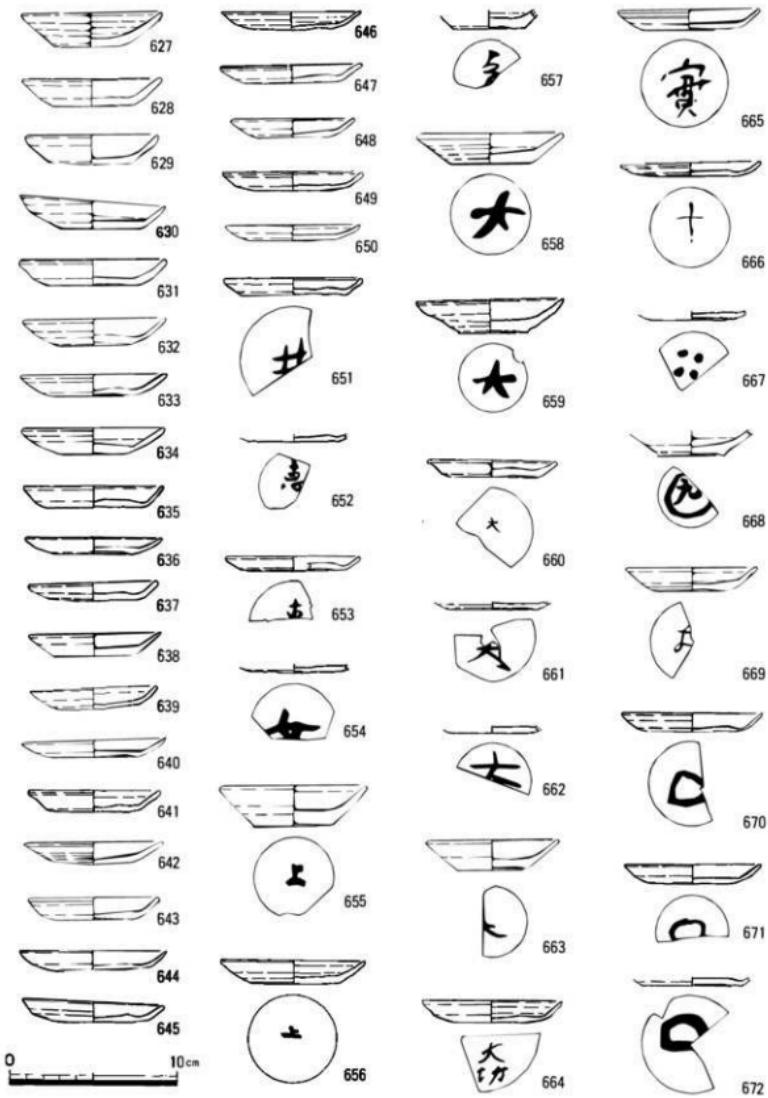


図126 土器・石器実測図(3)

包含層(673～703)

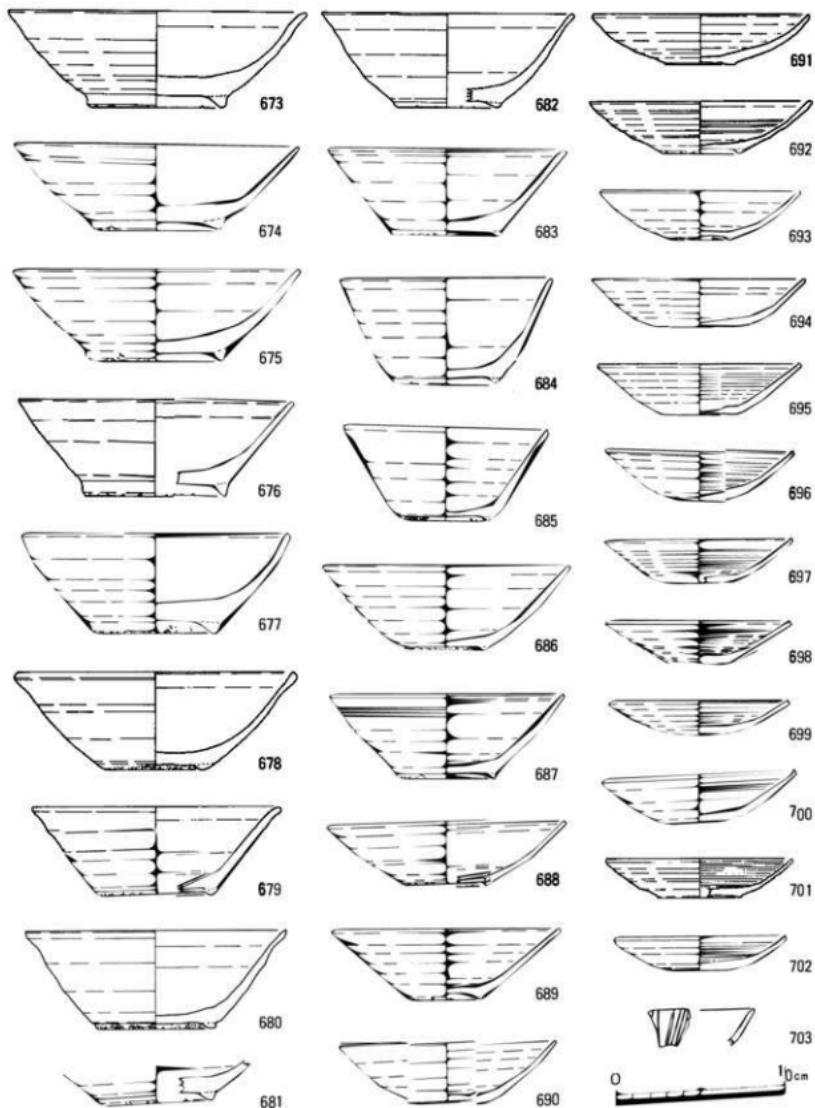


図127 土器・石器実測図40

包含層(704~725)

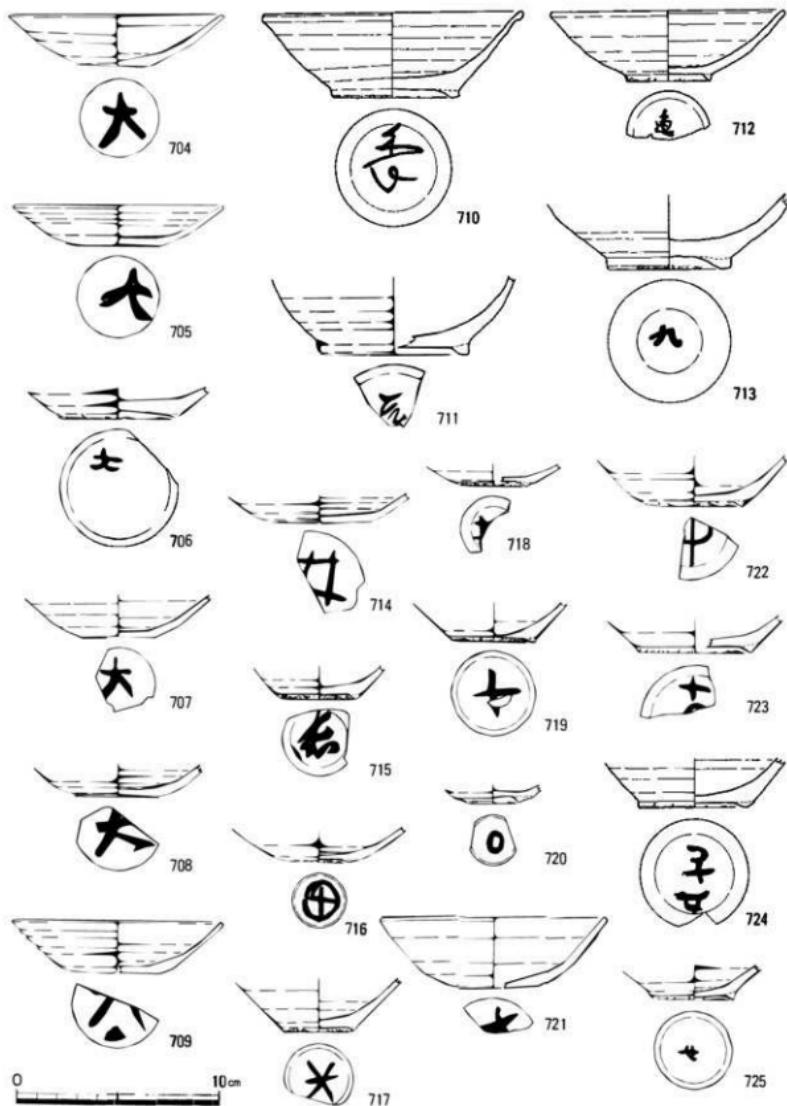


図128 土器・石器実測図(4)

包含層(726～748)

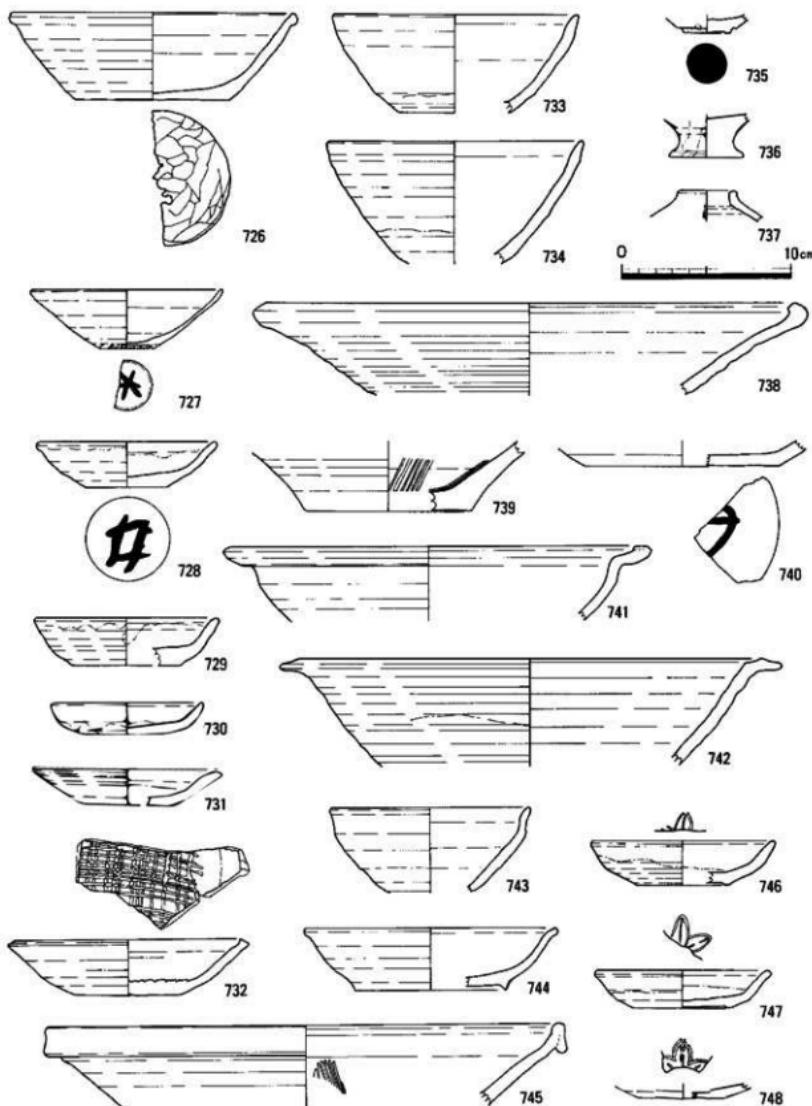


図129 土器・石器実測図(42)

包含層(749~782)

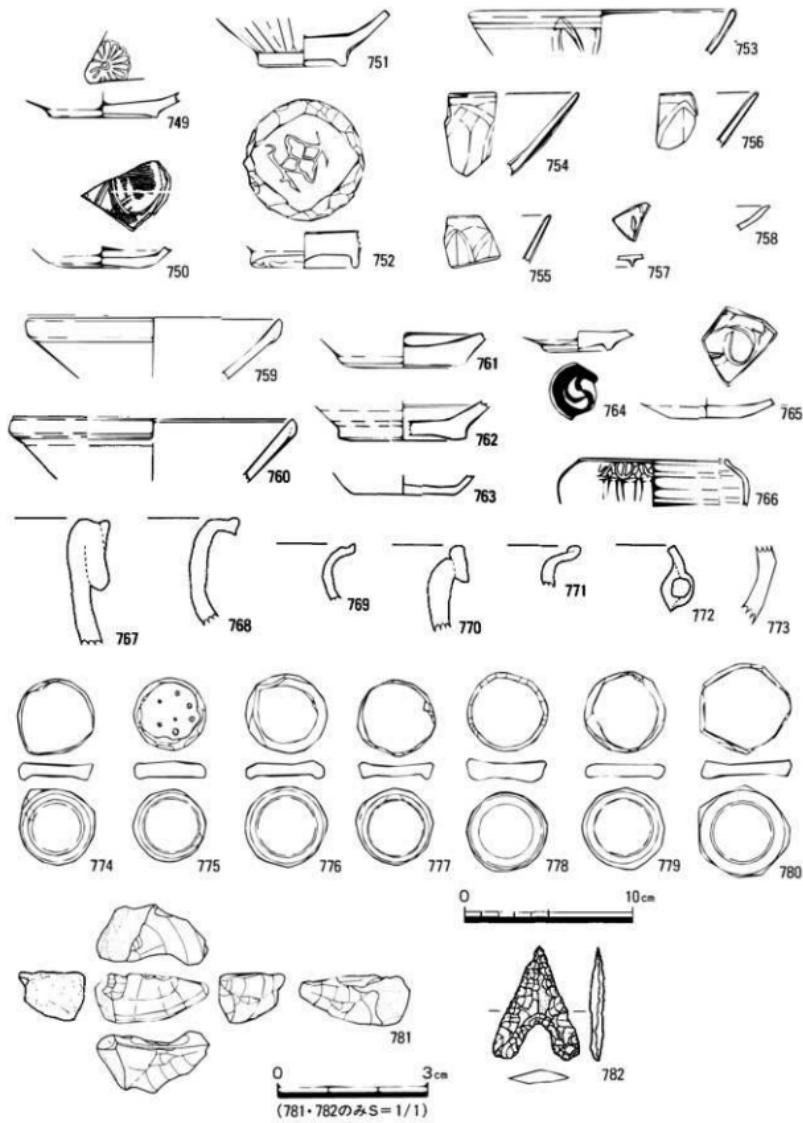


図130 土器・石器実測図(43)

表11 土器・石器観察表(1)

登録番号	通構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	抽回番号	回収番号	
1 SB1	土師器 斐B 1	(11.5)				体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面斜め方向の板ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y8/2)	口縁部外面に媒 付着	713	88	65	
2 SB1	土師器 斐底深 d			4.6		体部内外面横一斜め方 向の板ナダ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	黄白色 (2.5Y6/1)	体部外面と内面 下方に媒付着	713	88	65	
3 SB1	土師器 斐B 1	(11.5)				体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面斜め方向の板ナダ	やや粗、径2mm以下 の長石をわずかに含む	普通	灰黃褐色 (10YR6/2)		717	88	65	
4 SB1	土師器 斐B 1	14.0				体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面斜め方向の板ナダ 体部外面横一方向の板 ナダ、口縁部外面横 ナダ、体部内面上方指 圧、体部内面下方横方 向の板ナダ	やや粗、径5mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)			718	88	65
5 SB1	土師器 斐底深 e			6.1		体部外面調整不明、体 部内面斜め方向の板ナ ダ	やや粗、径4mm以下 の長石を多く含む	良好	灰白色 (10YR8/1)	体部内面に媒付 着	718	88	65	
6 SB1	土師器 斐種不明					体部内外面調整不明		普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	底部外面に媒 付着	714	88	65	
7 SB1	土師器 高杯C	(15.2)		4.9		杯部内外面横ナダ	粗、径3mm以下 の長石、石英を幾 つか含む	普通	灰褐色 (7.5YR5/2)		716	88	65	
8 SB1	土師器 高杯C					杯部内外面調整不明	密、径4mm以下 の長石、石英を幾 つか含む	普通	褐色 (5YR7/6)		715	88	65	
9 SB2	土師器 斐B 1	(13.9)				体部内外面調整不明、 口縁部内外面横ナダ	やや粗、径7mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を多く含む	普通	淡黄色 (2.5Y8/3)		719	88	65	
10 SB2	土師器 斐B 1					口縁部内外面横ナダ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR6/3)		722	88	65	
11 SB2	土師器 鉢A	14.2		6.7		杯部外面横一方向のミ ガキ、杯部外面上方横ナ ダ、下方横方向の板ナ ダ	密、径2mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		724	88	66	
12 SB2	土師器 鉢A	(11.6)		6.8		体部内外面調整不明	粗、径5mm以下 の長石、石英、赤色酸化 土粒を幾つか含む	普通	褐色 (5YR6/6)		720	88	66	
13 SB2	土師器 小型窓	9.4		8.1		体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面斜め方向の指 圧	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわざかに 含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/3)		723	88	66	
14 SB3	土師器 斐底深 b			5.6		側面外と体部内外面 調整不明、口縁部外 面横ナダ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/3)		726	88	65	
15 SB3	土師器 窓H					体部外面調整不明、体 部内面指圧	やや粗、径2mm以下 の長石をわざかに含 む	普通	黄灰色 (2.5Y6/1)		727	88	65	
16 SB3	石器 砾石	19.8	15.5	8.4		自然面の一面に砥面が ある			石材：砂岩 重量3560g		941	88	68	
17 SB4	土師器 斐A 3					口縁部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石をわずかに含 む	普通	灰色 (5Y6/1)		728	89	65	
18 SB4	土師器 斐A 3					口縁部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		729	89	65	
19 SB5	土師器 斐B 1 d	(15.0)	4.0	21.7		体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面上方斜め方向 の板ナダ、体部内面下 方調整不明	粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を多く含む	普通	明褐色 (5YR7/1)		730	89	65	
20 SB5	土師器 斐A 2	(11.3)				体部外面下横一斜め 方向の板ナダ、体部外 面横一方向の板ナダ、 体部内外面横ナダ、体部 内面斜め方向の板ナダ	粗、径4mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	明褐色 (7.5YR7/2)	体部外下面に媒 付着	731	89	66	
21 SB5	土師器 斐C					口縁部内外面横ナダ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	口縁部外面に媒 付着	740	89	66	
22 SB5	土師器 斐種不明					内外面調整不明	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわざかに 含む	普通	淡黄色 (2.5Y7/3)	器面が剥離して いる	734	89	66	
23 SB5	土師器 斐底深 b			7.2		脚台内外面調整不明	やや粗、径2mm以下 の長石、石英をわざ かに含む	普通	灰白色 (10YR7/1)		733	89	66	
24 SB5	土師器 斐底深 f			1.7		底部内外面調整不明	やや粗、径1mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	褐灰色 (10YR6/1)		732	89	66	

表12 土器・石器観察表(2)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補足番号	回収番号
25 SB 5	土師器 甕底部			5.5		体部外面斜め方向の板ナデ、体部内面指圧	粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		735	89	66
26 SB 5	土師器 高杯C	14.5		6.5		杯部外面調整不明、杯部内面横ナデ、杯底部外面調整不明	密、径2mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	2次的に被熱	738	89	66
27 SB 5	土師器 高杯脚 3			10.4		脚部外面調整不明、脚部内面横ナデ、脚部内面横ナデ、板ナデ、板り込み	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	赤褐色 (10YR6/6)	脚部接合 A 1 a	737	89	66
28 SB 5	土師器 高杯脚 3	(10.1)				脚部外面調整不明、脚部内面横ナデ、脚部内面横ナデ、板ナデ、板り込み	粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	淡褐色 (5YR8/3)		739	89	66
29 SB 5	土師器 高杯脚					脚部外面調整不明、脚部内面棒状工具による縦ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐色 (5YR6/6)	脚部接合 B 1 a	736	89	66
30 SB 6	土師器 甕 A 3	(7.0)				体部外面斜めハケ、口縁部内面横ナデ、体部内面調整不明	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)		746	89	66
31 SB 6	土師器 甕 A 3	(13.6)				体部外面斜めハケ、口縁部内面横ナデ、体部内面指圧	やや粗、径3mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	灰白色 (7.5YR8/2)	屈曲部外面に1条の沈線	747	89	66
32 SB 6	土師器 甕 B 1			5.8		頭部外面指圧後横ナデ、頭部内面調整不明	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)	頭部外面に煤付着	744	89	66
33 SB 6	土師器 甕底部不 明					口縁部内外面調整不明	密、径2mm以下の長石をわずかに含む		浅黃褐色 (7.5YR8/4)		749	89	66
34 SB 6	土師器 甕底部			9.8		脚台外面斜めハケ、脚台内面指圧	やや粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色 (7.5YR4/1)	体部内面下方に煤付着	742	89	67
35 SB 6	土師器 甕底部 b			8.3		脚台外面調整不明、脚台内面斜めハケ、体部内面不定方向のタズリ	密、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (7.5Y7/1)	脚台外側上部と体部内面に煤付着	743	89	67
36 SB 6	土師器 鉢 C					杯部内外面調整不明	粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		745	89	66
37 SB 6	土師器 鉢 C	(18.2)				杯部内外面調整不明、脚部外側面ミガキ、脚部内面絞り込み	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む		にぶい褐色 (7.5YR7/3)	脚部接合 A 2 c	741	89	68
38 SB 6	土師器 鉢 C	(13.6)				口縁部内外面横ナデ	粗、径2mm以下の長石、石英を多く含む		にぶい黃褐色 (10YR7.2)		748	89	66
39 SB 7	土師器 甕 B 2					口縁部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐色 (5YR6/6)	脚部接合 A 2 c	917	89	66
40 SB 7	土師器 甕底部 d			3.6		体部外面調整不明、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石を幾つか含む	良好	明褐色 (7.5YR7/2)	体部外面に煤付着	918	89	66
41 SB 8	土師器 甕 B 2					口縁部内外面調整不明	やや粗、径3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐色 (5YR6/6)		752	89	66
42 SB 8	土師器 甕 C					口縁部内外面横ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰色 (2.5Y8/2)		751	89	66
43 SB 8	土師器 甕 B 1	14.1		2.8		口縁部内外面横ナデ	粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰黃褐色 (10YR6/2)		750	89	68
44 SB 6	石器 コア	4.8	8.3	6.0		分削面を打面として剥片剥離を施している				石材: チャート 重量220.4g	951	90	68
45 SB 6	石器 打斧	6.8	4.6	1.1		標長の剥片を素材とし、側縁から大まかな調整を施す。表面面に自然面を大きく残す。刃部削損				石材: ホルン フェルス 重量 54.1g	949	90	68
46 SB 9	土師器 甕 D	(11.1)				体部外面横方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面縱方向の指ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい黃褐色 (10YR7/2)	口縁部中程の3方向に穿孔あり、口縁部外面に一部外側に赤彩	753	90	68
47 SB 9	土師器 甕 B 1					体部外面調整不明、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	にぶい黃褐色 (10YR7/4)	口縁部外面に煤付着	754	90	66
48 SB 9	土師器 甕底部 e			8.4		体部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	褐灰色 (2.5Y6/1)		759	90	66

表13 土器・石器観察表(3)

案番号	通鑑・出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	図版番号
49	SB 9 土師器 甕底部 b				6.2	脚台内外面調整不明	粗、径 3 mm以下の長石を多く含む	普通	褐色 (7.5YR7/6)		756	90	67
50	SB 9 土師器 高杯か ?					杯部内面継ぎ目ガキ、杯部外面調整不明	やや粗、径 2 mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰黄褐色 (10YR5/2)	杯部外面に線刻	755	90	66
51	SB 9 土師器 甕底部 b				6.6	体部外側面斜め方向の板ナ デ、脚台外面調整不明	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英を多く含む	普通	黄褐色 (7.5YR7/8)	体部内面に煤付 着	757	90	67
52	SB 9 土師器 高杯G					杯部内面下方横ミガキ、他は調整不明	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/6)	口縁部外面に沈 縫 2 条以上	760	90	66
53	SK14 土師器 甕 A 3	(13.8)				体部外側面斜め方向の板ナ デ、口縁部内面斜め方向の指ナ デ	やや粗、径 4 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	褐灰色 (7.5YR4/1)	口縁部外面に煤付 着、脚部外面に 1 条の沈縫	921	90	67
54	SK14 土師器 甕 B 3	(16.2)				体部外側面横ハケ、口縁部内面斜め方向ナデ、体部内面斜め方向の指ナ デ	粗、径 3 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色 (10YR6/2)	体部～口縁部外 面煤付着	919	90	67
55	SK14 土師器 鉢 C	(17.1)			6.1	体部外面下方斜め方向の板ナ デ、口縁部内面斜め方向ナデ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	褐灰色 (7.5YR4/1)		920	90	68
56	SK14 土師器 甕底部 d				4.6	体部外側面横方向の板ナ デ、体部内面調整不明	粗、径 1 mm以下の長石を幾つか含む	良好	褐灰色 (7.5YR5/1)		922	90	67
57	SK 1 土師器 高杯C					杯部内面と脚柱部外 面調整不明、脚柱部内 面斜め方向の板ナデ	粗、径 1 mm以下の赤色化土粒を幾つか含む	普通	褐色 (7.5YR6/6)	脚部接合 A 2 c	904	90	67
58	SK 1 土師器 甕底部 e				6.4	底部内面調整不明	やや粗、径 3 mm以下の長石、石英を多く含む	普通	明黃褐色 (10YR6/6)		905	90	67
59	SK 7 土師器 甕 B 1	(13.6)				器面の調整不明	やや粗、径 5 mm以下の長石、石英、雲母、赤色化土粒を幾つか含む	普通	ぶどう色 (2.5YR6/4)		896	91	67
60	SK 7 土師器 甕 B 1	(13.4)				体部～口縁部内外部調 整不明	やや粗、径 8 mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (10YR7/1)		924	91	67
61	SK 7 土師器 甕底部 g				6.3	体部外面下方斜め方向の 板ナデ、他は調整不明	やや粗、径 4 mm以下の長石、石英、雲母、赤色化土粒を幾つか含む	普通	褐色 (5YR6/6)	体部外面に煤付 着	897	91	67
62	SK 7 土師器 高杯D					脚柱部外面調整不明、 脚柱部内面斜め状工具に よる脚柱ナデ取り込み	やや粗、径 1 mm以下の長石、石英、雲母、赤色化土粒をわず かに含む	普通	ぶどう色 (2.5YR7/4)		898	91	67
63	SK 7 土師器 高杯D					脚柱部外面調整不明、 脚柱部内面斜め方向のケ ズリ	やや粗、径 2 mm以下の長石、赤色化土粒を幾つか含む	普通	ぶどう 黄褐色 (10YR7/4)	脚部接合 A 2 c	899	91	67
64	SK 7 石器 鐵石	10.6	11.1	7.6		自然面の一面上に礎面が ある				石材：ホル フェルス、 重量748 g	957	91	68
65	須恵器 高杯身				9.0	脚部内外面回転ナデ	粗、径 1 mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色 (N7/0)	脚部 A 1 a	36	91	67
66	土師器 甕底部 d				4.9	体部外面調整不明、体 部内面斜め方向の板ナ デ	やや粗、径 3 mm以下の長石を幾つか含む	普通	ぶどう 黄褐色 (10YR7/3)	体部内面に煤付 着	914	91	67
67	石器 不明	5.5	3.0	1.3		中央付近に直徑 1 cm 程 度の穿孔あり					915	91	67
68	SU 1 土師器 甕 A 2	(15.2)				体部内外面調整不明、 口縁部内外面横ナデ	やや粗、径 3 mm以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色 (7.5YR5/1)		891	91	68
69	SU 2 土師器 甕 A 1	(11.0)				口縁部内外面調整不明	やや粗、径 5 mm以下の長石、石英、赤色化土粒を幾つか含む	普通	ぶどう 黄褐色 (10YR7/2)		901	91	67
70	SU 2 土師器 甕底部 c				6.4	体部内外面調整不明	やや粗、径 1 mm以下の長石、石英を多く含む	普通	浅黃色 (2.5Y7/3)		903	91	67
71	SU 2 土師器 甕 H					内外面調整不明	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、赤色化土粒を幾つか含む	普通	淺黃色 (2.5Y7/3)	体部外面に線刻	902	91	67
72	土師器 甕底部 e				6.6	体部内外面斜め方向の 板ナデ	粗、径 4 mm以下の長石を多く含む	良好	褐灰色 (10YR6/1)	体部内面に煤付 着	916	91	67

表14 土器・石器観察表(4)

実測番号	通稱・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎・土	焼成	色調	備考	整理番号	説明番号	回収番号
73	SU 3	土師器 小型壺				体部内外面調整不明、口縁部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下の長石、石英を多く含む	普通	黄褐色(10YR7/2)		906	91	67
74	SU 4	土師器 壺底部 b		8.5		体部外面一腳台内外面調整不明、体部内部横一斜め方向の横ナダ	やや粗、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐褐色(10YR3/1)	体部外面上方と体部前面に煤付着	907	91	68
75	SU 6	陶土器 深鉢		10.4		体部内外面調整不明	粗、径3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	褐灰色(10YR5/1)		923	91	68
76	SU 23	陶土器 深鉢		10.0		体部内外面調整不明	やや粗、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	にぶい 黄褐色(10YR6/3)		900	91	67
77	SU 5	土師器 高杯 B 1 e	(15.5)	5.2		体部外面斜め一横ナダ、口縁部外面横ナダ、口縁部内部横ハケ、体部内部斜め一横方向の板ナダとハケ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色(10YR7/2)	体部外面に煤付着	894	92	68
78	SU 5	土師器 壺底部 d		4.4		体部外面斜め方向の板ナダ、体部内部調整不明	密、径3mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	にぶい 黄褐色(10YR6/3)		892	92	67
79	SU 5	土師器 高杯 C	(13.5)		5.7	杯部内外面横ナダ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色(10YR5/1)	脚部接合 A 2 b	893	92	68
80	SU 5	土師器 高杯 C	(17.0)	12.6	13.5	杯部外面調整不明、脚柱部外面横ナダ、脚柱部内部横ナダ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色(5YR7/4)	脚部接合 B 1 a	890	92	68
81	SU 5	土師器 高杯 C	(16.0)	11.4	11.9	杯部外面調整不明、脚柱部外面横ナダ、脚柱部内部横ナダ、脚柱部内部斜め方向の板ナダ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色(7.5YR7/4)	脚部接合 A 2 b	895	92	68
82	SU 5	土師器 高杯脚 4		11.4		脚部一脚部外面調整不明、脚柱部外面横ナダ、脚柱部内部横ナダ	密、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色(10YR7/4)	脚部接合 A 2 b	908	92	67
83	SD 4	須恵器 杯蓋 A	(11.0)		4.8	天井部外面回転ヘラ削り4/5、他の回転ナダ、クロコ左回転	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰色(N6/0)	横径11.6cm、口縁部高2.5cm、口縁端部F、脚土 A 2 a	32	92	69
84	SD 4	須恵器 杯蓋 A	11.1		4.6	天井部外面回転ヘラ削り3/4、他の回転ナダ、クロコ左回転	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰色(N5/0)	横径11.7cm、口縁部高2.3cm、口縁端部F、脚土 A 1 a	34	92	69
85	SD 4	須恵器 高杯蓋 A	(12.4)			天井部外面回転ヘラ削り、他の回転ナダ、クロコ左回転	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰色(N6/0)	横径12.7cm、口縁部高2.4cm、口縁端部C、天井部外面自然剥離状態、脚土 A 2 a	35	92	69
86	SD 4	須恵器 高杯蓋 A	11.8		5.3	天井部外面回転ヘラ削り4/5、天井部内部中央一方向ナダ、他の回転ナダ、クロコ左回転	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰色(N6/0)	横径12.2cm、口縁部高2.0cm、口縁端部A、つまみ押出9cm、つまみ高1.1cm、脚土 A 2 a	33	92	69
87	SD 4	須恵器 蓋	(24.2)			口頭部内外面回転ナダ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(N7/0)	頭部外面に波状文、脚土 A 2 a	45	292	69
88	SD 4	土師器 壺 B 1	(16.8)			体部外面横ハケ、口縁部外面横ナダ、口縁部内部横ナダ、口縁部内部指圧後横一斜め方向の板ナダ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色(10YR6/3)	体部一口縁部外面に煤付着	777	92	69
89	SD 4	土師器 壺 B 1	(20.0)			口縁部内外面に指圧後横横ナダ	粗、径5mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰黃褐色(10YR4/2)		776	92	69
90	SD 4	土師器 壺 B 1	(15.6)			体部外面斜めハケ、口縁部内外面横ナダ、口縁部内部横ナダ、体部内部指圧後横	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	灰白色(10YR8/2)		779	93	69
91	SD 4	土師器 壺 B 1	(14.9)			体部外面斜めハケ、口縁部内外面横ナダ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色(10YR5/1)	体部一口縁部外面に煤付着	780	93	69
92	SD 4	土師器 壺 B 1	(12.4)			体部外面横ハケ、口縁部内外面横ナダ、体部内部面横ナダ	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR3/1)	体部内面上方を除き煤付着	778	93	69
93	SD 4	土師器 壺 B 1	10.5			体部外面下方不定方向の板ナダ、外面上方調整不明、口縁部内外面横ナダ、体部内部面横ナダ	密、径9mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰白色(10YR8/2)	体部外面下方煤付着	792	93	69

表15 土器・石器観察表(5)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	神社番号	回収番号	
94	SD 4	土師器 鉢D	14.6	3.3	11.8	体部外表面ハケ、口縁部 内外面横ナデ、体部内面 横一斜め方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色酸化土 を幾つか含む	普通	浅黄色 (10YR8/3)		791	93	69	
95	SD 4	土師器 甕底部 d		5.5		体部外表面斜一横ハケ、 体部内面斜め一横方向 の板ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR8/1)	体部内外面に煤 付着	782	93	69	
96	SD 4	土師器 甕底部 e		4.8		体部外表面調整不明、体 部内面斜め方向の板ナ デ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR6/3)	体部外面上方に 煤付着	765	93	69	
97	SD 4	土師器 甕底部 g		4.8		体部外表面調整不明、 体部内面斜め方向の板ナ デ	やや粗、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/4)		781	93	69	
98	SD 4	土師器 高杯E	(14.5)	9.5	9.7	杯部外表面横ナデ、脚 柱部外表面斜め方向の板 ナデ、杯部内面横ナデ、 脚柱部内面横ナ デ	やや粗、径1.5mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土を幾つ か含む	普通	にぶい 褐色 (7.5YR7/3)	脚部接合A 2 c	794	93	69	
99	SD 4	土師器 高杯G	14.8		6.0	杯部内面調整不明、杯 部外表面上方横ナデ、杯 部外表面斜め方向の板 ナデ、指圧	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土を多く 含む	普通	明褐色 (7.5YR7/2)		789	93	69	
100	SD 4	土師器 高杯脚 5			9.7	脚部内外面横ナデ	やや粗、径1mm以下 の長石、赤色酸化土 をわずかに含む	不良	褐色 (5YR6/6)		790	93	69	
101	SD 4	土師器 鉢A	(12.2)	3.2	4.9	体部外表面下方不定方向 の横ナデ、口縁部内面 横ナデ、体部内面不 定方向のナデ	密、径0.5mm以下の赤 色酸化土を含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)		775	93	69	
102	SD 4	石器縦 石	6.1	6.1	3.0	柱状に範囲する石を素 材としている。脚部面 の4面に縫合がある。				石材：流紋岩 質凝灰岩、 重量98.4kg		945	93	69
103	SD 7	須恵器 杯蓋A	12.9		4.3	天井部外表面回転ヘラ削 り、他は回転ナデ、ロ クロ左回転	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土を幾つか含 む	良好	灰白色 (N7/0)	横径12.3cm、 口縁部厚2.5cm、 口縁端部E、 胎土A 2 a	24	93	70	
104	SD 7	須恵器 杯蓋A	11.7		4.7	天井部外表面回転ヘラ削 り/3.2、他は回転ナデ、 ロクロ左回転	やや粗、径1mm以下 の長石をわずかに含 む	不良	灰白色 (2.5Y7/1)	横径12.1cm、 口縁部厚2.2cm、 口縁端部E、 天井部外面上に煤 付着、胎土A 1 a	25	93	70	
105	SD 7	須恵器 杯蓋A	11.0		3.2	天井部外表面回転ヘラ削 り/3.2、天井部外表面中央 回転ヘラ削り後ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石、石英をわずかに 含む	良好	灰白色 (N7/0)	横径10.6cm、 口縁部厚1.7cm、 口縁端部A	28	93	70	
106	SD 7	須恵器 杯身A				底部外表面回転ヘラ削 り/1.2、他は回転ナデ、 ロクロ右回転	密、径1mm以下の長 石、褐灰色を幾つ か含む	良好	灰白色 (N7/0)	受容部15.6cm、 胎土A 2 a	27	93	71	
107	SD 7	須恵器 杯身A	9.3		4.3	底部外表面回転ヘラ削 り/3/4、他は回転ナデ、 ロクロ左回転	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)	受容部11.0cm、 たちあがり 高1.8cm、 口縁端部C、 受容部A、 胎土A 1 a	23	93	70	
108	SD 7	須恵器 杯身A			4.6	底部外表面回転ヘラ削 り/3.4、他は回転ナデ、 ロクロ左回転	密、径1mm以下の長 石、石英を含む	良好	灰白色 (N6/0)	受容部13.2cm、 器皿に鉄分の吹 き出しが幾つか みられる、 胎土A 2 a	26	93	71	
109	SD 7	須恵器 高杯蓋 A	10.4		6.2	杯部天井部外表面回転ヘ ラ削り/3.4/3.4、他是回転ナ デ、ロクロ左回転	密、径1mm以下の長 石、石英を含む	不良	灰白色 (N7/0)	横径10.9cm、 口縁部高2.1cm、 口縁端部B、 つまみ径2.7cm、 つまみ高1.0cm、 胎土A 1 a	6	94	70	
110	SD 7	須恵器 無蓋高 杯				杯部外表面回転ヘラ削り、 他是回転ナデ	密、径1mm以下の長 石、石英を含む	良好	灰白色 (N7/0)	杯部外面上に被 状文、杯部内面上 にヘラ記号、胎土 A 2 a	938	94	71	
111	SD 7	須恵器 甕	(9.6)			全面回転ナデ	やや粗、径1mm以下 の長石を多く含む	普通	灰白色 (7.5Y7/1)	口縁部内外面に 自然軸跡、 胎土A 2 a	30	94	71	
112	SD 7	土師器 甕B 1 c	14.4	5.1	23.0	体部外表面横ハケ、口 縁部外表面ナデ、体部 内面横斜め方向の板ナ デ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色酸 化土を幾つか含む	普通	浅黄色 (7.5Y8/6)		795	94	70	
113	SD 7	土師器 甕B 1	(14.0)			体部外表面横一斜めハケ、 口縁部外表面ナデ、口 縁部内面横斜め方向の板ナ デ、体部内面横斜め 方向の板ナデ	密、径4mm以下の長 石、石英を含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部～口縁部外 面と体部内面下 方煤付着	888	94	70	
114	SD 7	土師器 甕B 1	(15.6)			体部外表面横ハケ、口 縁部外表面ナデ、体部 内面斜め方向の板ナ デ	密、径4mm以下の長 石、石英を含む	普通	灰黃褐色 (10YR6/2)	体部外面上に煤 付着	771	94	71	

表16 土器・石器観察表(6)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	脚高(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補田番号	団版番号
115	SD 7	土師器 甕 B 1	(14.4)			体部外面縦ハケ、口縁部内外面横ナダ、体部内面上方横方向の板ナダ、下方指圧痕	やや粗、径 3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	明青灰色 (5B7/1)	体部外面に煤付着	768	94	71
116	SD 7	土師器 甕 B 1	(12.8)			口縁部外側面横ナダ	密、径 3mm以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	灰白色 (2.5Y7/1)		763	94	71
117	SD 7	土師器 甕 B 1	(10.9)			体部外面縦ハケ、口縁部内外面横ナダ、口縁部一体部内面横方向の板ナダ	密、径 2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙色 (2.5Y6/6)	体部外面に煤付着	772	94	71
118	SD 7	土師器 甕 B 1	(12.0)			体部外面縦ハケ後横ナダ、口縁部内外面横ナダ、体部内面横一斜め方向の縦ナダ	やや粗、径 1mm以下の長石、石英をわざかに含む	普通	浅黄色 (10YR8/3)		770	94	71
119	SD 7	土師器 甕 B 1	(13.2)			体部外面横方向の板ナダ、口縁部内外面横ナダ、体部内面横方向の板ナダ後横方向の板ナダ	やや粗、径 2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		769	949	71
120	SD 7	土師器 甕 B 1	(13.1)			体部内外面斜め方向の板ナダ、口縁部内外面横ナダ	やや粗、径 1mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)	体部外面下方煤付着	762	94	71
121	SD 7	土師器 甕底部 b		8.7		体部内面 不定方向の板ナダ、脚台外面横方向板、脚台内面横方向の板ナダ	やや粗、径 2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)	体部外面煤付着	762	94	71
122	SD 7	土師器 甕 B 1	(11.0)			体部外面調整不明、口縁部外側面横ナダ、体部内面横方向の板ナダ	やや粗、径 3mm以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)	体部外面下方煤付着	774	95	71
123	SD 7	土師器 甕底部 e		5.8		体部外面傾方向の板ナダ、体部内面異常不明	やや粗、径 2mm以下の長石、石英、雲母をわざかに含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)	体部内外面に煤付着	889	95	71
124	SD 7	土師器 甕底部 g		4.6		底部外面横方向のケズり、体部外面下方不定方向の板ナダ、体部内面横方向の板ナダ	密、径 5mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰褐色 (5YR7/4)	体部内外面上方に煤付着	767	95	70
125	SD 7	土師器 高杯 E	12.9	8.7	10.5	杯部内下面下方横 方向の板ナダ、杯部内上面上方横 方向の板ナダ、脚柱部外面横 方向の板ナダ、脚柱部内面横 方向の板ナダ	やや粗、径 1mm以下の長石、赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	灰白色 (7.5YR8/2)	脚部接合 A 2 c	793	95	70
126	SD 7	土師器 高杯 E	(13.9)			杯部内外面横ナダ、杯底部外面指圧	やや粗、径 1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	灰褐色 (10YR7/3)		788	95	71
127	SD 7	土師器 高杯 E	(13.4)			杯部内外面横ナダ	やや粗、径 1mm以下の赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)		787	95	71
128	SD 7	土師器 高杯脚 5			9.6	脚柱部外面指圧後未調整、脚柱部内外面横ナダ、脚柱部内面横 方向の板ナダ	やや粗、径 1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	灰褐色 (5Y6/4)		783	95	71
129	SD 7	土師器 高杯脚 5			10.0	脚柱部、外面傾斜未調整、脚柱部内外面横ナダ、脚柱部内面横 方向工具による板ナダ	密、径 1mm以下の長石をわざかに含む	普通	灰褐色 (7.5YR7/4)	脚部接合 A 2 c	785	95	70
130	SD 7	土師器 高杯脚 5		8.8	4.3	脚部内外面横ナダ	やや粗、径 1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	淡黄褐色 (7.5YR8/6)	脚部接合 A 2 c	786	95	71
131	SD 7	土師器 鉢 A	(11.9)	4.2		体部外面縦ハケ、口縁部内外面横ナダ、体部内面不定方向のハケ	やや粗、径 1mm以下の赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		766	95	70
132	SD 7	土師器 鉢 A	(10.8)	4.3	5.2	体部外面調整不明、口縁部内外面横ナダ、体部内面斜めハケ後ナダ調整	やや粗、径 1mm以下の長石をわざかに含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)		764	95	71
133	SD 7	土師器 手捏ね 土器	(5.6)	3.6	3.6	体部内外面指圧	密、径 1mm以下の長石をわざかに含む	良好	橙色 (5YR6/6)		527	95	70
134	SD 7	石器 苔石	23.0	26.0	9.4	扁平な円錐を素材とし、平坦な面のほぼ中央に敲打痕を残す。				石材：流紋岩 重量7600g	940	95	70
135	SD 7	石器 打斧	4.1	6.0	0.8	板状に簡略した機械の刃を素材とし、上下の両刃に加工を施す。				石材：ホルンフェルス、 重量25.7g	950	95	70

表17 土器・石器観察表(7)

番号	直通 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色調	備考	整理 番号	検査 番号	回収 番号
136	SD10 下層	土師器 甕 A 3	15.7			体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部外面横 ナダ、頭部内面横一斜め ハケ、体部内面縫方 向の板ナダ	灰、径 4 mm 以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		939	96	72
137	SD10 下層	土師器 甕底厚 a			9.6	体部外面斜めハケ、脚 台外面斜めハケ後横 方向のナダ消し、脚台内 面指圧、斜め方向の板 ナダ	灰、径 1 mm 以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部内外面に煤 付着	446	96	73
138	SD10 下層	土師器 甕底厚 a			11.0	脚台外面斜めハケ後横 方向のナダ消し、脚台内 面指圧	灰、径 2 mm 以下の長 石をわずかに含む	良好	明褐色 (7.5YR7/2)	体部内面下方煤 付着	439	96	73
139	SD10 下層	土師器 甕 A 3	(14.0)			体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部外面横 ナダ、頭部内面横方 向の板ナダ、体部内面 横方向の板ナダ	灰、径 2 mm 以下の長 石、石英をわずかに 含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)	口縁部外面に煤 付着	586	96	74
140	SD10 下層	土師器 甕 A 3	(15.0)			体部外面斜めハケ、口 縁部内面横方向の板ナダ	やや粗、径 1 mm 以下の 長石、石英、雲母 をいくつか含む	普通	灰白色 (2.5Y5/1)	屈曲部外面に 1 条の沈線	458	96	74
141	SD10 下層	土師器 甕 A 3	(13.8)			体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部外面横 ナダ、頭部内面横方 向の板ナダ、体部内面 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 2 mm 以下の 長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰黄色 (2.5Y6/1)	屈曲部外面に 1 条の沈線、口縁 部外面に煤付着	455	96	73
142	SD10 下層	土師器 甕 A 3	(11.1)			体部外面斜めハケ、口 縁部内面横ナダ、頭 部内面横方向のヘラナ ダ、体部内面縫方 向の板ナダ	やや粗、径 1 mm 以下の 長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	体部一部口縁部外 面に煤付着	453	96	74
143	SD10 下層	土師器 甕 A 5	(10.8)			体部外面斜めハケ、口 縁部内面横ナダ	やや粗、径 2 mm 以下の 長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		575	96	74
144	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(16.7)	5.2	29.8	体部外面斜めハケ、口 縁部内面横ナダ、体 部内面横一斜め方 向の板ナダ	やや粗、径 2 mm 以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	褐灰色 (10YR6/1)	体部外面下方に 煤付着	468	96	72
145	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(15.5)			体部外面斜めハケ、 口縁部内面横ナダ、体 部内面横一斜め方 向の板ナダ	灰、径 4 mm 以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (7.5YR8/1)	体部一部口縁部外 面煤付着	480	69	74
146	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(16.6)			体部外面斜め方向の板 ナダ、口縁部外面横 ナダ、体部内面横方 向の指圧	やや粗、径 4 mm 以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部一部口縁部外 面に煤付着	521	96	73
147	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(17.6)			体部外面斜めハケ、口 縁部内面横ナダ、体 部内面横斜め方 向の板ナダ	やや粗、径 4 mm を多く 含む	普通	灰白色 (2.5Y8/1)	体部一部口縁部外 面に煤付着	464	96	74
148	SD10 下層	土師器 甕 B 1 d	(13.8)	6.8	22.9	体部外面斜め方向の板 ナダ、体部外面横ハケ、 口縁部内面横ナダ、 体部内面横一斜め 方向の板ナダ	やや粗、径 2 mm 以下の 長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	体部内外面と口 縁部外面に煤付 着	568	97	72
149	SD10 下層	土師器 甕 B 1 c	16.5	5.9	24.5	底部外面横方向のケ リ、体部外面横ハケ、 口縁部内面横ナダ、 体部内面横一斜め 方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm 以下の 長石、石英を幾つ か含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)	体部内面下方に 煤付着	469	97	72
150	SD10 下層	土師器 甕 B 1 d	(13.0)	4.0	23.8	体部外面横方向の板ナ ダ、口縁部内面横ナ ダ、体部内面斜め一 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm 以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	体部一部口縁部外 面と体部内面下 方に煤付着	473	97	72
151	SD10 下層	土師器 甕 B 1 f				体部外面斜め一斜め方 向の板ナダ、口縁部内面横 ナダ、体部内面斜 め方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm 以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/3)	体部一部口縁部外 面と体部内面下 方に煤付着	484	97	72
152	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(14.0)			体部外面斜め一斜め方 向の板ナダ、口縁部内面横 ナダ、体部内面斜 め方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm 以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	灰白色 (10YR8/1)	体部外面に煤付 着	561	97	74
153	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(17.4)			体部外面斜め一斜め方 向の板ナダ、口縁部内面横 ナダ、体部内面斜 め方向の板ナダ	やや粗、径 5 mm 以下 の長石、石英を多く 含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面に煤付 着	551	97	74
154	SD10 下層	土師器 甕 B 1 f	(12.3)	5.9	20.0	体部内面横一斜め方 向の板ナダ、口縁部内 面横ナダ	灰、径 1 mm 以下の長 石、石英を幾つか含 む	良好	灰白色 (10YR7/1)	体部内外面と口 縁部外面に煤付 着	593	98	73

表18 土器・石器観察表(8)

実測番号	通称・出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
155	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(10.8)	5.8	18.9	体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナデ、体 部内面横方向の板ナデ	密、径3mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	良好	灰黄褐色 (10YR8/2)	体部外面下方 に焼付着	581	98	73
156	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(12.0)			頭部外面横方向の板ナ デ、口縁部内外面横ナ デ、頭部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英をわず かに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR6/3)	口縁部外面に焼 付着	465	98	74
157	SD10 下層	土師器 甕 f	(14.3)	4.3	16.4	体部外面横一斜め方向 の板ナデ、口縁部内外 面横ナデ	密、径3mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	普通	灰褐色 (10YR8/1)	体部外面下方 に焼付着	546	98	73
158	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(15.4)			体部外面斜め方向の板 ナデ、口縁部内外面横 ナデ、体部内面横方向 の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を多く含 む	普通	灰白色 (10YR8/2)	全面に部分的に 焼付着	580	98	73
159	SD10 上層	土師器 甕 g	12.0	4.3	11.8	体部外面下方一底部外 面調整不明、体部外面 横一斜めハケ、口縁部 内外面横ナデ、体部内 面不定方向のナデ	密、径4mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部上方に穿孔 あり	437	98	73
160	SD10 下層	土師器 甕 B 1	13.5			体部外面一口縁部外 面横ナデ、体部内面斜 め方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	体部一口縁部外 面に焼付着	451	98	74
161	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(11.6)			体部外面横方向の板ナ デ、口縁部内外面横ナ デ、体部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径1mm以下 の長石を多く含む	普通	明赤褐色 (2.5YR5/6)		443	98	73
162	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(13.2)			体部外面横方向の板ナ デ、口縁部内外面横ナ デ、体部内面調整不明	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	普通	にぶい 褐色 (5YR6/4)	体部一口縁部内 外面に焼付着	585	98	74
163	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(13.6)			体部上方一口縁部外 面横ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)		576	98	74
164	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(10.0)			体部外面斜め方向の 板ナデ、口縁部内外面 横方向の板ナデ、頭部 内面指痕痕	密、径5mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	良好	淡黄色 (2.5Y7/3)	口縁部外面に焼 付着	447	98	73
165	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(12.4)			体部外面横方向の板ナ デ、口縁部内外面横ナ デ、体部内面横方向の 板ナデ	密、径8mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	普通	灰褐色 (10YR6/2)		425	99	74
166	SD10 下層	土師器 甕 B 1	(14.8)			口縁部外面横ナデ、口 縁部内面横ハケ	やや粗、径6mm以下 の長石、石英、赤色酸 化土控を幾つか含む	普通	にぶい 褐色 (7.5YR7/4)		577	99	74
167	SD10 下層	土師器 甕 C f	(11.0)	14.1		体部内外面不定方向の ナデ、口縁部内外面横 ナデ	密、径2mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/2)	体部一口縁部外 面と体部内面下 方に焼付着	434	99	73
168	SD10 下層	土師器 甕 B 3	(12.2)			体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頭部内面横方向 の板ナデ、体部内面 斜め方向のケズリ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土控を幾 つか含む	普通	にぶい 褐色 (7.5YR6/4)	体部外面一口縁 部内外面焼付着	574	99	73
169	SD10 下層	土師器 甕 C	(12.6)			体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナデ、体 部内面横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/2)	体部一口縁部外 面焼付着	572	99	73
170	SD10 下層	土師器 甕 C	(17.2)			体部上方一口縁部 内外面横ナデ、体部内 面指圧	粗、径5mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部一口縁部外 面に焼付着	457	99	74
171	SD10 下層	土師器 甕底部 d				体部内外面調整不明	粗、径4mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/2)	体部外面に焼付 着	554	99	74
172	SD10 下層	土師器 甕底部 d		5.2		体部外面横方向のケズ リ、体部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径5mm以下 の長石を幾つか含む	良好	灰褐色 (7.5Y6/1)		552	99	74
173	SD10 下層	土師器 甕底部 e		6.5		体部外面下方調整不 明、頭部内面斜めハ ケ、体部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	灰白色 (10YR7/1)		558	99	74
174	SD10 下層	土師器 甕底部 d		5.1		体部外面調整不明、底 部内面斜め方向の板ナ デ、体部内面斜めハ ケ	密、径1mm以下の赤 色酸化土控をわずか に含む	普通	灰褐色 (10YR6/2)		422	99	74
175	SD10 下層	土師器 甕 G	(13.4)			体部外面横ナデ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内面横方向の板ナ デ	密、径2mm以下の石 英を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		570	99	74
176	SD10 下層	土師器 甕 G	(12.9)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内面横方向の板ナ デ	密、径3mm以下の長 石、石英、雲母をわ ずかに含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	体部外面に焼付 着	588	99	74
177	SD10 下層	土師器 甕 C	(11.9)			体部外面下方横方向 の板ナデ、体部外面上 方一口縁部内外面横ナ デ、体部内面横方向の板 ナデ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英をわず かに含む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/2)		583	99	74

表19 土器・石器観察表(9)

実測番号	遺構 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	抽選番号	回収番号
178	SD10 下層	土師器 壺 A 2	(10.7)	5.3	19.6	体部外面調整不明、口 縁部外面横ナデ、体 部内面横方向の板ナデ	やや粗、径 3 cm 以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/3)	体部外面下方に 埋付着	591	99	75
179	SD10 下層	土師器 壺 A 1	13.2	4.0	14.2	体部外面横方向一斜め 方向のケズリ、体部外 面上方斜め方向の 板ナデ、口縁部外面横 方向の板ナデ、体部内 面斜め方向の板ナデ	やや粗、径 3 cm 以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を多く含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/3)		438	99	75
180	SD10 下層	土師器 壺 A 1	(12.1)			体部外面横方向の板ナ デ、体部外面上方一ロ ーク縁部外面横ナデ、体 部内面斜め方向の板ナ デ	やや粗、径 2 cm 以下 の長石、石英をわず かに含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)		562	100	75
181	SD10 下層	土師器 壺 A 1	(12.2)			口縁部内面横ナデ、 口縁部内面指頭列	やや粗、径 3 cm 以下 の長石、石英を多く 含む	普通	にぶい褐色 (5YR7/4)		557	100	75
182	SD10 下層	土師器 高杯 C			10.3	杯部外面横ナデ、脚 部外面横方向のヘア ナデ、脚部外面横ナ デ、脚柱部内面横方 向の板ナデ	やや粗、径 1 cm 以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	淡粉色 (5YR8/3)	脚部接合 A 2 b	404	100	75
183	SD10 下層	土師器 高杯 C	(13.7)	10.5	12.7	脚部内面横ナデ後斜 めナデ、脚部外面横ナ デ、脚柱部外面斜め 方向のハケ後横ナデ、 脚部内面横ナデ、脚 柱部内面横ナデ、脚 柱部内面横ナデ、脚 柱部内面横ナデ、絞り込 み	やや粗、径 3 cm 以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を多く 含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	脚部接合 A 2 a	409	100	75
184	SD10 下層	土師器 高杯 C	(15.0)			脚部内面斜め一横ハ ケ、脚柱部外面斜め ハケ後横ナデ、脚柱部内 面、脚柱部内面棒状工 具によるナデ、絞り込 み	やや粗、径 2 cm 以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を多く 含む	普通	灰白色 (2.5YR8/2)	脚部接合 B 1 a	499	100	76
185	SD10 下層	土師器 高杯 C	(13.0)	8.7	9.4	脚部内面横ナデ、脚 柱部外面横方向の板ナ デ、脚部外面横ナデ、 脚部内面横ハケ、脚 柱部内面棒状工具に による縦方向のナデ、絞 り込み	やや粗、径 1.5 cm 以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を幾つ か含む	普通	灰褐色 (7.5YR4/1)	脚部接合 B 1 a	498	100	76
186	SD10 下層	土師器 高杯 F	7.8			口縁部内外面ミガキ、 杯部内外面調整不明	密、径 2 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を多く含む	普通	灰色 (N4/0)		500	100	77
187	SD10 下層	土師器 高杯 C	(16.9)	11.3	13.5	杯部外面一外縁上 方横ナデ、杯部外面下 方横め上方の板ナデ、 脚部外面調整不明、脚 部外面内面横ナデ、 脚柱部内面棒状工具に による縦ナデ、絞り込 み	密、径 1 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒をわずかに 含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	脚部接合 B 1 a、 口縁部外面に接 合痕	401	100	76
188	SD10 下層	土師器 高杯 C	(19.0)			杯部内外面横ナデ、脚 部外面調整不明、脚部 内面横方向の板ナデ、 絞り込み	密、径 1 cm 以下 の赤 色酸化土粒を幾つ か含む	普通	赤灰色 (2.5YR5/1)	脚部接合 A 1 a	517	100	76
189	SD10 下層	土師器 高杯 C			16.0	杯部外面上方縫ハケ後 横ナデ、杯部外面下方 縫ハケ後横方向の板ナ デ、杯部内面上方横ナ デ、杯部内面下方横ナ デ、杯部外縁後横ナデ、 杯部外縁横ナデ、絞り込 み、脚部内面横ナデ	やや粗、径 1 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	脚部接合 A 2 a	501	100	77
190	SD10 下層	土師器 高杯 C	(18.0)			杯部内外面横ナデ、 杯部外縁不定方向のヘ ラケズリ、脚柱部ナデ、 脚部外縁斜め方向のヘ ラナデ、脚柱部内面縫 ハケ後横ナデ、絞り込 み、脚部内面横ナデ	やや粗、径 4 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか 含む	普通	にぶい褐色 (5YR7/4)		389	100	75
191	SD10 下層	土師器 高杯 C	15.5	10.2	13.2	杯部内外面横ナデ、 杯部外縁不定方向のヘ ラケズリ、脚柱部ナデ、 脚部外縁斜め方向のヘ ラナデ、脚柱部内面縫 ハケ後横ナデ、絞り込 み、脚部内面横ナデ	密、径 2 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか 含む	普通	灰白色 (10YR7/1)		408	100	75
192	SD10 下層	土師器 高杯 C	(13.9)			杯部内外面横ナデ、 杯部外縁不定方向の ナデ	やや粗、径 2 cm 以下 の長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか 含む	普通	灰褐色 (10YR6/1)		386	100	77

表20 土器・石器観察表(10)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎土	焼成	色調	備考	整理番号	検査番号	図版番号
193	SD10下層	土師器 高杯C	(17.2)	12.3	12.6	杯部内斜め一横ハケ後横ナデ、杯部外斜め一横ハケ後横ナデ、脚柱部内外斜めハケ後不定方向のナデ、脚部内部外面横ナデ、脚柱部内面絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にじい橙色 (7.5YR7/4)	脚部接合A 1 a	516	100	76
194	SD10下層	土師器 高杯C	14.9		10.1	杯部外側面横ナデ、脚柱部外側面方向のヘラナデ、脚柱部内面横ナデ、絞り込み	密、径1mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	橙色 (5YR6/6)	脚部接合B 1 a	519	100	76
195	SD10下層	土師器 高杯C	(15.5)			杯部内側面横ナデ、杯部外側面方向の板ナデ	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	良好	にじい橙色 (5YR6/4)	杯底部内面に段あり	390	100	77
196	SD10下層	土師器 高杯C	(15.5)			杯部内側面不定方向のハケ後横ナデ、杯部外側面横ナデ、杯底部外側面方向のヘラナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	明褐灰色 (7.5YR7/2)	脚部接合A 2 b、口縁部内外面に保付着	393	101	76
197	SD10下層	土師器 高杯C	(14.2)			杯部外側面一外面上方横ナデ、杯部外側面下方横ナデのヘラ削り	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰黄橙色 (10YR6/2)		508	101	77
198	SD10下層	土師器 高杯C	(16.7)			杯部外側面横ナデ、杯部外側面横方向ナデ	密、径1mm以下の長石、雲母をわずかに含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/3)	脚部接合A 2 b、口縁部内外面に保付着	380	101	76
199	SD10下層	土師器 高杯C	(16.6)			杯部内外側面横ナデ、杯部外側面調整不明	密、径1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にじい 黃褐色 (10YR7/3)		381	101	77
200	SD10下層	土師器 高杯脚4			11.8	杯部内外側面横ナデ、脚柱部外側面調整不明、脚柱部外側面横ナデ、脚柱部内側面横方向のケズリ、絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にじい橙色 (5YR7/4)	脚部接合B 1 a	515	101	75
201	SD10下層	土師器 高杯脚3			10.8	脚柱部外側面横方向の板ナデ後横ナデ、脚柱部内側面横方向の板ナデ	密、径7.5mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	良好	橙色 (5YR7/6)	脚部接合A 1 a	488	101	75
202	SD10下層	土師器 高杯脚4			10.0	脚柱部外側面調整不明、脚柱部外側面削り、脚部内側面横方向の板ナデ	密、径2mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	橙色 (7.5YR7/6)	脚部接合A 1 a	396	101	75
203	SD10下層	土師器 高杯脚1				杯部外側面一脚部外側面調整不明、脚部内側面横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	良好	にじい 橙色 (5YR7/3)	1孔1組3穿孔、脚柱部外側面上方に縦線文	495	101	77
204	SD10下層	土師器 高杯C	(15.8)			杯部内面あたた状の凹み、横ナデ、杯部外側面削ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	浅黄色 (2.5Y7/3)	脚部接合A 2 a	507	101	77
205	SD10下層	土師器 高杯C	(18.3)			杯部内面あたた状の凹み、杯部外側面上方横ナデ、杯部外側面削めハケ後横ナデ	密、径2mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にじい 黄色 (2.5Y6/3)		509	101	77
206	SD10下層	土師器 高杯C	(17.7)			杯部外側面横ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰黄色 (2.5Y6/2)		511	101	77
207	SD10下層	土師器 高杯脚3			10.8 10.0	杯部外側面横方向のケズリ、脚柱部外側面横ナデ、脚柱部内側面横方向の板ナデ、脚部内側面横方向の工具による横ナデ、絞り込み	密、径3mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		518	101	75
208	SD10下層	土師器 高杯脚3			9.7	脚柱部外側面横方向のヘラナデ、脚柱部外側面削めハケ方向の板ナデ、脚柱部内側面横ナデ、脚柱部内側面横方向の板ナデ、絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	橙色 (2.5YR6/6)		494	101	76
209	SD10下層	土師器 高杯脚4			11.4	脚部外側面調整不明、脚柱部外側面横ナデ、脚柱部内側面横方向による横ナデ、絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		492	101	76
210	SD10下層	土師器 高杯脚3			9.9	脚柱部外側面横ナデ、脚柱部内側面横ナデ、脚柱部内側面横方向の板ナデ、絞り込み	密、径1mm以下の長石、雲母をわずかに含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/2)	脚部接合B 1 a	497	101	76
211	SD10下層	土師器 高杯脚4			10.3	杯部外側面横方向の板ナデ後横方向の板ナデ、脚柱部内側面横ナデ、脚柱部内側面横方向のケズリ、絞り込み	やや粗、径5mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (10R8/3)	脚部接合A 2 b	398	101	76
212	SD10下層	土師器 高杯脚3			10.7	脚柱部外側面横方向の板ナデ後横方向の板ナデ、脚柱部内側面横ナデ、脚柱部内側面横方向のケズリ、絞り込み	密、径1mm以下の長石、雲母、赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/2)	脚部接合B 1 a、脚柱部外側に接合板が残る	399	101	76

表21 土器・石器観察表(11)

実測番号	通期・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
213	SD10 下層	土師器 高杯脚 3			10.7	脚柱部外面縦方向の板ナゲ、脚柱部内外面横ナゲ、脚柱部内面横方向のケズリ	密、径 2 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	脚部接合 B 1 a	400	101	76
214	SD10 下層	土師器 高杯脚 3			11.4	脚柱部外面縦方向へのケズリ、脚柱部外面横ナゲ、脚柱部内面横ナゲ、脚部のナメ、脚部内面調整不良	粗、径 2 mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	脚部接合 A 2 d	403	101	75
215	SD10 下層	土師器 高杯脚 3			10.1	脚柱部外面縦方向の板ナゲ、脚柱部内外面横ナゲ、脚柱部内面横ナゲ、脚部のナメ、絞り込み	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	黒褐色 (7.5R3/1)	脚部接合 A 1 a、脚柱部外面に粘土接合板、蓋表面に白土	491	101	76
216	SD10 下層	土師器 高杯脚 2			10.0	脚柱部外面縦・内面下方向調整不良、脚部内面上方横方向の板ナゲ	やや粗、径 1 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	黒褐色 (10YR3/1)	1孔 1組 3穿孔	514	101	77
217	SD10 下層	土師器 蓋 B (23.0)				口縁部内外面調整不良	密、径 2 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (2.5Y7/1)	口縁部外面に沈線 4 条	571	102	78
218	SD10 下層	土師器 蓋 A			13.6	脚柱部外面斜めミガキ、脚柱部外面横方向の板ナゲ、絞り込み、脚部内面調整不良	密、径 1.5 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	1孔 1組 3穿孔、脚部内面に埋付着	402	102	78
219	SD10 下層	土師器 蓋 A			13.5	脚柱部外面斜めミガキ、脚柱部外面横方向の板ナゲ、脚柱部内面横方向の板ナゲ、絞り込み、脚部内面調整ナゲ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒をわざかに含む	普通	灰白色 (10YR8/1)	1孔 1組 3穿孔	395	102	78
220	SD10 下層	土師器 鉢 D	(18.0)	3.9	10.8	体部外面斜めハケ後ナメ消し、口縁部外面横ナゲ、体部内面上方向横ナゲ、体部内面下方斜め方向の板ナゲ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	褐灰色 (10YRS/1)		796	102	75
221	SD10 下層	土師器 鉢 C	(8.9)		6.5	脚部外面不定方向のハケ、口縁部内外面横方向ナゲ、体部内面横方向のナゲ	やや粗、径 1 mm以下の長石をわざかに含む	普通	暗灰色 (N3/0)		431	102	78
222	SD10 下層	土師器 鉢 C	(16.8)	3.7	6.3	体部外面下方調整不良、体部外面中程横方向のハネナゲ、口縁部内外面横ナゲ、体部内面調整不良	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、雲母をわざかに含む	良好	灰白色 (7.5YR8/1)		432	102	76
223	SD10 下層	土師器 小型壺	9.4	2.0	10.0	体部外面調整不良、口縁部内外面横ナゲ、脚部の凹凸捺压、構造方向の指ナゲ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英をわざかに含む	良好	浅黄褐色 (7.5YR8/3)		797	102	77
224	SD10 下層	土師器 小型壺	(10.0)	2.6	9.7	体部外面下方横一斜め方向の板ナゲ、口縁部内外面横ナゲ、体部内面斜め横方向の指ナゲ	密、径 1 mm以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	明褐色 (5YR7/2)		423	102	77
225	SD10 下層	土師器 小型壺			1.9	体部外面不定方向の板ナゲ、口縁部内外面横ナゲ、体部内面斜め横方向の指ナゲ	やや粗、径 5 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		530	102	77
226	SD10 下層	土師器 小型壺				底部外面横一斜め方向の板ナゲ、口縁部内外面横ナゲ、体部内面斜め横方向の指ナゲ	やや粗、径 10 mm以下の長石、石英、雲母をわざかに含む	普通	橙色 (5YR6/8)		536	102	78
227	SD10 下層	土師器 小型壺				体部外面下方斜めハケと斜め方向のケズリ、体部内面斜め方向の指ナゲ	やや粗、径 1 mm以下の長石、雲母をわざかに含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)		537	102	77
228	SD10 下層	土師器 小型壺			3.4	底部外面不定方向の指ナゲ、体部内面横方向の指ナゲ	密、径 1 mm以下の長石、石英、雲母をわざかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)		540	102	77
229	SD10 下層	土師器 小型壺				底部外面縫方向のナゲ、底部外面調整不良、体部内面横一斜め方向の指ナゲ	やや粗、径 1 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		417	102	77
230	SD10 下層	土師器 小型壺				体部外面調整不良、体部内面横一斜め方向の指ナゲ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英、雲母をわざかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		542	102	78
231	SD10 下層	土師器 小型壺			1.6	体部外面斜め方向の板ナゲ、体部内面斜め方向の指ナゲ	密、径 5 mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (7.5YR8/2)		543	102	77
232	SD10 下層	土師器 小型壺				体部外面内面斜め方向の板ナゲ	密、径 1 mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	良好	灰褐色 (10YR6/2)		414	102	78
233	SD10 下層	土師器 手捏ね土器	6.3	4.1	7.5	体部外面斜め方向の板ナゲ、口縁部内外面横ナゲ、体部内面斜め方向の指ナゲ	やや粗、径 2 mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		416	102	77

表22 土器・石器観察表(12)

実測番号	遺物・出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	監査番号
234	SD10 下層	土師器 鉢 A	(12.0)			底部一回輪部内外面調整不明	やや粗、径 2mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	に赤い褐色 (7.5YR7/4)		420	102	78
235	SD10 下層	土師器 小型壺				底部外面斜め方向の板ナデ、底部内面横方向一斜め方向の指ナデ	密、径 2mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	良好	黄灰色 (2.5Y4/1)		541	102	77
236	SD10 下層	土師器 小型壺		4.6		底部外面調整不明、底部内面斜め方向の指ナデ	やや粗、径 3mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	に赤い 黄褐色 (10YR7/3)		413	102	77
237	SD10 下層	土師器 小型壺	(5.4)		9.9	口縁部外面横ナデ、底部内面横方向の指ナデ	密、径 1mm以下の長石をわずかに含む	普通	褐色 (10YR5/1)		531	102	77
238	SD10 下層	土師器 小型壺				底部外面下方向斜めケズり、口縁部外面横ナデ、底部内面横方向の指ナデ	やや粗、径 2mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	灰白色 (2.5Y7/1)		544	102	77
239	SD10 下層	土師器 小型壺		3.8		底部外側横方向の板ナデ、底部内面斜め方向の指ナデ	密、径 2mm以下の長石をわずかに含む	良好	黒色 (5Y2/1)		533	102	78
240	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	11.0		4.7	天井部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰色 (N6/0)	種径11.5cm、 口縁部厚2.3cm、 口縁端部 C、 天井部外側に自然転降灰、 胎土 A 1a	4	103	78
241	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	10.8		4.7	天井部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	やや粗、径 3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	暗青灰色 (5B 4/1)	種径11.9cm、 口縁部厚2.2cm、 口縁端部 C、 口縁部凹いらずかに歪んでいる、 胎土 A 2a	1	103	78
242	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	(11.6)		4.8	天井部外面3/4回転ヘラ削り、天井部外面中央へつゝ切り未調整、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)	種径12.0cm、 口縁部厚2.5cm、 口縁端部 D、 胎土 A 1a	7	103	78
243	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	12.1		4.2	天井部外面3/4回転ヘラ削り、天井部外面中央へつゝ切り未調整、他は回転ナデ、ロクロ左回転	やや粗、径 3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰色 (N5/0)	種径11.7cm、 口縁部厚2.0cm、 口縁端部 C、 胎土 A 2a	3	103	78
244	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	11.1		4.7	天井部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰色 (N6/0)	種径11.8cm、 口縁部厚2.0cm、 口縁端部 E、 天井部外側に自然転降灰、 胎土 A 1a	8	103	78
245	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	(11.8)			天井部外面回転ヘラ削り2/3、他は回転ナデ	密、径 1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)	種径11.8cm、 口縁部厚2.3cm、 口縁端部 C、 胎土 A 2a	43	103	81
246	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	11.2		4.5	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)	種径12.5cm、 口縁部厚1.9cm、 口縁端部 E、 天井部外側に「X」の刻記、 胎土 A 1a	9	103	78
247	SD10 上層	須恵器 杯蓋 A	(11.0)			底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 2mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)	種径12.2cm、 口縁部厚1.9cm、 口縁端部 E、 天井部外側に自然転降灰、 胎土 A 2a	18	103	81
248	SD10 上層	須恵器 杯身 A	10.0	4.2	4.9	底体部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰色 (N6/0)	受部径11.5cm、 たちあけ高2.0cm、 口縁端部 F、 受部 A、一部2次的に被削して いる、胎土 A 1a	12	103	78
249	SD10 上層	須恵器 杯身 A	10.2	2.8	5.1	底体部外面回転ヘラ削り4/5、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰色 (10YR5/1)	受部径12.0cm、 たちあけ高2.1cm、 口縁端部 C、 受部 A、胎土 A 1a	11	103	78
250	SD10 上層	須恵器 杯身 A	(10.5)	2.8	5.1	底体部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	やや粗、径 1mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)	受部径12.5cm、 たちあけ高1.7cm、 口縁端部 D、 底体部外側に黒い有機物付着、 胎土 A 1a	20	103	78
251	SD10 上層	須恵器 杯身 A	9.4	4.7	4.6	底体部外面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径 1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰褐色 (7.5YR5/2)		2	103	78

表23 土器・石器観察表(13)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補図番号	図版番号
252	SD10 上層	須恵器 杯身 A	(12.0)			底部外表面回転ヘラ削り、他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	不良	灰白色 (N8/0)	受部径13.8cm、たちあがり高2.1cm、口縁端部C、受部A、底部外表面が剥離している、胎土A 2a	15	103	81
253	SD10 上層	須恵器 高杯	(9.0)			底部外表面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N5/0)	受部径10.8cm、たちあがり高1.8cm、口縁端部C、底部外表面自然剥離灰	761	103	81
254	SD10 上層	須恵器 高杯蓋 A	11.0		5.6	天井部外表面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、クロロ左回転	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N6/0)	縄径11.3cm、口縁部高さ1cm、口縁端部E、つまみ紐4cm、つまみ高さ4cm、胎土A 1a	21	103	78
255	SD10 上層	須恵器 高杯蓋				天井部外表面回転ヘラ削り1/2、他は回転ナデ、クロロ左回転	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N6/0)	つまみ紐4cm、つまみ高さ1.1cm、つまみ部上面にヘラ記号、胎土A 2a	597	103	81
256	SD10 上層	須恵器 高杯蓋 A	12.0		5.8	天井部外表面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、クロロ左回転、クロロ左回転	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N6/0)	縄径12.0cm、口縁部高さ5cm、口縁端部E、つまみ紐2.6cm、つまみ高さ8cm、天井部外表面自然剥離灰、胎土A 2a	10	103	78
257	SD10 上層	須恵器 高杯蓋 A				天井部外表面2/3回転ヘラ削り、他は回転ナデ、クロロ左回転	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (N6/0)	縄径11.6cm、つまみ紐3.0cm、つまみ高さ1.0cm、胎土A 2a	11	103	81
258	SD10 上層	須恵器 高杯蓋 A	11.1		4.5	天井部外表面回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、クロロ左回転	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)	縄径10.7cm、口縁部高さ2.1cm、口縁端部C、つまみ紐3.0cm、つまみ高さ0.6cm、表面に鉛分の吹き出しが見られる、胎土A 2a	5	103	78
259	SD10 上層	須恵器 高杯			8.6	脚部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N6/0)	環部外面と脚部内面自然剥離灰、脚部外面に別個体溶着、胎土A 1a	13	103	78
260	SD10 上層	須恵器 甕				体部外表面下方向回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色 (N7/0)	体部外面に側突紋、胎土A 2a	40	103	81
261	SD10 上層	土師器 甕 B 3	(18.2)			口縁部外表面横ナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		462	103	81
262	SD10 上層	土師器 甕 B 3	(16.6)			口縁部外表面横ナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	灰黃褐色 (10YR6/2)	口縁部外面に煤付着	461	103	81
263	SD10 上層	土師器 甕 C	(13.8)			口縫部内外面重ねナデ、体部内面横方向の板ナデ	密、径3mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (N5/0)		587	103	81
264	SD10 上層	土師器 甕 C	(13.4)			体部外表面横方向の板ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径1.5mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR7/3)	口縫部外面に煤付着	582	103	80
265	SD10 上層	土師器 甕 B 1 c	14.3	6.2	24.8	体部外表面斜めハケ、口縫部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	体部外面と体部内面下方に煤付着	487	104	79
266	SD10 上層	土師器 甕 B 1 d	(18.4)	5.4	23.0	体部外表面下方面横方向の板ナデ、体部内外面調不規則、口縫部内外面横ナデ	粗、径2mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	体部外面下方と口縫部外面に煤付着	545	104	79
267	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(15.4)			体部外表面斜めハケ後横ナデ、口縫部内外面斜め方向の板ナデ	密、径3mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	良好	黄灰色 (2.5Y6/1)		578	104	81
268	SD10 上層	土師器 甕 B 1 c	12.4	6.3	24.5	体部外表面斜め方向の板ナデ、口縫部内外面横ナデ	やや粗、径3mm以下の長石をいくつか含む	良好	褐灰色 (7.5YR6/1)		472	104	79
269	SD10 上層	土師器 甕 B 1	14.8			体部外表面横ハケ、口縫部内外面横ナデ、体部内面横・斜め方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)	体部外面煤付着	479	104	79

表24 土器・石器観察表(14)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	標本番号	団体番号
270	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(14.0)			体部外面横一斜め方向 の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内部横方向の板ナデ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面に煤付 着	485	104	79
271	SD10 上層	土師器 甕 B 1 f	(12.0)	6.4	21.8	底部外面不定方向のケ ズリ、体部内外面横一 斜めハケ、口縁部外面横 ナデ、口縁部内部横 ハケ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR5/3)	体部外面と口 縁部外面に煤付 着	564	105	79
272	SD10 上層	土師器 甕 B 1 f				体部内外面不定方向の 板ナデ、口縁部内外面 横ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英をわず かに含む	普通	褐灰色 (10YR6/1)	体部外面に煤 付着	548	105	80
273	SD10 上層	土師器 甕 C f	12.4		19.2	体部内外面横一斜め方 向の板ナデ、口縁部内 外面横ナデ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	灰黃褐色 (10YR6/2)	体部一 口縁部外 面と体部外面に 煤付着	547	105	80
274	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(15.6)			体部外面斜め方向の板 ナデ、口縁部内外面横 ナデ、体部内部上方調 整不明、下方縫一斜め 方向のケズリ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面に煤付 着	474	105	80
275	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(14.2)			体部外面横一斜め方 向の板ナデ、口縁部内 外面横ナデ	粗、径2mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)		560	105	81
276	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(12.4)			体部外面調整不明、口 縁部内外面横ナデ、体 部内部指圧	粗、径8mm以下の長 石を多く含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)	体部外面に煤付 着	467	105	81
277	SD10 上層	土師器 甕 B 1	16.8			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内部横一斜め方向の 板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	灰白色 (2.5Y8/1)		450	105	80
278	SD10 下層	土師器 甕 B 1 d	11.6	4.0	19.2	体部外面斜め方向の 板ナデ、体部外面中程横 方向のケズリ、口縁部 内外面横ナデ、体部内 部斜め方向の板ナデ	粗、径5mm以下の長 石を幾つか含む	良好	にぼい 黄褐色 (10YR6/4)		477	106	80
279	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(16.8)			体部内外面調整不明 の状態	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	良好	灰白色 (7.5YR8/2)		550	106	81
280	SD10 上層	土師器 甕 B 1				体部外面縫ハケ、口縁 部内部斜めハケ、体部 内部横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を幾つ か含む	普通	橙色 (5YR6/6)		478	106	80
281	SD10 上層	土師器 甕 B 1				体部内外面調整不明	粗、径5mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	にぼい橙色 (5YR7/4)	体部外面に煤付 着	529	106	81
282	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(10.2)			体部外面斜め方向の板 ナデ、口縁部内外面横 ナデ、体部内部横方向 のケズリ	密、径3mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	体部一 口縁部外 面に煤付着	565	106	80
283	SD10 上層	土師器 甕 B 1 g	12.0	5.6	10.1	底面外面一方方向のナ デ、体部外面下方縱方 向のナデ、体部外面上方一 口縁部内外面横ナデ、 体部内部横方向の板ナ デ	密、径3mm以下の石 英、赤色酸化土粒を わずかに含む	普通	にぼい橙色 (7.5YR7/4)	体部外面に煤 付着	429	106	80
284	SD10 上層	土師器 甕 B 1 e	(11.8)	4.0	17.2	体部外面下方調整不 明、上方縫ハケ、口縁 部内外面横ナデ、口縁 部内部斜めハケ	密、径1mm以下の長 石、石英をわずかに 含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	体部外面に煤付 着	475	106	81
285	SD10 上層	土師器 甕 B 1	8.0			体部外面縫ハケ、口縁 部内外面横ナデ、口縁 部内部斜めハケ	密、径1mm以下の赤 色酸化土粒をわずかに 含む	普通	浅黄色 (2.5Y7/3)		470	106	81
286	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(11.8)			体部外面縫ハケ、口縁 部内外面横ナデ、口縁 部内部斜めハケ、後縫ナ デ、体部内部斜め方向の 板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 をわずかに含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/3)		454	106	82
287	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(12.0)			体部外面縫ハケ、口縁 部内外面横ナデ、口縁 部内部斜めハケ、體部内 部横一斜め方向の板ナ デ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR7/1)		471	106	80
288	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(12.0)			体部外面縫ハケ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内部横一斜め方向の 板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英をわざ かに含む	普通	黄褐色 (2.5Y5/1)		459	106	82
289	SD10 上層	土師器 甕 B 1	11.5			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内部横調整不明	やや粗、径4mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/3)		452	106	81
290	SD10 上層	土師器 甕 B 1	(13.2)			口縁部内外面横ナデ、 体部内部横一斜め方向 の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石を幾つか含む	良好	褐灰色 (5YR6/1)	体部一 口縁部外 面に煤付着	481	106	82

表25 土器・石器観察表(15)

実測番号	直横・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補図番号	国際番号
291	SD10 上層	土師器 甕B 1	(14.3)			体部外表面斜めハガ、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面横方向の板ナダ	粗、径 5 mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部一口縁部外 面に焼付着	440	107	82
292	SD10 上層	土師器 甕B 1	(14.4)			体部外表面斜めハガ、口 縁部内外面横ナダ、口 縁部内面斜 下方へ体部内面斜 め方向の板ナダ	密、径 4 mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		573	107	80
293	SD10 上層	土師器 甕B 1	(10.1)			体部外表面斜め方向 の板ナダ、口縁部内外 面横ナダ、口縁部内面 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英を幾つか含 む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/3)	体部内外面と口 縁部外面に焼付 着	563	107	81
294	SD10 上層	土師器 甕B 1	13.2			体部外表面斜めハガ、 後縫 方向の板ナダ、口縁部 内外面横ナダ、体部内 面指圧後縫ナダ	粗、径 5 mm以下の石 英、雲母を多く含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		449	107	81
295	SD10 上層	土師器 甕B 1	(12.5)			体部外表面横方向のケ リ、口縁部外表面一休 部内面横ナダ	密、径 2 mm以下の石 英を幾つか含む	普通	灰黃褐色 (10YR5/2)	体部一口縁部内 面に焼付着	448	107	82
296	SD10 上層	土師器 甕B 2	(12.4)			体部一口縁部外表面ハ ケ後縫方向の板ナダ、 体部内面横ナダ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)		460	107	82
297	SD10 上層	土師器 甕底深 e		4.0		体部外表面斜めハガ後 ナ デ消し、体部内面調整 不明	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英、雲母 赤色化粧を幾つか含 む	普通	にぶい褐色 (7.5YR6/4)		444	107	82
298	SD10 上層	土師器 甕B 1	(15.0)			体部内外面調整不明、 口縁部内外面横ナダ	やや粗、径 2 mm以下 の長石をわずかに含 む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		595	107	82
299	SD10 上層	土師器 甕底深 c		5.6		体部外表面調整不明、体 部内面不直方向の板ナ ダ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	普通	黒褐色 (10YR3/1)	体部内面に焼付 着	556	107	82
300	SD10 上層	土師器 甕底深 d		5.9		体部外表面調整不明、体 部内面斜め方向の板ナ ダ	粗、径 5 mm以下の長 石を多く含む	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	体部外面に焼付 着	467	107	82
301	SD10 上層	土師器 甕底深 e		4.7		体部内外面調整不明	やや粗、径 4 mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部内面に焼付 着	482	107	82
302	SD10 上層	土師器 甕底深 d		6.1		体部外表面横・斜め方 向の板ナダ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	良好	灰白色 (7.5YR8/2)		486	107	81
303	SD10 上層	土師器 甕底深 e		4.5		体部外表面斜め方向の 板ナダ、体部内面横ナ ケ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面に焼付 着	445	107	82
304	SD10 上層	土師器 甕A 1	(13.9)			口縁部内外面調整不明	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	褐色 (5YR7/6)		553	107	82
305	SD10 上層	土師器 甕 A 1				体部外表面調整不明、 口 縁部内外面横ナダ、体 部内面指圧・斜め方 向の指ナケ	密、径 2 mm以下の長 石、石英、雲母をわ ずかに含む	普通	浅黄色 (2.5Y7/3)		476	107	84
306	SD10 上層	土師器 甕 A 1	(9.3)		11.0	体部外表面調整不明、 口 縁部内外面横ナダ、体 部内面横方向の板ナ ダケリ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面に焼付 着	427	107	83
307	SD10 上層	土師器 甕 A 1	10.6	3.4	13.6	体部外一面口縁部内 面調整不明、体部内面 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 3 mm以下 の長石をわずかに含 む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/3)		435	107	83
308	SD10 上層	土師器 甕 C		16.9		体部外表面横・斜めハ ガ、 口縁部外表面横ナダ、 口 縁部一休部内面斜め 横方向の板ナダ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英をわ ずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		520	108	83
309	SD10 上層	土師器 甕 C		14.0		体部外表面調整不明、 口 縁部内外面横ナダ、 強 部内面横方向のハラナ ナ、 体部内面上方斜め 横方向の板ナダ、口 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 4 mm以下 の長石、石英をわ ずかに含む	普通	灰白色 (7.5YR8/1)		483	108	83
310	SD10 上層	土師器 甕 A 1	(13.2)			体部外一面口縁部内 面調整不明、体部内面 横方向のケリ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英をわ ずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/14)	体部一口縁部外 面と体部内面下 方に焼付着	567	108	83
311	SD10 下層	土師器 甕 C	16.1			体部外表面横ナダ、 体 部内面斜め	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英、雲母 赤色化粧を幾つか 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		592	108	83
312	SD10 下層	土師器 甕 C	(23.1)			口縁部内外面横ナダ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英を幾つか 含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	口縁部内面 赤色?	596	108	82
313	SD10 上層	土師器 甕 A 2	(19.0)			頭部外一面口縁部内 面横ナダ、 体部内面横 斜め方向の板ナダ	やや粗、径 1 mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		428	108	82

表26 土器・石器観察表(16)

実測 番号	通構・ 出土位置	器種	口径 (cm)	底深 (cm)	器高 (cm)	形状・調査	胎 土	焼成 色調	備 考	整理 番号	検定 番号	回収 番号	
314	SD10 下層	土師器 高杯G	24.0		9.4	杯部内面横ナダ、杯部 外表面方向のケズリ後 横ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母を 幾つか含む	褐灰色 (10YR4/1)	杯部外面上方に 接合痕あり	512	108	83	
315	SD10 上層	土師器 高杯G	(19.5)	13.6	15.8	杯部内外面溝調整不明、 脚部外表面方向の板ナ ダ、脚部内面溝方向の不 明	粗、径3mm以下の 長石、石英、雲母、赤 色無鉄土粒を多く含 む	浅黃褐色 (7.5YR8/4)	脚部接合A 1 a	379	108	83	
316	SD10 上層	土師器 高杯C	(17.2)			杯部内外面横ナダ、杯 底部外表面調整不明、脚 柱部外表面方向の板ナ ダ、脚部内面溝方向の 指ナダ後横方向のケ ズリ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉄土粒を幾つ か含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/3)		411	109	84
317	SD10 上層	土師器 高杯C	14.0	11.0	10.6	杯部内下面下方横方向の 板ナダ、杯部外表面上方 一杯部外表面横ナダ、杯 底部外表面調整不明、脚 柱部外表面方向の板ナ ダ、脚部内面溝方向の 板ナダ	密、径1mm以下の長 石、石英をわずかに 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	脚部接合A 2 c、 杯底部内面に爪 状痕(?)あり、 脚部接合4	406	109	84
318	SD10 上層	土師器 高杯C				杯部内面横～斜め方向 の板ナダ、杯部外表面横 ナダ、脚柱部外表面調整 不明、脚柱部内面横ナ ダ、取り込み	密、径2mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	褐色 (2.5YR6/6)	杯部外面上に煤 付着	513	109	84
319	SD10 上層	土師器 高杯E	(13.8)			体部外表面下方縫ハケ、 脚柱後横方向の板ナダ、 体部外面上方一杯部内 面横ナダ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英、赤色 無鉄土粒を幾つか含 む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		387	109	85
320	SD10 上層	土師器 高杯E	(13.7)			杯部内面～外面上方横 ナダ、杯底部外表面脚柱 後横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/3)		391	109	84
321	SD10 上層	土師器 高杯脚 4			12.0	杯部～脚部外表面調整不 明、脚部内面横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英をわずかに 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	脚部接合A 1 a	382	109	84
322	SD10 上層	土師器 高杯C	(15.4)			杯部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、赤色無鉄土 粒を幾つか含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	脚部接合A 2 b	506	109	85
323	SD10 上層	土師器 高杯C	(16.4)			杯部内外面横ナダ、杯 底部外表面方向の板ナ ダ	密、径2mm以下の長 石、石英、赤色無鉄土 粒を幾つか含む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/3)	脚部接合A 2 b	383	109	84
324	SD10 上層	土師器 高杯C	(16.4)			杯部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、赤色 無鉄土粒を幾 つか含む	普通	灰白色 (5Y7/1)		504	109	85
325	SD10 上層	土師器 高杯C	15.1			杯部内外面横ナダ、杯 底部外表面方向の板ナ ダ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	にぶい 褐色 (10YR7/3)	脚部接合1か2	405	109	84
326	SD10 下層	土師器 高杯C	(14.0)			杯部内面不定方向の板 ナダ、脚部外表面横ナ ダ、脚部外表面下方縫 方向のナダ	密、径2mm以下の長 石をわざわざ含む	普通	褐灰色 (10YR8/1)		505	109	85
327	SD10 上層	土師器 高杯C	(13.0)			杯部内外面調整不明	粗、径4mm以下の長 石、石英、雲母、赤色 無鉄土粒を幾つか含 む	普通	褐色 (7.5YR7/6)	脚部接合A 2 b	388	109	85
328	SD10 上層	土師器 高杯C	(19.6)			杯部内外面横ナダ、杯 底部外表面方向へのハ ラナダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉄土粒を幾 つか含む	普通	褐色 (7.5Y7/6)	脚部接合A 2 b	407	109	84
329	SD10 上層	土師器 跡A	(14.3)	5.2	6.2	体部外表面下方横ハケ、 口縫部内外面横ナダ、 脚柱部外表面方向不 定方向の板ナ ダ	密、径1.5mm以下の長 石、石英、赤色無鉄土 粒を幾つか含む	普通	にぶい褐色 (7.5YR7/3)		430	109	84
330	SD10 上層	土師器 高杯脚 4			10.0	脚柱部外表面方向の板 ナダ、脚部外表面横 ナダ、脚柱部内面横方 向のケズリ、絞り込み り込み	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉄土粒を幾つ か含む	普通	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	脚部接合A 1 a	496	109	84
331	SD10 上層	土師器 高杯脚 3			11.6	脚柱部外表面方向の板 ナダ、脚部外表面横 ナダ、脚柱部内面横方 向のケズリ、絞り込み り込み	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉄土粒を幾つ か含む	普通	黑色 (N2/0)	脚部接合A 2 a	410	109	84
332	SD10 上層	土師器 高杯脚 4			11.0	脚柱部外表面方向の板 ナダ、脚部外表面横 ナダ、脚柱部内面横方 向のケズリ、絞り込み り込み	やや粗、径2.5mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉄土粒を幾つ か含む	普通	浅黃褐色 (7.5Y8/4)	脚部接合B 1 a	493	109	84
333	SD10 上層	土師器 高杯脚 3			10.5	脚柱部外表面方向の板 ナダ、脚部外表面横 ナダ、脚部内面横 ナダ	密、石英を幾つか含 む	普通	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	器表面に白土	490	109	84

表27 土器・石器観察表(17)

実測番号	構成・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補助番号	回収番号
334	SD10 上層	土師器 高杯脚 3			10.0	脚柱部外面面削除ナ ダ、脚部内部面横ナ ダ、脚部内部面横ナ ダ、斜り込み	密、径1mm以下の長 石、石英、雲母、赤 色無鉱化土粒をわずか に含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)	脚部接合A 1 a	489	109	84
335	SD10 上層	土師器 高杯脚 3			9.8	脚柱部外面面削除のハ ケ、脚部内部面横ナ ダと削正、脚柱部内 面絞り込み	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	脚部接合A 1 a	397	109	85
336	SD10 上層	土師器 高杯脚 5			8.8	脚部内部面調整不明	やや粗、径2mm以下 の石英、赤色無鉱化土 粒をわずかに含む	普通	褐色 (5YR6/6)	脚部接合A 2 c	394	109	85
337	SD10 上層	土師器 鉢 A	11.4	4.8	4.8	体部外面下方不定方向 の板ナダ、口縁部内外 面横ナダ、体部内部面 調整不明	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、赤色 無鉱化土粒を幾つか含 む	普通	灰白色 (7.5YR8/2)		419	110	85
338	SD10 上層	土師器 鉢 A	11.4	4.5	4.9	口縁部外面面横ナ ダ、体部調整不 明	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	明褐色 (7.5YR7/2)		798	110	85
339	SD10 上層	土師器 鉢 A	11.4	3.8	5.0	体部内外外面板ナ ダ、体 部外面下方削正	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		421	110	85
340	SD10 上層	土師器 鉢 A	(11.9)	3.3		体部外面下方削 方向の板ナダ、口縁部内外 面横ナダ、体部内部面横方 向の板ナダ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		926	110	85
341	SD10 上層	土師器 鉢 B	(12.3)			体部内外面横ナ ダ	密、径1mm以下の長 石、石英、雲母をわ ずかに含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部外面に擦 り	385	110	85
342	SD10 上層	土師器 器種不 明	(14.4)			体部内外面横ナ ダ	密、径1mm以下の長 石、雲母をわ ずかに含む	普通	灰白色 (2.5Y7/1)		384	110	85
343	SD10 上層	土師器 鉢 C	(12.0)			体部外面調整不明、体 部内部横方向のナ ダ	粗、径2mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	灰白色 (10YR7/2)		426	110	85
344	SD10 上層	土師器 鉢 D	13.5	6.2	13.5	体部外面削除、口縁 部外面削除、表面 斜め一向方向の板ナ ダ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色無鉱化土粒を幾つ か含む	普通	灰白色 (10YR8/2)		436	110	84
345	SD10 上層	土師器 小型壺	(10.2)			底部外面横方向のケ リ、口縁部外面横ナ ダ、体部内部面横方 向の指ナダ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	灰白色 (10YR7/2)		539	110	85
346	SD10 上層	土師器 小型壺	(9.2)	4.8	8.6	体部外面下斜め一向 方向の板ナダ、口縁部 内外面横ナダ、体部内 面指圧	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		525	110	85
347	SD10 上層	土師器 小型壺	9.7		8.2	底部外面不定方向のケ リ、体部外面削 方向の板ナダ、口縁部内 外面横ナダ、体部内 面指圧	密、径2mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)		524	110	85
348	SD10 上層	土師器 小型壺	(5.3)			口縁部内外面横ナ ダ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)		424	110	85
349	SD10 上層	土師器 小型壺				底部外面不定方向の板 ナダ、体部内部面横方 向の指ナダ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色 無鉱化土粒をわずか に含む	普通	灰白色 (2.5YR8/2)		538	110	85
350	SD10 上層	土師器 小型壺			1.1	底部外面不定方向のケ リとハリ、体部内 面削め方向のナ ダ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	灰白色 (2.5YR8/1)		532	110	85
351	SD10 上層	土師器 手捏ね 土器			6.2	体部外面上方横方 向の板ナダ、体部外 面下方削め方向の 板ナダ、体部内 面調整不 明、体部内 面下方削め方 向の板ナ ダ、体部内 面上方指圧	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	灰黄色 (2.5Y4/1)		930	110	85
352	SD10 下層	土師器 手捏ね 土器			4.8	体部外面指圧、体部内 面不定方向の板ナ ダ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英をわ ずかに含む	普通	灰白色 (10YR7/2)		535	110	85
353	SD10 上層	土師器 手捏ね 土器	9.5	5.8	5.0	体部外面調整不明、体 部内部横方向の板ナ ダ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/4)		526	110	85
354	SD10 上層	土師器 手捏ね 土器	6.5	4.7	4.8	体部外面指圧、体部内 面斜め方向の板ナ ダ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	赤色 (10R5/6)		412	110	85
355	SD10 上層	土師器 手捏ね 土器			4.2	体部外面調整不明、体 部内部不定方向の板ナ ダ、体部内 面斜め方 向の板ナ ダ	やや粗、径1mm以下 の長石、赤色 無鉱化土粒をわ ずかに含む	普通	ぶい褐色 (5YR7/4)		415	110	85
356	SD10 上層	石器 砾石	6.5	5.9	4.8	柱状に節理する石を素 材としている。断面圖 の7面に断面圖がある。				石材: 流紋岩質 凝灰岩、重 量20.2g	944	110	85

表28 土器・石器観察表(18)

実測 番号	遺構・ 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	笠形・調整	胎 土	焼成	色調	備考	整理 番号	標因 番号	開 番号
357	SD10 上層	石器 擦石	11.0	7.2	3.8	楕円状の縦を素材とし、 その長軸両端に削面を 残す。				石材：石英岩 重量479.2g	954	110	85
358	SD10 上層	石器 砥石	19.5	2.7	2.4	長椭円縦を素材とし、 側面に擦痕と縦線がみ られる。				石材：ホルン フェルス、 重量148.0g	958	110	85
359	SD12 下層	土師器 甕 A 3	14.6			体部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頸部内面横方向 のヘラナデ、体部外面 縦方向の指圧	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒をわず かに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	屈曲部外面に1 条の沈線、体部 外面上方と体部 内面下方に煤付 着	696	111	86
360	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(14.0)			杯部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頸部内面横方向 のヘラナデ、体部内面 縦方向の指圧	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	褐灰色 (7.5YR4/1)	屈曲部外面に1 条の沈線、体部 外面～口縁部外 面に煤付着	697	111	86
361	SD12 下層	土師器 甕 A 3	15.1			体部外面横ハケ後斜め ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頸部内面横方向 のヘラナデ、体部内面 縦方向の指ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	灰白色 (10YR7/1)	屈曲部外面に1 条の沈線、口縁 部外面に煤付着	694	111	86
362	SD12 下層	土師器 甕底部 a			8.9	体部一腳部外面斜めハ ケ、脚部外面ハバのナ デ消し、脚部内面指圧、 体部内面斜め方向の板 ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/4)	体部内外面に煤 付着	678	111	88
363	SD12 下層	土師器 甕底部 a			9.0	体部一腳部外面斜めハ ケ、体部一腳部内面斜 め方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を幾つか含 む	普通	褐灰色 (7.5YR6/1)	体部内面に煤付 着	635	111	88
364	SD12 下層	土師器 甕底部 a			8.5	脚台外面上方向斜めハ ケ、下方調整不明、脚台内 面指圧	やや粗、径2mm以下 の長石を多く含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		630	111	88
365	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(17.4)			体部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、体部内面斜削	やや粗、径2mm以下 の長石をわずかに含 む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)		646	111	90
366	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(14.6)			体部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頸部内面横方向 のヘラナデ、体部内面 縦方向の指ナデ	やや粗、径1mm以下 の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (10YR8/2)	体部～口縁部外 面煤付着	623	111	88
367	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(17.1)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、体 部内面調整不明	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を多く含 む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	体部～口縁部外 面に煤付着	634	111	90
368	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(15.4)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、頭 部内面横方向のヘラナ デ、体部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒をわざ かに含む	普通	褐灰色 (2.5Y4/1)	体部～口縁部外 面に煤付着	627	111	88
369	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(15.2)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、頭 部内面横方向のヘラナ デ、体部内面斜削	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つか含 む	普通	灰色 (5Y4/1)	口縁部外面に煤 付着	628	111	90
370	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(14.4)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、頭 部内面横方向のヘラナ デ、体部内面斜め方 向の板ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	褐色 (10YR2/1)	屈曲部外面に1 条の沈線、体部 ～口縁部外面に 煤付着	622	111	88
371	SD12 下層	土師器 甕 A 3	(13.1)			体部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、頸部内面横方向 のヘラナデ、体部内面 縦方向の指ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、雲母を幾つか含 む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部～口縁部外 面に煤付着	636	111	88
372	SD12 下層	土師器 甕 A 4	(11.8)			体部外面斜めハケ、口 縁部内外面横ナデ、體 部内面斜め方削の指ナ デ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英を幾つか含 む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部～口縁部外 面に煤付着	608	111	88
373	SD12 下層	土師器 甕 A 3	11.0			体部外面斜めハケ後椭 ハケ、口縁部内外面横 ナデ、体部内面斜削	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を幾つか含 む	普通	淡黄色 (7.5YR8/4)	体部外面に煤付 着	626	111	88
374	SD12 下層	土師器 甕 B 4 c	(13.0)	6.1	21.7	体部外面斜め方削の指 ナデと斜めハケ、口縁 部内外面横ナデ、口縁 部内面横方向の板ナデ、 体部内面下方斜め方 向のケズリ、頭部 内面斜めハケ	やや粗、径1mm以下 の長石、石英をわざ かに含む	普通	淡黃色 (2.5Y7/3)	体部外面下方と 体部内面に煤付 着	642	112	86
375	SD12 下層	土師器 甕 B 1 f	(14.0)		24.5	体部外面下方調整不 明、体部外面上方方 向の板ナデ、口縁部 内外面横ナデ、体部内 面横～斜め方削の板ナ デ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	淡黃褐色 (7.5YR8/4)	体部内面下方と 体部外面中程に 煤付着	698	112	87

表29 土器・石器観察表(19)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補図番号	回取番号
376	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(13.0)			体部外表面ハケ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜方の板ナデ	衝、径 3 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	体部外面～口縁部内外面保付者	679	112	90
377	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(15.4)	8.7	33.0	体部内面上方横一斜め方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜方の板ナデ、他	やや粗、径 5 mm 以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR6/3)	体部外面上方～口縁部外面と体部内面下方に保付者、底部外面に列点文	600	112	86
378	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(13.4)			体部外表面斜方の板ナデ、口縁部外面横ナデ、口縁部内面横ナデ、体部内面上方横一斜め方向の板ナデ、他	やや粗、径 3 mm 以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	体部～口縁部外面と体部内面下方保付者、体部外面被熱による剥離	699	112	86
379	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(15.5)			体部外表面ハケ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜一斜め方向の板ナデ	やや粗、径 3 mm 以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		606	112	90
380	SD12 下層	土師器 甕 B 2	(14.0)			体部外表面一斜め方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面指圧後斜め方向の板ナデ	衝、径 1 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	良好	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面～口縁部内面保付者	695	113	87
381	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(16.9)			体部外表面斜方の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	体部外面に保付者	637	113	88
382	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(17.8)			体部外表面横方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		624	113	90
383	SD12 下層	土師器 甕 B 4	(16.3)			体部外表面斜一底ハケ、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向のケズ	衝、径 3 mm 以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)		693	113	90
384	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(12.2)			体部外表面斜方の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜方後斜め方向の板ナデ	衝、径 3 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰黃褐色 (10YR6/2)	体部内面上方を除き煤付者	680	113	87
385	SD12 下層	土師器 甕 B 2	(15.2)			体部外表面斜めハケ後板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜方後斜め方向の板ナデ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	黃褐色 (2.5Y5/1)		687	113	90
386	SD12 下層	土師器 甕 B 1	12.8			体部外表面調査不明、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	衝、径 1 mm 以下の長石、石英をわずかに含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	体部～口縁部外面に煤付者	639	113	88
387	SD12 下層	土師器 甕 B 1 g	(10.6)	15.4		体部外表面斜め一底方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	やや粗、径 3 mm 以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部内外面下方に煤付者	676	113	88
388	SD12 下層	土師器 甕 A 1	(13.0)			体部外表面調査不明、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	やや粗、径 1 mm 以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	口縁部外面に煤付者	682	113	90
389	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(14.0)			体部外表面調査不明、口縁部内外面横ナデ、頭部～体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		625	113	90
390	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(12.8)			体部～口縁部内外面調整不明	やや粗、径 3 mm 以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	良好	にぶい褐色 (5YR7/4)		602	113	90
391	SD12 下層	土師器 甕 C	(14.2)			体部外表面調査不明、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR5/3)		689	113	90
392	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(12.0)			全面調整不明	やや粗、径 3 mm 以下の石英をわずかに含む	普通	褐色 (2.5YR6/8)		601	113	90
393	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(14.4)			体部～口縁部内外面斜めハケ、口縁部内面横ハケ、体部内面縱方向の指ナデ	やや粗、径 1 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)		604	113	90
394	SD12 下層	土師器 甕 B 3	(12.0)			全面横ナデ	衝、径 2 mm 以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	体部外面に煤付者	684	113	90
395	SD12 下層	土師器 甕 B 3	(10.8)			体部外表面斜めハケ後板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向のケズ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/4)	口縁部外面に煤付者	605	113	90
396	SD12 下層	土師器 甕 B 1	(9.9)			体部外表面斜めハケ後板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面斜めハケ	やや粗、径 2 mm 以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR6/3)	体部～口縁部外面に煤付者	692	114	90

表30 土器・石器観察表(20)

実測番号	造標・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成 色調	備考	整理番号	標図番号	回版番号	
397	SD12 下層	土師器 甕B 1	(16.0)			体部外面調整不明、口縁部内外横方向の板ナデ後横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色 (10YR6/2)	616	114	90	
398	SD12 下層	土師器 甕B 1	12.3			口縁部内外横ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/3)	621	114	88	
399	SD12 下層	土師器 甕底部c		8.1		体部外面調整不明、体部内面斜め方向の板ナデとハケ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にじい 褐褐色 (10YR7/3)	620	114	90	
400	SD12 下層	土師器 甕底部d		5.4		底部内外面調整不明	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)	612	114	90	
401	SD12 下層	土師器 甕底部e		6.4		底部内外面調整不明	やや粗、径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	685	114	90	
402	SD12 下層	土師器 甕E	(19.4)			頭部外面斜めハケ、口縁端部横ナデ	密、径2mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	灰黄色 (2.5Y7/2)	645	114	86	
403	SD12 下層	土師器 甕E	19.8			体部外面下口斜め一巻ミガキ、頭部外面斜めハケ、頭部内面斜め方向の指ナデ	密、径5mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	褐色 (7.5YR7/6)	659	114	87	
404	SD12 下層	土師器 甕G	17.5			体部外面一口縁部内外面調整不明、体部内面斜め方向のケズリ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/3)	643	114	87	
405	SD12 下層	土師器 甕H				体部外面調整不明、体部内面下方横方向の板ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰色 (N4/0)	677	114	89	
406	SD12 下層	土師器 甕C				口縁部内外横ミガキ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	688	114	90	
407	SD12 下層	土師器 高杯G				杯部内外面調整不明	やや粗、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にじい 褐褐色 (10YR7/3)	648	114	90	
408	SD12 下層	土師器 器台A	(9.4)	12.0	9.0	脚部外面底ミガキ、脚部内面詰り込み、他は調整不明	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/3)	617	114	89	
409	SD12 下層	土師器 器台B	(14.8)			脚部外面横ナデ、受部内外面調整不明	密、径2mm以上の長石、石英を多く含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	638	114	88	
410	SD12 下層	土師器 高杯A	(21.8)			杯部内外面調整不明	密、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	淡黄色 (2.5YR8/3)	660	115	89	
411	SD12 下層	土師器 高杯A	(24.4)	12.0	20.1	杯部一脚部外面斜めミガキ、脚部内部内面横ナデ、他は剥落	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にじい 褐褐色 (10YR7/2)	2孔3組6穿孔	641	115	87
412	SD12 下層	土師器 高杯A	29.2		14.4	杯部外面斜めミガキ、脚部外面横ミガキ、脚柱外面底ミガキ、他は剥落	密、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	口縁部内面に沈線5条、沈線幅1.0cm	658	115	87
413	SD12 下層	土師器 高杯D	22.8	13.1	16.9	杯部内面横ナデ、脚部外面横ハケ後横ナデ、脚部外面調整不明、脚部内面横ナデ、脚柱部内面横方向の板ナデ、絞り込み	やや粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	脚部接合A 2 b、 杯部外間に1条の突起	640	115	88
414	SD12 下層	土師器 高杯C	(15.9)			杯部外面横ナデ、脚部外面横方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にじい 褐褐色 (10YR8/3)	脚部接合A 2 a	662	115	89
415	SD12 下層	土師器 高杯B		11.4		杯部内面斜めミガキ、脚部外面一脚部内面外側調整不明	密、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	2孔3組6穿孔	674	115	89
416	SD12 下層	土師器 高杯C	(16.8)	11.0	12.2	杯部内外横ナデ、脚柱部外面縱方向の板ナデ、脚部内面横ナデ、脚柱部内面横方向のナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	脚部接合A 1 a	671	115	89
417	SD12 下層	土師器 高杯C	(16.8)	11.0	12.1	杯部内面下方斜め方向の板ナデ、脚柱部内面上面一方一脚部内面横ナデ、脚柱部外面調整不明、脚柱部内面横方向の板ナデ、脚柱部内面横方向のナデ	密、径5mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	杯部内面にあざついた状の凹み、杯部内面に煤付着	670	115	89

表31 土器・石器観察表(21)

実測番号	通構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
418	SD12 下層	土師器 高杯C	(14.4)			杯部内面横方向の板ナデ、杯底部外側指圧痕未調整、脚柱部外面横ナデ、脚柱部内面横施工工具による縦ナデ、絞り込み	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	灰白色(2.5Y7/2)	脚部接合A 1-a	672	115	89
419	SD12 下層	土師器 高杯C	(15.9)			杯部内外横ナデ、杯底部外縦方向のナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にぶい褐色(5YR6/4)	杯部外面に接合痕あり	927	115	89
420	SD12 下層	土師器 高杯D	(19.2)	13.7	12.9	杯部内外面、脚柱部内外面調整不明	やや粗、径5mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐色(5YR7/6)		675	116	88
421	SD12 下層	土師器 高杯C	(17.2)			杯部内外面横ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐色(7.5YR6/6)		667	116	90
422	SD12 下層	土師器 高杯C	(15.1)			杯部内外面横ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、赤色酸化土粒を多く含む	普通	浅黄褐色(7.5YR8/4)		669	116	90
423	SD12 下層	土師器 高杯脚3		11.2		脚柱部外面一帯脚柱部内面調整不明、脚柱部内面横ナデ、絞り込み	やや粗、径4mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぶい褐色(7.5YR6/3)		619	116	89
424	SD12 下層	土師器 高杯脚3		11.2	8.3	脚柱部外面横方向の板ナデ後縫合ナデ、脚柱部内外面横ナデ、脚柱部内面横ナデ、絞り込み	やや粗、径2mm以下の長石、雲母をわずかに含む	普通	灰白色(2.5Y7/1)	脚部接合A 1-a	666	116	89
425	SD12 下層	土師器 脚A	(11.8)	4.2	7.0	体部外面下方指圧痕、口縫跡部外側横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	浅黄褐色(10YR8/3)		615	116	90
426	SD12 下層	土師器 脚A	(10.7)		10.0	体部一辺口縫跡部外側調整不明、口縫跡部内面横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄褐色(10YR8/4)		650	116	89
427	SD12 下層	土師器 小型壺				体部外側調整不明、体部内面不定方向の指圧ナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にぶい褐色(10YR7/3)		653	116	90
428	SD12 下層	土師器 小型壺		4.8		体部外側調整不明、体部内面指圧ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色(10YR2/1)		651	116	90
429	SD12 下層	土師器 小型壺		2.0		体部外側指圧方向の板ナデ、体部内面不定方向の指圧ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	灰白色(10YR8/1)		656	116	89
430	SD12 下層	土師器 小型壺		2.2		底部外側指圧方向の板ナデ、体部内面不定方向の板ナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい褐色(10YR6/4)		654	116	90
431	SD12 下層	土師器 小型壺		4.8		体部外側調整不明、体部内面不定方向の指圧ナデ	密、径1mm以下の長石、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	灰褐色(10YR5/2)		652	116	89
432	SD12 下層	土師器 小型壺		3.4		体部外側調整不明、体部内面指圧	やや粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい黃褐色(10YR7/2)		657	116	89
433	SD12 下層	土師器 手捏ね土器		3.4	3.8	体部内外面指圧	密、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	褐灰色(10YR5/1)		644	116	89
434	SD12 下層	土製品 稲の羽口	7.9	5.2	4.0	中央付近一直径約1.5cmの孔があり			表面が被熱している		960	116	89
435	SD12 上層	土師器 壺B 1	11.7		8.9	体部外面下方横方向の板ナデ、体部外面上方一囗縫跡部外側横ナデ、体部内面指圧痕	やや粗、径2mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐色(7.5YR7/6)	体部内外面に保付着	681	116	91
436	SD12 上層	土師器 壺B 1	(15.1)			体部外面一辺縫跡部内外面横ナデ、体部内面斜め方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色(10YR8/2)		690	116	91
437	SD12 上層	土師器 壺B 1	(14.8)			体部外面調整不明、口縫跡部内面横ナデ、体部内面指圧痕	粗、径4mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい褐色(10YR7/3)		686	116	92
438	SD12 上層	土師器 壺B 1	(10.2)			体部外面調整不明、口縫跡部内面横ナデ、体部内面指圧痕	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	普通	黒色(10YR2/1)	口縫跡部と体部外側下方に保付着	683	116	92
439	SD12 上層	土師器 壺底部g		6.2		体部外側斜めハケ、他の調査不明	密、径2mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	良好	灰褐色(10YR6/2)		647	116	92
440	SD12 上層	土師器 壺A 1	(12.2)			体部外面下方横方向の板ナデ、体部外面上方一囗縫跡部内外面横ナデ、体部内面下方斜め方向のケズリ	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色(5YR8/1)		609	116	91

表32 土器・石器観察表(22)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補図番号	図版番号
441	SD12 上層	土師器 小型壺	(9.0)		9.0	体部外面下方横方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面下方不定方向の指ナデ	密、径3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	良好	にぼい 黄褐色 (10YR7/3)		649	116	92
442	SD12 上層	土師器 小型壺			3.0	体部外面調整不明、体部内面横方向の指ナデ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を多く含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)		655	116	92
443	SD12 上層	土師器 A 2	(17.9)			体部外面一口縁部内外面調整不明、体部内面指压痕	密、径4mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぼい 褐色 (7.5YR7/4)		691	117	92
444	SD12 上層	土師器 高杯C	(16.0)			杯部内外面横ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	にぼい 褐色 (GYR6/3)		661	117	91
445	SD12 上層	土師器 高杯C	16.5			杯部内外面横ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	普通	黄灰色 (2.5YS/1)		610	117	91
446	SD12 上層	土師器 高杯C	(15.7)			杯部内面下方にあばた状の凹み、杯部内面上方～杯部外縁横ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を含み、赤色酸化土粒を多く含む	普通	にぼい 褐色 (GYR7/4)		664	117	91
447	SD12 上層	土師器 高杯脚 6			6.8	脚部内外面調整不明、脚柱部内面絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぼい 褐色 (GYR6/4)		618	117	92
448	SD12 上層	土師器 高杯C	(15.2)			杯部内面下方横方向の板ナデ、杯部内面上方～外縁横ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	浅褐色 (GYR8/4)		665	117	92
449	SD12 上層	土師器 高杯脚 3			11.6	脚柱部外面調整不明、脚柱部内外面横ナデ、脚柱部内面横方向の板ナデ、絞り込み	密、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぼい 褐色 (7.5YR7/4)		673	117	91
450	SD12 下層	土師器 高杯脚 3			10.8	脚部外面調整不明、脚部内外面横ナデ、脚部内面横方向の板ナデ、絞り込み	やや粗、径1mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	にぼい 褐色 (5YR7/4)		661	117	91
451	SD13 土師器 壺 B 1		17.4	7.8	18.5	体部外面斜め方向の板ナデ、口縁部外面横ナデ、口縁部内面横方向の板ナデ、脚部内面斜め方向のケツリ、脚部内面横方向の板ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁部一体部外面と体部内面下方に煤付着、口縁端部に刻み肩部外面に列点文	700	117	91
452	SD13 土師器 壺底部 b				10.0	脚部～体部外面斜め方向の板ナデ、脚部内面外面横ナデ、脚部内面斜め方向の板ナデ、体部内面横一斜め方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	体部外面に煤付着	711	117	91
453	SD13 土師器 壺 B 1		(21.1)			体部外面斜め方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面横一斜め方向の板ナデ	密、径5mm以下の長石、石英を多く含む	普通	灰黄褐色 (10YR5/2)	肩部外面に沈線5条と列点文、体部外面下方に煤付着	709	117	91
454	SD13 土師器 壺 B 1		(17.2)			体部外面斜め方向の板ナデ、口縁部内外面横ナデ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	浅黃褐色 (10YR8/4)	体部～口縁部外面付着	708	117	92
455	SD13 土師器 壺 B 1					口縁部内外面横ナデ	やや粗、径5mm以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	にぼい 褐色 (10YR6/3)	頸部外面に煤付着	707	118	92
456	SD13 土師器 壺部 b				8.2	脚台外面調整不明、脚台端部外面横ナデ、脚台内面横方向の板ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/3)		706	118	92
457	SD13 土師器 壺 H					体部外面調整不明、体部内面横方向の指ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面に横線文と波状文	710	118	91
458	SD13 土師器 壺 H					体部外面横ミガキ、体部内面指压	密、径3mm以下の長石、石英、雲母をわずかに含む	良好	灰褐色 (2.5YH7/2)	体部外面に横線文、波状文、3列点文	705	118	92
459	SD13 土師器 高杯G		(15.4)			杯部内面横方向のミガキ、杯部外面調整不明、脚柱部内面横方向のナデ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部外面沈線6条	703	118	92
460	SD13 土師器 高杯G				10.0	脚柱部外面横ミガキ、脚柱部外面横ミガキ、脚部外面調整不明、脚柱部内面横方向のナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	褐色 (5YH7/6)	1孔1組3空孔	702	118	92
461	SD13 土師器 高杯A					杯部内外面横方向のミガキ	密、径1mm以下の長石、石英を含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)	口縁端部沈線3条、沈線幅6mm	712	118	92

表33 土器・石器観察表(23)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎土	焼成	色調	備考	整理番号	検討番号	回収番号
462	SD14 土師器 甕A 1	(17.6)				体部外面斜めのハケ後 横ハケ、口縁部外面横ナ ゲ、頭部内外面横ハ ケ、体部内面指圧	密、径1mm以下の長 石、石英、雲母を多 く含む	普通	灰褐色 (N4/0)	口縁部外面に押 印刷文	846	118	95
463	SD14 土師器 甕A 2	(16.5)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、体 部内面指圧	やや粗、径1mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	黒褐色 (10YR3/1)		844	118	95
464	SD14 土師器 甕A 3	(17.6)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、体 部内面調整不明	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/4)	屈曲部外面に1 条の沈痕、体部 一口縁部外面に 煤付着	855	118	95
465	SD14 土師器 甕A 3	(15.6)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、頭 部内外面横方向のヘラナ ゲ、体部内面指圧	密、径2mm以下の長 石を多く含む	良好	褐灰色 (5YR4/1)	屈曲部外面に1 条の沈痕、体部 一口縁部外面に 煤付着	842	118	95
466	SD14 土師器 甕A 3	(15.2)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、体 部内面指圧	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 を多く含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	屈曲部外面に1 条の沈痕、口縁 部外面に煤付着	848	118	95
467	SD14 土師器 甕A 4	(15.4)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、体 部内面調整方向の板ナ ゲ	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	浅黄色 (2.5Y7/4)	屈曲部外面に1 条の沈痕、屈曲 部外面に1条 の沈痕	851	118	95
468	SD14 土師器 甕A 3	(14.6)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、頭 部内外面横方向のヘラナ ゲ、体部内面横ハケ後 指圧	やや粗、径2mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒をわす かに含む	普通	灰褐色 (10YR7/3)	屈曲部外面に1 条の沈痕、口縁 部一体部外面煤 付着	853	118	95
469	SD14 土師器 甕A 3	(13.3)				体部外面横ハケ後斜め ハケ、口縁部外面横ナ ゲ、頭部内外面横方 向のヘラナゲ、体部内面 指圧	やや粗、径1mm以下 の長石、石英、長石をわ ずかに含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面一口縁 部外面煤付着	856	118	95
470	SD14 土師器 甕A 3	(13.0)				体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部外面横ナ ゲ、頭部内外面横方 向のヘラナゲ、体部内面 指圧	やや粗、径2mm以下 の長石を幾つか含む	良好	灰褐色 (7.5YR7/3)	体部一口縁部外 面に煤付着	845	118	95
471	SD14 土師器 甕A 3	(13.4)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、頭 部内外面横方向のヘラナ ゲ、体部内面指圧	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)	体部一口縁部外 面に煤付着	852	118	95
472	SD14 土師器 甕A 3	(11.2)				体部外面斜めハケ、口 縁部外面横ナゲ、頭 部内外面横方向のヘラナ ゲ、体部内面指圧	やや粗、径2mm以下 の長石を幾つか含む	良好	暗灰色 (N3/0)	体部外面一口縁 部内外面に煤付 着	847	118	95
473	SD14 土師器 甕底部 a		8.8			窓部外面斜めハケ後縫 方向の板ナゲ、口縁部内 外面横方向の板ナゲと指 圧	やや粗、径2mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	灰褐色 (10YR6/3)	体部内面上方煤 付着	859	118	96
474	SD14 土師器 甕B 1	(16.5)				体部外面下方横方向の 板ナゲ、体部外上方横 方向の板ナゲ、口縁部内 外面横方向の板ナ ゲ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英を多く 含む	普通	灰褐色 (10YR6/4)	体部一口縁部外 面と体部内面下 方に煤付着	887	119	94
475	SD14 土師器 甕B 1 f	15.5	5.9	25.0		体部外面下方横方向 斜めカゲ、口縁部外 上方横方向斜めカ ゲ、口縁部内外面横 方向の板ナゲ	やや粗、径5mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面に煤付 着	599	119	94
476	SD14 土師器 甕B 1	(14.0)				体部外面調整不明、 口縁部外面横ナゲ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	浅黄褐色 (10YR8/3)	口縁部外面に煤 付着	872	119	95
477	SD14 土師器 甕B 1	(13.0)				体部一口縁部外面斜 めハケ、口縁部内外面 横ナゲ、体部内面横方 向の板ナゲ	やや粗、径6mm以下 の長石、石英をわす かに含む	普通	褐色 (5YR7/8)	口縁部外面に煤 付着	814	119	95
478	SD14 土師器 甕B 1	(13.0)				体部外面調整不明、 口縁部外面横ナゲ、体 部内面斜め方向の板ナ ゲ	やや粗、径8mm以下 の長石、石英をわす かに含む	普通	明赤褐色 (2.5YR5/8)	口縁部外面に煤 付着	811	119	95
479	SD14 土師器 甕B 1	(14.0)				体部外面上方一口縁 部外面横ナゲ、体部内 外面横方向後塗装	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR7/2)	体部外面一口縁 部内外面煤付着	803	119	95
480	SD14 土師器 甕B 1	(14.4)				体部外面下方一口縁 部外面横ナゲ、体部内 外面横方向の板ナ ゲ	やや粗、径3mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面一口縁 部内外面煤付着	861	119	95

表34 土器・石器観察表(24)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
481	SD14 土師器 甕 B 1	(15.6)				体部外面横方向の板ナ デ、口縁部内外横ナ デ、体部内面横一斜め 方向の板ナデ	やや粗、径 5 mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)		801	119	95
482	SD14 土師器 甕 B 1	(17.4)				体部内外面調整不 明	粗、径 4 mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	褐色 (SYR7/6)		815	119	95
483	SD14 土師器 甕 B 1	(18.0)				体部一口縁部外面調整 不明、口縁部内面横ナ デ、体部内面横方向の 板ナデ	やや粗、径 1 mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)		870	119	95
484	SD14 土師器 甕 B 1	(22.2)				体部外面横一斜め方 向の板ナデ、口縁部内外 面横ナデ、体部内面横 一斜め方向の板ナデ	やや粗、径 1 mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	灰褐色 (10YRA4/1)	体部内面を除き 煤付着	800	120	95
485	SD14 土師器 甕 B 1	13.2				体部外調整不明、口縁 部外面横ナデ、口縁部 内面横ナデ、体部内面横 方向の板ナデ	やや粗、径 5 mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含 む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/3)	体部一口縁部外 面に煤付着	799	120	93
486	SD14 土師器 甕 B 1	(21.2)				体部外面調整不明、口 縁部内外横ナデ、体 部内面斜め方向の板ナ デ	密、径 2 mm以下の長 石、赤色酸化土粒を わずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)		869	120	95
487	SD14 土師器 甕 B 1	(14.0)				体部外面斜め方向の板 ナデ、口縁部外面捺压、 口縁部一体部外面斜め 方向の板ナデ	密、径 2 mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	橙色 (5YR7/6)		809	120	95
488	SD14 土師器 甕 B 1	(9.6)				体部外面縦ハケ、口縁 部外面横ナデ、体部内 面調整不明	やや粗、径 2 mm以下の 長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を幾 つか含む	普通	橙色 (7.5YR7/8)	口縁部外面に煤 付着	863	120	95
489	SD14 土師器 甕 B 2	(25.4)				口縁部内外面横ナデ	やや粗、径 2 mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	橙色 (SYR7/6)	口縁部に刻み	858	120	96
490	SD14 土師器 甕 B 2	(12.7)				体部内面横方向の板ナ デ、他は調整不明	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		864	120	96
491	SD14 土師器 甕 B 3	(16.0)				口縁部内外面横ナデ	密、径 1 mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む				877	120	96
492	SD14 土師器 甕 B 4	(15.6)				体部外面斜めハケナ 消し、口縁部内外面 横ナデ、体部内面横 方向のケリ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	口縁部外面に煤 付着	862	120	96
493	SD14 土師器 甕 B 4	(13.2)				体部外面上方平行引き、 口縁部内外面横ナデ、 体部内面横一斜めハケ	やや粗、径 4 mm以下 の長石、石英、 赤色酸化土粒を多く含 む	良好	にぼい 橙色 (7.5YR6/4)		875	120	96
494	SD14 土師器 甕 C	(13.2)				体部外面上方一口縁部 内外面横ナデ、体部内 面捺压	やや粗、径 1 mm以下の長 石、石英、雲母を を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR5/1)	口縁部外面に煤 付着	843	120	96
495	SD14 土師器 甕 C	(14.4)				体部外面一口縁部内外 面横ナデ、体部内面横 一斜め方向の板ナデ	密、径 2 mm以下の長 石、石英をわずかに含 む	良好	灰褐色 (7.5YR6/2)	体部一口縁部外 面に煤付着	860	120	96
496	SD14 土師器 甕 C	(15.6)				体部外面調整不明、口 縁部外面横ナデ、体 部内面横方向のケリ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を多く含 む	普通	にぼい 黄褐色 (10YR7/2)	口縁部外面に煤 付着	854	120	93
497	SD14 土師器 甕 d	3.6				体部外面調整不明、体 部内面斜め方向の板ナ デ	密、径 1 mm以下の長 石、石英、雲母をわ ずかに含む	良好	灰白色 (2.5YR7/1)		873	120	96
498	SD14 土師器 甕 e	3.1				体部内外面一斜め方 向の板ナデ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英を幾つ か含む	普通	にぼい 橙色 (10YR7/3)	体部内外面に煤 付着	807	120	96
499	SD14 土師器 甕 f	8.5				体部内外面調整不明	やや粗、径 3 mm以下 の長石を多く含む	良好	にぼい 橙色 (10YR7/3)		871	120	96
500	SD14 土師器 小甕 g	(7.0)				体部外面調整不明、口 縁部外面横ナデ、体 部内面斜め方向の指ナ デ	やや粗、径 1 mm以下の 長石、石英を多く 含む	普通	黑色 (10YR2/1)		865	121	94
501	SD14 土師器 小甕 h	(8.5)	2.5	8.1		体部外面調整不明、口 縁部外面横ナデ、体 部内面不定方向の指ナ デ	やや粗、径 3 mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/6)		808	121	94
502	SD14 土師器 小甕 i	(9.1)		7.7		体部外面調整不明、口 縁部外面横ナデ、体 部内面捺压	密、径 4 mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	良好	にぼい 橙色 (7.5YR7/3)		812	121	94
503	SD14 土師器 甕 A 1	10.2		9.3		体部外面調整不明、 一斜め方向の板ナデ、 口縁部外面横ナデ、 口縁部内面横 方向の板ナデ	密、径 4 mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	灰黃褐色 (10YR5/2)	体部外面と体部 内面下方に煤付 着	884	121	92

表35 土器・石器観察表(25)

測定番号	測定・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
504	SD14	土師器 壺A 1	(9.4)			体部内外面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面横方向の板ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、雲母を幾つか含む	普通	灰褐色 (10YR4/1)		881	121	93
505	SD14	土師器 壺A 1	(11.0)			口頭部内外面横ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石を幾つか含む	普通	灰褐色 (7.5YR4/2)		805	121	96
506	SD14	土師器 壺A 1	(12.0)			頭部外面横ハケ、口縁 部内外面-頭部内面横 ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、赤色酸化土粒を わずかに含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/2)		806	121	96
507	SD14	土師器 壺A 1	(13.2)			口縁部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母を含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/4)		868	121	96
508	SD14	土師器 壺A 2	(15.0)			口頭部内外面横-斜め 方向の板ナダ、体部内 面指圧	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母を含む	普通	褐灰色 (7.5YR5/1)		876	121	96
509	SD14	土師器 壺A 2	(16.7)			口縁部内外面横ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		810	121	96
510	SD14	土師器 壺B	(15.2)			口縁部内外面調整不 明、体部内面横方向の 板ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母、 赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)		804	121	96
511	SD14	土師器 壺B	(12.4)			口縁部内外面調整不 明	やや粗、径2mm以下の 長石、赤色酸化土粒を わずかに含む	良好	浅黃褐色 (10YR8/3)	口縁端部に沈線 4条	849	121	96
512	SD14	土師器 壺H				体部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英を多く含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR6/3)	体部外面に横擦 文と貝皿による 刻文	841	121	94
513	SD14	土師器 壺D				体部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部外面に横擦 文、竹管文、刻 突文、体部外 面赤彩	850	121	94
514	SD14	土師器 壺D	(21.0)			口縁部内外面調整不 明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英をわざかに 含む	普通	黃灰色 (2.5Y5/1)	口縁部内面に羽 状文、口縁端部 沈線5条と円形 浮文、棒状浮文	928	121	94
515	SD14	土師器 壺D	(16.3)			器面の調整不明	やや粗、径6mm以下 の長石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)	口縁部内面に羽 状文、口縁端部 沈線3条と円形 浮文	866	121	94
516	SD14	土師器 壺C	(19.4)			口頭部外面横ハケ後縫 ミガキ、口頭部内面横 ハケ後縫めミガキ	密、径3mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	良好	褐灰色 (10YR4/1)	口縁端部に1条の 比較線の凹み	880	121	94
517	SD14	土師器 壺G	(19.2)			頭部外面-口縁部内外 面横ナダ、頭部内面 横方向の板ナダ	密、径2mm以下の長 石、石英、雲母を多 く含む	良好	黃灰色 (2.5Y6/1)	頭部外面下方に 保付着	879	121	96
518	SD14	土師器 壺E	(16.2)			頭部外面斜めハケ、口 縁部内外面調整不明	密、径2mm以下の長 石、石英、赤色酸化 土粒を幾つか含む	普通	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部内外面に 羽状文	822	121	96
519	SD14	土師器 壺G	10.9			体部-口縁部内外面 横方向のミガキ、口縁部内 面横方向のミガキ後縫 方向のヘマギキ、体 部内面横方向のナダ	密、径2mm以下の長 石、石英をわざかに含 む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/2)		878	121	93
520	SD14	土師器 手捏ね 土器	7.1	4.4	5.3	体部内外面指圧	やや粗、径1mm以下の 長石、赤色酸化土 粒をわざかに含む	普通	浅黃色 (2.5Y7/3)		802	121	94
521	SD14	土師器 手捏ね 土器				頭部外面と体部内面 方の斜方移工具によ るナダ、その他は調整 不明	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/3)	体部外面と内面 下方に保付着	874	121	93
522	SD14	土師器 高杯C				杯部外面横ナダ、脚 柱部外面指圧後縫方 向の板ナダ、脚部湖 底部内外面横ナダ、脚 柱部内面横方向の ケズリ	やや粗、径2mm以下の 長石をわざかに含 む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	脚部接合A 1 a、 口縁部と底盤全 周打ち抜き	883	122	92
523	SD14	土師器 高杯C	(17.0)	11.6	12.3	杯部内外面横ナダ、脚 柱部外面指圧後縫方 向の板ナダ、脚部湖 底部内外面横ナダ、脚 柱部内面横方向の ケズリ	粗、径4mm以下の長 石、石英を多く含む	普通	浅黃褐色 (7.5YR8/4)	杯部外面の接合 痕をなで消して いる	882	122	92
524	SD14	土師器 高杯C	(15.7)			杯部外面斜めハケ後縫 ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英をわざかに 含む	普通	浅黃褐色 (2.5Y7/3)	杯底部中央に穿 孔?	819	122	93
525	SD14	土師器 高杯C	16.4		5.2	杯部外面横ミガキ、 杯部底外面横ミガキ、 脚柱部内面横方向の ケズリ	やや粗、径3mm以下の 長石、石英を幾つか含 む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/3)	脚部接合A 2 a	784	122	93
526	SD14	土師器 高杯C	16.0			杯部外面下方横方 向の板ナダ、内面上方横 方のナダ、杯部外 面横ナダ	密、径3mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	にじい 黄褐色 (10YR7/2)	脚部接合A 1 a	816	122	93

表36 土器・石器観察表(26)

実測番号	遺物・出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	標本番号	個体番号	
527	SD14	土師器 高杯C	14.5		5.0	杯部内面下方斜めナダ 内面上方一外面横ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母、赤色 酸化土粒をわずかに含む	普通	褐灰色 (10YR6/1)	脚部接合A 1 a	820	122	93	
528	SD14	土師器 高杯F	(9.4)			杯部の外側と脚部外側 調整不明、脚柱部内面 絞り込み	やや粗、径1mm以下 の長石を幾つか含む	普通	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1孔1組3穿孔	818	122	94	
529	SD14	土師器 高杯脚 1			14.4	脚柱部外側調整不明、 脚柱部内面絞り込み	密、径2mm以下の長 石、石英をわずかに含む	普通	淡黄色 (2.5Y8/3)	脚部外側横幅文 文と列文、1 孔4組4穿孔	827	122	93	
530	SD14	土師器 高杯脚 2			13.9	脚部内面斜めハケ 脚柱部内面斜めハケ 脚柱部内面横方向の板 ナダ、絞り込み	密、径1mm以下の長 石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	2孔3組6穿孔	823	122	93	
531	SD14	土師器 高杯脚 2			11.0	脚部外側面方向のミガ キ、脚部内面横方向の 板ナダ	密、径1mm以下の長 石、石英、赤色酸化 土粒を幾つか含む	普通	にぶい橙色 (5YR6/4)	1孔1組3穿孔	825	122	93	
532	SD14	土師器 高杯脚 4			11.0	6.6	脚柱部外側面方向の板 ナダ、脚部内面外側調 整方向の板ナダ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	灰白色 (10YR7/1)	脚部接合A 1 a	829	122	93
533	SD14	土師器 高杯D				杯部内面調整不明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	橙色 (5YR6/6)		817	122	96	
534	SD14	土師器 高杯脚 3			11.1	脚柱部外側面方向の板 ナダ、脚部内面横ナ ダ、脚柱部内面横方 向のケズリ	やや粗、径4mm以下 の長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含む	普通	橙色 (7.5YR7/6)	脚部接合A 2 c	826	122	93	
535	SD14	土師器 高杯脚 3			10.4	8.6	脚部内面縱方向のヘラ ナダ、脚部内面横ナ ダ、絞り込み	やや粗、径2mm以下の 長石、石英を幾つか 含む	普通	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	脚部接合A 1 b	886	122	93
536	SD14	土師器 高杯脚 3			12.6	脚柱部外側面方向の板 ナダ、脚部内面横ナ ダ、脚柱部内面横方 向のナダ	密、径1mm以下の長 石、石英、雲母、赤 色酸化土粒をわずかに 含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)	脚部接合B 2	824	122	93	
537	SD14	土師器 高杯脚 3			11.9	8.4	脚柱部外側面方向の板 ナダ、脚部外側面一 脚部内面横ナダ	密、径2mm以下の長 石、石英、雲母、赤 色酸化土粒をわずかに 含む	普通	褐灰色 (10YR5/1)	脚部接合B 1 a	885	122	93
538	SD14	土師器 高杯脚				杯部一脚部外側面調 整不明、脚部内面横ナ ダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母 を赤色酸化土粒を幾つ か含む	普通	浅黃橙色 (7.5YR8/4)	脚部接合A 2 b	828	122	93	
539	SD14	土師器 高杯脚 4			11.5	脚柱部外側面方向のヘ ラナダ、脚部内面外側 調整不明、脚柱部内面 横方向のケズリ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	浅黃橙色 (7.5YR8/4)		830	122	93	
540	SD14	土師器 鉢A	(9.8)	3.3	4.8	体部内面調整不明、体 部内面横方向の板ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR6/1)		867	122	94	
541	SD14	土師器 鉢E	(12.7)			口縁部内外面横ナダ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか 含む	普通	橙色 (5YR6/8)		821	122	96	
542	SD14	石器石 包丁	4.3	11.3	1.0	2ヶ所に表裏面からの 穿孔跡がされている。				石材：ホルン フェルス、 重さ64.2g	952	123	94	
543	SD15	土師器 甕A 3	(11.8)			体部外側面斜めハケ後横 ハケ、口縁部内外面に 沈刻、体部内面斜め方 向の板ナダ	密、径3mm以下の長 石、石英、雲母を幾 つか含む	普通	灰白色 (2.5Y8/2)	頭部調整技法あり	834	123	97	
544	SD15	土師器 甕B 1	(14.0)			体部外側面斜めハケ、 口縁部内外面横ナダ、 体部内面斜め方 向の板ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母、赤 色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐褐色 (7.5YR4/1)		837	123	97	
545	SD15	土師器 甕B 1	(16.2)			体部外側面斜めハケ後横 ハケ、口縁部内外面横 ナダ、体部内面斜め方 向のケズリ	密、径6mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	普通	灰白色 (10YR8/2)	体部一口縁部外 面横付着	835	123	97	
546	SD15	土師器 甕B 4	(12.4)			体部外側面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面斜め方 向のケズリ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英、雲母 を幾つか含む	普通	褐灰色 (10YR4/1)		839	123	97	
547	SD15	土師器 甕C	(14.8)			体部外側面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、体 部内面横方向の 板ナダ	やや粗、径2mm以下の 長石を多く含む	良好	灰白色 (7.5YR8/1)	体部外面に煤付 着	838	123	97	
548	SD15	土師器 甕A 2	(12.3)			体部外側面調整不明、口 縁部内外面横ナダ、口 縁部一體内面横方向の 板ナダ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに 含む	普通	褐灰色 (7.5YR5/1)		833	123	97	

表37 土器・石器観察表(27)

測定番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎土	焼成	色調	備考	整理番号	標因番号	国際番号
549	SD15	土師器 甕E	(19.0)			口縁部内外面調整不明	密、径4mm以下の長石、石英、赤色散化土粒を多く含む	普通	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部内外面羽状文	836	123	97
550	SD15	土師器 甕底部 b		9.8		脚台外面斜めハケ、脚台内面横一斜めハケ、脚台底部内面横ナダ	やや粗、径2mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	脚台外面上方に焼付着	832	123	97
551	SD15	土師器 甕底部 b		8.4		脚台外面斜めハケ	やや粗、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	灰白色 (2.5Y7/1)		840	123	97
552	SD16	土師器 甕A 3	(13.4)			体部外面斜めハケ後横 ハケ、口縁部内外面横 ナダ、脚部内面横方向 のナラッタ、体部内面 横方向の板ナダ	やや粗、径2mm以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	口縁部外面に焼付着、胡麻部外 面に1条の沈線	913	123	97
553	SD16	土師器 甕底部 g		4.6		底部外面ケギリ、体部 外縁斜め方向の板 ナダ、体部内面上方指 圧、体部内面下方横方 向の板ナダ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR7/2)	体部外面下方に 焼付着	934	123	97
554	SD17	土師器 甕B	(14.0)			口頭部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	浅黃褐色 (10YR8/3)		912	123	97
555	SD17	土師器 甕底部 b		7.8		脚台内外面調整不明	やや粗、径4mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぶい 黄褐色 (10YR6/3)		911	123	97
556	NR 1	圓文土 器深鉢				体部内面横方向のケズ り、体部外面廠方向の 条痕	やや粗、径1mm以下の長石、石英、赤色 酸化土粒をわずかに含む	普通	灰褐色 (2.5Y4/1)		910	123	97
557	NR 2	圓文土 器深鉢	(28.2)			体部内外面調整不明	粗、径4mm以下の長石、石英を多く含む	普通	褐褐色 (7.5YR6/2)		909	123	97
558	SD19	須恵器 杯身B		7.2		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナダ	密、径3mm以下の長石をわずかに含む	良好	白褐色 (5Y7/0)		47	124	98
559	SD20	須恵器 杯身B	(12.4)	6.5	4.0	底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナダ	密、径3mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色 (N8/0)		44	124	98
560	SD20	須恵器 杯蓋B				天井部外面回転ヘラ削 り、他は回転ナダ	密、径4mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	つまみ径3.3cm、 つまみ高0.9cm	46	124	98
561	SD20	須恵器 杯身B		3.9		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナダ	密、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (N8/0)	底部外面に墨書き、 鉄錆不規	48	124	99
562	SD20	須恵器 平瓶	(13.2)	16.0	14.4	体部外面回転ヘラ削 り、他は回転ナダ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)	体部外面上方と 脚部内面に自然 輪降灰	49	124	97
563	SD21	小皿B	(8.8)	4.6	3.0	底部外面回転糸切り、 他は回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N8/0)		130	124	98
564	SD21	山茶碗 B	(15.5)	7.5	5.2	底部外面回転糸切り、 他は回転ナダ	密、径4mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部外面に墨書き [中]	125	124	99
565	SD21	山茶碗 B	15.2	7.0	6.1	底部外面回転糸切り、 他は回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)		124	124	97
566	SD21	山茶碗 A		8.2		底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナダ	やや粗、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部外面の墨書き、 鉄錆不明	129	124	98
567	SD21	山茶碗 B		5.6		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナダ	密、径2mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		128	124	98
568	SD21	山茶碗 B		6.0		底部外面回転糸切り後 ナダ調整、他は回転ナ ダ	密、径1mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		126	124	98
569	SD21	山茶碗 A		7.7		底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナダ	密、径3mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部内面平滑、 底部内面黒色有 機物付着	127	124	98
570	SD22	灰陶陶 器盤				脚部内外面回転ナダ	密、径2mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	内面に自然黒跡 灰	150	124	98
571	P289	山茶碗 B	(15.0)			体部内外面回転ナダ	密、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰白色 (N7/0)		153	124	98
572	P289	山茶碗 B	(15.2)		3.8	体部内外面回転ナダ	粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y7/1)		154	124	98
573	P348	山茶碗 B		7.8		底部外面回転糸切り後 ナダ調整、他は回転ナ ダ	やや粗、径8mm以下の 長石、赤色散化土 粒を含む	不良	灰白色 (2.5Y8/1)		152	124	98
574	P785	山茶碗 A		7.2		底部外面回転糸切り後 ナダ調整、他は回転ナ ダ	粗、径3mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部内面平滑	151	124	98
575	P439	山茶碗 B	17.0	9.0	5.2	底部外面回転糸切り、 他は回転ナダ	密、径1mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部内面平滑	157	124	98
576	P379	山茶碗 B	(15.2)			体部内外面回転ナダ	密、径1mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (7.5Y8/1)		156	124	98
577	P379	山茶碗 B		7.8		底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナダ	密、径1mm以下の石 英を幾つか含む	不良	灰白色 (10YR8/2)	内面に黒褐色の 有機物付着	155	124	98

表38 土器・石器観察表(28)

実測番号	通構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	図版番号
578	包含層	須恵器 杯身A	(10.4)		5.6	天井部外側回転ヘラ削り3/4、他は回転ナデ、ロクロ左回転	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)	受付部11.9cm、たちあき高2.5cm、口縁部幅C、胎土A 1a	37	125	97
579	包含層	須恵器 無蓋高杯	(11.6)			杯部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N6/0)	杯部外縁に2条の次帯、次帯間に波状文、胎土A 2a	39	125	
580	包含層	須恵器 ★	(13.1)			口縁部内外面横ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色(N7/0)	口縁部外縁に波状文、1条の突帯、胎土A 2a	41	125	
581	包含層	須恵器 杯底	(10.3)		3.5	天井部外側回転ヘラ削り1/2、天井部内面中央に削痕有、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色(10Y6/1)	種φ9.3cm、口縁部高9.9cm、口縁端部A	598	125	97
582	包含層	須恵器 杯身A	(10.1)			底体部外側回転ヘラ削り1/3、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)	受付径12.0cm、たちあき高0.9cm、口縁端部A	38	125	
583	包含層	須恵器 杯身B	(10.8)	6.9	4.4	底部外面へら切り未調整、底部内面二方向ナデ、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N8/0)		51	125	
584	包含層	須恵器 杯身B	(13.0)	8.4	3.6	底部外面回転ヘラ削り、棒状压痕、底部内面二方向ナデ、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)		50	125	
585	包含層	須恵器 杯身B	(14.4)	7.2	4.0	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径4mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)		52	125	
586	包含層	須恵器 杯身C	(13.0)	10.2	3.8	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		54	125	
587	包含層	灰釉陶 器皿	12.0	5.9	2.7	底部外面回転系切り、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)	底部内面に黒色有機物付着	122	125	
588	包含層	灰釉陶 器皿	(15.7)	7.4	5.1	体部外面上方一底部外側回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(N8/0)	体部内外面灰釉濁り掛け	937	125	
589	包含層	灰釉陶 器皿	(16.2)	8.0	4.7	底部外面回転系切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		121	125	
590	包含層	灰釉陶 器皿	(13.1)	7.0	4.4	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	不良	灰白色(N8/0)		119	125	
591	包含層	灰釉陶 器皿	(17.8)			体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(N8/0)		123	125	
592	包含層	小碗A	(9.6)	5.8	3.4	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		168	125	
593	包含層	小碗A	(10.2)	3.6	2.0	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		208	125	
594	包含層	小碗A	(9.4)	5.0	3.0	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		256	125	97
595	包含層	小碗A	(9.6)	5.2	2.6	底部外面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	粗、径2mm以下の長石、石英を多く含む	良好	灰白色(10YR8/1)	体部内面に自然釉降灰	335	125	
596	包含層	小碗A	(11.0)	5.0	2.7	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	やや粗、径4mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		141	125	
597	包含層	小碗A	8.7	3.4	2.8	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	粗、径3mm以下の長石、石英を多く含む	良好	灰白色(N7/0)	口縁部周辺に自然釉降灰	336	125	97
598	包含層	小碗A	(9.3)	3.1	2.9	底部外面回転系切り、他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		210	125	
599	包含層	小碗A	(8.2)	4.9	2.6	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色(2.5Y7/1)	内面に自然釉降灰	338	125	
600	包含層	小碗A	(8.4)	4.4	2.4	底部外面回転系切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	褐灰色(10YR5/1)	内面に自然釉降灰	290	125	
601	包含層	小碗A	(7.4)	4.6	2.7	底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		339	125	
602	包含層	小碗A		4.7		底部外面回転系切り後ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(5V8/1)	底体内部内面に黑色有機物(漆)付着	354	125	97
603	包含層	小皿B	(9.6)	6.0	2.8	底部外面回転系切り、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	不良	灰白色(10YR8/1)		200	125	
604	包含層	小皿A	(9.0)	5.0	2.1	底部外面回転系切り、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(5V7/1)		204	125	
605	包含層	小皿B	(9.7)	5.2	2.6	底部外面回転系切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		326	125	

表39 土器・石器観察表(29)

測定番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	補図番号	同版番号
606	包含層	小皿A	(9.4)	5.0	2.3	底部外面糸切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	不良	灰白色 (10YR8/1)		331	125	
607	包含層	小皿A	(8.6)	3.6	2.6	底部外面回転糸切り後ナデ調整、板目あり、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		330	125	
608	包含層	小皿A	(8.8)	4.4	2.1	底部外面回転糸切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色 (7.5Y7/1)	内面に自然釉薄灰	253	125	
609	包含層	小皿A	8.3	4.7	2.6	底部外面回転糸切り、体部外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	体部内外面に自然釉薄灰	146	125	
610	包含層	小皿A	(8.7)	4.3	2.5	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	内面に暗褐色の有機物付着	202	125	
611	包含層	小皿B	7.9	3.8	2.4	底部外面回転糸切り、底部内面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	2次的に黒色有機物付着	132	125	
612	包含層	小皿A	(8.4)	4.4	2.5	底部外面回転糸切り、板目、体部内外面回転ナデ、底部内面コナデ	やや粗、径1mm以下の長石を幾つか含む	普通	灰白色 (2.5Y8/1)		213	125	
613	包含層	小皿B	(7.6)	4.0	2.0	底部外面回転糸切り、底部内面平滑、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	口縁部に自然釉薄灰	133	125	
614	包含層	小皿B	(8.3)	4.0	2.4	底部外面回転糸切り、板目、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)		206	125	
615	包含層	小皿B	(8.1)	3.4	2.2	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		209	125	
616	包含層	小皿A	(9.4)	6.0	1.9	底部外面回転糸切り、板目、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (7.5Y7/1)	内面自然釉薄灰	318	125	
617	包含層	小皿B	(9.0)	5.5	2.3	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (N8/0)		284	125	
618	包含層	小皿A	(8.2)	4.2	2.1	底部外面回転糸切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		317	125	
619	包含層	小皿B	(4.3)	4.6	1.7	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		250	125	
620	包含層	小皿B	(9.2)	4.1	2.2	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N8/0)		201	125	
621	包含層	小皿B	(8.6)	4.1	2.0	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR7/1)	内面に黑色有機物がわずかに付着	199	125	
622	包含層	小皿B	(8.2)	5.2	1.3	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)		160	125	
623	包含層	小皿B	(7.5)	3.0	1.7	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径3mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)		207	125	
624	包含層	小皿B	8.3	4.6	1.6	底部外面回転糸切り、板目、底部内面指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		203	125	
625	包含層	小皿B	(8.4)	4.4	1.8	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		249	125	
626	包含層	小皿B	8.0	5.4	1.4	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)		255	125	97
627	包含層	小皿B	8.5	4.2	2.1	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		334	126	98
628	包含層	小皿B	(8.3)	4.8	1.6	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)		323	126	

表40 土器・石器観察表(30)

実測番号	遺構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	検査番号	回収番号
629	包含層	小皿B	(8.0)	5.0	1.8	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)		282	126	
630	包含層	小皿B	8.7	4.8	1.7	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		170	126	98
631	包含層	小皿B	(8.8)	5.6	1.6	底部外面糸切り、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		289	126	
632	包含層	小皿B	(8.4)	4.7	1.6	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		328	126	
633	包含層	小皿B	8.6	5.4	1.4	底部外面回転糸切り後ナデ調整、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(N8/0)		322	126	
634	包含層	小皿B	(8.6)	4.4	1.6	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、赤色化粧土をわずかに含む	良好	灰白色(10YR7/1)		327	126	
635	包含層	小皿B	8.4	5.0	1.3	底部外面糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		145	126	
636	包含層	小皿B	(8.2)	4.4	1.0	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、底部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		163	126	
637	包含層	小皿B	7.8	4.5	1.2	底部外面回転糸切り、体部内外面回転ナデ	やや粗、径3mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)	鉄分の吹き出しがみられる	162	126	
638	包含層	小皿B	(7.8)	4.7	1.4	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/2)		214	126	
639	包含層	小皿B	7.6	4.9	1.3	底部外面糸切り、板目、底部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N7/0)		251	126	98
640	包含層	小皿B	(8.6)	5.3	1.1	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N8/0)		286	126	
641	包含層	小皿B	(7.9)	4.2	1.3	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N8/0)		332	126	
642	包含層	小皿B	8.3	4.6	1.3	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石、砂粒をわずかに含む	良好	灰白色(7.5Y7/1)		283	126	98
643	包含層	小皿B	7.9	4.7	1.3	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y7/1)		287	126	98
644	包含層	小皿B	(8.8)	4.6	1.2	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(5Y8/1)		288	126	
645	包含層	小皿B	8.4	4.5	1.3	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径9mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)	底部内面は黒色有機物が付着し、平滑である	325	126	
646	包含層	小皿B	(8.4)	5.0	1.1	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(7.5Y8/1)		285	126	
647	包含層	小皿B	8.4	5.8	1.1	底部外面回転糸切り、体部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(5Y8/1)		333	126	
648	包含層	小皿B	(7.5)	5.5	1.1	底部外面回転糸切り、板目、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2.5Y8/1)		320	126	
649	包含層	小皿B	(8.5)	4.5	1.1	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N8/0)		319	126	
650	包含層	小皿B	8.1	5.3	0.9	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整、体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(10YR7/1)		321	126	

表41 土器・石器観察表(31)

測定番号	通構・出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理番号	標本番号	国際番号
651	包含層	小皿B	(8.4)	6.4	1.0	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(SY7/1)	底部外面に墨書き「井」	240	126	
652	包含層	小皿B		4.2		底部外面に墨書き切り、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「恵」	362	126	99
653	包含層	小皿B	(8.2)	5.2	0.9	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「恵」	368	126	99
654	包含層	小皿B		5.2		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY8/1)	底部外面に墨書き「女々」	262	126	
655	包含層	小皿A	(8.9)	4.8	2.4	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径3mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(SY7/1)	底部外面に墨書き「上」	193	126	99
656	包含層	小皿B	8.7	5.3	1.5	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「上」	195	126	98
657	包含層	小皿B		4.2		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(10YR8/1)	底部外面に墨書き「上口」、底全体内面に黒色有機物付着	183	126	99
658	包含層	小皿B	(8.8)	4.8	1.8	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(10YR7/1)	底部外面に墨書き「大」	279	126	
659	包含層	小皿B	8.9	4.1	1.9	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(SY8/1)	底部外面に墨書き「大」	314	126	98
660	包含層	小皿B	(7.4)	5.0	1.0	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「大」	269	126	99
661	包含層	小皿B		5.2		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(SY8/1)	底部外面に墨書き「大」	358	126	
662	包含層	小皿B		4.6		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY8/1)	底部外面に墨書き「大」	176	126	
663	包含層	小皿B	(8.0)	4.2	1.8	底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径3mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「大」	357	126	
664	包含層	小皿B	(8.3)	4.4	1.3	底部外面回転糸切り、板目、体内外面回転ナダ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(N8/0)	底部外面に墨書き「大方」	188	126	99
665	包含層	小皿B	8.5	5.2	1.3	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(10YR8/1)	底部外面に墨書き「●」	194	126	99
666	包含層	小皿B	8.4	4.8	0.8	底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナダ調整、体内外面回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「十」	356	126	
667	包含層	小皿B		4.8		底部外面回転糸切り、板目、底部内面静止指ナダ調整、他是回転ナダ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き	235	126	99
668	包含層	小皿B		4.0		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY8/1)	底部外面に墨書き「〇と九」	226	126	99
669	包含層	小皿B	(7.9)	4.9	1.4	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径2mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2SY8/1)	底部外面に墨書き「おカ」	301	126	
670	包含層	小皿B	(8.4)	5.0	1.1	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径2mm以下の長石を美をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「〇」	228	126	
671	包含層	小皿B	(8.2)	4.4	1.2	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石、石英をわずかに含む	良好	灰白色(2SY7/1)	底部外面に墨書き「〇カ」	189	126	
672	包含層	小皿B		5.9		底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(SY7/1)	底部外面に墨書き「〇」	360	126	
673	包含層	山茶碗A	(17.6)	8.2	5.7	底部外面回転糸切り後ナダ調整、高台端部切削部、体内外面回転ナダ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	不良	灰白色(2SY8/1)		344	127	
674	包含層	山茶碗A	16.8	7.5	5.0	底部外面回転糸切り後ナダ調整、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2SY7/1)	体部内面に自然釉障灰	343	127	98
675	包含層	山茶碗B	(17.0)	7.6	5.4	底部外面回転糸切り後ナダ調整、他是回転ナダ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色(2SY8/1)		351	127	
676	包含層	山茶碗A	(16.2)	8.2	5.7	底部外面回転糸切り、他是回転ナダ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色(2SY8/1)	底全体内面に自然釉障灰	353	127	

表42 土器・石器観察表(32)

支洞 番号	遺構・ 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色調	備 考	整理 番号	標印 番号	回収 番号
677	包含層 B	山茶碗	(15.8)	6.7	5.9	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の 長石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)		224	127	
678	包含層 B	山茶碗	(16.8)	5.4	5.7	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)		261	127	
679	包含層 B	山茶碗	(14.6)	6.9	5.2	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石、黄英をわずかに 含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部内面に黒色 有機物が付着し ている	291	127	
680	包含層 B	山茶碗	(15.4)	6.8	5.8	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		221	127	
681	包含層 A	山茶碗			6.6	底部外面回転糸切り後 ナデ調整、他は回転ナ デ	やや粗、径1mm以下の 長石を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)	底部内面に黒色 有機物(漆か)付 着	355	127	
682	包含層 B	山茶碗	(15.0)	6.0	5.0	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (N8/0)	体部内外面下方 黒色有機物付着、 底部内面平滑	217	127	
683	包含層 B	山茶碗	(15.2)	6.4	5.1	底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)		345	127	
684	包含層 B	山茶碗	(12.6)	5.0	6.3	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)		131	127	
685	包含層 B	山茶碗	(12.0)	5.2	5.5	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		171	127	
686	包含層 B	山茶碗	(14.7)	4.9	5.1	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		342	127	
687	包含層 B	山茶碗	(13.9)	5.6	3.6	底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR7/1)		222	127	
688	包含層 B	山茶碗	(14.2)	5.2	3.6	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石、黄英をわずかに 含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		220	127	
689	包含層 B	山茶碗	(13.4)	4.4	4.2	底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (10YR7/1)		259	127	
690	包含層 B	山茶碗	(13.0)	4.7	3.5	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径4mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)		158	127	
691	包含層 B	山茶碗	(12.6)	4.2	3.0	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		215	127	
692	包含層 B	山茶碗	(13.2)		4.4	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (10YR8/1)		260	127	
693	包含層 B	山茶碗	(11.8)	3.4	2.9	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		218	127	
694	包含層 B	山茶碗	(12.6)	5.6	2.8	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		347	127	
695	包含層 B	山茶碗	(11.6)	4.4	3.0	底部外面回転糸切り、 板目、体部内面コテナ デ、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)		352	127	
696	包含層 B	山茶碗	(11.0)	3.2	2.9	底部外面回転糸切り、 底体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)		292	127	
697	包含層 B	山茶碗	(11.0)	4.0	2.6	底部外面回転糸切り、 底体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR7/1)		216	127	
698	包含層 B	山茶碗	(11.0)	3.4	2.6	底部外面回転糸切り後 ナデ調整、底体部内面 コテナデ、他は回転ナ デ	密、径3mm以下の長 石、黄英をわずかに 含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		161	127	
699	包含層 B	山茶碗	(10.6)	3.6	2.0	底部外面回転糸切り、 底体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石、雲母をわずかに 含む	良好	褐灰色 (10YR6/1)		166	127	
700	包含層 B	山茶碗	(11.2)	4.4	2.7	底部外面回転糸切り、 板目、体部内面上方コ テナデ、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)		144	127	
701	包含層 B	山茶碗	(11.0)	4.8	2.3	底部外面回転糸切り、 底体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (N7/0)		167	127	
702	包含層 B	山茶碗	(10.0)	3.5	2.0	底部外面回転糸切り、 底体部内面コテナデ、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (N7/0)		257	127	
703	包含層 B	山茶碗				底体部内面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底体内面に鉢 目あり	316	127	
704	包含層 B	山茶碗			12.8	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径3mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「大」	196	128	99

表43 土器・石器観察表(33)

器種 番号	遺構・出土位置	器種	口径 (cm)	器深 (cm)	高さ (cm)	變形・調整	胎 土	焼成	色調	備 考	器種 番号	種類 番号	回転 番号	
705	包含層	山茶碗 B	(12.6)	4.9	2.9	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「大」	248	128	99	
706	包含層	山茶碗 B		6.9		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の 長石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「大」	936	128		
707	包含層	山茶碗 B		5.1		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)	底部外面に墨書き 「大」	372	128		
708	包含層	山茶碗 B		5.2		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部外面に墨書き 「大」	190	128		
709	包含層	山茶碗 B	(12.6)	5.3	3.2	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面に墨書き 「大」?	138	128		
710	包含層	山茶碗 A	15.7	6.9	5.1	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)	底部外面に墨書き 「長」	378	128	98	
711	包含層	山茶碗 B		9.0		底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (N8/0)	底部外面に墨書き 「長」? 体部内面 に焼付着	374	128		
712	包含層	山茶碗 B	(13.8)	5.0	4.2	底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部外面に墨書き 「窓」	375	128	99	
713	包含層	山茶碗 B		7.3		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の 石英をわざかに含む	不良	灰白色 (5Y8/2)	底部外面に墨書き 「九」	377	128	99	
714	包含層	山茶碗 B		6.3		底部外面回転糸切り後 ナデ調整、板状压痕、他 は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)	底部外面に墨書き 「弁」?	191	128		
715	包含層	山茶碗 B		4.4		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (N8/0)	底部外面に墨書き 「長カ」	241	128	99	
716	包含層	山茶碗 B		3.2		底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面に墨書き 「〇と十」	187	128	99	
717	包含層	山茶碗 B		4.2		底部外面回転糸切り後 ナデ調整、底部内面静 止指ナデ調整、他は回 転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	底部外面に墨書き 「*」	280	128	99	
718	包含層	山茶碗 B		3.9		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「井」?	174	128		
719	包含層	山茶碗 B		5.0		底部外面回転糸切り、 板目、底部内面静止指 ナデ調整、他は回転ナ デ	密、径2mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面に墨書き 「十」	274	128		
720	包含層	山茶碗 B		3.0		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「〇」	366	128		
721	包含層	山茶碗 B	(12.8)	5.6	4.2	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部外面に墨書き 「大カ」	247	128		
722	包含層	山茶碗 B		5.8		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密	不良	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面に墨書き 「中」	312	128		
723	包含層	山茶碗 B		6.7		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を多く含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面に墨書き 「十日」	192	128		
724	包含層	山茶碗 B		6.5		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	普通	灰白色 (5Y7/1)	底部外面に墨書き 「口女カ」	281	128		
725	包含層	山茶碗 B		4.6		底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	底部外面に墨書き 「女」	273	128	99	
726	包含層	山茶碗 B	(17.0)	9.2	5.1	底部外面不定方向のへ タ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)		350	129		
727	包含層	山茶碗 B	(11.4)	3.0	3.5	底部外面回転糸切り、 底部内面静止指ナデ調 整、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面に墨書き 「*」	310	129		
728	包含層	古瀬戸 鉛輪小 皿		10.7	4.9	2.6	底部外面回転糸切り、 板目、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR8/1)	口縁部内外面に 灰釉、底部外面に 墨書き「女」	57	129	98
729	包含層	古瀬戸 鉛輪小 皿	(11.0)	6.6	2.8	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわざかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	口縁部内外面に 灰釉	67	129		
730	包含層	古瀬戸 鉛輪小 皿	(9.1)	5.0	2.0	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径2mm以下の 長石をわざかに含む	良好	灰白色 (10YR7/2)	口縁部内外面に 灰釉	73	129		
731	包含層	古瀬戸 鉛輪小 皿	(11.3)	5.6	2.1	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石をわざかに含 む	良好	灰白色 (2.5YR8/1)	口縁部内外面に 灰釉	64	129		
732	包含層	古瀬戸 鉛皿	(14.3)	6.2	3.3	底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石をわざかに含 む	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	口縁部内外面に 灰釉	58	129		

表44 土器・石器觀察表(34)

実測 番号	遺構・ 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	整形・調整	胎 土	焼成	色 調	備 考	整理 番号	補圖 番号	国際 番号
733	包含層 古瀬戸 天目系 (14.6)					体部外面下方回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	体部外面下方を除き鉄輪	75	129	
734	包含層 古瀬戸 平底 (15.4)					体部外面下方回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	体部外面下方を除き灰釉	113	129	
735	包含層 古瀬戸 小天目 (2.8)					底部外面周辺回転ヘラ削り、他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	内面に灰釉	61	129	
736	包含層 古瀬戸 山供 (4.4)					底部外面回転糸切り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	台部外面に鉄輪	69	129	
737	包含層 古瀬戸 瓦頭小 天 (3.6)					全面回転ナデ	密、径1mm以下の長石を含む	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部内面を除き灰釉	60	129	
738	包含層 古瀬戸 繩耳 (32.8)					全面回転ナデ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	全面に鉄輪、注口部がわずかに残る	76	129	
739	包含層 古瀬戸 繩耳 (10.0)					底部外面回転糸切り、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石、石英を多く含む	良好	浅黄褐色 (10YR8/3)	目立單位6条、原体編1.8cm	71	129	
740	包含層 古瀬戸 折縁深 腹 (14.6)					底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	浅黄褐色 (10YR8/2)	内面に灰釉、底部外面に墨書	65	129	
741	包含層 古瀬戸 折縁深 (26.4)					体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	全面に灰釉	63	129	
742	包含層 古瀬戸 折縁深 (29.7)					体部内面・体部外面上 方回転ヘラ削り、体部外面 下方回転ヘラ削り	密、径4mm以下の長石を幾つか含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	体部内面・体部 上方灰釉	56	129	
743	包含層 大窯天 目茶碗 (12.0)					体部外面下方回転ヘラ削 り、他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	体部外面下方を除き鉄輪	78	129	
744	包含層 大窯 反脛 (15.2)		9.0	3.7		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長石を含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	全面に灰釉	90	129	
745	包含層 大窯 繩耳 (31.7)					体部内外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石をわずかに含む	良好	浅黄褐色 (10YR8/3)	全面に鉄輪	91	129	
746	包含層 大窯 丸皿 (10.6)		5.4	2.6		体部外面下方一底部外 面回転ヘラ削り、他は 回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石を幾つか含む	良好	灰白色 (10YR8/2)	口縁部外面に 鉄輪、底部外面に 花文	93	129	
747	包含層 大窯 丸皿 (10.4)		5.8	2.2		体部外面下方一底部外 面回転ヘラ削り、他は 回転ナデ	やや粗、径2mm以下の 長石をわずかに含む	普通	灰白色 (10YR8/2)	底部内面に花文、 赤色有機物付着、口縁部外 面に鉄輪	94	129	
748	包含層 大窯 丸皿			5.0		底部外面回転糸切り、 他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の 長石、石英を含む	普通	灰白色 (5Y8/1)	底部内面鉄輪、 花文	95	129	
749	包含層 大窯 丸皿			6.4		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の石 英をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部内面花文、 全面上灰、底部内面に 輪ト輪突	89	130	
750	包含層 中国磁 青磁 里			4.4		全面回転ヘラ削り	密、径2mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N8/0)	底部内面にへら による片側の 花文と縦による ジグザグ文様、 底部外面周辺を 除き施釉、同安 窑系	105	130	
751	包含層 中国磁 青磁 里			4.8		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	底部外面を除き 施釉、体部外面に 錫蓮弁文	97	130	
752	包含層 中国磁 青磁 里			5.8		底部内面周縁を打ち き加工円盤に転用	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N8/0)	底部内面中央に スタンプ押印、 底部外面を除き 施釉、鳳凰窯系	96	130	98
753	包含層 中国磁 青磁 里			16.0		体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (10Y8/1)	全面施釉、体部 外面に蓮弁文	108	130	
754	包含層 中国磁 青磁 里					体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N8/0)	全面施釉、体部 外面に錫蓮弁文	107	130	
755	包含層 中国磁 青磁 里					全面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	全面施釉、体部 外面に錫蓮弁文	110	130	
756	包含層 中国磁 青磁 里					体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N7/0)	全面施釉、体部 外面に錫蓮弁文	106	130	
757	包含層 中国磁 青白 磁付					底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N8/0)	全面施釉、底部 内面に草花文と 二重圓輪	112	130	
758	包含層 中国磁 青白 磁?					体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を含む	良好	灰白色 (N8/0)	全面施釉	111	130	

表45 土器・石器観察表(35)

番号	直高・ 出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	整形・調整	胎土	焼成	色調	備考	整理 番号	補圖 番号	回数 各号	
759	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐	(15.2)			全面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	全面に施釉	101	130		
760	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐	(16.5)			体部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長 石を幾つか含む	良好	灰白色 (7.5Y8/1)	全面に施釉	100	130		
761	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐		6.2		底部部外面回転ヘラ削 り、他は回転ナデ	密、径3mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (2.5Y8/1)	底部内面施釉、 体部内面下方に1 条の沈線	98	130		
762	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐		6.3		底部部外面回転ヘラ削 り、他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (7.5Y7/1)	内面に施釉、体 部内面下方に1 条の沈線	102	130		
763	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐		6.0		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10Y8/1)	全面施釉、体部 内面にわずかに 赤色有機物付着	99	130		
764	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐		3.4		体部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部外面回転を 除き施釉、底部 外面上に墨書き 「己文」	103	130	99	
765	包含層 器白磁 罐	中国磁 器白磁 罐		4.0		底部外面回転ヘラ削り、 他は回転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	底部外面を除き 施釉、内面に草 花紋	104	130		
766	包含層 器青白 磁合子	中国磁 器青白 磁合子	(8.7)			体部内外面横ナデ	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10Y8/1)	体部外面丸ノミ 状工具による 擦文、口縁端部施 の拭い取り	109	130	98	
767	包含層 常滑 甕					口縁部～頸部内外面回 転ナデ	密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	にじい 赤褐色 (2.5YR5/3)		85	130		
768	包含層 常滑 甕					口縁部～頸部内外面回 転ナデ	密、径2mm以下の長 石を幾つか含む	普通	灰白色 (10Y7/1)	外面および口縁 部内面に自然釉 降灰	86	130		
769	包含層 常滑 甕						密、径2mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10Y7/1)		84	130		
770	包含層 常滑 甕					口縁部～頸部内外面回 転ナデ	密、径2mm以下の長 石、石英を幾つか含 む	良好	灰黄色 (2.5Y6/1)		87	130		
771	包含層 中世土 師窯伊 賀器	中世土 師窯伊 賀器					粗、径3mm以下の長 石を多く含む	良好	淡赤橙色 (2.5YR7/3)		931	130		
772	包含層 中世土 師窯内 耳皿	中世土 師窯内 耳皿				体部内外面調整不明	密、径3mm以下の長 石を多く含む	良好	淡黄橙色 (7.5Y8/3)		932	130		
773	包含層 瓦質土 器火鉢	瓦質土 器火鉢				体部内外面調整不明	やや粗、径2mm以下の 長石、石英、雲母 をわずかに含む	普通	灰色 (N5/1)		933	130		
774	古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.5cm、短軸4.5cm	密、径1mm以下の長 石をわずかに含む	良好	灰白色 (10YR8/2)	天目茶碗を転用	82	130		
775	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.8cm、短軸4.3cm	やや粗、径1mm以下の 長石をわずかに含 む	良好	灰白色 (10YR8/1)	天目茶碗を転用、 表面に6つの凹 みあり	83	130		
776	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.9cm、短軸4.8cm	やや粗	良好	灰白色 (10YR8/1)	天目茶碗を転用	81	130		
777	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.6cm、短軸4.6cm	やや粗	良好	灰白色 (7.5YR8/2)	天目茶碗を転用	80	130		
778	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.7cm、短軸4.6cm	やや粗、径1mm以下の 長石をわずかに含 む	良好	灰白色 (7.5Y8/2)	天目茶碗を転用	137	130		
779	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸4.9cm、短軸4.9cm	密	良好	灰白色 (7.5YR8/1)	天目茶碗を転用	79	130		
780	包含層 古漁戸 加工円 盤	古漁戸 加工円 盤				長軸5.4cm、短軸5.4cm	やや粗、径2mm以下の 長石をわずかに含 む	良好	灰白色 (5Y8/1)	平腕を転用	70	130		
781	包含層 石器 コア	石器 コア	1.0	2.3	1.2	薄手の剥片を素材とし、 その両面に細かな網眼 を施す。					石材：土岐石 重量2.0g	942	130	
782	包含層 石器 石錐	石器 石錐	2.3	1.7	0.3						石材：チャート 重量0.7g	948	130	

## 第2節 木 製 品

今回の調査では古墳時代の溝を中心に木製品が多数出土し、調査時点で人為的な加工痕が認められる木器をすべて取り上げ、洗浄後に木製品と認識した総点数は1324点であった。

以下、木製品の分類、出土状況、分類項目毎の説明を行い、本節末に421点の樹種同定結果を樹種別と用途別に分けて掲載した(表47・48)。

### 1. 分類

木製品の分類にあたって、奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』と財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『瀬名遺跡』Ⅲを主に参考にし、以下の項目を設定した。

1、農工具	鋤・鋤・田下駄・大足・豎杵・作業台・斧の柄
2、雑具	箱物・机
3、容器	盤・槽
4、遊戯具	琴・琴柱
5、服飾具	衣笠?
6、祭祀具	ミニチュア横柵
7、紡織機	織機
8、漁撈具	櫂
9、建築材	柱・垂木・柱根・礎板・梯子・扉
10、土木材	杭
11、用途不明木製品	有頭棒状材・有孔木製品・棒状木製品・板状木製品など

### 2. 出土状況

遺構出土の主な木製品の数量は表46のとおりである。遺構別にみるとSD4・7・15は比較的出土量が少ないのでに対し、SD10・12・14はやや多く、両者の差は集落域からの距離の差や製品使用後にしがらみ状遺構の構築材として転用されたか否かなどが起因していると想定される。また、SD10上層では農具：建築材が4：9であるのに対し、SD10下層では9：3となっており、両者の比率が逆転している。SD10下層の時期はSD14内においてしがらみ状遺構を改築、改修している段階に対応し、SD14の農具：建築材が8：13であることから考えても、SD10に建築材を廃棄せずにしがらみ状遺構の構築材として再利用していたと想定される。同様に、容器の出土数が最も多いのはSD14であり、容器が割れて樹皮で補修し再使用した後もなお、しがらみ状遺構の構築材として利用していたことがわかる。

次に主な木製品の出土位置について述べたい。図131は農工具、建築材、雑具・容器・遊戯具・服飾具・祭祀具・紡織機・漁撈具、その他の4項目毎の散布図であり(E区下層は転用している可能性が高いため削愛した)、全体的には器種毎に偏る傾向はみられず一様に散在しているといえるが、SD12の西側にドットが集中していることは興味深い。

次に個々の出土状況について溝掘削中に気付いた点を列挙したい。まず、鋤がまとめて出土する

表46 造構別木製品集計表

用途	器種	SD 4	SD 7	SD10 上層	SD10 下層	SD12 上層	SD12 下層	SD14	SD15	合計
農工具	膝柄広鋸	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	膝柄三叉鋸	0	0	0	3	0	1	2	0	6
	膝柄鋸	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	曲柄装着鋸(詳細不明)	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	ナスピ型膝柄広鋸	0	1	1	0	0	0	0	0	2
	ナスピ型膝柄三叉鋸	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	ナスピ型膝柄鋸	0	0	2	0	0	0	0	0	2
	柄孔横鋸	0	1	0	0	0	1	0	0	2
	洗除	0	1	0	0	0	1	0	0	2
	直柄	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	鋤	0	0	0	0	0	0	2	0	2
	柄孔多本鋤?	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	柄孔広鋸未製品	0	0	0	1	0	0	1	0	2
	斧膝柄	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	豎杵	0	0	0	3	0	0	0	0	3
	作業台	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	田下駄	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	大足	1	1	1	0	0	1	0	0	4
農工具合計		1	6	4	9	0	13	8	0	41
雑具	箱物	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	机	0	0	1	0	0	0	0	0	1
雑具合計		0	0	2	0	0	0	0	0	2
容器	槽	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	盤	1	0	0	1	0	0	4	1	7
容器合計		1	0	0	1	0	0	5	1	8
遊戯具	琴柱(未製品)	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	琴?	0	0	0	0	0	0	1	0	1
遊戯具合計		0	0	1	0	0	0	1	0	2
服飾具	衣笠?	0	0	0	1	0	0	0	0	1
祭祀具	ミニチュア横槌	0	0	1	0	0	0	0	0	1
紡織機	中筒	0	0	1	0	0	0	0	0	1
漁撈具	櫂	0	0	1	0	0	1	0	0	2
服飾具他合計		0	0	3	1	0	1	0	0	5
建築材	垂木	0	0	1	0	0	2	5	1	9
	柱	0	1	1	1	0	1	3	1	8
	板材	0	0	6	1	1	3	2	2	15
	梯子	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	扉	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	有孔板材	0	2	1	0	0	1	2	1	7
建築材合計		0	3	9	3	1	7	13	5	41
用途不明	付札状木製品	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	有孔木製品	0	0	1	2	1	1	1	0	6
	有頭棒状材	0	1	1	1	0	1	0	2	6
用途不明合計		0	1	2	3	1	3	1	2	13
総計		2	10	21	17	2	24	28	8	112

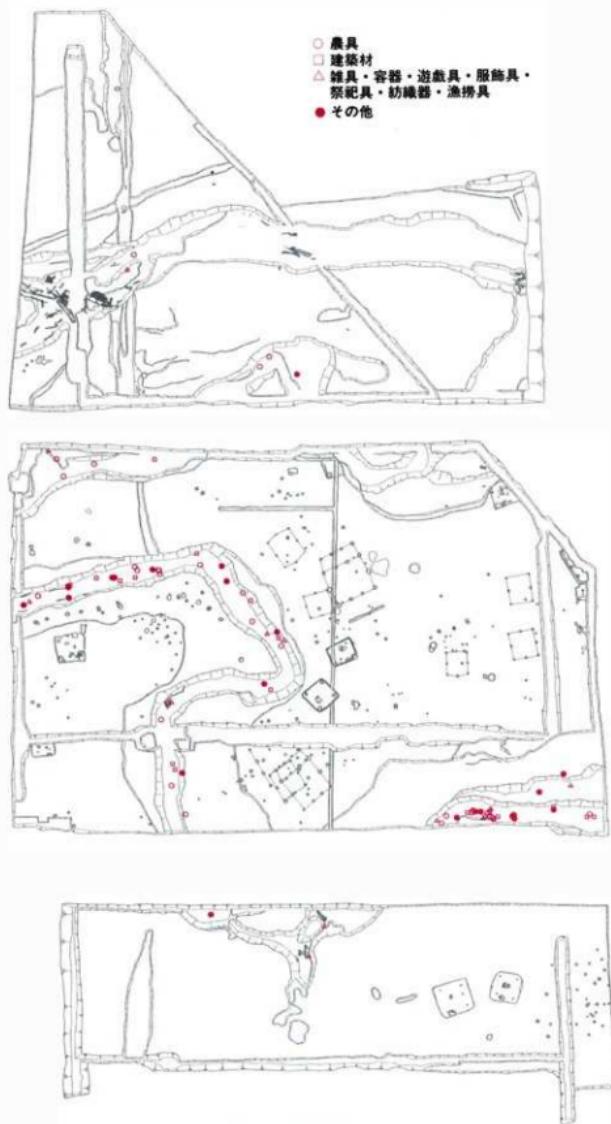


図131 主要木製品分布図(S=1/600)

例を4例確認した。SD7ではナスピ型膝柄広鉄(1)とナスピ型膝柄又鉄(3)が重なって出土(図版27)、SD10-SU12ではナスピ型膝柄広鉄(2)とナスピ型膝柄鉄(6)が約70cm離れて出土、SD12では膝柄鉄4個体(10・12・16・18)が並んで出土(図版39)、SD14ではSW6前面の縦木の上から膝柄広鉄(7)と膝柄三叉鉄(9)が重なって出土している。また鉄ではないが、田下駄の足板も3枚まとめてSD12から出土している。一方建築材はまとめて出土するというよりは単体で検出される例(SD7の柱材(60)やSD10の板材(66)など)が多かった。

### 3、分類項目毎の説明

#### 1：農工具

##### A、鉄(1～25)

鉄は25点出土し、ナスピ型膝柄鉄、膝柄鉄、柄孔横鉄などが出土した。

ナスピ型膝柄鉄(1～6) 広鉄2点(1・2)、二又鉄2点(3・4)、不明2点(5・6)がある。広鉄はいずれも軸頭部が欠落し扁平な作りである。また、笠部から刃部の最大幅まで直線的に開き、緩やかな曲線を描きながら刃縁部に至る。刃部の最大幅は1がほぼ中央、2が中央よりやや上に位置する。なお、1は刃縁部が炭化しており、2は刃縁部両側面が欠落しているのか否かの判断がし難いが、欠落していないのであれば鉄製U字型刃先が装着されていた可能性もある。二又鉄のうち3は遺存状態が比較的良いが、4は欠落、腐食が激しい。3は軸頭部に楕円形状の隆起をもち、4と比べて笠部が発達している。5・6は軸頭部が斜めに削られ隆起をもたない形態である。5は軸部側面に細かい加工痕が残り、笠部下方は水平に近い角度で削り込まれている。なお、5は土師器甕(268)の口縁部を塞ぐようにして出土した。

膝柄鉄(7～16) 広鉄2点(7・8)、三又鉄6点(9・11～15)、不明2点(10・16)がある。広鉄のうち7は軸頭部が斜めに削り出され軸部と刃部の境が不明瞭である。厚みは軸部から刃部にかけて除々に薄くなっている、刃部上方は8と同様に半楕円形状に刃部を作り出していると推定される。8は刃部中央から下方まで幅がほぼ均一しており、刃部右側が使用によるためか摩滅している。上方は厚みがあり、刃部を半楕円形状に作り出している。また、軸部は欠落しており、後面下方に粗い加工痕が残る。三又鉄の軸部と軸頭部の形態は多様であり、軸部は上方から下方までほぼ均一な厚さのもの(9・13～15)と、後面中程から上方にかけて斜めに大きく削られるもの(11・12)の2形態があり、軸頭部は切り欠き状の抉りをもつもの(9)、長方形状の隆起をもつもの(12)、段を有し先細りなもの(13)、斜めに削り出されるもの(15)などがある。なお、15の後面には緊縛痕と推定される切り欠きがみられ、その角度は上方に比べ下方の方が緩やかである。肩部は広い面をもつもの(9)と狭い面をもつもの(13)があり、さらに肩部後面において段があるものの(11・12・14・15)とないもの(9・13)に分けられる。刃部の様相は定かではないが、中央の刃は11が比較的扁平であるのに対し、14・15は丸みを帯びている。また、左右両側面の刃は12の例をみると肩部から刃部中央の最大幅まで内反り気味に広がり、刃縁部まで除々に幅を狭くし先端を尖らせる形態である。不明2点のうち16は軸部が上方から下方までほぼ均一の厚みを有し、軸頭部は段を有し先細りとなる形態である。

その他(17・18) 17は又鉄の刃部片、18は軸頭部片である。18は頭部に切り欠き状の抉りをもつ形

態であり、前面は平坦である。

**柄孔横鍔と泥除(19~23)** 横鍔2点(20・23)、泥除2点(19・21)、直柄1点(22)があり、21~23は図136のaのように装着された状態で出土した。

19は前後面および天地の区別が困難であり、以下の記載は図面の向きに従っている。上方は欠落しており、欠落面に沿って小孔が3つみられる。後面には刃幅3~5cmの手斧痕が横位にみられるが、前面は腐食が激しく定かではない。両側面は後面から斜めに削られ表側はほぼ垂直な面を有し、下端部は後面から斜めに丁寧に削られ、前面は腐食のため丸みを帯びている。下端部の調整は21の上端部の様相と近似しているため、図面の天地が逆になる可能性も考えられる。なお、中央には幅2.2cmの方形孔が穿たれ、着柄角度は腐食のため定かではない。

20も前後面の腐食が激しく加工痕が確認できない。左側面はほぼ垂直な面をもち、刀縁部は前後面から斜めに削られ薄くなっているが、端部は腐食によるため丸みを帯びている。また、泥除装着装置は現状ではみられず、その剥離痕も確認できない。なお、中央には幅2.4cmの方形孔が穿たれ、着柄角度は腐食のため定かではないがおよそ54°と推定される。

21は下端部が欠落しており、上方は方形を呈する。両側面は前面から大きく斜めに削られ、後面側は垂直に近い面を有する。上端部も後面からの加工はみられず前面から大きく斜めに削られるのみであり、端部は丸みを帯びている。中央には長さ4.0cm、幅2.1~2.3cmの方形孔が穿たれており、前面上方は2mm程隆起している。この隆起は、出土時において柄がこの隆起部のみに接していたことから、後世に土圧により歪んだものと思われる。なお、着柄角度は50°である。

22は頭部が欠落している。柄全体は緩やかに彎曲しており、頭部付近は断面方形、中央から基部にかけては断面橢円形を呈する。基部は断面台形状に隆起しており、その横断面は平行四辺形に近い。後面において頭部先端より約7.5cm上でわずかな段が認められ、左右両側面でも約50°の角度で段が認められる。前面では段はみられないものの、緩やかな稜を作り出している。この部位の段の角度と泥除の装着角度が近似することから、この段によって泥除が基部側に動いてこないように固定されていたと思われる。また、後面において頭部先端より19.6cm上に長さ2.0cmの断面三角形を呈する切り欠きを有し、その角度は頭部側が基部側より急である。なお、頭部先端と先端より4.0cm上にわずかな凹みを有するが、これは21の着柄部の隆起と同様に、出土状況から判断して後世における土圧の影響と思われる。

23は刀縁部と刃部右側がわずかに欠落しているがほぼ完存している。上方は半球形状に丁寧に削ることで泥除装着装置を作りだし、その内側の平坦面と刃部との角度は79°である。両側面はほぼ垂直に近い面を有し、前後面よりわずかに斜めに削り出されている。刃部は前後面からの削り込みで尖り気味に成形され、使用によるためか端部は丸みを帯びている。また、端部には右下がりの細かい擦痕が顕著に認められ、刀縁部自体は使用によるためか左側が顕著に摩滅している。また、前後面とも刃幅2~4cmの手斧痕が横位にみられるが、後面着柄部付近は緩やかに凹んでいる。中央には長さ3.0~3.2cm、幅1.9~2.1cmの方形孔が穿たれており、裏面上方には幅6mm、長さ16mmの細長い凹みが確認できる(図版103下)。これは、刃部と柄を固定するために楔が打ち込まれていた痕跡かもしれない。なお、着柄角度は68°である。

なお、21~23を組み合わせた模式図が図136のbであり、aは出土時の組み合わせを示している

(bを模式図としたのは、鍔が長期間土中に埋没していたため水分の浸透により材が膨張し、刀部の柄孔に柄が正位に挿入できず、刀部、泥除、柄のそれぞれの部位を図面上で組み合わせたためである)。

以下、図136 bの組み合せ状態について記載する。

刃部の固定方法は①柄孔と柄、②泥除装着装置と泥除、③柄孔上方の楔といった3点が想定される。①について、現在では水分の浸透によるためか、材が膨張し柄が柄孔に正位に挿入できない。しかし、柄に刃部を固定した痕跡がみられないことから、柄孔と柄のみでは刀部が柄頭部より約7cm上方まで抜けてしまい完全には固定できなかったと想定される。②について、刀部と泥除が接する面は刀部が泥除装着装置の平坦面、泥除が前面より斜めに削られた平坦面であり、最深部には隙間が空いている。③について、楔の痕跡と想定されるものは柄孔には確認できるが柄頭部は剥離のためか確認できない。

次に泥除の固定方法は①柄孔と柄、②泥除と泥除装着装置、③柄の切り欠きから紐による緊縛といった3点が想定される。①について、泥除は柄頭部先端から7.5cm上にみられる段によって角度が固定される。③について、21の泥除の下方は欠落しているので断定はできないが、泥除の刃部下方には穿孔を有する例が多く、そこに紐ないしは棒の痕跡がみられることがある(阿刀1998)。今回検出された泥除の刃部下方に穿孔があったのか否かはわからないが、直柄頭部先端より19.6cm上の切り欠きは、泥除と柄を紐で固定する際に紐が滑らないために施された可能性が高いと思われ、基部側より頭部側の切り欠きが鋭角に削り込まれていることも、紐による引力の方向を考えていると思われる。なお、切り欠きは柄後面においてのみ確認でき、前面は腐食のためその存在の有無は判断できない。泥除は①と③の固定により上下方向のズレがほぼ解消され、②によって刃部の位置を確定させる。刃部は②の固定により位置が決まり、①と③の固定で上下方向のズレを解消していたと推定できる。

**直柄鍔未製品(24・25)** いずれも隆起をもち、24は紡錘形の下端が長くのびる形態で、25は隆起の長辺が平行している。24は上端部に長さ6.7cmの突起が残り、下端部に幅16.8cm、厚さ4.2cmの断面逆台形の肥厚部があることから、2連以上連結していたと想定される。

#### B、鍔(26~28)

**一本鍔(26・27)** 26は後面中央に稜を有し厚手であるが、27はほぼ扁平で薄手である。27は両側面が直線的で刃縁部に近づくにつれ幅が狭くなり、刃縁部は丸みを帯びている。肩部はわずかしか残存していないが、現状では柄から左右にほぼ水平にのびている。なお、柄は幅1.4cm、厚さ1.1cmと非常に薄いため、組み合わせ鍔の可能性もある。

**又鍔?(28)** 扁平なつくりであるために鍔としたが鍔の可能性もある。前面に幅1.0cm程度の溝を有するがその用途は不明であり、刃先は隅丸方形を呈し細く、その肩部はほぼ水平である。

#### C、田下駄(29~31)

いずれも平面形が長方形を呈し、上下に緊縛孔が穿たれていることから輪カンジキ型田下駄と想定される。側面は直線的で中央付近にほぼ正円の緒孔が3箇所穿たれており、表裏面に幅2~4cmの刃痕が継続にみられる。緊縛孔はいずれも長さ2cm程度の楕円形を呈し、29が上下1孔づつ、30が上部2孔、下部1孔、31が上部1孔、下部2孔であり統一がない。また、緊縛孔の心々間の距離は29が47.5cm、30が46.0cm、31が39.0cmを測る。29の両側面は垂直であるが、30と31の右側面は斜

々に薄くなっている。また、29と30の上下端部はほぼ水平であるが、31の下端部のみ凹凸がみられる。なお、いずれも輪や横木の圧痕は確認できなかった。

#### D、堅杵(32~34)

いずれも抜き部が円柱状をなし、屈曲して握部に至る形態である。32は完存しており、長さは80.0cmを測る。先端部の形態は村上氏の分類(村上1998)に従うと上方が平たく、下方が丸いタイプとなり、両端とも摩滅している。抜き部は上方が下方より太くて長く、握部との境も上方が下方より稜線の認識がはっきりできる。なお、握部の長さは28.2cm、その直径は2.5cmを測る。33もほぼ完存しており、全長98.3cm、握部の長さ31.5cm、抜き部は上下の長さが違い36.5cmと30.4cmを測る。先端部の形態は両端とも平たい形態となり、握部と抜き部の境には粗い加工痕が残る。34は抜き部先端が尖る形態であり、抜き部の断面形態は隅丸方形に近い円形を呈する。また、32や33に比べて抜き部と握部の境が不明瞭である。

#### E、作業台(35)

完存している。断面梢円形を呈する把手部は長さ23.7cmを測り、先端の両側面には斜め方向に浅い溝状の凹みが確認できる。台部は断面長方形を呈し、長さ31.0cm、幅13.1cm、厚さ9.5cmを測る。3つの側面には中央から先端寄りに梢円形状の浅い凹みが1ヶ所ずつみられるが、1つの側面には上下に2つの梢円形状の凹みがみられ、先端付近には切り刻んだ痕跡と想定される細くて長い溝が数条確認できる。台部先端は側面に対しほぼ直角な平坦面を有し、凹みや刻みなどの痕跡はみられない。

#### F、大足(37~39・54)

37~39はいずれも大足の縱枠と想定される。37はほぼ完存しており、断面形態は蒲鉾状を呈する。上端部は丸みを帯びているが、下端部は斜めに面を有し、わずかに炭化している。材の中軸に沿って方形のほぞ穴が10ヶ所に穿たれ、ほぞ穴の心々間の距離は7.5~8.0cmを測る。また、上端から数えて3~6番目のほぞ穴には横木が残存しているが他は抜けてしまっている。残存している横木は断面長方形を呈し、長さ0.8~1.3cm、幅0.5~0.8cmを測る。そして、ほぞ穴内にはいずれも横木の上部に接して幅0.3~0.5cmの断面長方形を呈する薄い材が確認でき、楔として機能していたものと推測される。また、上下端部から1番目と2番目のほぞ穴の間には手綱の緊縛痕と想定される浅い凹みがほぼ全周している。なお、右側面が若干炭化している。38は上下端部が欠落しており、上端部と上面が炭化している。断面形態は蒲鉾状を呈し、材の中軸に沿って方形のほぞ穴が5ヶ所で確認でき、その距離は心々間で7.0~7.5cmを測る。下端のほぞ穴は貫通しているが、下端から数えて2~4番目のほぞ穴は未貫通であり、深さ2cm前後を測る。なお、上端のほぞ穴は未完通か否かの判断ができない。また、下面のほぞ穴間に緊縛痕と想定される溝状の浅い凹みがあり、下端から数えて1番目と2番目のほぞ穴間の上面にもわずかに凹みが確認できる。そのため、大足とは違う機能を考えた方がよいのかもしれない。39は上面が前面炭化し、下面が剥落しており、現状では断面三角形を呈する。ほぞ穴は38よりやや大きく、その距離は心々間で11.5cmを測る。

54は大足の足板装着部と想定される。両端部は細長く、中央部は台形状に突出しており、中央上

端部は尖り気味に成形されるが下端部は平坦である。そして、中央付近に長さ3.6cm、幅2.7cmの方形孔が穿たれており、表面がわずかに炭化している。

#### G、斧(57)

斧台先端と握り部が欠落している。斧台と握り部はいずれも断面円形を呈し、細かく丁寧な加工が施されている。斧台基部は若干すぼまっており、その端部は平坦面を有する。斧台の形状から袋状鉄斧と想定される。

#### 2：雑具

##### A、箱物(36)

ほぞ結合の箱である。側板はいずれも長方形を呈していたと想定され、長辺の板材には方形のほぞ穴が穿たれている。右側面の板材のほぞ穴は長さ約2cm、幅1cmの長方形を呈するが、左側面の板材のほぞ穴は長さ約1cmの正方形を呈し、両側面ともほぞ穴間の距離は32.5cmを測る。短辺の板材のうち下方のものはほぞを含む上半が欠落しているが、上方のものは接地面から約4cm上にほぞが認められる。なお、側板の大半は上方が欠落しているためその形態は定かではないが、下方はいずれも平坦面を削り出している。

##### B、机(47)

右側面と下方が欠落しており、表面が平坦で48のように口縁部がないため机とした。裏面上方は幅約7cmの間が斜めに削られ、上端部は表面に対して垂直な面を有するが、左側面は除々に厚みを減じ、端部は丸みを帯びている。裏面上下部には脚を組み込むための溝が台部の短辺に平行して削り込まれており、その断面形態は逆台形に近い。溝の左端は除々に浅くなり、台部の左側面まで突き抜けていない。なお、脚間は推定で40.0cmを測り、下方の欠落部分が上方と同じ構造であるならば、全体の長さは約66cmとなる。

#### 3：容器

本報告書では口縁部の立ち上がりが低いものを盤、高いものを槽として報告する。

##### A、盤(40～45、48)

いずれも剣物であり、40～45が一本から作り出され、48は台部と脚部が組み合う構造である。

40は口縁部の立ち上がりが約1cmと低く、端部の平坦面は上下部が幅約3～4cm、左側面が幅約1cmを測る。表面中央付近には穴が開いており、その周囲に斜め方向の刃痕が確認できることから、廃棄後に別の用材として転用した可能性もある。裏面には台部の長辺に平行する長方形の脚の痕跡が残り、長さ13.3cm、幅4.8cm、脚の心々間は37.5cmを測る。口縁部の立ち上がりは、表面は緩やかで、裏面は明瞭な稜を有する。

41は口縁部の立ち上がりが約2.8cmであり、端部の平坦面は上下部が幅約3～4cm、左側面が幅約1cmを測る。表面中央付近は梢円形状に大きく炭化している。裏面には台部の長辺に平行する長方形

の脚の痕跡が残り、長さ13.3cm、幅3.4~4.2cm、脚の心々間は42.0cm前後を測る。口縁部の立ち上がりは、表面の側面は緩やかであるが、表面上下部と裏面は明瞭な稜を有する。右側面の欠落部に沿って表面から5つの穿孔が穿たれており、穿孔間の距離は上から15.0cm、14.0cm、12.5cm、10.3cmを測る。そのうち、上から2番目と4番目の穿孔は貫通しているが、上から1・3・5番目の穿孔は未貫通であり、上から4番目の穿孔には樹皮が、上から5番目の穿孔には棒状材と思われる材が残存している。さらに上から1・3・5番目の穿孔が位置する箇所の欠落面には長さ1.5~2.0cm、幅0.4cm、奥行き1.4cm前後の長方形のほぞ穴が水平に穿たれており、上から1番目と5番目のほぞ穴には板材が残存している。おそらく、板材には小穿孔が穿たれ、その穴に表面から挿入される棒状材が組み合う構造と考えられ、このような補修方法は弥生時代の高杯にみられる雇いほぞ結合(奈良国立文化財研究所1993、P 163)に類似していると想定される。なお、40と41は台の長さと残存幅、脚の長さが近似しており、脚の心々間の距離のみが違う。そのため、別個体であるが両者は同一規格で作られた盤と想定される。

42は現状では口縁部の立ち上がりが約1cmと低く、端部の平坦面は上部が幅約3.0~3.5cm、左側面が幅約0.8cmを測る。さらに口縁部の上部には、裏面の斜面と表面の平坦面との間に幅0.7cm~1.5cm程度の垂直な面をもつ。裏面は脚部より下方が剥離しており、脚部付近にわずかに加工痕が確認できる。脚は台部の長辺に平行し、平面形態は長方形で長さ18.5~19.0cm、幅5.5cm、高さ11.7cmを測る。横方向の断面形態は台形状を呈し、外側が台に対してほぼ垂直、内側は直線的に内傾し、接地面は平坦である。縦方向の断面形態は階段状を呈し、台より7.8cm下で長さ5.5cmの平坦面を有し、接地面は長さ6.0cm、幅2.0cmを測る。右側面の欠落部上方には長さ1.5cmの楕円形を呈する穿孔があり、樹皮を4重に巻いて補修している。なお、口縁部の立ち上がりは表面は緩やかで、裏面は明瞭な稜を有する。

43は口縁部の立ち上がりが約4.9cmと高く、端部の平坦面は上下部が幅3.0~3.5cm、左側面が幅0.8~1.0cmを測り、側面より上下部の方が器壁が厚い。口縁部と台部の境は表面上下部と裏面は屈折しているが、左側面は丸みを帯びている。台部表面は側面から中央に向かうにつれて緩やかに湾曲しており、中央付近が最も深くなる形態で、表面下部と裏面下部には幅0.8cm前後の細長い加工痕が頗著にみられ、表裏面を平滑に仕上げている。裏面には平面形態が長方形を呈する脚が、台部の長辺に平行して2つ並んで作り出されており、上方の脚は長さ13.6cm、幅5.0cm、高さ5.8~6.3cm、下方の脚は長さ12.8cm、幅4.8cm、高さ6.0~6.2cmを測る。脚の横方向の断面形態はいずれも台形状を呈し、外側が台に対してほぼ垂直、内側は直線的に内傾し、接地面は平坦である。縦方向の断面形態も台形状を呈し、外側が台に対してほぼ垂直、内側は直線的に内傾し、接地面は長さ約9.0cm、幅約2.5cmを測る。なお、脚の心々間の距離は26.5cmを測り、脚間には切り刻んだ痕跡と想定される細くて長い線が数条確認できる。口縁部下方の平坦面には直径0.5cmの補修孔が1.4cm間隔で穿たれており、樹皮が残存している。

44は台部が大きく歪んでいるが、脚の形態がわかる資料である。口縁端部の平坦面は幅3.5cmを測り、台部との境は表面は緩やかで裏面は屈折している。材が痩せているため脚の中程には材の芯が帶状に突出しているが、現状では脚は平面形態が長方形で長さ15.0cm、幅2.0cm、高さ10.5cmを測り、台部の長辺に平行している。脚の横方向の断面形態は42や43とは違い長方形を呈し、縦方向の断面形態は台形状で、外側が台に対してほぼ垂直、内側は内傾し中程でわずかに屈折している。接地面は

現状ではわずかに傾斜しており、長さ6.2cm、幅1.7cmを測る。

45は口縁部の立ち上がりが約2.5cmであり、端部の平坦面は幅5.0~5.2cmと広く、表面の台部との境は緩やかに傾斜している。また、裏面の斜面と表面の平坦面との間に幅1.3cm程度の垂直な面をもつ。下端部を中心に炭化し側面は欠落しているため、全体の形状は不明である。

48は口縁部の立ち上がりが約2.4cmであり、端部の平坦面は幅約5.0cmを測る。口縁部裏面は幅約7.6cmの間が斜めに削られており、他の盤と比べて距離が長く鈍角に成形されている。口縁部と台部の境は表面は不明瞭で、裏面は明確な稜を有する。裏面上下部には脚を組み込むための溝が台部の短辺に平行して削り込まれており、その断面形態は逆台形を呈する。溝の左端は口縁部を作り出すために斜めに削られている面まで突き抜けており、47とは違う構造である。なお、溝の幅は約2.2cmで、脚間は約46cmを測る。

#### B、槽(46)

丸木芯持ち材を半割し内部を割り抜いて成形された細長い槽であり、口縁部の長辺は上部から中央にかけて緩やかに広がっている。口縁端部は平坦面をもち、上部が幅約5.0cm、左側面が幅0.8~1.8cmを測る。また、上部の器壁は厚く、上部平坦面中央付近は半楕円形状に浅く抉られている。底面は平坦で、体部は側面が丸みを帯びて立ち上がるのに対し、上部は直線的に近い。

#### 4：遊戯具

##### A、琴柱(50)

3単位が連結しており、さらに両端が欠落しているので、本来は5単位以上が連結していたと想定される。3単位とも断面・側面ともに三角形状を呈し、一番左側の上端部のみがわずかに欠落している。下端部は平坦で割り込みがなく、上端部は長さ8mm、幅2mmの平坦面をもち、平坦面の中央に断面三角形の切り欠きを有する。切り欠きの最下部は鋭角ではなく若干丸みを帯びているが、これが使用によるための摩滅か否かの判断はし難い。材の表面は丁寧に仕上げられており平滑である。なお、連結した琴柱の報告例は管見による限りでは皆無であり、琴柱として認識してよいものか、あるいは琴の部材であっても琴柱と呼称してよいのかは定かではないが、他の用途や名称が該当しないので本報告書では琴柱として報告しておきたい。

##### B、琴？(56)

琴と断定はできないが、とりあえず琴として報告する。左右両側面と頭部が欠落しており、琴尾側の一部と端部の2つの突起が残存している。突起は断面方形に近い形状で長さ6.0cmを測り、先端は腐食のため丸くなっている。また、突起の基部から約15cm下方にわずかな段がみられるが、その用途は不明である。

##### 5：服飾具(51)

51は「木器集成図録」において、衣笠の軸受下端に接した鏡板である可能性が指摘されている有孔円盤に類似しているため服飾具として扱う。円柱状を呈し、中央に一辺5mmの隅丸方形を呈する貫

通孔が穿たれている。側面には8方向から直径5~6mmの未貫通の穿孔がいずれも中央に向かって穿たれており、そのうち4つの穿孔内に細い棒状材が残存している。

#### 6：祭祀具(52)

形態的には横柾に類似し各部位は横柾の名称(渡辺1985)に従うが、長さ8.3cmと短く、実用品ではないと判断したため祭祀具として扱う。敲打部は長さ4.8cmと短く断面長方形に近い形状を呈する。敲打部と柄の境は全面に段を有し、柄の先端は肥厚している。敲打部と柄の裏面にはそれぞれ1条の刻みがあり、表面はわずかに炭化している。

#### 7：紡織具(55)

55は中筒と思われる。断面形態はやや内彎しているがほぼ長方形を呈し、右側面がほぼ垂直、左側面が斜めに成形されている。上下部は両側面から撥状に抉られ端部は垂直な面を有しており、中央附近には三角形の切り欠きを有する。

#### 8：漁撈具(151・152)

いずれも形態から櫂と思われる。151の柄は断面方形を呈し、柄の下方ほど幅が広くなる。152は柄の上方は幅が狭く紡錘形を呈するが、下方は幅が広くなり断面形態も方形に近くなる。151は身の形態が定かではないが、152は身の側面上方は八の字状に広がり、中程から先端まで幅が一定になる。身の先端は腐食によるためか凹凸がみられ、本来の形状は定かではない。

#### 9：建築材

##### A、柱状・棒状材(59~65)

建築材のうち柱状・棒状材としたものは、いずれも一定量の長さと幅を有し、他の材が組み合うための穿孔や切り欠きをもつものである。

59はしがらみ状造構の横木に転用されて出土した。頭部より130cm下方に長さ12.8cm、幅6.1cmの長方形の穿孔が穿たれており、下端部は一方向から斜めに削られている。

60は長さ350.1cmを測り、下端部約30cmが上方に比べて腐食が進行している。全体的に断面長方形を呈し、表面は中軸に沿って稜を有し、裏面は丸みを帯びている。上端部と上方右側面は裏面から斜めに削られており、先端より約27cm下には長さ9.6cm、幅8.5cmの長方形のほぞ穴が穿たれている。ほぞ穴は四辺とも垂直に穿たれ、裏面のほぞ穴の周囲には長さ20cmの平坦面が削り出されている。また、上端部より200cm下方にも長さ10.3cm、幅8.5cmのほぞ穴が穿たれており、上下のほぞ穴の距離は心々間で180cmを測る。

61は丸木芯持ち材であり、上方に梢円形のほぞ穴が穿たれている。材の断面形態は梢円形を呈し、上半部の方が下半部より太い。上半部は全面黒色を呈し、部分的に炭化しているが炭化部分以外の箇所は非常に平滑に仕上げられている。下方は黄褐色を呈し、その断面形態は材がやせたためか不定形で下端部は腐食している。上半部と下半部の境にみられる色調の違いは明瞭で、部分的にわずかな段を有する。また、その境より7~10cm上は、幅5cm前後の間が帶状にわずかに凹んでおり、その部

分のみは黄褐色を呈している。ほぞ穴はほぼ水平に穿たれており、その内面のみ炭化している。なお、上半部と下半部の境からほぞ穴の下端部までは約124cmを測る。

62は断面三角形を呈し下端部は欠落している。上端部は表面から斜めに削られており、端部より11.5cm下には水平方向に縦3.5cm、横3.0cmの方形孔が貫通している。方形孔の内部は上下面が比較的平坦で側面には凹凸がみられ、方形孔が位置する箇所の表面の中央、つまり断面三角形状の頂点には長さ2cm程度の浅い凹みがみられる。また、上端部より82cm下には両側面に長さ7.2cm、幅1.8cm、高さ4.5cm前後の方形の切り欠きを有し、全面ほぼ垂直に削り込まれている。

63は直径19.5cmの丸木芯持ち材であり、中央付近に深さ約12cmの切り欠きをもつ。切り欠きの上側面は斜め、下側面はほぼ垂直であり、底面の両端には刻み痕が残る。また、切り欠きの下方には節が突出して残存している。64、65も丸木芯持ち材であり、材の一部に長方形のほぞ穴をもつ。ほぞ穴の大きさは64が長さ10.0cm、幅4.0cm、65が長さ11.5cm、幅5.5cmを測る。なお、64は下端部が一方向から大きく斜めに削られている。

#### B、板材(66～86)

66は上端部が欠落しているが全体の形がわかる資料であり、ほぞ穴と切り欠きの位置が左右対称に施されている。上下端部右端は正方形に削り込まれており、さらに長方形のほぞ穴がそれぞれ3箇所に穿たれているが、3つのほぞ穴の長辺と短辺は必ずしも直線上に位置しない。また、上下端部よりそれぞれ32.5cmと36.2cm中央寄りには蒲鉾型を呈するほぞ穴が穿たれており、それぞれのほぞ穴間の距離は約60cmを測る。板材の右側面はほぼ垂直であり、左側面は腐食のためその形状が定かではない。

67は乾燥のため重んでいる。中央付近に長さ7.4cm、幅6.5cmのやや大きめのほぞ穴が穿たれ、その上方に長さ3.5cm程度の方形孔が3箇所に穿たれている。

68はほぼ完存しているが下方が全体的に炭化している。断面形態は右側面がほぼ垂直、左側面が尖り気味に成形されており、現状では上端部の幅が広い。上下部にはそれぞれ長方形のほぞ穴が穿たれ、上部は長さ11.2cm、幅6.5cm、下部は長さ10.8cm、幅6.3cmを測り、上下のほぞ穴の距離は心々間で約117cmを測る。上部のほぞ穴は上面と両側面がほぼ垂直であるが、下面是表裏面から斜めに削り込まれている。また、下部のほぞ穴は両側面がほぼ垂直で、上面は表裏面から斜めに削り込まれ、下面是表面から深さ2cm程削り込まれた箇所に幅約1cmの平坦面を有している。

69は上端から下端までの材の幅がほぼ均一であり、側面は若干斜めに削られているもののほぼ断面方形を呈している。上端部は中央からやや左寄りに幅9cmのほぞ部を有し、その先端は欠落している。下端部より約59cm上にはトンネル状の抉り込みがあり、その断面形態は逆台形に近い形状を呈する。抉り込みの両端、つまり表面にみえる部分は左右いずれも長方形を呈し、左側が長さ4.2cm、幅3.0cm、右側が長さ4.3cm、幅3.5cmを測り、右側の方が残りがよい。左右の抉り込みの表面上部中央寄りにはわずかな凹みが確認できることから、この部分において他の材が組み合ったか、あるいは紐状のものが掛けられていた可能性が高い。なお、橋にあたる部分は幅2.5cmを測る。下端部中央は欠落しているが、欠落面に残された痕跡から長さ約3.2cm、幅約2.0cmの長方形のほぞ穴が穿たれていたと想定される。材の表面右側には未貫通の穿孔が10～15cm間隔で直線的に並んでほぼ垂直に

穿たれており、その間隔がほぼ一定であることから人為的なものと判断した。なお、材の表面は平滑で下方に手斧痕がみられるが、裏面は腐食のために加工痕が確認できない。

70～72・75・79は幅20cm以上の板材である。70は全面腐食しており、中央左寄りに長さ約26cm、幅約4cmの方形のほぞ穴が穿たれている。71は厚手で中央に長さ4.0cmの方形孔が穿たれ、表面には斜めに浅い溝が削り込まれている。72は左側面が台形状に削り込まれ、その頂点はわずかに抉れている。75は上端部が円弧状に抉れており、抉られた面には粗い加工痕が残る。79はSW7より出土した。裏面右側面が炭化しており、裏面上端部はわずかに斜めに削り込まれている。そのため、盤か机をしがらみ状遺構の部材として転用した可能性もある。

73・76～78・86は幅12cm前後の板材である。77は右側面が斜めに面を有し、表面に縦位の手斧痕が残る。また、下方右側面はほぼ直角に削り込まれており、上端部中央はほぞ部が欠落している。78は上端部中央に長さ15.8cm、幅3.5cmの断面方形を呈するほぞ部を有する。ほぞ部の基部は両側面が若干抉れており、他の部材と組み合っていた痕跡と想定される。

74・80～85は幅10cm以下の板材である。74は断面方形を呈する板材で、上端部は表面から斜めに削られ、下方は斜め方向に浅い溝をもつ。80は下方右側面が裏面から斜めに削られており、83は全面に加工痕が残り、下方左側面は緩やかに削り込まれ端部が尖る形態である。84は断面方形を呈し、最大幅を中央付近にもつ。

#### C、垂木(87～95)

垂木としたものは先端が有頭状に肥厚する細長い棒状材と材の一部が梢円形状に切り欠かれている棒状材である。

87・88は先端が有頭状に肥厚する細長い棒状材である。87は上端部が多方向から丁寧に削られ球形を呈し、その下方は長さ約40cmにわたり7面の平坦面をもつ。下端部は大きく2方向から斜めに削られており、端部より約35cm上には2箇所に切り欠きを有する。88は上端部の約半分が欠落している。材の上方は断面円形、下方は断面梢円形を呈し、下端部は杭状に削られている。材の断面形態の変化が22と類似していることから、あるいは鍼の柄を転用しているのかもしれない。

89～95は材の一部が梢円形状に切り欠かれている棒状材である。切り欠きの断面形態は94が浅く皿状を呈するが、他はいずれも断面三角形を呈し、一方の傾斜は急、他方の傾斜は緩やかである。切り欠きが先端付近にあるものは89～92であり、90と92は端部にまで加工が及んでいる。また、89・93～95は下端部が杭状に削られている。なお、92は長さ413.3cmで弓状に湾曲しており、95は直径13.8cmと極めて太い丸木芯持ち材である。

#### D、扉(96)

長方形を呈し、下端部左端に軸部が欠落した痕跡がみられる(図版122参照)ことから扉として報告する。左側面中央には長さ5.3cm、幅2.8cmの方形ないしは梢円形を呈する穿孔が、材の中央付近には長さ5.6cm、幅3.5cmの方形孔がそれぞれ穿たれている。右側面の中央付近は緩やかに湾曲しており、その部分の裏面もわずかに凹んでいる。下端部は幅1.8cmの垂直な面を有し、軸部にあたる部分の幅は約2.7cmである。表面上端は幅約8cmの間が斜めに削られており、また扉としては不必要的穿

孔が穿たれていることなどから、廃棄後に他の用途に転用した可能性が高いと思われる。

#### E、梯子(97)

裏面は平坦で、表面は足掛けを作り出している。足掛けは一番上の段は腐食のため形態が定かではないが、2番目と3番目の段は上部が直角気味で、下部が斜めに削り込まれている。なお、段の断面形態は蒲鉾状を呈する。

#### F、柱根・礎板・支材(99～106)

出土状況より99～102が柱根、104・106が礎板、103・105が柱根の脇に位置する支材と判断した。柱根はいずれも上端が腐食し、底面は多方向から削られ必ずしも平坦面をもつわけではない。そのうち102は側面に幅4～5cmの縦位の手斧痕が2列残存しており、底面には刃こぼれ痕が認められる。礎板のうち104は断面不定形を呈するが1面のみ幅広の平坦面をもち、上下端部に粗い加工痕が残る。また106は厚手の板材であり、104と同様に表面に粗い加工痕が残る。支材はいずれも丸木芯持ち材の断削材であり、103は上下端部に粗い加工痕が残る。

### 10：用途不明木製品

#### A、樹皮製品(58・107～109)

いずれもヤマザクラかカバの樹皮である。幅は0.5～4.0cmと様々であり、107～109は1重から3重に丸くなっている。

#### B、棒状木製品(110～127・140・145・146・155・156)

110～122は材の先端が炭化している端材であり、その大半が道路状構造であるSD19・20の検出面ないしはその付近から出土している。長さは最小のものが5.8cm、最大のものが24.3cmと様々であるが、幅は1～2cmと近似している。121は上下端部が炭化しているが、他はいずれも一方のみ炭化しており、炭化の範囲は全面に広がるものや一面のみにみられるものなど様々である。

146は断面円形の丸木芯持ち材であり、材の表面には腐食によるためか使用痕かの判断ができないが、溝状の凹凸が材の下部を中心に顯著にみられる。また、上下部の表裏面には長さ45cmほどの平坦面が作り出され、下部の平坦面には加工痕が顯著に残っている。なお、上端部は多方向から削り出され先端が尖っている。

156は上端部と下方左側面が欠落している。右側面は平坦で、右側面から幅約1cmの間を表裏から削り込むことで断面台形状に成形し、削り出しが収束する部位を6mm程突出させ受部を作り出している。なお、左側面は丸みを帯びており、下端部は斜位の面を有する。

その他として124は上端部が両側面から斜めに削られており、127は上端右側面が方形に削り出されている。145は下端部に手斧痕が残り、部分的に炭化している。

#### C、板状木製品(49・53・128～133・147～150・153・157)

49は付札状木製品と呼称されている板材に類似する。厚さ約0.2cmと非常に薄く、上方左側面に三角形の、右側面に台形の切り欠きをもつ。そして、表裏面とも切り欠きの頂点間のみ直線的に色調が違うため、紐状のもので緊縛されていた可能性が高い。

53は古代から中世の包含層であるⅡ層中より出土した。断面形態が台形を呈し、表面に墨で橢円形状の円弧を2重に描いている。

128は大半が欠落しているために全体の形状がわからないが、下方は表裏面から削り込まれ先端が薄くなっている。また、132は材の幅が上端から下端までほぼ均一であり、上端が斜めに削られ表面のみ段を有している。

147と148は大型の板材であり、いずれも道路状遺構から出土した。表面は腐食のために加工痕が全く確認できず、断面形態も不定形を呈する。

149は長方形の板材であり、ほぼ完存している。表面は平坦で、裏面の上下部には断面長方形を呈する幅約1.2cmの溝が材の短辺に平行して削り込まれている。また、上下部左寄りには直径4mmの穿孔が上部に1ヶ所、下部に2ヶ所それぞれ穿たれており、いずれも溝の外側に位置している。

150は裏面が比較的平坦で、表面は上部が肥厚している。また、上端から約11cm下方の両側面はくびれおり、意図的に上部を丸く削り出している。なお、下方は炭化し欠落している。

157は厚手の板材である。周囲は欠落しているために全体の形状がわからないが、裏面は平坦で、右側には直線的な段が削り込まれている。

#### D、有孔木製品(134～136・154)

135と136は薄手の材であり、いずれも両側面に面を有する。135は長方形を呈する板材と思われ、上部に一辺1.2cmの正方形の穿孔と中央付近に直径3mmの小穿孔が穿たれている。136は上方に方形孔が1つ、中央付近に直径8mm程度の円形孔が2つ穿たれており、下方左側面は緩やかに湾曲している。

134と154は厚手の材である。134は上下部が表面から粗く斜めに削られており、中央付近に直径2.0cmの円形孔が穿たれている。154は方形を呈する板材であり、上部に一辺1.8cmの正方形の穿孔があり表面に縦位の手斧痕が残る。

#### E、有頭棒状材(137～139・141～144)

裏面が平坦で、表面の上端部のみ肥厚する形態と上端部両側面に切り欠きをもつ形態に分けられる。

137～139・142は裏面が平坦で、表面の上端部のみ肥厚する形態である。137は全面炭化しており、肥厚部の裏面が欠落している。材の上端より約10cm下から斜めに削り出すことにより肥厚部を突出させ、肥厚部の先端は斜めに削られている。138は他の有頭棒状材より薄く丁寧な作りであるため形代の可能性もある。全体的に断面三角形状を呈し、肥厚部と身の境は1mm程度の段をもつ。また、肥厚部の上部は幅1cm程度の平坦面を有し、端部は垂直に削られている。139は肥厚部の断面形態が円形、身の断面形態が半円形を呈し、その境はほぼ垂直な段を有する。また、上部と下部の表面に浅い溝状の凹みがみられる。142は表面と両側面を切り欠くことで上端部を帯状に肥厚させ、端部より約9cm下でも両側面からの切り欠きにより膨らみを作り出している。なお、断面形態は紡錘形に近く、両側面はわずかに面を有している。

141・143・144は上端部両側面に切り欠きをもつ形態であり、織機の可能性も考えられる。141は断面方形が呈し、上端部の切り欠きは左側が深く三角形状で、右側が浅く台形状を呈する。下端部は欠落しているためその形状が定かではないが、左側面に上端部と同様な切り欠きの痕跡が残っていることから、上下部の両側面に切り欠きをもっていた可能性が高い。なお、材のほぼ中央両側面にも浅

い溝状の凹みがみられる。143は断面形態が方形に近いが、表裏面は丸みを帯びている。上端部の切り欠きはほぼ左右対称であり、上端部より約15cm下には幅2.2cm、深さ1~2mm程度で肩がしっかりとした溝が両側面と裏面に削り込まれている。144の断面形態は上方が方形、下方が不定形であり、上端部より約11cm下の切り欠きは台形状を呈するが141・143ほど角が明瞭ではない。

#### 11：土木材(158~193)

土木材としたものは集落城の南北に位置する溝から出土した杭と、自然流路に設置されたしがらみ状造構の部材である杭と横木、縦木である。そのうち、縦木は杭が水流によって倒れたものと区別ができなかったので、縦木と杭を一括して「杭」として報告する。なお、杭と横木の区別はすべて発掘現場において識別した。

土木材のうち杭は592点、横木は265点、合計857点を数え、いずれも洗浄後に①木取り、②下端部の削りの形状と加工状況、③下端部の削りの最大長、といった3項目を計測した。なお、①と②の分類は以下の通りであり、いずれも既存の分類(白居1997)に従っている。

①木取り—I類：丸木芯持ち材、II類：割り材(II-1類：芯部側を削り角状にする、II-2類：木肌側を削り角状にする、II-3類：半削材)、III類：角材、IV類：板材(転用材)

②形状—A：周縁方向から比較的鋭角に先端を削り出したもの

B：周縁方向から比較的鈍角に先端を削り出したもの

C：1~2方向もしくは片面から比較的鋭角に先端を削り出したもの

D：1~2方向もしくは片面から比較的鈍角に先端を削り出したもの

加工状況—a：削り面に數度にわたる緻密な削り痕を残すもの

b：単純な削り痕を残すもの

なお、木取りII-3類は本報告で新たに加えたものであり、先端の加工状況はaとbの境が曖昧で、担当者の感覚的な判断に扱っている。

杭592点のうち、木取りはI類が96.2%と圧倒的に多く、以下II類1.5%、III類1.2%、IV類1.0%となる。先端の形状と加工状況がわかる資料は252点あり、そのうちC b類が38.1%と最も多く、以下A b類25.4%、A a類21.8%、C a類9.1%となり、他は5%未満である。また、a類：b類はおよそ1:2.2である。なお、削りの最大長は様々であったが、その平均値は14cmで最も長いもので53cmであった。

横木265点のうち、木取りはI類が97.7%と圧倒的に多く、II~IV類はいずれも1.0%前後であった。先端の形状と加工状況がわかる資料は25点と少ないが、そのうちC b類が48.0%と最も多く、以下B b類28.0%、他は10%以下である。また、a類：b類はおよそ1:11.5であり、杭に比べてb類の割合が高い。なお、削りの最大長の平均値は10cmで、最も長いもので28cmであった。

160・171は杭が打ち込まれた時に先端に疊があったためか下端部が歪んでおり、173は側面2方向に幅約4.3cmの縦位の手斧痕が残っている。また、180・181・186・191は材の一部が湾曲ないしは屈折しており、191は上端部が二又に分かれている。なお、160・168・174・175・183・187は下端部に刃こぼれ痕が確認できる。

表47 用途別樹種一覧表

用途	樹種	個数
農工具		
耕作機	ブナ科コナラ属アガシ亜属	11
ナスピ型鋤柄枠	ブナ科コナラ属アガシ亜属	7
耕孔擴張器	ヒノキ科ヒノキ属	1
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
深耕	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
	ミカン科キハダ属キハダ	1
直柄	ミカン科キハダ属キハダ	1
鋤	バラ科サクラ属	1
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
納孔多本翻	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
納孔広源未製品	ブナ科コナラ属アガシ亜属	2
耕鋤	ツバキ科サカキ属サカキ	1
豎杵	ツバキ科ツバキ属	2
	ツバキ科サカキ属サカキ	1
作業台	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
田下駄	ヒノキ科ヒノキ属	2
	ヒノキ科アスナロ属	1
大足	ヒノキ科ヒノキ属	3
	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1
	ブナ科クリ属クリ	1
雜具		
箱物	ヒノキ科ヒノキ属	1
机	ヒノキ科ヒノキ属	1
容器		
樽	ミカン科キハダ属キハダ	1
盤	ヒノキ科ヒノキ属	6
	ヒノキ科アスナロ属	1
盤の補修材	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
	ヤマザクラ或カバの樹皮	1
楽器		
琴柱(未製品?)	マツ科モミ属	1
琴?	ヒノキ科ヒノキ属	1
服飾具		
衣笠	ヒノキ科ヒノキ属	1
衣笠の輪	クマツラ科ムラサキシノブ属	1
祭祀具	ミニチュア構造	1
紡織器	ヒノキ科ヒノキ属	1
中箇	ヒノキ科ヒノキ属	1
挽撫具	ヒノキ科ヒノキ属	1
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
運搬具	荷車状木製品	1
建築部材		
垂木	ツバキ科サカキ属サカキ	2
	ヒノキ科アスナロ属	2
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	2
イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	1	
コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1	
ニガキ科ニガキ属ニガキ	1	
モクセイ科トネリコ属	1	
柱材	バラ科サクラ属	2
	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1
	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	1
	ニレ科ムクニキ属ムクニキ	1
	ヒノキ科アスナロ属	1
	ヒノキ科ヒノキ属	1
	ブナ科クリ属クリ	1
板材	ヒノキ科ヒノキ属	10
	イヌイ科カヤ属カヤ	1
	ヒノキ属ヒノキ	1
	ブナ科モミ属	1
梯子	ウルシ科ウルシ属ヤマハゼorハゼ	1
扉	ヒノキ科ヒノキ属	1
有孔板材	ヒノキ科ヒノキ属	5
柱脚	ヒノキ科ヒノキ属	2
	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1
	ブナ科クリ属クリ	1
碇板	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1
	ヒノキ科ヒノキ属	1
支柱	ヒノキ科ヒノキ属	2
土木材		
杭	ブナ科コナラ属アガシ亜属	53
	ツバキ科サカキ属サカキ	32
	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	11
	ツバキ科ツバキ属	11

用途	樹種	個数
土木材		
杭	ヒノキ科ヒノキ属	8
	ブナ科コナラ属コナラ属	7
	マツ科マツ属根瘤束東アリ	6
	イチイ科カヤ属カヤ	5
	クワ科クワ属	5
	ニレ科ムクニキ属ムクニキ	4
	ブナ科コナラ属コナラ属クスギ	4
	クスギ科クスギ属クスギ	3
	ニレ科エノキ属	3
	ヒノキ科アスナロ属	2
	ブナ科クリ属クリ	2
	モクセイ科トネリコ属	2
	ヤナギ科ヤナギ属	2
	エゴノキ科エゴノキ属	1
	カエデ科カエデ属	1
	カバノキ科クシアシデ属	1
	スイカズラ科ガマズミ属	1
	スイカズラ科ニットコ科ニットコ	1
	ツバキ科ヒサカヤ属	1
	バラ科サクラ属	1
	バラ科サクラ属ウメorモモ	1
	ブナ科ヒノキ属	1
	マメ科ムノキ属	1
	モクセイ科トネリコ属	1
橋木	ブナ科コナラ属アガシ亜属	14
	ヒノキ科ヒノキ属	13
	ニレ科ムクニキ属ムクニキ	8
	ツバキ科カキ属サカキ	6
	コヤマキ科コヤマキ属コヤマキ	6
	ヒノキ科スナロ属	5
	イチイ科カヤ属カヤ	4
	ブナ科コナラ属コナラ属	4
	ブナ科コナラ属コナラ属	3
	クワ科クワ属	3
	ブナ科クリ属クリ	3
	カエデ科カエデ属	2
	ニレ科エノキ属	2
	バラ科サクラ属	2
	ミカン科ハダ属ハダ	1
	モクセイ科ネコロ属	1
	モチノキ科モチノキ属	1
	クスノキ科クスノキ属クスノキ	1
	スギ科スギ属スギ	1
	トチノキ科トチノキ属トチノキ	1
	ニレ科レシ属	1
用途不明		
樹皮製品	ヤマザクラ或カバの樹皮	4
道路の材	ニレ科ニッケリ	1
	マツ科マツ属根瘤束東アリ	1
板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属	10
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	3
	ヒノキ科アスナロ属	2
	ブナ科コナラ属コナラ属コナラ属	1
	マツ科モミ属	1
付札状木製品	ヒノキ科ヒノキ属	1
神柵木製品	ヒノキ科ヒノキ属	14
	ヒノキ科アスナロ属	2
	マツ科マツ属根瘤束東アリ	2
	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	1
	ヒノキ科クロベ属クロベ	1
	ツバキ科ツバキ属	1
	ブナ科コナラ属アガシ亜属	1
	マツ科モミ属	1
有孔木製品	ブナ科コナラ属アガシ亜属	3
	ヒノキ科ヒノキ属	1
有頭棒状材	ヒノキ科ヒノキ属	5
	ヒノキ科アスナロ節	1
不明	ヤナギ科ヤナギ属	1
流木	バラ科サクラ属	1

表48 樹種別用途一覧表

樹種	個数	器種	個数	樹種	個数	器種	個数
イチイ科カヤ属カヤ	10	杭	5			田下駄	2
		横木	4			琴?	1
		板材	1			桿状木製品	1
イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	1	垂木	1			鏡板	1
ウラジロ科ウラジロ属ヤマハゼorハゼ	1	梯子	1			柱材	1
エゴノキ科エゴノキ属	1	杭	1			扉	1
カエデ科カエデ属	3	横木	2			ミニチュア構槌	1
		杭	1			机	1
カバノキ科カマシデ属	1	杭	1			箱物	1
クスノキ科クスノキ属クスノキ	4	杭	3			大足底座の補助材	1
		横木	1			柄孔櫛歯	1
クマツラ科ムラサキシノブ属	1	衣笠の軸内	1			衣笠	1
クワ科クワ属	8	杭	5			中箇	1
		横木	3			板材	1
コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	23	杭	11			付札状木製品	1
		横木	6			有孔木製品	1
		垂木	1				
		磚板	1				
		柱根	1				
		柱材	1				
		大足ぼぞ穴横棒	1				
		棒状木製品	1				
スイカズラ科ガズミ属	1	杭	1				
スイカズラ科ニワトコ科ニワトコ	1	杭	1				
スギ科スギ属スギ	1	横木	1				
ツバキ科サカキ属サカキ	42	杭	32				
		横木	6				
		垂木	2				
		堅竹	1				
		膝柄斧	1				
ツバキ科ツバキ属	11	杭	11				
		堅竹	2				
		棒状木製品	1				
ツバキ科ヒサカヤ属	1	杭	1				
トネリノキ科トネノキ属トネノキ?	1	横木	1				
ニガキ科ニガキ属ニガキ	1	垂木	1				
ニレ科エノキ属	5	杭	3				
		横木	2				
ニレ科ケヤキ属ケヤキ	1	柱材	1				
ニレ科ニレ属	2	横木	1				
		道路の材	1				
ニレ科ムクノキ属ムクノキ	13	横木	8				
		杭	4				
		柱材	1				
バラ科サクラ属	7	柱材	2				
		横木	2				
		杭	1				
		一本刷	1				
		流木	1				
バラ科サクラ属ウメorモモ	1	杭	1				
ヒノキ科アスナロ属	17	横木	5				
		垂木	2				
		杭	2				
		板材	2				
		棒状木製品	2				
		柱材	1				
		田下駄	1				
		盤	1				
		有頭棒状材	1				
ヒノキ科クロベ属クロベ	1	棒状木製品	1				
ヒノキ科ヒノキ属	94	棒状木製品	14				
		横木	13				
		板材	11				
		板状木製品	9				
		杭	8				
		盤	6				
		有頭棒状材	5				
		有孔板材	5				
		支柱	2				
		柱根	2				
		大足底座	2				
			2				
モチノキ科モチノキ属	1	横木	1				
ヤナギ科ヤナギ属	3	杭	2				
		不明	1				
ヤマザクラorカバの樹皮	5	棒状木製品	1				
		樹皮製品	4				

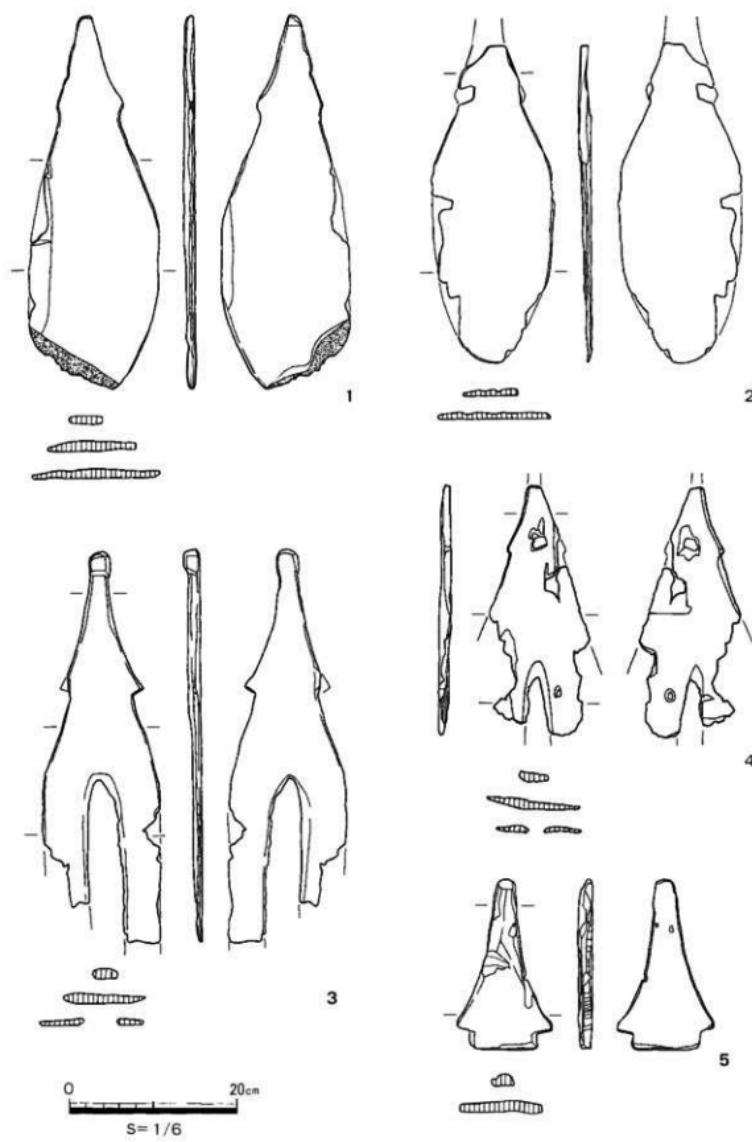


図132 木製品実測図(1)

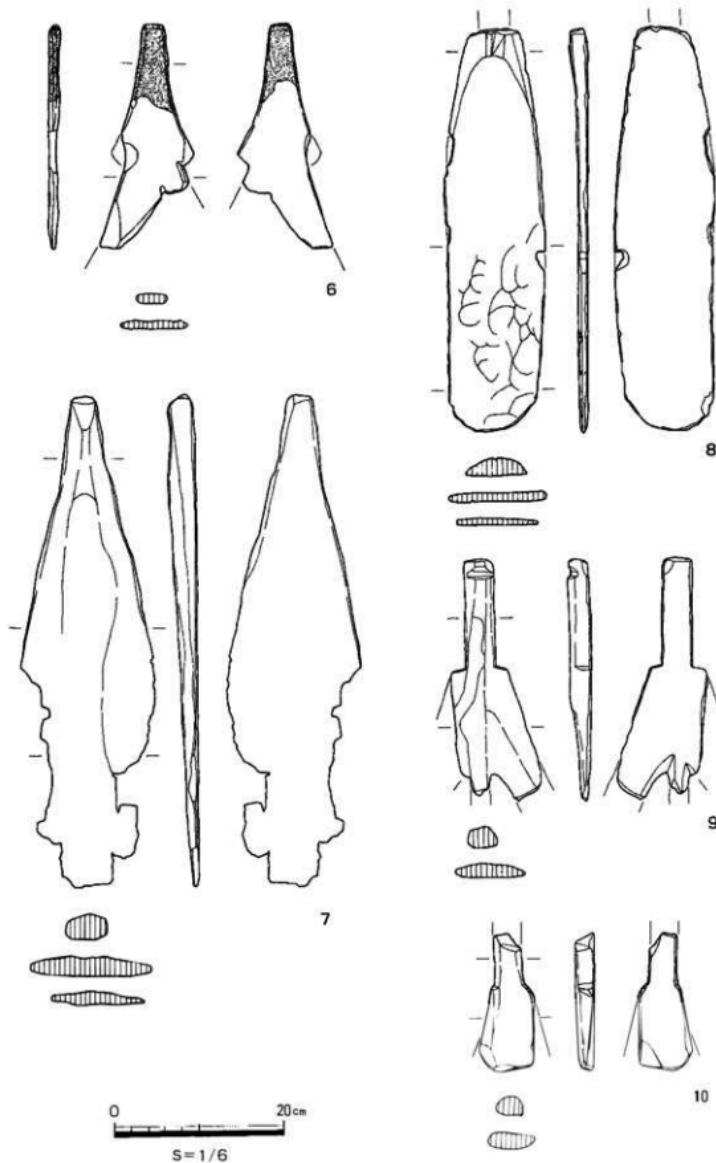


図133 木製品実測図(2)

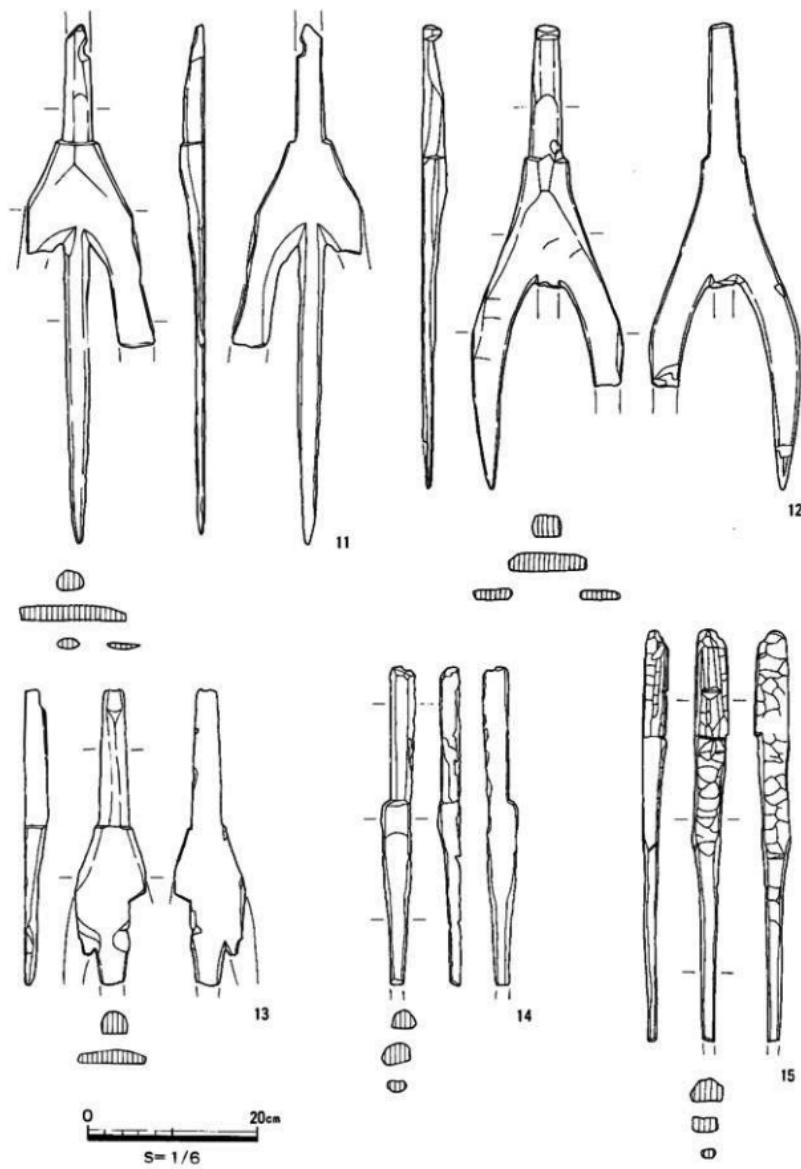


図134 木製品実測図(3)

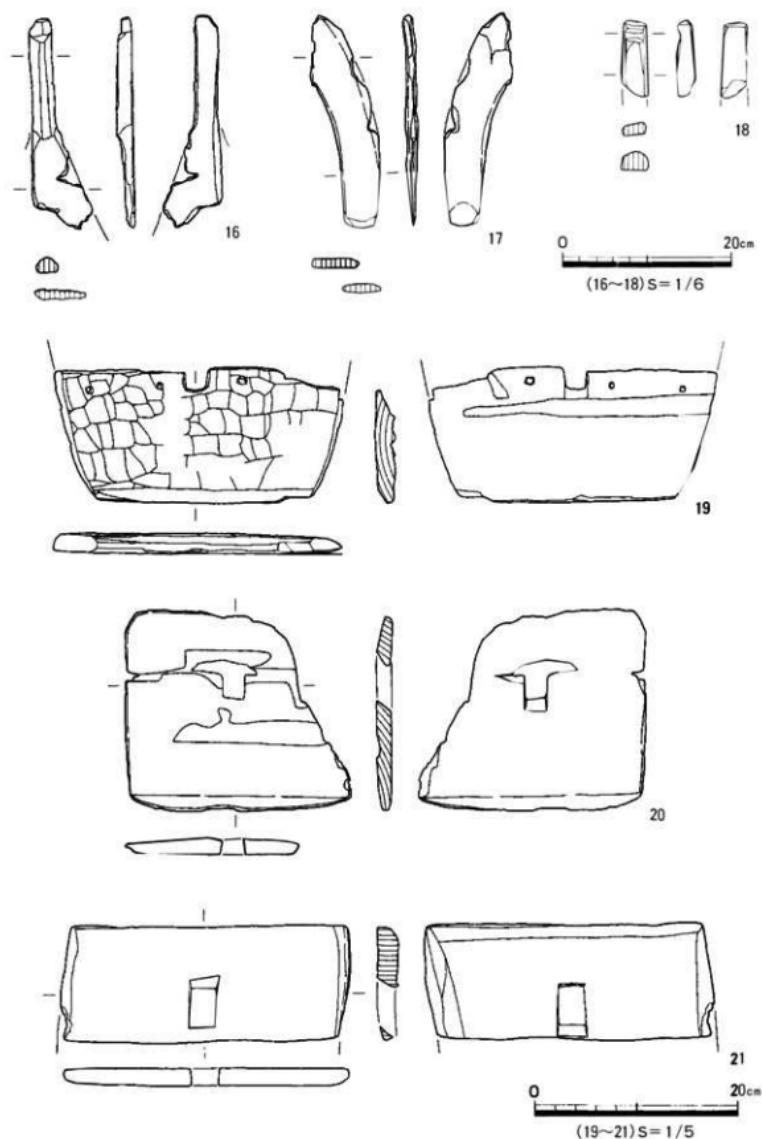


図135 木製品実測図(4)

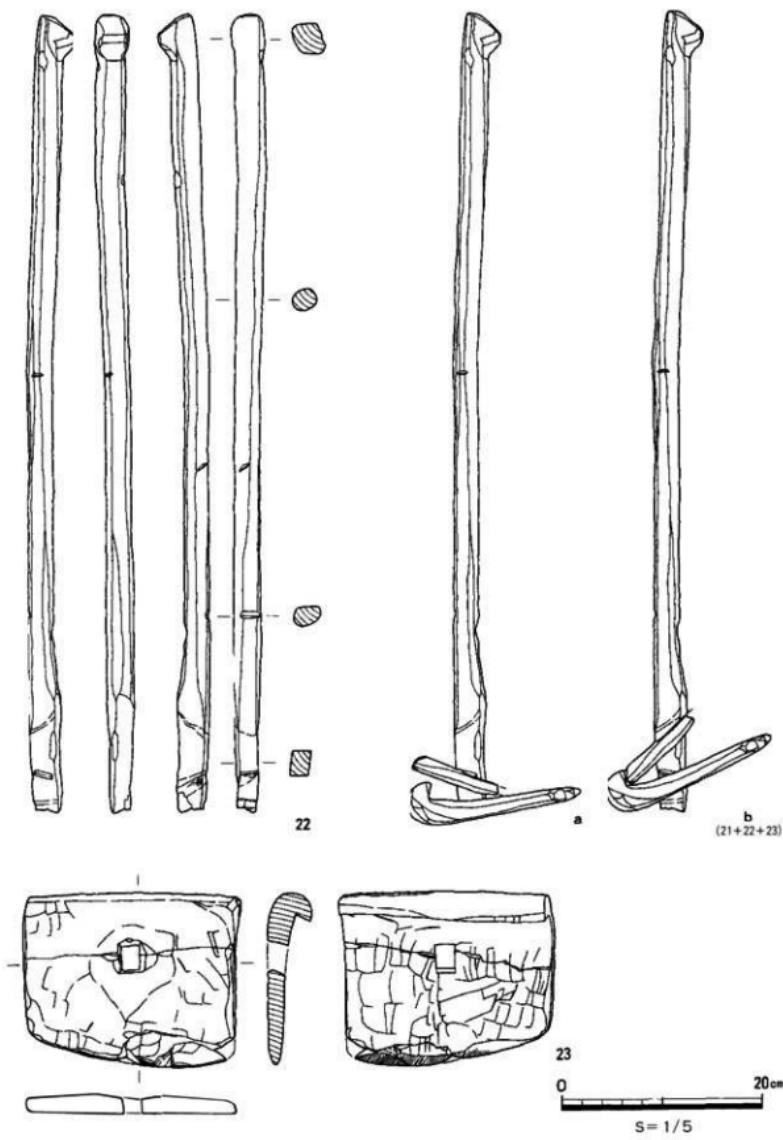


図136 木製品実測図(5)

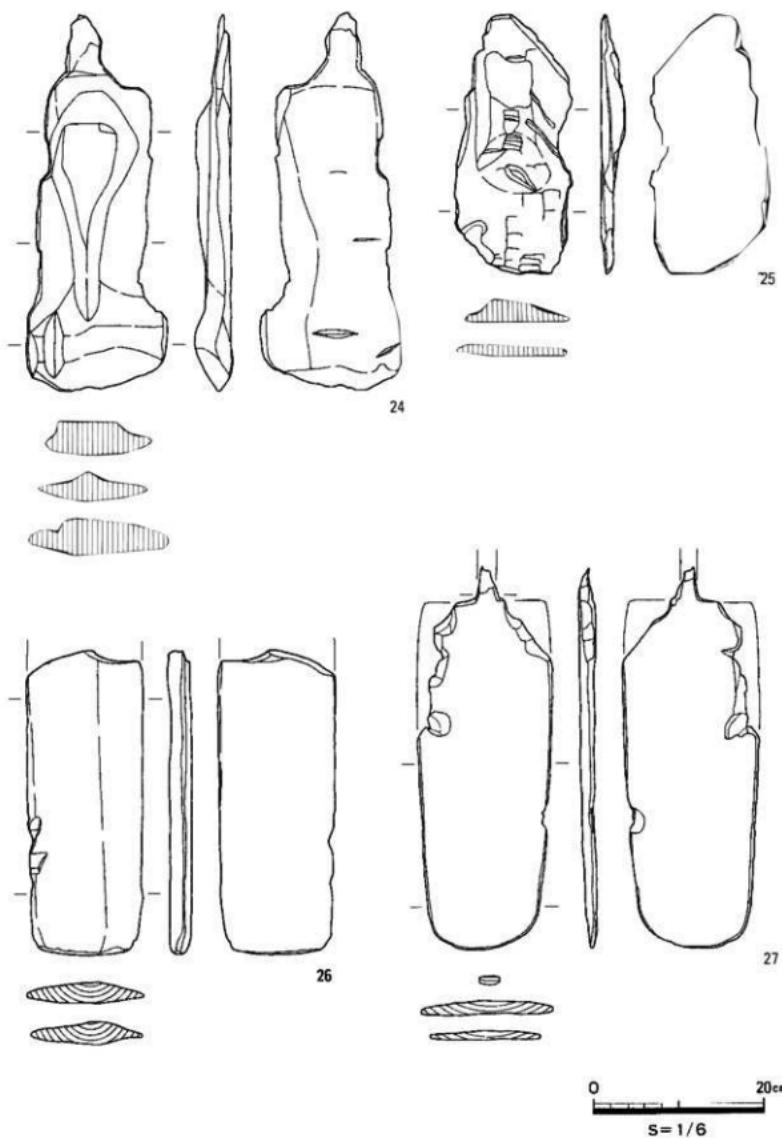
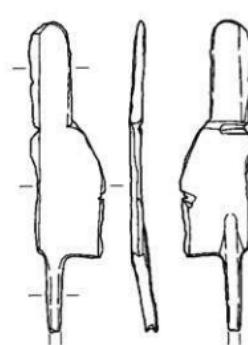
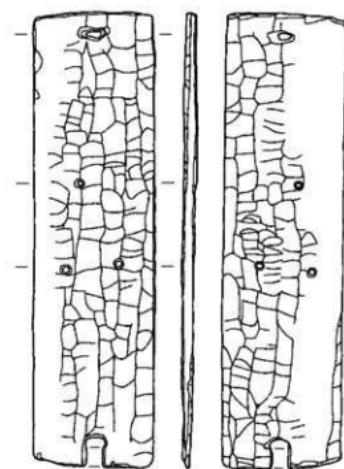


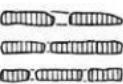
図137 木製品実測図(6)



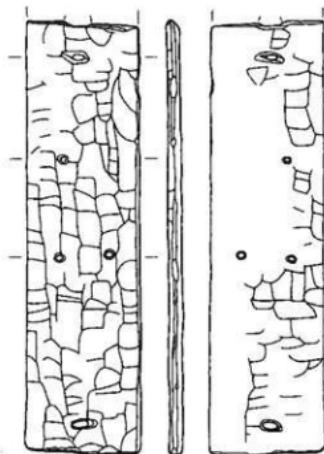
28



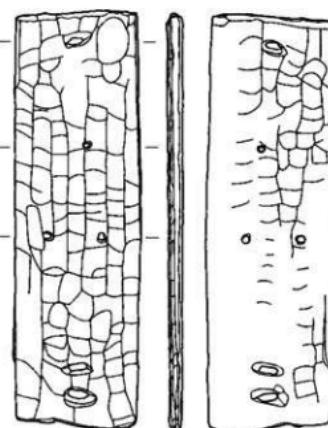
29



0 20cm  
S = 1/6



30



31

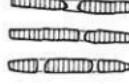


図138 木製品実測図(7)

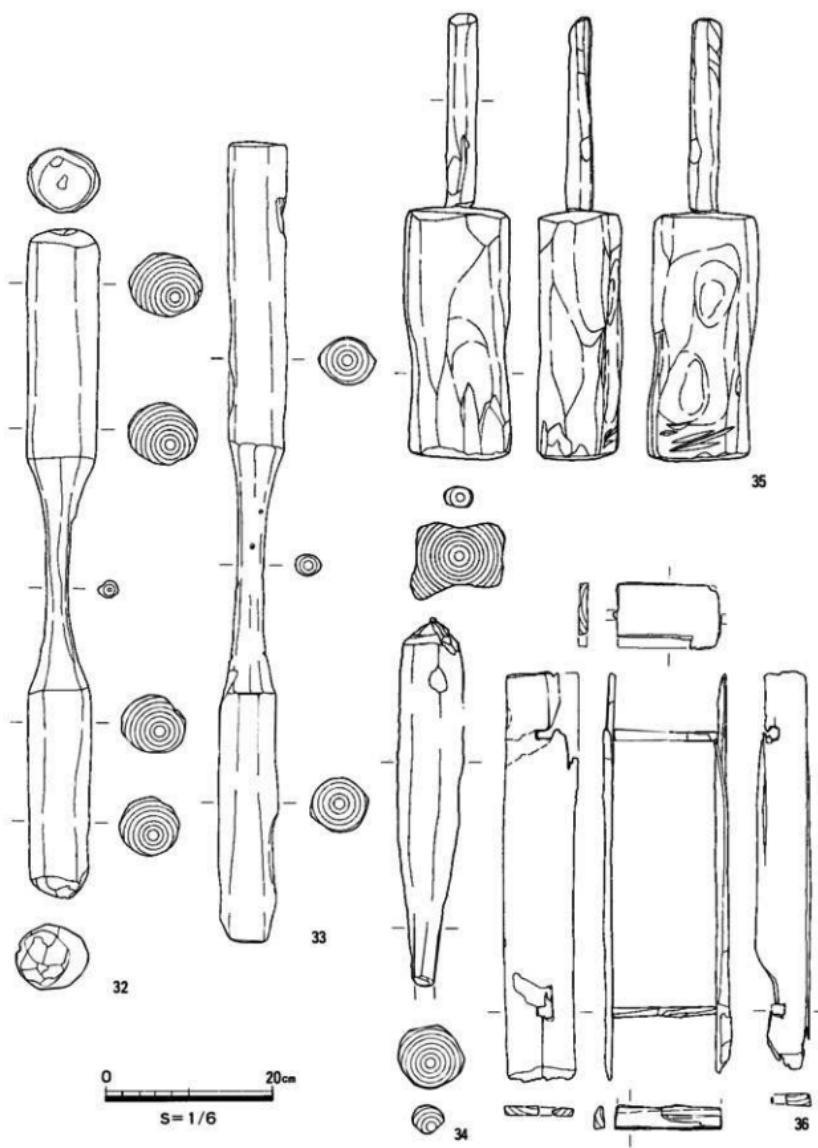


図139 木製品実測図(8)

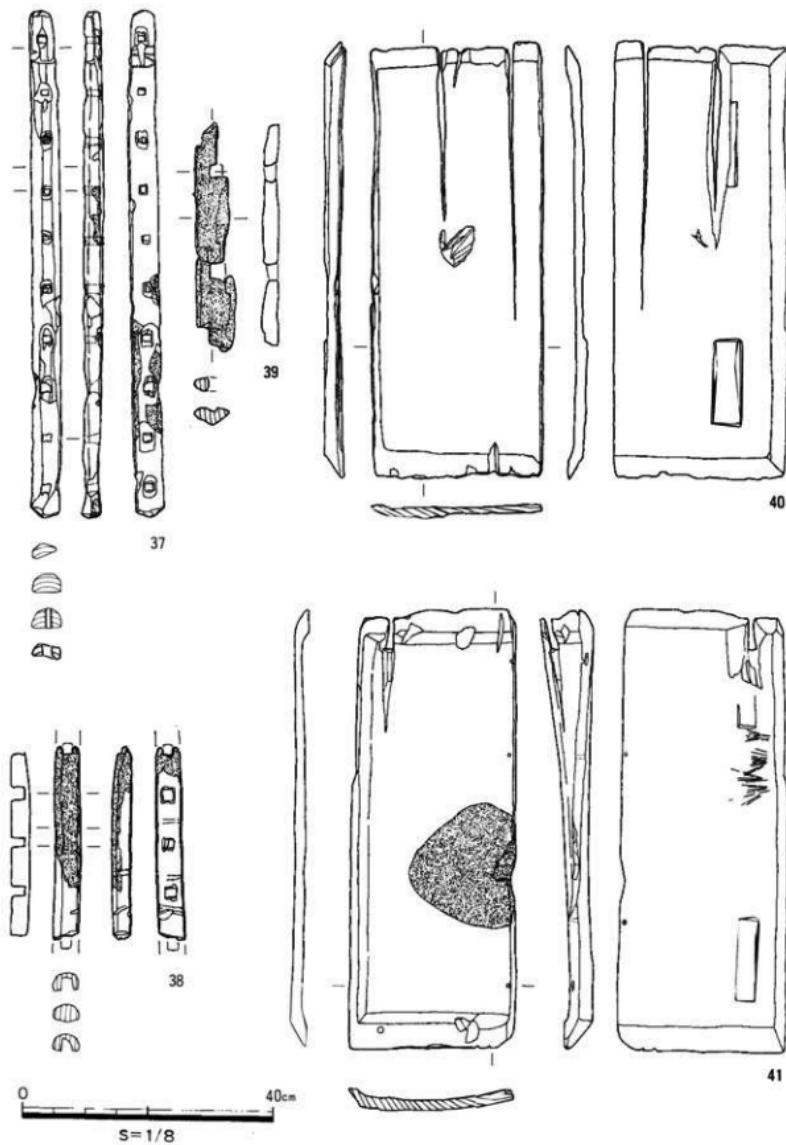


図140 木製品実測図(9)

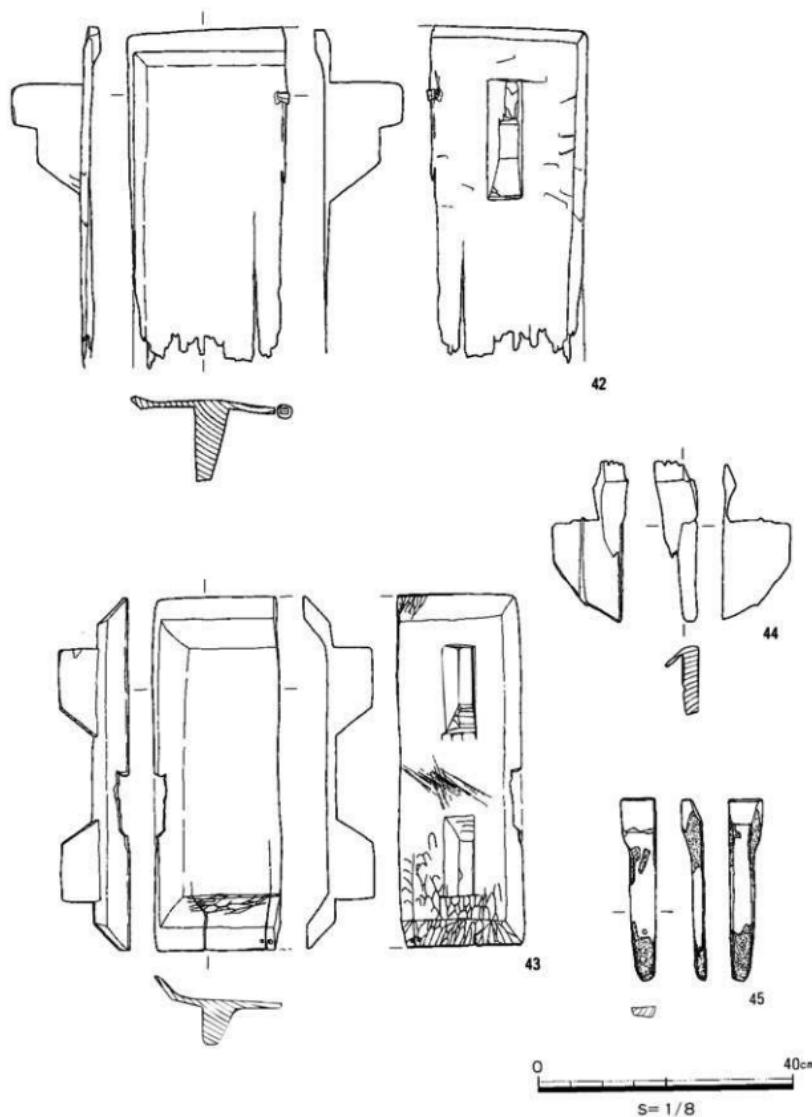


図141 木製品実測図(10)

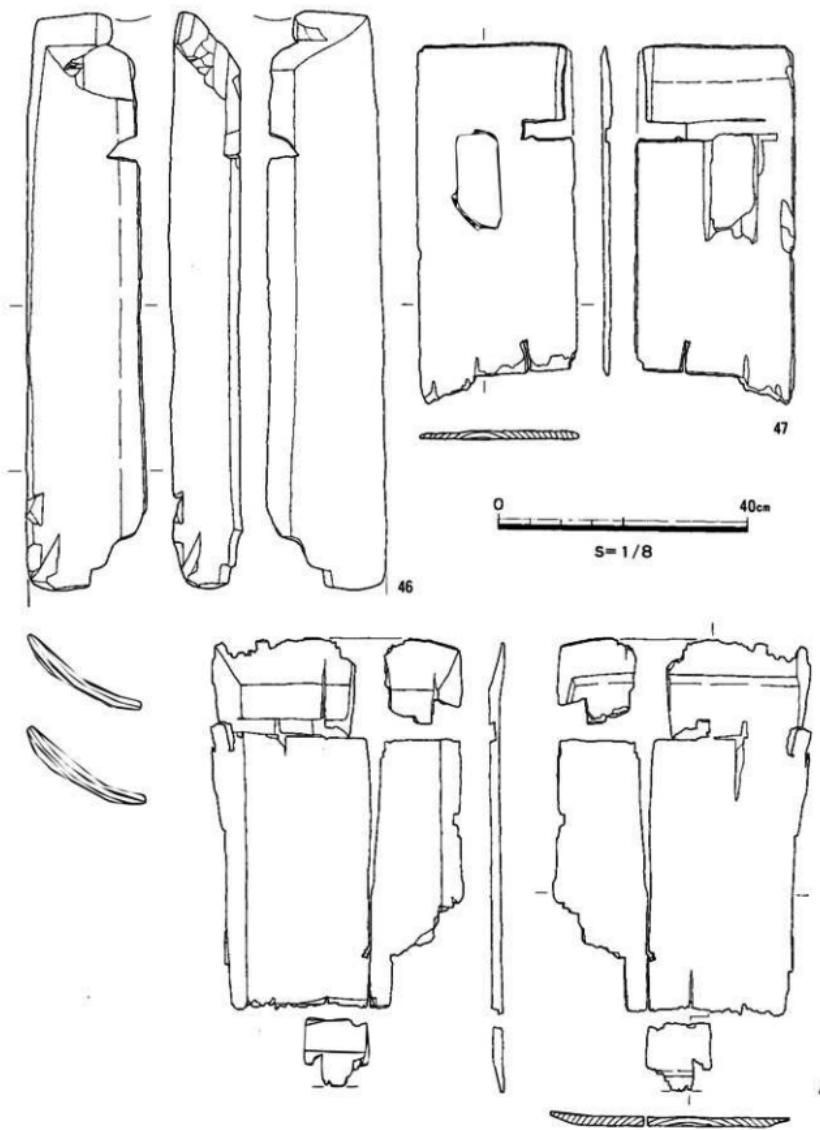


図142 木製品実測図11

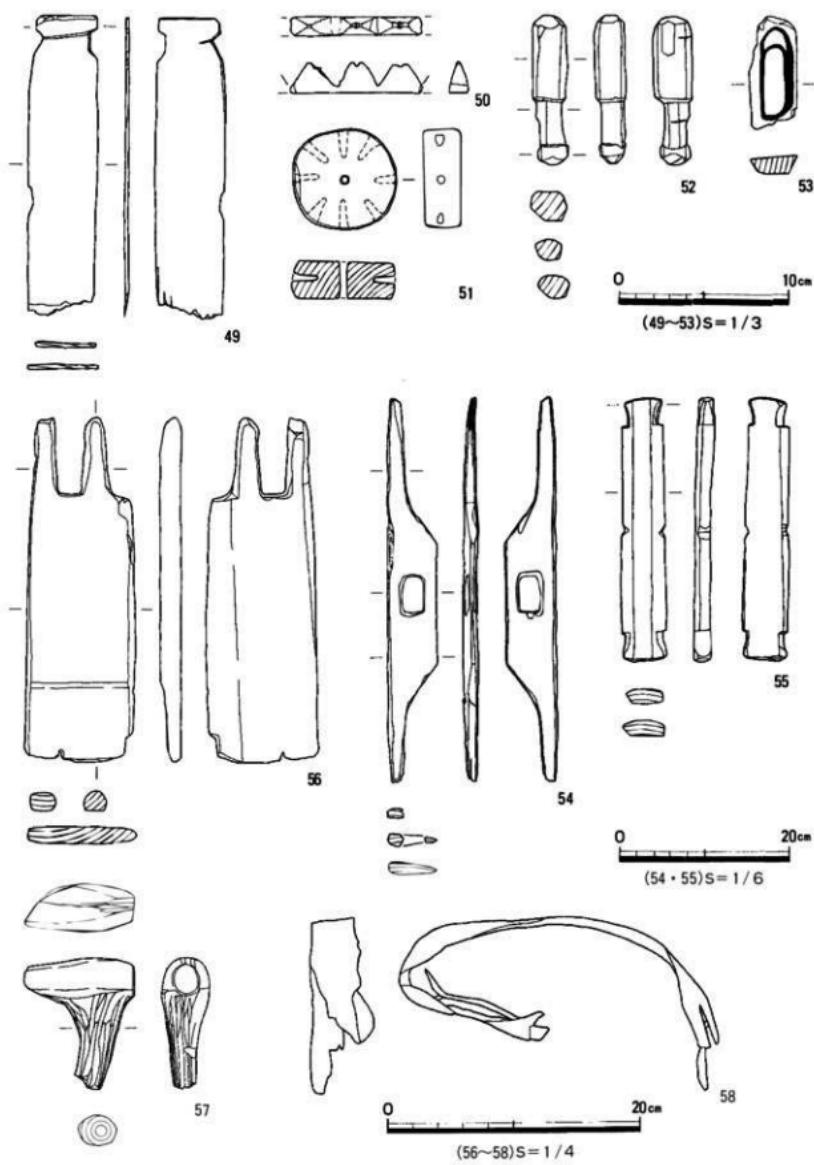


図143 木製品実測図(12)

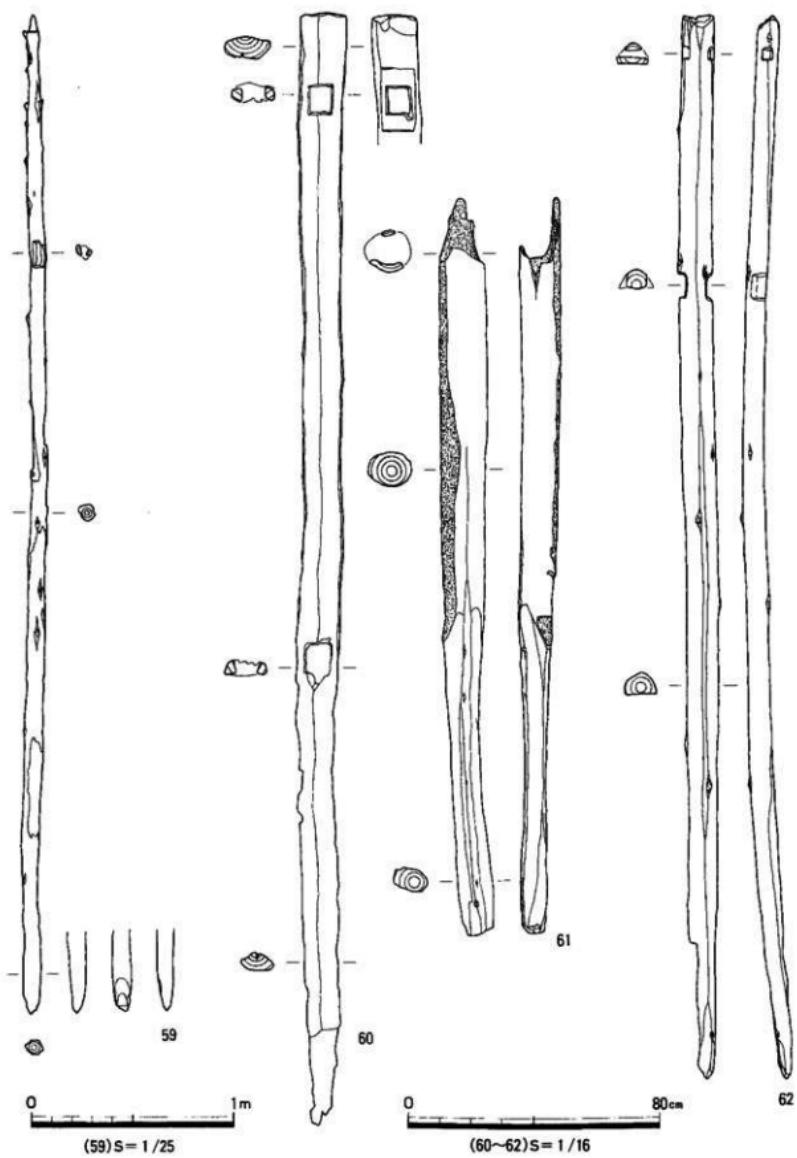


図144 木製品実測図(3)

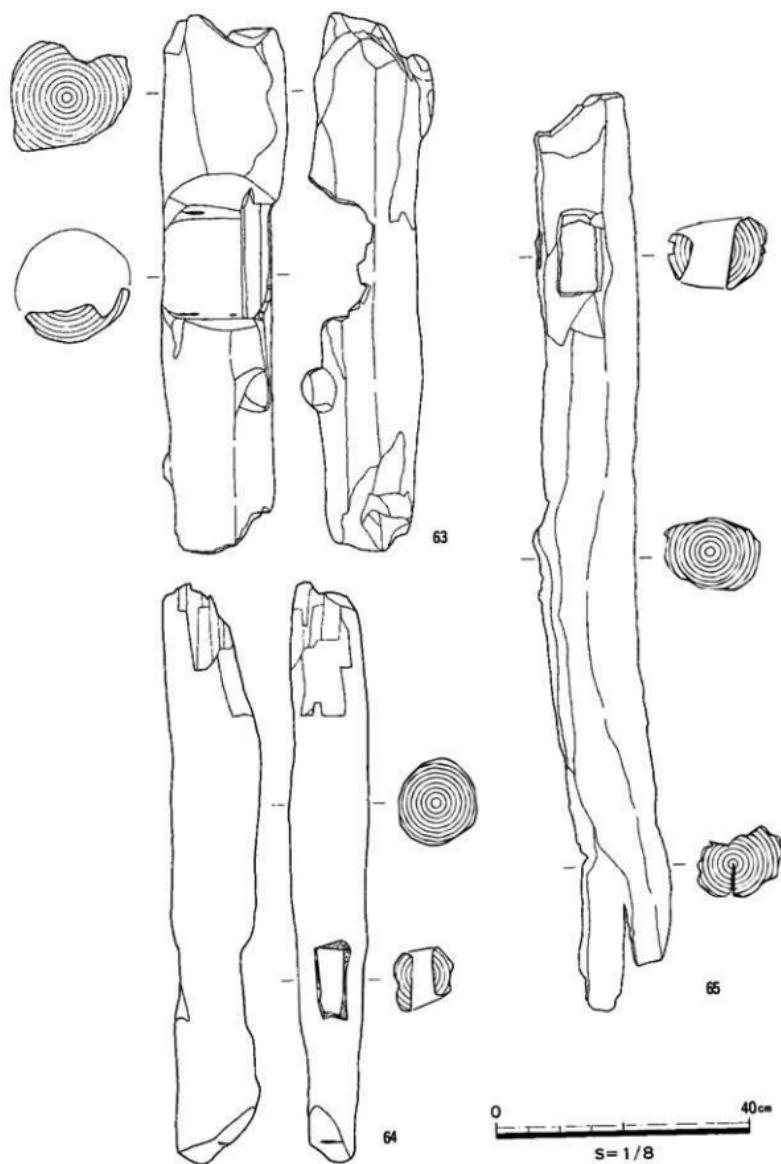


図145 木製品実測図14

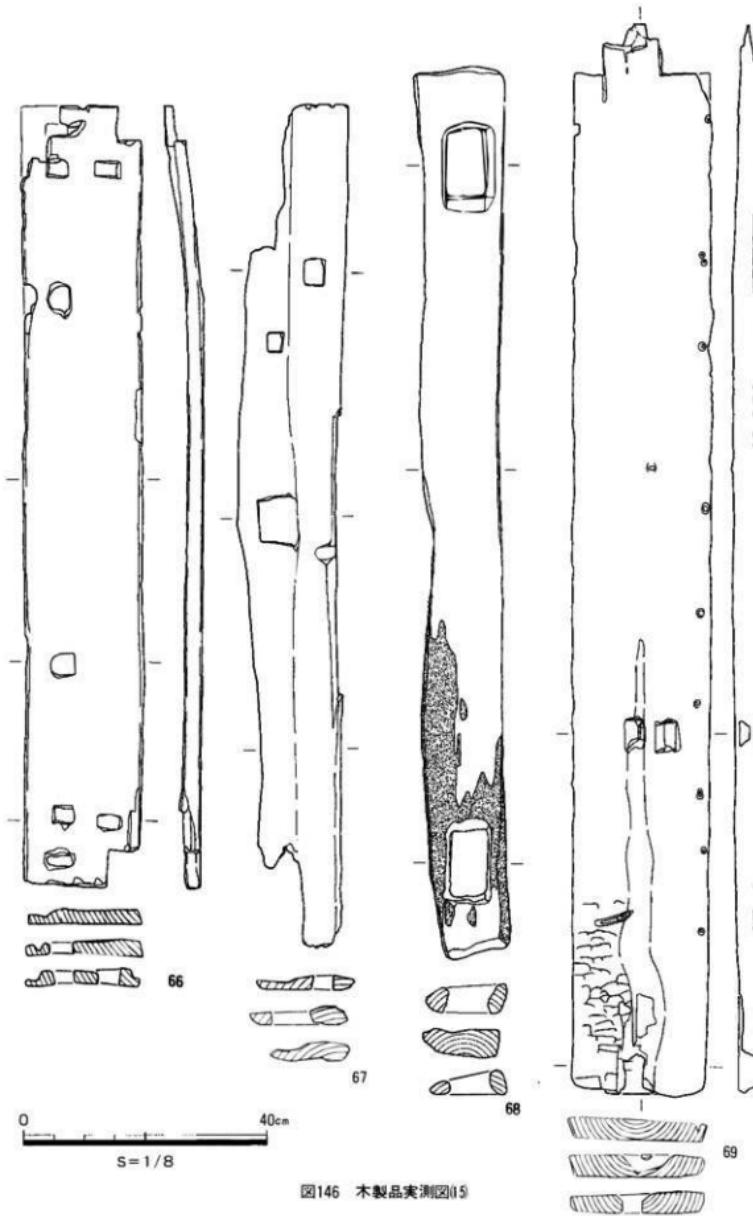


図146 木製品実測図(15)



図147 木製品実測図(6)

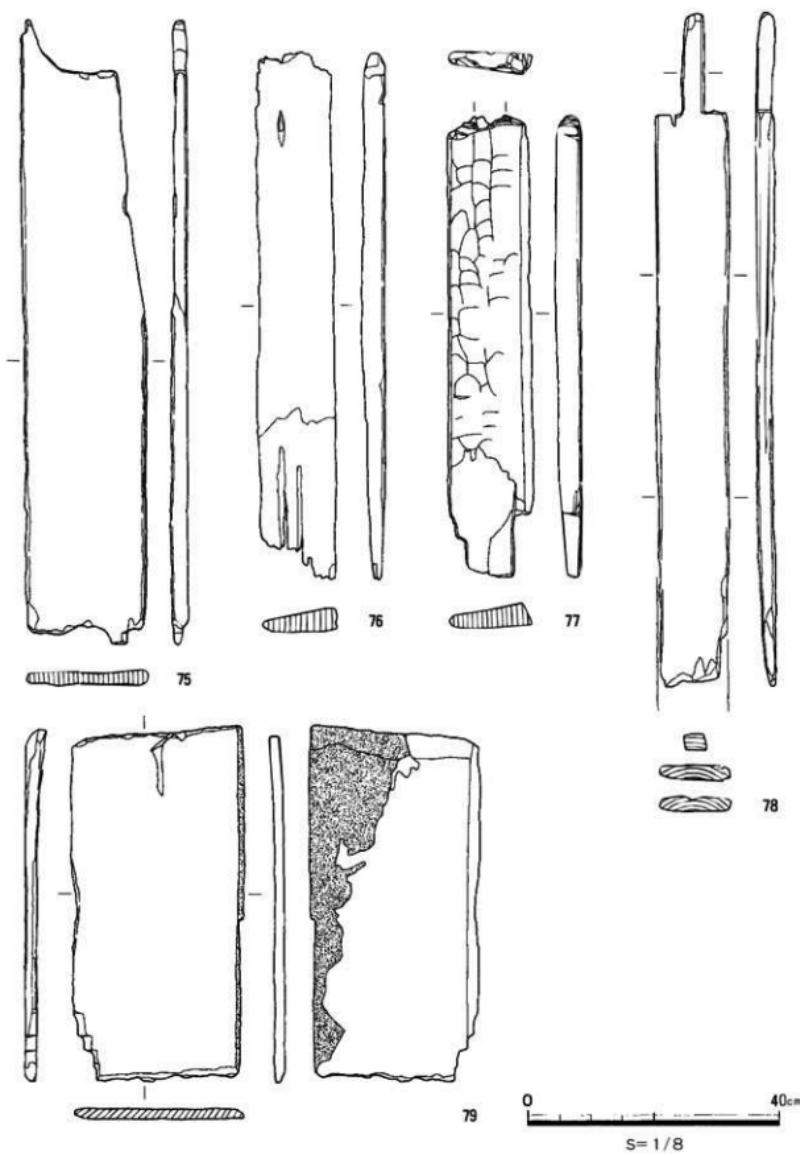


図148 木製品実測図(17)

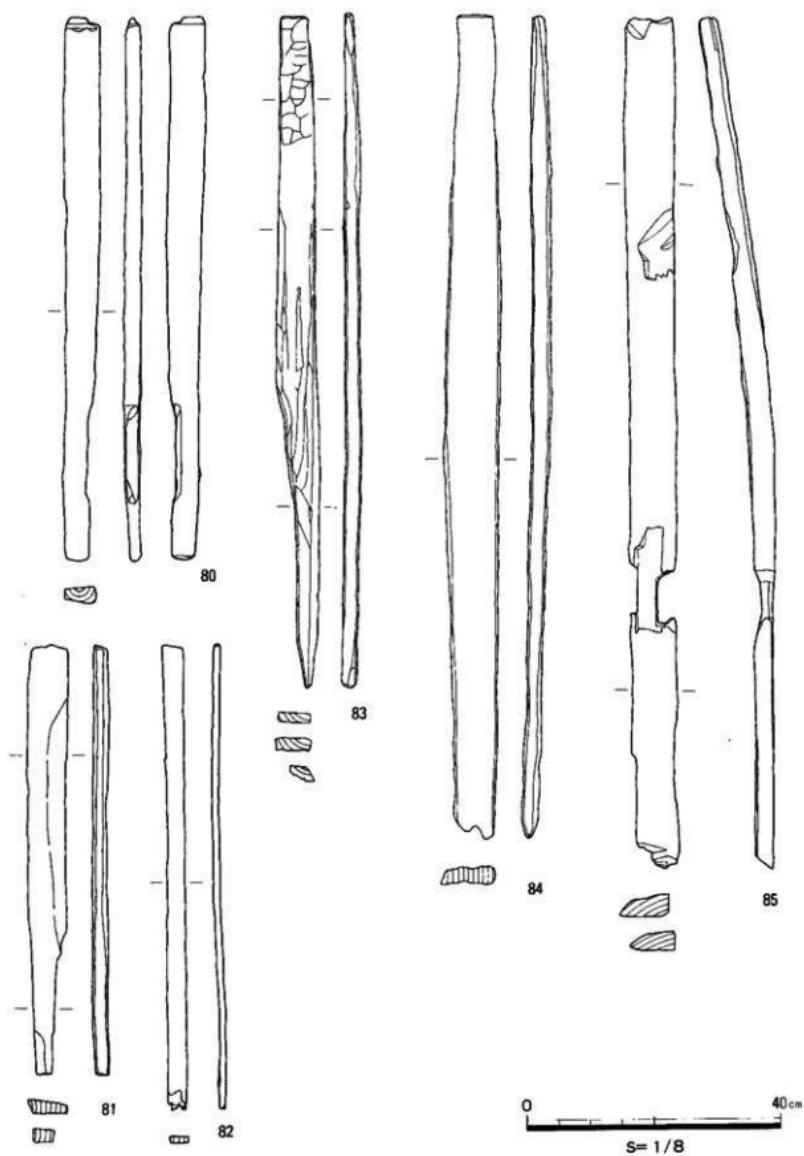


図149 木製品実測図(1)

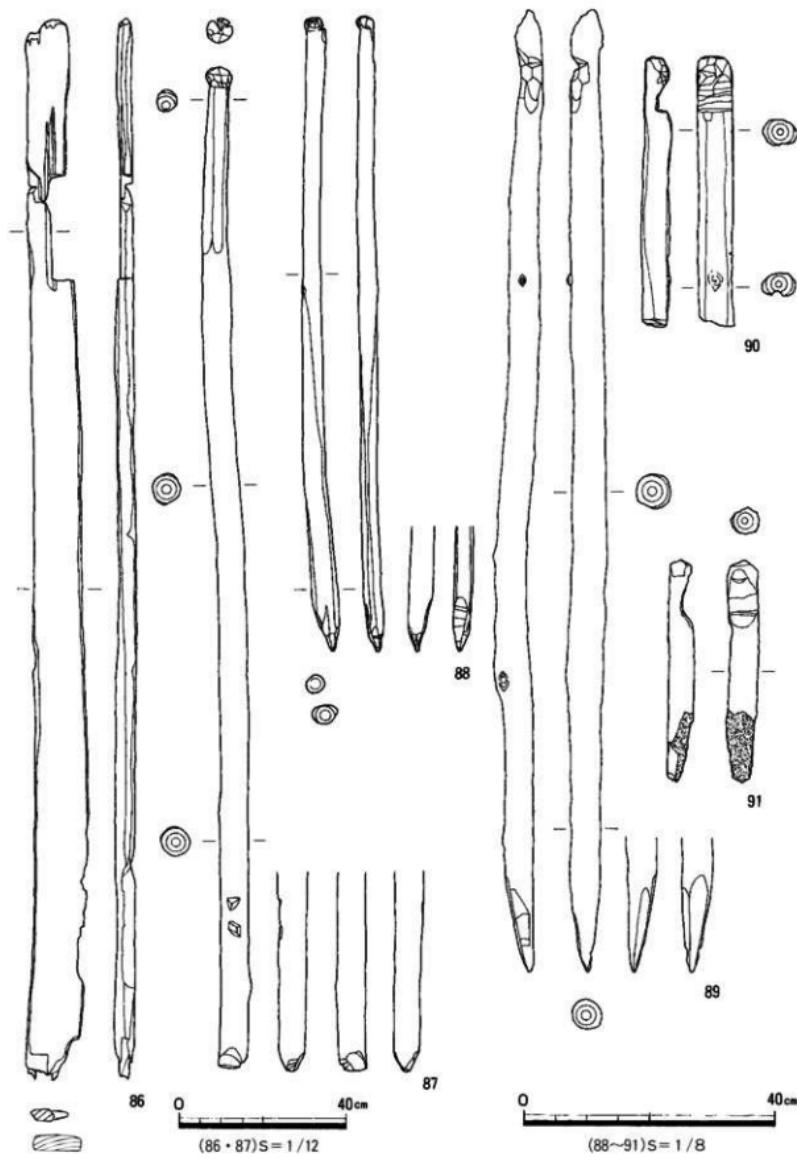


図150 木製品実測図19

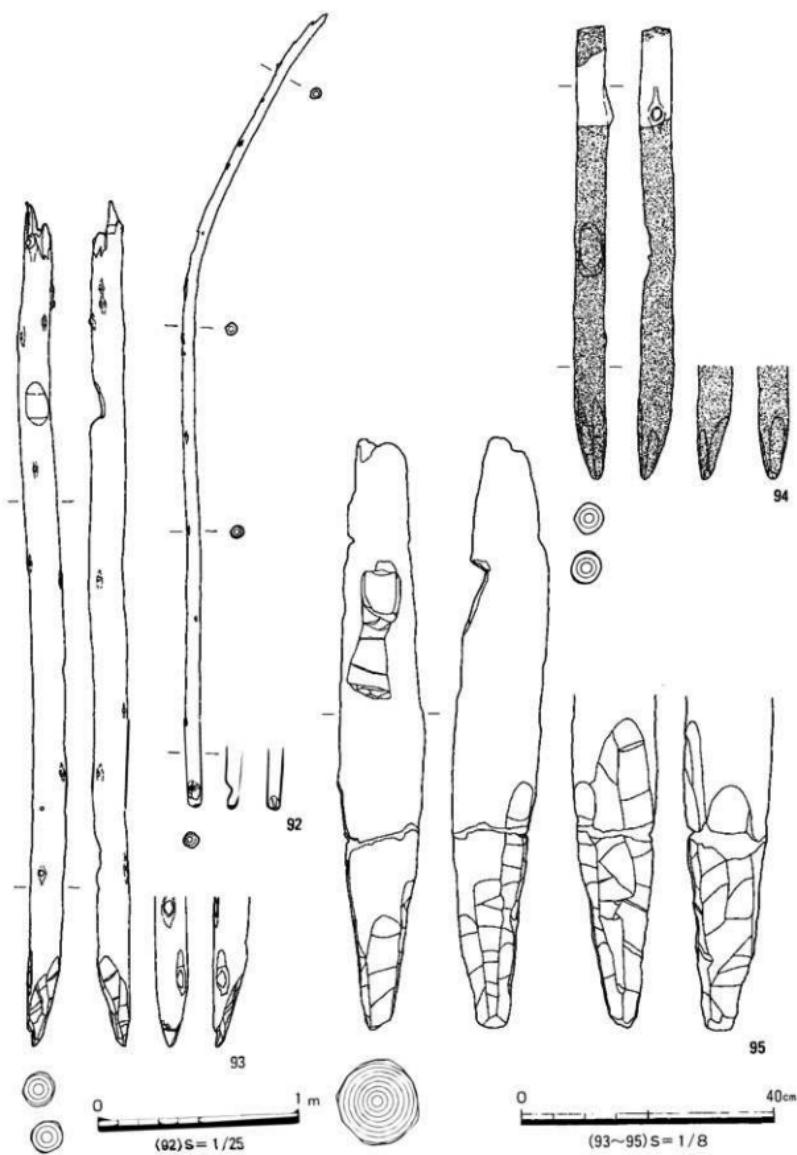


図151 木製品実測図(2)

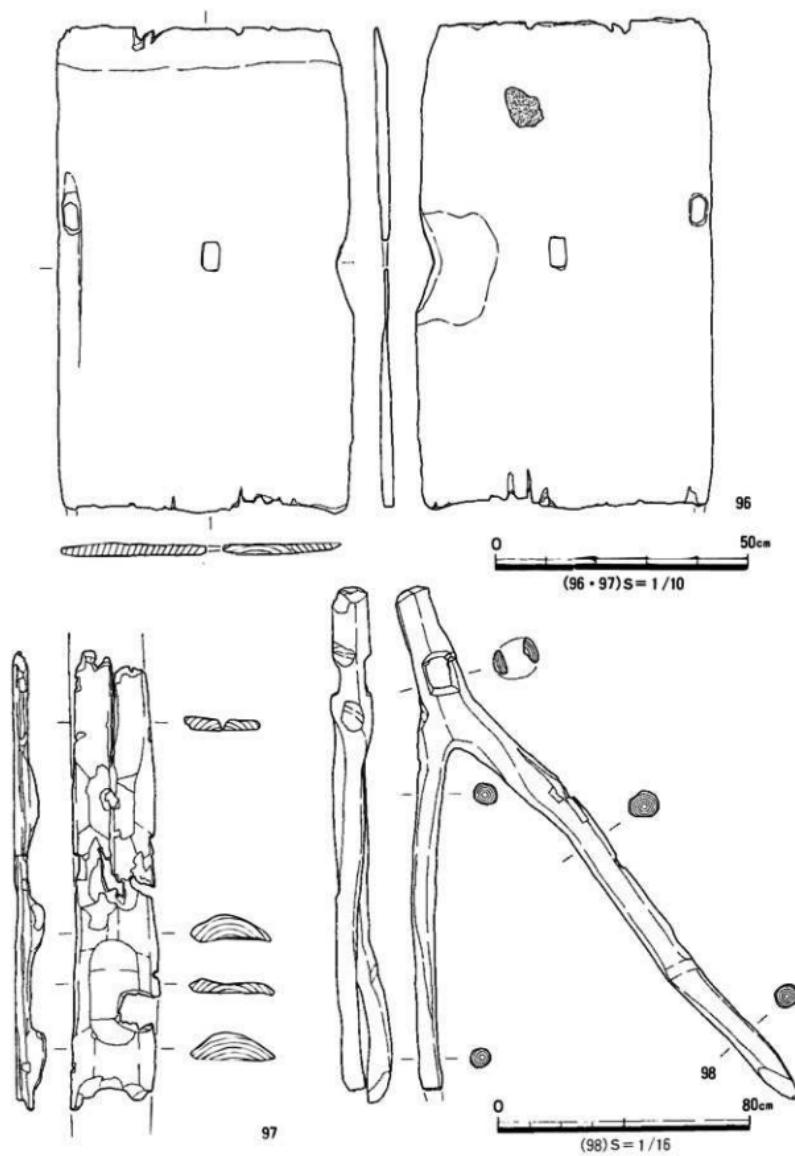


図152 木製品実測図21

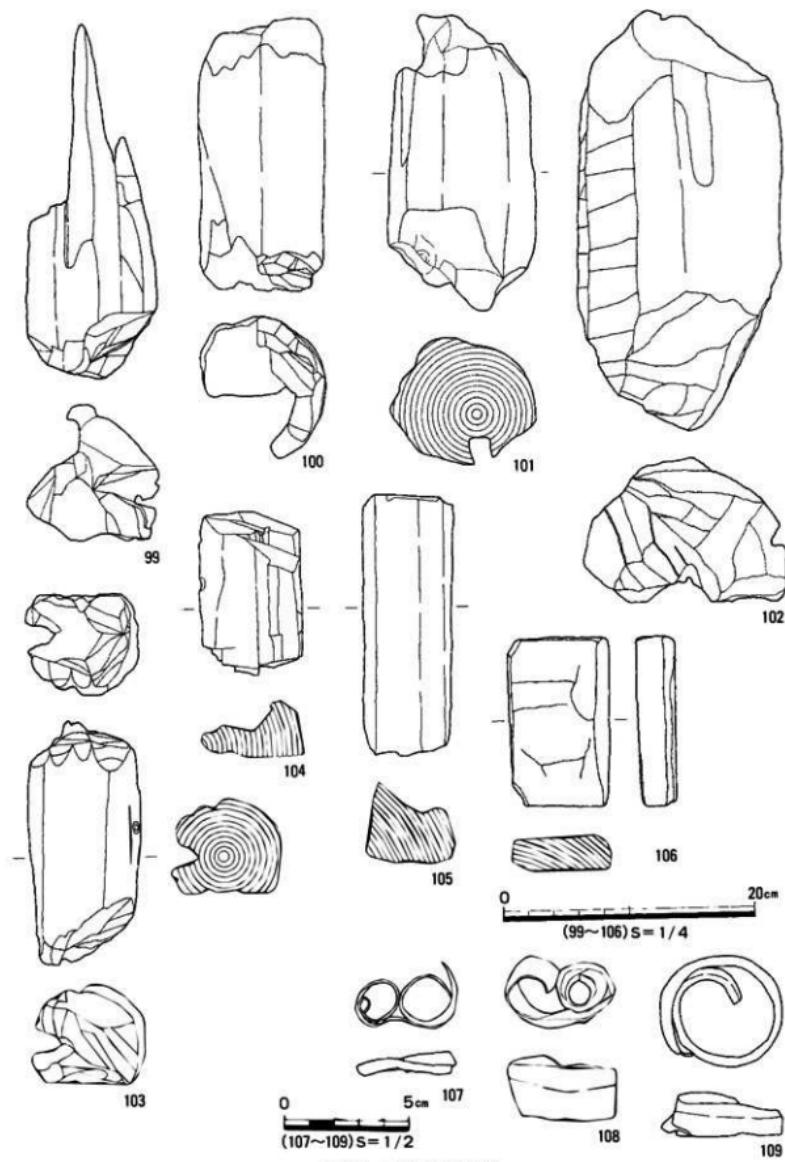


図153 木製品実測図(2)

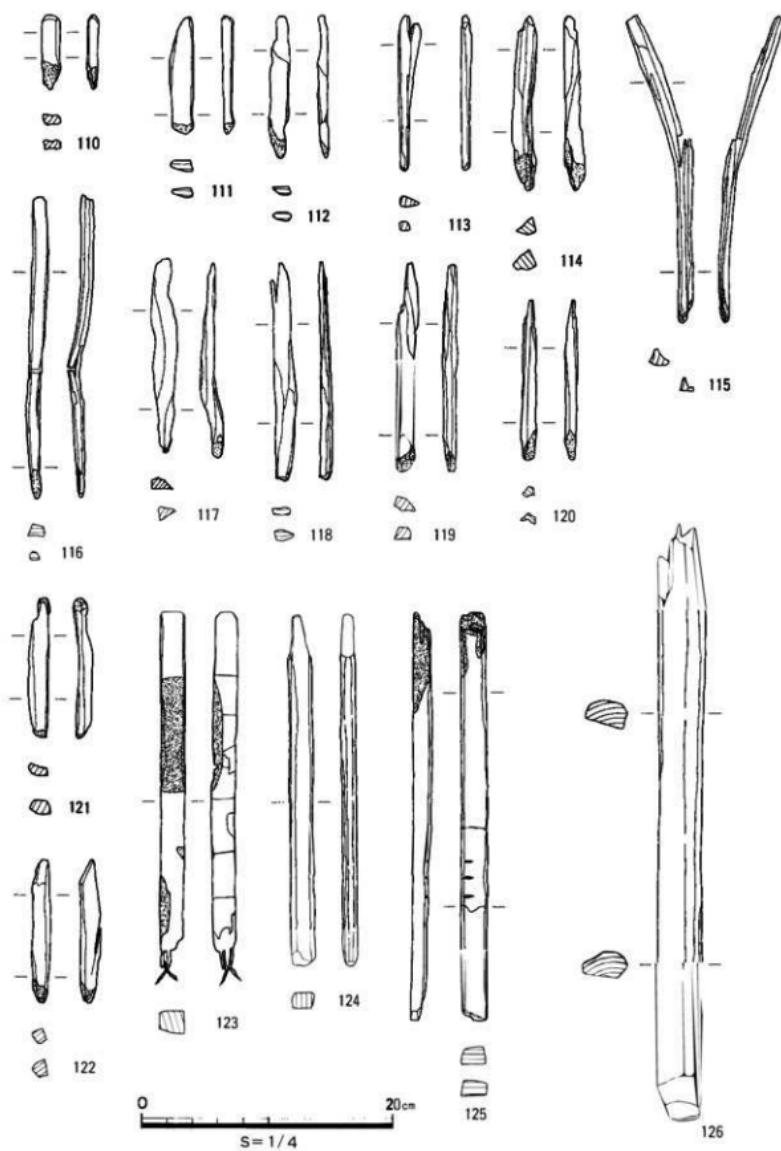


図154 木製品実測図23

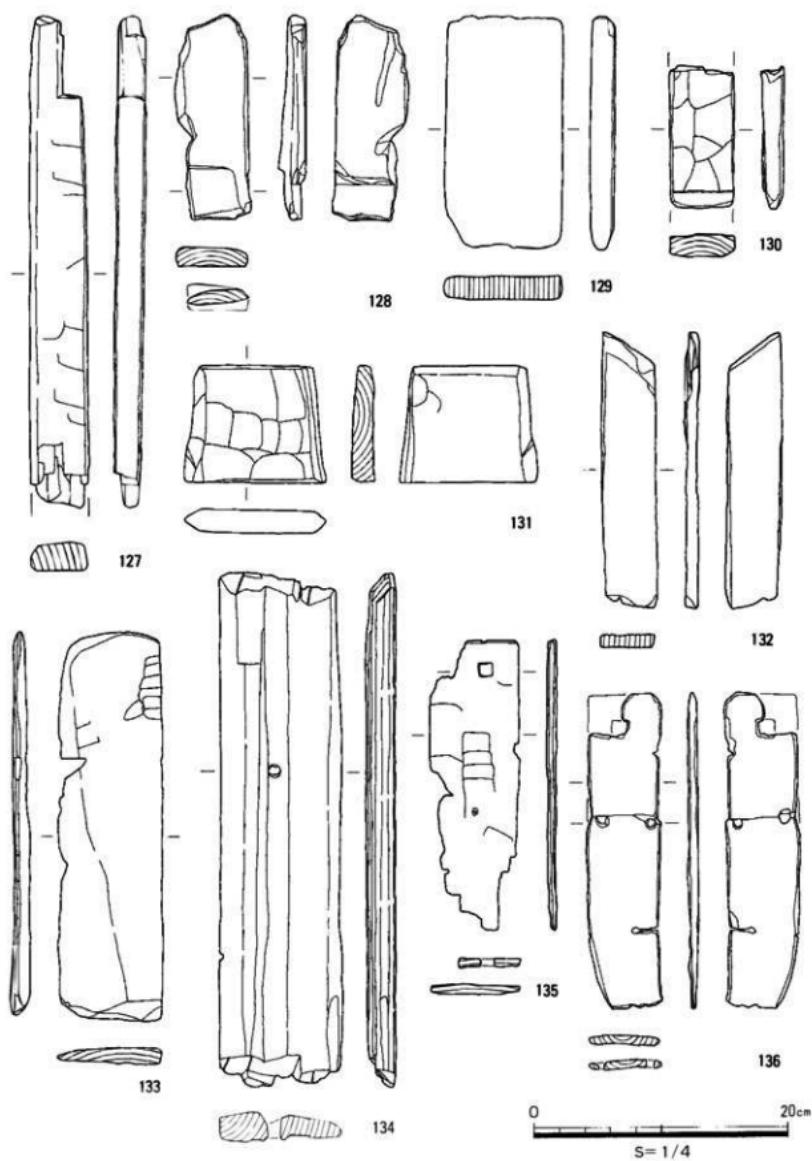


図155 木製品実測図(2)

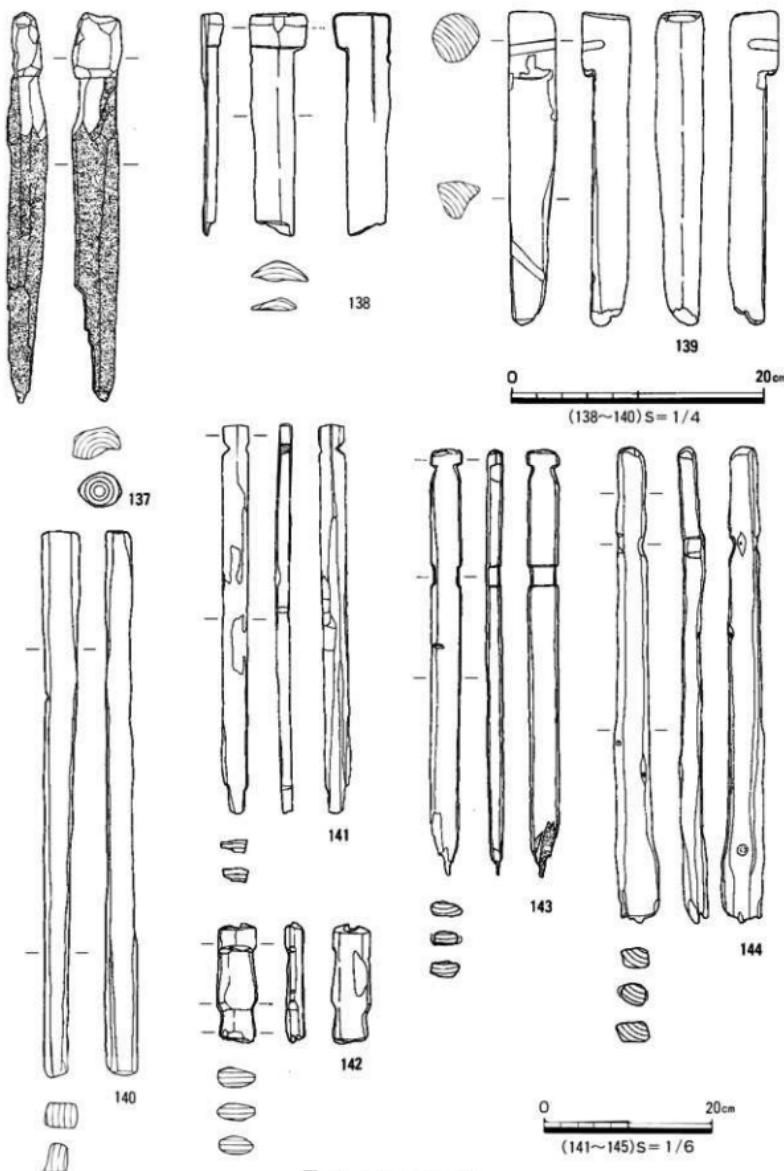


図156 木製品実測図25

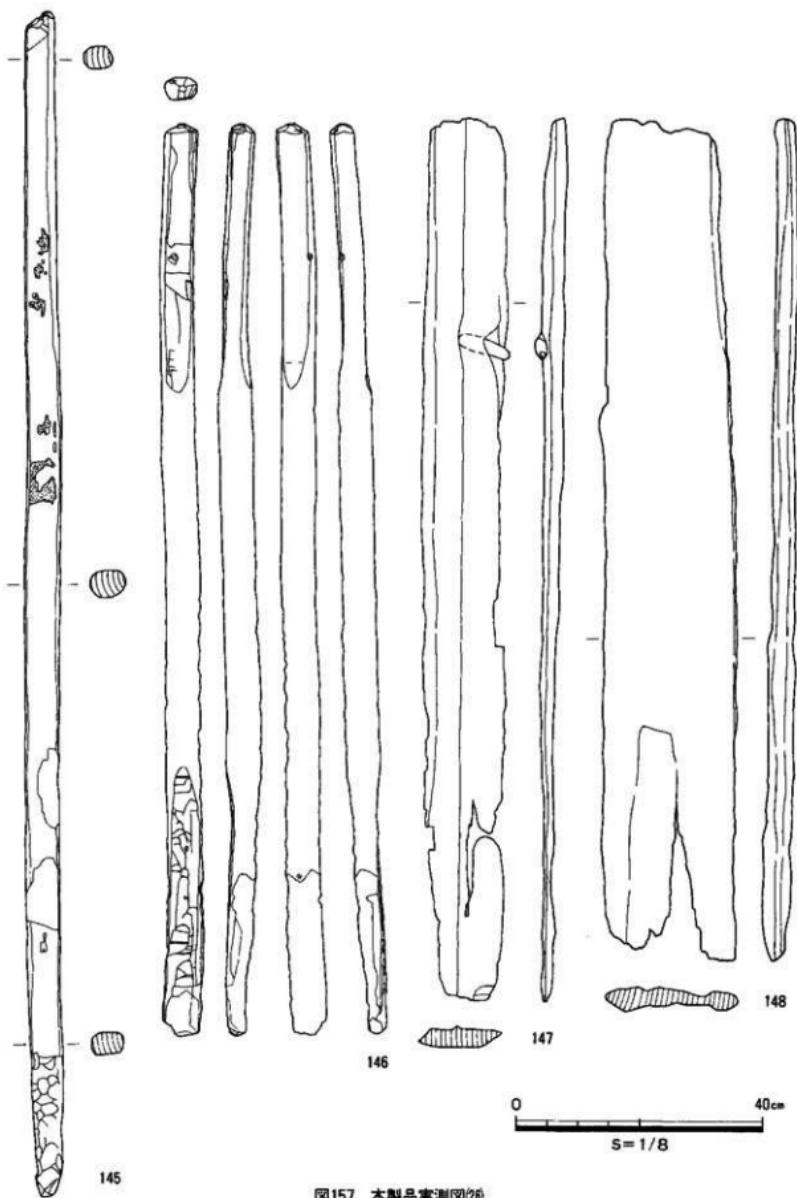


図157 木製品実測図26

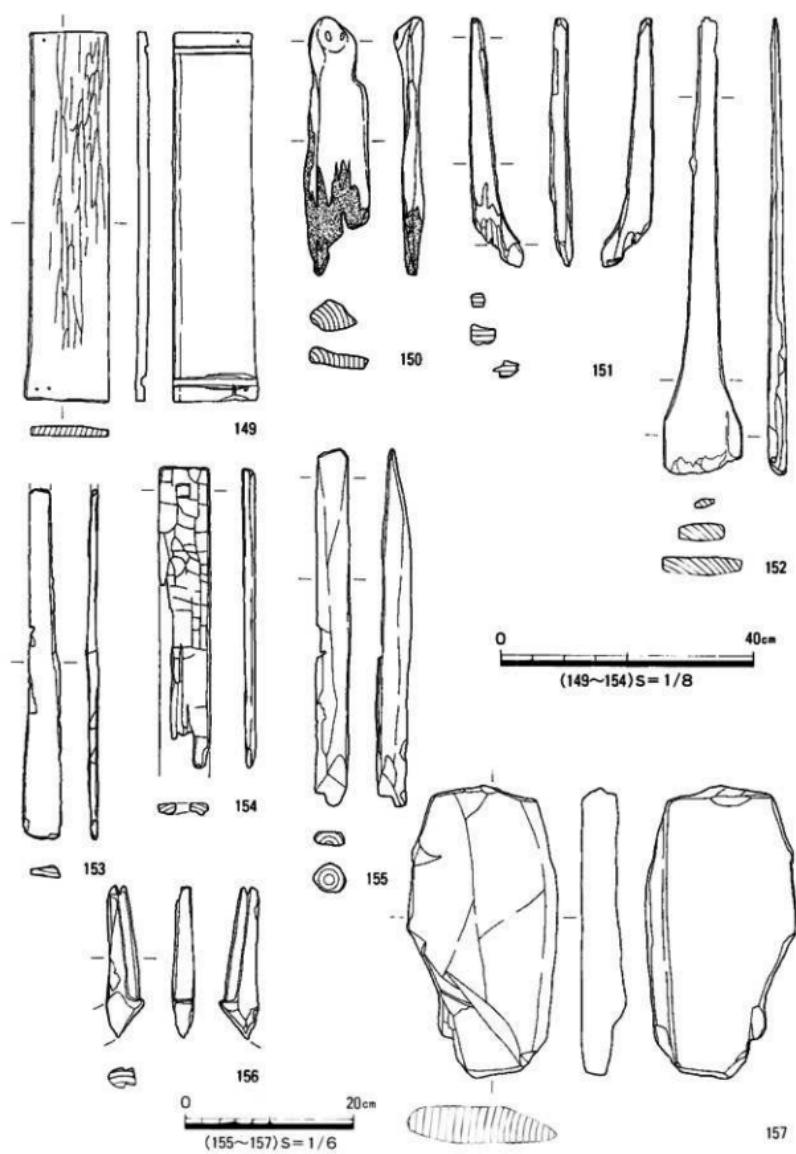


図158 木製品実測図27

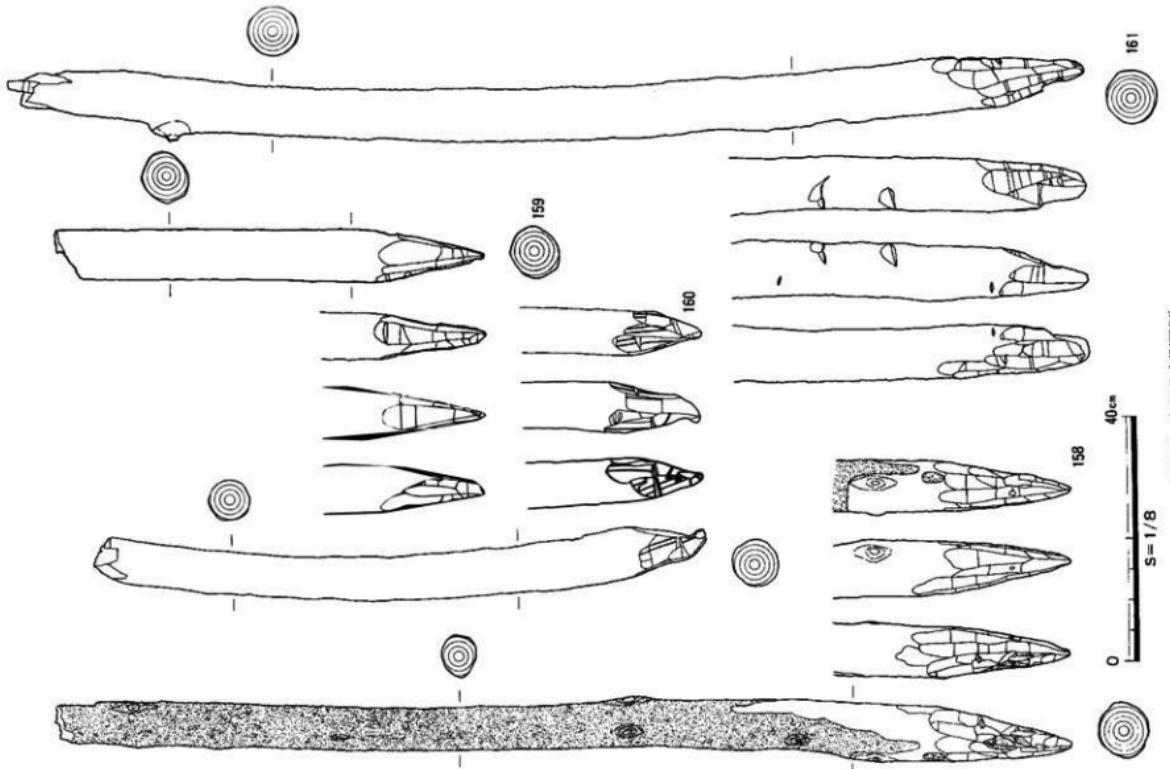
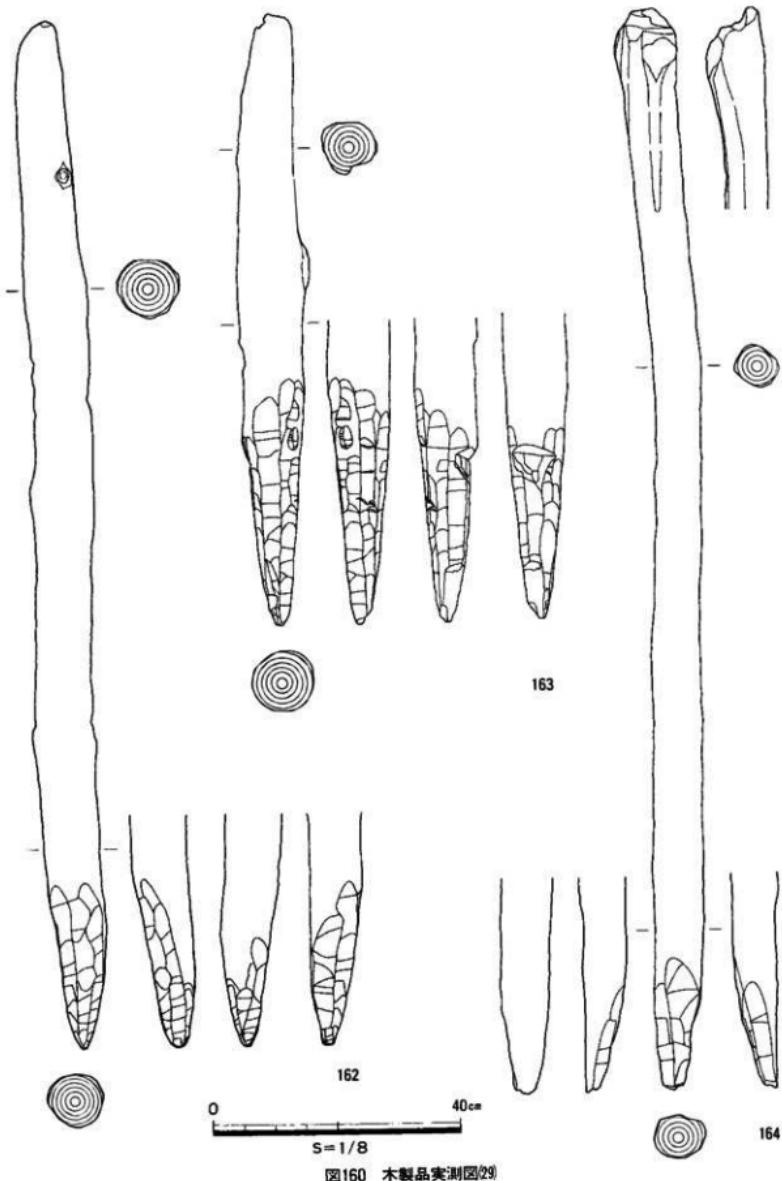


図159 木製品測図28



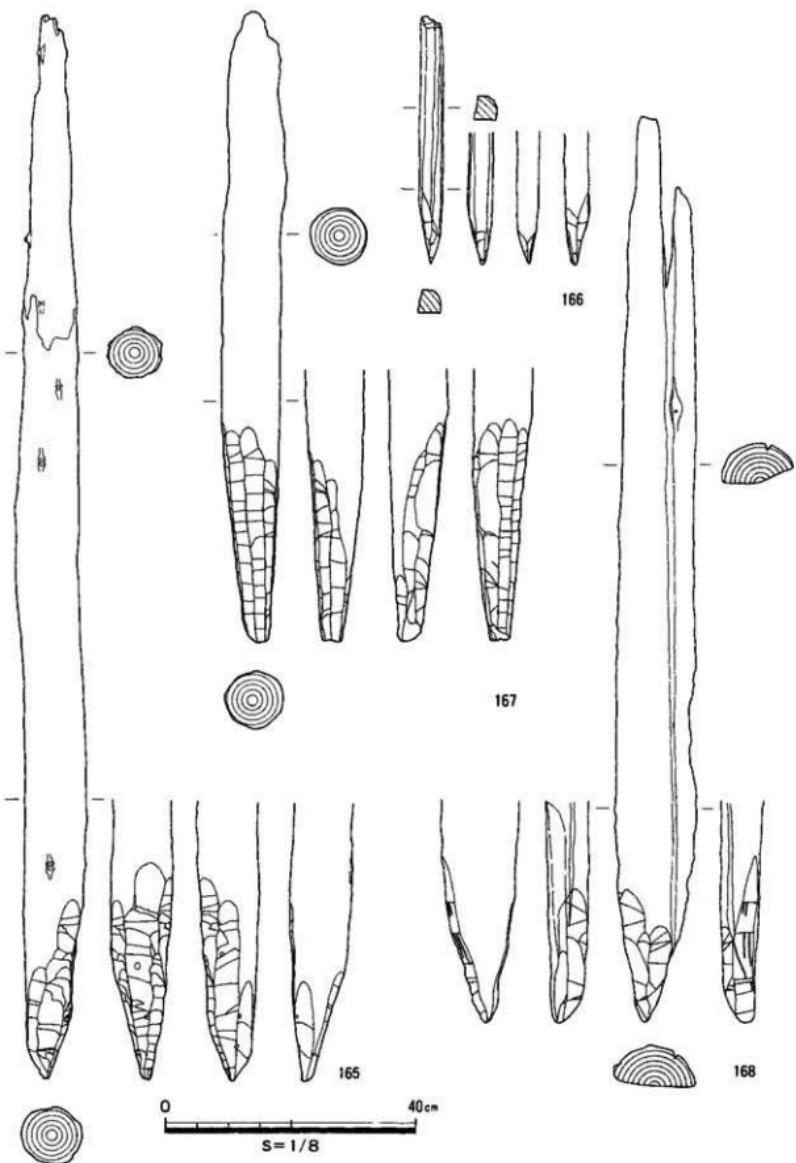


図161 木製品実測図30

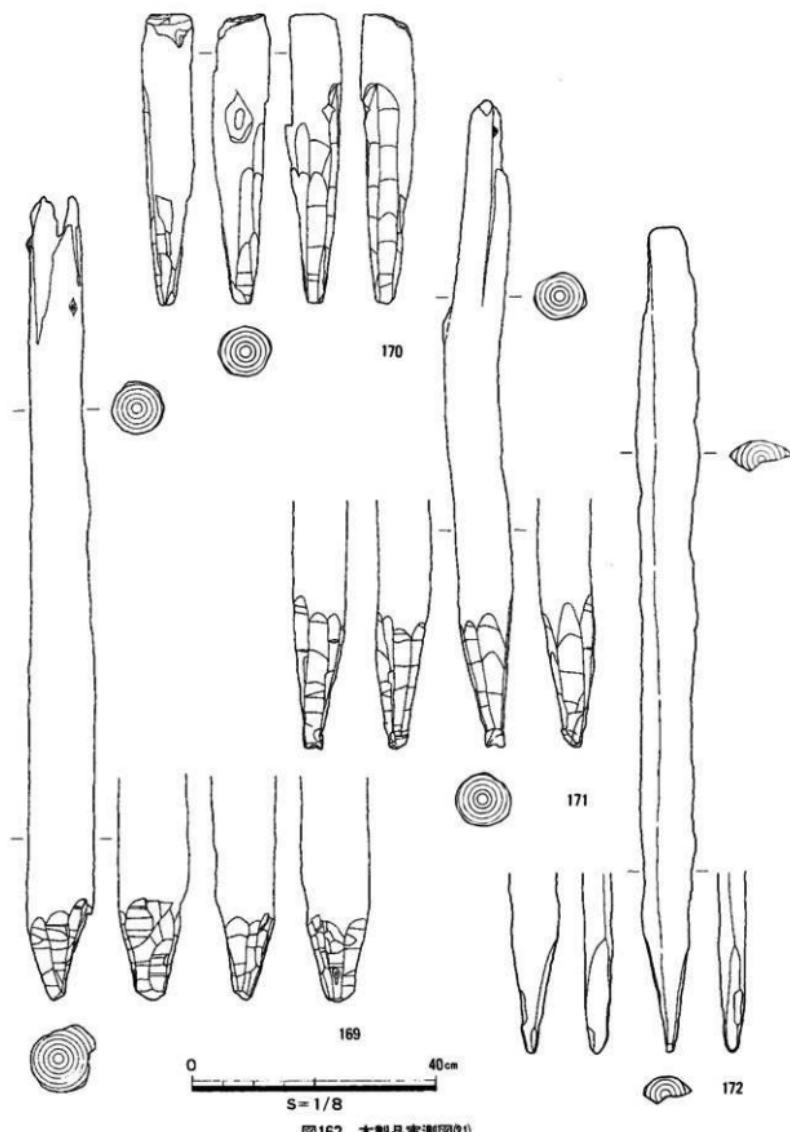


図162 木製品実測図(3)

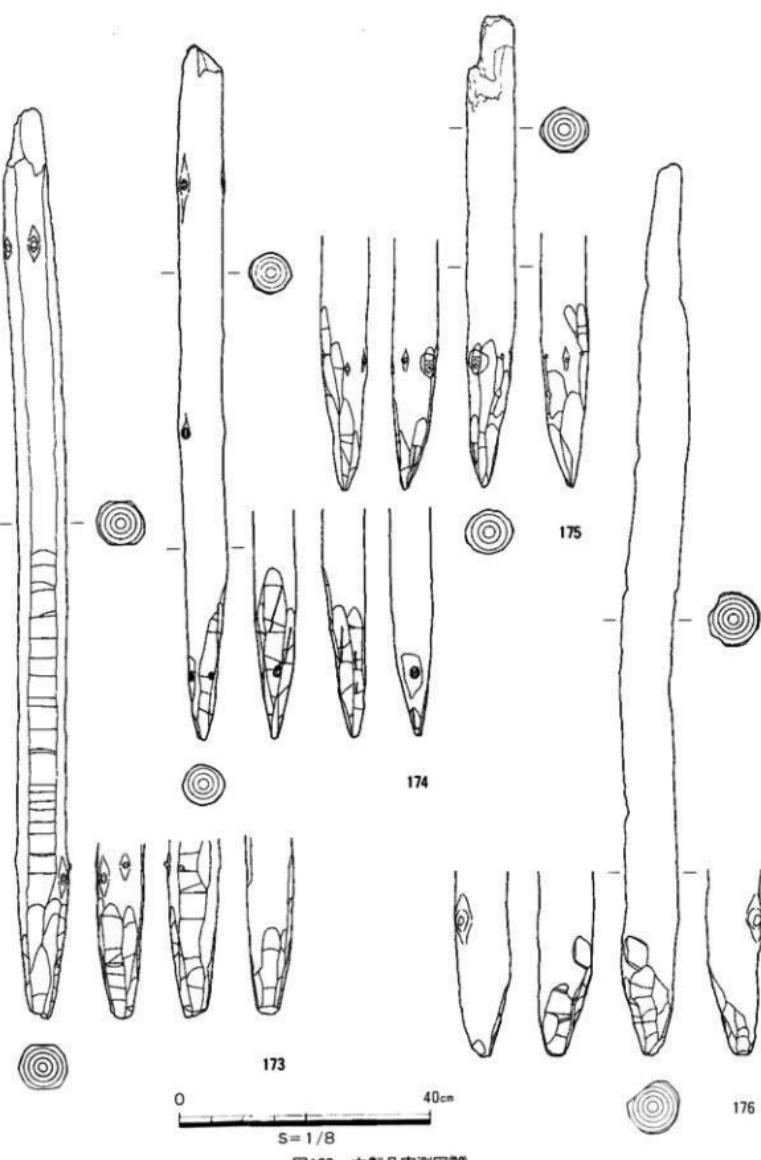


図163 木製品実測図32

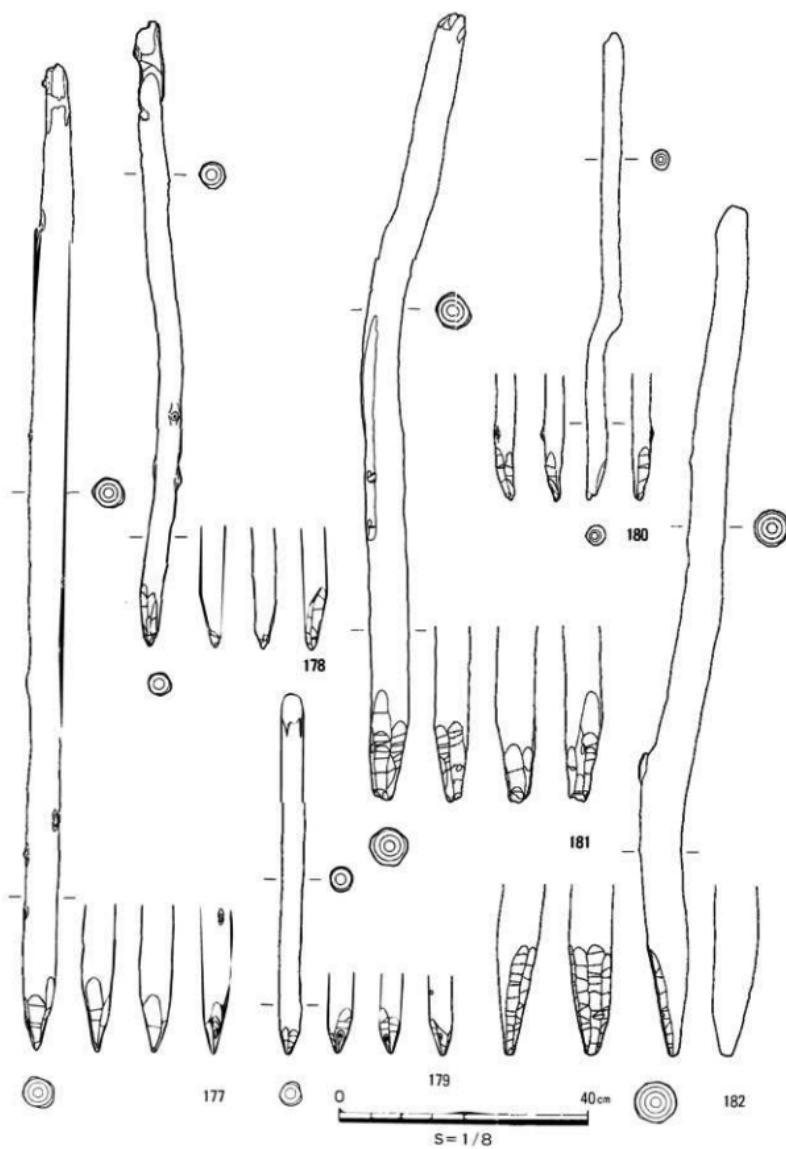


図164 木製品実測図(3)

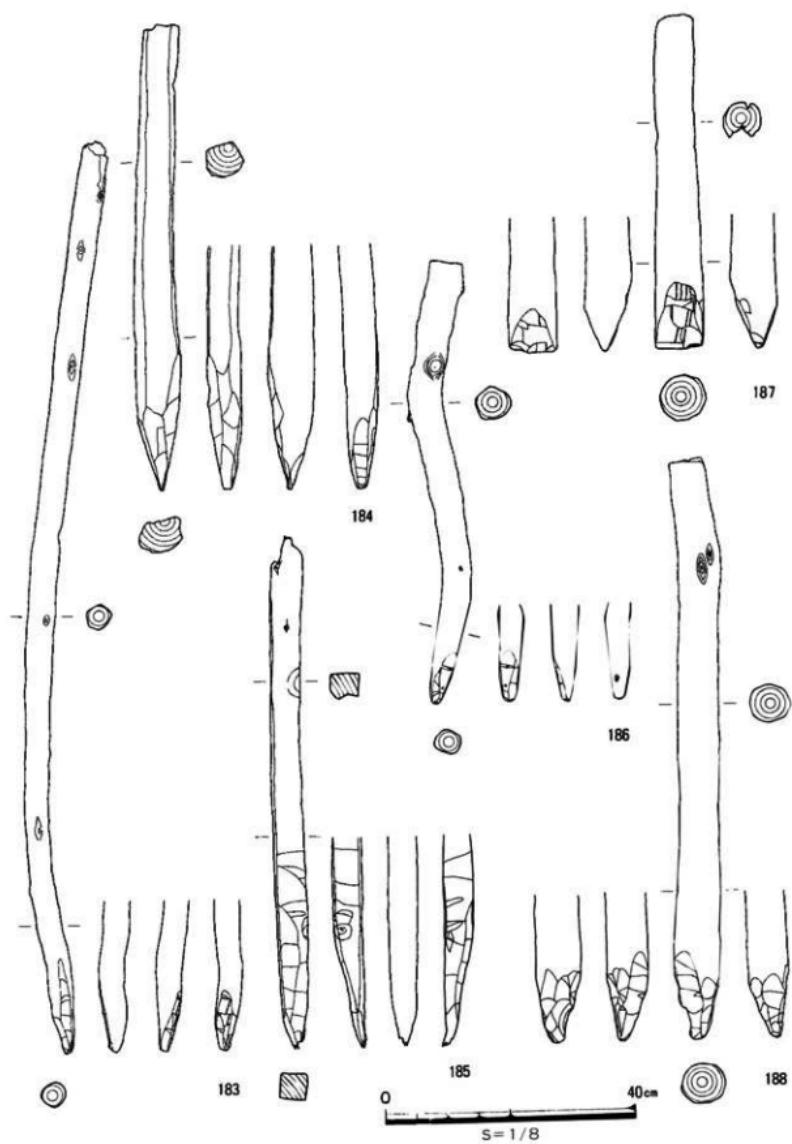


図165 木製品実測図34

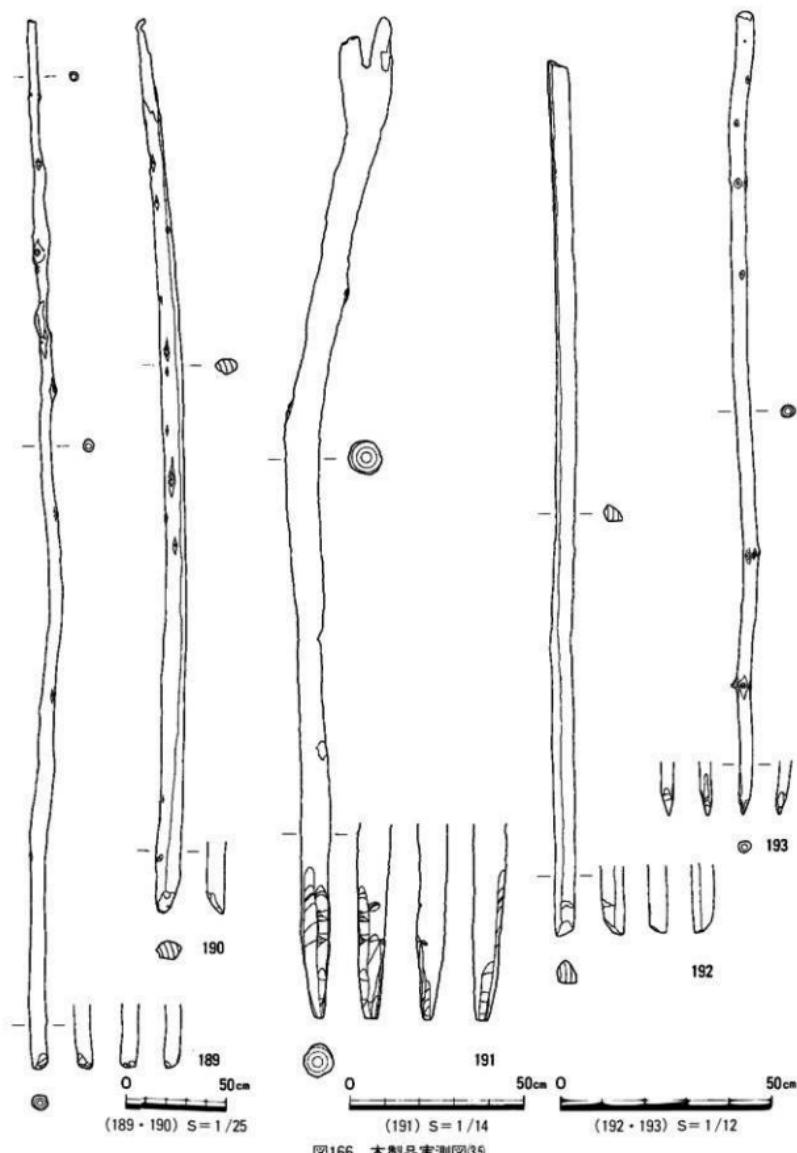


図166 木製品実測図35

表49 木製品観察表(1)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法		本取り	樹種	整理番号	検査番号	回収番号
					幅厚さ	幅厚さ					
1	ナスピ 型藤柄 広頭	SD7	長さ 幅 厚さ	(44.2) 15.1 1.4	軸頭部が欠落している。前面・後面とも比較的平坦なつくりで、輪部中央には縦縫目らしいかすかな段が確認できる。刃部側面は最も大幅の部位より下方に刃を削り出しており、刃縁部は炭化している。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	46	132	100
2	ナスピ 型藤柄 広頭	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(34.8) 14.5 1.4	輪部と刃部側面が欠落している。前面・後面とも比較的平坦なつくりで、刃部側面と刃縁部は丸みを帯びている。刃部下方の刃面は欠落している可能性が高いが、鉄製作芋字型刃先が残されている可能性がある。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	94	132	100
3	ナスピ 型藤柄 二又頭	SD7	長さ 幅 厚さ	(46.7) 13.8 1.5	刃部左側面、笠部右側は欠落している。前面は平坦で後面は頭部に突起を有する。左右両刃部の内側面は刃を削り出されているが、刃部右側面は中央下方のみ刃が確認できる。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	39	132	100
4	ナスピ 型藤柄 二又頭	SD7	長さ 幅 厚さ	(29.8) (10.8) 1.5	刃部が欠落している。前面・後面とも比較的平坦なつくりであるが破損が激しく定かではない。笠頭部は丸みを帯びている。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	314	132	100
5	ナスピ 型藤柄 源	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(20.2) (11.4) (1.6)	刃部と頭部は欠落している。前面は平坦で、輪部が断面薄鋸形を呈する。笠部側面に加工痕が残り、笠部頭は丸みを帯びている。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	1011	132	100
6	ナスピ 型藤柄 源	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(26.7) (8.1) (1.3)	刃部と笠部右側が欠落している。前面・後面とも比較的平坦なつくりで、輪部頭部は削り、後面から斜めに削られ、尖り気味に仕上げられている。なお、輪部の大半が炭化している。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	860	133	100
7	藤柄広頭	SD14	長さ 幅 厚さ	(58.0) (15.6) (3.3)	刃部側面と刃縁部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から下方にかけて緩やかに傾斜している。輪部と刃部の境は不明瞭で、輪部中央がわずかに凹んでいる。刃部側面は最も大幅の部位よりやや上方から刃を有する。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	743	133	100
8	藤柄広頭	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(47.5) (11.7) (2.3)	輪部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜する。刃部後面上方に半円形が三角形に近い形態で平坦面を作りおり、下方は粗い加工痕が残る。輪部と刃部の境は明瞭で、刃縁部のみ刃を有する。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	861	133	101
9	藤柄三 又頭	SD14	長さ 幅 厚さ	(29.0) (9.7) (2.8)	刃部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜する。輪部は断面多角形を呈し、輪頭部は後面に断面薄鋸形の溝を有する。刃部上方は平面形が三角形に近い形態で平坦面を作りおり、刃部側面は肩部下方より刃を有する。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	117	133	101-102
10	藤柄鍼	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(16.3) (6.3) (2.2)	輪部頭と刃部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から中央にかけて緩やかに傾斜している。輪部は断面薄鋸形を呈し、輪部と刃部の境は明瞭である。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	258	133	101
11	藤柄三 又頭	SD10 下層	長さ 幅 厚さ	(61.2) (13.1) (2.8)	輪部頭と左右刃部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜する。輪部は断面薄鋸形を呈し頭部には突起を有する。輪部と刃部の境は明瞭で前面に斜めに削られたり、刃部上方は平面形が三角形に近い形態で平坦面を作っている。刃部内側面にも刃を有し、刃部中央の先端は尖っている。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	859	134	101
12	藤柄三 又頭	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	54.8 17.8 1.7	刃部中央、刃部右側は欠落している。前面は平坦で後面は輪部中央から上方にかけて斜めに削り込み頭部に突起を作り出している。刃部左側には外側面と中央面とが鏡面で尖るが、刃部右側ははずれもばば垂直に面を有し、刃縁のみ刃を削り出している。刃部後面は断面薄鋸形で近い形態で平坦面を作っており、輪部と刃部の境は明瞭である。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	36	134	101
13	藤柄三 又頭	SD10 下層	長さ 幅 厚さ	(35.1) (8.0) (2.7)	刃部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜する。輪部は断面薄鋸形を呈し、輪頭部は後面を削り込み長さ1.9cmの平坦面を作っている。なお、輪部と刃部の境は明瞭である。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	250	134	101-102
14	藤柄三 又頭	SD14	長さ 幅 厚さ	(37.6) (3.4) (2.5)	輪部頭と左右刃部、刃部中央先端が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜している。輪部は断面薄鋸形を呈し、輪部と刃部の境は明瞭である。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	308	134	102
15	藤柄三 又頭	SD10 下層	長さ 幅 厚さ	(48.1) (4.0) (2.8)	輪部頭と左右刃部、中央刃部先端が欠落している。前面は平坦で後面は刃部上方から緩やかに削斜する。輪部中央には研磨のための溝が削り込まれ、輪部と刃部の境は明瞭で前面に内側に段がみられる。前面、後面、側面に細かな加工痕が残り、刃部中央の側面の形態は丸い。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	1009	134	102
16	藤柄鍼	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(24.9) (7.0) (1.9)	刃部が欠落している。前面は平坦で輪部は断面薄鋸形を呈する。輪頭部は後面を削り込み平坦面を作っている。		柾目	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	259	135	102

表50 木製品観察表(2)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	本取り	樹種	整理番号	樹齢番号	固形番号
17	又歛	SD14	長さ 幅 厚さ	(25.3) (5.3) 1.5	又歛の刃部片であり、先端が欠落している。内外面とも刃を削り出し、内面より外面の方が薄い。乾燥によるためか刃部上方が歪んでいる。	極目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	118	135	102
18	膝柄	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	(9.1) (3.0) 2.2	刃部が欠落している。前面は平坦で、軸部が断面薄鉗型を呈する。頭部は溝を削り出すことで突起を作りだしている。	極目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	740	135	102
19	泥除	SD 7	長さ 幅 厚さ	(13.3) (28.3) (2.0)	上半部が欠落している。平面形は逆台形を呈し、後面に左から右へ横位には刃幅約3~5cmの手斧痕が並んでいる。納孔は方形をして幅22mm、着柄角度約5度である。刃縁は丸みを帯び、表面は垂直な面を有している。なお、欠落部下方に小穿孔が3つ確認できる。	極目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	1306	135	103
20	柄孔横歛	SD 7	長さ 幅 厚さ	(19.9) (22.1) (1.7)	上半部と右側面が欠落している。平面形は方形を呈し、中央付近に幅2.4cm、着柄角度約5度の柄孔が穿たれている。側面は垂直な面を有し、刃縁部は刃を作り出している。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	1307	135	103
21	泥除	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	(9.0) 22.6 1.4	下端部が欠落している。表面は平坦であり、裏面は輪側面と上端が丸みを帯びている。中央には長さ4cmの方形孔が穿たれている。	極目	ミカン科 キハダ属 キハダ	1321	135~ 136	103~ 104
22	直柄	SD12 下脇	長さ 直径	(79.6) 2.5	先端が欠落している。頭部は表面が三角形に突出しており断面方形を呈する。軸部は断面円形を呈し先端部は方形状を呈する。先端より8.5cm上には泥除を受けるための段がみられ、さらにも先端より20cm上の裏面には軸と垂直方向に切り欠きを有する。	削材	ミカン科 キハダ属 キハダ	1322	136	104
23	柄孔横歛	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	17.7 21.0 1.6	刃部が一部欠落しているがほぼ完存である。表面はほぼ平坦で、裏面に泥除を受けるための凹凸部を有する。刃部は左側ばかりすり減っており、刃縁部には使用痕と思われる細かい削痕が残る。表面面でも輪位の手斧痕が残り、中央には長さ2.5cmの方形孔が穿たれている。	極目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	1320	136	103~ 104
24	柄孔広歛未製品	SD14	長さ 幅 厚さ	(45.4) (16.5) (4.1)	前面は平坦で後面は上面が丸く、下部が細く伸びて尖る隆起部をもつ。刃部は断面台形を呈するように削り残されており、最も厚みがある。	極目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	542	137	106
25	柄孔広歛未製品	SD10 下脇	長さ 幅 厚さ	(31.5) (13.9) (2.7)	前面は平坦で後面は梢円形に近い隆起をもつ。隆起部と刃部に下から上へ縱位に手斧痕が並んでいるが、欠損が激しく全体の調査は定かでない。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	139	137	106
26	一本歛	SD14	長さ 幅 厚さ	(35.6) 13.6 2.6	刃縁部と刃部上方、軸部が欠落している。前面は平坦で後面は刃部中央から側面にかけて緩やかに傾斜する。側面は残存している箇所はいずれも尖っている。143に比べ厚いので未製品の可能性もある。	板目	バラ科 サクラ属	960	137	104
27	一本歛	SD14	長さ 幅 厚さ	(45.3) (15.5) 1.8	刃部上方と軸部が欠落している。前面は平坦で後面はなだらかな丸みを帯び、刃縁部は薄く尖らせてある。なお、ほぼ結合法の組み合わせ勘定の可能性もある。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	961	137	104
28	柄孔多本歛	SD10 下脇	長さ 幅 厚さ	(36.9) (7.7) (1.4)	刃部左右側面と軸部右側面が欠落している。前面は平坦で後面は軸部と刃部の境に段を有する。乾燥により若干歪んでいる。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	454	138	106
29	田下歛	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	53.9 14.3 1.6	下端中央が欠落している。方形を呈し両端の中央に横長の繋縫孔1つづき穿たれている。縫孔は3孔でいずれも円形を呈する。表面面とも幅2~4cmの刃痕が輪位にみられる。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	1022	138	106
30	田下歛	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	(51.2) 13.5 1.7	上端が欠落している。方形を呈し上端の中央に横長の繋縫孔2つ、下端の中央に1つ穿たれている。縫孔は3孔でいずれも円形を呈する。表面面とも幅2~3cmの刃痕が輪位にみられる。	極目	ヒノキ科 アスナロ属	3	138	107
31	田下歛	SD12 下脇	長さ 幅 厚さ	49.6 14.9 1.7	ほぼ完存している。方形を呈し上端の中央に横長の繋縫孔1つ、下端の中央に2つ穿たれている。縫孔は3孔でいずれも円形を呈する。表面面とも幅2~3cmの刃痕が輪位にみられる。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	1021	138	107
32	豎杆	SD10 下脇	長さ 直径	80.0 8.2	完存している。推き端部は一方は比較的平坦で、一方は半球形に近い形状である。握り部は緩やかに削り込まれており、推き部との境は明瞭である。	芯持ち材	ツバキ科 ツバキ属	40	139	105

表51 木製品観察表(3)

実測番号	器種	通稱部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	検査番号	回数
33	堅杵	SD10下層	長さ 直径 7.1	98.3	ほぼ完存しているが部分的に欠落している。掘き端部は両端とも平坦で、握り部との境には粗い加工痕が残る。	芯持材	ツバキ科 サカキ属 サカキ	352	139	107
34	堅杵	SD10下層	長さ 直径 (44.5) 7.9	(44.5)	掘き部の一方が欠落している。掘き端部は半球形に近く、握り部との境は不明瞭である。	芯持材	ツバキ科 ツバキ属	651	139	107
35	作業台	SD14	長さ 幅 厚さ 12.1 9.9	53.8	ほぼ完存している。台部は断面長方形を呈し、上面と下面に凹みが跡ある。また、一側面の下方には彫み痕がある。把手部は長さ23.7cmを測り、軸先端部付近には浅い凹みが数状残る。	丸木 芯持材	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	277	139	107
36	箱物	SD10上層	長さ 幅 厚さ 15.0 8.4	49.4	長辺の長方形の板材に方形の穿孔を2ヶ所に穿り、短辺の両端のほどぞと組み合わせる構造である。欠損が激しく、乾燥のため板材の上端部が垂んでいる。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	151	139	105
37	大足檜 棒	SD 4	長さ 幅 厚さ 80.8 4.4 4.5	一辺1.0~1.5cmの方形孔をほぼ8cm間隔で10孔穿っている。そのうち、4つの孔に木片(樹種はヒノキ科ヒノキ属)が差し込まれていた。断面薄片型を呈し、平面部の一部が変化している。なお、上端と下部には繋縛痕がわざかに残る。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	442	140	108	
38	大足檜 棒	SD12下層	長さ 幅 厚さ (30.9) 4.1 2.9	(30.9)	一辺1.4~1.8cmの方形の未貫通の穿孔3つと貫通孔2つが5~6cm間隔で並んでいる。断面薄片型を呈し、平面部と側面には繋縛痕と思われる溝状の浅い凹み・穿孔の間に3~5状みられる。また、表面が一部炭化している。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	1221	140	108
39	大足檜 棒	SD10上層	長さ 幅 厚さ (27.2) (4.7) (2.0)	(27.2)	上面が炭化しており表面は欠落しているので断面形状は特定できない。一辺1.5cm前後の方形孔が10.2cmの間隔を置いて並んでいる。	柾目	ブナ科 クリ属クリ	1082	140	108
40	盤	SD14	長さ 幅 厚さ 69.9 (27.4) 1.8	69.9	容器の約半分と台脚が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。台脚は欠落しているが長辺に平行してつけられていた痕跡が残る。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	452	140	108
41	盤	SD15	長さ 幅 厚さ 70.2 (26.6) 1.5	70.2	容器の約半分が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。台脚は欠落しているが長辺に平行してつけられていた痕跡が残る。表面中央付近は炭化しており、欠落部は5ヶ所の補修孔が穿たれている。なお、補修孔内の板材の樹種はヒノキ科ヒノキ属アカガシ属である。	柾目	ヒノキ科 アスチロ属	158	140	108· 109
42	盤	SD10下層	長さ 幅 厚さ (52.8) (25.2) 12.6	(52.8)	容器の約3/4が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。台脚は長辺に平行しており、外側が直角、内側が斜めに立ち上がり方でそれを接着して接地面に至る。容器の裏面と断面に粗い加工痕が残り、ヤマザクラないしはカバノの樹皮で補修している。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	351	141	109
43	盤	SD14	長さ 幅 厚さ 55.5 (20.0) 10.8	55.5	容器の約半分が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。台脚は長辺に平行しており、外側2面がほぼ垂直、内側2面が斜めにして傾斜している。裏表裏面の一部に細かい手斧痕が残り、5ヶ所補修孔が穿たれている。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	453	141	110
44	盤	SD 4	長さ 幅 厚さ (25.6) (10.7) 2.7	(25.6)	重みが重いのが容器の短辺と台脚である。脚台は外側が直角、内側が斜めに立ち上がり切、脚台上端は長さ15.4cm、下端は長さ6.0cmを測る。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	1305	141	111
45	盤	SD14	長さ 幅 厚さ (28.9) (5.3) 1.6	(28.9)	容器の一部が残存している。木取りから想定して表面の平坦面は容器の短辺である。下端部と上方が炭化しておらず、下端部の炭化は激しい。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	457	141	112
46	槽	SD14	長さ 幅 厚さ (93.4) (12.0) 2.0	(93.4)	右側面と下方が欠落している。口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。丸太の1/2削材の内部を抉って作られており、裏面中央には平坦面を有している。また、短辺の口縁部中央は皿状に抉られている。	柾目	ミカン科 キハダ属 キハダ	228	142	111
47	盤	SD10上層	長さ 幅 厚さ (57.3) (25.4) 1.5	(57.3)	容器の約半分が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。裏面の上下部には断面逆台形を呈する約3cmの溝が短辺に平行して作られている。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	164	142	111
48	盤	SD14	長さ 幅 厚さ 72.1 (40.5) 1.6	72.1	容器の約1/4が欠落している。平面形は方形を呈し、口縁部は短辺が長辺より厚手に作られている。裏面の上下部には断面逆台形を呈する約3cmの溝が短辺に平行して作られている。	柾目	ヒノキ科 ヒノキ属	159	142	111

表52 木製品観察表(4)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	補闕番号	回収番号
49	付枝状木製品	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(16.8) 4.1 0.2	下部が欠落している。上方にV字と台形の切れ込みをもち、切れ込みの頂点を結ぶラインに繊維痕が残る。なお、上端は平坦である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1311	143	112
50	琴柱	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	7.8 1.8 1.1	琴柱が連結しており、両端は欠落している。断面三角形を呈し、上端は2cmほど逆三角形に削み込まれ、下端は平坦である。なお、左上端部は腐食している。		マツ科 モミ属	1310	143	112
51	衣笠	SD10 下層	直径 高さ	6.0 2.2	円柱状を呈し、中央に直径5mmの貫通孔を有する。側面には直径3~5mmの大穴通の穿孔が8つあり、いずれも中央に向かって穿かれている。なお、穿孔内の材の樹種はクマツヅラ科ムラサキシノブ属である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1309	143	112
52	ミニチュア構紐	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	8.3 2.4 1.8	鍛打部・柄部と断面多角形を呈し、その境は明瞭である。柄部下方は肥厚し、先端は面をもたない。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1308	143	112
53	板状木製品	F26グ II層	長さ 幅 厚さ	(6.1) (2.9) 1.0	断面逆台形を呈する板材であり、上・下両側面が欠落している。表面には楕円形の瘤突が二つ重なって記されている。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1323	143	112
54	大足ほぞ穴構件	SD7	長さ 幅 厚さ	45.2 6.0 1.9	左右のほぞ先端は欠落している。左右のほぞは細長く、中央部は下方が厚く上端は尖り気味である。ほぞ穴は長さ4.3cm、幅2.7cmの方形を呈する。	板目	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	45	143	113
55	紡織機・中筒	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	30.9 5.1 1.9	完存している。両側にV字型を呈し、中央側面に三角形の削みを有する。右側面は垂直面をもち左側面は裏面から斜めに削り込まれた。表面は丸みをもつ裏面は内反り気味である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	44	143	113
56	琴?	SD14	長さ 幅 厚さ	(27.0) 8.6 1.7	尾部と槽部の一部が残存している。尾部は橢形を呈し槽の長さは5.9cmを測る。表面にはかすかな段を有する。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1303	143	113
57	膝納舟	SD10 下層	長さ 直径	(10.3) 3.0	装着部と握り部が欠落している。全面に細かな削りが施され、舟台部は平坦である。他の道具と比べ、極めて精緻な作りである。	丸木 芯持ち	ツバキ科 サカキ属 サカキ	753	143	112
58	樹皮製品	SD14	幅	4.0	平面構円形に丸くなる。		ヤマザクラor カバの樹皮	288	143	123
59	柱材	SD14	長さ 直径	490.9 9.2	塊の構木として転用されていた材である。先端は一方向から粗い削りがなされ尖っており、頭部から130cm下には長さ11.2cmの方形孔が穿たれている。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 アスナロ属	1034	144	113
60	柱材	SD7	長さ 幅 厚さ	350.1 14.8 4.8	裏面の一部が欠落しているが、両端は残存している。中央から上方は断面長方形を呈し、下方面は断面三角形に近い形状である。先端部30cmは腐食しているが、上方は比較的平滑である。頭部と中央には7~10mmの正方形の穿孔が穿たれ、上方の穿孔の周囲は長さ20cmの段を有する。	削材	バラ科 サクランボ属	1315	144	114
61	柱材	SD14	長さ 直径	232.4 14.8	両端部は欠落している。上方には構円形に近い穿孔が穿たれており、下方は細くなっている。穿孔表面と表面の一部が炭化している。中央から上方の表面は平滑に仕上げられている。	丸木 芯持ち	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	1035	144	114
62	柱材	SD15	長さ 幅 厚さ	334.6 10.6 6.6	下方が欠落している。断面三角形を呈し、上部には左右側面から横方向の穿孔が穿たれている。中央やや上方の両側面には方形の切り欠きを有する。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1319	144	114
63	柱材	SD10 上層	長さ 直径	(85.2) 19.5	両端部は欠落している。中央には上面長さ24cm、下面長さ16cmの断面コの字形の切り欠きがあり、表面に刻み込みの痕跡が残る。切り欠きの下には材の節の基部が残る。	丸木 芯持ち	ニレ科 ケヤキ属 ケヤキ	443	145	115
64	柱材	SD14	長さ 直径	(95.2) 13.9	下部は欠落しており、上端部は櫛の構造部材とするために斜めに削られている。中央には長さ10cmの方形孔がほぼ垂直に穿たれており、孔の内部は炭化している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	343	145	115
65	柱材	SD10 下層	長さ 直径	(146.1) 16.0	両端部は欠落している。上方に長さ11.5cmの方形孔を有し、穿孔の端部は斜めに削離している。	丸木 芯持ち	ニレ科 ムクノキ属 ムクノキ	909	145	115
66	有孔板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	128.6 19.7 3.4	上下端部に方形孔3つ、それらの内側に一辺が直線、一辺が半球形の孔が1つづつ左右対称に穿かれている。上端部右側面は方形の切り込みを有し、上方左側面は欠落している。なお、上方は若干歪んでいる。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	273	146	116~117
67	有孔板材	SD14	長さ 幅 厚さ	138.2 16.6 3.0	乾燥によるためか歪みが激しい。中央に一辺7cmの方形孔1つ、上方に3~4cmの方形孔2つが穿たれている。左側面が鷺曲している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	34	146	116

表53 木製品觀察表(5)

測定番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	補図番号	図版番号
68	柱材	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	147.2 14.9 4.8	ほぼ完存している。材の幅は上部から下部までほぼ均一であり、右側面は垂直に近く、左側面は尖り気味である。上部と下部には長さ11cm前後の方形孔が穿たれている。	削材	バラ科 サクラ属	971	146	116-117
69	有孔板材	SD15	長さ 幅 厚さ	(176.3) 22.6 3.8	上部にはほどを有し、下部には方形孔の痕跡が残る。中央や下方には断面逆三角形のトンネル状の孔が穿たれ、上方にはわずかな凹みがみられる。右側面には12-16cm間隔で、円形を呈する未貫通の穿孔が認められる。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1025	146	116-117
70	有孔板材	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(109.9) 20.0 2.9	表面裏面の腐食が激しい。材の幅は上部から下部までほぼ均一であり、中央付近に縦長の方形孔が穿たれている。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	350	147	118
71	有孔板材	SD14	長さ 幅 厚さ	(86.6) 21.5 4.4	上下端部は欠落している。中央左側には一辺4cm程度の方形孔が穿たれており、その右側に斜めに浅い凹みを有する。なお、下方には細かい加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1313	147	118
72	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	65.3 22.4 2.9	方形を呈した側面中央に台形の抉りを有する。台形の抉りの頂点はわずかに凹んでおり、他の材を組み合わせた痕跡かもしれない。なお、表面中央と下部は若干炭化している。	板目	-	362	147	118-119
73	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(147.8) 12.5 3.8	上下端部が欠落している。右側面は垂直な面を有し、左側面にむかう程薄くなる。上方に横円形の穿孔が2ヶ所みられるが、上部の孔は人為のものでない可能性がある。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	738	147	118
74	板材	SD12 上層	長さ 幅 厚さ	173.7 8.8 3.1	材の幅は上部から下部までほぼ均一で、上端部は尖り下端部はほぼ垂直な面を有している。断面方面を呈し、下方の表面には斜めに浅い溝状の凹みがみられる。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1045	147	118-119
75	板材	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(99.4) (19.5) 2.7	上下端部が欠落している。上端部は人為的にV字状に抉られた後、右側面に加工痕が残る。右側面上方に斜めに削り取られている。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	6	148	118-119
76	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(83.7) 12.5 3.7	上下端部は欠落している。右側面は垂直な面を有し左側面にむかう程薄くなる。材の幅は上部から下部までほぼ均一である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	440	148	119
77	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(73.3) 13.3 (3.6)	上端部はほどの部分が欠落しており、ほどを削り出すための加工痕が残る。下方は右側面に方形の削り込みを有する。上部から下部にかけて右側面は斜めに削られ厚みが最もあり、表面には細い手斧痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	441	148	119
78	板材	SD15	長さ 幅 厚さ	(106.6) 11.4 3.0	上方中央に長さ16cm、幅3cmのほどを有し、下方は欠落している。断面方形を呈し、材の幅は上部から下部までほぼ均一である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	808	148	119
79	板材	SD14	長さ 幅 厚さ	51.6 27.6 1.8	扁平な板材であり、裏面の左側が炭化している。SD22とSD23を組じて近から出土した材である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1314	148	118
80	板材	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	86.4 5.8 5.2	段面長方形を呈する板材である。上端部は裏面から斜めに削られており、先端は尖り気味である。上半部の幅が広く、下部になるにつれ狭くなる。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	214	149	119
81	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(68.2) 6.2 2.4	断面方形に近い板材であり、下部より19cm程以上から材の幅が徐々に薄くなる。材の中央付近は真ん中に稜をもち、右側面に傾斜している。	板目	マツ科 モミ属	750	149	119
82	板材	SD10 下層	長さ 幅 厚さ	(73.4) 3.2 1.0	上方は側面に対し直角に削られており、下方は欠落している。断面長方形を呈し、材の幅、厚さとも上部から下部までほぼ均一である。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	222	149	119
83	板材	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	105.5 6.4 2.6	材の中央付近に最大幅をもち、下部は左側面が斜めに削られ端部が尖る。裏面裏面とも粗い加工痕が残り、断面方形を呈する。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	978	149	119
84	板材	SD15	長さ 幅 厚さ	(130.3) 8.7 3.2	上方は側面に対し直角に削られており、下方は腐食している。断面長方形を呈し、材の中央付近に最大幅をもつ。	板目	イチイ科 カヤ属カヤ	215	149	119
85	板材	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(134.5) 8.0 3.7	上下端部と中央両側面が欠落している。右側面と裏面が平坦で、表面は左側面に向かい緩やかに傾斜している。乾燥によるためか大きく彫曲している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	910	149	119
86	板材	SD14	長さ 幅 厚さ	(253.2) 12.4 4.6	材の幅は上部から下部までほぼ均一であり、上方は大きくなっている。なお、断面方形を呈する。	板目	ブナ科 クリ属クリ	1042	150	119

表54 木製品観察表(6)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	補足番号	回収番号
87	垂木	SD14	長さ 直径	238.0 6.9	頭部は有頭状に肥大して球形を呈し、頭部から約40cm下までは全面に縦長の加工痕が残る。先端は2方向から比較的純粋に削りだすことにより尖らせている。先端より約35cm上には上下2ヶ所に浅い抉りがある。	丸木 芯持ち	ニガキ科 ニガキ属 ニガキ	369	150	120
88	垂木	SD15	長さ 直径	96.1 4.9	頭部は有頭状に肥大しており側面に加工痕が残る。先端は多方向から丁寧に削られ、杖状に尖っている。	丸木 芯持ち	イヌガヤ科 イヌガヤ属 イヌガヤ	272	150	120
89	垂木	SD14	長さ 直径	(152.7) 5.7	頭部直下に深さ2cm程の切り欠きをもち、剥み込みの痕跡と縦位の加工痕が残る。先端は3方向から粗く削られ尖らでいる。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	218	150	120
90	垂木	SD14	長さ 直径	(43.1) 5.6	頭部は表面に細かい加工がなされ、裏面は粗い純角気味の削りがみられる。先端直下には深い抉りがあり、数回にわたり刻み込まれている。	丸木 芯持ち	ツバキ科 サカキ属 サカキ	942	150	
91	垂木	SD12 下唇	長さ 直径	(35.6) 4.9	頭部直下に粗い抉りがあり、先端は表面のみ炭化している。	丸木 芯持ち	ツバキ科 サカキ属 サカキ	1226	150	120
92	垂木	SD14	長さ 直径	(413.3) 7.8	弓状に反り、先端は欠落している。頭部直下には抉りがあり、抉りの裏面は一方向から粗く削られている。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 アスナロ属	1055	151	113
93	垂木	SD14	長さ 直径	(130.4) 5.6	頭部が欠落している。先端より約100mm上に切り欠きをもち、先端は全面から細かく削られ尖る。なお、加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	572	151	120
94	垂木	SD10 上唇	長さ 直径	(72.4) 4.7	頭部が欠落している。先端より約35cm上に切り欠きをもち、先端は全面から粗く削られ尖る。表面はほぼ全面炭化しているが、上部は帶状に炭化していない。	丸木 芯持ち	モクセイ科 トリニコ属	1080	151	120
95	垂木	SD12 下唇	長さ 直径	(93.5) 13.8	頭部が欠落している。先端より約70cm上に上方が直立、下方が斜めに傾斜する切り欠きをもつ。先端は全面から縦位に細かく削られ尖る。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	345	151	120
96	扉	SD14	長さ 幅 厚さ	97.2 60.1 2.7	方形を呈する。右側面中央は抉れており、中央と左側は方形の孔が穿たれている。断面形態は上部が一方から斜めに削られ、中央付近はほぼ平行して若干凹んでいて、下方左側は欠落しており、軸部が存在していたと思定される。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	890	152	121-122
97	梯子	SD10 下唇	長さ 幅 厚さ	(91.4) (16.1) 5.8	両端が欠落しており、表裏面とも腐食が激しい。3段のステップが残存するが、断面形態は腐食のため定かではない。	板目	ウルシ科 ウルシ属 ヤマハゼ orハゼ	959	152	122
98	修羅状 木製品	SD14	長さ 直径	204.0 12.0	二又の木を利用して作られており、先端は一方から削られた頭部は方形を呈する。また、頭部より約20cm下には方形孔が穿たれている。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 コナラ属 コナラ	223	152	122
99	丸木材 (柱根)	P360	長さ 直径	28.4 10.4	下端部は丸みを帯び全面に粗い加工痕が残る。上部は大半が腐食しており、断面形態は腐食のため多角形状となっている。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	114	153	121
100	丸木材 (柱根)	P464	長さ 直径	19.8 9.9	下端部は比較的平坦で、腐食部分を除いて粗い加工痕が残る。断面円形で丸木芯持ち材を使用しており、上端は腐食している。	丸木 芯持ち	ブナ科 クリ属 クリ	78	153	121
101	丸木材 (柱根)	P472	長さ 直径	23.5 11.8	表面と両端の腐食が激しく、明瞭な加工痕がみられない。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	76	153	121
102	丸木材 (柱根)	P490	長さ 直径	33.7 16.0	上端部は腐食している。下端部は中央が突出しており、残存している部位には粗い加工痕が残る。側面は約5cm幅で縱方向の手斧痕が残る。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	111	153	121
103	丸木材 (支柱)	P472	長さ 直径	(19.3) 9.2	上下端部は多方向の加工痕がみられる。上部中央は腐食しており、下方は斜めに傾斜している。丸木材の一面を平坦にした断面形態をとる。	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	77	153	121
104	板材 (檻板)	P472	長さ 直径	13.1 8.0	上下端部は粗く斜めに削られている。表面の凹凸が激しく断面多角形を呈する。	板目	ウルシ科 ウルシ属 ウルシ	75	153	121
105	板材 (支柱)	P464	長さ 直径	(20.3) 7.3	上下端部が欠落している。1/4削材を加工し、現状では断面多角形を呈している。	削材 1/4	ヒノキ科 ヒノキ属	74	153	121

表55 木製品観察表(7)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	検査番号	登録番号
106	板材 (縦板)	P 607	長さ 幅 厚さ	13.7 8.1 2.6	断面方形を呈する板材である。表面には粗い加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	647	153	121
107	樹皮製品	SD10 上層	幅	0.5	平面1重ないしは2重の円形であり、2つ並んでいる。		ヤマザクラ or カバの樹皮	1316	153	123
108	樹皮製品	SD7	幅	2.0	平面1重と3重の円形であり、2つ並んでいる。		ヤマザクラ or カバの樹皮	1317	153	123
109	樹皮製品	SD7	幅	1.3	平面1重ないしは2重の円形である。		ヤマザクラ or カバの樹皮	1318	153	123
110	棒状木製品	G 8グ II層	長さ 幅	5.8 1.5	下端が炭化している。断面方形を呈し、炭化範囲は比較的狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1207	154	123
111	棒状木製品	SD19	長さ 幅	9.3 1.9	下端が炭化している。断面は方形に近く、炭化範囲はすべての面でほぼ均一である。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1208	154	123
112	棒状木製品	E 25グ II層	長さ 幅	11.2 1.6	下端が炭化している。断面不定形を呈し、炭化範囲は一面のみの下部に伸びている。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	260	154	123
113	棒状木製品	J 24グ II層	長さ 幅	12.3 1.6	下端が炭化している。頭部が削けており下部は断面方形に近い。炭化範囲は比較的狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	261	154	123
114	棒状木製品	SD19	長さ 幅	13.8 1.7	下端が炭化している。断面不定形を呈し、炭化範囲は表面が広く、裏面が狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	165	154	123
115	棒状木製品	E 13グ II層	長さ 幅	24.3 1.5	下端が炭化している。断面不定形を呈し中央で屈折している。炭化範囲は一面のみの上部に伸びる。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	249	154	123
116	棒状木製品	E 12グ II層	長さ 幅	24.0 1.4	下端が炭化している。断面方形に近く、端部は一面のみ炭化しており、他は欠落している。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	248	154	123
117	棒状木製品	D 3グ II層	長さ 幅	15.4 1.8	下端が炭化している。断面不定形を呈し、炭化範囲は一面のみ広く、他は狭い。	削材	マツ科マツ属 複雑維管束垂属	263	154	123
118	棒状木製品	TR12 II層	長さ 幅	17.4 1.6	下端が炭化している。上方は断面方形、下方は断面不定形を呈する。炭化範囲は一面のみ広く、他は狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1210	154	123
119	棒状木製品	E 13グ II層	長さ 幅	16.6 1.7	下端が炭化している。中央より下方は断面方形を呈し下端は一方から削られている。炭化範囲は表裏ともほぼ同じである。	削材	ヒノキ科 アスナロ属	247	154	123
120	棒状木製品	TR12 II層	長さ 幅	12.9 1.3	下端が炭化している。断面不定形を呈し、炭化範囲は表面が広く、裏面は狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1217	154	123
121	棒状木製品	E 7グ II層	長さ 幅	11.1 1.7	上下端部が炭化している。断面不定形を呈し、炭化範囲は上下とも比較的狭い。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	634	154	123
122	棒状木製品	TR12 II層	長さ 幅	11.4 1.1	下端が炭化している。断面方形を呈し、頭部は斜めに削られている。炭化範囲は表面が広く、裏面は狭い。	削材	マツ科マツ属 複雑維管束垂属	1209	154	123
123	棒状木製品	SD10 上層	長さ 幅	(24.6) 2.5	下端が欠落している。材の幅はほぼ均一であり、断面方形を呈する。なお、表面は部分的に炭化している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	99	154	124
124	棒状木製品	SD7	長さ 幅	(27.8) 1.9	下端部が欠落している。断面方形を呈し、上端は2方向から斜めに削られている。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1292	154	124
125	棒状木製品	SD10 上層	長さ 幅	(32.3) (2.0)	上端部は炭化、下端部は欠落している。断面方形を呈し、中央部に刻み目が見られる。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	863	154	124
126	棒状木製品	SD12 下層	長さ 幅	(47.5) (3.7)	下端が欠落している。材の幅はほぼ均一であり、断面不定形を呈する。上端は一方から斜めに削られている。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	320	154	124
127	板状木製品	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(38.8) 4.6 2.3	断面方形を呈する板材であり下端は欠落している。上端は右側面に方形の切り欠きがみられ、材の表面に粗い加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	66	155	124
128	板状木製品	SD15	長さ 幅 厚さ	(16.3) 5.7 2.1	上下端部左側面は欠落している。断面方形を呈し、下端表面は左側に方形の切り欠きを有し、裏面は5mm程度の段をもつ。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ垂属	832	155	124
129	板状木製品	SD13	長さ 幅 厚さ	(18.3) (9.3) 1.8	上下端部が欠落している。断面方形を呈し、表面は平滑で加工痕はみられない。	板目	マツ科 モミ属	1251	155	124
130	板状木製品	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(11.3) 5.0 1.8	断面方形を呈する板材である。材の幅は上端から下端まではほぼ均一であり、表面に粗い加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1252	155	124

表56 木製品観察表(8)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	本取り	樹種	整理番号	検査番号	固有番号
131	板状木 製品	SD10 下層	長さ (9.3) (11.0) 1.8	幅 厚さ	台形を呈する板材である。上下端部はほぼ垂直な面をもち両側面は尖る。表面面とともに横位の粗い加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	477	155	124
132	板状木 製品	TR22	長さ (21.8) 4.2 1.1	幅 厚さ	下端部が欠落している。材の幅は上端から下端まではほぼ均一であり、上端は段を有し斜めに削られている。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	1216	155	124
133	板状木 製品	SD10 下層	長さ (30.7) (8.3) 1.3	幅 厚さ	下端が欠落している。右側面は薄く左側面は面を有する。表面の上部には縦方向の加工痕が残る。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	455	155	124
134	有孔木 製品	SD12 上層	長さ 40.7 9.7 2.3	幅 厚さ	上下端部は粗い削りがなされ、両端とも斜めに傾斜している。表面には凹凸がみられるものの左側面はほぼ垂直な面を有しているため、本来は断面形状であったと思われる。中央付近には直径2cmの円形孔が穿たれている。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	356	155	124
135	有孔木 製品	SD10 上層	長さ (22.9) 7.1 1.8	幅 厚さ	上端左側と下端が欠落している。断面方形を呈し、上方には長さ1.8cmの方型孔があり寄りに穿たれている。なお、表面には複数に加工痕が残る。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	754	155	124
136	有孔木 製品	SD10 下層	長さ (25.0) (5.8) 1.8	幅 厚さ	上部左側と下端部が欠落している。扁平な板材であり左側面下方は湾曲している。上方には幅1.8cmの方型孔1つが中央には幅約3mmの円形孔2つが並んで穿たれている。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	749	155	124
137	有頭棒 状材	SD10 上層	長さ (31.0) 3.0	直径	断面円形を呈し、頭部裏面は欠落している。頭部は有頭柄で肥大して細かい加工痕が残り、頭部から約5cm下方までは複数に粗い削られている。また、下方は全面腐化している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	533	156	124
138	有頭棒 状材	SD15	長さ (17.6) 3.4 1.6	幅 厚さ	左側面と下端部が欠落している。表面上方に張り出すように肥大しており、下方との境にはわずかな段を有する。裏面は平面であり、断面形は薄盤形を呈する。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1324	156	124
139	有頭棒 状材	TR22	長さ (24.8) 3.8	直径	頭部は断面円形、下部は断面三角形を呈する。表面は中央から下方にかけて平坦に削られており、上方と下方に浅い溝状の圧痕が点々と認められる。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	536	156	124
140	棒状木 製品	SD12 下層	長さ (32.4) (2.2)	幅	断面形を呈し、材の幅は上方が広く下方が狭い。表面に明確な加工痕はみられない。	極目	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	757	156	123
141	有頭棒 状材	SD12 下層	長さ (46.6) 3.1 1.7	幅 厚さ	下端部が欠落している。上方の両側面には三角形の切り欠きをもち、右側面に刻み込みの痕跡がみられる。下端右側にも切り欠きをもつが、左側は欠落している。また、表面は部分的に剥離している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	42	156	123
142	有頭棒 状材	SD 7	長さ (14.2) 4.7 2.3	幅 厚さ	下端部が欠落している。表面は上方が突出し下方にむかうにつれ緩やかに厚みを増しており、裏面は平坦である。中央よりやや下方では両側面から削り込まれて屈曲している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	1312	156	123
143	有頭棒 状材	SD10 下層	長さ (51.0) 3.8 1.7	幅 厚さ	下端部が欠落し腐化している。上方の両側面に三角形の切り欠きをもち、中央よりやや上方には側面と裏面に断面方形の浅い溝を有する。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	41	156	123
144	有頭棒 状材	SD15	長さ (56.7) 4.4	直径	下端部が欠落している。上方の両側面には逆台形の切り欠きを有する。材の幅は上方に比べ下方が狭く、断面方形を呈する。	板目	ヒノキ科 アスナロ属	816	156	123
145	棒状木 製品	SD10 下層	長さ (194.0) 5.8	幅	上端部が欠落している。断面は楕円形を呈し、表面は部分的に腐化している。下部には手斧痕が残り、先端部は丸く仕上げられている。	削材	ヒノキ科 クロベ属 クロベ	1028	157	125
146	棒状木 製品	SD12 下層	長さ 148.0 6.1	幅	ほぼ完存している。丸木芯持ち材であり、上・下部を2方向から約5cmにわたって削っている。上端部は多方向からの削りにより尖っており、下端部は腐食している。	丸木 芯持ち	マツ科 モミ属	613	157	125
147	板状木 製品	SD20	長さ 143.7 13.6 3.6	幅 厚さ	全体の腐食が激しく加工痕が確認できない。中央よりや上の部は切り落とされている。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	7	157	125
148	板状木 製品	SD20	長さ (137.2) 21.7 4.2	幅 厚さ	材の幅は上端から下端まではほぼ均一である。表面は腐食しており明確な加工痕は確認できない。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	160	157	125
149	板状木 製品	SD14	長さ (53.0) (13.4) 1.5	幅 厚さ	ほぼ完存している。下端部から3cm程内側に断面逆台形-一方形を呈する幅1cm程度の溝があり、溝の外側には上端1つ、下端2つ的小穿孔をもつ。	極目	ヒノキ科 ヒノキ属	163	158	126

表57 木製品観察表(9)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	検査番号	出版番号
150	板状木製品	SD14	長さ 幅 厚さ	(41.2) (10.4) 3.5	有頭状を呈し下端部は炭化している。また上部表面は肥厚している。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	659	158	126
151	板状木製品	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(39.3) (5.2) (3.1)	柄と身の先端が欠落している。柄は先端から身にかけて幅が広くなり、身はハの字状に開く。柄と身の境は不明瞭で断面は方形を呈する。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	189	158	125
152	板状木製品	SD10 上層	長さ 幅 厚さ	(72.7) 12.3 2.8	柄の先端が欠落している。柄は先端から身にかけて幅が広くなり、身はハの字状に開く。断面は方形を呈する。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	357	158	126
153	板状木製品	SD14	長さ 幅 厚さ	56.0 6.0 1.8	断面方形を呈する板材である。材の幅は上方が狭く下方が広い。表面に加工痕はみられない。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	38	158	126
154	有孔木製品	SD12 下層	長さ 幅 厚さ	(48.0) (8.1) (1.9)	下方が欠落している。材の幅は上部から下部までほぼ均一と思われ、断面は方形を呈する。上方に幅4.2cmの方形孔が穿たれ、表面には複数の加工痕が残る。	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	43	158	126
155	棒状木製品	SD10 上層	長さ 幅	(42.3) 4.0	上下端部が欠落している。上部は緩やかに斜めに傾斜し、先端部は尖り気味である。断面は円形に近い。	丸木 芯持ち	ツバキ科 ツバキ属	741	158	125
156	棒状木製品	SD14	長さ 幅 厚さ	(18.1) (4.6) (2.3)	表面は平滑で表面は丸みを帯びている。表面は両側面に鋭角で切り欠きをもつ。切り欠きがとぎれる部分は材の材を切るため突出している。なお、表面下端の少しおよび表面は凹凸がある。	板目	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	61	158	126
157	板状木製品	SD15	長さ 幅 厚さ	(34.5) (18.0) 5.2	表面は中央に穂を有し左側面は斜めに傾斜している。裏面は平滑であり、左側面にわずかな段を有する。	板目	ブナ科 コナラ属 コナラ属 コナラ属	154	158	126
158	杭	SD14	長さ 直径	(165.6) 9.1	①I ②A a ③28.2 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて大半が炭化している。	丸木 芯持ち	イチイ科 カヤ属	1056	159	127
159	杭	SD14	長さ 直径	(70.5) 8.6	①I ②A a ③18.0 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	33	159	127
160	杭	SD14	長さ 直径	(106.6) 8.4	①I ②A a ③15.9 ④頭部欠落	丸木 芯持ち	イチイ科 カヤ属	617	159	127
161	杭	SD14	長さ 直径	(176.8) 9.0	①I ②A a ③18.2 ④頭部欠落 ⑤下方に2ヶ所の切り欠きをもつ。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	665	159	127
162	杭	SD14	長さ 直径	(165.6) 9.6	①I ②A a ③26.5 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	674	160	127
163	杭	SD14	長さ 直径	(98.5) 11.2	①I ②A a ③39.8 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	803	160	127
164	杭	SD10 下層	長さ 直径	(172.8) 8.0	①I ②C b ③21.0 ④頭部欠落	丸木 芯持ち	ツバキ科 ツバキ属	575	160	127
165	杭	SD14	長さ 直径	(169.9) 9.6	①I ②A a ③34.8 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	1041	161	127
166	杭	SD 4	長さ 直径	(39.6) 3.8	①I - 2 ②A b ③11.6 ④頭部欠落	削材 1/4	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	269	161	127
167	杭	SD14	長さ 直径	(99.8) 9.4	①I ②A a ③34.5 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	918	161	128
168	杭	SD14	長さ 直径	(145.1) 12.8	①V ②C a ③21.6 ④頭部欠落	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	1061	161	128
169	杭	SD14	長さ 直径	(131.2) 10.3	①I ②A a ③16.7 ④頭部欠落	丸木 芯持ち	ヒノキ科 ヒノキ属	483	162	128
170	杭	SD14	長さ 直径	(42.2) 9.0	①I ②A a ③36.1 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ヤナギ科 ヤナギ属	206	162	128
171	杭	SD14	長さ 直径	(155.5) 8.9	①I ②A a ③25.3 ④頭部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ属	690	162	128

表58 木製品観察表(10)

実測番号	器種	遺構部位	長さ	幅	形態・技法	木取り	樹種	整理番号	確認番号	回収番号
172	杭	SD14	長さ 直径	(130.2) 9.1	①I ②C b ③19.2 ④頸部欠落	削材 1/3	ヒノキ科 アヌラ属	993	162	128
173	杭	SD14	長さ 直径	(145.2) 7.7	①I ②A a ③19.2 ④頸部欠落 ⑤表面に平用面をもち縦位の手斧痕が残る。	丸木 芯持ち	マツ科マツ属 複雜維管束亞属	820	163	128
174	杭	SD14	長さ 直径	(109.5) 6.8	①I ②A a ③27.0 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	マツ科マツ属 複雜維管束亞属	912	163	128
175	杭	SD14	長さ 直径	(74.8) 7.5	①I ②A a ③23.2 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	マツ科マツ属 複雜維管束亞属	358	163	128
176	杭	SD14	長さ 直径	(141.4) 8.2	①I ②A a ③14.1 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	30	163	128
177	横木	SD14	長さ 直径	(158.8) 5.5	①I ②A b ③12.2 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	402	164	129
178	杭	SD14	長さ 直径	(100.5) 4.2	①I ②A a ③10.2 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	329	164	129
179	杭	SD15	長さ 直径	(58.9) 3.8	①I ②A a ③7.4 ④頸部欠落	丸木 芯持ち	ツバキ科 ツバキ属	192	164	128
180	杭	SD14	長さ 直径	(74.3) 3.1	①I ②C a ③8.7 ④頸部欠落 ⑤中央やや下で折折している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	711	164	128
181	杭	SD14	長さ 直径	(127.2) 6.0	①I ②A a ③17.4 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ツバキ科 サカキ属 サカキ	986	164	129
182	杭	SD14	長さ 直径	(185.4) 8.6	①I ②C a ③17.5 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	685	164	129
183	杭	SD14	長さ 直径	(136.1) 4.5	①I ②C a ③15.2 ④頸部欠落	丸木 芯持ち	ツバキ科 ヒサカヤ属	217	165	129
184	杭	SD14	長さ 直径	(76.7) 7.1	①II-2 ②A b ③21.6 ④頸部欠落	削材 1/3	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	684	165	129
185	杭	SD14	長さ 直径	(82.7) 5.0	①III ②C a ③23.2 ④頸部欠落	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	216	165	128
186	杭	SD14	長さ 直径	(71.2) 5.8	①I ②A b ③8.5 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 コナラ亞属 クヌギ節	335	165	128
187	杭	SD14	長さ 直径	(53.9) 7.7	①I ②B a ③10.8 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	カバノキ科 クマシデ属	420	165	128
188	杭	SD14	長さ 直径	(94.1) 7.3	①I ②A a ③14.4 ④頸部欠落	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	1	165	128
189	横木	SD14	長さ 直径	(521.9) 8.5	①I ②D b ③7.5 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	737	166	113
190	横木	SD14	長さ 直径	(441.6) 12.2	①V ②D b ③10.6 ④頸部欠落 ⑤断面楕円形を呈する削材である。	削材	ヒノキ科 ヒノキ属	1051	166	113
191	杭	SD14	長さ 直径	(285.4) 8.7	①I ②A a ③43.2 ④頸部欠落 ⑤加工部分を除いて全面に樹皮が残存している。	丸木 芯持ち	ブナ科 コナラ属 アカガシ亞属	349	166	129
192	横木	SD14	長さ 直径	(212.5) 4.8	①I ②D b ③3.7 ④頸部欠落 ⑤断面五角形を呈する削材である。	削材	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	802	166	129
193	杭	SD14	長さ 直径	(192.3) 3.4	①I ②A b ③6.6 ④頸部欠落	丸木 芯持ち	イチイ科 カヤ属カヤ	9	166	129

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第58集

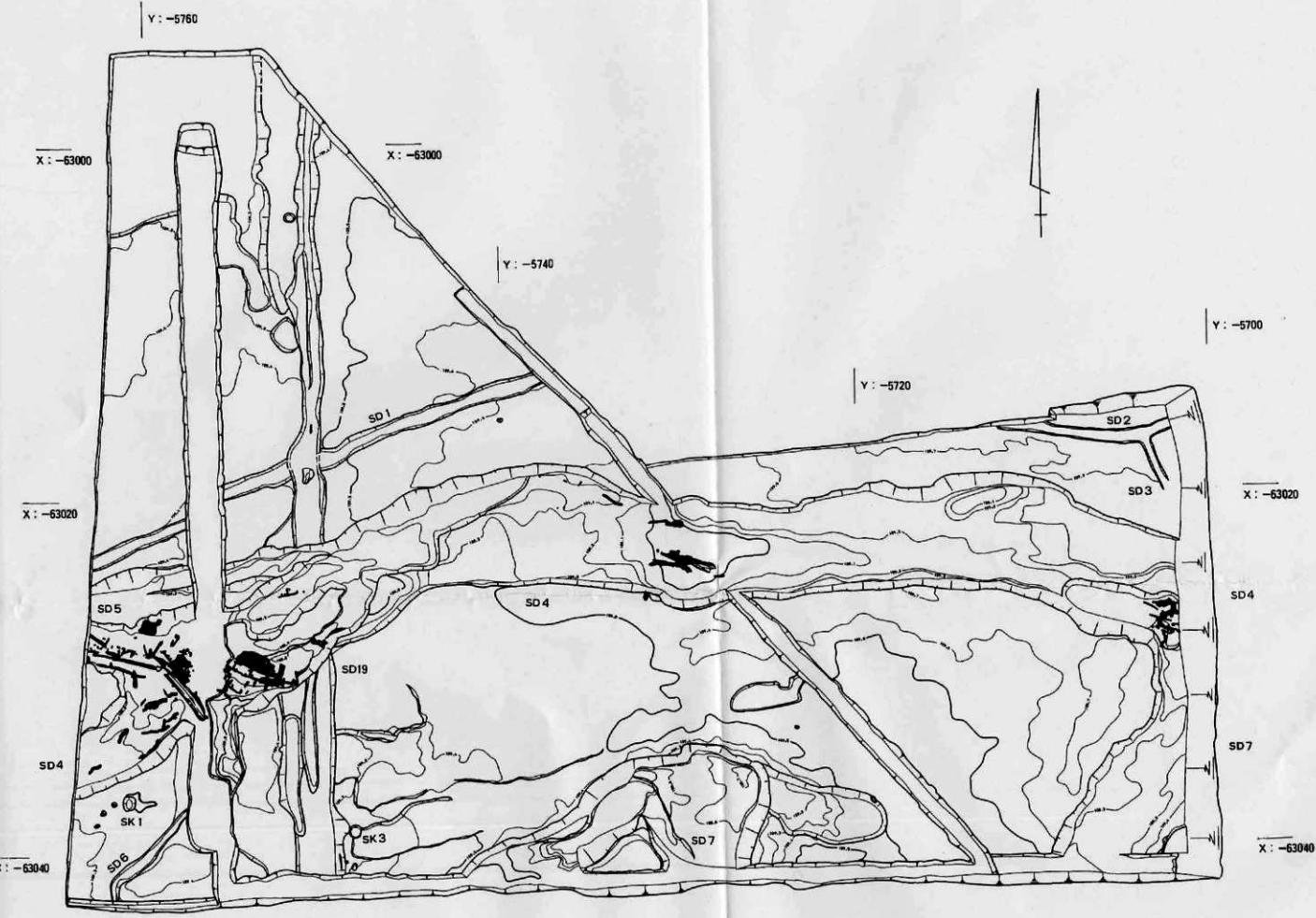
顏戸南遺跡

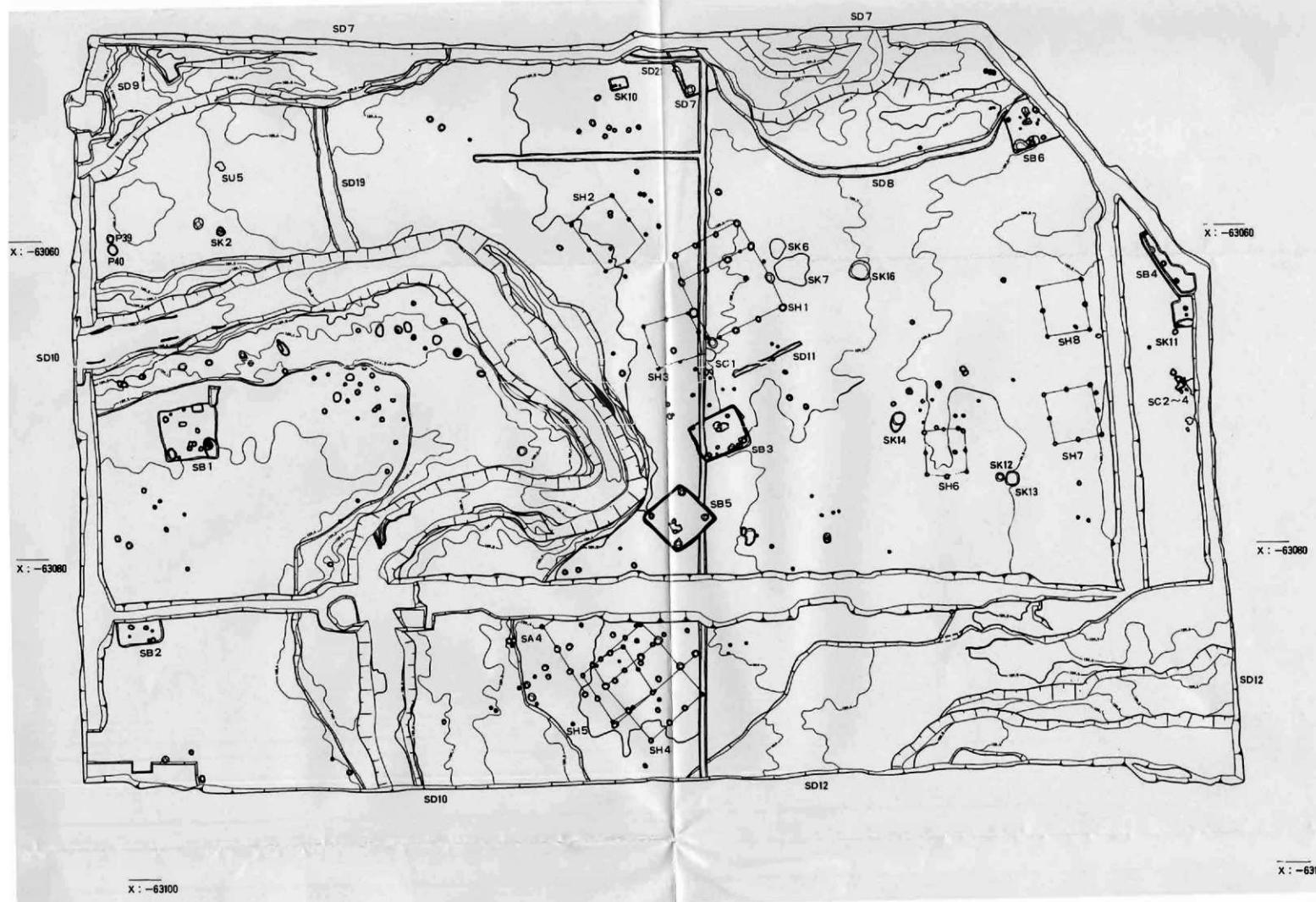
(第1分冊)

2000年3月31日

編集・発行 財団法人岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

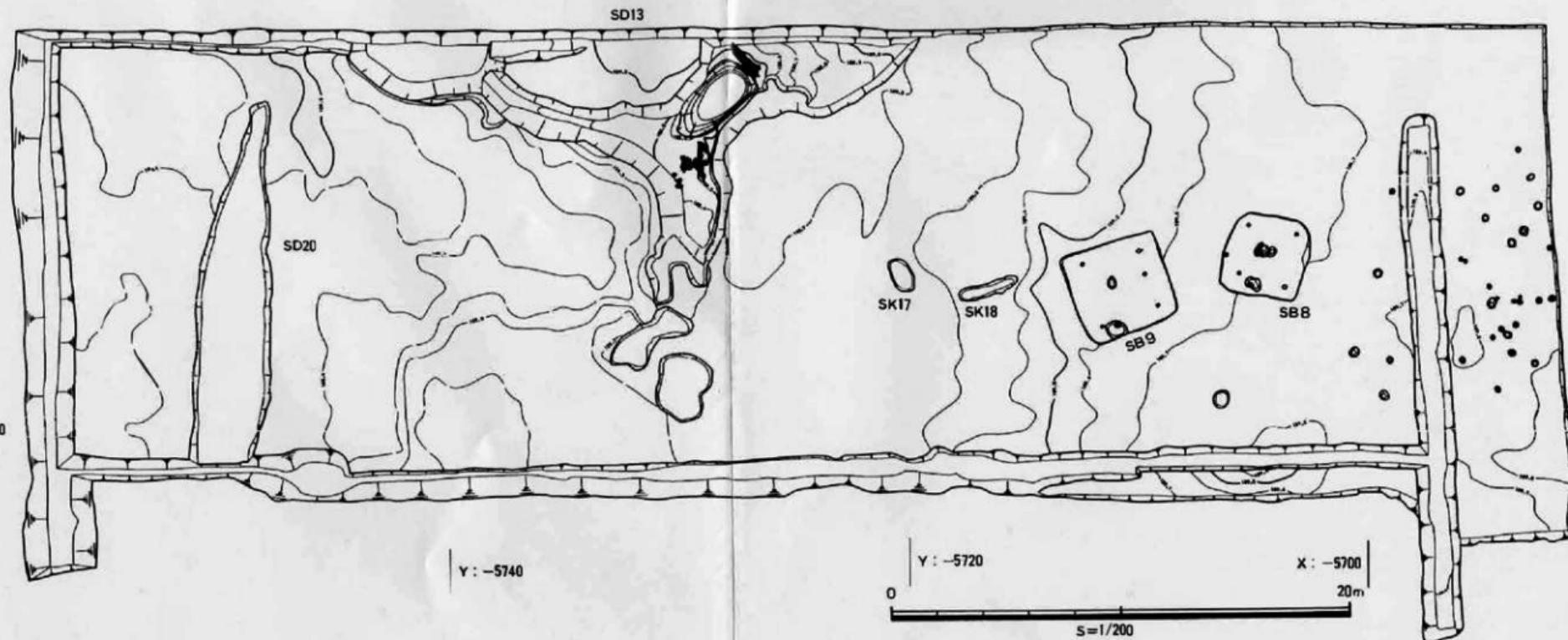
印 刷 ヨツハシ株式会社



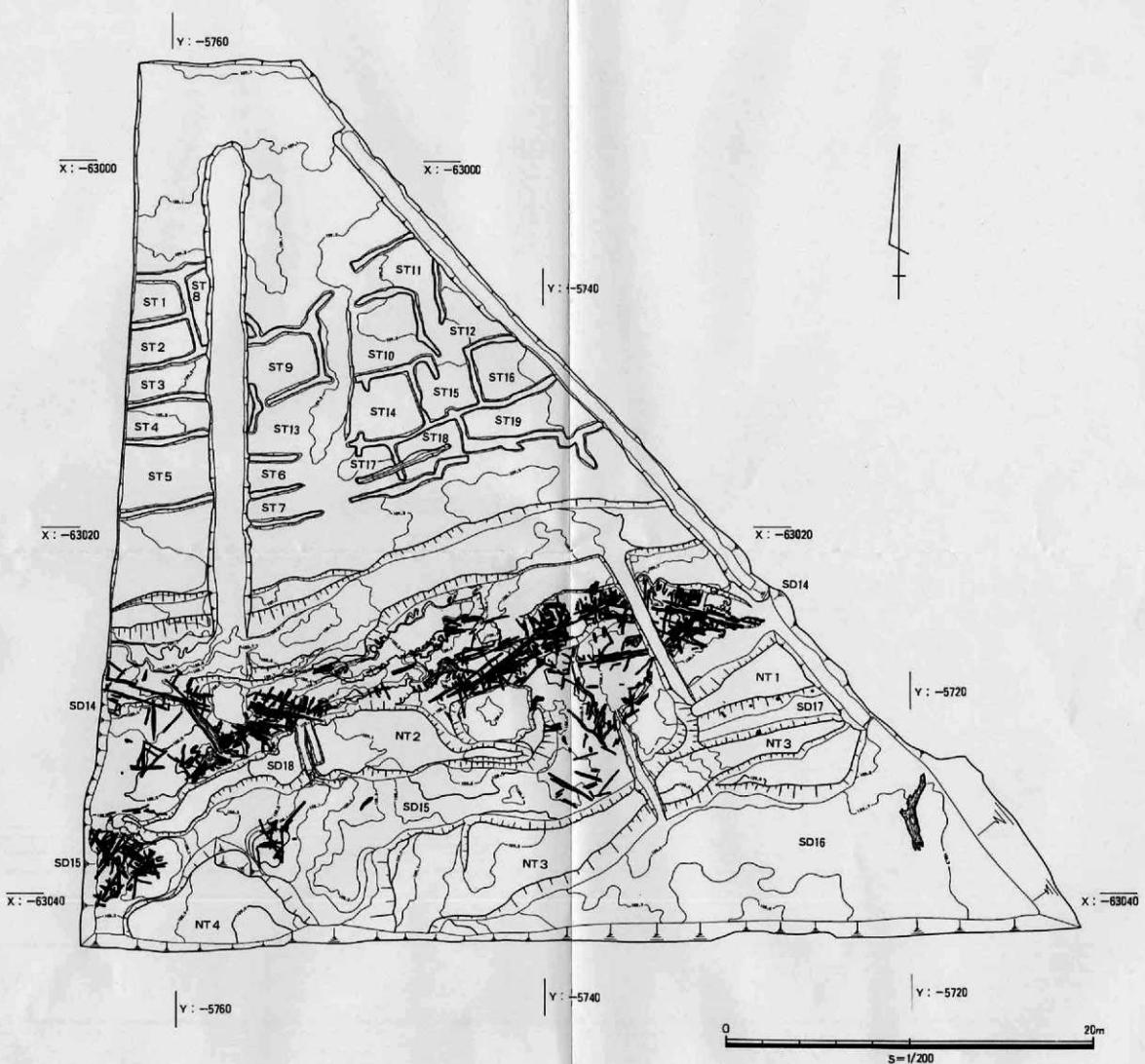


X : -63100

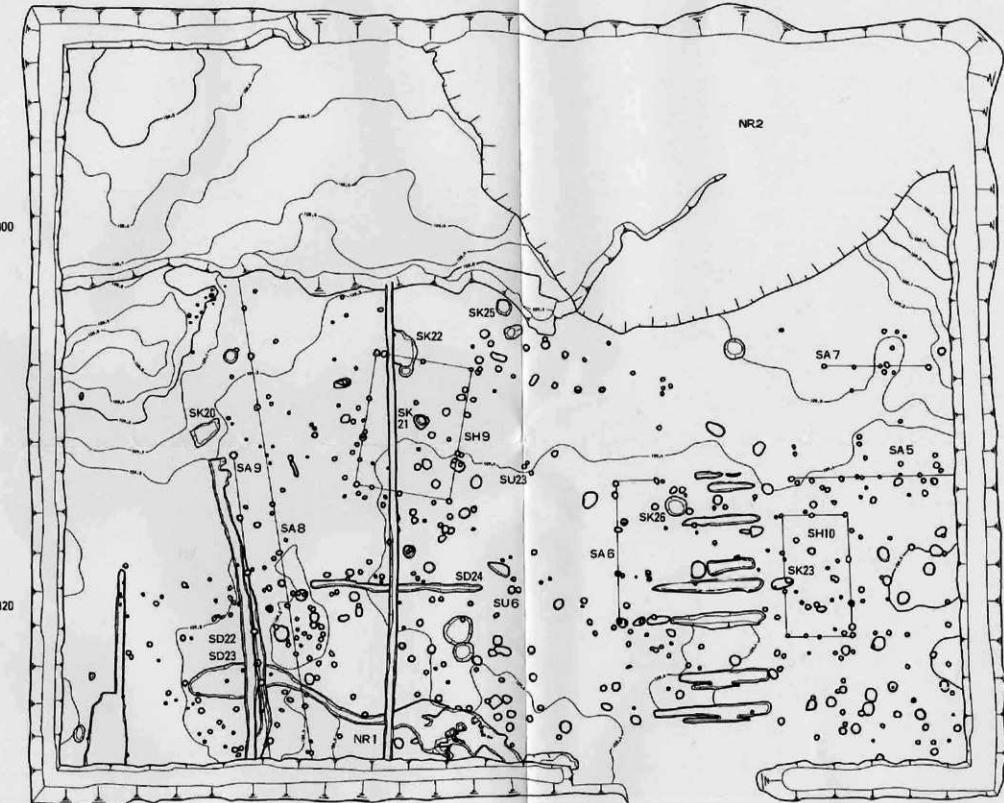
X : -63100



付図1 E ~ G 区 全体図



付図2 E 区下層全体図



0 20m  
S = 1/200

付図3 C区全体図